

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 27

平成22年度発掘調査報告

(第2分冊)

大 倉 幕 府 跡

北条時房・顕時邸跡

大 倉 幕 府 跡

平成23年3月

鎌倉市教育委員会



北条時房・顕時邸跡 第4面大路側溝



大倉幕府跡 遺構91 出土舟形

ご あ い さ つ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和 59 年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ 6 割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成 16、17 及び 18 年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査の記録として 8 ヶ所の調査成果を掲載しています。特に大倉幕府跡（地点⑧）では、掘立柱建物跡や石列、溝跡などの土地利用痕跡が数多く出土しました。湧水も多い場所でしたが、そのおかげで形代や漆盆等、当時用いていた木製品の数々が腐ることなく残されており、当時の生活を知る上で重要な成果を得ることができました。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成 23 年 3 月 31 日

鎌倉市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成 22 年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書である。
- 2 本書所収の調査地点は別図のとおりである。また掲載分冊については、第 1 分冊に掲載した表のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
- 4 出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

総目次

(第2分冊)

例言	II
目次	III
6 大倉幕府跡 (No. 253) 雪ノ下三丁目704番3外地点	
第1章 調査地点の位置と歴史的環境	6
第2章 調査の経過と層序	8
第3章 発見した遺構と遺物	13
第4章 まとめ	78
附編 花粉分析	100
7 北条時房・顕時邸跡 (No. 278) 雪ノ下一丁目269番1地点	
第1章 調査概観	125
第2章 検出された遺構と出土遺物	129
第3章 まとめ	165
8 大倉幕府跡 (No. 253) 雪ノ下三丁目637番4地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	209
第2章 調査の概要	211
第3章 検出遺構と出土遺物	214
第4章 まとめ	243

鎌倉市全図

1 : 50,000



平成22年度の緊急発掘調査地点 (1~14)
本書掲載の平成16・17・18年度発掘調査地点 (①~⑨)
※遺跡名は一覧表を参照

お お く ら ぼ く ふ あ と

大倉幕府跡 (No.253)

雪ノ下三丁目704番3外地点

例言

1. 本書は鎌倉市雪ノ下三丁目704番3外地点に所在する、個人専用住宅の新築に先立ち行われた大倉幕府跡(県遺跡台帳No.253)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は平成17年10月25日から翌平成18年1月27日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
3. 本書使用の遺構図及び遺物実測図は調査員が分担し、原稿執筆は福田 誠が担当して編集は福田が行った。
4. 本書に使用した写真のうち全景写真・個別遺構写真は福田・古田土俊一、遺物撮影は須佐仁和、田畑衣理が行った。
5. 発掘調査・整理作業の体制は以下の通りである。

発掘調査

主任調査員 福田 誠(鎌倉市教育委員会嘱託)

調査員 石元道子 神山晶子 菊川 泉 古田土俊一 鈴木絵美

作業員 (社)鎌倉市シルバー人材センター

奥山利平 河原龍雄 田口康雄 宝珠山秀雄

整理作業

主任調査員 福田 誠(鎌倉市教育委員会嘱託)

調査員 石元道子 菊川 泉 須佐仁和 田畑衣理 吉田桂子

調査補助員 佐藤ななみ(東海大学学生) 平山千絵

6. 発掘調査資料(記録図面・写真・出土遺物)は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

本文目次

第1章 調査地点の位置と歴史的環境	6
第2章 調査の経過と層序	8
第3章 検出した遺構と遺物	13
第1節 第1面の遺構と遺物	13
第2節 第2面の遺構と遺物	13
第3節 第3面の遺構と遺物	13
第4節 第4面の遺構と遺物	18
第5節 第5面の遺構と遺物	36
第6節 第6面の遺構と遺物	36
第7節 第7面の遺構と遺物	55
第8節 第8面の遺構と遺物	55
第9節 第9面の遺構と遺物	68
第10節 第10面の遺構と遺物	68
第4章 まとめ	78
附編 花粉分析	100
遺物観察表	79

挿図目次

図1 遺跡位置図	5	図19 2面全測図	29
図2 調査地点座標と近接する遺跡	7	図20 2面出土遺物1	30
図3 土層断面図	9	図21 2面出土遺物2	31
図4 1面全測図	14	図22 2面出土遺物3	32
図5 表採・表土出土遺物	15	図23 2面出土遺物4	33
図6 トレンチ・攪乱出土遺物	16	図24 2面出土遺物5	34
図7 1面まで出土遺物1	17	図25 2面出土遺物6	35
図8 1面まで出土遺物2	18	図26 2面遺構出土遺物	36
図9 1面・1面遺構出土遺物	19	図27 2面構成土出土遺物1	37
図10 1面構成土出土遺物1	20	図28 2面構成土出土遺物2	38
図11 1面構成土出土遺物2	21	図29 2面構成土出土遺物3	39
図12 1面構成土出土遺物3	22	図30 2面構成土出土遺物4	40
図13 1面構成土出土遺物4	23	図31 2面構成土出土遺物5	41
図14 1面構成土出土遺物5	24	図32 2面構成土出土遺物6	42
図15 1面構成土出土遺物6	25	図33 2面構成土出土遺物7	43
図16 1面構成土出土遺物7	26	図34 2面構成土出土遺物8	44
図17 1面構成土出土遺物8	27	図35 2面構成土出土遺物9	45
図18 1面構成土出土遺物9	28	図36 2面構成土出土遺物10	46

図37	2面構成土出土遺物11	47	図54	6面構成土出土遺物1	64
図38	2面構成土出土遺物12	48	図55	6面構成土出土遺物2	65
図39	3面全測図	49	図56	7面全測図	66
図40	3面・3面遺構出土遺物	50	図57	7面出土遺物	67
図41	3面構成土出土遺物	51	図58	7面遺構出土遺物	68
図42	4面全測図	52	図59	7面構成土出土遺物1	69
図43	4面・4面遺構出土遺物	53	図60	7面構成土出土遺物2	70
図44	4面構成土出土遺物1	54	図61	8面全測図	71
図45	4面構成土出土遺物2	55	図62	8面・8面遺構出土遺物	72
図46	4面構成土出土遺物3	56	図63	8面構成土・9面出土遺物	73
図47	4面構成土出土遺物4	57	図64	9面全測図	74
図48	5面全測図	58	図65	10・地山面全測図	75
図49	5面・5面遺構出土遺物	59	図66	9面構成土・10面・地山面出土遺物	76
図50	5面構成土・6面出土遺物	60	図67	大倉幕府跡の主要花粉化石分布図	102
図51	6面全測図	61			
図52	6面遺構出土遺物1	62			
図53	6面遺構出土遺物2	63			

図版目次

図版1	1面・2面の遺構	104	図版10	4面・4面遺構出土遺物	113
図版2	3面の遺構	105	図版11	5面・5面遺構・5面構成土出土遺物	114
図版3	4面の遺構	106	図版12	6面遺構出土遺物	115
図版4	5面の遺構	107	図版13	6面構成土・7面・7面遺構出土遺物	116
図版5	6面・7面の遺構	108	図版14	8面・8面遺構・9面・9面遺構・地山 面出土遺物	117
図版6	8面・9面・最終面の遺構	109	図版15	自然遺物	118
図版7	1面・1面遺構出土遺物	110	図版16	花粉	119
図版8	2面・2面遺構・2面構成土出土遺物	111			
図版9	3面・3面遺構出土遺物	112			

遺物観察表

表1	遺物観察表	74
表2	産出花粉化石一覧表	103

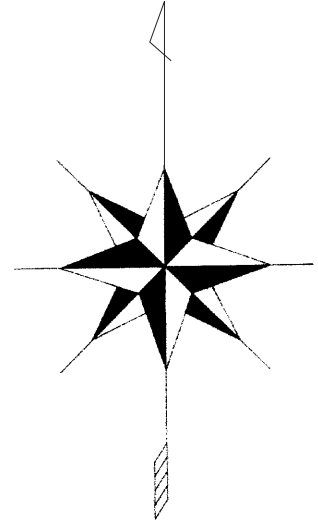
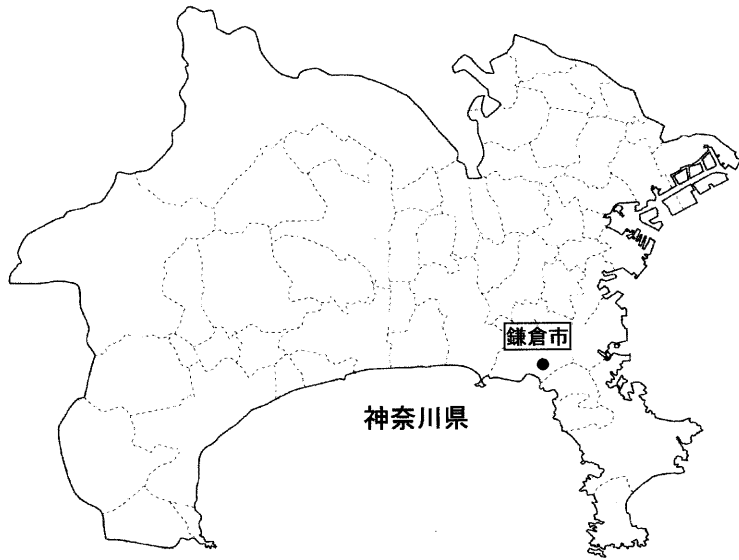


図1 遺跡位置図

第1章 調査地点の位置と歴史的環境

第1節 調査地点の位置

本調査地点は鎌倉市雪ノ下三丁目704番3外に所在する。源頼朝の御所でもある大倉幕府が置かれた一角に位置するものと考えられる。現在、遺跡地の東には、南北方向に延びる道路を隔てて清泉小学校がある。調査地点から北に約125m、南北道路の北端、山の中腹に源頼朝墓(源頼朝法華堂)がある事からも、調査地点は鎌倉時代前期に大倉幕府の置かれた中心地域に位置していると思われる。現地表の海拔は約13.3m前後である。

第2節 歴史的環境と周辺における調査

治承4年(1180)10月、源頼朝は源氏ゆかりの地である鎌倉入りを果たした。源頼義が前九年役の戦勝祈願のために、石清水八幡宮から勧請した由比若宮を移し鶴岡八幡宮とした。また、亀ヶ谷にあった父義朝の館跡に居館を構えようとしたが、手狭な上、岡崎義実により義朝の菩提を弔う堂が建立されていたため断念。改めて大倉に居を構えた。新造なった御所で12月12日に行われた移徙の儀を見ると、御所は寝殿を中心とした建物が並ぶ寝殿造で、西ノ對に造られた侍所は長さ18間にも及び、三百十一人の御家人が二行に対座している。この大倉御所は源氏三代45年に渡り使われることになるが、この間に火災で消失・再建が繰り返され大きく4時期に分けることが出来る。

大倉幕府の時代

第1期大倉御所 治承4年(1180)12月12日～建久2年(1191) 小町大路からの火災で焼失。

第2期大倉幕府 建久2年～建保元年(1213) 和田合戦で戦火により消失。

第3期大倉幕府 建保元年～承久元年(1219) 火災で焼失。

第4期大倉幕府 承久元年～嘉禄元年(1225)12月20日 宇津宮辻子へ移転。

嘉禄元年に宇津宮辻子へ幕府は移転する。

大倉幕府移転後の時代

嘉禎元年(1235)9月1日 右大将家法華堂前の湯屋から失火。『吾妻鏡』

宝治元年(1247)1月13日 右大将家法華堂前の人家数十軒が失火。北条実時の屋敷もこの中に含まれていた。『吾妻鏡』

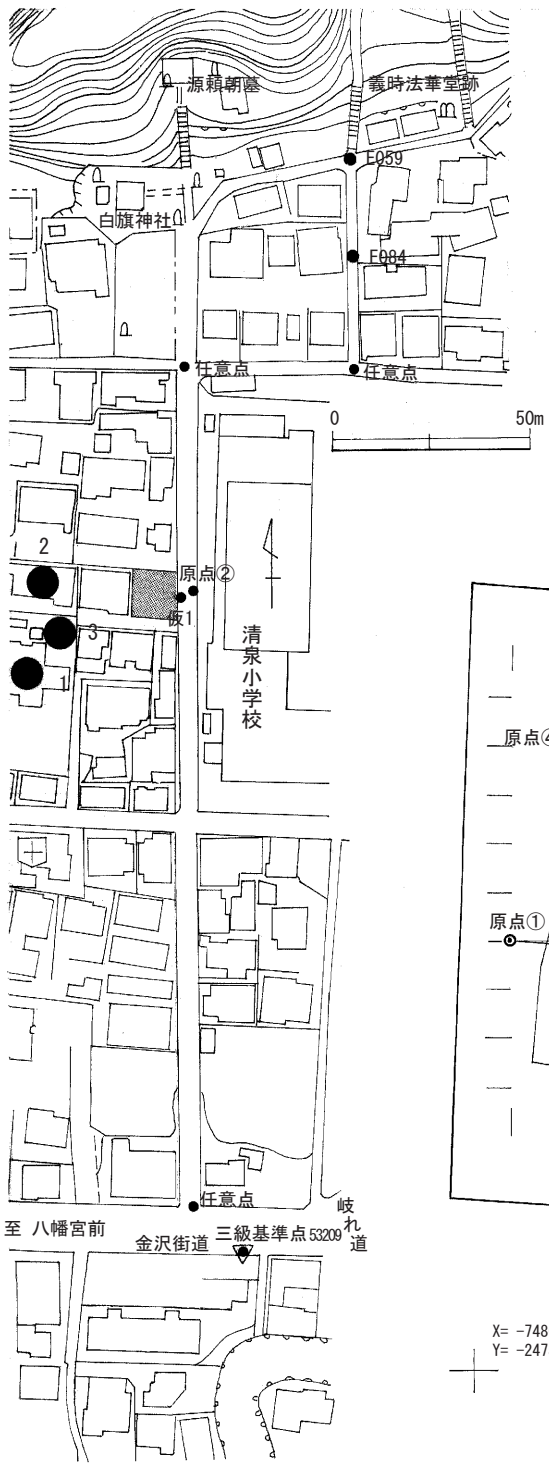
康元年(1256)12月11日 右大将家法華堂前が焼け、勝長寿院も焼けている。『吾妻鏡』

移転後の土地利用は明らかにされていないが、火災の記録から有力御家人の屋敷や人家等があったことが分かる。

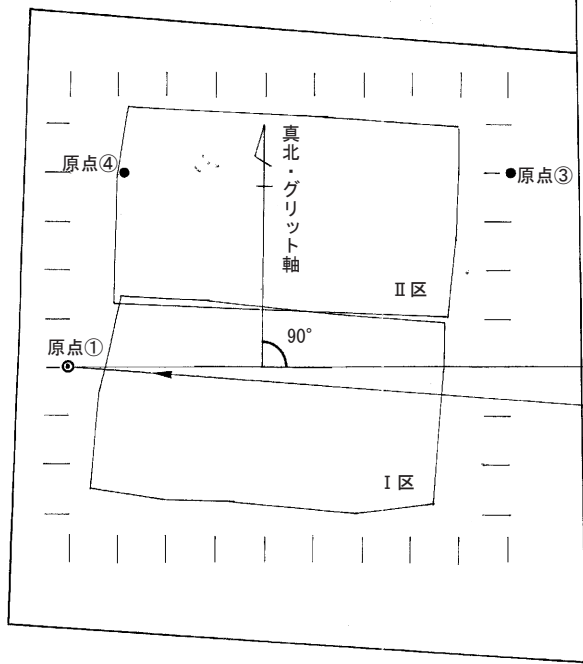
大倉幕府跡内の調査は件数は多くない。1974年に行われた大倉幕府跡内の工事(清泉小学校)で出土した遺物紹介(1)を初めとして、当遺跡(2005年10月調査)の他に6地点が報告されている。この内の雪ノ下三丁目701番14地点、雪ノ下三丁目701番3地点、雪ノ下三丁目701番1地点の3地点(2)は当遺跡の西側2軒隣に位置している。

(1)『鎌倉市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』「昭和49年各種工事による出土遺物」

(2)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21-1』



1. 雪ノ下三丁目701番14地点
 2. 雪ノ下三丁目701番3地点
 3. 雪ノ下三丁目701番1地点
- (鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21)



X= -74843.373
Y= -24758.417

清泉小学校

北へ
任意点

X= -74863.372
Y= -24758.417



E059	X=-74742.767	Y=-24701.007	三級基準点53209	海拔標高 12.086m
E084	X=-74768.456	Y=-24700.056	原点①	海拔標高 13.658m
仮1	X=-74855.416	Y=-24746.774	原点②	海拔標高 13.330m
原点①	X=-74856.618	Y=-24757.679	原点③	海拔標高 13.594m
原点②	X=-74854.618	Y=-24743.201	原点④	海拔標高 12.856m
原点③	X=-74850.618	Y=-24748.679		
原点④	X=-74850.618	Y=-24756.596		

南へ
任意点

図2 調査地点座標と近接する遺跡

第2章 調査の経過と層序

第1節 調査の経過

大倉幕府跡（県遺跡台帳No.253）内で、個人専用住宅の建設に係わり基礎工事で土壌改良工法の事前相談があった。近接する地域で行われた発掘調査の成果から、埋蔵文化財が受ける影響は大きいと判断、発掘調査を行うこととなった。

施工業者との事前打ち合わせが行われ、発掘調査の準備が進められた。平成17年10月25日に調査を開始、翌平成18年1月27日まで調査が行われた。調査面積は約56㎡である。

以下、日誌の抜粋を載せることとする。

- 10月25日 調査開始。機材搬入。市内国土座標原点より座標移動を行う。
- 10月26日 1区壁面と第1面の面出し・精査を行う。検出した遺構を掘り下げる。
- 11月14日 3面の面出し作業。溝状落ち込みと柱穴列を検出する。
- 11月30日 貝砂を敷き詰めた第6面を検出する。瓦片が多い。
- 12月8日 1区第8面の調査。
- 12月5日 1区の平面図、全景写真を終え1区の調査終了。
- 12月8日 2区壁面と第1面の面出し・精査を行う。
- 1月4日 柱穴多数と板壁を検出する。土壌の掘り下げを行う。
- 1月20日 2区第8面、礎石と雨落ち溝とおぼしき南北方向の溝の詳細図と写真撮影。
- 1月27日 調査壁面の図面作成の後、全景写真撮影。調査終了。

第2節 層序（図3）

地表の海拔は敷地の東側で約13.30m、西側で13.65mで西側が約30cmほど高い。

I区(南側)、II区(北側)に分割して調査を行った敷地は、地表下約0.5～1mまで盛土、攪乱と旧表土であった。重機による表土掘削を0.5～1mまでとし掘削時に立ち会った。ここで最初に検出された遺構面を第1面とした。地表から地山面まで約3.2～3.3m程もあり湧水に悩まされた。

土層一覧

1. 盛土
2. 旧表土
3. 土丹地業層・第1面
4. 灰褐色粘質土層・第2面
5. 土丹地業層
- 5'. 土丹地業層（地業やや弱い）
6. 黒褐色粘質土層
7. 灰褐色粘質土層（拳大の土丹、木片、かわらけ片含む）
- 7'. 灰褐色粘質土層（7よりやや砂が多い）
8. 灰褐色粘質土層（5mm～1cm大の土丹粒多い）・第3面
9. 暗褐色砂質土層

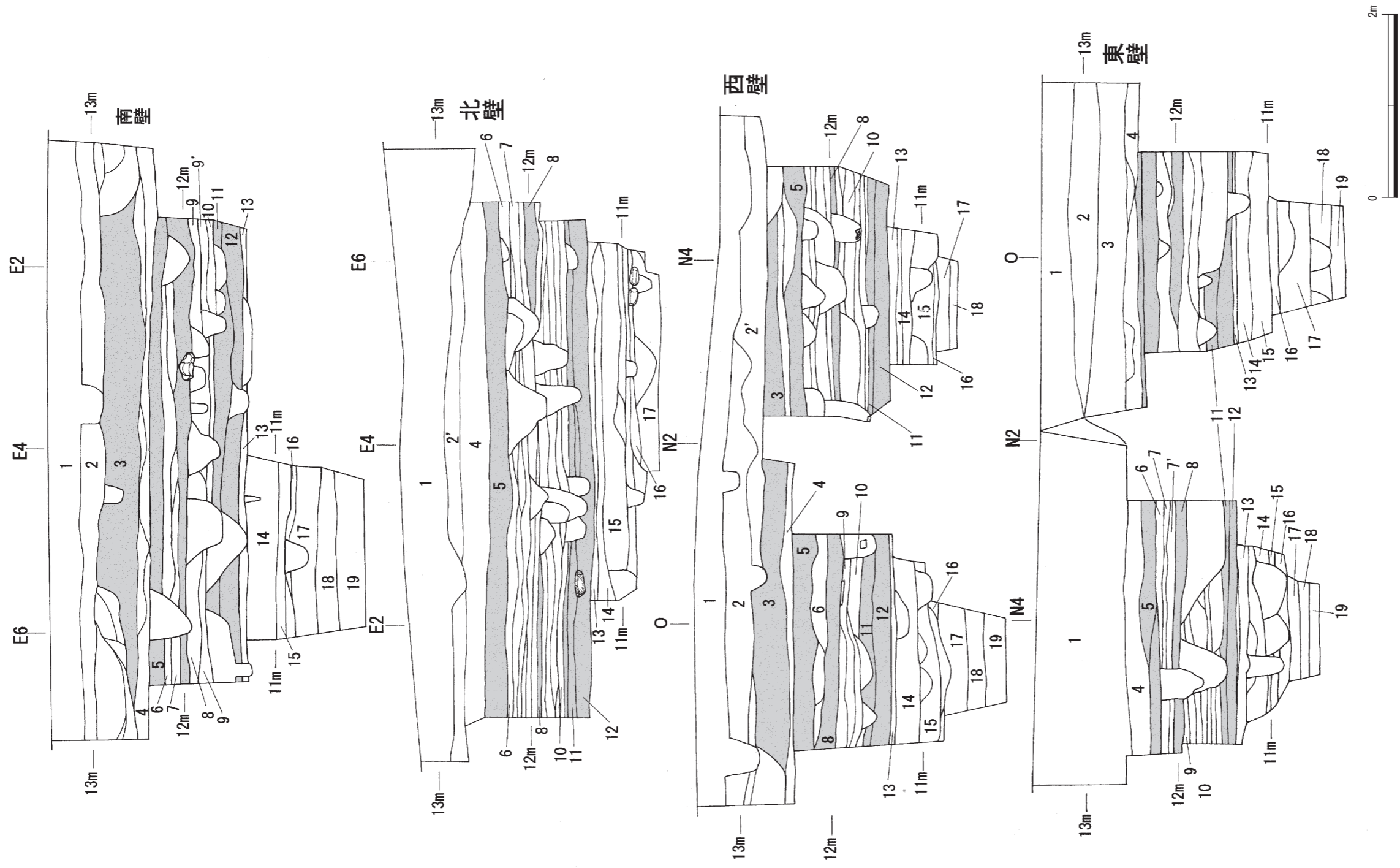


图3 土层断面层

- 9' 暗褐色砂質土層（土丹粒やや多い）
- 10. 土丹地業層（5～10cm大の土丹密）…4面
- 11. 土丹地業層（叩き締めてある）…5面
- 12. 土丹地業層（拳～人頭大の土丹密）
- 13. 灰褐色砂層（貝混じりの砂）…6面
- 14. 青灰色砂質土層…7面
- 15. 青灰色砂質土層（5～10mmの土丹粒多い 茶褐色砂質土混じる）…8面
- 16. 暗灰色砂質土層（部分的に砂層）
- 17. 黒褐色粘質土層（貝混じりの砂が入る）
- 18. 黒褐色砂質土層（砂が多い）…9面
- 19. 黒灰色砂質土層（地山 混入物なし）…10面・地山面

第3章 検出した遺構と遺物

第1節 第1面の遺構と遺物（図4、図5～18 図版1・7）

旧地表下に広がる第3層、土丹地業面（海拔約13.0m）を第1面とした。柱穴5、土壙4、布掘り1、溝1を検出した。溝は北から南に向かい清泉小学校の敷地西辺、北に位置する頼朝法華堂跡に向かう南北道路に沿って約7.5m分検出したもので、南北に延びる溝の西岸のみの検出である。深さは約40～50cm程である。柱穴は東西に4穴横に並ぶが間隔はバラバラである。東西に延びる布堀1は2層に分層でき、溝と直行する。溝は第1面を掘り込んでいることから近世の遺構と考えられる。

遺構からは瀬戸折縁皿、卸皿、水注、白磁合子、瓦質火鉢、鉄釘、砥石が出土している。溝出土の瀬戸の折縁皿は、古瀬戸後期後半（15世紀中葉頃）と考えられる製品である。砥石は鳴滝産仕上げ砥である。

第1面の時期は、出土した瀬戸の製品などから15世紀後半と考えられる。

第2節 第2面の遺構と遺物（図19・図20～38 図版1・8）

地表から約1m下の第4層、第1面土丹地業面の下、灰褐色粘質土層（海拔約12.5～12.7m）を第2面とした。柱穴を41穴を検出した。中に礎板を持つものが13穴ある。南北方向に延びそうだが、建物になるかは明らかでない。

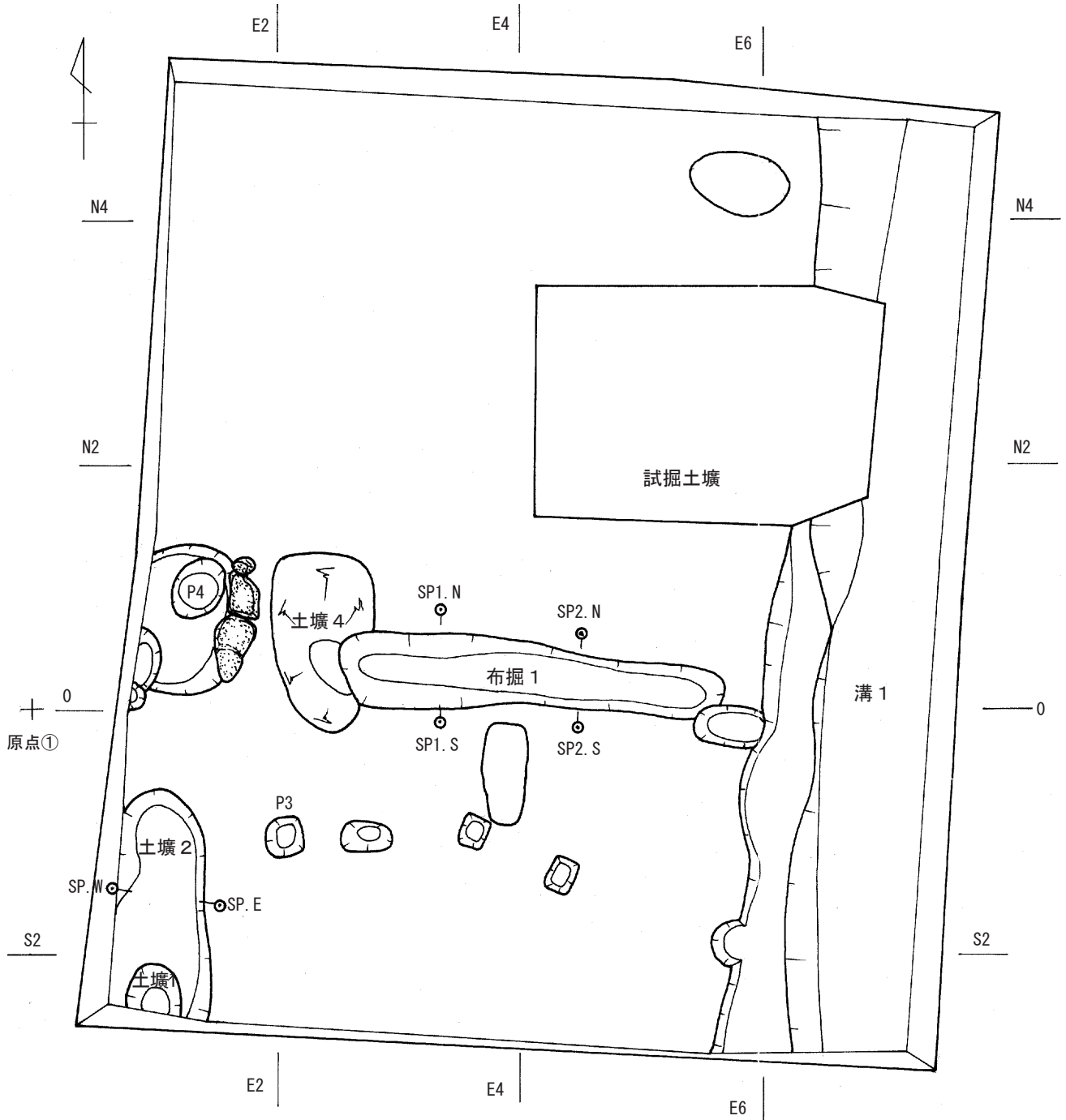
出土した遺物を見て行くと、かわらけ、青磁折縁皿、青白磁水注、瀬戸入子、常滑片口鉢、瓦質火鉢、女瓦、砥石、銭、漆器椀が出土している。この中で一番新しいものは15世紀後半代、常滑10型式のⅡ類片口鉢である。

第2面構成土中からは多くのかわらけと白磁口元皿・劃花文皿、青磁鎗蓮弁文碗・折縁皿、瀬戸入子、備前播鉢、常滑甕・片口鉢、瓦類、伊勢土鍋、滑石鍋、銭、釘、木製品（箸・籠・下駄・草履芯・独楽）、漆器皿・椀、烏帽子等が出土している。

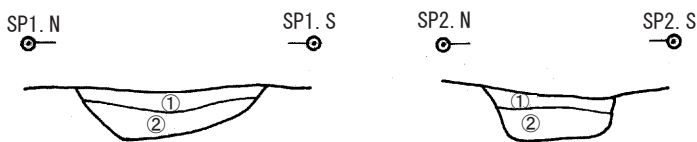
第2面の時期は14世紀後半と考えられる。

第3節 第3面の遺構と遺物（図39・図40・図41 図版2・9）

地表から約1.4m下の第8層、土丹事業面（海拔約12.2m）を第3面とした。東西方向の溝状遺構1と柱穴を12穴、鎌倉石の切石を10個検出した。溝状遺構の規模は幅約80～100cm、長さ4.7m、深さ20～30



I 区 1 面 布掘 1



- ① 黒色砂質土
土丹粒多く含みしまり悪い。
- ② 土丹ブロック密。



- ① 明褐色粘質土
焼土、かわらけ片、土丹粒
- ② 明褐色粘質土
①よりかわらけ片、炭化物少なく
土丹粒が大きい。



I 区 1 面 土壌 2



図 4 1 面全側図

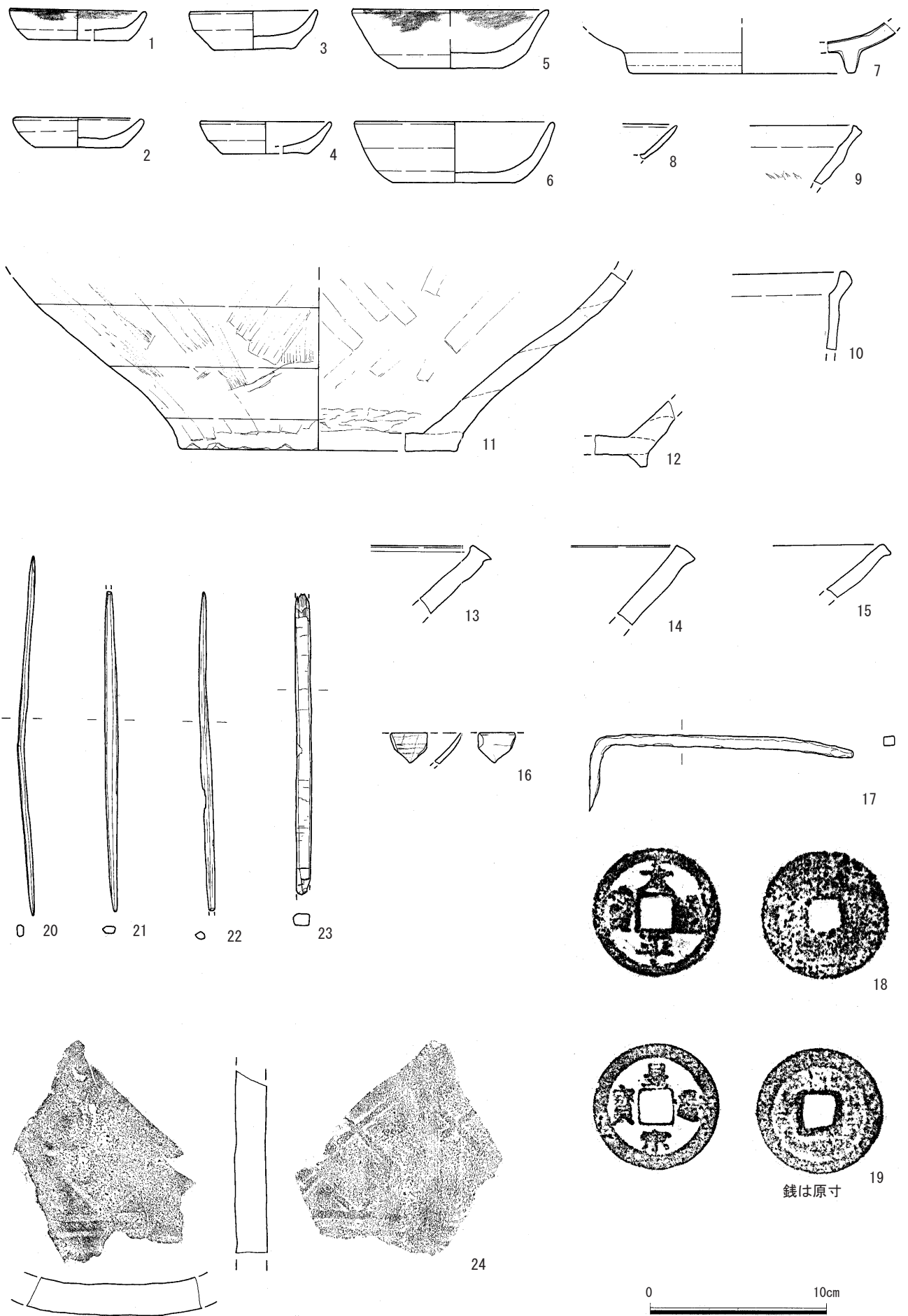


図5 表採・表土出土遺物

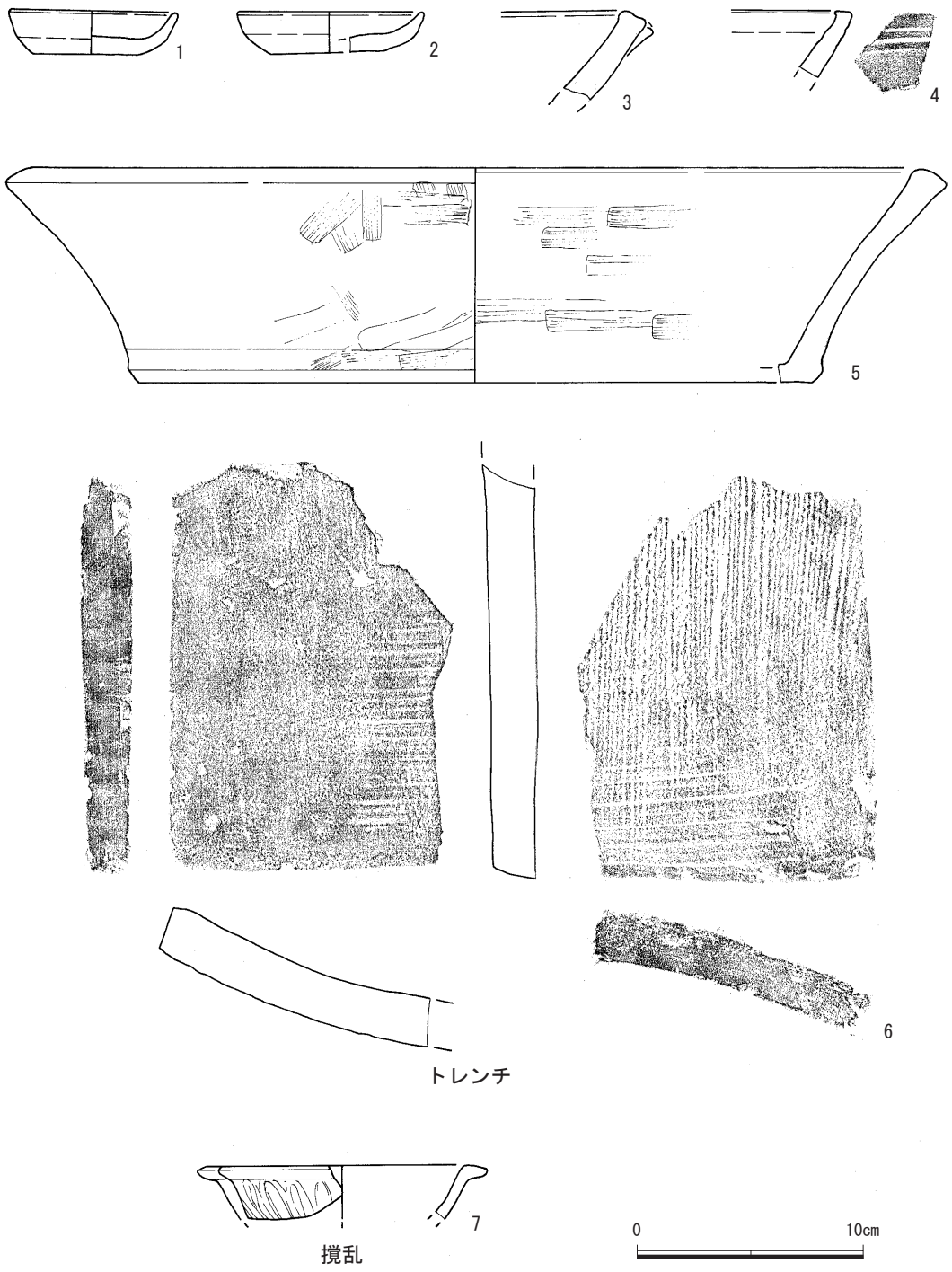


図6 トレンチ・攪乱出土遺物

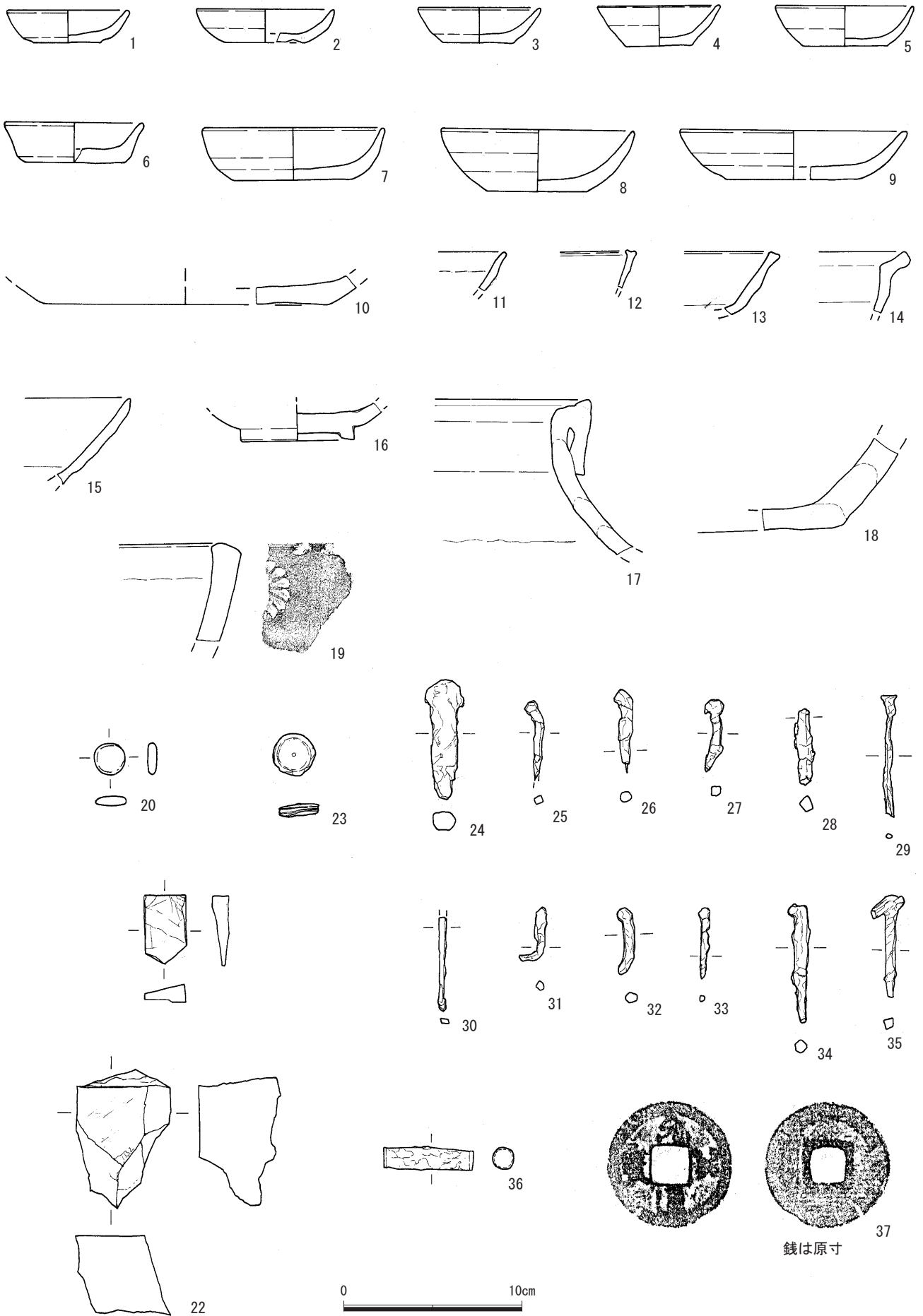


図7 1面まで出土遺物1

cmである。覆土は一層で土丹粒、かわらけ片、木片を含む。覆土は暗褐色粘質土層である。

検出した12穴の柱穴のうち8穴で礎板が検出されている。溝状遺構に沿うように柱穴もまた東西方向に並ぶようである。Ⅰ区とⅡ区で検出された柱穴列は約4mの間隔を保ち東西方向に延びる。中間地点が検出されないため、建物になるか溝に沿った柵列なのかは不明である。また、鎌倉石の切石も流れは東西方向だが、間隔に規則性がない。連続する地覆石の壊されたものかも知れない。

遺物では、溝状遺構からかわらけ、常滑片口鉢(常滑6a型式)、漆器皿・椀、杓文字、銭、基石。柱穴135から青磁連弁文碗が出土している。

第3面構成土中から轆轤成形のかわらけと常滑甕(5型式が混じる)、青磁連弁文碗、漆器皿・椀、灯明代、折敷等が出土している。

第3面の時期は13世紀末～14世紀初頭と考えられる。

第4節 第4面の遺構と遺物 (図42・図43～図47 図版3・10)

地表から約1.6m下の第10層、灰褐色粘質土層(海拔約11.9m)を第4面とした。

柱穴24穴、土壇7穴と面の上で床束の支えに使われたと思われる礎板9枚を検出した。この内の多くがⅡ区の板壁建物の遺構と考えられる。建物の地面と接する横板の遺存状態は悪く、取り上げることが出来ない状態であったが、板の表面には網代状に編んだ壁材の圧痕が認められた。建物の規模はおよそ東西5m以上、南北4m以上になるものと思われる。

板壁建物に伴うと見られる土壇と柱穴から、かわらけ、漆器椀、釘、木製品が出土している。板壁建物内から、内面に煤が付着した常滑片口鉢(Ⅰ類)の6a型式が面に張り付いた状態で出土している。この他、4面から白磁劃花文皿、手捏ね成形の白かわらけ、轆轤成形のかわらけ、漆器椀、草履芯、箸などが出土している。多くはⅡ区の板壁建物の板と柱穴に囲まれた範囲内から出土している。

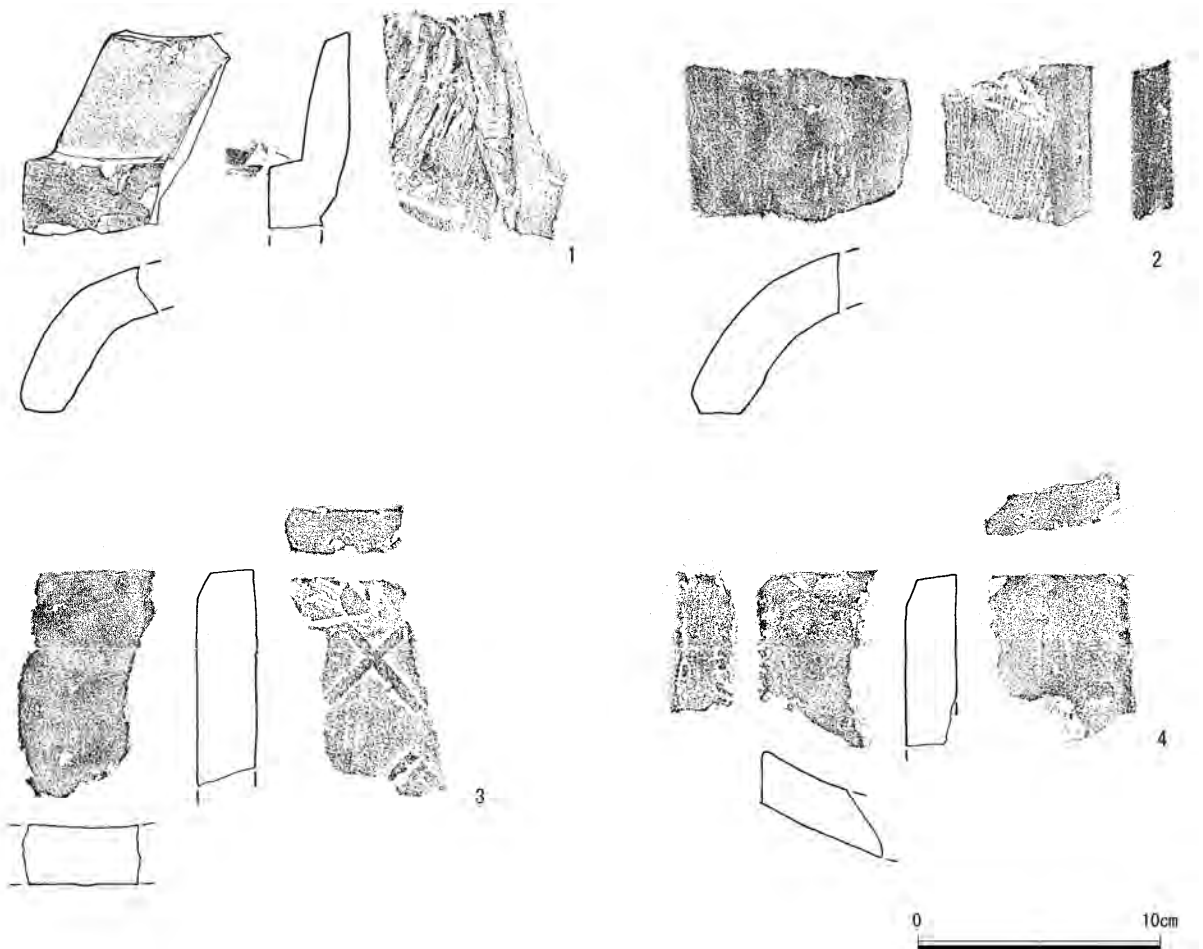
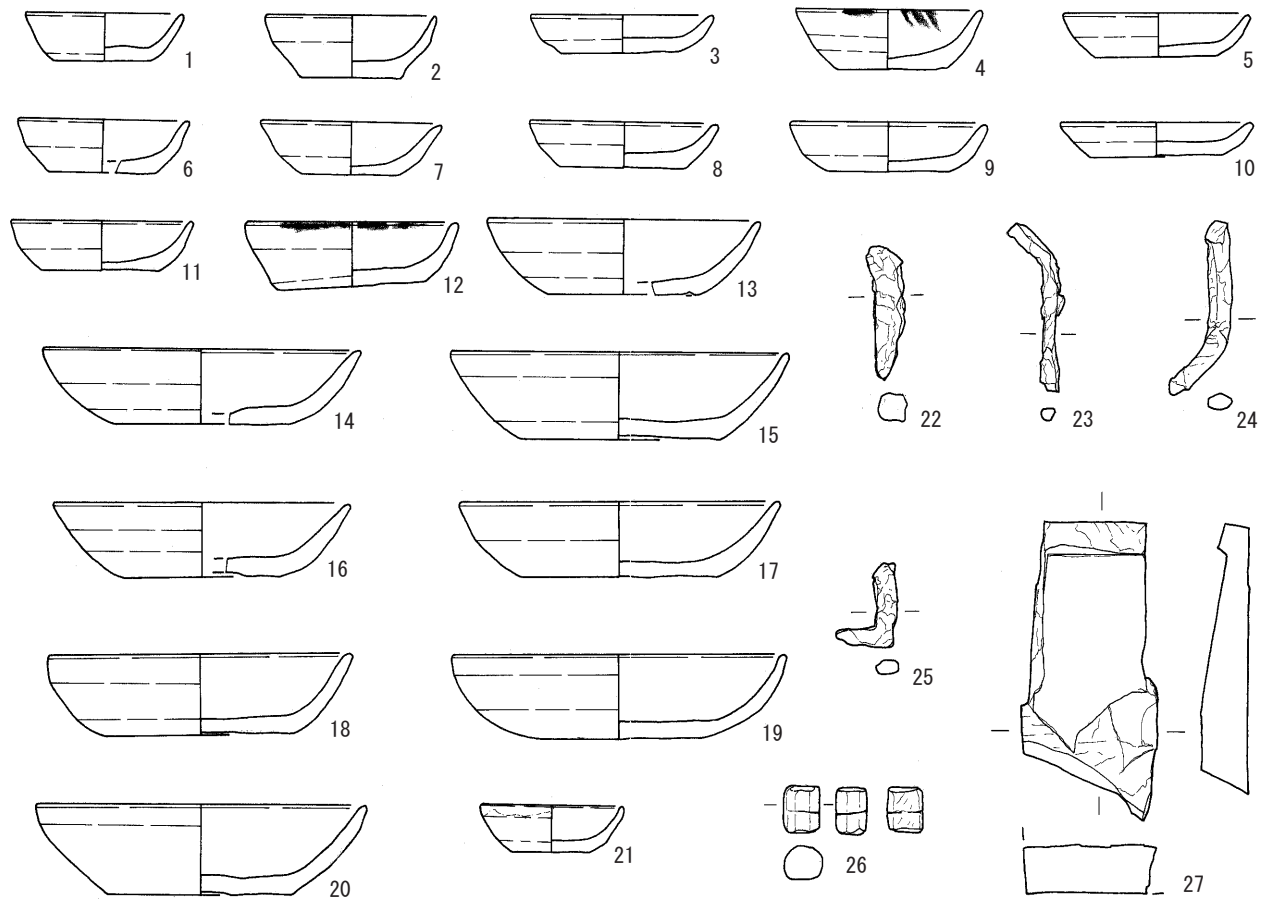
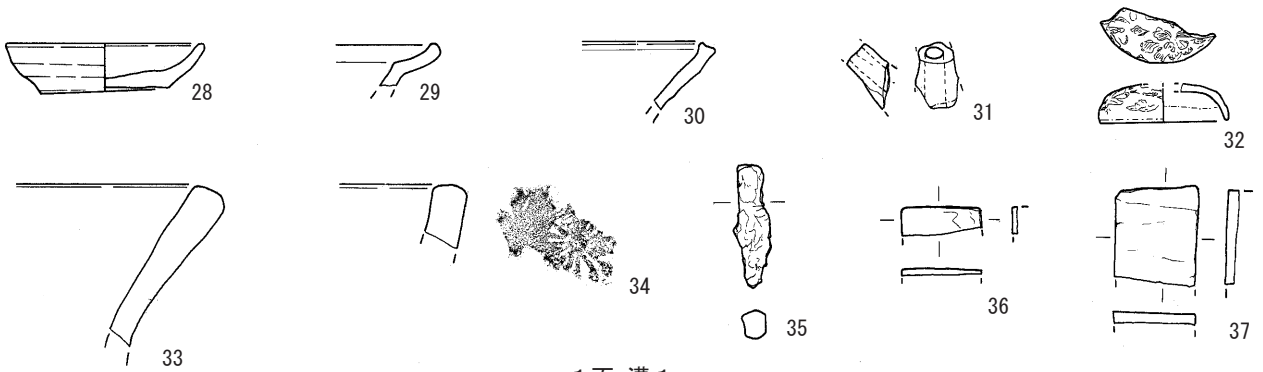


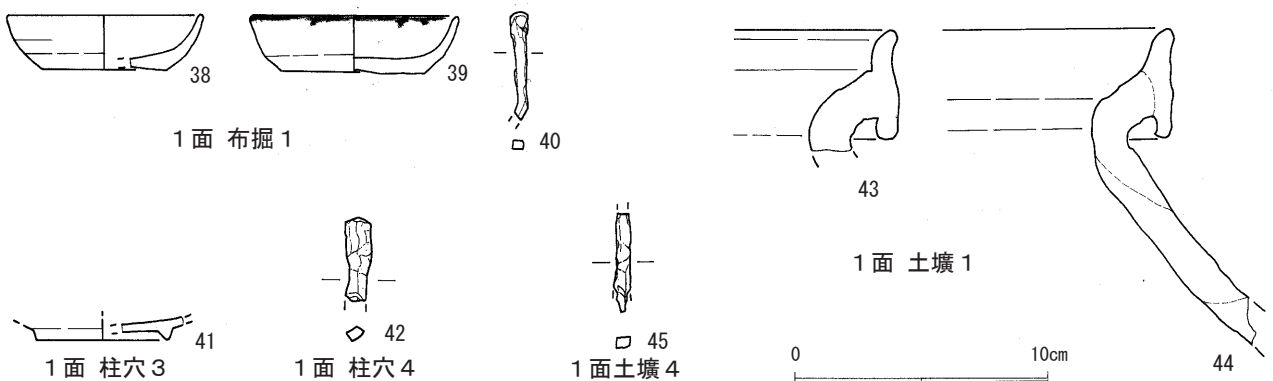
図8 1面まで出土遺物2



1面



1面 溝1



1面 布掘1

1面 土壤1

1面 柱穴3

1面 柱穴4

1面土壤4



图9 1面·1面遺構出土遺物

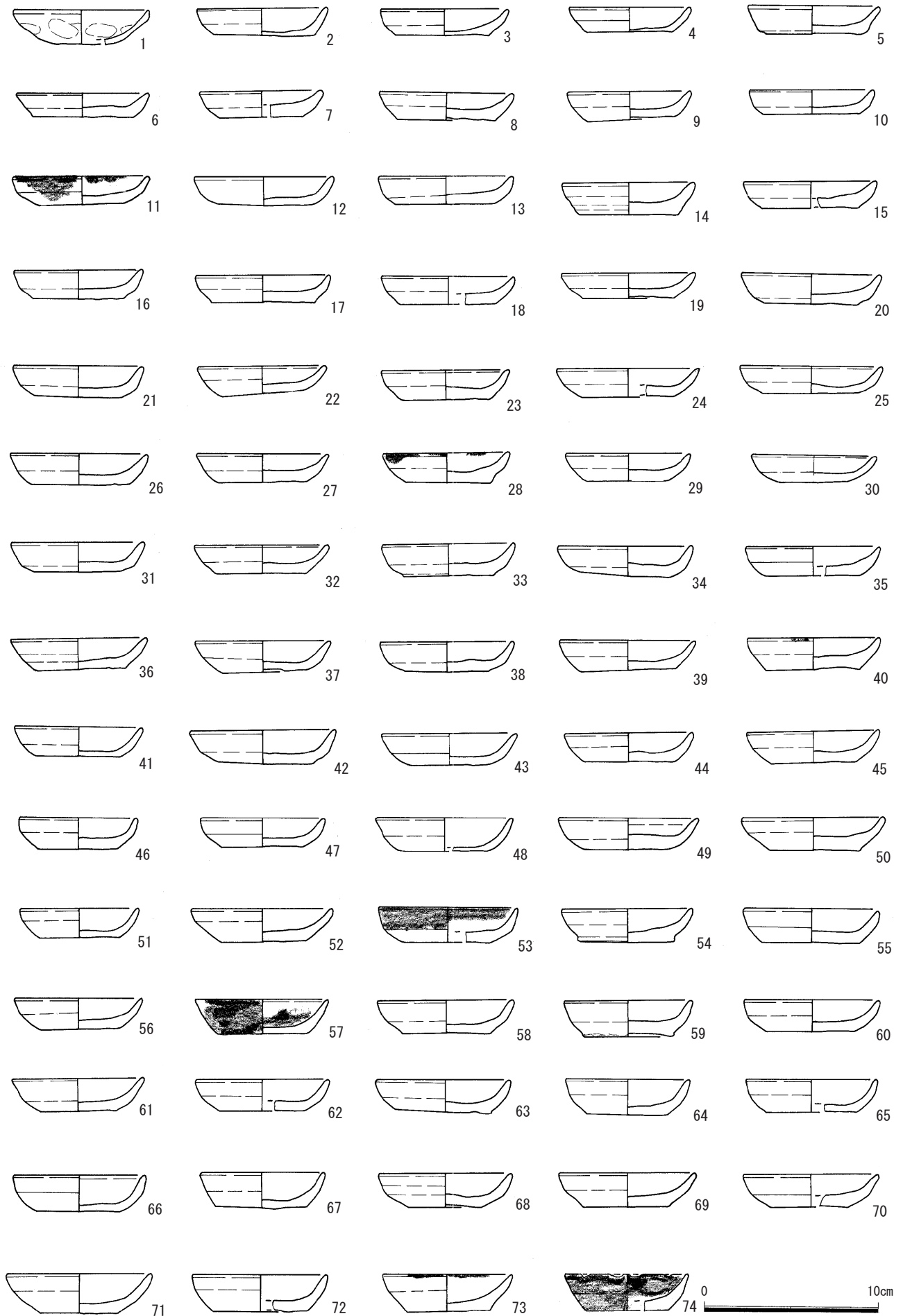


图 10 1面構成土出土遺物 1

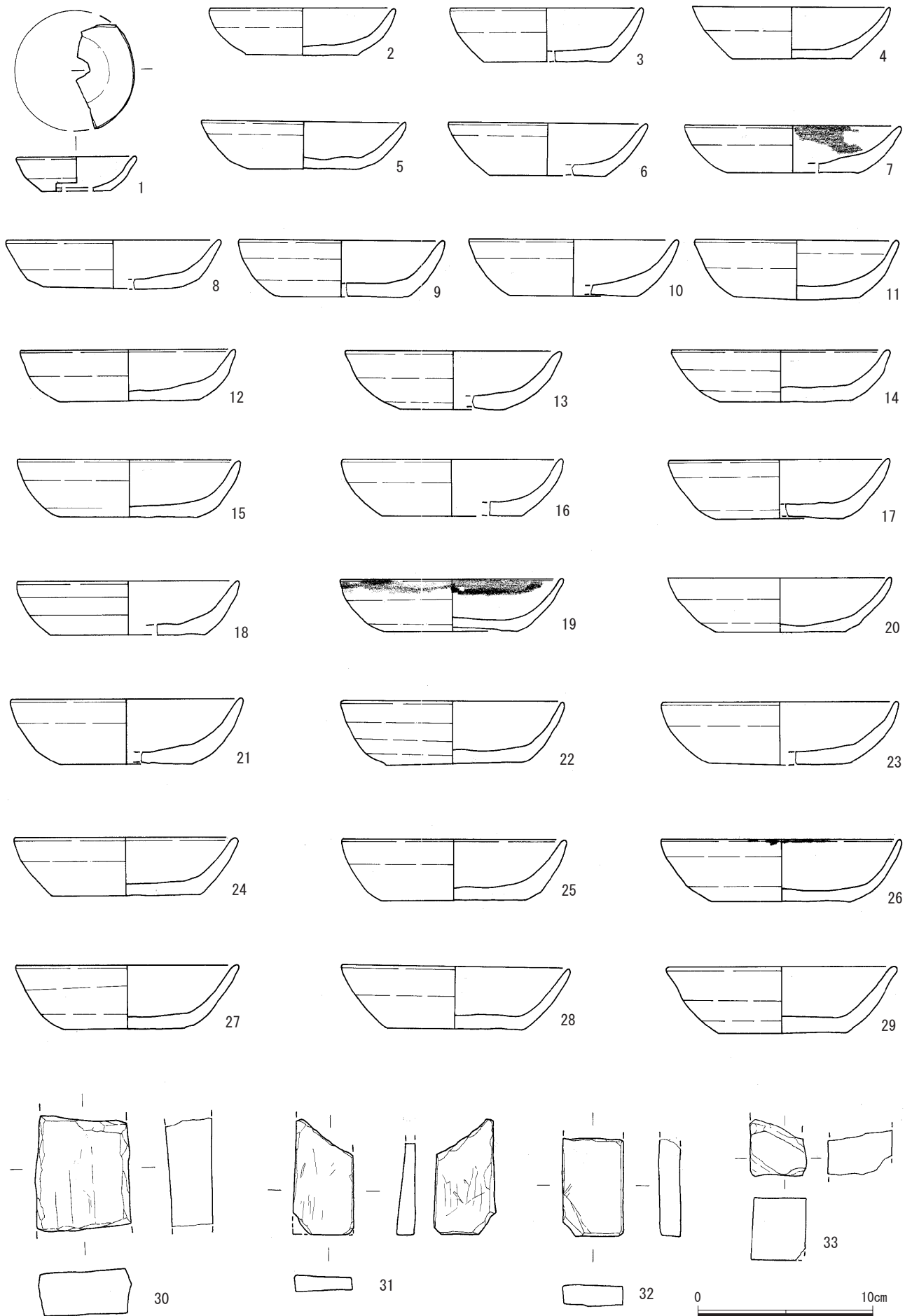


图 1 1 1 面構成土出土遺物 2

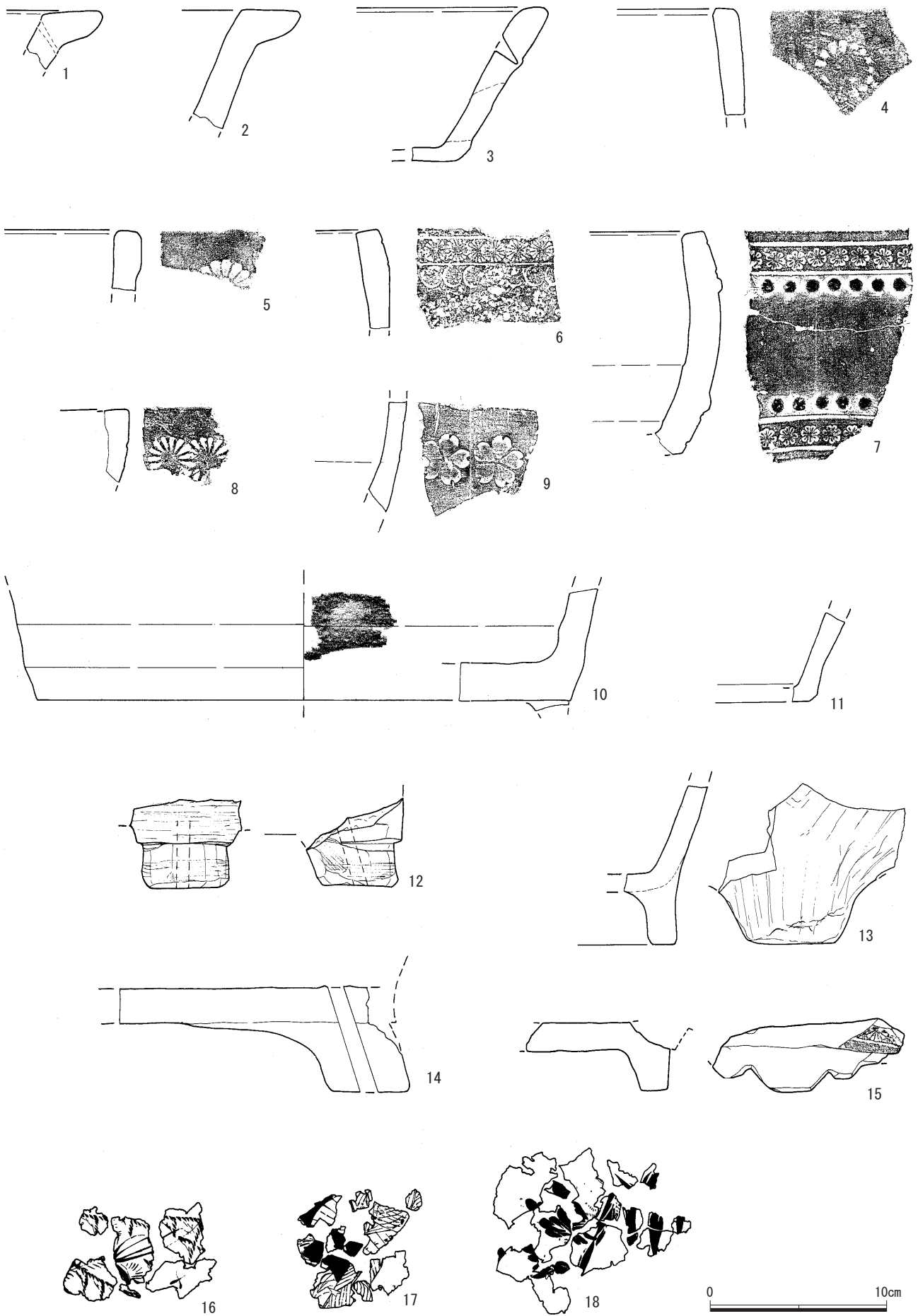


图 1 2 1 面構成土出土遺物 3

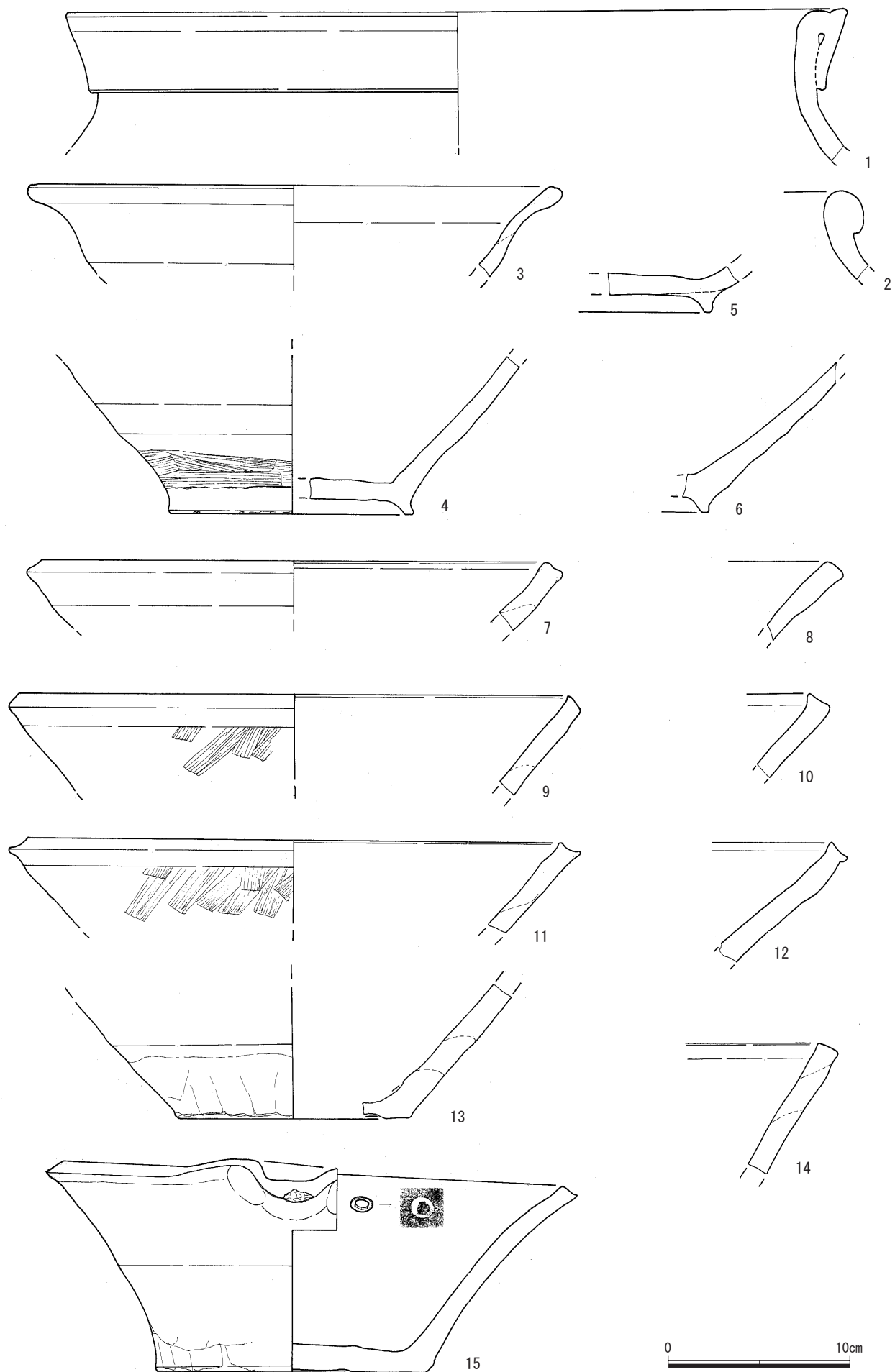
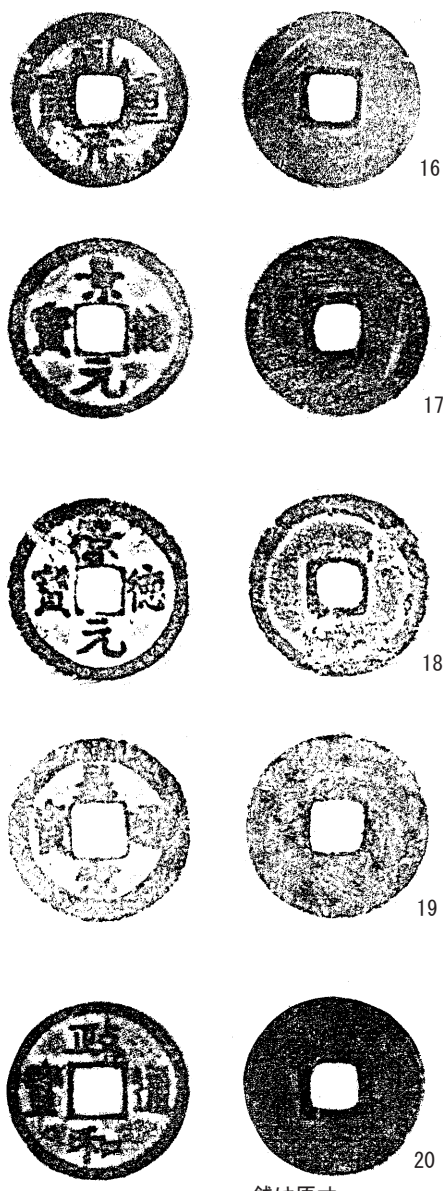
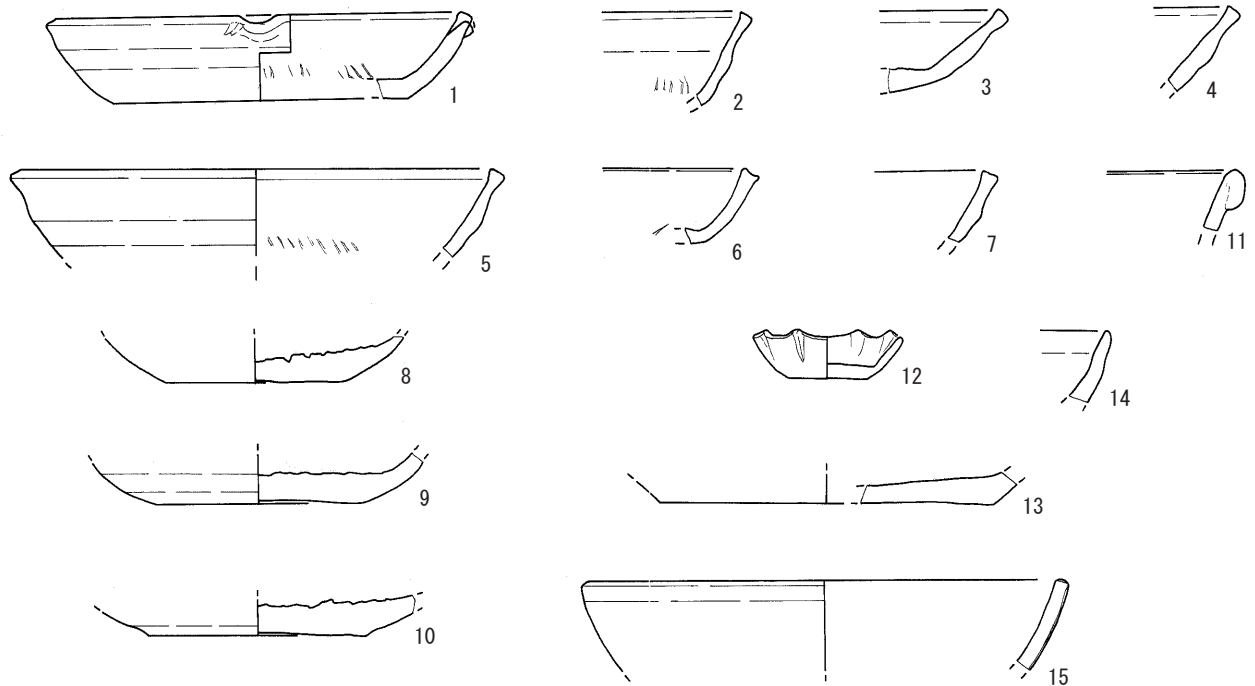


图 13 1 面構成土出土遺物 4



錢は原寸

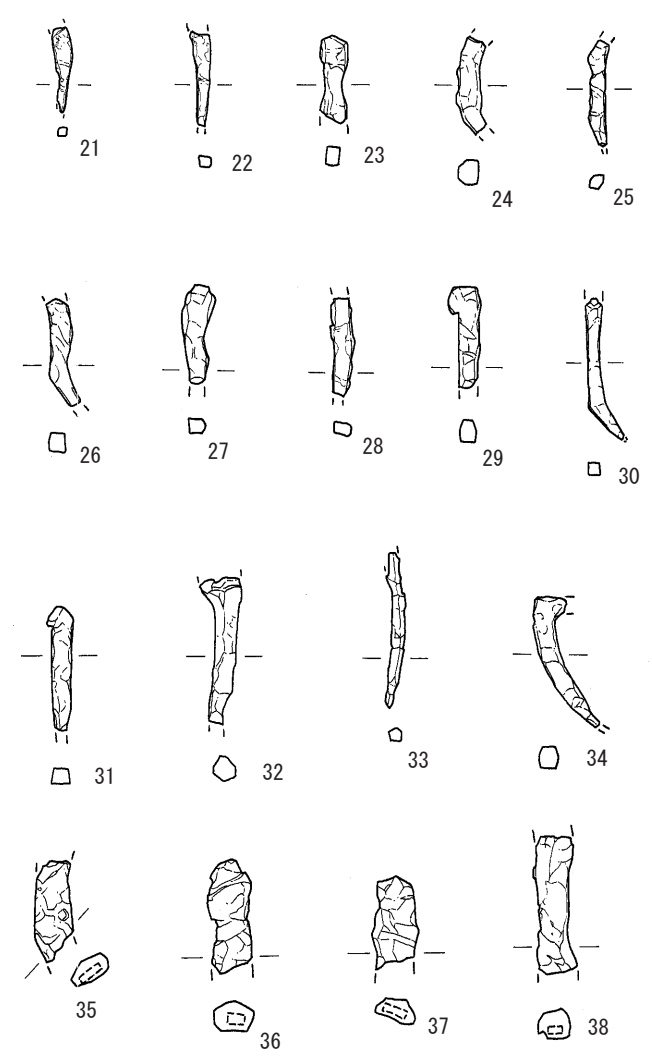


図 1 4 1 面構成土出土遺物 5

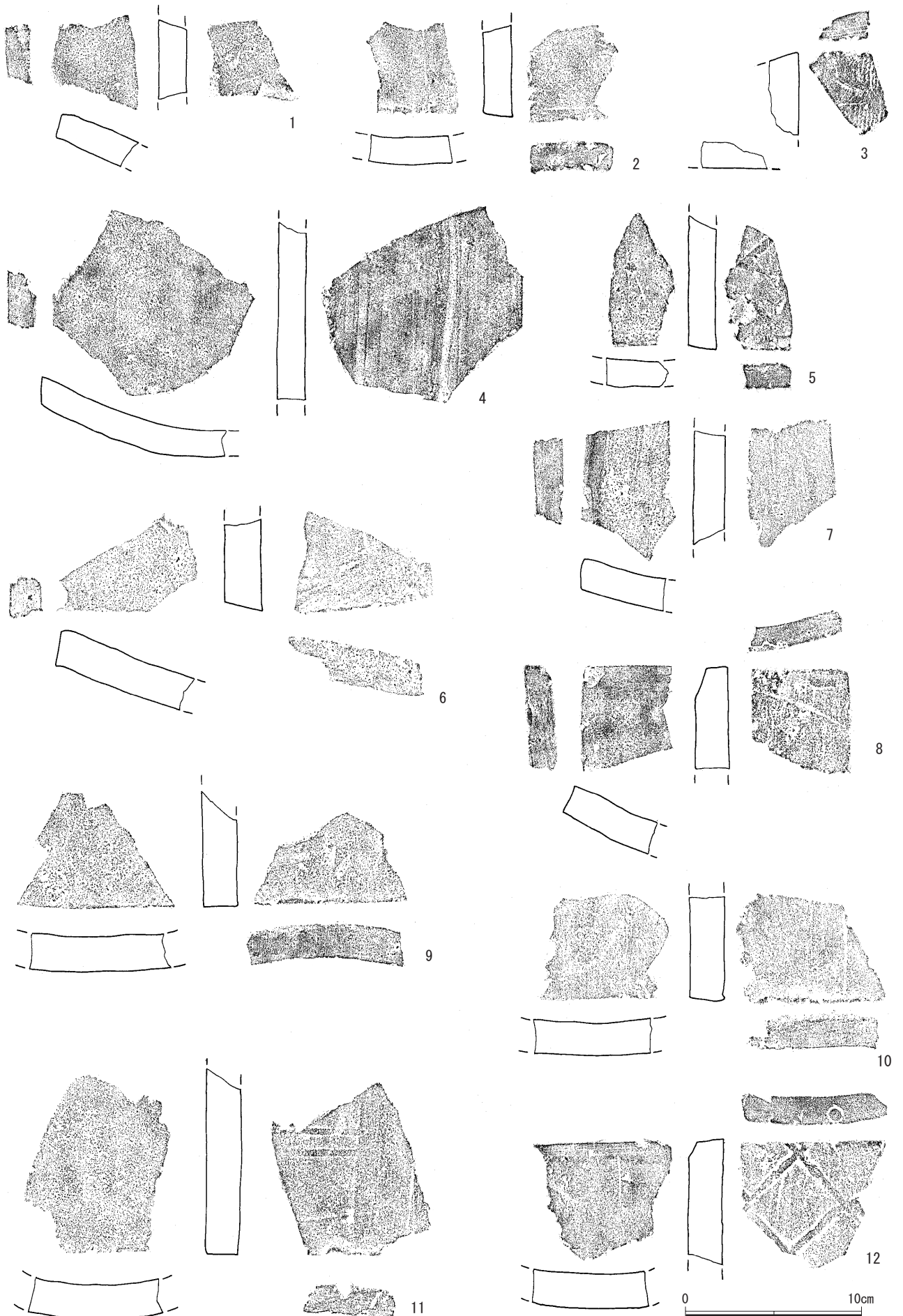


图15 1面構成土出土遺物6

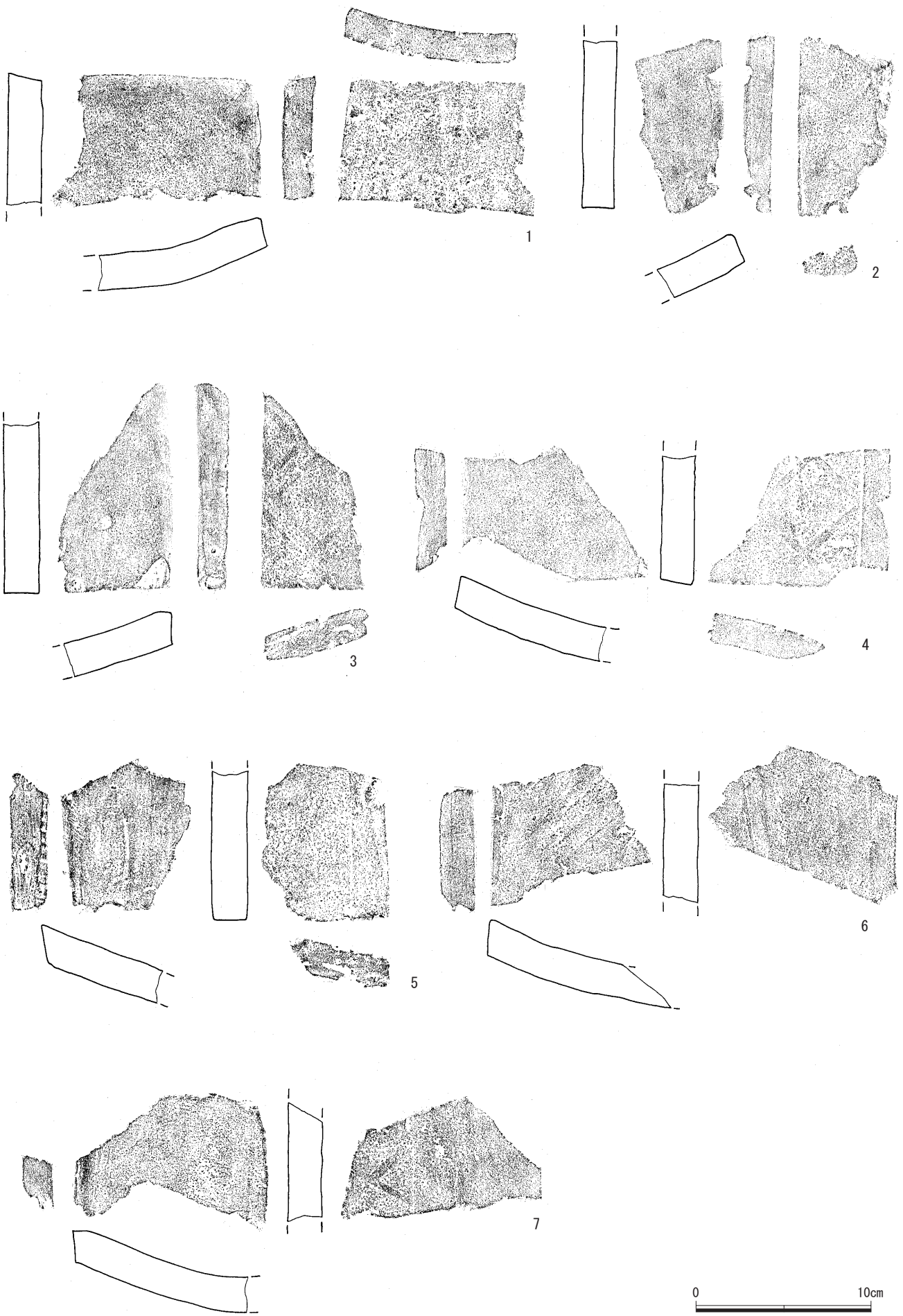


图16 1面構成土出土遺物7

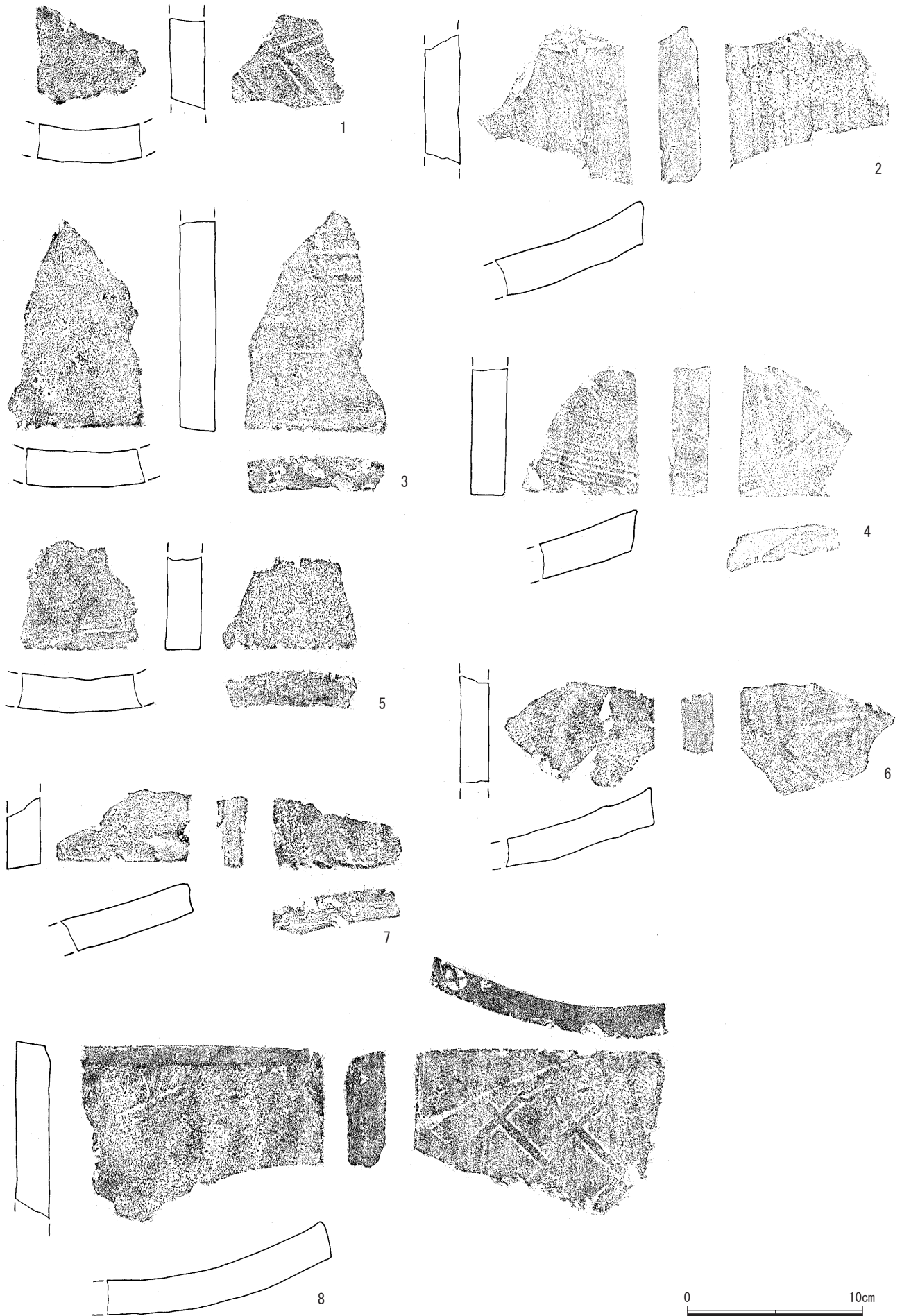


图 1 7 1 面構成土出土遺物 8

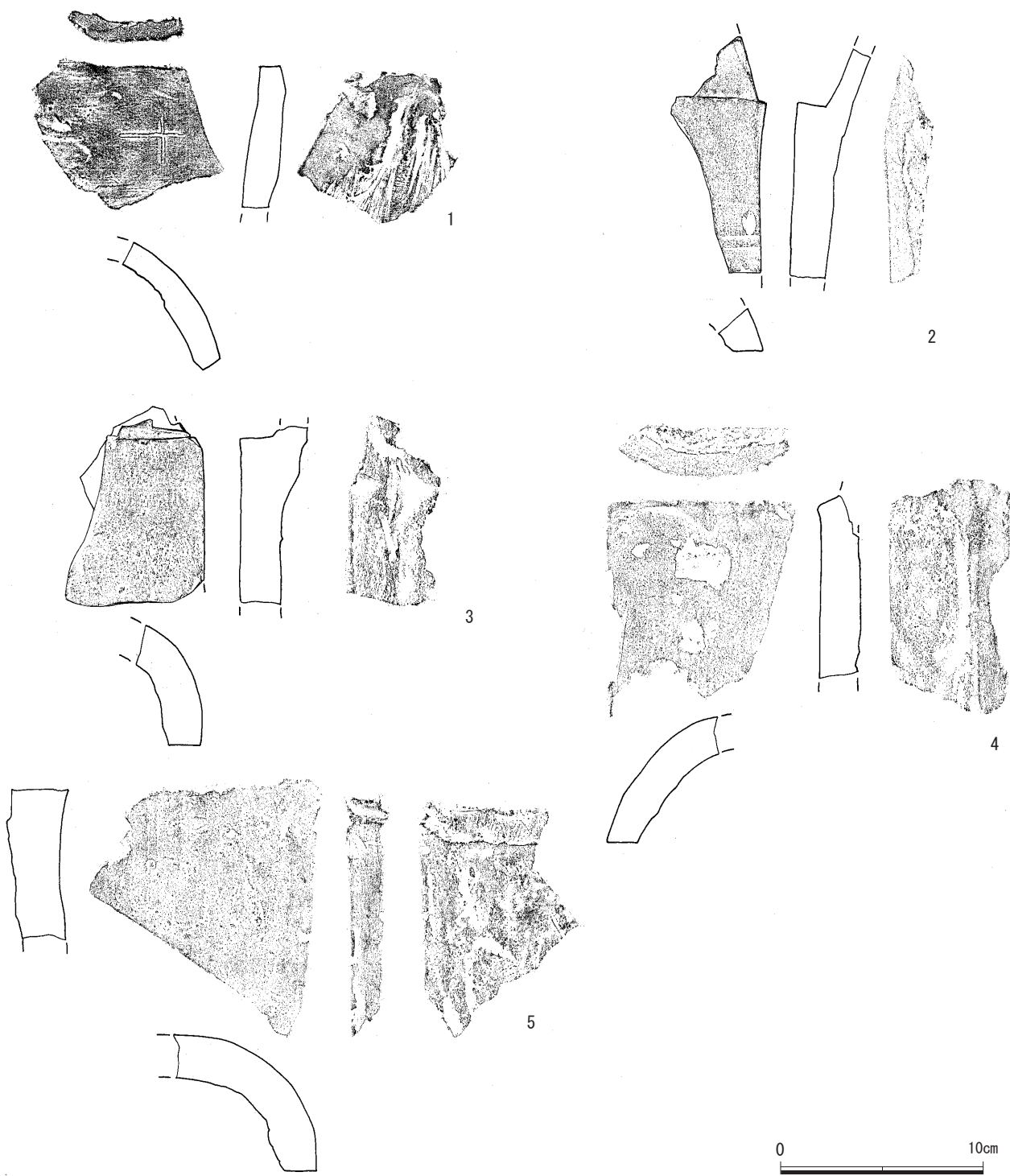


图 1 8 1 面構成土出土遺物 9

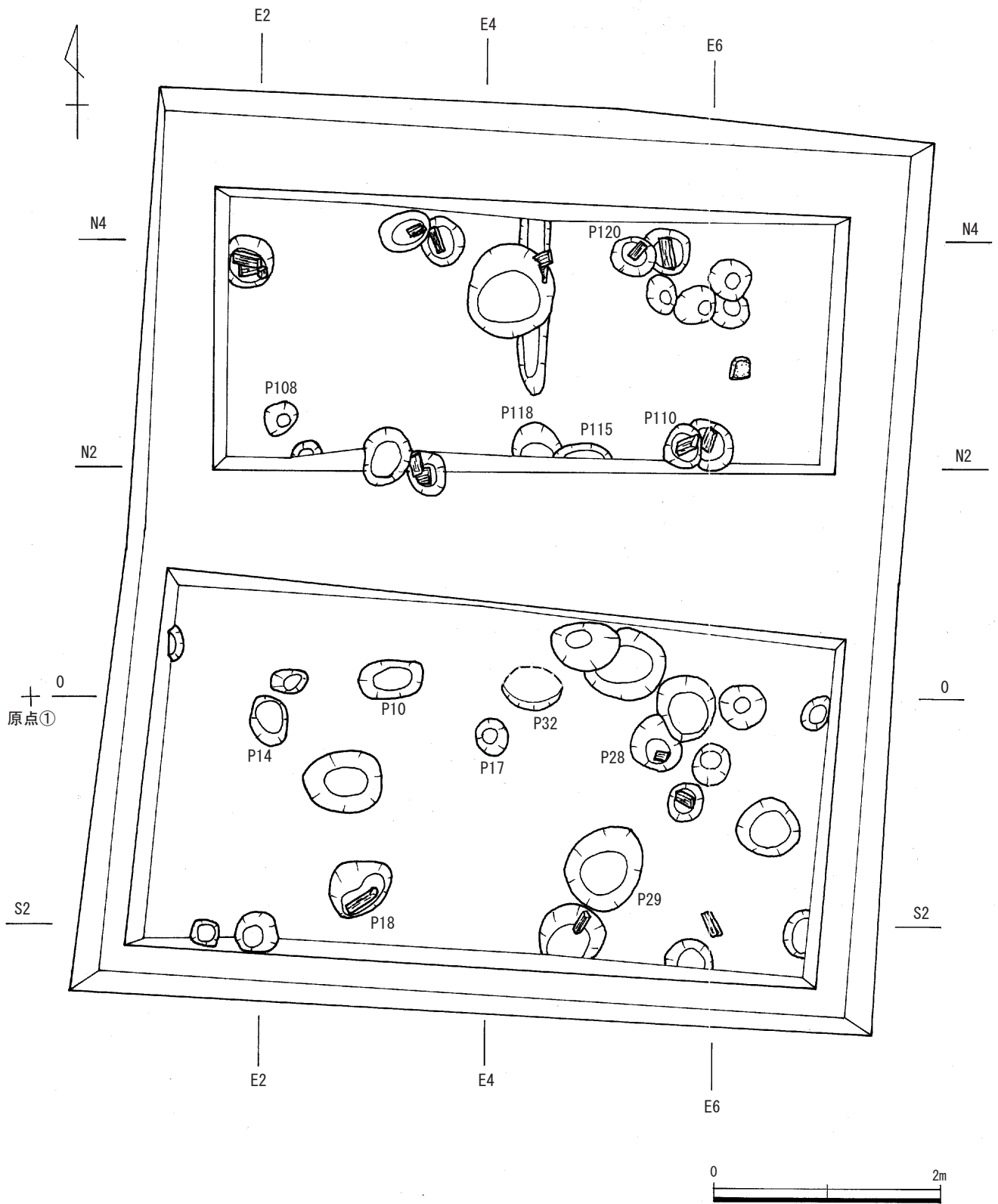


图 19 2面全侧图

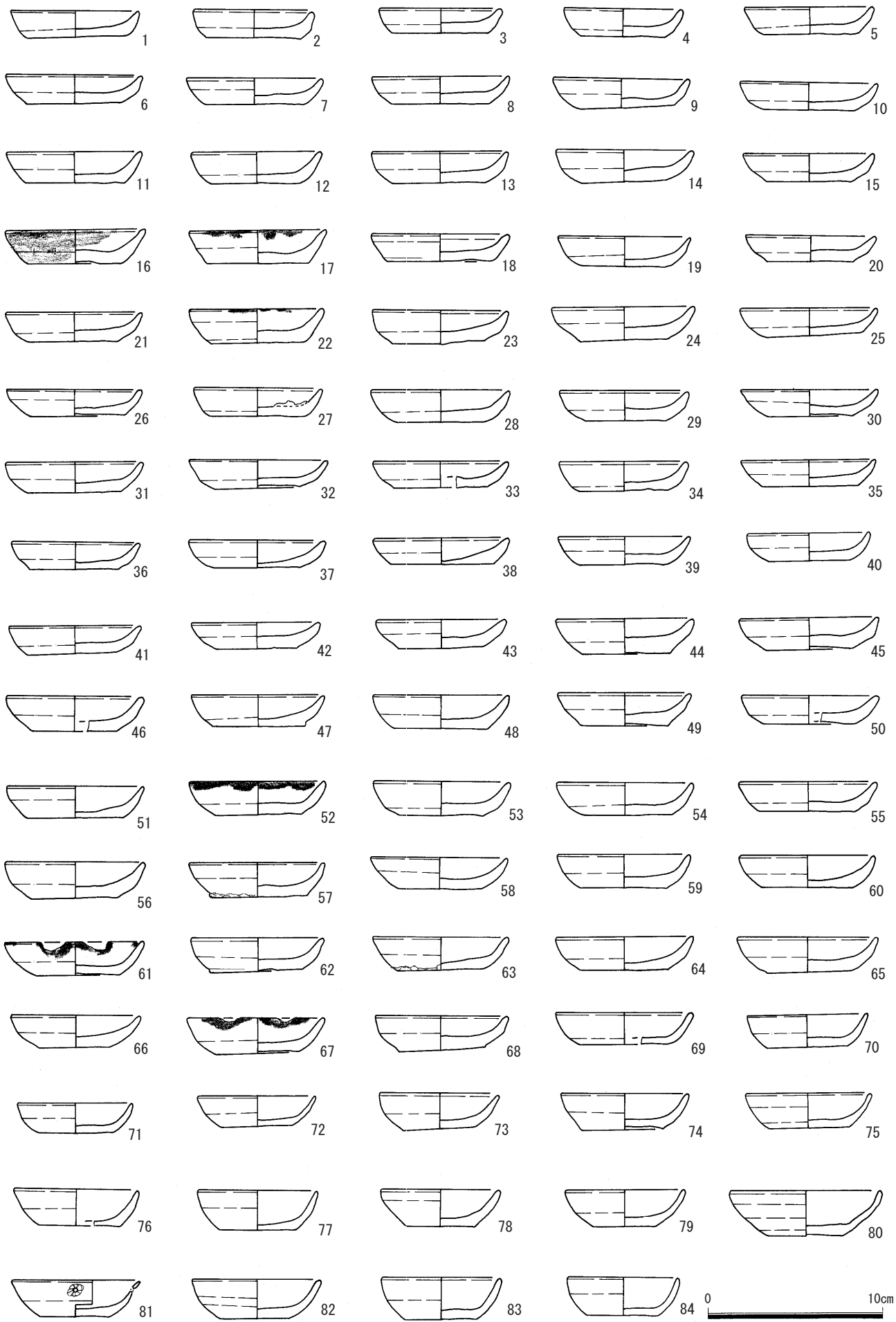


图 20 2面出土遺物 1

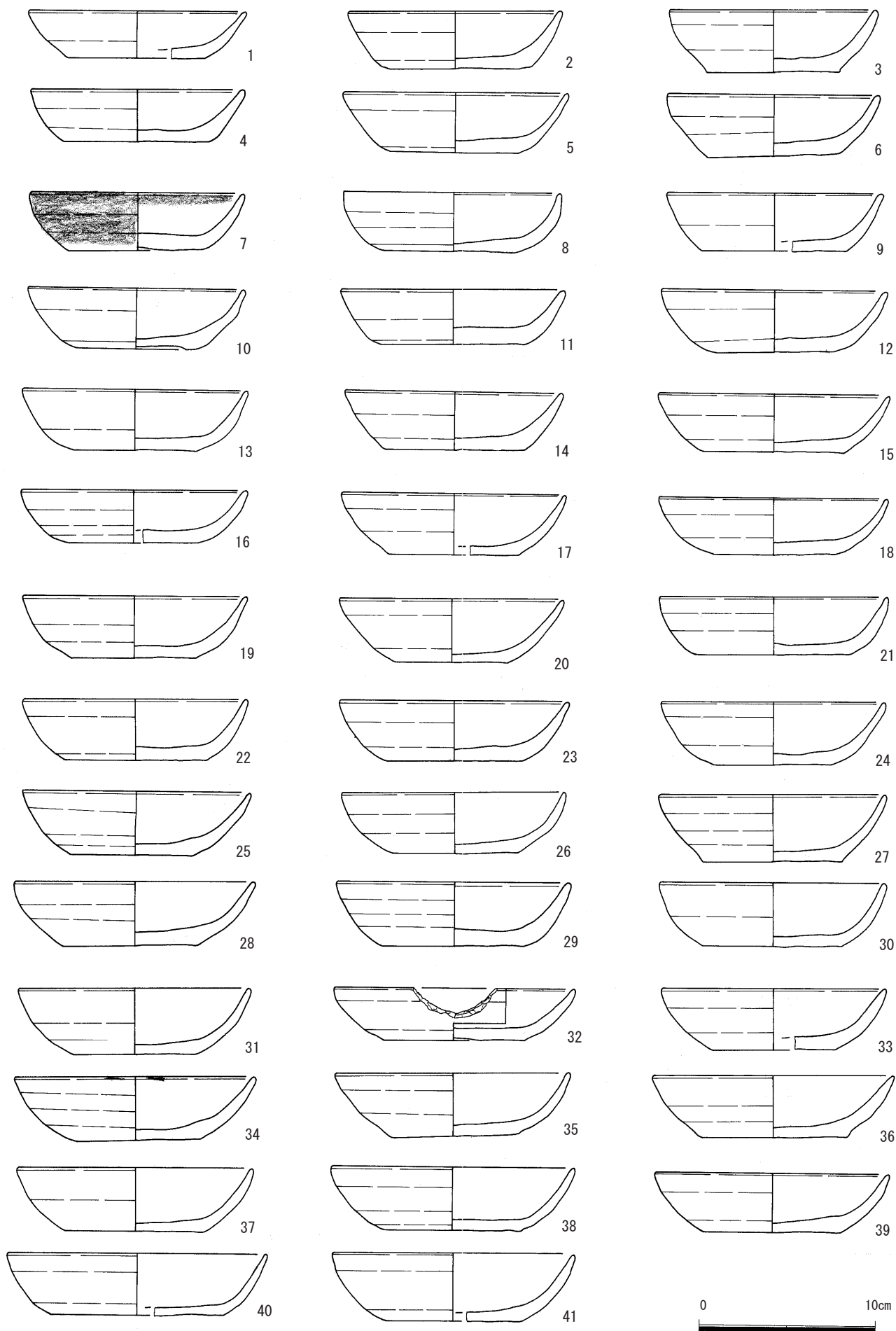


图 2 1 2 面出土遺物 2

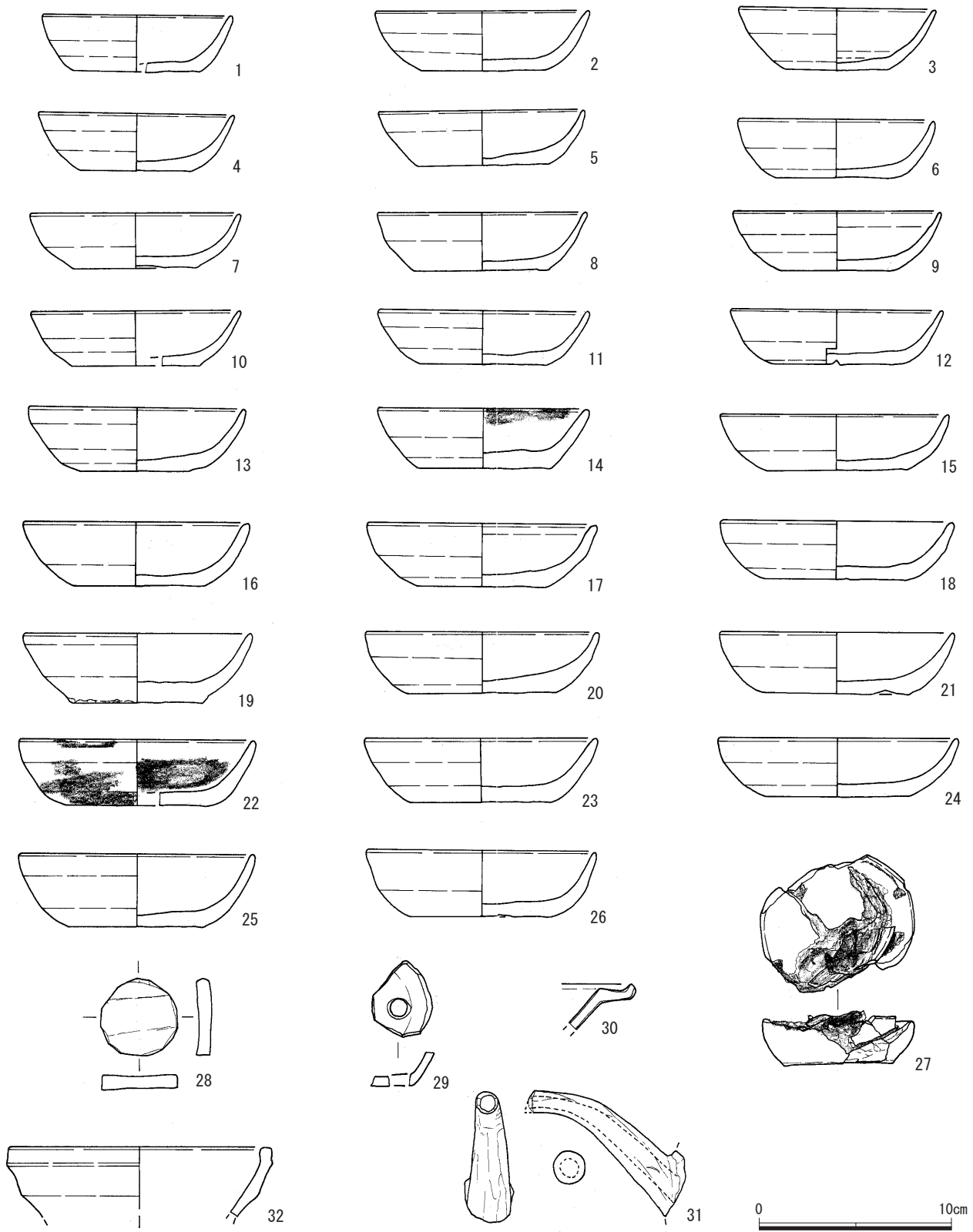


图 2 2 2 面出土遺物 3

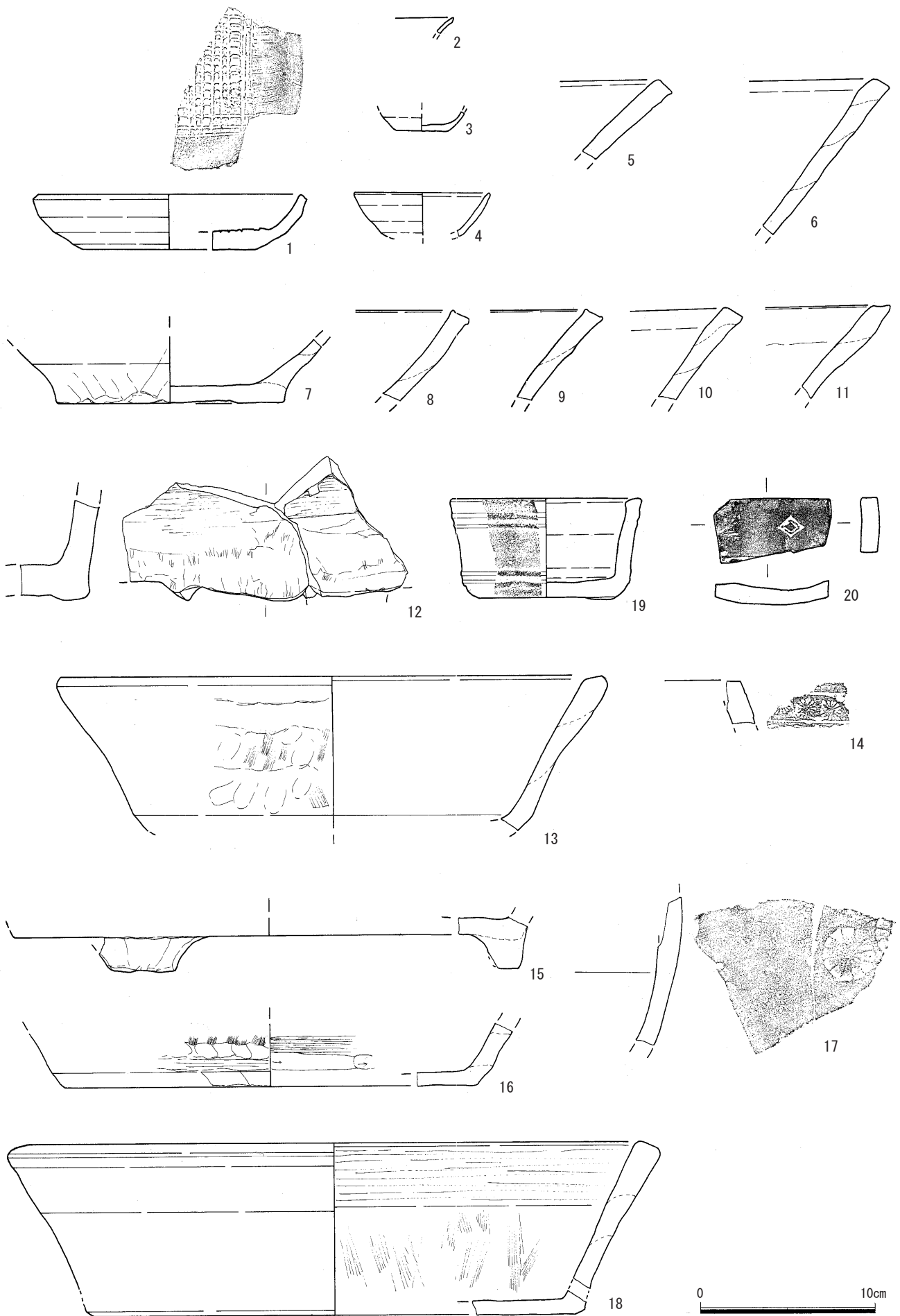


图 2 3 2 面出土遺物 4



图 2 4 2 面出土遺物 5

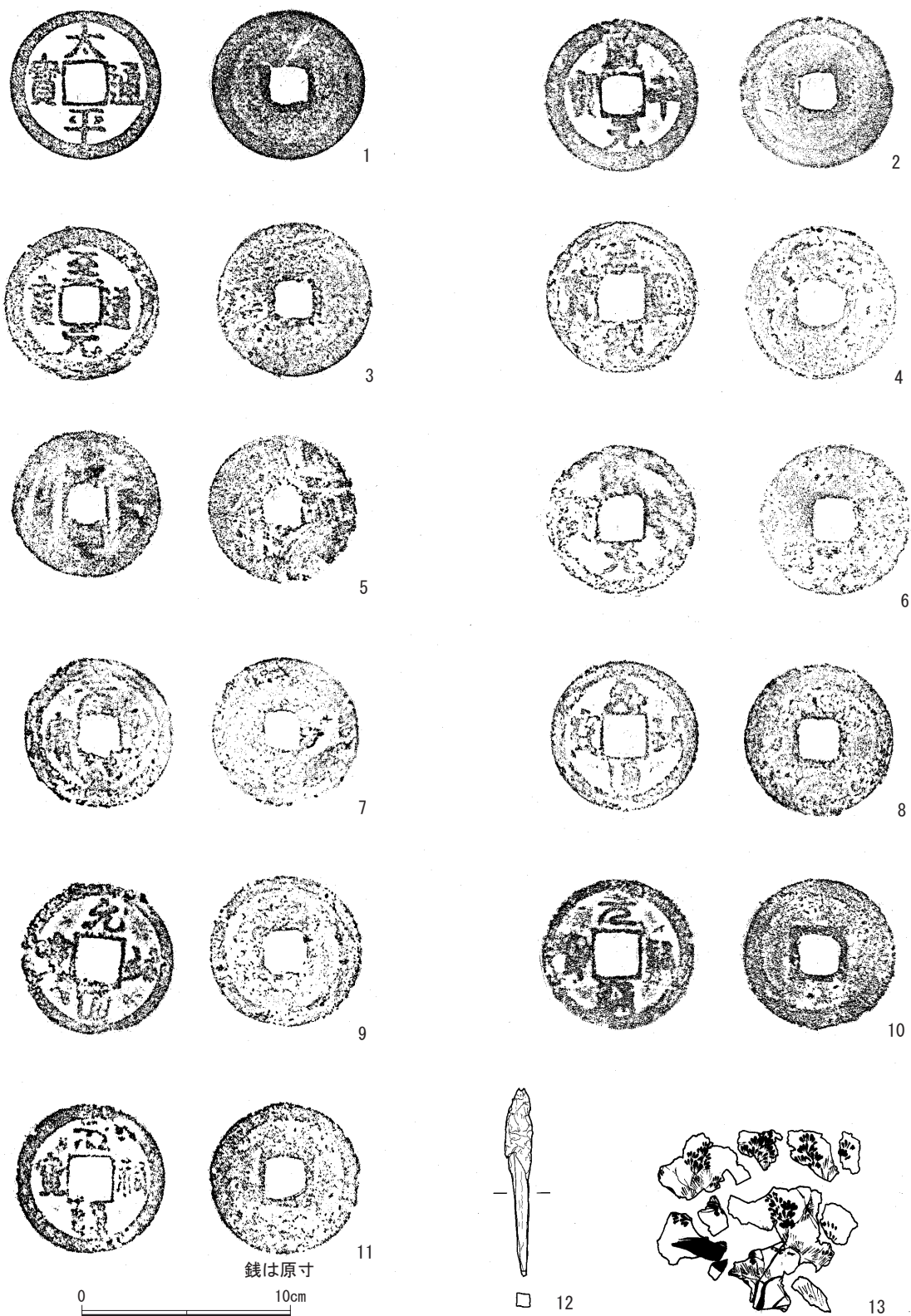


図 2 5 2 面出土遺物 6

第4面構成土中から、轆轤成形のかわらけに混じり、1点だけ手捏ね成形のかわらけが出土。龍泉窯青磁劃花文碗の碗や常滑の甕や片口鉢(I類)6a型式。渥美の片口鉢の他箸が多数出土。

第4面の時期は板壁建物の床面に張り付いていた常滑片口鉢などから、13世紀後半代と考えられる。

第5節 第5面の遺構と遺物 (図48・図49・図50 図版4・11)

地表から約1.8m下の第11層、土丹地業面(海拔約11.6~11.7m)を第5面とした。

柱穴43穴、土壇3、東西方向に延びる溝を4条検出した。I区で検出した柱穴は、溝に沿って東西方向に2m間隔で2間並ぶ。南北方向には延びないので、柵列になると思われる。この柵列の柱穴47から、かわらけと青磁鎬蓮弁文碗が2点出土している。

第5面構成土中から、かわらけ、常滑片口鉢(I類)、手捏ね成形の瓦質碗の他に、須恵器長頸壺の小片が出土している。

5面の時期は13世紀中~後半にかけてか。

第6節 第6面の遺構と遺物 (図51・図50・図52~図55 図版5・12)

地表から約2.1m下の第13層(海拔約11.4m)を第6面とした。灰褐色砂層(貝混じりの砂)で、1~5面を構成している土丹地業面とは趣が異なり砂が敷かれている。遺構は柱穴36穴と土壇2穴を検出した。柱穴は東西方向に規則性が見いだせそうだが、建物にはならない。土壇24は、I区・2区に跨り、暗褐色腐植土のみの単層で、藁や木器の腐植土が大半でゴミ穴と思われる。規模は幅1.4m、長さ4.5m、深さ35cmである。轆轤成形のかわらけ、渥美片口鉢、常滑片口鉢(I類)、男瓦、折敷、荷札(墨書は不明)等が出土。渥美鉢は12世紀末~13世紀初頭、常滑鉢は5型式(13世紀中葉)。

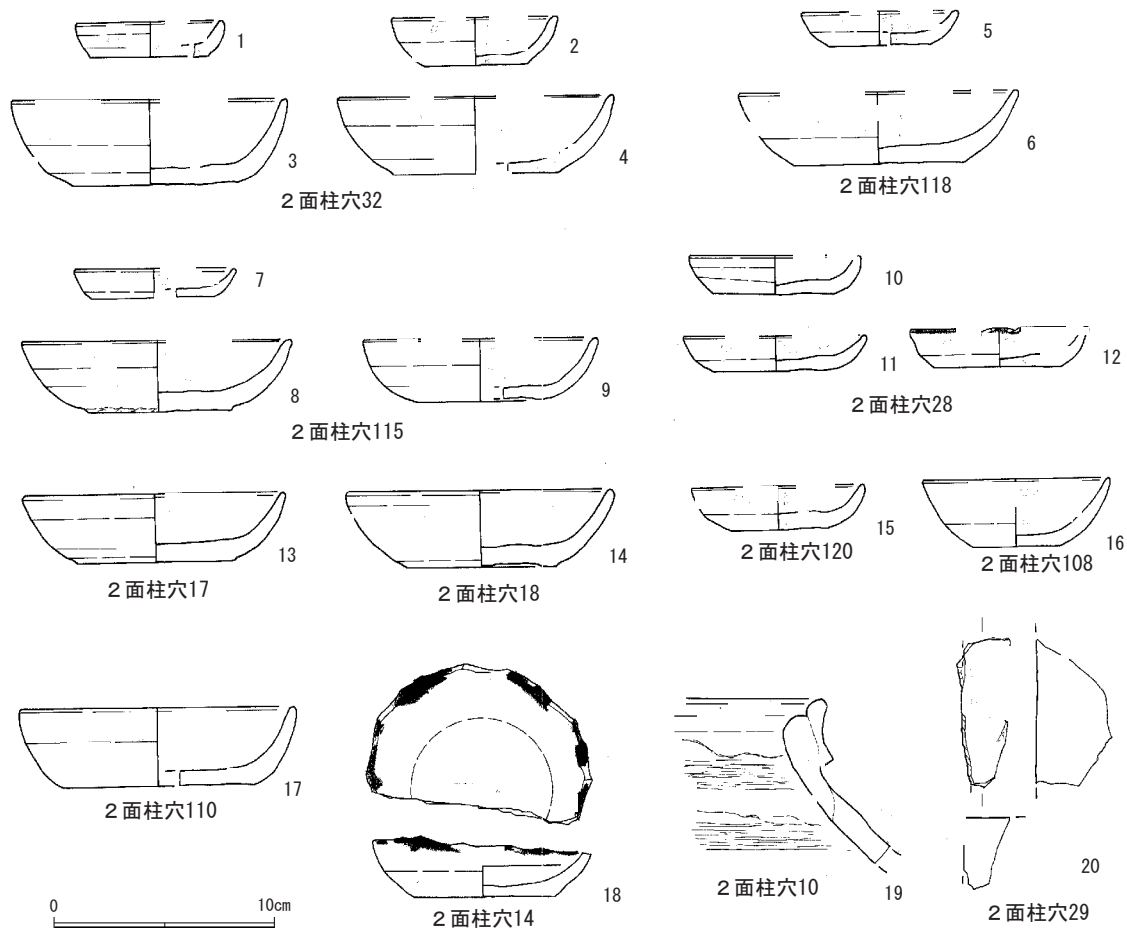


図26 2面遺構出土遺物

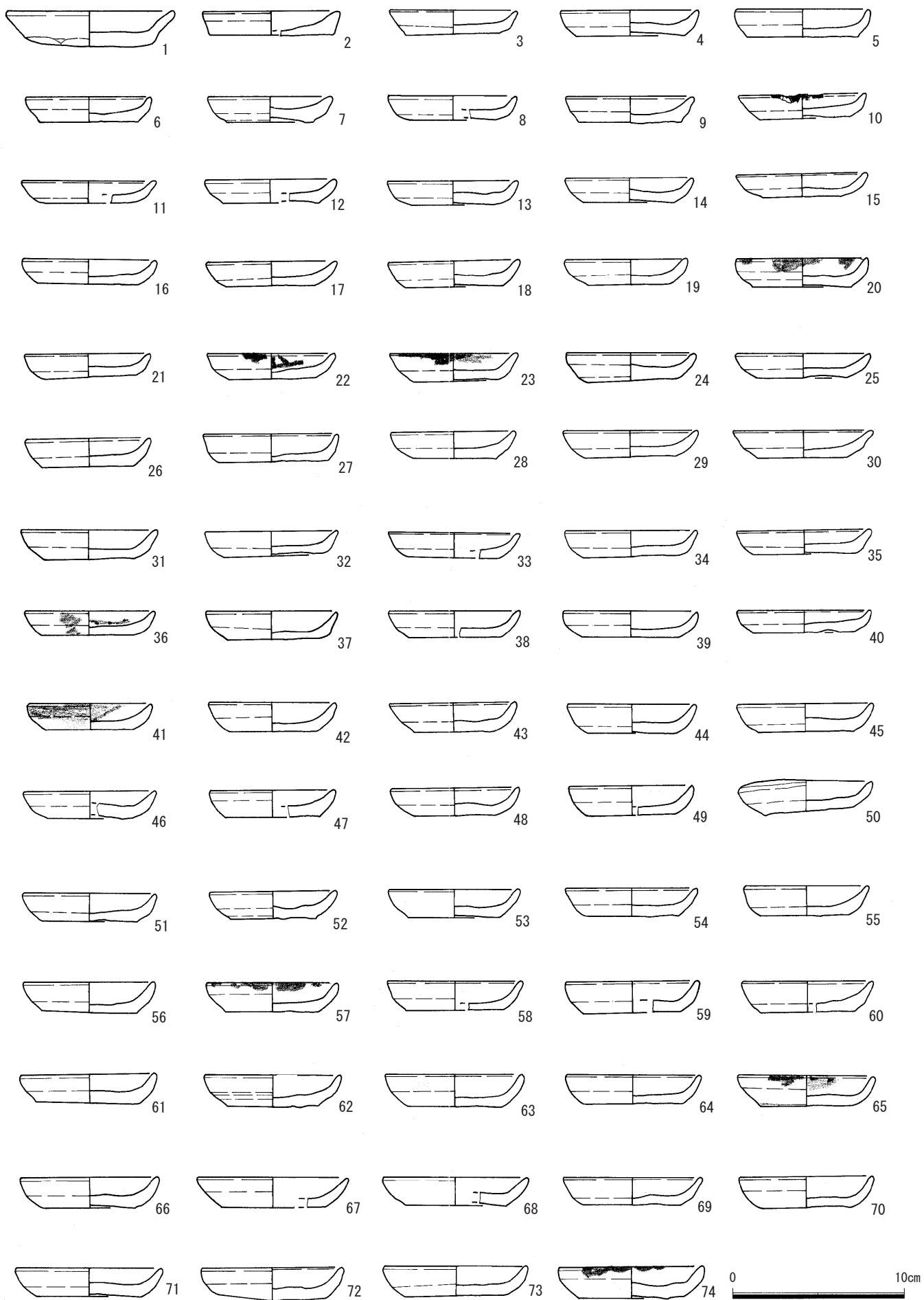


图 2 7 2 面構成土出土遺物 1

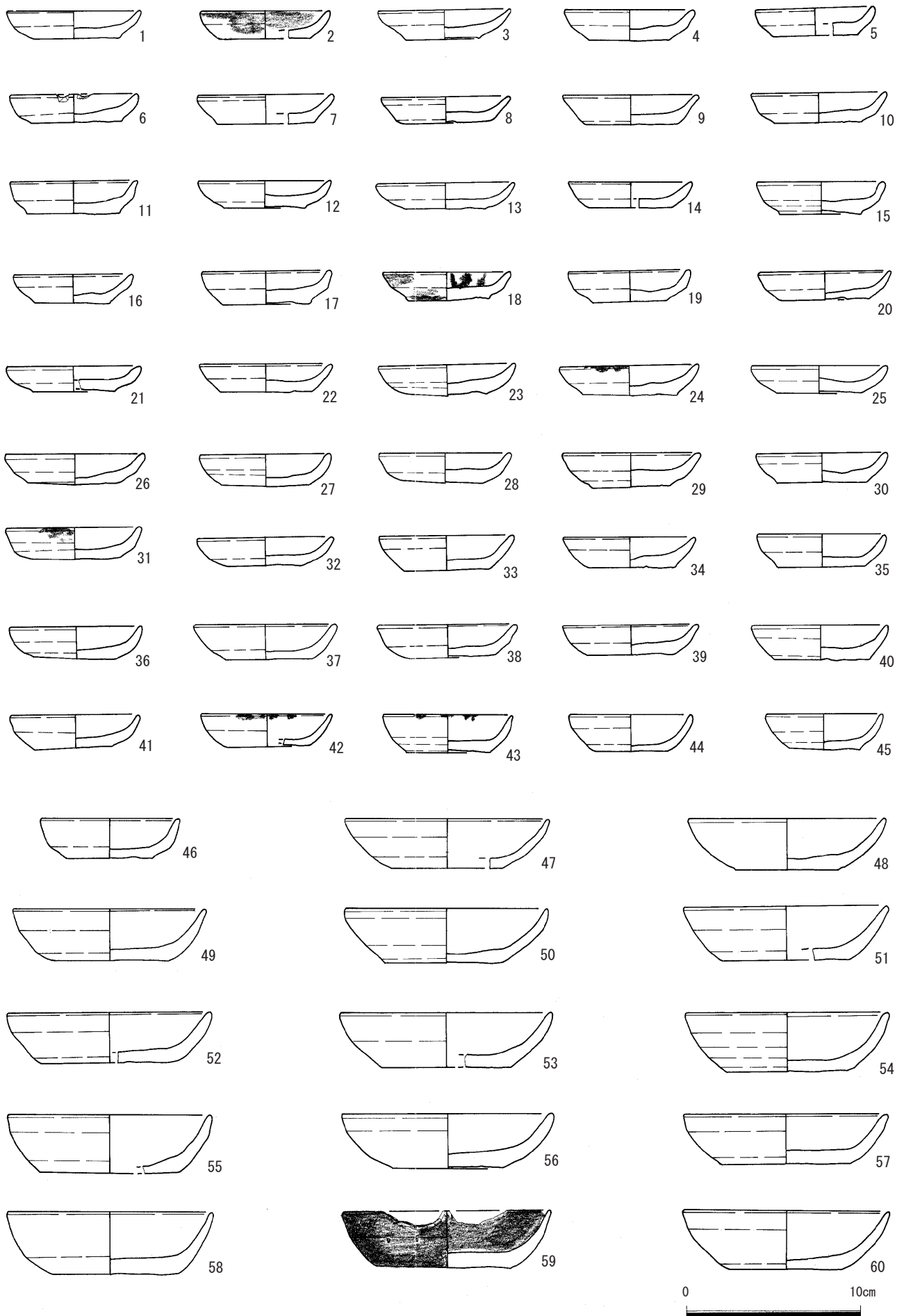


图 28 2面構成土出土遺物 2

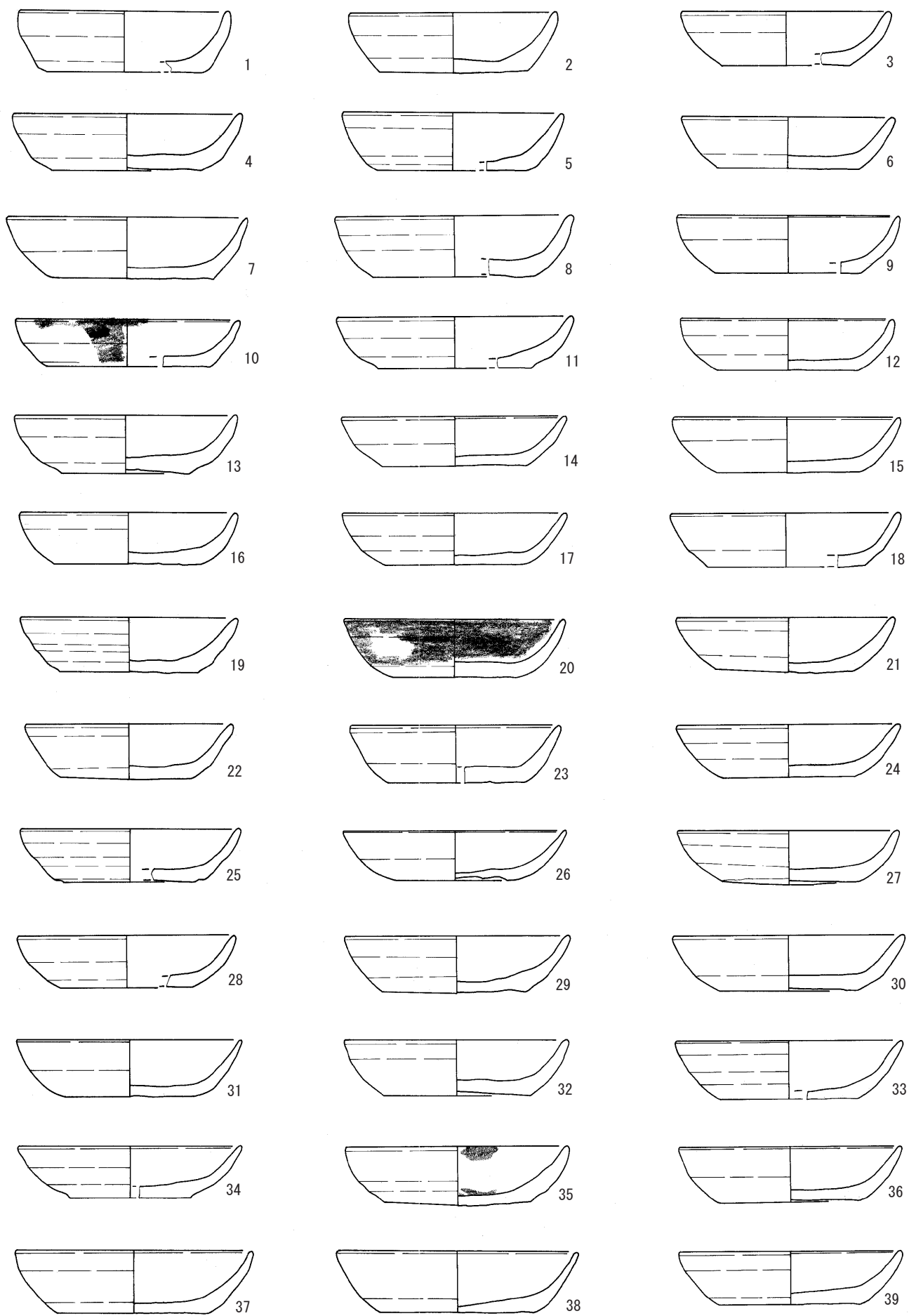


图 29 2面構成土出土遺物 3

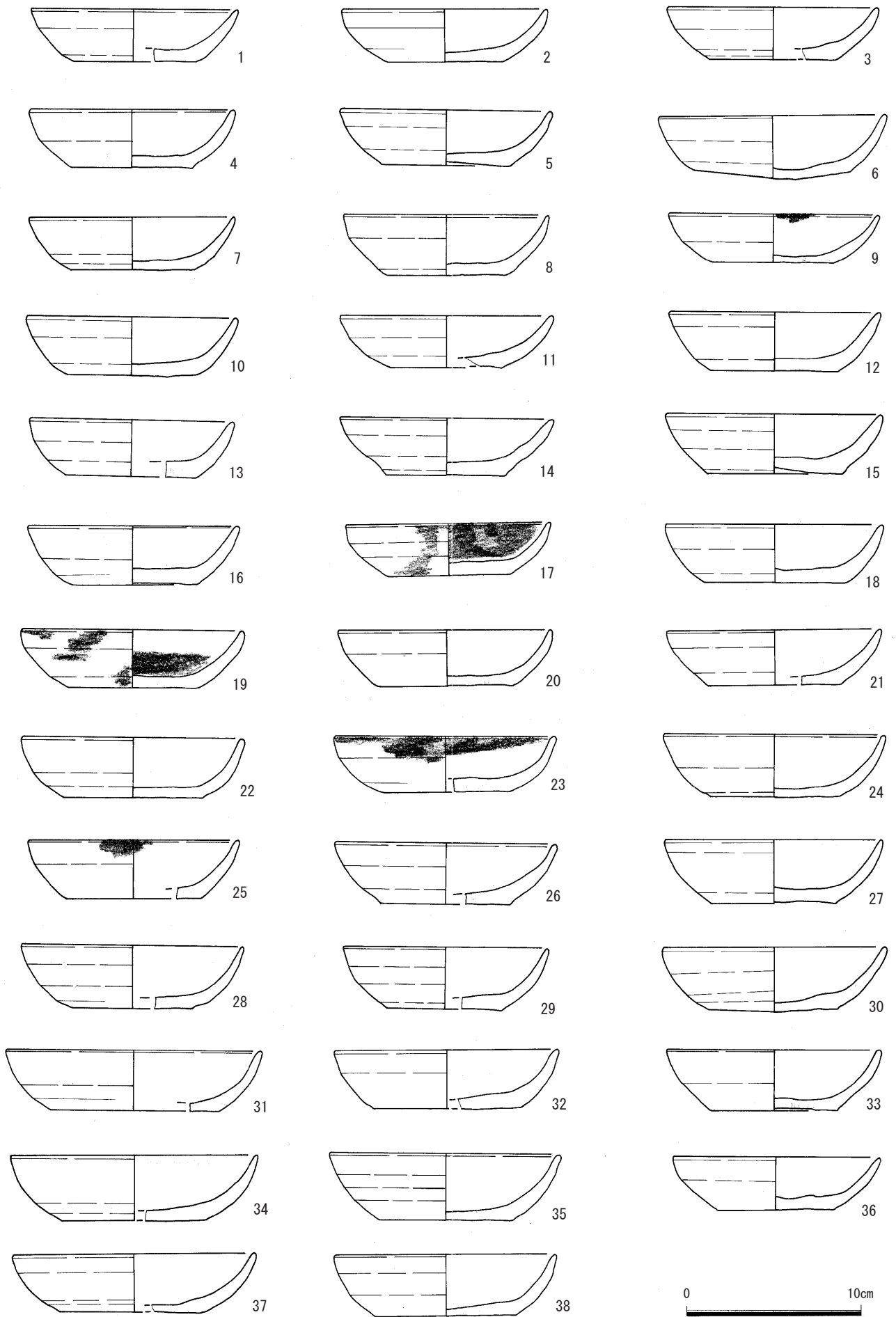


图 30 2面構成土出土遺物 4

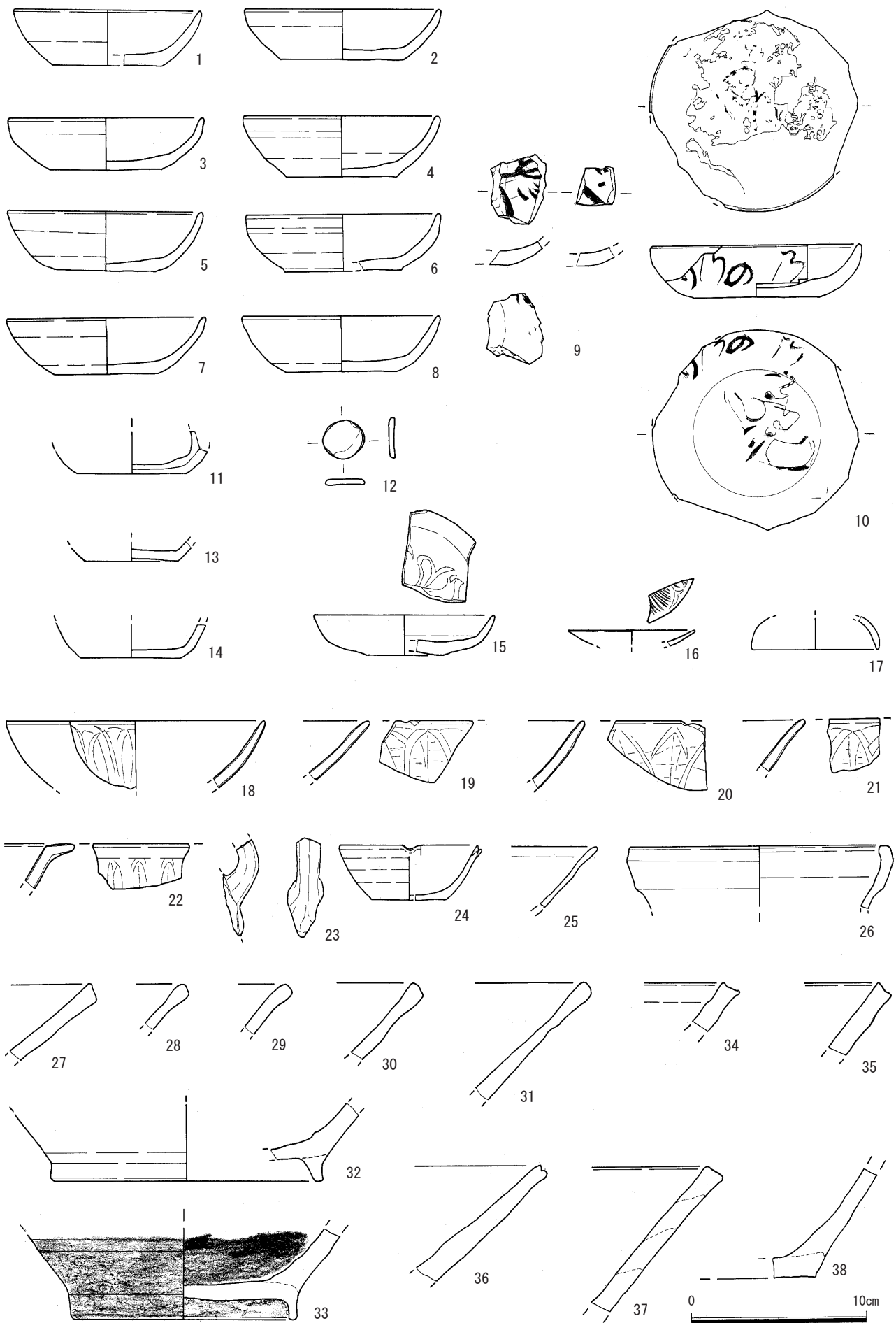


图 3 1 2 面構成土出土遺物 5

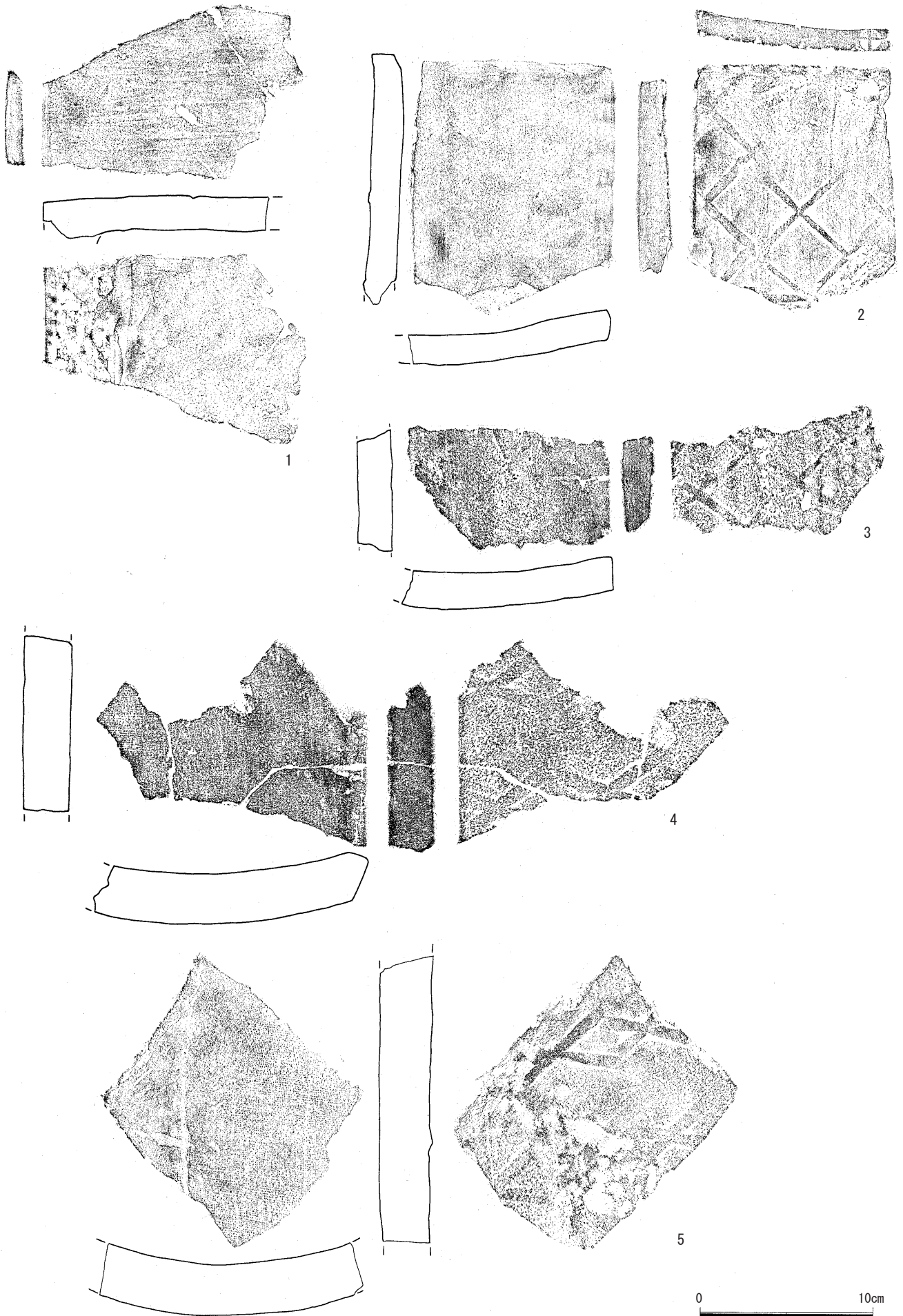
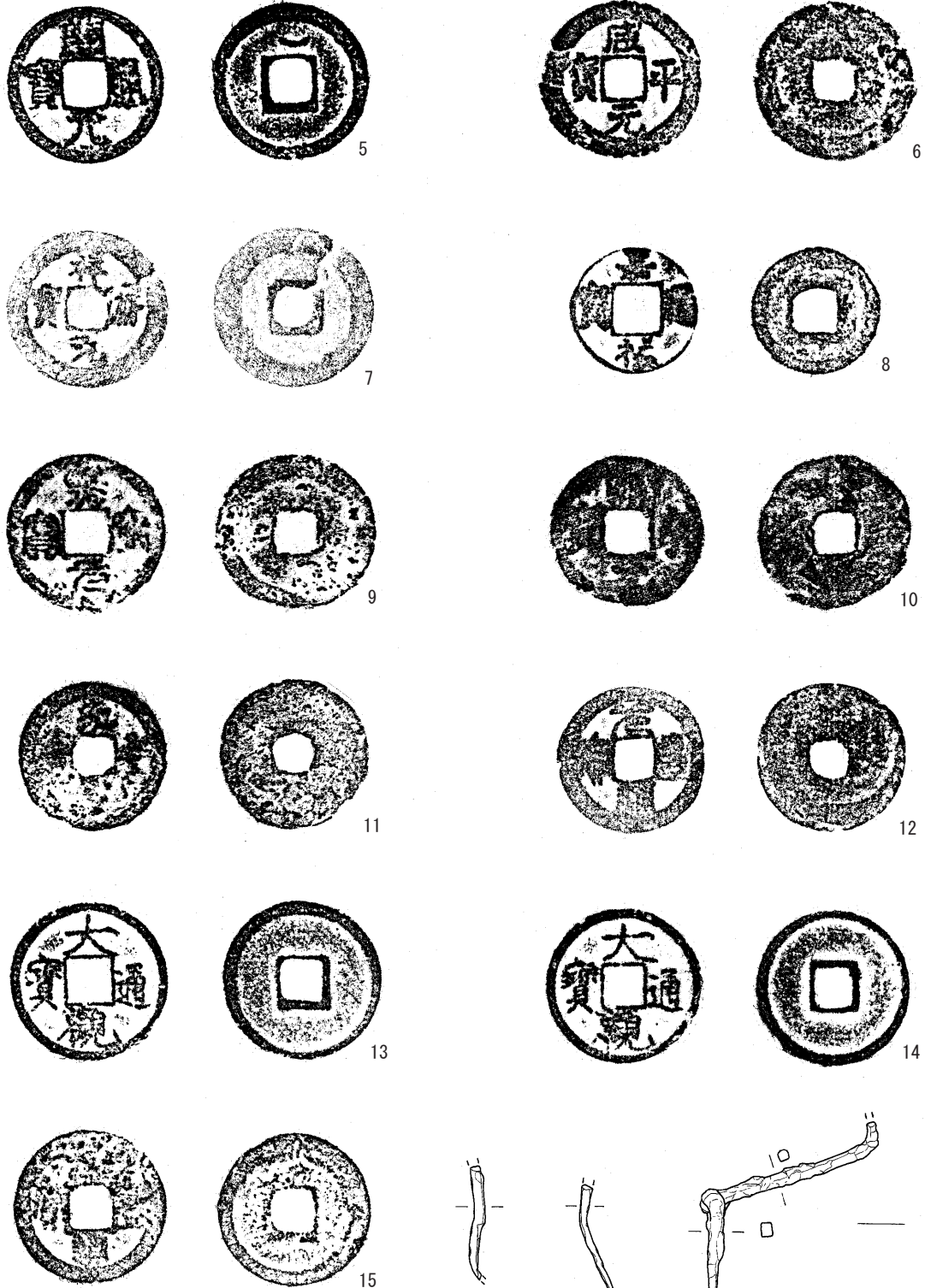
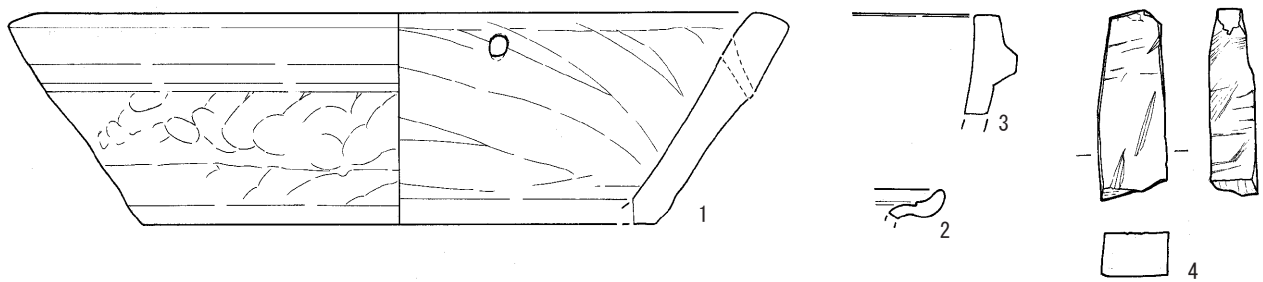


图 3 2 2 面構成土出土遺物 6



錢は原寸

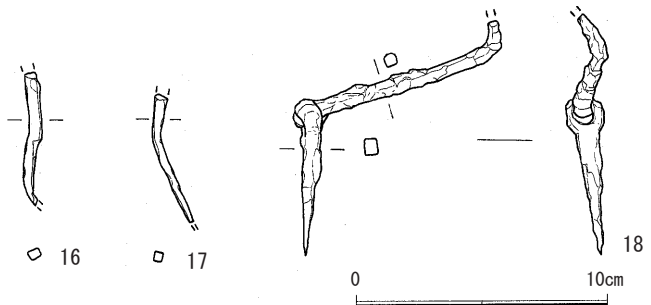


図 3 3 2面構成土出土遺物 7

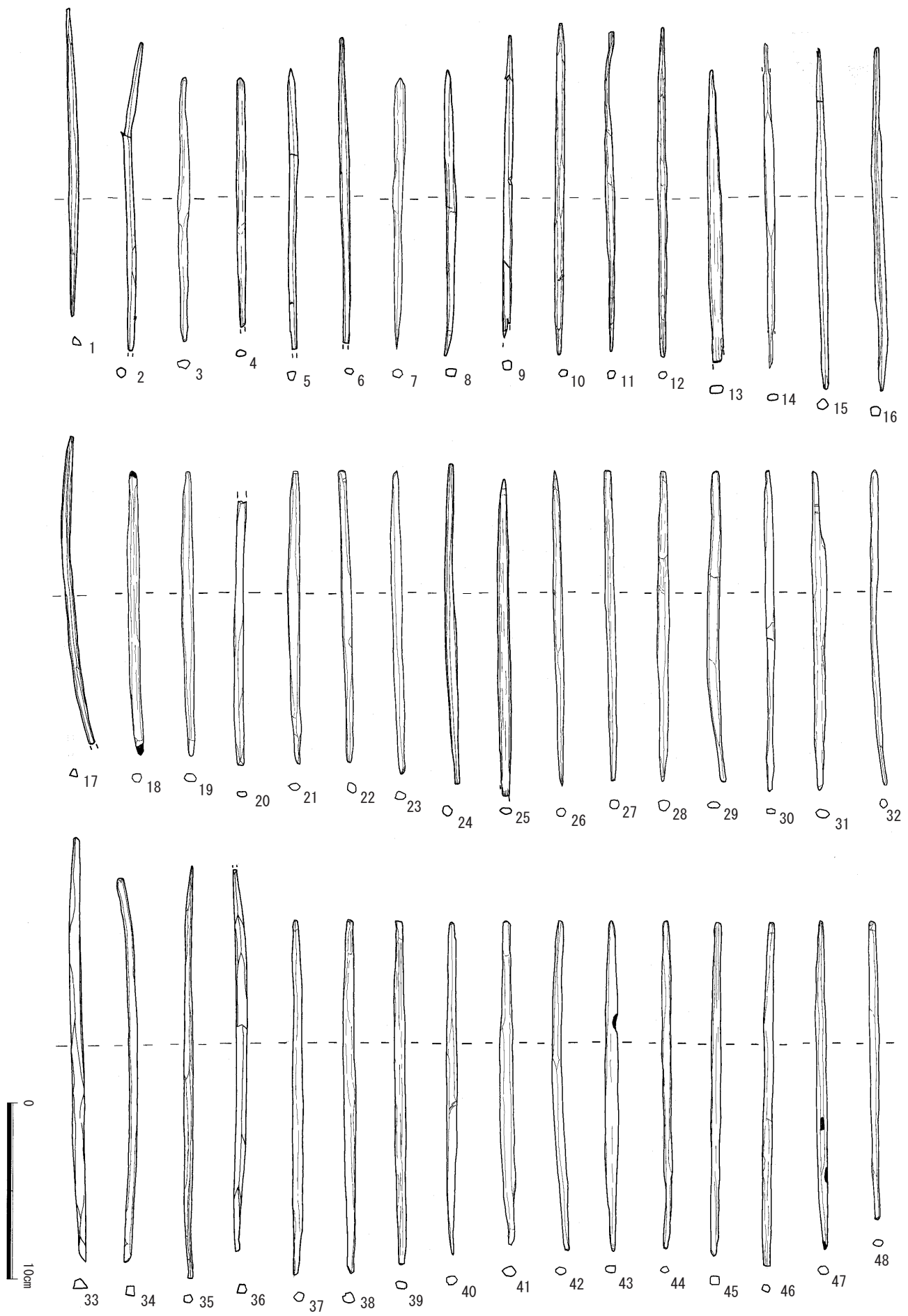


图 3 4 2 面構成土出土遺物 8

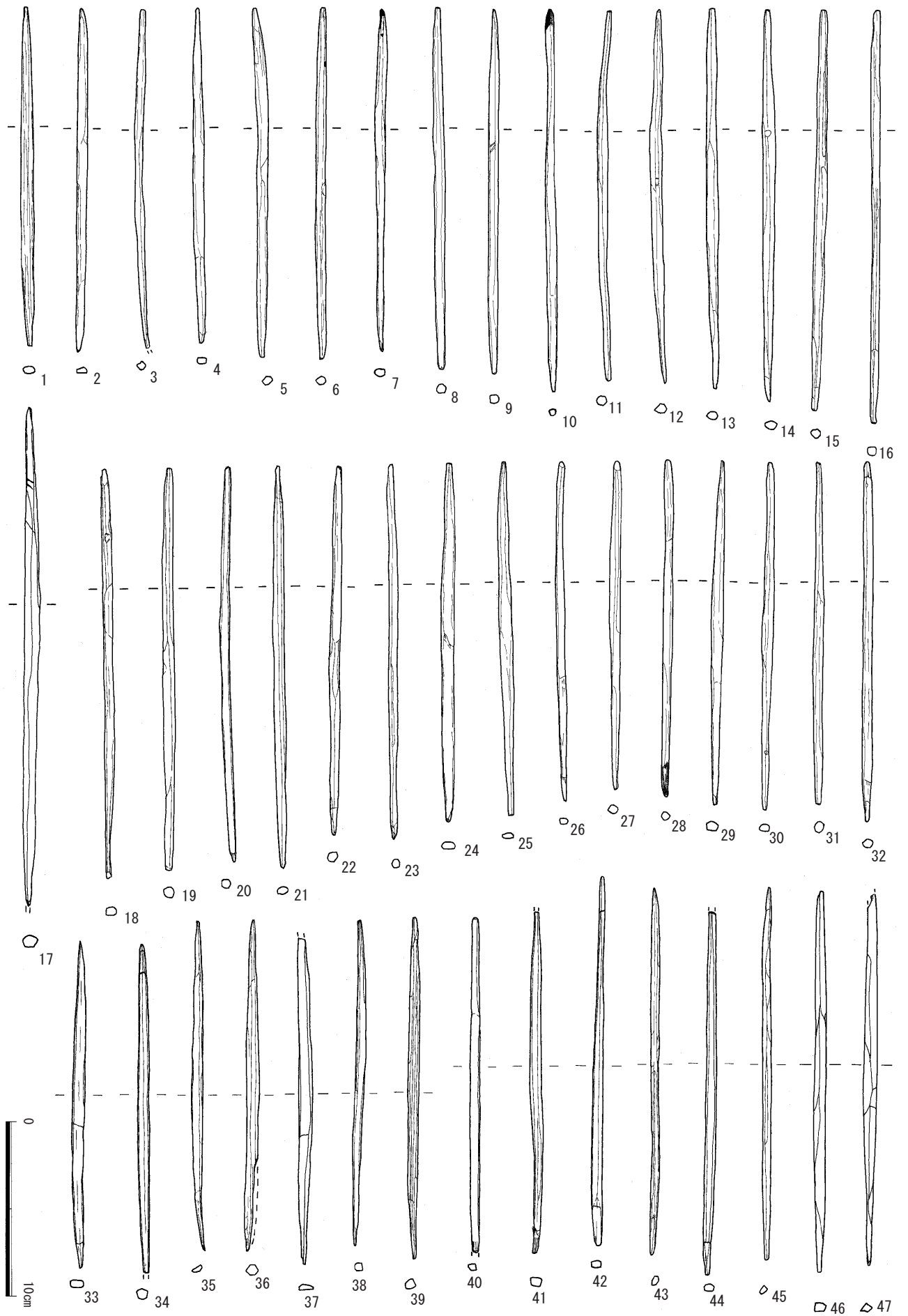


图 3 5 2 面構成土出土遺物 9

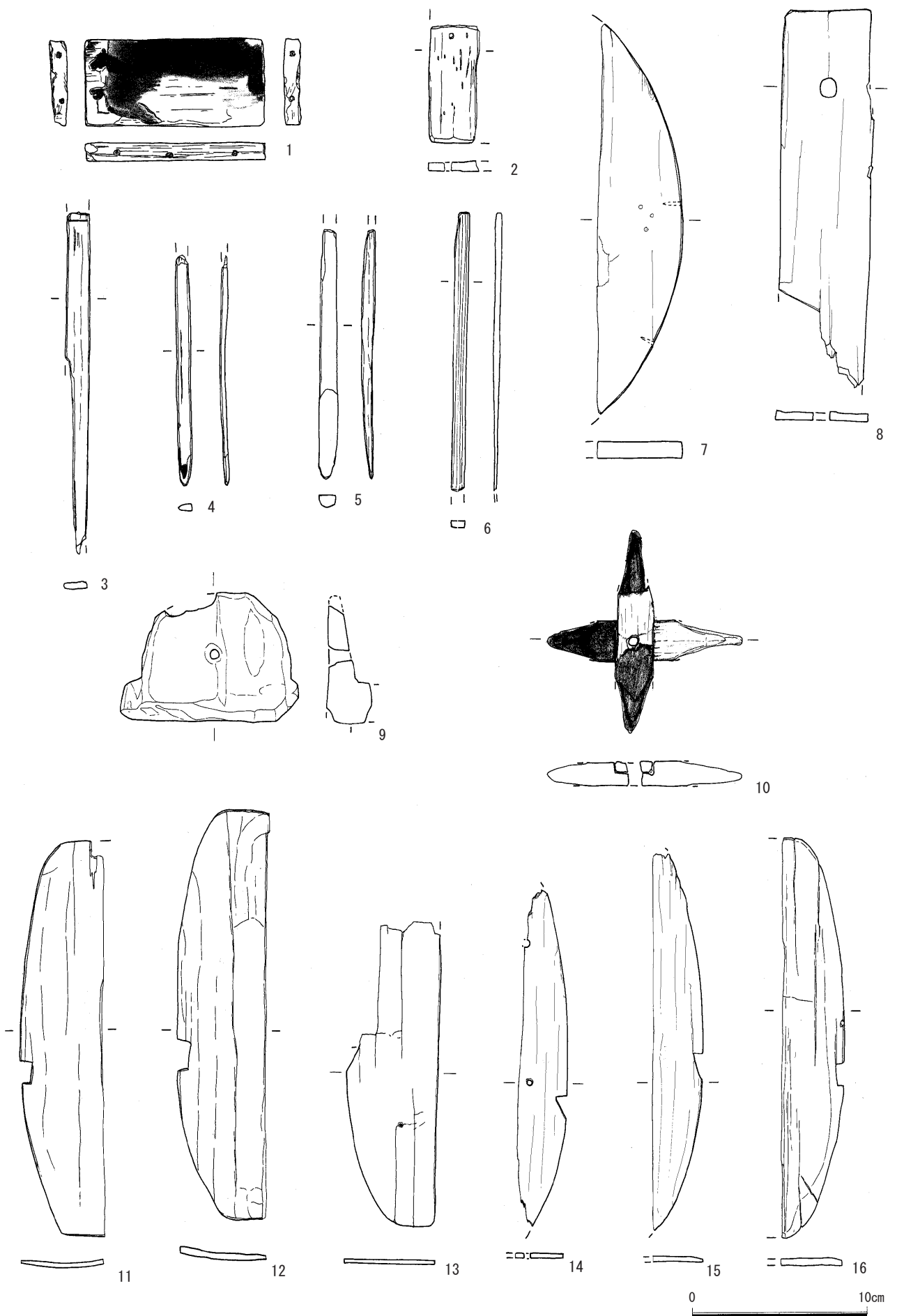


图 3 6 2面構成土出土遺物 10

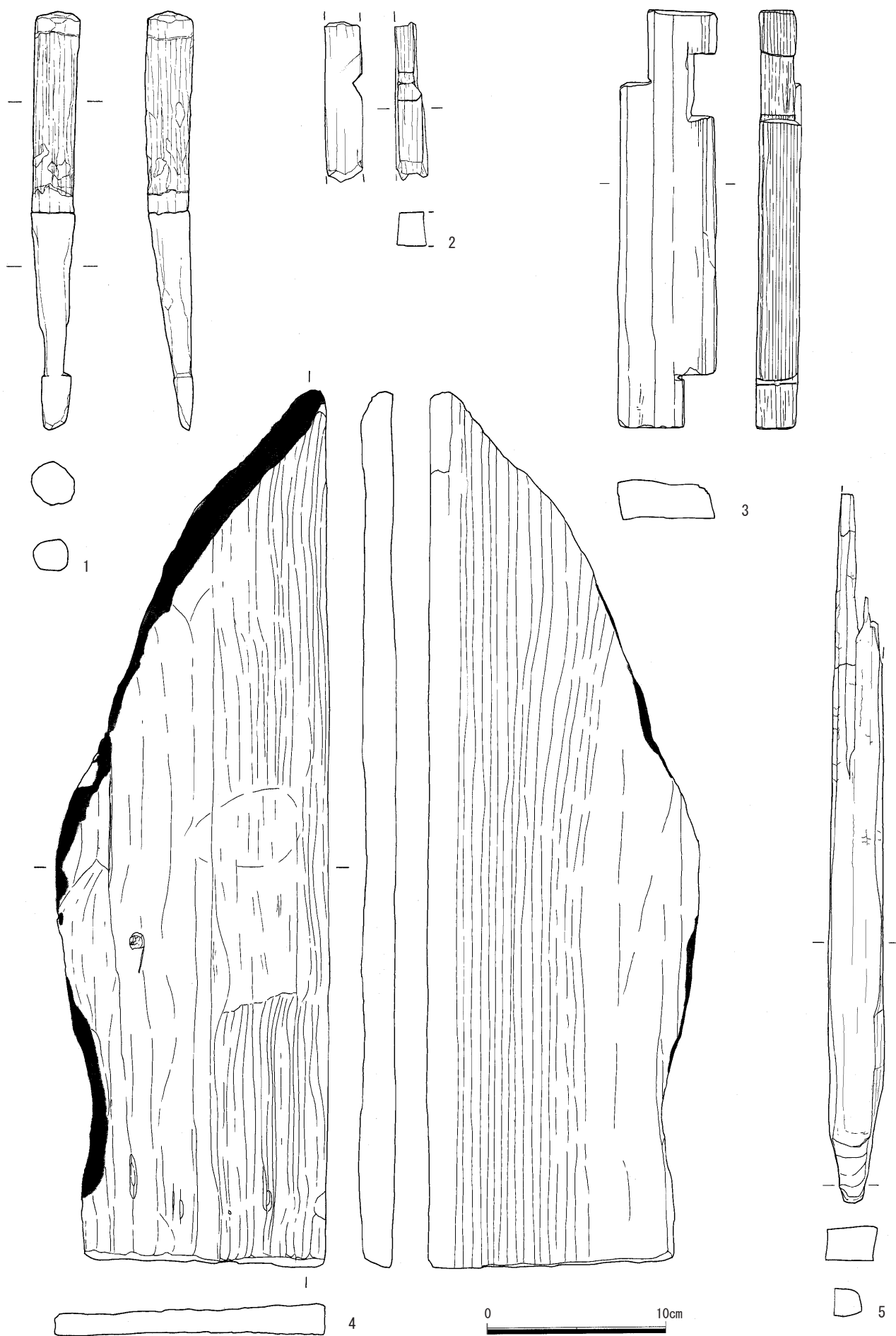


图 3 7 2面構成土出土遺物 1 1

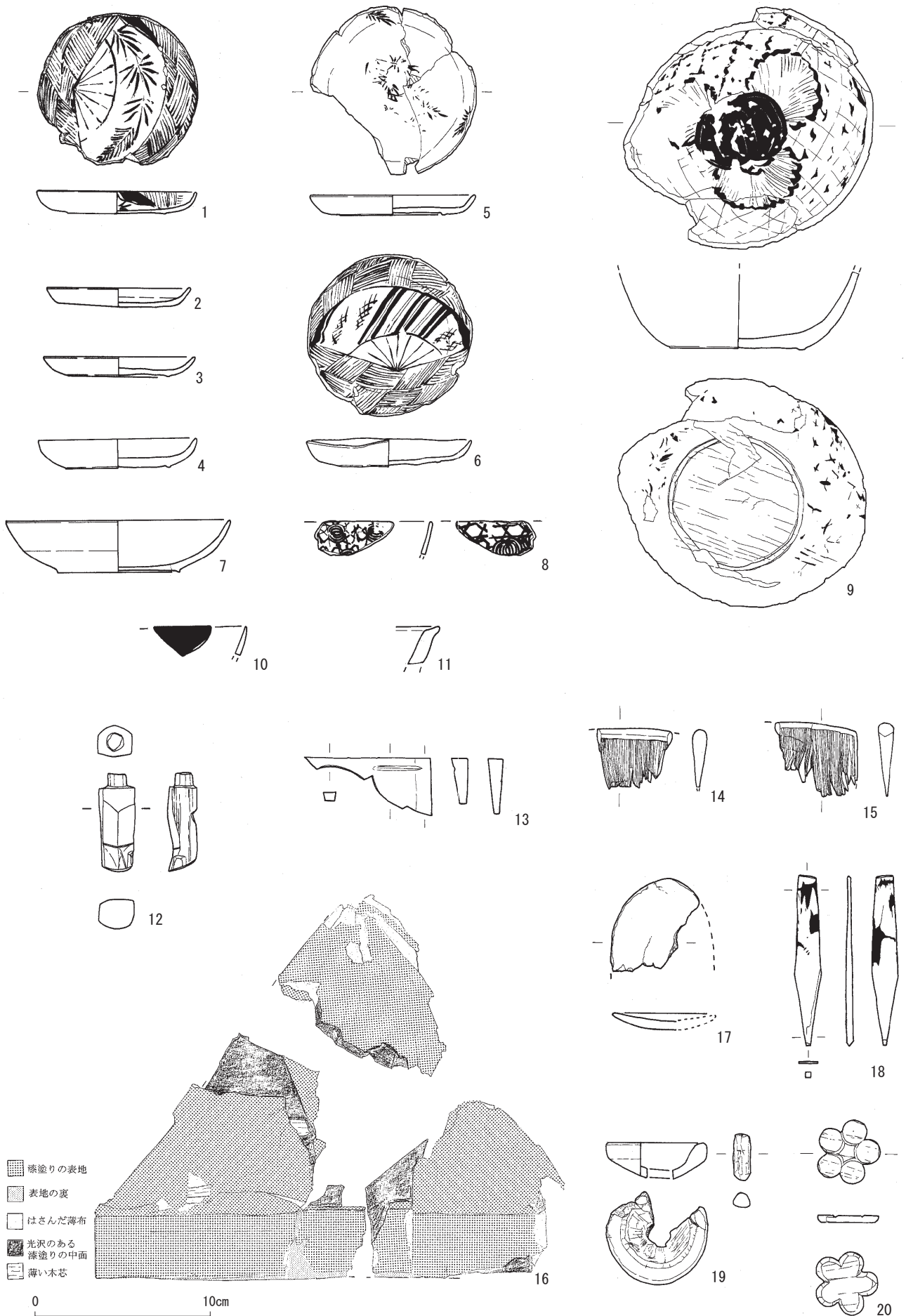
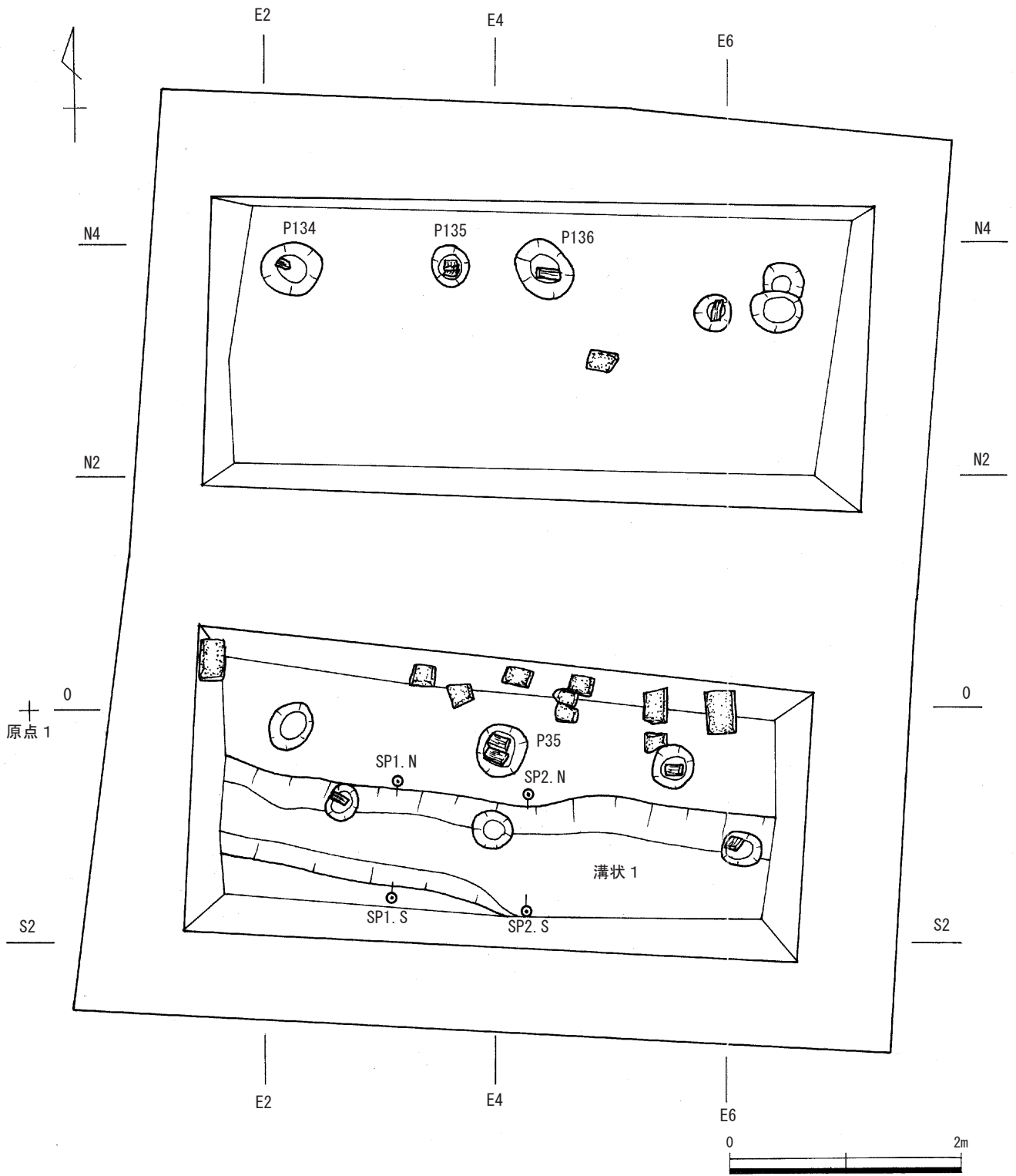


図38 2面構成土出土遺物12



SP1. S

SP1. N
—○ 12.20m

I区3面 溝状1

①暗褐色粘質土

1.5cm大の土丹粒、かわらけ片
木片含む。

SP2. S

SP2. N
—○ 12.20m

0 0.5m

図39 3面全側図

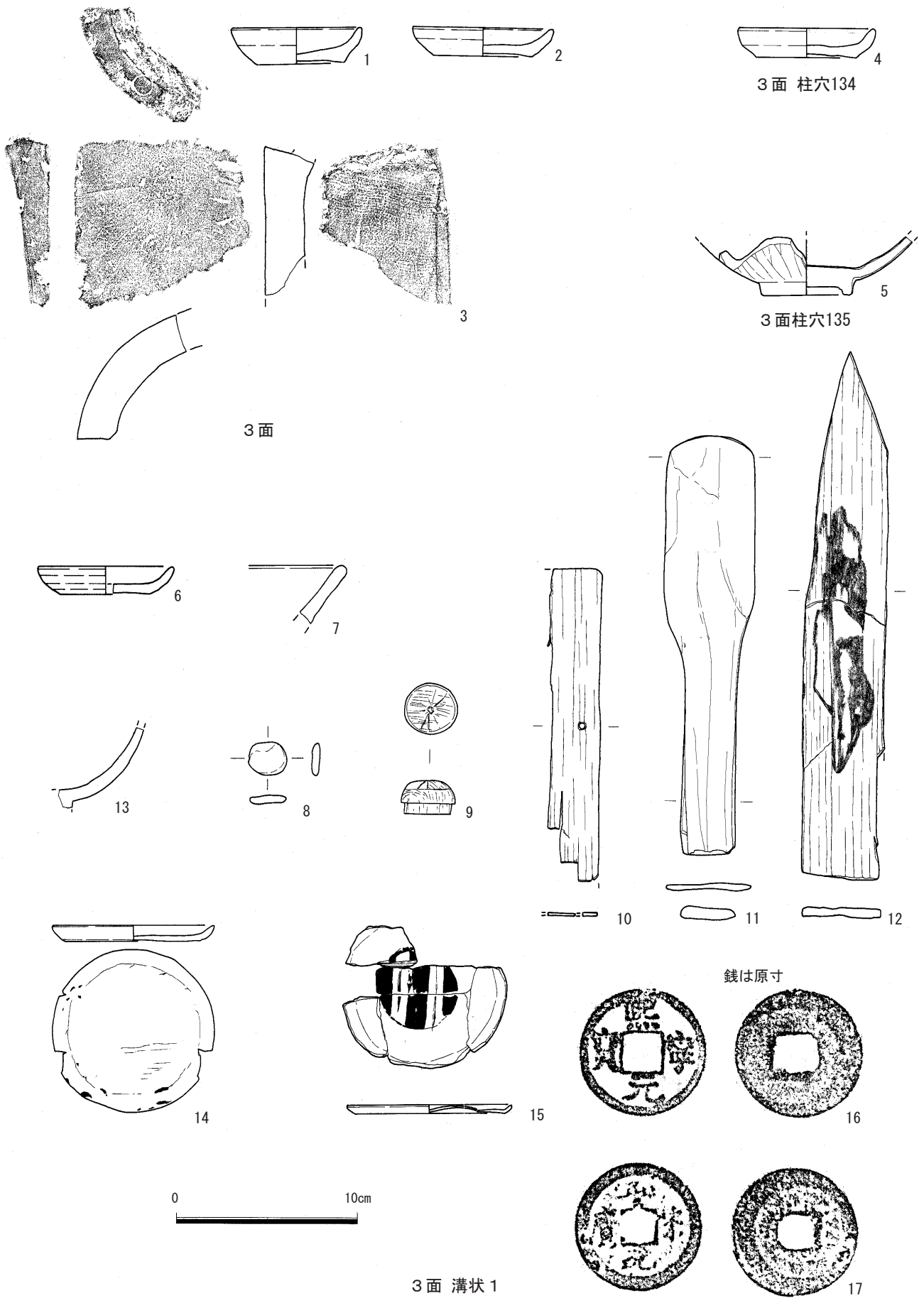


图40 3面・3面遺構出土遺物

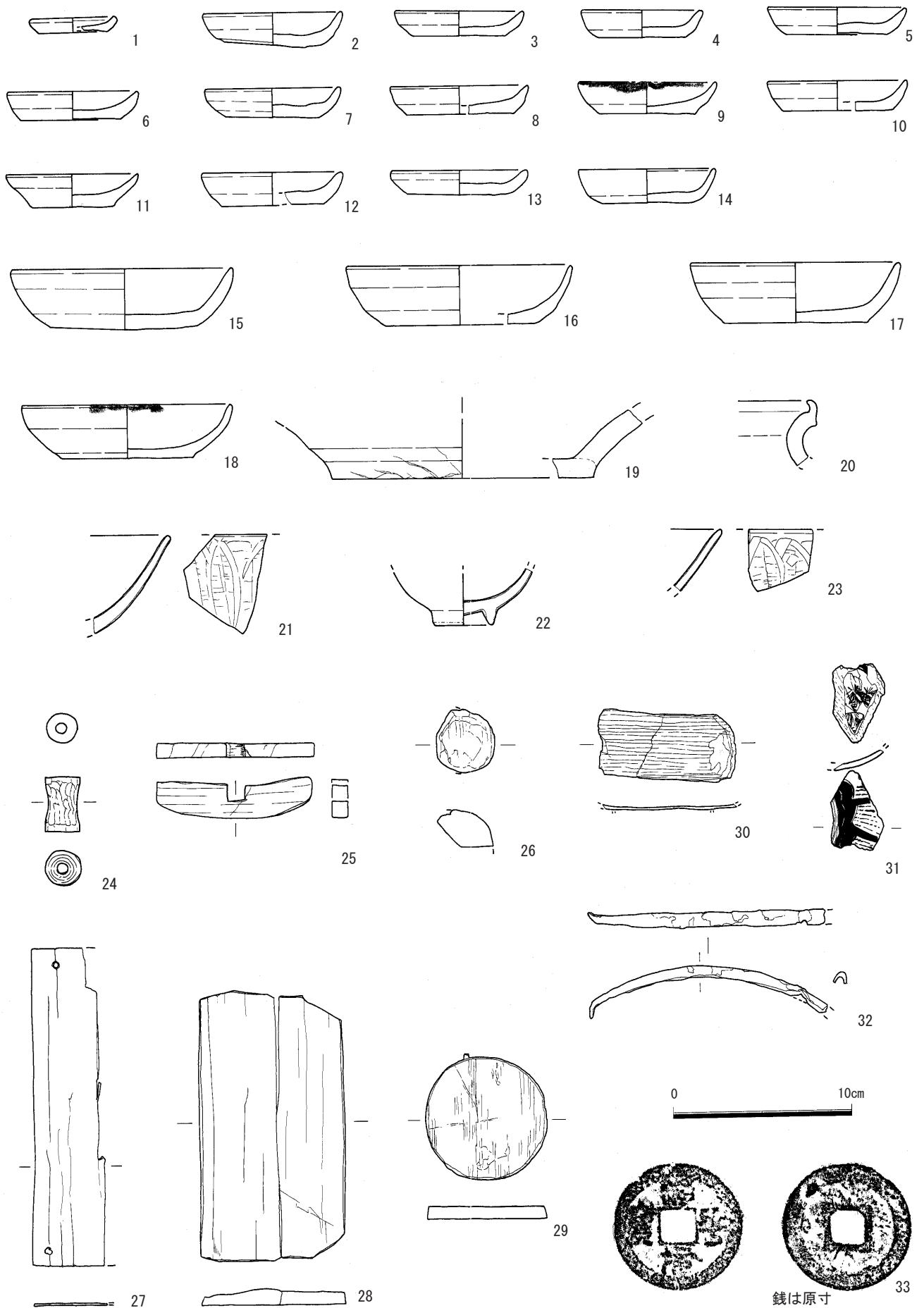


图 4 1 3面構成土出土遺物

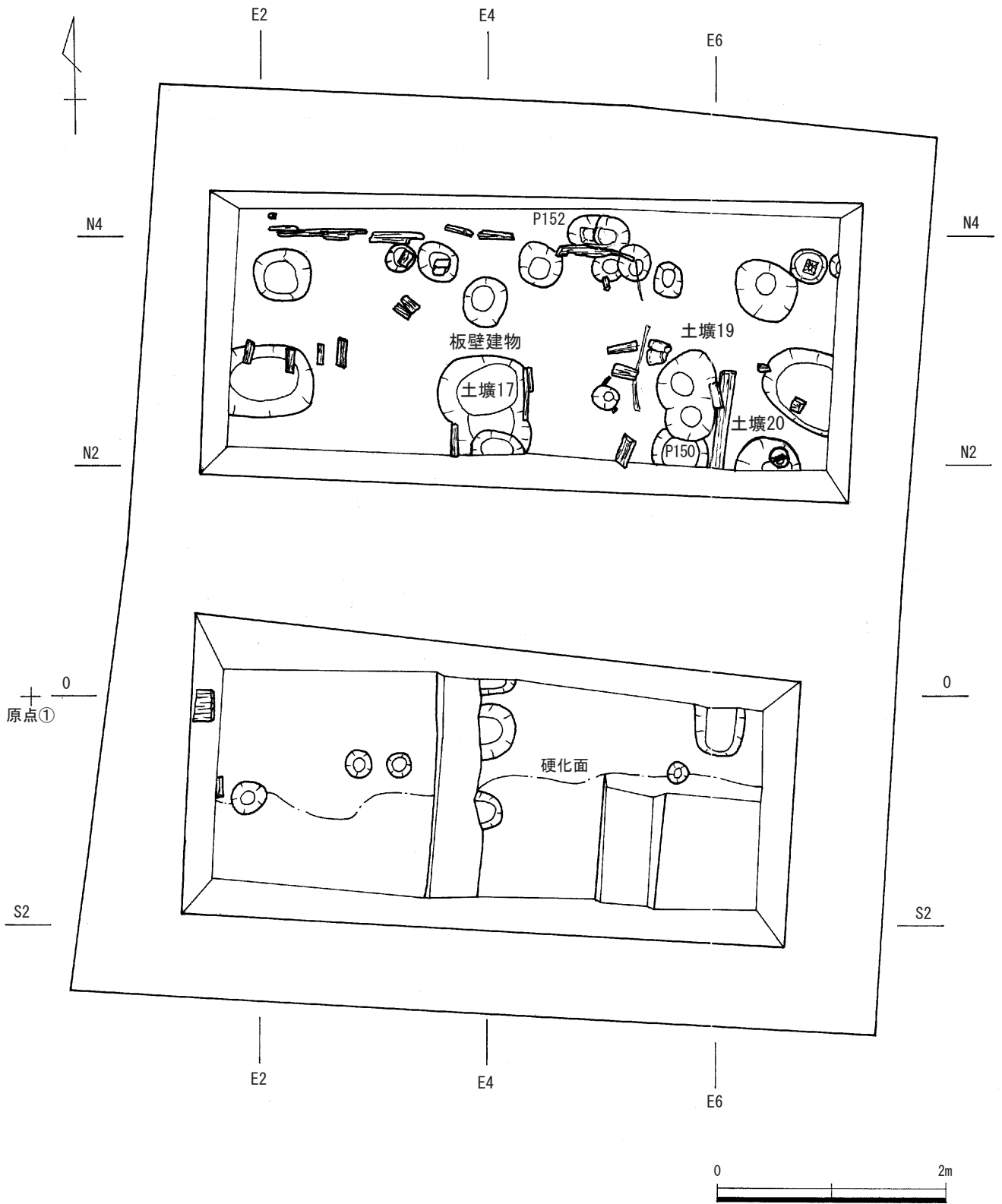
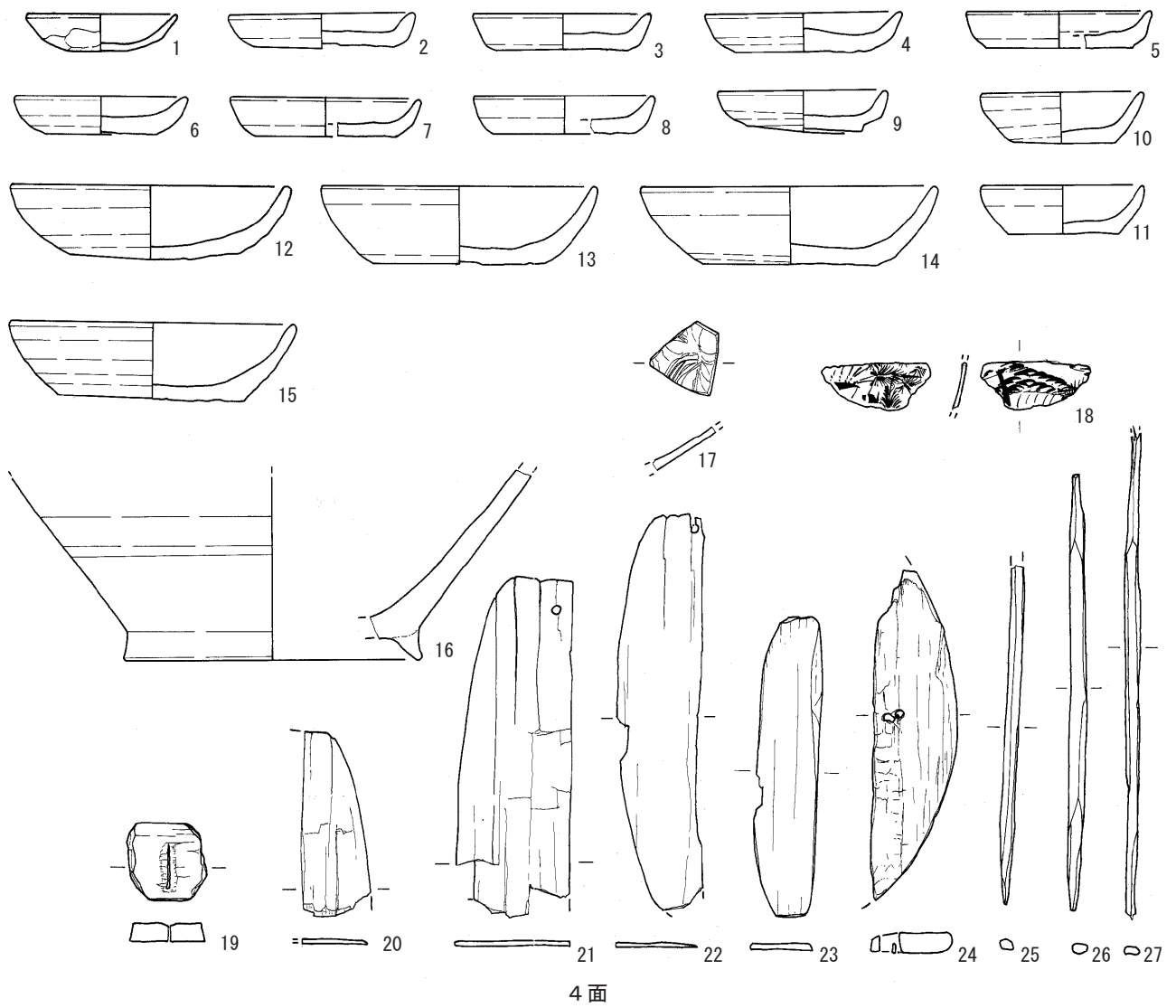
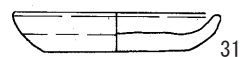
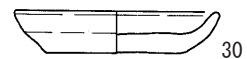
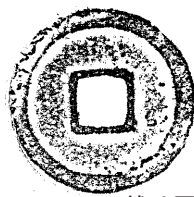
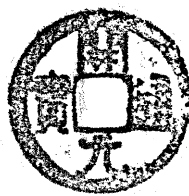
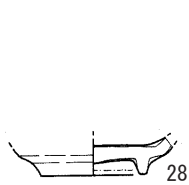


图 4 2 4 面全侧图



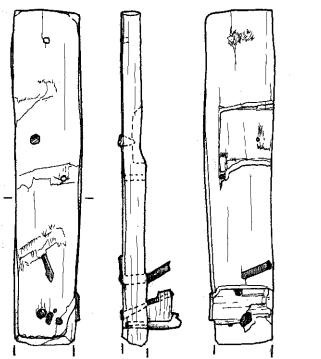
4面



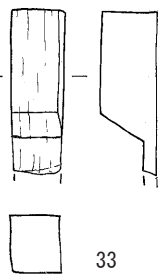
4面 柱穴150

銭は原寸

4面 柱穴152



32 4面 土壙19

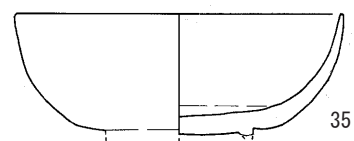


33



34

4面 土壙17



35

4面 土壙20



图43 4面・4面遺構出土遺物

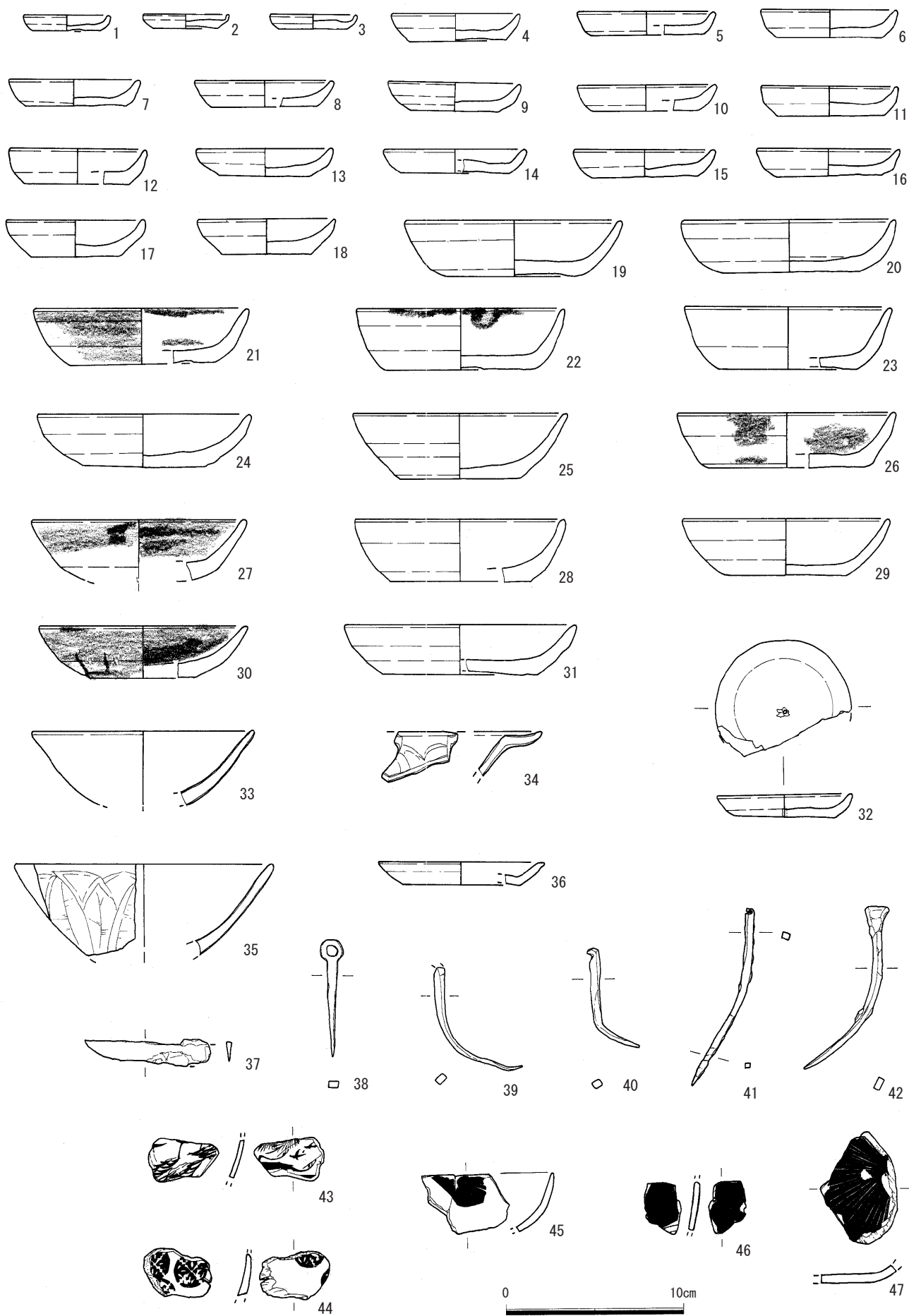


图 4 4 4 面構成土出土遺物 1

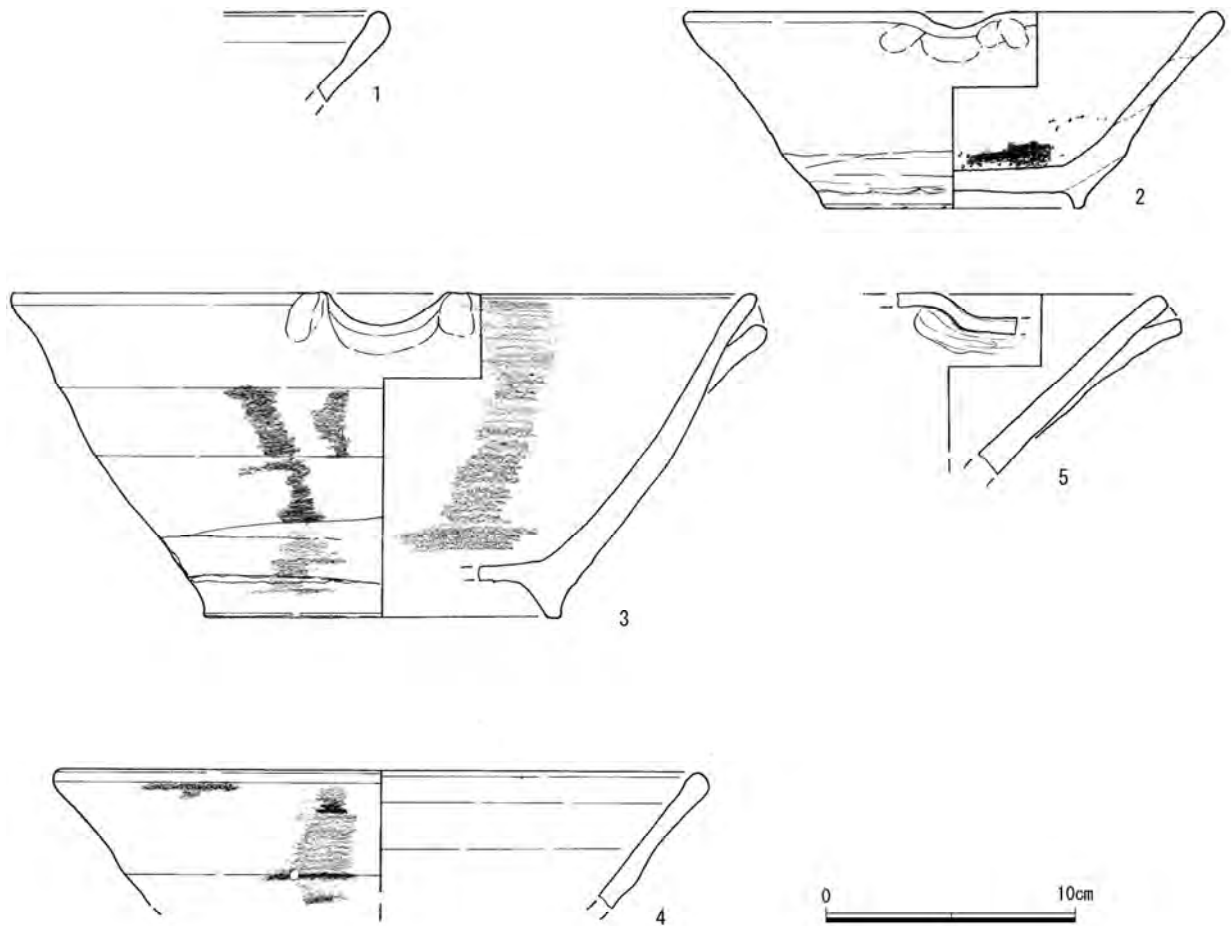


図45 4面構成土出土遺物2

第6面構成土中から、轆轤成形のかわらけと共に手捏ね成形のかわらけが多く出土するようになり、他に瓦、黒漆碗、青白磁合子蓋、灰釉陶器、須恵器甕が出土。宇瓦の瓦当文様は唐草文の周囲に連珠文が巡る。胎土はきめ細かな精良土でG類。A類胎土の女瓦、男瓦とともに鎌倉I期。C類胎土の女瓦は鎌倉II期。鎌倉II期の女瓦が確認されていることから、第6面の時期は13世紀中葉頃か。

第7節 第7面の遺構と遺物 (図56・図57～図60 図版5・13)

地表から約2.3～2.4m下の第14層(海拔約11.3m)を第7面とした。面は青灰色砂質土層で、東西方向の溝を検出した。地表からの深度が2mを超えたため、調査面積を狭め段掘りを行った。

第7面から出土するかわらけの半数以上が手捏ね成形になり、轆轤成形のかわらけを上まわる。口径44.8cm、復元最大径66cm、器高56.2cmの常滑甕(5型式)が一個体まとまって出土。女瓦も鎌倉I期。

第7面構成土中から、かわらけ、青磁劃花文碗、白磁四耳壺、唐草文宇瓦、鎌倉I期の男瓦・女瓦が出土している。

出土遺物から第7面の時期は13世紀前半代と考えられる。

第8節 第8面の遺構と遺物 (図61・図62・図63 図版5・14・15)

地表から約2.5m下の第15層(海拔約11m)を第8面とした。第8面は青灰色砂質土層(5～10mmの土丹粒多く、茶褐色砂質土混じる)で、I区で南北方向の溝14と直径40cmと25cmの礎石を検出した。溝の幅

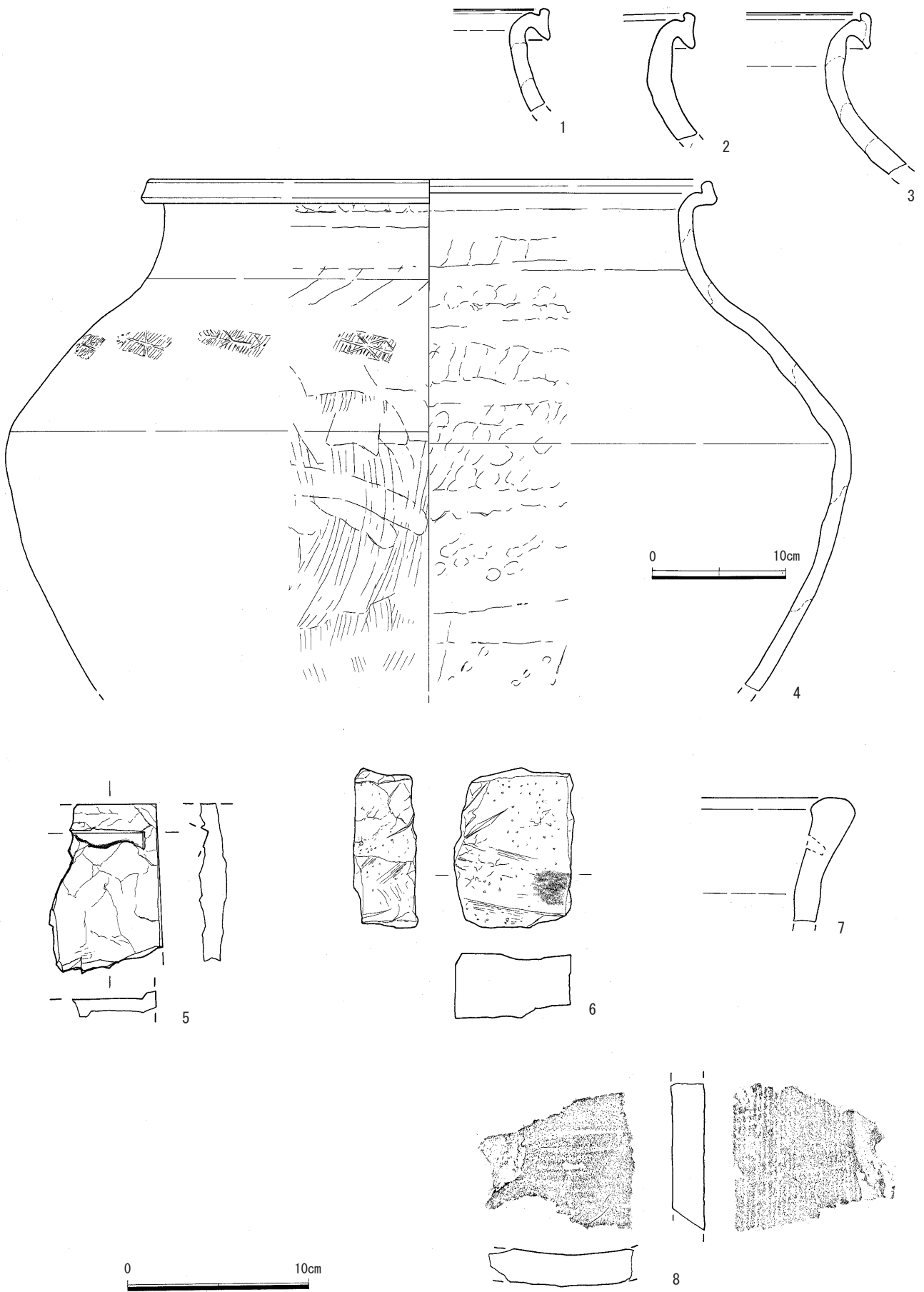


图 4.6 四面構成土出土遺物 3

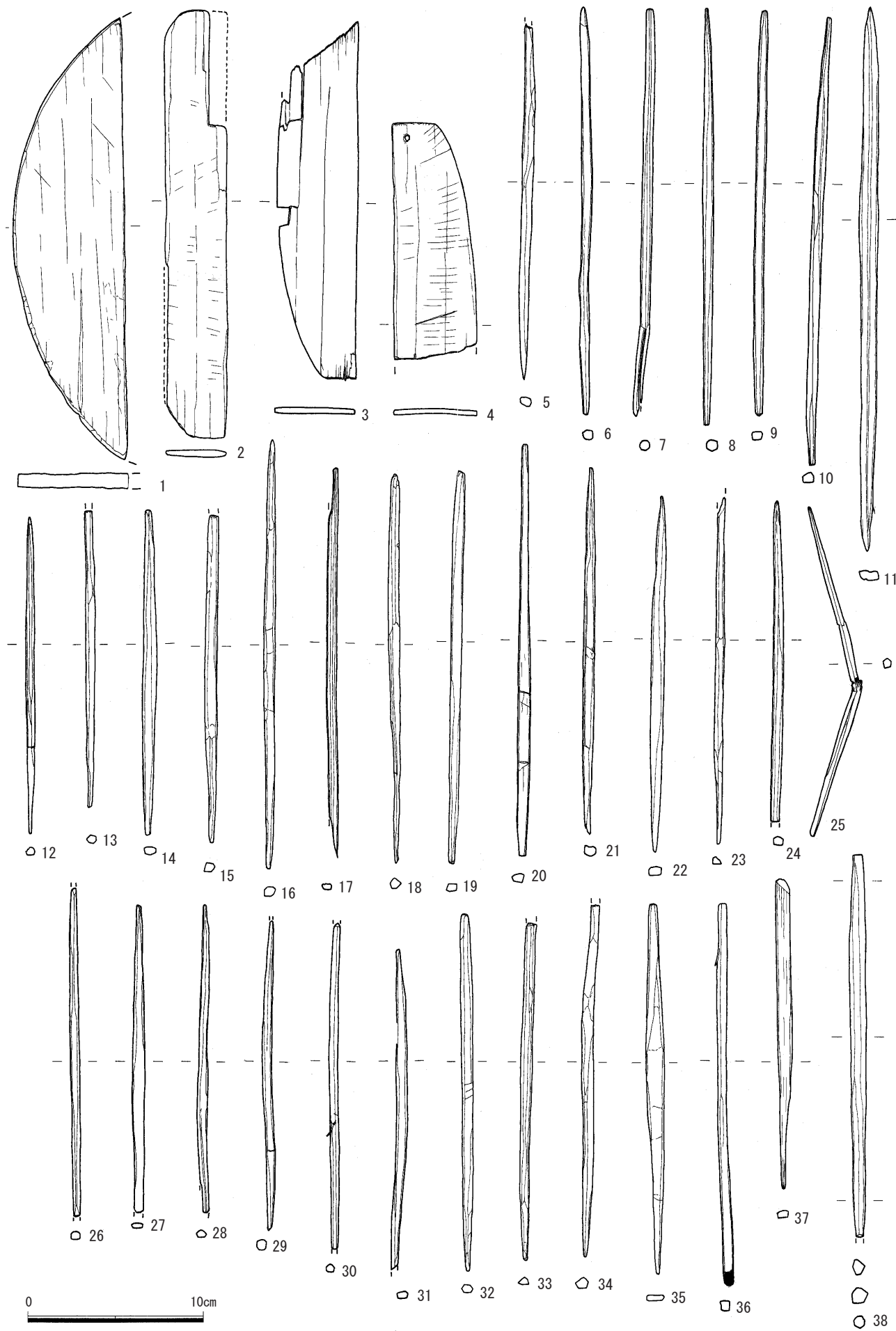


图 4 7 4 面構成土出土遺物 4

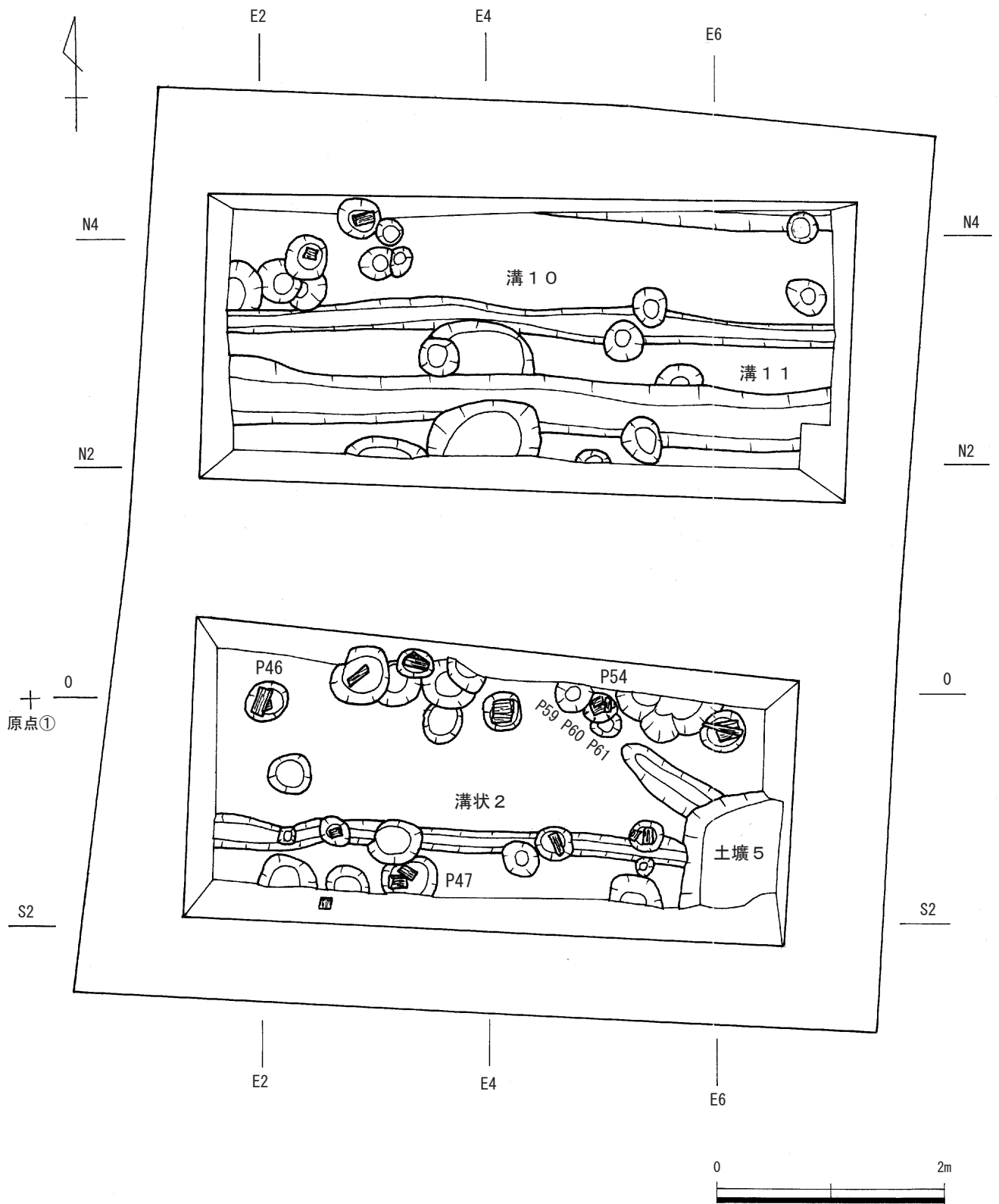


图 4 8 5 面 全侧图

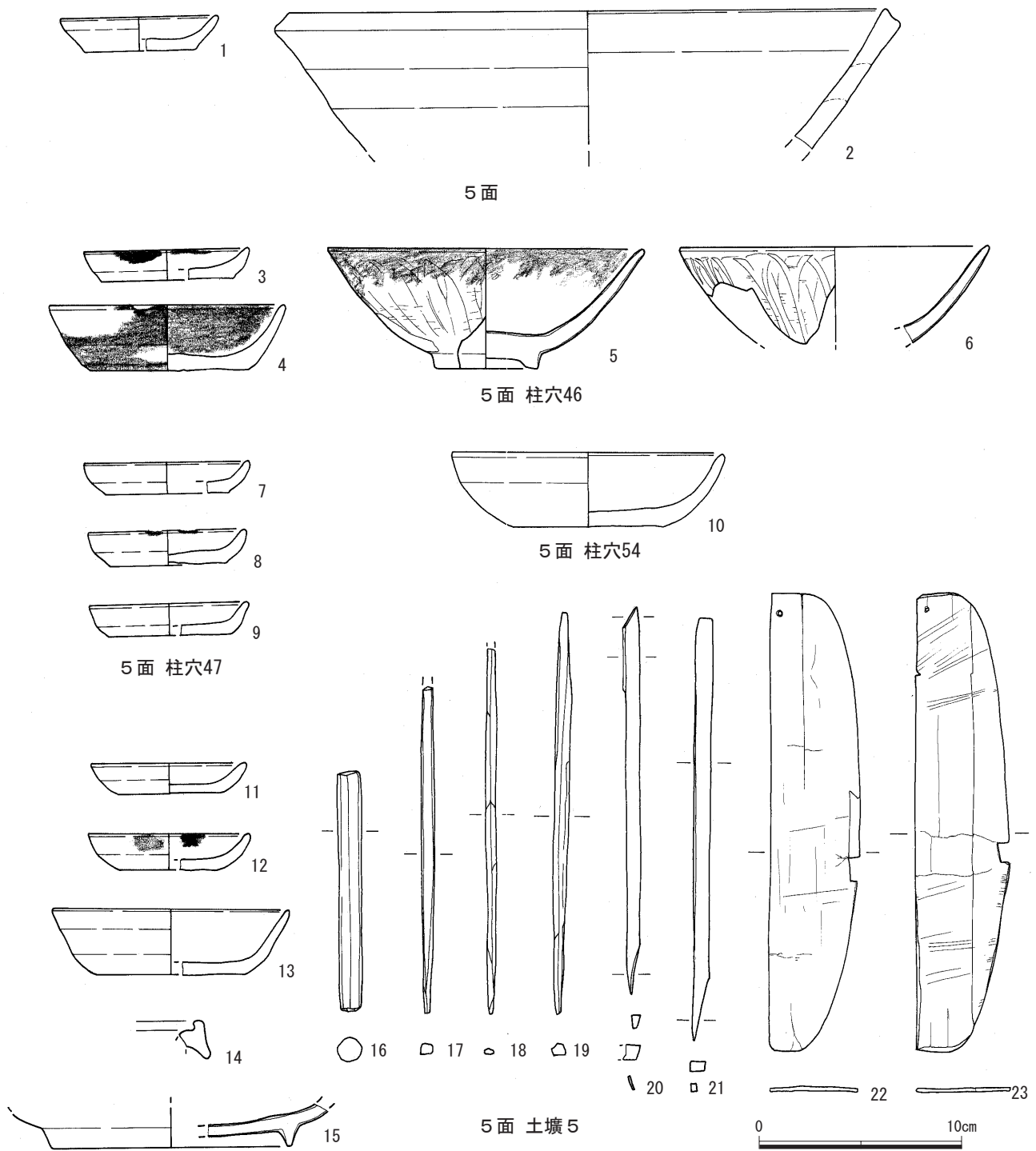


图49 5面・5面遺構出土遺物

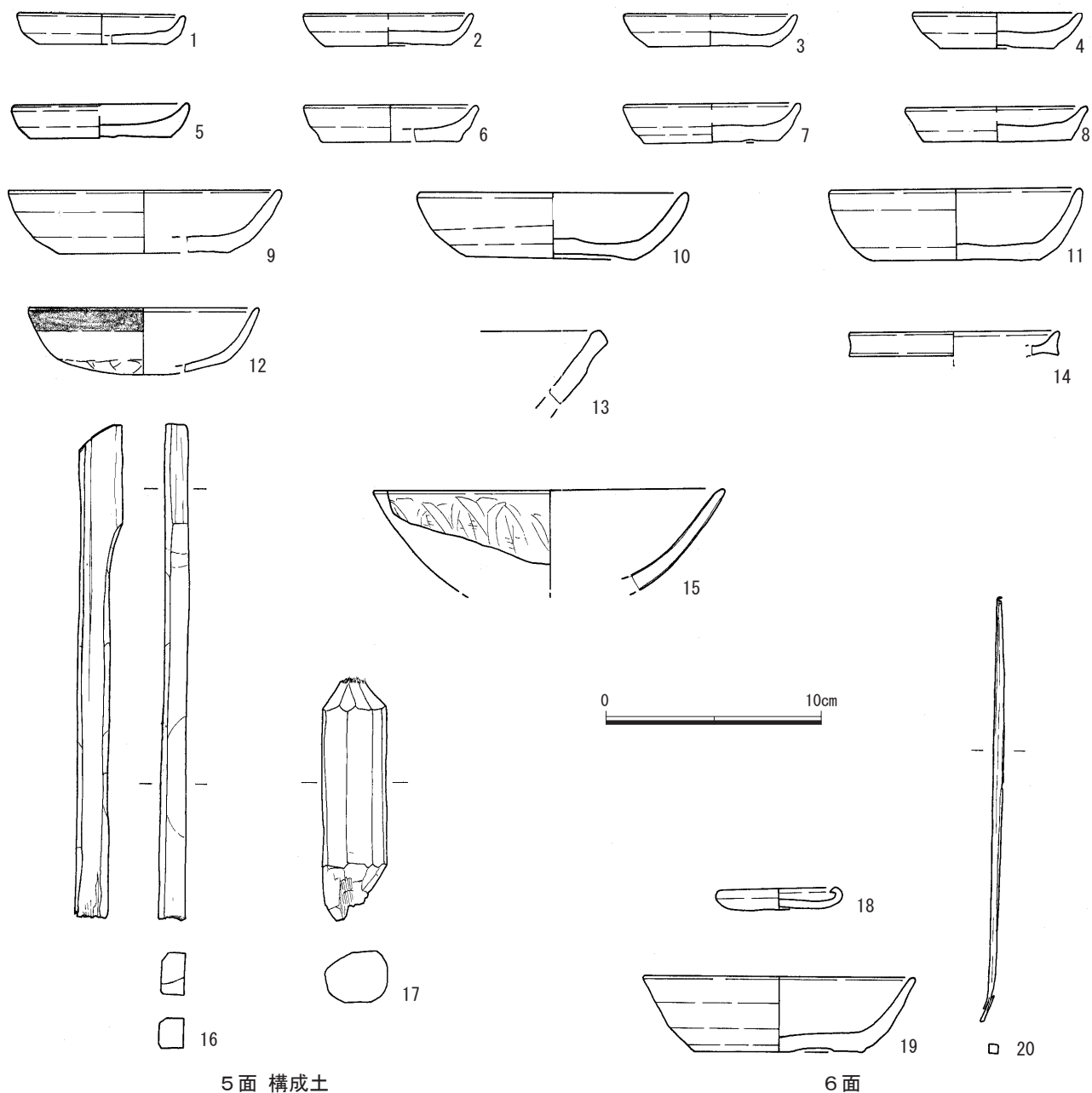
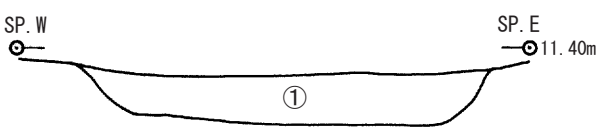
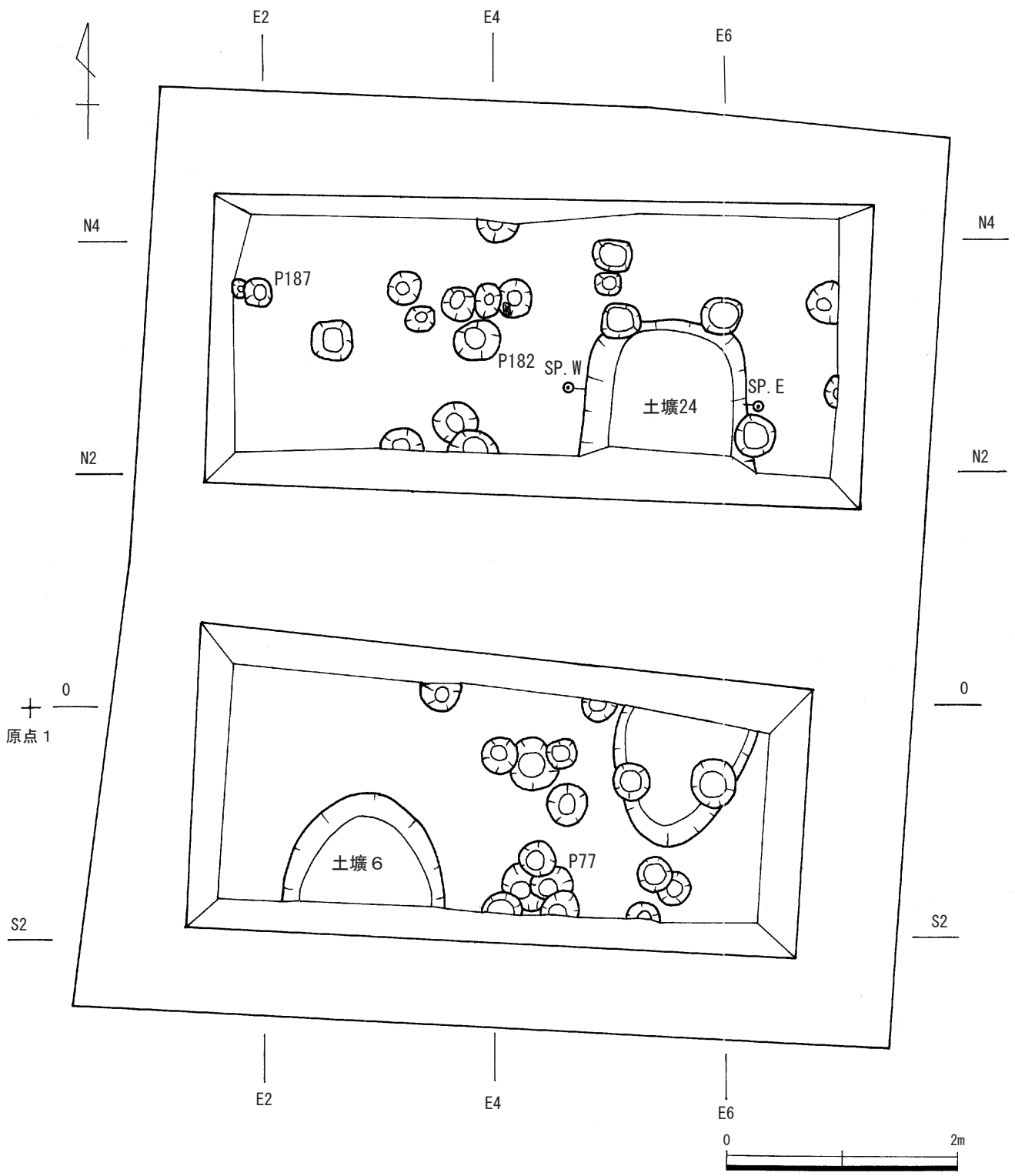


图50 5面構成土・6面出土遺物

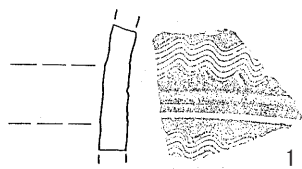


II区6面 土壙24

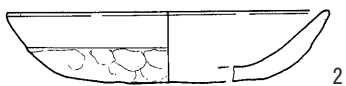
①暗褐色腐植土 (マグソ)



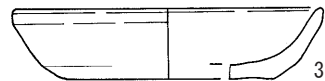
図51 6面全側図



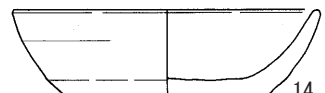
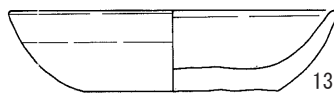
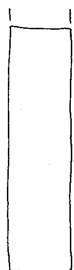
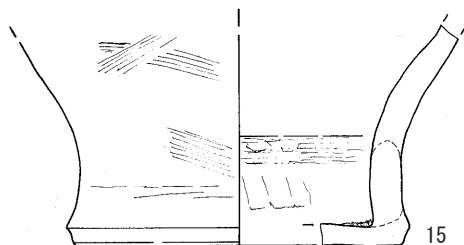
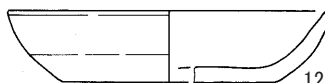
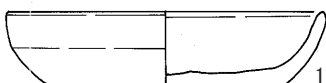
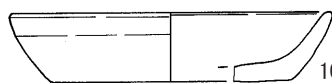
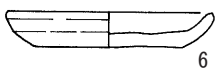
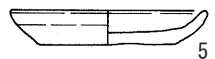
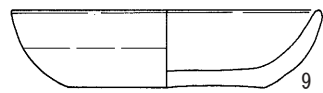
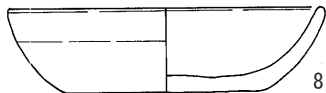
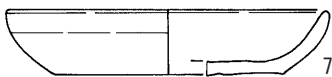
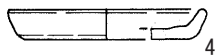
6面 柱穴77



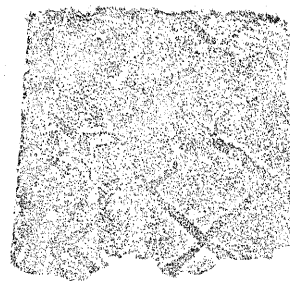
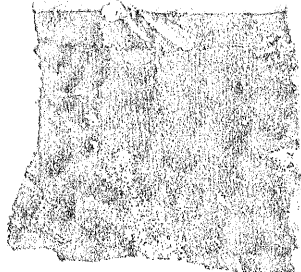
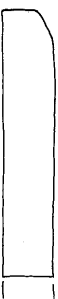
6面 柱穴182



6面 柱穴87



16



17

6面 土壤6



图 5 2 6面遺構出土遺物 1

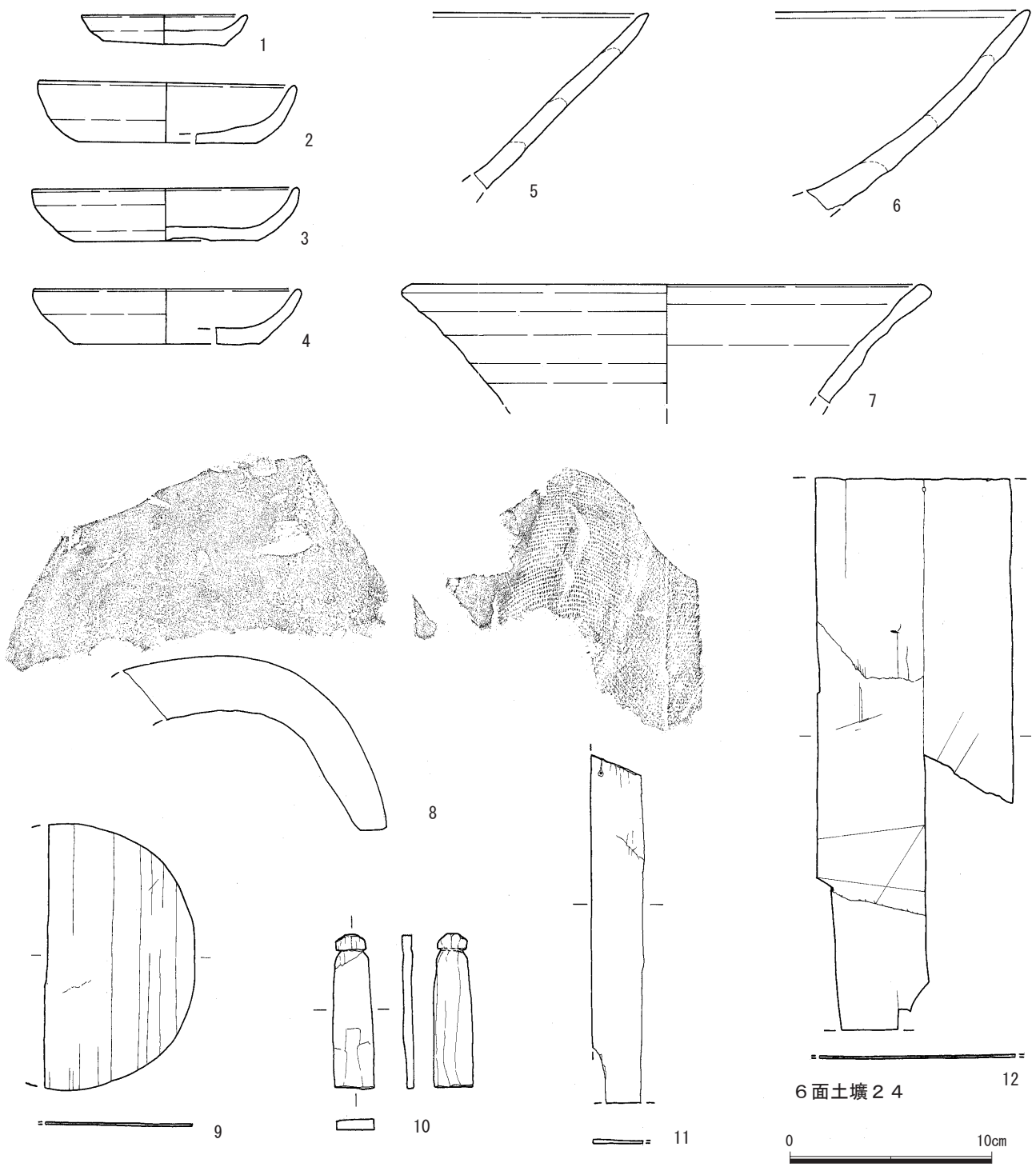


图 5 3 6 面遺構出土遺物 2

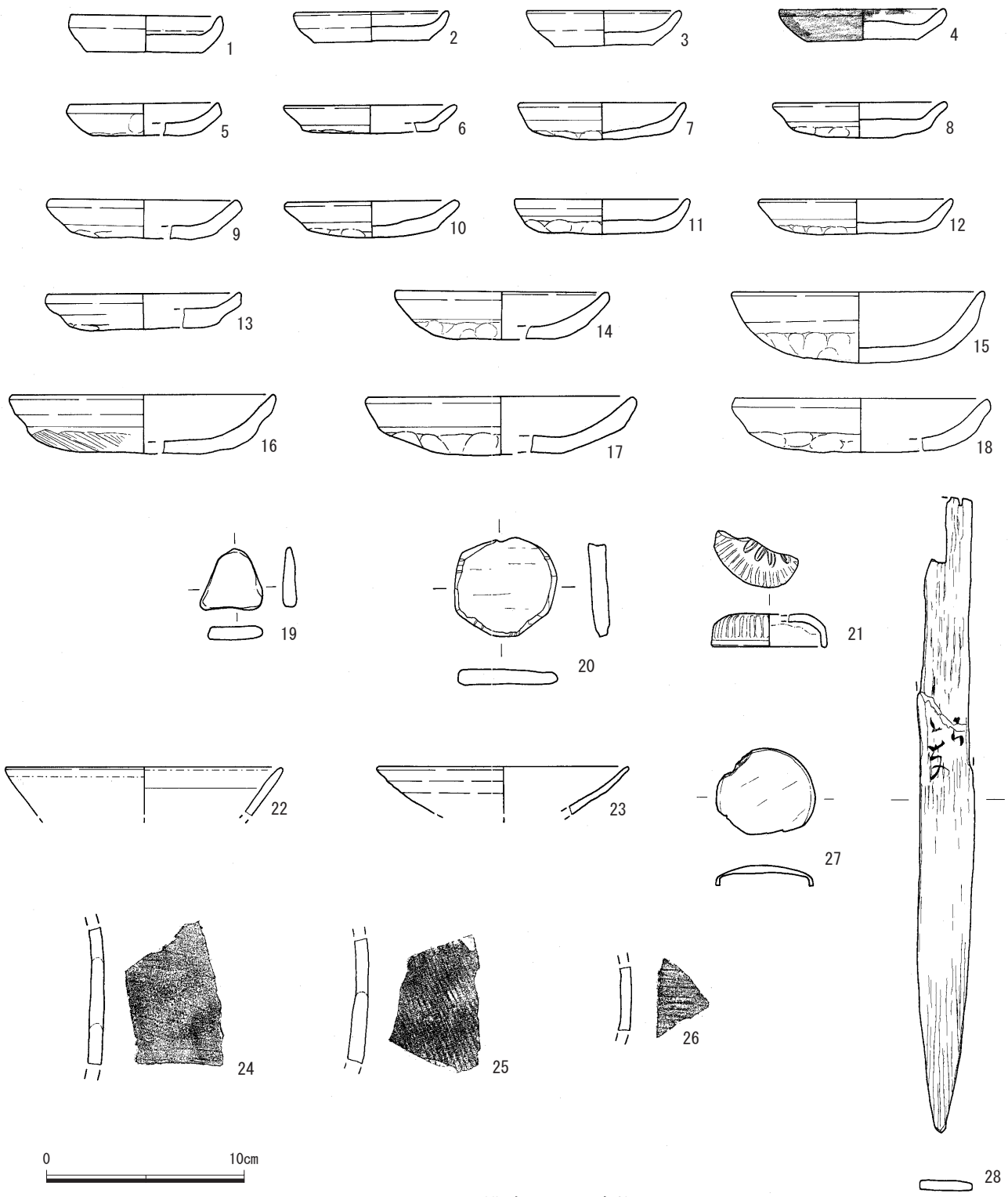


图 5 4 6 面構成土出土遺物 1

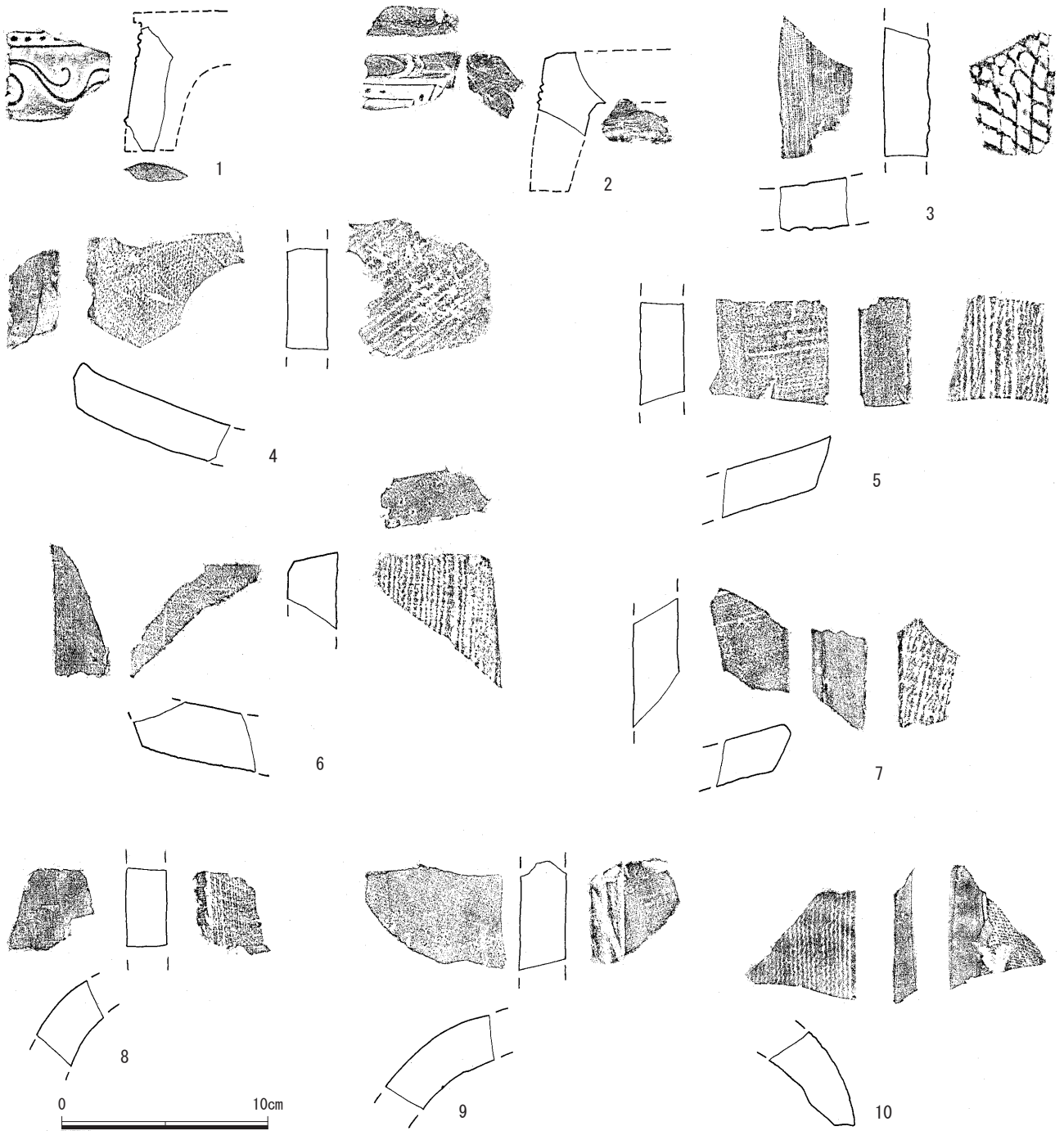
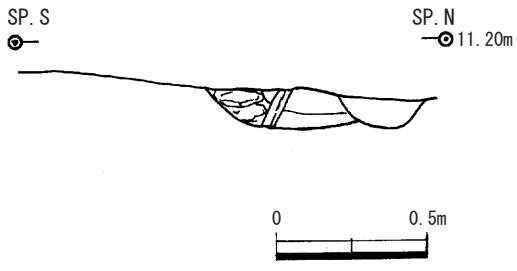
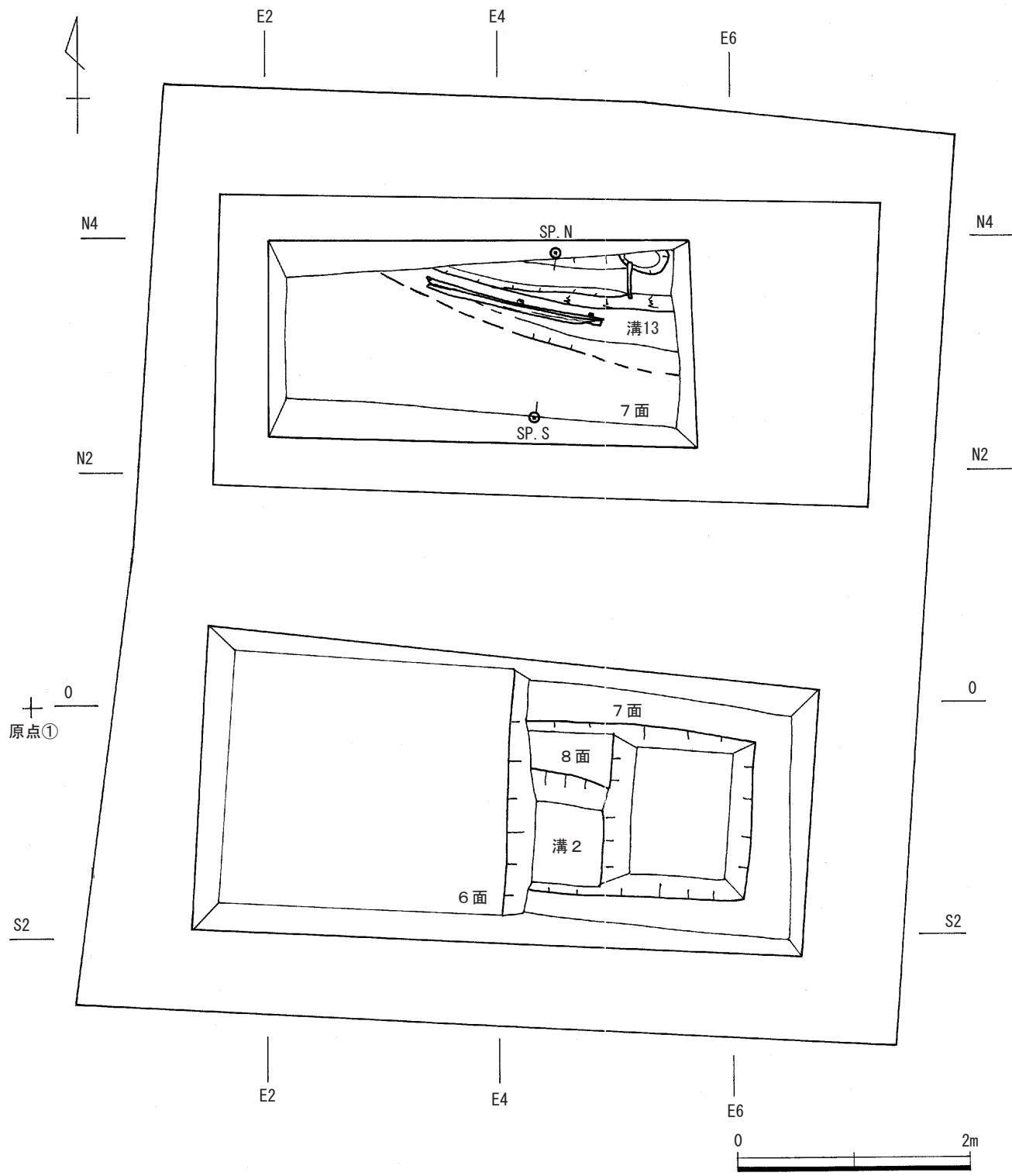


图 5 5 6 面構成土出土遺物 2



II区 7面 溝3

- ① 灰褐色砂質土 砂多い。
- ② 灰褐色砂質土 拳大土丹を含む。
- ③ 暗褐色粘質土 マグソ含み木片多い。

図56 7面全側図

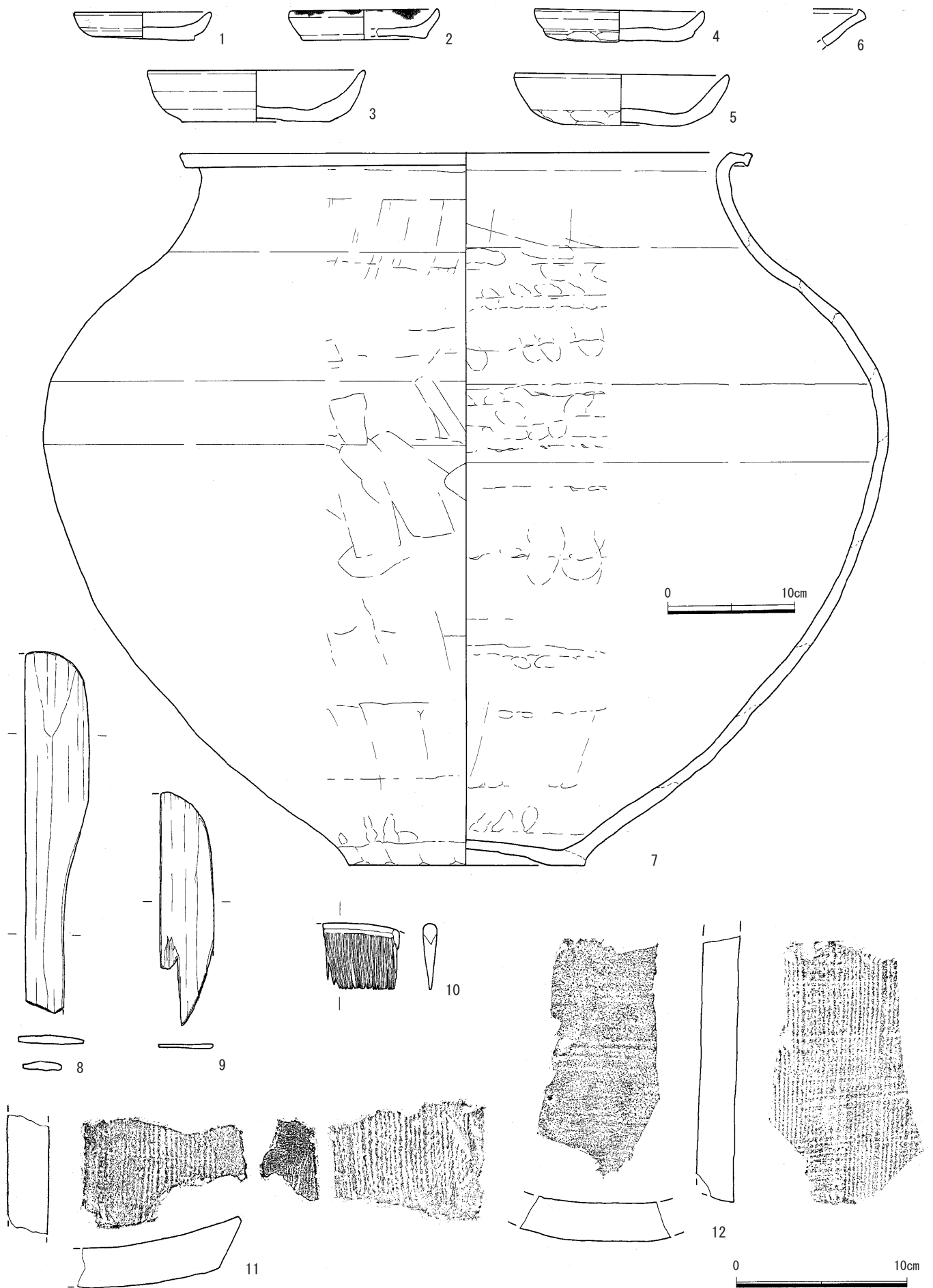


图 5 7 7 面出土遺物

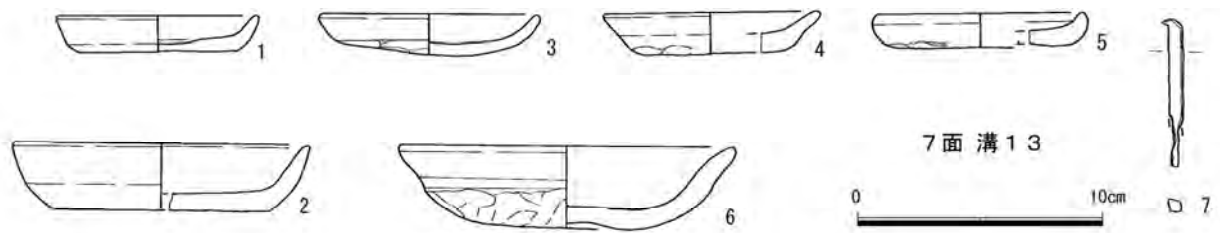


図58 7面遺構出土遺物

は約50cm程であるが、溝の西側縁に沿って並ぶ径25cm程の玉石と、玉石の抜き跡列が検出された。溝の東側縁は削平のため玉石列の抜き跡は検出されていない。大きな礎石の中心から小さな礎石の中心まで150cm、溝の中心まで180cmである。径が40cmの礎石は建物本体と径25cmの礎石は縁束、溝14は雨落ち溝と考えられ、礎石と溝が一体の建物とすると、縁の幅が5尺、軒出が6尺、床が貼られた建物の周囲に雨落ち溝が廻る大規模な建物と推定される。遺跡の位置が大倉幕府の中核域の北寄りに当たることから、幕府関連の建物の一部とも考えられよう。

第8面から出土するかわらけの大半が器高の低い手捏ね成形のものである。他に常滑片口鉢(5型式)、瓦ではA類のきめ細かく精良土の巴文鍔瓦、G類のきめ細かく雲母が含まれる精良土、唐草文の周囲に連珠文が廻る宇瓦。舶載陶器の緑釉盤。全面黒漆塗りの漆器は器高が高く底部が突出している。これらの出土遺物から第8面の時期は13世紀前葉と考えられる。

第9節 第9面の遺構と遺物 (図64・図63 図版6・14)

地表から約2.9m下の第18層(海拔約10.7m)を第9面とした。黒褐色砂質土層(砂が多い)でI区のみで確認した。南北方向の溝が検出されているが、8面で確認した溝14の真下である。同じ規模の建物の雨落ち溝の痕跡とするならば、大倉幕府は数回に渡り焼失していることから、その時の再建の痕跡か。他に1穴のみ確認されている浅い柱穴も、溝のすぐ脇にあり深さも浅いことから雨落ち溝の縁石の痕跡と見ることも出来る。調査区が狭いために詳細は不明である。

第9面からは手捏ね成形のかわらけ、灰釉の壺、土師器甕が出土している。

第9面構成土中からは轆轤成形・手捏ね成形の小型かわらけ、A類の鎌倉I期の女瓦、灰釉陶器、須恵器甕、土師器甕が出土している。中世の遺物は多くないが、かわらけと女瓦から第9面の時期は12世紀末～13世紀前葉と考えられる。

第10節 第10面・地山面の遺構と遺物 (図65・図66 図版6・14)

地表から約3m下の第19層(海拔約10.3m)を第10面及び中世の地山面とした。黒灰色砂質土層で混入物なし。土師器長甕の破片が出土している。中世遺物は出土していない。

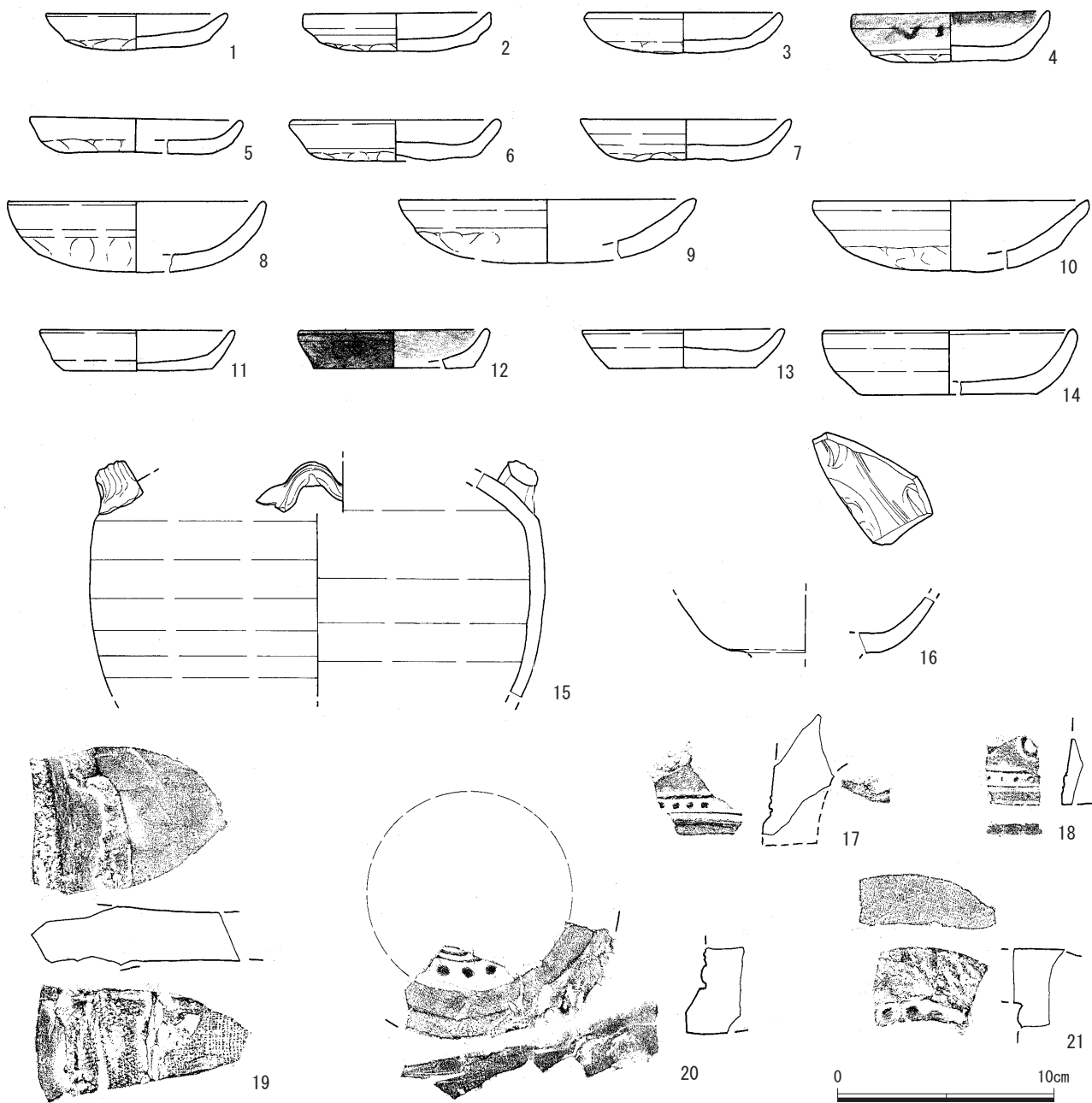


图 5 9 7 面構成土出土遺物 1

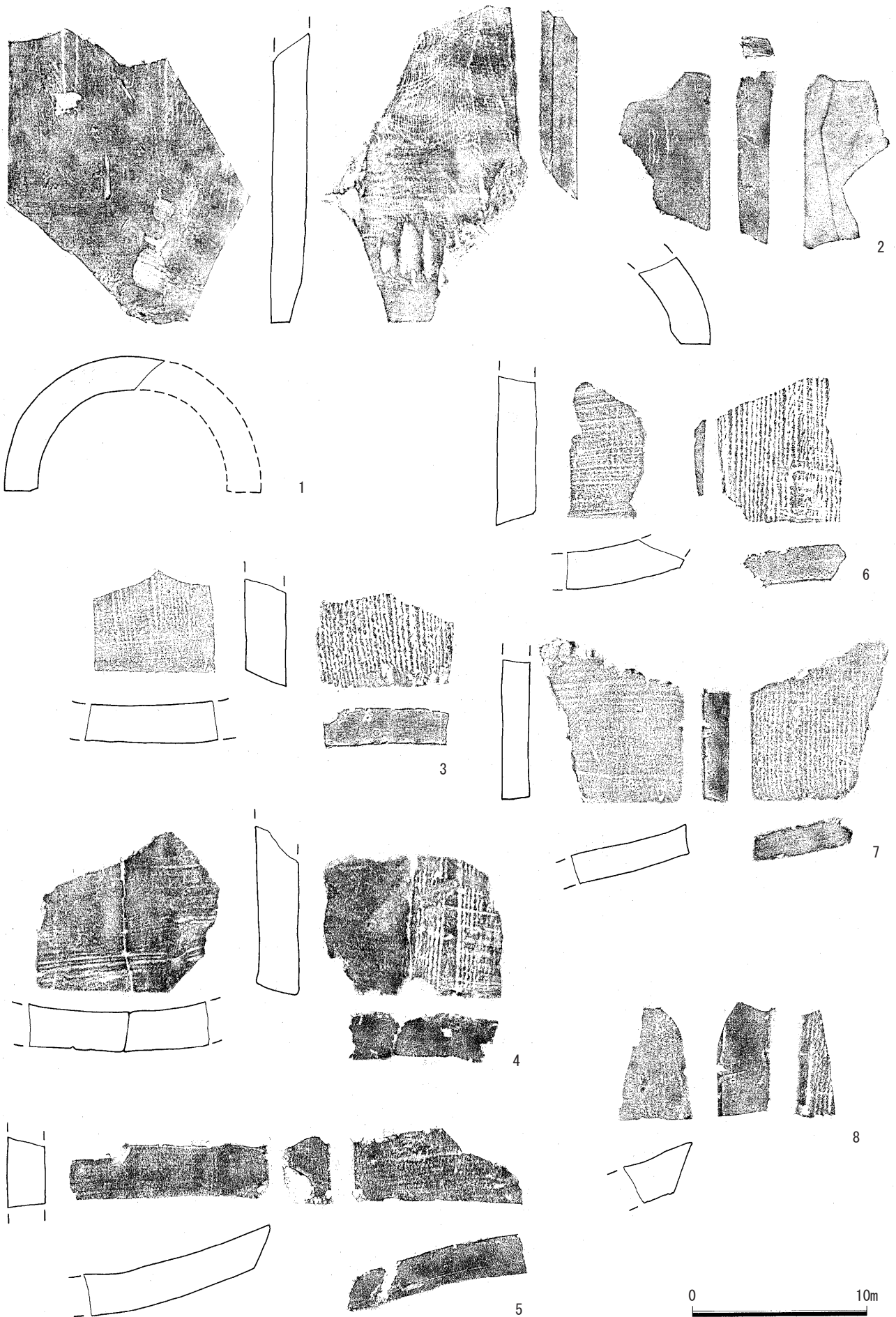


图 6 0 7 面構成土出土遺物 2

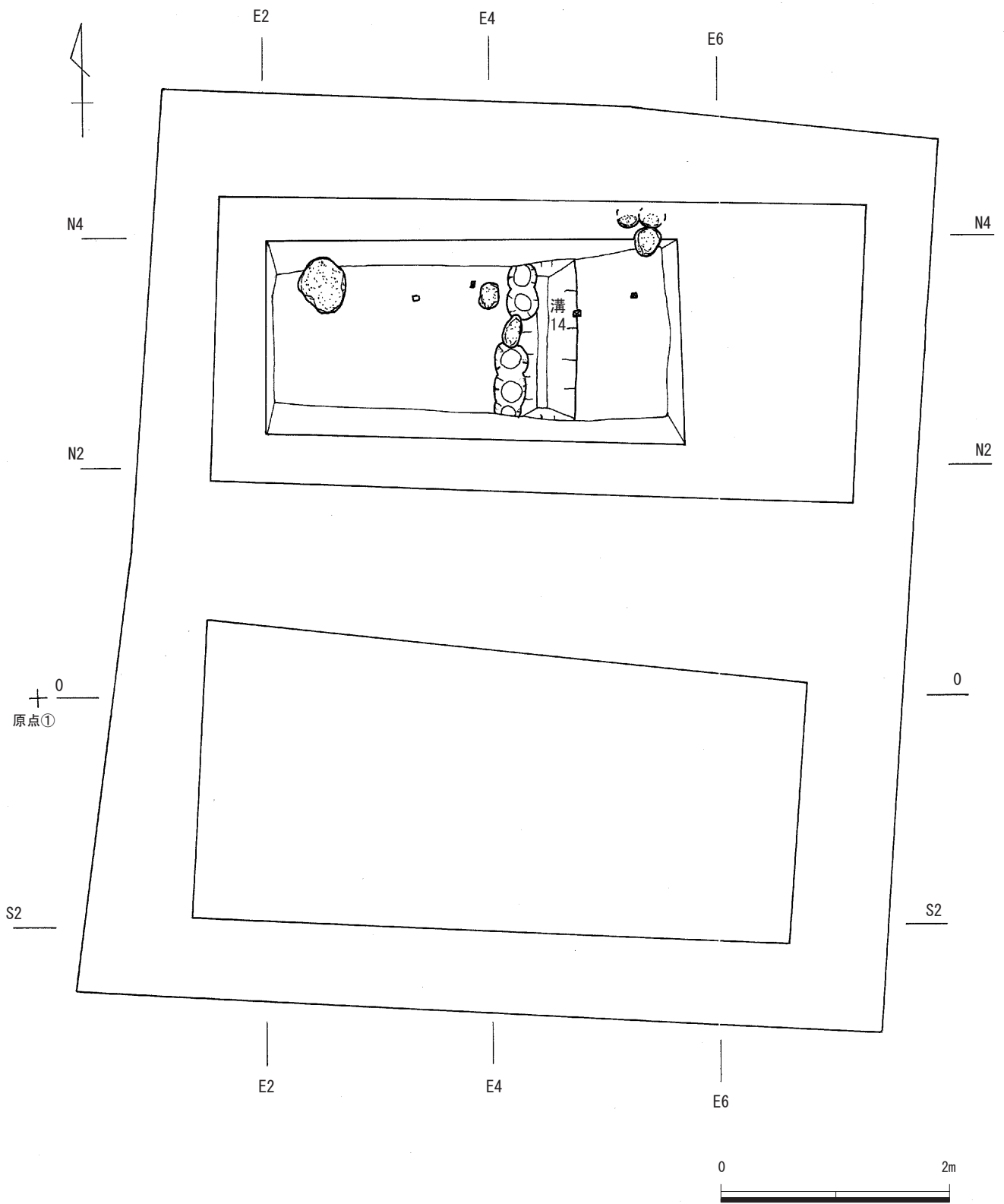


图6 1 8面全侧图

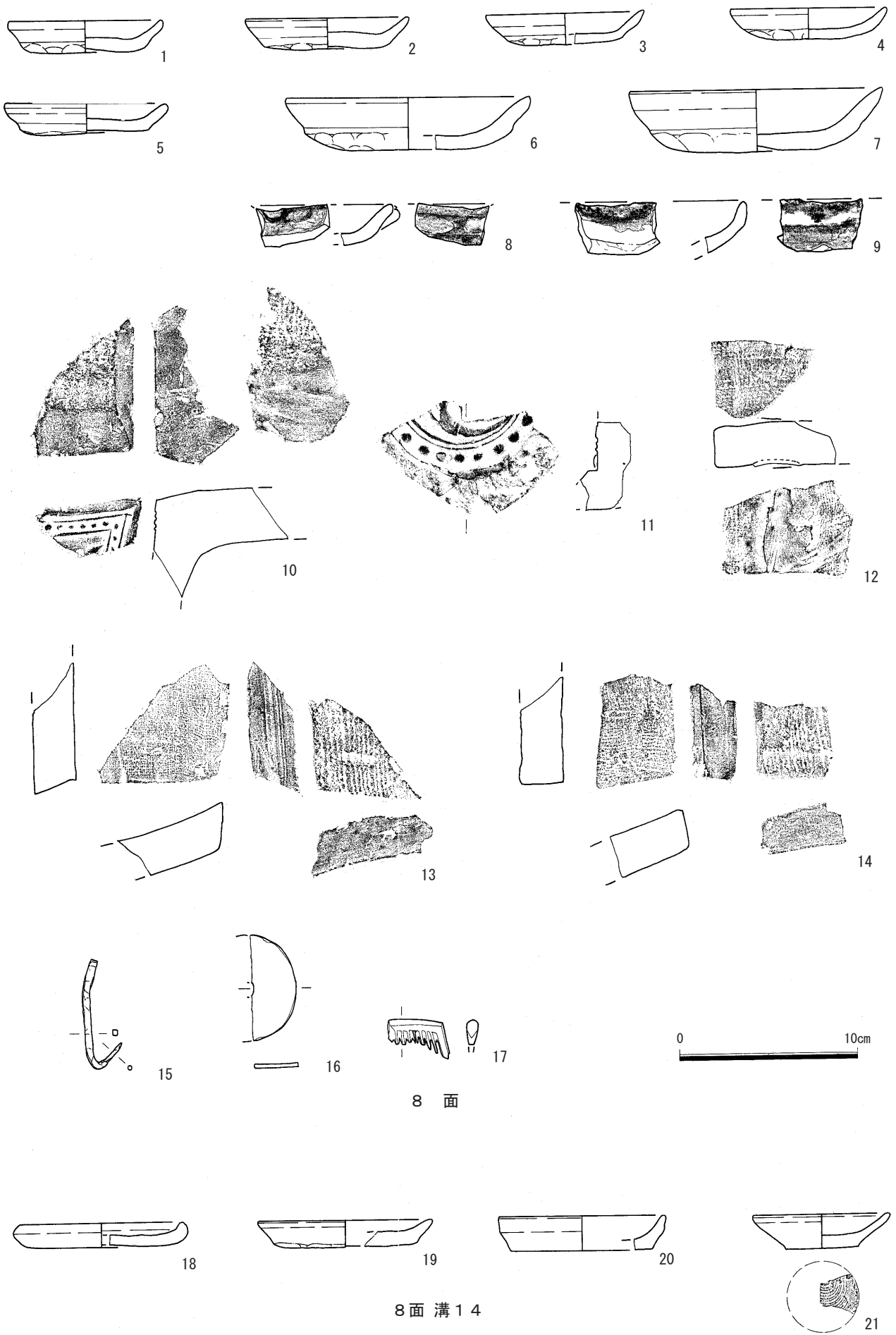


图62 8面·8面遺構出土遺物

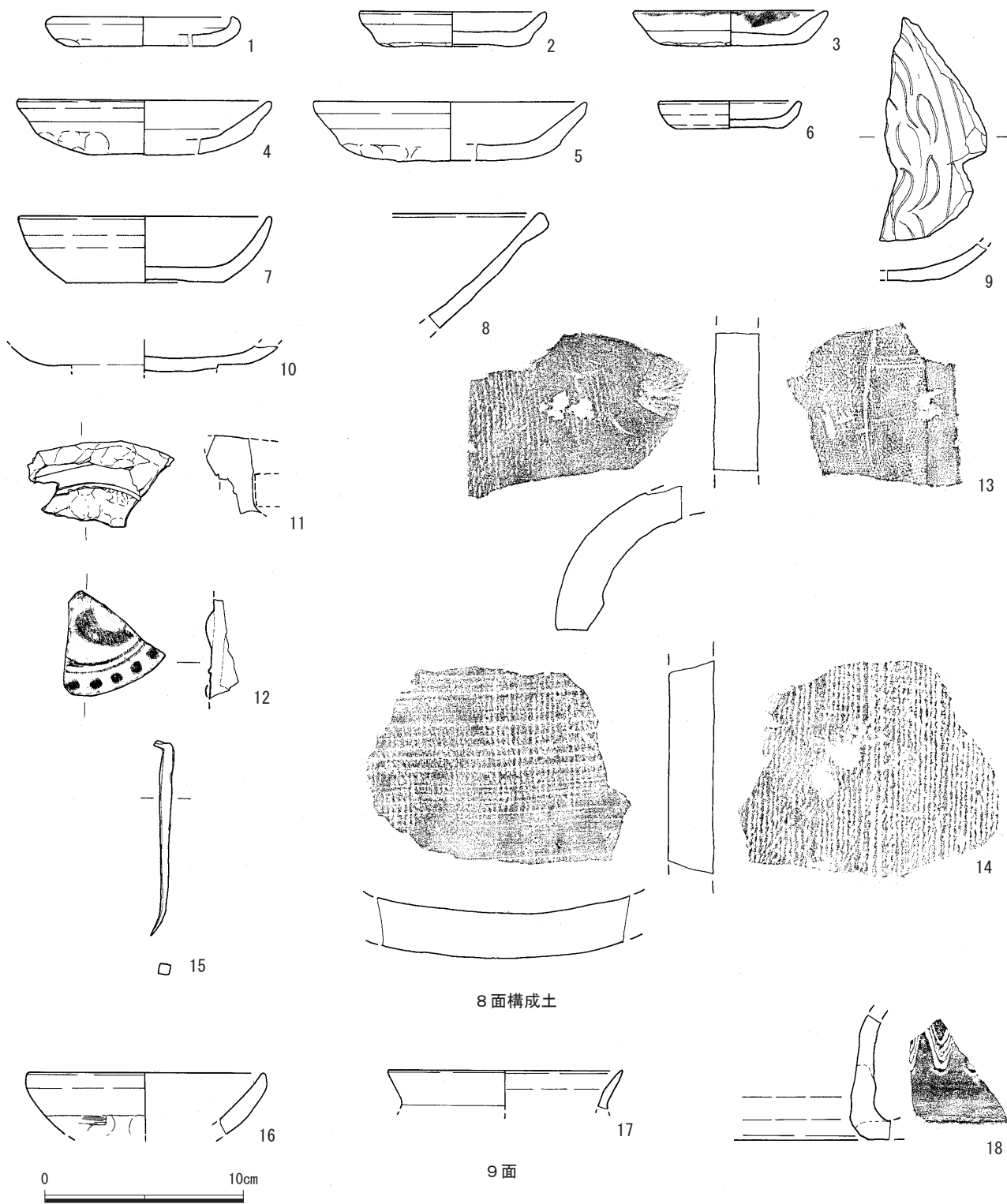


图63 8面構成土・9面出土遺物

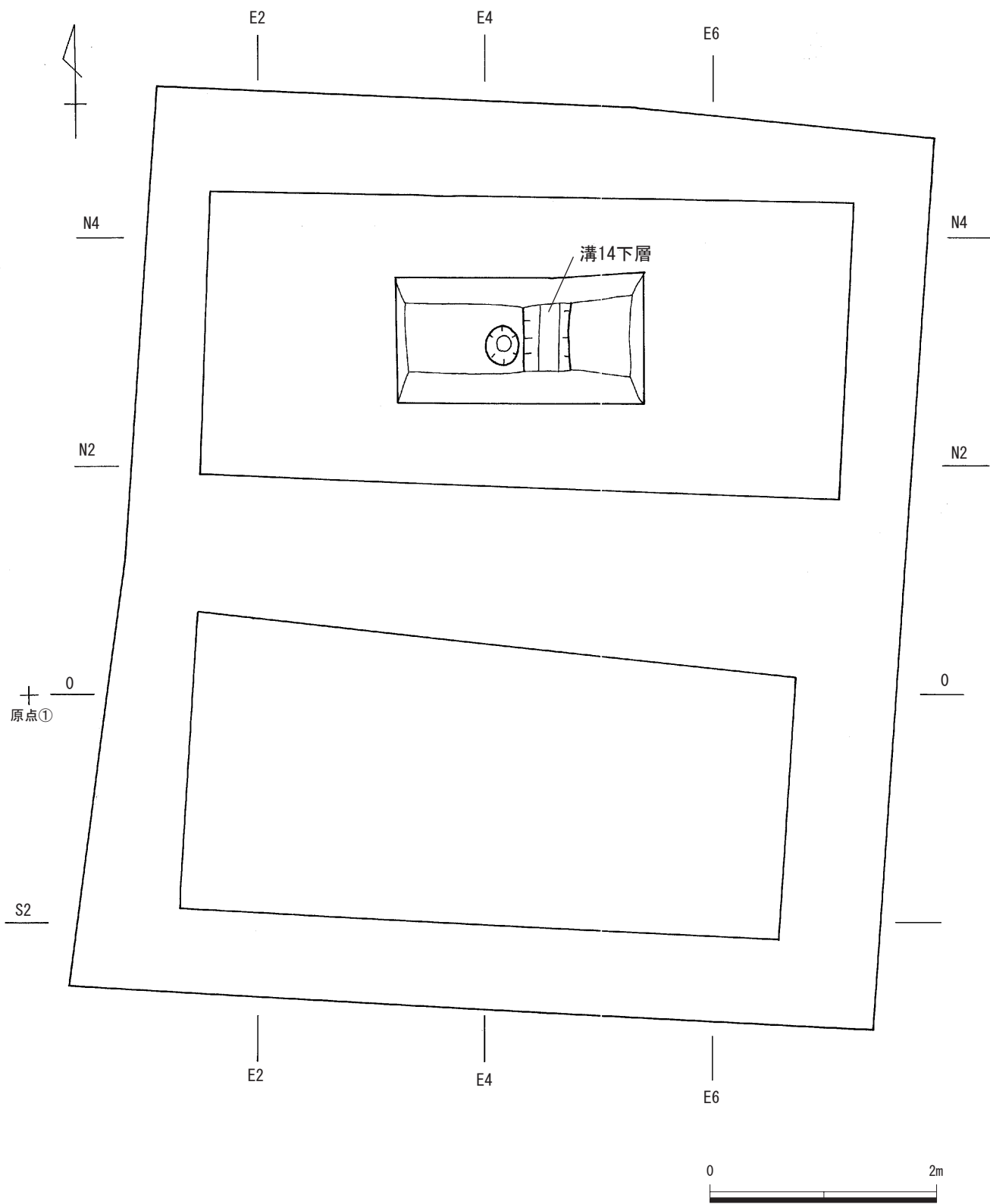


图 6 4 9 面全側図

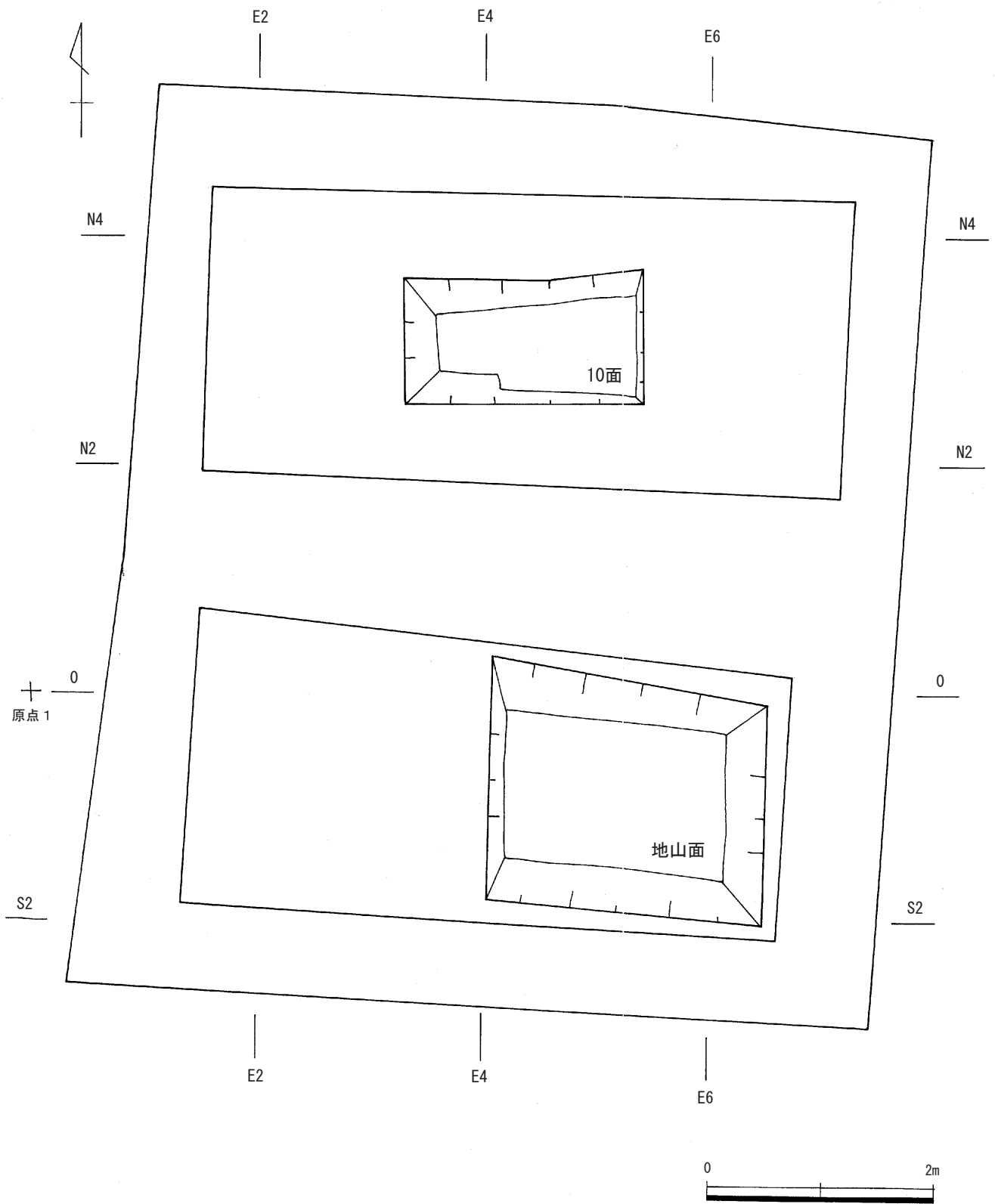


图 6 5 10 · 地山面全侧图

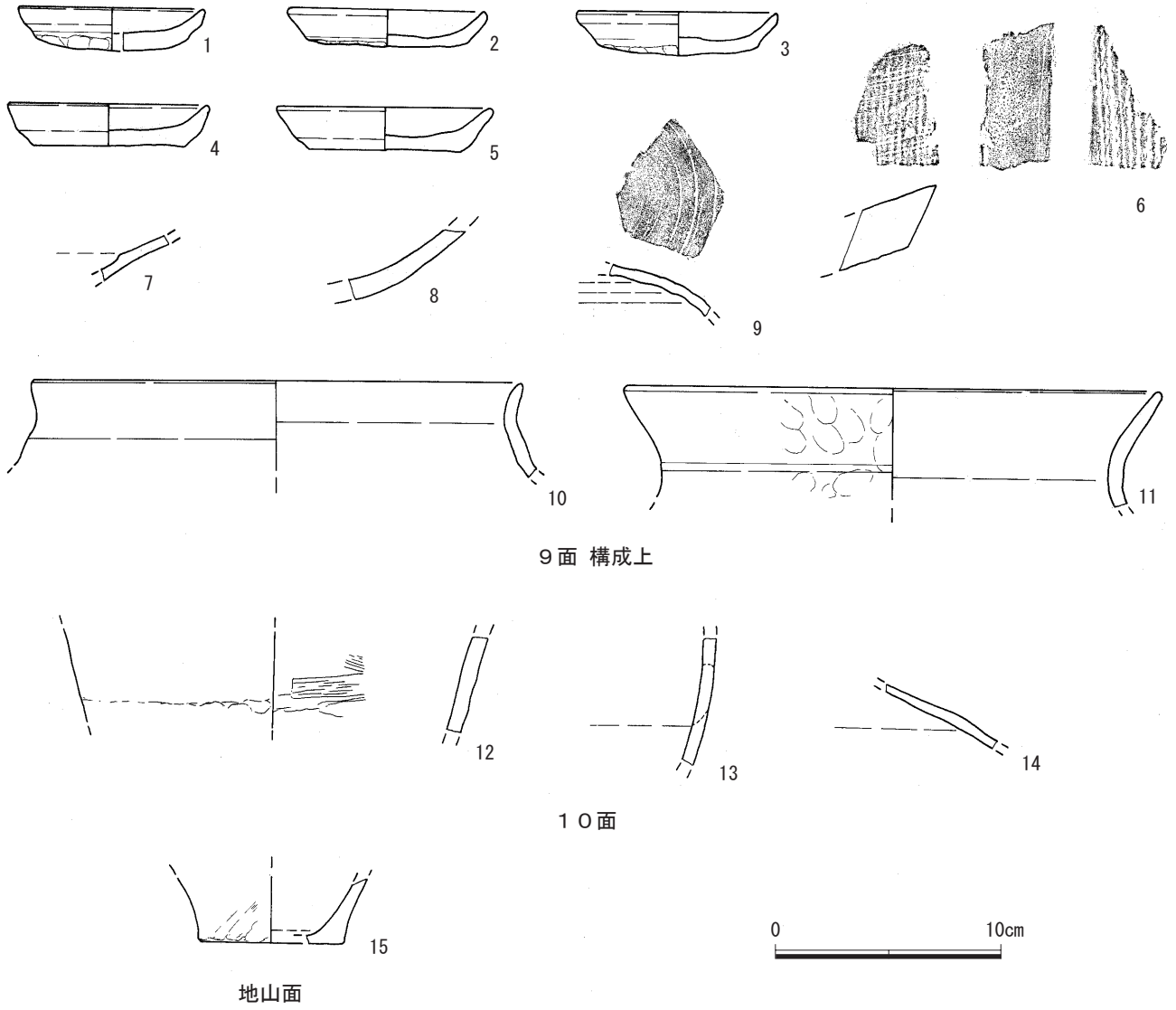


図66 9面構成土・10面・地山面出土遺物

第11節 出土瓦について

鑑瓦・宇瓦・女瓦・男瓦が出土している。出土量は多くないが、すべて鎌倉期に属する瓦である。永福寺出土瓦を基準にした鎌倉出土瓦の時期区分を以下に記した。(永福寺跡 遺物編・考察編 2002年 鎌倉市教育委員会)

永福寺の瓦の変遷

永福寺瓦の時期区分	変 革	時期区分
永福寺Ⅰ期瓦(1192～1231年頃)	永福寺創建の建久3年(1192)から寛喜3年(1231)、惣門焼失までの時期。	鎌倉Ⅰ期瓦
永福寺Ⅱ期瓦(1235～1280年頃)	惣門が再建された文暦2年(1235)と、寛元・宝治年間修理から弘安3年の焼失までの時期。	鎌倉Ⅱ期瓦
永福寺Ⅲ期瓦(1287～1315年頃)	鎌倉極楽寺の忍性が別当坊に入り、弘安10年の再建から延慶3年の焼失までの時期	鎌倉Ⅲ期瓦

本遺跡の出土瓦

出土瓦分類	特 徴	時期区分
A類	砂粒を含む精良土、焼きは硬質・軟質がある。色は灰～灰褐色。 永福寺Ⅰ期	鎌倉Ⅰ期
B類	A類と類似の胎土。女瓦は糸切り痕と細かい斜格子目叩き。 永福寺Ⅰ期	鎌倉Ⅰ期
C類	細かな砂粒が多いが精良土。A・B類に似る。焼きは硬質・軟質がある。色は灰～灰褐色。女瓦凸面には斜格子目叩き。中に記号が入る。 永福寺Ⅱ期	鎌倉Ⅱ期
D類	砂粒・石粒を多く含む粗土。焼きは良好で硬い。寺銘系と類似。 永福寺Ⅱ期	鎌倉Ⅱ期
G類	砂粒のきめが細かく、雲母が見られる精良土。永福寺では確認されていない。宇瓦は珠文帯の巡る唐草文、鑑瓦は左回りの巴文。	鎌倉Ⅰ期か

本遺跡出土の宇瓦・鑑瓦

胎土からG類と分類した宇瓦と鑑瓦である。6面構成土、7面構成土、8面、8面構成土から小片が出土している。

宇瓦の文様は、内区に繊細な凸線で唐草文を描き、界線を設けて内縁に密に珠文を配している(図55-1・2、図59-17・18)。瓦当幅は不明、内区幅は4.5cm(図55-1)程か。瓦当面は顎貼り付け。永福寺Ⅰ期の宇瓦と比べても遜色ない大きさになるものと思われる。永福寺ではこれまで、唐草文に珠文帯が巡るものは、2種類(YNⅠ02・YNⅠ05)が出土している。いずれも永福寺Ⅲ期以降に分類されたもので、全体が小型化して、唐草文は釣り針状に略され退化している。

鑑瓦の文様は、外区内縁に珠文が配されている。外区と内区の境の圏線を伴う左廻りの巴文(図59-20、図63-11・12)。瓦当径は復元で15cm程か。珠文の数は不明。上記の唐草文宇瓦とセットになるものと考えられる。

瓦の出土層位は6面より下で8面までの間、遺構・面・面構成土中からの出土である。この層位の他の出土遺物を確認すると、手捏ね成形のかかわり、常滑5型式の甕・片口鉢、渥美片口鉢、永福寺Ⅰ期の女瓦・男瓦と12世紀末～13世紀前葉の遺物が主体であることから、G類に分けた宇瓦と鑑瓦は、少なくとも13世紀前葉、鎌倉の瓦編年のⅠ期に相当する年代観が与えられるものと考えられる。

第4章 まとめ

調査地点は大倉幕府跡のほぼ中央北寄り、金沢道より北に折れ、源頼朝法華堂跡に至る南北道路の西側に位置し、東側は清泉小学校になる。

調査面積は約56㎡であるが、調査を行った面は10面にも及んだ。遺物も非常に多く、コンテナ分けて約100箱分出土した。掲載遺物は厳選したが遺物図版数が53プレートに及んだ。

特徴的なのは最下層の第10面・地山面から第6面と、5面より上の堆積土の違いである。特に6面・7面・8面の上には貝砂が敷かれていた。貝砂の敷かれた地面は、これまでの発掘調査で北条時房・顕時邸跡、北条小町邸跡、今小路西遺跡や多くの武家屋敷内と考えられる地点・地層から発見されている。当該地点も大倉幕府中枢域内であることから、何らかの建物と建物の間敷かれた貝砂と推察できよう。このことを示すように8面では大小個の礎石と雨落ち溝と考えられる溝14が確認されている。

地山面から6面までに出土している遺物は主に、12世紀末～13世紀前葉のもので占められ、5面の地業面は6面以下を覆い隠すように叩き締められ、遺物も13世紀中から15世紀代のものが中心となる。13世紀前葉の年代は大倉幕府が宇津宮辻子に移転する時期と重なる。

吾妻鏡から幕府移転後の土地利用に関わる記載を挙げておく。

嘉禄元年(1225)12月20日条 今日若君御移徙の儀あり。

文暦2年(1235)9月1日条 右大将家法華堂前の湯屋失火す。風しきりに吹きて、法華堂すこぶるこの災を免れがたきのところ、諏方兵衛尉盛重一人最前に馳せ向ひ、中間の民家数十字を壊たしむるの間、火止まりをはんぬ。

寛元5年(1247)1月13日条 右大将家法華堂前の前の人家数十字失火す。陸奥(実時)掃部助の亭その中にあり。

康元元年(1256)12月11日条 右大将家の法華堂の前焼亡。北風烈しく吹き、勝長寿院ならびに弥勒堂・五佛堂の塔、ことごとくもつて災す。ただし本尊および一切経等は、希有にしてこれを取り出したてまつると云々。

調査範囲が狭く、また深度が深く湧水に悩まされたために十分な検証が出来たとは言えないが、地山面近く、礎石や雨落ち溝の検出は、大倉幕府中枢に関わる建物(寝殿や侍所等)の可能性が大きい。調査面積が狭いために、建物の性格、方位や規模など不明だが鎌倉I期相当の瓦が出土している。出土量が少ないことから、瓦葺きの建物というよりも棟だけに瓦を葺いた檜皮葺きや柿葺きの建物かも知れない。

5面以降と見られる嘉禄元年の大倉幕府移転後の土地利用は、文献から民家が建ち並んでいたことが伺える。また北条実時亭があったことも確認されることから、大倉幕府(頼朝御所)縁の土地として保存されたのではなく積極的に利用が行われたと考えられる。このことは板壁建物の検出や出土遺物の多さから見て肯定されよう。

調査地点は幕府中枢域であった後、吾妻鏡に見られる民家屋的な土地利用がされた一角になるのかも知れない。

遺物観察表

図5 表採・表土出土遺物

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.7	轆轤成形 口縁部に煤付着
2	かわらけ	7.4	5.0	1.7	轆轤成形
3	かわらけ	(7.2)	4.6	2.2	轆轤成形
4	かわらけ	(7.4)	4.8	1.8	轆轤成形
5	かわらけ	(11.2)	(6.0)	3.4	轆轤成形 口縁部に煤付着
6	かわらけ	(11.4)	7.0	3.5	轆轤成形
7	青磁折縁皿		(13.0)		龍泉窯
8	瀬戸入子				降灰釉付着 13~14世紀
9	瀬戸卸皿				灰釉ハケヌリ・ツケガケ併用 古瀬戸中Ⅲ期(13世紀中葉)
10	瀬戸柄付片口				灰釉ツケガケか 古瀬戸中期~後期(14世紀)
11	常滑甕			(16.0)	底部片
12	常滑片口鉢(Ⅰ類)				底部片 6a型式(13世紀中葉)を下限とするものか
13	常滑片口鉢(Ⅱ類)				10型式(15世紀後半)
14	常滑片口鉢(Ⅱ類)				9型式(15世紀前半)
15	常滑片口鉢(Ⅱ類)				9型式(15世紀前半)
16	瓦器質碗				13世紀か
17	鉄製品 鏝	長15	幅0.6	厚0.5	
18	銭 大平通寶	径2.4	重2.3g		初鑄年 976(北宋)
19	銭 皇宋通寶	径2.4	重3.0g		初鑄年 1038(北宋)真書
20	木製品 箸	長20.8	幅0.4	厚0.6	
21	木製品 箸	残18.4	幅0.7	厚0.4	
22	木製品 箸	残18.4	幅0.5	厚0.4	
23	木製品	残17.8	幅0.9	厚0.7	棒状
24	女瓦			厚1.8	C類 凸面斜格子目叩き 水殿瓦窯産

図6 トレンチ・攪乱出土遺物

トレンチ 攪乱

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	7.4	4.8	1.9	轆轤成形
2	かわらけ	8.2	5.2	1.9	轆轤成形
3	常滑片口鉢(Ⅱ類)				7型式(14世紀前半)か
4	土器				外面に2条の沈線あり 内面に付着物、漆喰か
5	火鉢	(39.6)	(30.0)	10.7	土器質
6	女瓦			厚2.0	A類 凸面縄目叩き
7	青磁折縁皿	(10.8)			外面蓮弁文

図7 1面まで出土遺物1

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(6.8)	(3.8)	1.8	轆轤成形
2	かわらけ	(7.8)	(4.2)	1.9	轆轤成形
3	かわらけ	(6.8)	(4.0)	2.0	轆轤成形
4	かわらけ	(6.8)	(3.8)	2.3	轆轤成形 口縁部に煤付着
5	かわらけ	(7.8)	4.8	2.3	轆轤成形
6	かわらけ	(7.8)	(5.8)	2.3	轆轤成形
7	かわらけ	(10.2)	6.8	2.9	轆轤成形
8	かわらけ	(10.8)	(5.8)	3.5	轆轤成形
9	かわらけ	(12.8)	(7.6)	2.8	轆轤成形
10	瀬戸 折縁皿		(16.0)		灰釉ハケヌリ 古瀬戸前Ⅳ期~中Ⅱ期(13世紀後葉~15世紀前葉)か
11	瀬戸 緑釉小皿				鉄釉、口縁部にツケガケ 古瀬戸後期後半(15世紀中葉)か
12	瀬戸 卸皿				灰釉ハケヌリか 古瀬戸後期前半(14世紀後葉~15世紀前葉)か
13	瀬戸 折縁深皿				灰釉ナガシガケか 古瀬戸後期後半(15世紀中葉)か
14	瀬戸 折縁中皿				灰釉ハケヌリ 古瀬戸中期前半(13世紀末~14世紀前葉)
15	瀬戸 平碗				灰釉ツケガケ 古瀬戸中期~後期前半(14世紀~15世紀前葉)
16	青磁劃花文碗		(6.4)		龍泉窯
17	常滑 甕				10型式(15世紀後半)
18	常滑 甕か				内面摩滅
19	火鉢				瓦質 菊花文スタンプ
20	碁石	直径1.8		厚0.5	
21	碁石	残3.9	残幅2.3	残厚9.0	鳴滝産仕上碁 2面使用 両側面・小口1箇所が残る
22	碁石	残7.5	残幅4.0	残厚4.7	大草産中碁 1面使用
23	木製品 蓋か	直径2.4		厚0.7	側面にネジ状の溝あり
24	鉄製品 釘	残6.8	幅2.3	厚1.0	錆によるふくれ顕著
25	鉄製品 釘	残4.5	幅0.4	厚0.4	
26	鉄製品 釘	残4.8	幅0.9	厚0.5	
27	鉄製品 釘	残4.1	幅0.5	厚0.5	
28	鉄製品 釘	残長4.4	幅0.1	厚0.7	
29	鉄製品 釘	残長6.9	幅0.9	厚0.3	

30	鉄製品 釘	残長5.4	幅0.4	厚0.3	
31	鉄製品 釘	残長3.3	幅0.6	厚0.4	
32	鉄製品 釘	残長3.7	幅0.8	厚0.6	
33	鉄製品 釘	残長4.1	幅0.5	厚0.3	錆によるふくれ顕著
34	鉄製品 釘	残長6.8	幅1.0	厚0.8	
35	鉄製品 釘	残長5.8	幅1.3	厚0.5	
36	銅製品 管	長さ5.1	幅1.2		
37	銭 元祐通寶	径2.3	重2.9g		初鑄年1086(北宋)篆書

図8 1面まで出土遺物2

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
1	男瓦			厚2.1	A類 凸面縄目叩き
2	男瓦			厚2.4	B類
3	女瓦			厚2.5	C類 凸面斜格子目叩き 水殿瓦窯産
4	女瓦			厚2.0	D類

図9 1面・1面遺構出土遺物

1面

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(6.4)	(4.0)	1.9	轆轤成形
2	かわらけ	(6.8)	4.0	2.5	轆轤成形
3	かわらけ	7.2	4.8	1.5	轆轤成形
4	かわらけ	7.4	4.4	2.4	轆轤成形 口縁部に煤付着
5	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.7	轆轤成形
6	かわらけ	(6.8)	(4.4)	2.1	轆轤成形
7	かわらけ	(6.2)	(4.0)	2.1	轆轤成形
8	かわらけ	(7.4)	5.0	1.8	轆轤成形
9	かわらけ	(7.8)	5.0	1.9	轆轤成形
10	かわらけ	7.6	5.3	1.4	轆轤成形
11	かわらけ	7.2	4.6	2.0	轆轤成形
12	かわらけ	8.6	6.0	2.6	轆轤成形
13	かわらけ	(10.8)	(6.0)	3.0	轆轤成形
14	かわらけ	(12.8)	(7.0)	3.0	轆轤成形
15	かわらけ	13.6	8.0	3.5	轆轤成形
16	かわらけ	(11.8)	(6.0)	3.0	轆轤成形
17	かわらけ	(12.8)	(7.8)	3.0	轆轤成形
18	かわらけ	12.2	7.3	3.3	轆轤成形
19	かわらけ	13.2	6.4	3.4	轆轤成形
20	かわらけ	13.2	7.4	3.6	轆轤成形
21	瀬戸入子	5.6	2.1	1.9	
22	鉄製品 釘	残5.3	幅1.2	厚1.2	錆によるふくれ顕著
23	鉄製品 釘	残6.9	幅0.8	厚0.5	
24	鉄製品 釘	残7.3	幅0.9	厚0.7	錆によるふくれ顕著
25	鉄製品 釘	残3.5	幅0.8	厚0.6	

溝1

26	石(土丹)製品	直径1.5	高さ1.8		円柱形
27	石製品 硯	残12.1	残幅5.4	厚2.0	
28	かわらけ	7.8	5.1	1.9	轆轤成形 二次焼成を受ける
29	瀬戸折縁皿				灰釉ツケガケまたはナガシガケ 古瀬戸後期後半(15世紀中葉)か
30	瀬戸卸皿				灰釉ツケガケか 二次焼成による釉の剥落あり 古瀬戸後I期(14世紀後半)か
31	瀬戸水注				注ぎ口の破片 灰釉ツケガケか 古瀬戸中期～後期(14世紀～15世紀)か
32	白磁合子(蓋)	(5.0)			型作り 景德鎮窯
33	火鉢				瓦質
34	火鉢				瓦器質 菊花文スタンプ
35	鉄製品 釘	残4.9	幅1.5	厚1.2	錆によるふくれ顕著
36	砥石	残1.2	幅3.2	残厚0.2	鳴滝産仕上砥 両側面・小口一箇所が残る
37	砥石	残3.7	幅3.3	残厚1.5	鳴滝産仕上砥 1面使用

布堀1

38	かわらけ	(7.8)	(5.0)	2.2	轆轤成形
39	かわらけ	8.2	5.7	2.3	轆轤成形 口縁部に煤付着
40	鉄製品 釘	残4.3	幅0.4	厚0.3	

柱穴3

41	白磁碗か		(5.4)		
----	------	--	-------	--	--

柱穴4

42	鉄製品 釘	残3.3	幅0.7	厚0.6	
----	-------	------	------	------	--

土壇1

43	常滑 甕				6b型式(13世紀第4四半期)
44	常滑 甕				6b型式(13世紀第4四半期)

土壇4

45	鉄製品 釘	残4.0	幅0.6	厚0.5	
----	-------	------	------	------	--

図10 1面構成土出土遺物1

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	白かわらけ	(8.0)		2.0	手握ね成形
2	かわらけ	7.6	5.9	1.6	轆轤成形
3	かわらけ	7.4	5.2	1.5	轆轤成形
4	かわらけ	7.1	5.0	1.4	轆轤成形
5	かわらけ	7.6	5.6	1.6	轆轤成形
6	かわらけ	7.6	5.9	1.4	轆轤成形
7	かわらけ	(7.0)	(4.8)	1.5	轆轤成形
8	かわらけ	(7.7)	(5.7)	1.6	轆轤成形
9	かわらけ	7.2	5.0	1.6	轆轤成形
10	かわらけ	7.2	5.6	1.4	轆轤成形
11	かわらけ	8.0	5.0	1.6	轆轤成形 口縁部に煤付着
12	かわらけ	(8.0)	(5.5)	1.2	轆轤成形
13	かわらけ	7.8	5.9	1.6	轆轤成形
14	かわらけ	(7.5)	(5.7)	1.9	轆轤成形
15	かわらけ	(7.7)	(5.6)	1.6	轆轤成形
16	かわらけ	(7.4)	(5.3)	1.7	轆轤成形
17	かわらけ	(7.7)	(6.0)	1.6	轆轤成形
18	かわらけ	(7.6)	(5.4)	1.6	轆轤成形
19	かわらけ	(7.7)	(5.3)	1.5	轆轤成形
20	かわらけ	(8.0)	5.4	1.8	轆轤成形
21	かわらけ	7.4	5.0	1.8	轆轤成形
22	かわらけ	7.4	4.8	1.7	轆轤成形
23	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.7	轆轤成形
24	かわらけ	(8.2)	5.4	1.7	轆轤成形
25	かわらけ	8.2	5.6	1.6	轆轤成形
26	かわらけ	(8.0)	5.8	1.8	轆轤成形
27	かわらけ	7.6	5.2	1.7	轆轤成形
28	かわらけ	7.2	4.9	1.8	轆轤成形 口縁部に煤付着
29	かわらけ	(7.2)	4.8	1.6	轆轤成形
30	かわらけ	7.4	4.0	1.6	轆轤成形
31	かわらけ	7.7	5.0	1.7	轆轤成形
32	かわらけ	7.8	5.3	1.7	轆轤成形 口縁部に煤付着
33	かわらけ	(7.6)	5.3	1.9	轆轤成形
34	かわらけ	7.7	5.3	1.8	轆轤成形
35	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.7	轆轤成形
36	かわらけ	7.8	5.2	1.8	轆轤成形
37	かわらけ	7.8	4.8	1.8	轆轤成形
38	かわらけ	(7.7)	4.9	1.8	轆轤成形
39	かわらけ	7.8	5.6	1.2	轆轤成形
40	かわらけ	7.6	5.4	1.9	轆轤成形 口縁部に煤付着
41	かわらけ	7.4	5.0	1.7	轆轤成形 口縁部に煤付着
42	かわらけ	8.3	5.5	2.0	轆轤成形
43	かわらけ	(7.8)	(4.4)	1.8	轆轤成形
44	かわらけ	7.4	5.3	1.6	轆轤成形
45	かわらけ	(7.7)	(5.0)	1.8	轆轤成形
46	かわらけ	(6.8)	(4.6)	1.8	轆轤成形
47	かわらけ	(7.2)	(4.8)	1.6	轆轤成形
48	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.9	轆轤成形
49	かわらけ	8.0	4.6	1.8	轆轤成形
50	かわらけ	8.2	5.3	1.9	轆轤成形
51	かわらけ	(6.8)	(4.6)	1.7	轆轤成形
52	かわらけ	8.2	4.8	1.9	轆轤成形
53	かわらけ	(8.0)	(5.0)	2.0	轆轤成形
54	かわらけ	7.5	5.6	2.0	轆轤成形
55	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.9	轆轤成形
56	かわらけ	7.4	4.5	1.8	轆轤成形
57	かわらけ	(7.8)	5.4	2.0	轆轤成形 体部外面・内底に煤付着
58	かわらけ	7.8	5.2	1.9	轆轤成形
59	かわらけ	(7.4)	(5.1)	2.1	轆轤成形
60	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.8	轆轤成形
61	かわらけ	(7.6)	(4.4)	1.9	轆轤成形
62	かわらけ	(7.6)	(5.0)	1.8	轆轤成形
63	かわらけ	7.2	5.6	2.0	轆轤成形
64	かわらけ	(7.1)	(4.8)	2.1	轆轤成形
65	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.9	轆轤成形
66	かわらけ	(7.6)	(5.0)	2.1	轆轤成形
67	かわらけ	7.1	5.3	2.1	轆轤成形
68	かわらけ	(7.6)	4.2	2.0	轆轤成形
69	かわらけ	7.8	5.0	2.0	轆轤成形 歪み顕著
70	かわらけ	(7.8)	(4.6)	1.9	轆轤成形
71	かわらけ	(8.4)	(4.6)	2.4	轆轤成形
72	かわらけ	(7.8)	(5.4)	2.2	轆轤成形
73	かわらけ	7.4	4.7	2.2	轆轤成形 口縁部に煤付着
74	かわらけ	(7.2)	(4.8)	2.1	轆轤成形 全面に煤付着

図11 1面構成土出土遺物2

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(6.8)	4.0	2.0	轆轤成形 底面に穿孔あり
2	かわらけ	(10.6)	(6.5)	2.7	轆轤成形
3	かわらけ	(11.0)	(7.3)	3.1	轆轤成形
4	かわらけ	(11.4)	6.8	3.0	轆轤成形
5	かわらけ	(11.3)	(6.4)	2.8	轆轤成形
6	かわらけ	11.4	6.6	3.1	轆轤成形
7	かわらけ	(12.4)	(7.6)	2.7	轆轤成形 内面に煤付着
8	かわらけ	(12.3)	(8.2)	(2.8)	轆轤成形
9	かわらけ	(11.8)	(7.0)	3.3	轆轤成形
10	かわらけ	(12.0)	(7.4)	3.2	轆轤成形
11	かわらけ	(11.6)	7.2	3.5	轆轤成形
12	かわらけ	(12.4)	8.0	3.0	轆轤成形
13	かわらけ	(12.4)	(6.1)	3.4	轆轤成形
14	かわらけ	12.4	7.5	3.0	轆轤成形
15	かわらけ	(12.8)	(8.0)	3.3	轆轤成形
16	かわらけ	(12.6)	(8.2)	3.3	轆轤成形
17	かわらけ	(12.8)	(7.4)	3.4	轆轤成形
18	かわらけ	(12.8)	(9.0)	3.1	轆轤成形
19	かわらけ	12.8	7.7	3.0	轆轤成形
20	かわらけ	(12.8)	(7.6)	3.1	轆轤成形
21	かわらけ	(13.4)	(7.6)	3.8	轆轤成形
22	かわらけ	12.8	7.9	3.6	轆轤成形
23	かわらけ	(13.6)	8.3	3.7	轆轤成形
24	かわらけ	12.8	6.6	3.3	轆轤成形
25	かわらけ	(12.8)	(8.2)	3.5	轆轤成形
26	かわらけ	(13.8)	8.0	3.6	轆轤成形 口縁部に煤付着
27	かわらけ	12.8	7.0	3.7	轆轤成形
28	かわらけ	(13.2)	8.0	3.6	轆轤成形
29	かわらけ	(13.2)	(7.6)	3.8	轆轤成形
30	砥石	長6.7	幅5.4	厚2.6	伊予産中砥 2面使用 両側面が残る
31	砥石	残6.7	幅3.5	厚1.0	鳴滝産仕上砥 2面使用 両側面に工具痕 小口1箇所が残る
32	砥石	残5.7	幅3.5	厚1.2	鳴滝産仕上砥 1面使用 1面自然切離 小口と両側面に工具痕あり
33	砥石	残3.3	幅3.3	厚3.7	伊予産中砥 3面使用

図12 1面構成土出土遺物3

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	火鉢				瓦質 口縁部付近に穿孔あり 2・10・12・14は同じ個体
2	火鉢				瓦質
3	火鉢				瓦器 内側からの貫通しない穿孔あり
4	火鉢				瓦質 菊花文スタンプ 5と同一個体か
5	火鉢				瓦質 菊花文スタンプ
6	火鉢				瓦質 菊花文スタンプ・珠文 15と同一個体か
7	火鉢				瓦質 8弁花文スタンプ・珠文
8	火鉢				瓦質 菊花文スタンプ
9	火鉢				瓦質 桜文スタンプ
10	火鉢		(30.4)		瓦質
11	火鉢				瓦質
12	火鉢				瓦質 脚部片 穿孔あり
13	火鉢				瓦質
14	火鉢				瓦質 脚部に穿孔あり
15	火鉢				瓦質 菊花文スタンプ
16	漆器 椀または皿				漆の皮膜のみ 黒漆 文様朱漆、手描き
17	漆器 椀または皿				漆の皮膜のみ 黒漆 文様朱漆、手描き
18	漆器 椀または皿				漆の皮膜のみ 黒漆 文様朱漆、手描き

図13 1面構成土出土遺物4

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	常滑 甕	(43.4)			9型式(15世紀前半)
2	常滑 甕				10型式(15世紀後半)
3	常滑片口鉢(I類)	(28.8)			5型式(13世紀中葉)か
4	常滑片口鉢(I類)		(13.4)		4~6a型式(13世紀初頭~後葉) 内面摩滅顕著
5	常滑片口鉢(I類)				4~6a型式(13世紀初頭~後葉)
6	常滑片口鉢(I類)				4~6a型式(13世紀初頭~後葉)
7	常滑片口鉢(II類)	(28.2)			7型式(14世紀前半)か
8	常滑片口鉢(II類)				7型式(14世紀前半)か
9	常滑片口鉢(II類)	(30.6)			7型式(14世紀前半)か
10	常滑片口鉢(II類)				7型式(14世紀前半)か
11	常滑片口鉢(II類)	(29.8)			8~9型式(14世紀後半~15世紀前半)か
12	常滑片口鉢(II類)				10型式(15世紀後半)か
13	常滑片口鉢(II類)		(13.0)		内面摩滅顕著
14	常滑片口鉢(II類)				7型式(14世紀前半)か
15	常滑片口鉢(II類)	28.0	15.0	11.7	8~9型式(14世紀後半~15世紀前半)か 内面口縁付近に竹管文 内面摩滅顕著

図14 1面構成土出土遺物5

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	瀬戸卸皿	(16.2)	(11.8)	3.4	灰釉ハケヌリ 古瀬戸前IV～中I期(13世紀後葉～14世紀初頭)か
2	瀬戸卸皿				灰釉ハケヌリ 古瀬戸前IV～中II期(13世紀後葉～14世紀前葉)か 3～5と同一個体か
3	瀬戸卸皿				灰釉ハケヌリ
4	瀬戸卸皿				灰釉ハケヌリ
5	瀬戸卸皿	(19.0)			灰釉ハケヌリ
6	瀬戸卸皿				灰釉ハケヌリ 古瀬戸前IV～中II期(13世紀後葉～14世紀前葉)か
7	瀬戸卸皿				灰釉ハケヌリ 古瀬戸前IV～中II期(13世紀後葉～14世紀前葉)か
8	瀬戸卸皿		(7.3)		外側面・内底を灰釉ハケヌリ 古瀬戸前～中I期(13世紀～14世紀初頭)か
9	瀬戸卸皿		8.2		内底W僅かに灰釉ハケヌリ 外面の施釉方法は不明古瀬戸中III～後期前半(14世紀中～15世紀前葉)
10	瀬戸卸皿		(8.6)		外側面・内底を灰釉ハケヌリ 古瀬戸前～中I期(13世紀～14世紀初頭)か 内底に釘付着
11	瀬戸四耳壺				灰釉ハケヌリ 古瀬戸前期～中IV期(13世紀～14世紀中葉)か
12	瀬戸入子	(5.8)	(3.1)	2.0	内面口縁部付近自然降灰 古瀬戸前IV～後I期(13世紀後葉～14世紀後葉)
13	瀬戸折縁深皿		(13.4)		内底に同心円状の沈線あり 外面灰釉ハケヌリ、内面灰釉ナガシガケ 古瀬戸前IV～後II期(13世紀後葉～15世紀初頭)
14	天目碗				黒釉 口縁部褐釉 船載か
15	青磁香炉か	(19.0)			内面釉はぎ
16	錢 乾元重寶	径2.4	重2.5g		初鑄年 758(唐)
17	錢 景德元寶	径2.4	重2.7g		初鑄年 1004(北宋)
18	錢 景德元寶	径2.4	重2.7g		初鑄年 1004(北宋)
19	錢 皇宋通寶	径2.4	重3.1g		初鑄年 1038(北宋)真書
20	錢 政和通寶	径2.4	重3.0g		初鑄年 1111(北宋)
21	鉄製品 釘	残2.4	幅0.3	厚0.3	
22	鉄製品 釘	残3.8	幅0.6	厚0.5	
23	鉄製品 釘	残3.5	幅0.6	厚0.7	
24	鉄製品 釘	残3.8	幅0.9	厚1.0	
25	鉄製品 釘	残4.4	幅0.6	厚0.5	
26	鉄製品 釘	残4.5	幅0.7	厚0.8	
27	鉄製品 釘	残4.0	幅0.7	厚0.6	錆によるふくれ顕著
28	鉄製品 釘	残4.0	幅0.7	厚0.5	
29	鉄製品 釘	残4.0	幅0.8	厚0.9	
30	鉄製品 釘	残5.8	幅0.5	厚0.5	
31	鉄製品 釘	残5.8	幅0.8	厚0.8	
32	鉄製品 釘	残5.9	幅0.9	厚1.0	
33	鉄製品 釘	残6.2	幅0.5	厚0.5	
34	鉄製品 釘	残5.8	幅0.8	厚0.8	
35	鉄製品 釘	残3.5	幅1.7	厚0.9	錆によるふくれ顕著
36	鉄製品 釘	残4.5	幅1.6	厚1.2	錆によるふくれ顕著
37	鉄製品 釘	残3.5	幅1.4	厚0.9	錆によるふくれ顕著
38	鉄製品 釘	残5.6	幅1.3	厚1.2	錆によるふくれ顕著

図15 1面構成土出土遺物6 図16 1面構成土出土遺物7

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
1	女瓦			厚1.6	D類
2	女瓦			厚1.6	D類
3	女瓦				A類 凸面縄目叩き
4	女瓦			厚1.6	D類 凸面なで
5	女瓦			厚1.6	D類 凸面斜格子目叩き
6	女瓦			厚2.1	C類 凸面斜格子目叩き 水殿瓦窯産
7	女瓦			厚1.8	D類
8	女瓦			厚1.9	D類
9	女瓦			厚2.0	D類
10	女瓦			厚2.0	D類
11	女瓦			厚2.0	D類 凸面の叩き目は二本の横線
12	女瓦			厚2.0	D類 凸面斜格子目叩き 端部に竹管スタンプあり

図16 1面構成土出土遺物7

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
1	女瓦			厚2.0	D類
2	女瓦			厚1.9	D類 凸面斜格子目叩き
3	女瓦			厚2.0	D類 凸面斜格子目叩き
4	女瓦			厚1.9	D類 凸面斜格子目叩き
5	女瓦			厚2.1	D類
6	女瓦			厚2.0	D類 凸面なで
7	女瓦			厚2.0	D類 凸面斜格子目叩き

図17 1面構成土出土遺物8

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
1	女瓦			厚2.0	D類 凸面斜格子目叩き

2	女瓦			厚2.0	D類	凸面斜格子目叩き
3	女瓦			厚2.1	D類	凸面叩き目は二本の横線・斜格子
4	女瓦			厚2.0	D類	凸面斜格子目叩き
5	女瓦			厚2.0	D類	
6	女瓦			厚1.8	D類	凸面斜格子目叩き
7	女瓦			厚1.9	D類	凸面斜格子目叩き
8	女瓦			厚2.0	D類	凸面斜格子目叩き

図18 1面構成土出土遺物9

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
1	男瓦			不明	A類 段部片 凸面に+印の線刻あり
2	男瓦			厚2.0	D類
3	男瓦			厚2.0	D類
4	男瓦			厚2.0	D類
5	鏡瓦			厚2.1	D類 瓦当欠損

図20 2面出土遺物1

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	7.4	5.7	1.6	轆轤成形
2	かわらけ	(6.8)	(5.6)	1.6	轆轤成形
3	かわらけ	(7.0)	(5.6)	1.7	轆轤成形
4	かわらけ	(6.8)	(5.0)	1.8	轆轤成形
5	かわらけ	7.4	5.4	1.9	轆轤成形
6	かわらけ	7.8	5.4	1.10	轆轤成形
7	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.11	轆轤成形
8	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.12	轆轤成形
9	かわらけ	7.8	5.5	1.13	轆轤成形
10	かわらけ	(7.8)	5.2	1.14	轆轤成形
11	かわらけ	(7.8)	(1.8)	1.15	轆轤成形 口縁部に煤付着
12	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.16	轆轤成形
13	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.17	轆轤成形
14	かわらけ	7.8	4.9	1.18	轆轤成形
15	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.19	轆轤成形
16	かわらけ	8.0	5.5	1.20	轆轤成形 全体にわずかな煤付着
17	かわらけ	(7.8)	6.0	1.21	轆轤成形 口縁部に煤付着
18	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.22	轆轤成形
19	かわらけ	7.8	5.4	1.23	轆轤成形
20	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.24	轆轤成形
21	かわらけ	7.8	5.0	1.25	轆轤成形
22	かわらけ	7.6	5.4	1.26	轆轤成形 口縁部に煤付着
23	かわらけ	7.8	5.3	1.27	轆轤成形
24	かわらけ	8.2	5.0	1.28	轆轤成形
25	かわらけ	7.8	5.0	1.29	轆轤成形
26	かわらけ	7.8	5.6	1.30	轆轤成形
27	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.31	轆轤成形 内底に釘付着
28	かわらけ	(8.0)	(4.8)	1.32	轆轤成形
29	かわらけ	(7.4)	(4.6)	1.33	轆轤成形
30	かわらけ	7.8	4.9	1.34	轆轤成形
31	かわらけ	7.8	5.3	1.35	轆轤成形
32	かわらけ	8.0	5.0	1.36	轆轤成形
33	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.37	轆轤成形
34	かわらけ	7.4	5.2	1.38	轆轤成形
35	かわらけ	7.8	5.5	1.39	轆轤成形
36	かわらけ	7.4	5.2	1.40	轆轤成形
37	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.41	轆轤成形
38	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.42	轆轤成形
39	かわらけ	7.6	5.2	1.43	轆轤成形
40	かわらけ	(7.0)	(4.8)	1.44	轆轤成形
41	かわらけ	7.6	5.1	1.45	轆轤成形
42	かわらけ	7.4	4.6	1.46	轆轤成形
43	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.47	轆轤成形
44	かわらけ	7.8	5.2	1.48	轆轤成形
45	かわらけ	(8.0)	(4.8)	1.49	轆轤成形
46	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.50	轆轤成形
47	かわらけ	7.6	5.4	1.51	轆轤成形
48	かわらけ	7.8	5.4	1.52	轆轤成形
49	かわらけ	(7.6)	(5.0)	1.53	轆轤成形
50	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.54	轆轤成形
51	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.55	轆轤成形
52	かわらけ	7.8	5.0	1.56	轆轤成形 口縁部に煤付着
53	かわらけ	(7.8)	(4.8)	1.57	轆轤成形
54	かわらけ	7.8	5.3	1.58	轆轤成形
55	かわらけ	(8.0)	(5.6)	1.59	轆轤成形
56	かわらけ	8.2	4.9	1.60	轆轤成形
57	かわらけ	7.8	5.5	1.61	轆轤成形
58	かわらけ	7.8	4.7	1.62	轆轤成形
59	かわらけ	7.6	5.0	1.63	轆轤成形
60	かわらけ	7.8	(5.4)	1.64	轆轤成形

61	かわらけ	8.0	5.0	1.65	轆轤成形	口縁部に煤付着
62	かわらけ	7.6	5.4	1.66	轆轤成形	
63	かわらけ	7.8	5.0	1.67	轆轤成形	
64	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.68	轆轤成形	
65	かわらけ	8.0	4.7	1.69	轆轤成形	
66	かわらけ	7.4	4.0	1.70	轆轤成形	
67	かわらけ	7.8	4.8	1.71	轆轤成形	口縁部に煤付着
68	かわらけ	7.8	4.9	1.72	轆轤成形	
69	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.73	轆轤成形	
70	かわらけ	6.8	4.6	1.74	轆轤成形	
71	かわらけ	6.6	4.4	1.75	轆轤成形	
72	かわらけ	6.6	4.0	1.76	轆轤成形	
73	かわらけ	6.8	4.2	1.77	轆轤成形	
74	かわらけ	7.4	4.7	1.78	轆轤成形	
75	かわらけ	7.2	4.6	1.79	轆轤成形	
76	かわらけ	7.2	4.8	1.80	轆轤成形	
77	かわらけ	(6.8)	(4.6)	1.81	轆轤成形	
78	かわらけ	(6.8)	4.0	1.82	轆轤成形	
79	かわらけ	(6.8)	(3.6)	1.83	轆轤成形	
80	かわらけ	7.4	4.0	1.84	轆轤成形	体部に穿孔あり
81	かわらけ	7.4	5.0	1.85	轆轤成形	
82	かわらけ	(6.8)	4.2	1.86	轆轤成形	
83	かわらけ	(6.4)	(4.0)	1.87	轆轤成形	
84	白かわらけ	(8.7)	(4.3)	1.88	轆轤成形	口縁部に煤付着

図21 2面出土遺物2

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(12.4)	(8.0)	2.7	轆轤成形
2	かわらけ	(12.2)	7.4	3.3	轆轤成形
3	かわらけ	(11.8)	7.6	3.6	轆轤成形
4	かわらけ	12.4	8.4	3.0	轆轤成形
5	かわらけ	(12.8)	7.4	3.4	轆轤成形
6	かわらけ	12.0	7.5	3.5	轆轤成形
7	かわらけ	12.2	7.6	3.3	轆轤成形 口縁部・体部に煤付着
8	かわらけ	13.4	7.3	3.4	轆轤成形
9	かわらけ	(12.3)	(8.4)	3.3	轆轤成形
10	かわらけ	12.4	7.0	3.5	轆轤成形
11	かわらけ	12.8	8.2	3.1	轆轤成形
12	かわらけ	12.8	6.7	3.6	轆轤成形
13	かわらけ	(12.8)	7.0	3.5	轆轤成形
14	かわらけ	(12.4)	(8.0)	3.3	轆轤成形
15	かわらけ	13.2	8.2	3.3	轆轤成形
16	かわらけ	(12.8)	(7.4)	3.0	轆轤成形
17	かわらけ	(12.8)	(7.4)	3.5	轆轤成形
18	かわらけ	13.0	7.0	3.3	轆轤成形
19	かわらけ	(12.8)	(7.2)	3.5	轆轤成形
20	かわらけ	(12.8)	6.6	3.6	轆轤成形
21	かわらけ	13.0	8.8	3.3	轆轤成形
22	かわらけ	(12.8)	8.0	3.5	轆轤成形
23	かわらけ	(13.0)	(7.4)	3.4	轆轤成形
24	かわらけ	12.8	6.8	3.6	轆轤成形
25	かわらけ	13.0	7.0	3.6	轆轤成形
26	かわらけ	12.8	7.2	3.4	轆轤成形
27	かわらけ	(13.0)	(8.0)	3.8	轆轤成形
28	かわらけ	13.6	7.6	3.7	轆轤成形
29	かわらけ	(13.4)	8.2	3.6	轆轤成形
30	かわらけ	(12.8)	(8.0)	3.6	轆轤成形
31	かわらけ	13.2	7.0	3.8	轆轤成形
32	かわらけ	(13.8)	8.0	3.0	轆轤成形 口縁部を故意に欠く
33	かわらけ	(12.8)	(7.0)	3.5	轆轤成形
34	かわらけ	13.8	7.0	3.6	轆轤成形 口縁部に煤付着
35	かわらけ	13.2	7.3	3.5	轆轤成形
36	かわらけ	(13.8)	(8.4)	4.0	轆轤成形
37	かわらけ	(13.4)	(8.0)	3.6	轆轤成形
38	かわらけ	(13.8)	8.0	3.6	轆轤成形
39	かわらけ	(13.4)	(8.0)	4.4	轆轤成形
40	かわらけ	(14.8)	(10.0)	3.5	轆轤成形
41	かわらけ	(13.8)	(7.8)	3.9	轆轤成形

図22 2面出土遺物3

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(9.8)	(6.6)	2.9	轆轤成形
2	かわらけ	11.0	6.5	3.1	轆轤成形
3	かわらけ	(10.2)	(5.4)	3.2	轆轤成形
4	かわらけ	(10.2)	(5.8)	3.0	轆轤成形
5	かわらけ	10.6	6.8	2.8	轆轤成形
6	かわらけ	(10.0)	(6.0)	3.0	轆轤成形

7	かわらけ	10.8	6.4	2.8	轆轤成形	
8	かわらけ	10.8	6.9	3.0	轆轤成形	
9	かわらけ	(10.8)	(5.8)	3.1	轆轤成形	
10	かわらけ	(10.8)	(6.6)	2.8	轆轤成形	
11	かわらけ	(10.8)	6.6	2.7	轆轤成形	
12	かわらけ	(11.0)	6.0	2.8	轆轤成形	底部に貫通しない穿孔あり
13	かわらけ	(11.2)	5.6	3.3	轆轤成形	
14	かわらけ	(10.8)	(7.0)	3.1	轆轤成形	口縁部に煤付着
15	かわらけ	11.8	3.6	2.9	轆轤成形	
16	かわらけ	11.6	6.8	3.3	轆轤成形	
17	かわらけ	(11.8)	(6.8)	3.3	轆轤成形	
18	かわらけ	12.0	7.4	3.0	轆轤成形	
19	かわらけ	(11.8)	7.0	3.6	轆轤成形	
20	かわらけ	12.0	7.7	3.2	轆轤成形	
21	かわらけ	12.0	7.6	3.1	轆轤成形	
22	かわらけ	(12.2)	7.4	3.4	轆轤成形	口縁部・体部に煤付着
23	かわらけ	(12.0)	7.4	3.3	轆轤成形	
24	かわらけ	(12.4)	(7.4)	3.0	轆轤成形	内底に煤付着
25	かわらけ	(12.2)	7.0	3.8	轆轤成形	
26	かわらけ	(11.8)	(7.2)	3.4	轆轤成形	
27	かわらけ	7.7	5.6	2.4	轆轤成形	木片・釘付着
28	かわらけ				直径4.0	かわらけの底部を円盤状に加工したもの
29	かわらけ				底径(5.0)	のかわらけを加工したもの
30	青磁折縁皿				龍泉窯	
31	青白磁水注				景德鎮窯か	
32	産地不明陶器	(13.3)			常滑の片口か	13世紀中葉か

図23 2面出土遺物4

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	瀬戸卸皿	(15.2)	(10.0)	3.2	灰釉ハケヌリ古瀬戸中Ⅰ～Ⅱ期(13世紀末～14世紀前葉)
2	瀬戸入子		3.0		残存部は無釉 古瀬戸13～14世紀か
3	瀬戸入子				残存部は無釉 古瀬戸13～14世紀か
4	瀬戸入子	7.8			内面自然降灰 古瀬戸13～14世紀
5	常滑片口鉢(Ⅱ類)				7型式(14世紀前半)か 6・10と同一個体か
6	常滑片口鉢(Ⅱ類)				
7	常滑片口鉢(Ⅱ類)		(13.0)		内面摩滅
8	常滑片口鉢(Ⅱ類)				10型式(15世紀後半)か
9	常滑片口鉢(Ⅱ類)				8型式(14世紀後半)か
10	常滑片口鉢(Ⅱ類)				
11	常滑片口鉢(Ⅱ類)				8型式(14世紀後半)か
12	火鉢				瓦質 脚部剥落
13	火鉢	(31.4)			瓦質
14	火鉢				瓦質 菊花文スタンプ
15	火鉢		(29.6)		瓦質 脚部片
16	火鉢		(24.0)		土器質
17	火鉢				瓦質 菊花文スタンプ
18	火鉢	(35.4)	(28.0)	10.0	瓦質
19	土器	(8.0)			外面に2条の沈線あり 内面に漆喰と思われる付着物あり図6-4と同一個体か
20	滑石製鍋転用品	長3.2	幅6.6	厚1.0	鍋の体部を台形に切断 内面に文様を刻む

図24 2面出土遺物5

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		長さ	幅	厚	
1	女瓦			厚2.0	D類 凸面斜格子目叩き
2	女瓦			厚2.0	D類 凸面斜格子目叩き
3	女瓦			厚1.8	D類 凸面斜格子目叩き
4	女瓦			厚1.6	D類
5	女瓦			厚1.6	D類 凸面斜格子目叩き
6	男瓦			厚2.5	A類 凸面縄目叩き
7	瓦加工品	長さ7.4	幅3.6	厚1.8	両側面と片面を磨いている C類
8	砥石	長さ6.4	幅4.5	厚4.2	伊予産中砥 4面使用
9	砥石	長さ7.2	幅6.4	厚3.1	伊予産中砥 4面使用 1面使用 両側面が残る
10	砥石	長さ7.7	幅4.8	厚3.0	伊予産中砥 4面使用 小口一箇所が残る
11	砥石	長さ7.8	幅5.6	厚3.0	上野産中砥 4面使用
12	砥石	長さ7.8	幅3.6	厚2.7	伊予産中砥 4面使用 小口一箇所が残る
13	砥石	長さ7.7	幅4.8	厚3.0	伊予産中砥 4面使用
14	砥石	長さ2.9	幅4.4	厚0.8	鳴滝産仕上砥 2面使用 両側面が残る
15	砥石	長さ4.0	幅3.8	厚0.5	鳴滝産仕上砥 2面使用 両側面・小口一箇所が残る
16	砥石	長さ1.8	幅3.0	厚0.3	鳴滝産仕上砥 1面使用 裏面は自然切離 両側面が残る

図25 2面出土遺物6

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	銭 太平通寶	径2.4	重3.9g		初鑄年 976(北宋)真書
2	銭 咸平元寶	径2.4	重3.0g		初鑄年 998(北宋)真書

3	錢 至道元寶	径2.4	重4.1g		初鑄年 995(北宋)真書
4	錢 皇宋通寶	径2.4	重3.2g		初鑄年1038(北宋)真書
5	錢 治平元寶か	径2.3	重2.9g		初鑄年1064(北宋)
6	錢 熙寧元寶	径2.4	重2.3g		初鑄年1068(北宋)真書
7	錢 元豐通寶	径2.3	重3.8g		初鑄年1078(北宋)篆書
8	錢 元祐通寶	径2.3	重3.9g		初鑄年1086(北宋)行書
9	錢 元祐通寶	径2.4	重3.3g		初鑄年1086(北宋)行書
10	錢 元祐通寶	径2.4	重3.9g		初鑄年1086(北宋)篆書
11	錢 元祐通寶	径2.3	重3.8g		初鑄年1086(北宋)篆書
12	鉄製品 釘	長9.0	幅0.6	厚0.7	
13	漆器 椀か				漆の皮膜のみ 黒漆 文様朱漆、手描き

図26 2面遺構出土遺物

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(6.8)	(5.6)	1.6	轆轤成形
2	かわらけ	7.6	4.8	2.2	轆轤成形
3	かわらけ	13.0	7.6	3.9	轆轤成形
4	かわらけ	(12.8)	(7.8)	3.6	轆轤成形
柱穴118					
5	かわらけ	(7.2)	(4.6)	1.5	轆轤成形
6	かわらけ	(13.0)	(8.0)	3.3	轆轤成形
7	かわらけ	(7.4)	(5.8)	1.3	轆轤成形
8	かわらけ	(12.6)	(6.8)	3.3	轆轤成形
9	かわらけ	(10.8)	(6.0)	2.9	轆轤成形
柱穴28					
10	かわらけ	7.8	5.7	1.8	轆轤成形
11	かわらけ	8.4	5.7	1.6	轆轤成形
12	かわらけ	8.2	6.0	1.8	轆轤成形
柱穴17					
13	かわらけ	(12.2)	7.4	3.2	轆轤成形
柱穴18					
14	かわらけ	(12.2)	7.0	3.5	轆轤成形
柱穴120					
15	かわらけ	7.8	4.6	2.0	轆轤成形
柱穴108					
16	かわらけ	(8.6)	(4.0)	3.1	轆轤成形
柱穴110					
17	かわらけ	(12.8)	(8.8)	3.5	轆轤成形
柱穴14					
18	かわらけ		6.6		轆轤成形 口縁を打ち欠く 煤付着
柱穴10					
19	常滑 甕				8~9型式(14世紀後半~15世紀前半)
柱穴29					
20	砥石	残長6.6	残幅2.2	残厚3.5	伊予産中砥

図27 2面構成土出土遺物1

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	9.8		2.1	手捏ね成形
2	かわらけ	(8.0)	(7.4)	1.4	轆轤成形
3	かわらけ	7.4	5.4	1.4	轆轤成形
4	かわらけ	(8.0)	(6.4)	1.5	轆轤成形
5	かわらけ	(7.8)	(6.4)	1.6	轆轤成形
6	かわらけ	7.4	5.9	1.5	轆轤成形
7	かわらけ	(7.2)	(5.1)	1.5	轆轤成形
8	かわらけ	(7.5)	(5.2)	1.4	轆轤成形
9	かわらけ	7.4	6.2	1.5	轆轤成形
10	かわらけ	7.4	5.3	1.4	轆轤成形 口縁部に煤付着
11	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.3	轆轤成形
12	かわらけ	(7.7)	(5.6)	1.4	轆轤成形
13	かわらけ	(7.6)	(5.0)	1.4	轆轤成形
14	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.5	轆轤成形
15	かわらけ	7.6	4.7	1.4	轆轤成形
16	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.6	轆轤成形
17	かわらけ	(11.4)	6.0	3.3	轆轤成形
18	かわらけ	(7.6)	(5.8)	1.5	轆轤成形
19	かわらけ	7.0	4.9	1.3	轆轤成形
20	かわらけ	(7.7)	(5.8)	1.7	轆轤成形 口縁部に煤付着
21	かわらけ	7.2	5.4	1.5	轆轤成形
22	かわらけ	7.4	5.1	1.5	轆轤成形 内面に煤付着
23	かわらけ	7.4	4.8	1.7	轆轤成形 口縁部に煤付着
24	かわらけ	7.4	5.0	1.7	轆轤成形
25	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.4	轆轤成形
26	かわらけ	(7.2)	(5.6)	1.6	轆轤成形
27	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.6	轆轤成形
28	かわらけ	7.2	4.8	1.6	轆轤成形
29	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.5	轆轤成形

30	かわらけ	(8.2)	(5.2)	1.6	轆轤成形	
31	かわらけ	8.0	5.2	1.7	轆轤成形	
32	かわらけ	7.6	5.7	1.5	轆轤成形	
33	かわらけ	(7.6)	(5.4)	1.5	轆轤成形	
34	かわらけ	7.6	5.7	1.5	轆轤成形	
35	かわらけ	7.6	6.0	1.4	轆轤成形	
36	かわらけ	7.6	5.5	1.4	轆轤成形	内面・外面・底部に煤付着
37	かわらけ	7.6	5.4	1.6	轆轤成形	
38	かわらけ	(7.7)	(5.5)	1.6	轆轤成形	
39	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.5	轆轤成形	
40	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.3	轆轤成形	
41	かわらけ	7.2	5.0	1.5	轆轤成形	全体に煤付着
42	かわらけ	7.6	5.4	1.6	轆轤成形	
43	かわらけ	7.4	4.8	1.7	轆轤成形	
44	かわらけ	(7.5)	5.2	1.7	轆轤成形	
45	かわらけ	(8.0)	5.6	1.7	轆轤成形	
46	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.6	轆轤成形	
47	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.6	轆轤成形	
48	かわらけ	7.4	4.7	1.6	轆轤成形	
49	かわらけ	(7.2)	(5.2)	1.7	轆轤成形	
50	かわらけ	7.8	5.3	2.0	轆轤成形	歪み顕著
51	かわらけ	7.8	5.5	1.6	轆轤成形	口縁部・外側面に煤付着
52	かわらけ	(7.3)	5.0	1.7	轆轤成形	内面に煤付着
53	かわらけ	(7.6)	(5.5)	1.7	轆轤成形	
54	かわらけ	(7.6)	(5.4)	1.6	轆轤成形	
55	かわらけ	7.2	5.2	1.7	轆轤成形	
56	かわらけ	7.7	5.6	1.9	轆轤成形	全体に煤付着
57	かわらけ	7.7	5.4	1.7	轆轤成形	口縁部に煤付着
58	かわらけ	(8.0)	(5.8)	1.7	轆轤成形	
59	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.8	轆轤成形	
60	かわらけ	(7.6)	(5.4)	1.8	轆轤成形	
61	かわらけ	7.9	6.1	1.8	轆轤成形	
62	かわらけ	(8.0)	5.4	1.9	轆轤成形	
63	かわらけ	(8.0)	(5.6)	1.9	轆轤成形	
64	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.7	轆轤成形	口縁部に煤付着
65	かわらけ	8.0	5.4	1.8	轆轤成形	口縁部に煤付着
66	かわらけ	8.0	5.4	1.8	轆轤成形	
67	かわらけ	(8.8)	(6.0)	1.8	轆轤成形	
68	かわらけ	(8.4)	(6.0)	1.7	轆轤成形	
69	かわらけ	(8.0)	(5.8)	1.6	轆轤成形	
70	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.8	轆轤成形	
71	かわらけ	(8.5)	(6.2)	1.7	轆轤成形	
72	かわらけ	8.2	6.0	1.9	轆轤成形	
73	かわらけ	8.4	6.1	1.9	轆轤成形	
74	かわらけ	(8.5)	(6.2)	1.9	轆轤成形	口縁部に煤付着

図28 2面構成土出土遺物2

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	7.8	5.0	1.6	轆轤成形
2	かわらけ	(7.4)	(5.2)	1.6	轆轤成形 口縁部・体部に煤付着
3	かわらけ	7.8	4.3	1.7	轆轤成形
4	かわらけ	(7.5)	4.6	1.8	轆轤成形
5	かわらけ	(6.8)	(4.8)	1.6	轆轤成形
6	かわらけ	7.4	5.3	1.6	轆轤成形
7	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.7	轆轤成形
8	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.5	轆轤成形
9	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.7	轆轤成形
10	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.7	轆轤成形
11	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.9	轆轤成形
12	かわらけ	(7.1)	4.8	1.6	轆轤成形
13	かわらけ	(8.0)	4.6	1.5	轆轤成形
14	かわらけ	(7.2)	4.8	1.5	轆轤成形
15	かわらけ	(7.3)	(4.7)	1.9	轆轤成形
16	かわらけ	6.8	4.2	1.7	轆轤成形
17	かわらけ	7.4	5.0	1.9	轆轤成形
18	かわらけ	7.4	4.8	1.7	轆轤成形 体部・底部に煤付着
19	かわらけ	(7.0)	(4.4)	1.8	轆轤成形
20	かわらけ	(7.6)	(5.0)	1.6	轆轤成形
21	かわらけ	(7.8)	(4.8)	1.5	轆轤成形 残存部全体に煤付着
22	かわらけ	7.6	5.3	1.6	轆轤成形
23	かわらけ	7.9	4.6	1.8	轆轤成形
24	かわらけ	8.0	5.5	2.3	轆轤成形 口縁部に煤付着
25	かわらけ	(7.8)	(4.9)	1.6	轆轤成形 口縁部・内底部に煤付着
26	かわらけ	8.0	5.3	1.8	轆轤成形
27	かわらけ	7.5	5.6	1.9	轆轤成形
28	かわらけ	7.6	4.8	1.8	轆轤成形
29	かわらけ	8.0	4.5	1.9	轆轤成形
30	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.7	轆轤成形 全体に煤付着

31	かわらけ	7.7	6.2	1.9	轆轤成形	口縁部に煤付着
32	かわらけ	(7.8)	(4.2)	1.6	轆轤成形	
33	かわらけ	(7.8)	(5.0)	2.0	轆轤成形	
34	かわらけ	7.6	4.6	1.8	轆轤成形	
35	かわらけ	(7.4)	(5.2)	1.9	轆轤成形	
36	かわらけ	7.7	4.9	1.4	轆轤成形	
37	かわらけ	8.2	5.1	2.0	轆轤成形	
38	かわらけ	8.0	5.0	1.9	轆轤成形	
39	かわらけ	(7.8)	5.0	1.7	轆轤成形	
40	かわらけ	7.9	5.6	2.0	轆轤成形	
41	かわらけ	7.4	4.5	2.0	轆轤成形	
42	かわらけ	(7.4)	(4.7)	1.9	轆轤成形	口縁部に煤付着
43	かわらけ	(7.4)	(4.9)	2.2	轆轤成形	口縁部に煤付着
44	かわらけ	7.0	4.2	2.1	轆轤成形	
45	かわらけ	6.7	4.1	2.1	轆轤成形	
46	かわらけ	(8.0)	(5.0)	2.3	轆轤成形	
47	かわらけ	(11.8)	(6.4)	2.9	轆轤成形	
48	かわらけ	(11.4)	6.0	3.0	轆轤成形	
49	かわらけ	(11.2)	7.0	3.0	轆轤成形	
50	かわらけ	11.7	6.8	3.2	轆轤成形	
51	かわらけ	(11.8)	(7.4)	3.1	轆轤成形	
52	かわらけ	(11.8)	(7.8)	2.9	轆轤成形	
53	かわらけ	(12.2)	(7.5)	3.2	轆轤成形	
54	かわらけ	(11.8)	(7.0)	3.4	轆轤成形	
55	かわらけ	(11.8)	(8.2)	3.4	轆轤成形	
56	かわらけ	(12.3)	(6.4)	3.2	轆轤成形	
57	かわらけ	(11.8)	7.6	2.9	轆轤成形	
58	かわらけ	12.0	7.8	3.6	轆轤成形	
59	かわらけ	12.0	8.0	3.4	轆轤成形	口縁の一部を欠く 全面に煤付着
60	かわらけ	(12.0)	6.4	3.4	轆轤成形	

図29 2面構成土出土遺物3

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(12.0)	(9.0)	3.5	轆轤成形
2	かわらけ	(11.8)	8.6	3.5	轆轤成形
3	かわらけ	(12.0)	(7.4)	3.1	轆轤成形
4	かわらけ	(13.0)	(8.6)	3.3	轆轤成形
5	かわらけ	(12.6)	(8.6)	3.3	轆轤成形
6	かわらけ	(12.2)	(8.2)	3.0	轆轤成形
7	かわらけ	13.8	9.4	3.5	轆轤成形
8	かわらけ	(13.5)	(9.4)	3.6	轆轤成形
9	かわらけ	(12.8)	(8.4)	3.3	轆轤成形
10	かわらけ	(12.8)	(9.4)	2.7	轆轤成形 体部に煤付着
11	かわらけ	(13.5)	(9.0)	3.0	轆轤成形
12	かわらけ	(12.2)	(8.0)	3.0	轆轤成形
13	かわらけ	12.7	7.4	3.4	轆轤成形
14	かわらけ	(12.8)	(8.3)	2.8	轆轤成形 口縁部・体部に煤付着
15	かわらけ	13.0	8.3	3.2	轆轤成形
16	かわらけ	(12.4)	(8.5)	3.0	轆轤成形
17	かわらけ	(12.8)	8.0	2.9	轆轤成形
18	かわらけ	(13.2)	(9.0)	3.2	轆轤成形
19	かわらけ	(12.2)	(7.0)	2.8	轆轤成形 口縁部に煤付着
20	かわらけ	(12.6)	(7.0)	3.3	轆轤成形 二次焼成を受ける
21	かわらけ	12.5	8.0	3.3	轆轤成形
22	かわらけ	11.9	7.6	3.2	轆轤成形
23	かわらけ	(12.0)	(8.0)	3.3	轆轤成形
24	かわらけ	(12.8)	(7.6)	3.0	轆轤成形
25	かわらけ	(12.5)	7.6	3.0	轆轤成形
26	かわらけ	(12.8)	(7.0)	2.9	轆轤成形
27	かわらけ	12.6	8.0	3.1	轆轤成形
28	かわらけ	(12.4)	(7.6)	2.0	轆轤成形
29	かわらけ	12.9	8.3	3.4	轆轤成形
30	かわらけ	(13.3)	(8.0)	3.2	轆轤成形
31	かわらけ	(12.8)	7.4	3.2	轆轤成形
32	かわらけ	12.8	8.5	3.2	轆轤成形
33	かわらけ	(13.0)	(8.0)	3.4	轆轤成形
34	かわらけ	(12.8)	(6.8)	3.0	轆轤成形
35	かわらけ	(12.8)	8.5	3.4	轆轤成形 口縁部・内底部に煤付着
36	かわらけ	12.8	8.0	3.2	轆轤成形
37	かわらけ	(13.6)	9.0	3.6	轆轤成形 底部に煤付着
38	かわらけ	13.8	8.8	3.5	轆轤成形
39	かわらけ	(12.8)	8.0	3.1	轆轤成形

図30 2面構成土出土遺物4 図31 2面構成土出土遺物5

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(12.0)	(7.2)	3.0	轆轤成形
2	かわらけ	(11.8)	(6.6)	3.0	轆轤成形

3	かわらけ	(12.2)	(7.4)	3.1	轆轤成形	
4	かわらけ	(11.8)	(7.0)	3.4	轆轤成形	
5	かわらけ	(12.1)	(7.4)	3.3	轆轤成形	
6	かわらけ	13.1	9.2	3.7	轆轤成形	
7	かわらけ	(11.9)	(7.2)	3.1	轆轤成形	
8	かわらけ	(11.8)	(7.0)	3.5	轆轤成形	
9	かわらけ	(12.4)	(8.0)	3.2	轆轤成形	
10	かわらけ	(12.1)	7.5	3.5	轆轤成形	
11	かわらけ	(12.3)	6.5	3.1	轆轤成形	
12	かわらけ	12.2	7.4	3.4	轆轤成形	
13	かわらけ	(11.8)	(7.6)	3.3	轆轤成形	
14	かわらけ	(12.4)	(7.0)	3.3	轆轤成形	
15	かわらけ	(12.5)	7.9	3.7	轆轤成形	
16	かわらけ	12.2	7.3	3.4	轆轤成形	
17	かわらけ	(11.8)	(7.0)	3.0	轆轤成形	
18	かわらけ	(12.6)	8.2	3.4	轆轤成形	
19	かわらけ	(12.8)	(7.4)	3.3	轆轤成形	外面・内底部に煤付着
20	かわらけ	(12.2)	7.6	3.2	轆轤成形	
21	かわらけ	(12.4)	(7.8)	3.2	轆轤成形	
22	かわらけ	(12.8)	(8.0)	3.5	轆轤成形	
23	かわらけ	(12.8)	(7.2)	3.2	轆轤成形	
24	かわらけ	(12.8)	(7.4)	3.6	轆轤成形	
25	かわらけ	(12.2)	(7.8)	3.4	轆轤成形	口縁部に煤付着
26	かわらけ	(12.8)	(7.6)	4.5	轆轤成形	
27	かわらけ	12.6	7.3	3.7	轆轤成形	
28	かわらけ	(12.8)	(7.0)	3.6	轆轤成形	
29	かわらけ	(11.8)	(6.6)	3.5	轆轤成形	
30	かわらけ	(12.9)	7.5	3.8	轆轤成形	
31	かわらけ	(14.8)	(9.8)	3.5	轆轤成形	
32	かわらけ	(13.0)	(8.6)	3.5	轆轤成形	
33	かわらけ	(12.4)	(7.4)	3.5	轆轤成形	
34	かわらけ	(14.3)	(8.4)	3.8	轆轤成形	
35	かわらけ	13.4	7.6	3.9	轆轤成形	
36	かわらけ	11.9	6.9	3.2	轆轤成形	
37	かわらけ	(14.1)	(8.6)	3.5	轆轤成形	
38	かわらけ	(12.8)	8.2	3.6	轆轤成形	外面全体・内底部に煤付着

図31 2面構成土出土遺物5

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(10.8)	(6.4)	3.2	轆轤成形
2	かわらけ	(11.0)	(7.0)	2.9	轆轤成形
3	かわらけ	(11.1)	(6.5)	3.0	轆轤成形
4	かわらけ	(11.2)	(6.4)	3.6	轆轤成形
5	かわらけ	11.2	5.8	3.4	轆轤成形
6	かわらけ	(11.1)	(6.8)	3.3	轆轤成形
7	かわらけ	(11.4)	6.0	3.3	轆轤成形
8	かわらけ	(11.4)	(6.5)	3.2	轆轤成形
9	かわらけ				轆轤成形 内面に墨書・線刻あり
10	かわらけ	(12.0)	7.2	3.0	轆轤成形 外面に墨書あり 内面に付着物
11	土師質小壺か		6.4		庭部糸切り痕有り 内面貼り重ねの痕跡
12	かわらけ製品	直径2.3	厚0.3		円盤状に加工したもの
13	白磁口元皿		5.3		
14	白磁口元皿		(5.7)		
15	白磁劃花文皿	(10.4)	(4.4)	2.3	
16	白磁皿	(7.3)			型作り 景德鎮窯か
17	白磁谷子(蓋)	(7.0)			割れ目に漆付着 補修痕か
18	青磁鎬蓮弁文碗	(15.0)			龍泉窯
19	青磁鎬蓮弁文碗				龍泉窯
20	青磁鎬蓮弁文碗				龍泉窯
21	青磁鎬蓮弁文碗				龍泉窯
22	青磁折縁皿				外面蓮弁文 龍泉窯
23	青磁花瓶か水注				取手部分 龍泉窯
24	瀬戸入子	(8.0)	(4.4)	3.2	片口 内面口縁付近と内底に自然降灰 古瀬戸前期(13世紀)か 北部系
25	山茶碗				
26	常滑 浅鉢	(15.0)			図22-32と同一個体か
27	備前播鉢か				備前焼Ⅱ～Ⅲ期(鎌倉時代中頃～後半)か
28	常滑片口鉢(I類)				5～6a型式(13世紀中葉)か
29	常滑片口鉢(I類)				5～6a型式(13世紀中葉)か
30	常滑片口鉢(I類)				5～6a型式(13世紀中葉)か
31	常滑片口鉢(I類)				5～6a型式(13世紀中葉)か
32	常滑片口鉢(I類)		(15.8)		6a型式(13世紀中葉)を下限とするものか
33	常滑片口鉢(I類)		12.8		6a型式(13世紀中葉)を下限とするものか
34	常滑片口鉢(Ⅱ類)				7型式(14世紀前半)か
35	常滑片口鉢(Ⅱ類)				7型式(14世紀前半)か
36	常滑片口鉢(Ⅱ類)				内面煤付着 6b型式(13世紀後葉)か
37	常滑片口鉢(Ⅱ類)				7型式(14世紀前半)か
38	常滑甕				

図32 2面構成土出土遺物6

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
1	宇瓦			厚2.0	D類 瓦当剥離
2	女瓦			厚1.6	D類 凸面斜格子目叩き 端部にスタンプあり
3	女瓦			厚2.0	D類 凸面斜格子目叩き
4	女瓦			厚3.0	C類 凸面斜格子目叩き 水殿瓦窯産
5	女瓦			厚3.1	C類 凸面斜格子目叩き 水殿瓦窯産

図33 2面構成土出土遺物7

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	火鉢	(28.8)	(20.8)	8.5	瓦質 口縁部付近に穿孔あり 口縁部内面に煤付着
2	伊勢土鍋				13世紀か 全体に煤付着
3	滑石製品				外面に煤付着 13世紀か
4	滑石製品	残7.6	幅2.6	厚1.8	
5	銭 開元通宝	径2.4	重2.0g		初鑄年 621(唐)背文上月
6	銭 咸平元寶	径2.5	重2.4g		初鑄年 998(北宋)
7	銭 祥符元寶	径2.5	重2.7g		初鑄年1008(北宋)
8	銭 嘉祐通寶	径2.0	重1.9g		初鑄年1056(北宋)真書
9	銭 熙寧元寶	径2.5	重2.5g		初鑄年1068(北宋)篆書
10	銭 熙寧元寶	径2.4	重3.2g		初鑄年1068(北宋)篆書
11	銭 元豊通寶	径2.2	重1.9g		初鑄年1078(北宋)行書
12	銭 元豊通寶	径2.3	重3.9g		初鑄年1078(北宋)篆書
13	銭 大観通寶	径2.5	重3.3g		初鑄年1107(北宋)
14	銭 大観通寶	径2.4	重3.8g		初鑄年1107(北宋)
15	銭 元豊通寶	径2.3	重4.0g		初鑄年1078(北宋)篆書
16	鉄製品 釘	残5.4	幅0.3	厚0.4	
17	鉄製品 釘	長7.0	幅0.6	厚0.4	
18	鉄製品 掛金具	残12	幅1.3		

図34 2面構成土出土遺物8

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		長さ	幅	厚	
1	木製品 箸	17.8	0.5	0.5	
2	木製品 箸	残17.9	0.5	0.6	
3	木製品 箸	15.3	0.7	0.5	
4	木製品 箸	残14.5	0.5	0.5	
5	木製品 箸	残16.3	0.5	0.5	
6	木製品 箸	残17.7	0.5	0.4	
7	木製品 箸	15.8	0.6	0.5	
8	木製品 箸	16.6	0.6	0.4	
9	木製品 箸	残17.6	0.5	0.5	
10	木製品 箸	19.2	0.5	0.4	
11	木製品 箸	18.5	0.5	0.5	
12	木製品 箸	19.2	0.4	0.4	
13	木製品 箸	残16.9	0.8	0.5	
14	木製品 箸	残18.9	0.6	0.3	
15	木製品 箸	19.7	0.7	0.6	
16	木製品 箸	19.9	0.5	0.5	
17	木製品 箸	残17.8	0.4	0.5	
18	木製品 箸	16.4	0.6	0.5	端部焦げ
19	木製品 箸	16.4	0.6	0.4	
20	木製品 箸	残15.3	0.5	0.3	
21	木製品 箸	16.9	0.6	0.4	
22	木製品 箸	16.8	0.5	0.6	
23	木製品 箸	17.5	0.6	0.5	
24	木製品 箸	18.6	0.5	0.5	
25	木製品 箸	残18.3	0.7	0.4	
26	木製品 箸	18.3	0.5	0.5	
27	木製品 箸	17.9	0.6	0.5	
28	木製品 箸	17.9	0.7	0.6	
29	木製品 箸	17.9	0.7	0.4	
30	木製品 箸	18.5	0.5	0.3	
31	木製品 箸	18.4	0.8	0.5	
32	木製品 箸	18.2	0.4	0.5	
33	木製品 箸	24.6	0.7	0.5	
34	木製品 箸	22.2	0.5	0.5	
35	木製品 箸	23.8	0.5	0.5	
36	木製品 箸	残22.1	0.6	0.5	
37	木製品 箸	20.5	0.6	0.5	
38	木製品 箸	20.4	0.8	0.6	
39	木製品 箸	19.9	0.6	0.4	
40	木製品 箸	19.3	0.6	0.5	
41	木製品 箸	18.8	0.8	0.6	
42	木製品 箸	19.1	0.6	0.5	
43	木製品 箸	19.2	0.7	0.4	焦げた箇所あり
44	木製品 箸	19.0	0.5	0.4	
45	木製品 箸	19.3	0.5	0.5	
46	木製品 箸	19.9	0.5	0.4	
47	木製品 箸	19.0	0.6	0.5	

48	木製品 箸	19.0	0.5	0.4	
----	-------	------	-----	-----	--

図35 2面構成土出土遺物9

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		長さ	幅	厚	
1	木製品 箸	19.9	0.7	0.4	
2	木製品 箸	20.1	0.6	0.3	
3	木製品 箸	19.8	0.5	0.5	
4	木製品 箸	19.6	0.7	0.3	
5	木製品 箸	20.4	0.7	0.5	
6	木製品 箸	20.5	0.6	0.5	
7	木製品 箸	20.0	0.6	0.4	
8	木製品 箸	20.1	0.6	0.5	
9	木製品 箸	21.3	0.5	0.5	
10	木製品 箸	22.3	0.6	0.4	
11	木製品 箸	21.6	0.6	0.5	
12	木製品 箸	21.8	0.7	0.5	
13	木製品 箸	22.2	0.6	0.5	
14	木製品 箸	23.0	0.8	0.5	
15	木製品 箸	23.4	0.7	0.5	
16	木製品 箸	24.1	0.5	0.5	
17	木製品 箸	残30.1	0.9	0.7	
18	木製品 箸	23.9	0.6	0.5	
19	木製品 箸	23.4	0.7	0.6	
20	木製品 箸	23.0	0.5	0.5	
21	木製品 箸	23.4	0.6	0.4	
22	木製品 箸	21.5	0.6	0.5	
23	木製品 箸	21.8	0.5	0.5	
24	木製品 箸	20.9	0.8	0.4	
25	木製品 箸	20.6	0.7	0.3	
26	木製品 箸	19.8	0.5	0.4	
27	木製品 箸	19.1	0.6	0.5	
28	木製品 箸	19.6	0.6	0.5	端部焦げ
29	木製品 箸	20.0	0.7	0.5	
30	木製品 箸	20.2	0.6	0.4	
31	木製品 箸	20.0	0.6	0.6	
32	木製品 箸	21.0	0.6	0.5	
33	木製品 箸	19.2	0.7	0.4	
34	木製品 箸	残19.2	0.6	0.6	
35	木製品 箸	17.5	0.6	0.5	
36	木製品 箸	17.4	0.5	0.4	
37	木製品 箸	残19.0	0.8	0.3	
38	木製品 箸	19.1	0.5	0.4	
40	木製品 箸	残19.5	0.5	0.4	
41	木製品 箸	残20.0	0.7	0.5	
42	木製品 箸	21.7	0.6	0.4	
43	木製品 箸	21.9	0.4	0.5	
44	木製品 箸	残21.3	0.6	0.4	
45	木製品 箸	21.7	0.5	0.5	
46	木製品 箸	22.2	0.6	0.5	
47	木製品 箸	残21.8	0.7	0.5	

図36 2面構成土出土遺物10

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		長さ	幅	厚	
1	木製品	5.0	10.5	1.0	箱の部材か 3側面に木釘が穿たれる 1面に漆状の付着物あり
2	木製品	残6.4	残2.9	0.6	一箇所穿孔あり
3	木製品	残20.0	1.4	0.4	
4	木製品	残16.3	0.8	0.4	端部焦げ
5	木製品 篋	残14.5	1.0	0.7	
6	木製品	残16.3	0.8	0.4	籾木か
7	木製品 円盤	残22.9	残4.8	0.9	推定直径32.0 側面に穿孔あり
8	木製品	残22.0	5.3	0.5	板状 径1cm程の穿孔あり
9	木製品 下駄	残7.4	残10.3	残厚2.6	
10	木製品 糸巻部材	残12.3	2.2	0.5	焦げた箇所あり
11	木製品 草履芯	23.1	4.9	0.3	
12	木製品 草履芯	23.8	5.2	0.4	
13	木製品 草履芯	残17.8	5.4	0.2	
14	木製品 草履芯	残19.4	残2.3	0.3	
15	木製品 草履芯	残22.0	残2.9	0.3	
16	木製品 草履芯	23.3	残3.6	0.4	

図37 2面構成土出土遺物11

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		長さ	幅	厚	
1	ノミ	24.1	2.7		柄部分木製 ノミ部分鉄製 柄の先端に口金をはめた痕跡あり
2	木製品	残9.2	残2.0		

3	木製品	24.1	5.5	2.2	ホゾ状の切り込みを設ける
4	木製品 板	残50.4	15.6	2.0	柾目材。焦げた部分あり
5	木製品	残40.7	2.9	2.0	先端は杭状に加工される

図38 2面構成土出土遺物12

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	漆器 皿	9.7	5.6	1.3	全面黒漆 文様朱漆、手描き
2	漆器 皿	8.2	7.0	1.1	歪みあり 全面黒漆 底面は漆が薄い
3	漆器 皿	8.6	5.7	1.2	歪みあり 全面黒漆
4	漆器 皿	(9.1)	6.0	1.7	全面黒漆
5	漆器 皿	9.6	6.0	1.2	全面黒漆 文様朱漆 高台内は漆が薄い
6	漆器 皿	9.4	5.3	1.6	歪みあり 全面黒漆 文様朱漆、手描き
7	漆器 椀	12.8	7.0	3.0	全面黒漆
8	漆器 椀				全面黒漆 文様朱漆、スタンプ
9	漆器 椀		7.8		歪みあり 全面黒漆 文様朱漆、手描き
10	漆器 椀				外面黒漆 内面朱漆
11	漆器 鉢				全面黒漆
12	木製品	5.7	2.0	1.7	膳の脚か
13	漆器	長7.3	幅3.3	厚1.0	全面黒漆 膳の部材(雲形)
14	木製品 櫛		3.4	0.8	
15	木製品 櫛				
16	烏帽子				折烏帽子
17	漆器 匙か				全面黒漆
18	木製品	9.8	0.5	0.3	墨書あり
19	木製品 独楽			2.1	直径5.8 内面に朱を塗る 芯棒が残る
20	木製品	3.5	3.7	0.4	梅形に加工される

図40 3面・3面遺構出土遺物

3面

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	7.2	4.9	2.1	轆轤成形
2	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.6	轆轤成形
3	男瓦		厚2.2		D類 段部に竹管文あり

柱穴134

4	かわらけ	(7.6)	(5.7)	1.7	轆轤成形
---	------	-------	-------	-----	------

柱穴135

5	青磁鎚蓮弁文碗		(5.1)		龍泉窯
---	---------	--	-------	--	-----

溝状遺構1

6	かわらけ	(7.6)	(5.0)	1.6	轆轤成形
7	常滑片口鉢(I類)				6a型式(13世紀中葉)を下限とするものか
8	碁石	直径2.0	厚0.4		
9	木製品	直径3.0		1.9	栓状
10	木製品 折敷	残17.6	残2.8	0.2	穿孔あり
11	木製品 杓文字	23.7	5.0	0.7	
12	木製品	29.8	4.6	0.6	板状 先端を尖らせる 片面に焦げた部分あり
13	漆器 椀				全面黒漆 内面に付着物あり
14	漆器 皿	9.1	7.7	0.9	外面黒漆、内面朱漆。外面の朱漆は文様か否か不明
15	漆器 皿	(9.4)	(8.5)	0.5	全面黒漆 文様朱漆、手描き
16	銭 肥寧元寶	径2.4	重3.3g		初鑄年1068(北宋)真書
17	銭 聖宋元寶	径2.4	重3.2g		初鑄年1101(北宋)行書

図41 3面構成土出土遺物

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(4.6)	(4.0)	0.8	轆轤成形
2	かわらけ	7.8	5.9	2.0	轆轤成形
3	かわらけ	7.2	5.2	1.4	轆轤成形
4	かわらけ	(6.8)	(5.0)	1.5	轆轤成形
5	かわらけ	(7.8)	5.6	1.5	轆轤成形
6	かわらけ	7.4	5.6	1.6	轆轤成形
7	かわらけ	7.6	5.3	1.7	轆轤成形
8	かわらけ	(7.8)	(6.0)	6.6	轆轤成形
9	かわらけ	7.8	5.4	1.8	轆轤成形 口縁部に煤付着
10	かわらけ	(7.8)	(6.4)	1.7	轆轤成形
11	かわらけ	(7.4)	4.6	1.9	轆轤成形
12	かわらけ	7.9	5.8	1.9	轆轤成形
13	かわらけ	(7.6)	6.0	1.4	轆轤成形
14	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.9	轆轤成形
15	かわらけ	12.5	8.4	3.5	轆轤成形
16	かわらけ	(12.8)	(8.4)	3.3	轆轤成形
17	かわらけ	(11.8)	(8.2)	3.4	轆轤成形
18	かわらけ	(11.8)	(7.4)	3.0	轆轤成形 口縁部に煤付着
19	常滑 甗		(15.5)		二次焼成を受ける
20	常滑 甗				5型式(13世紀前葉)
21	青磁鎚蓮弁文碗				龍泉窯
22	青磁碗		(3.4)		無文 二次焼成を受ける 龍泉窯
23	青磁鎚蓮弁文碗				龍泉窯

24	木製品	長さ3.1	幅2.0	厚2.0	用途不明 円筒の中心に穿孔あり
25	木製品 灯明台	8.9	2.1	0.8	
26	木製品	残3.6		厚2.0	用途不明
27	木製品 折敷	長18.3	残4.1	厚0.1	穿孔あり
28	木製品	長15.5	残幅8.2	厚0.8	
29	木製品	直径6.8		厚0.7	円盤。側面一箇所木鉾が穿たれる
30	漆器 皿			5.8	全面黒漆 漆はほとんどが剥落する
31	漆器 椀				全面黒漆 文様朱漆、手描き
32	鉄製品	残13.6	幅0.9		
33	銭 治平元寶	径2.4		重3.8g	初鑄年1064(北宋)篆書

図43 4面・4面遺構出土遺物
4面

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	白かわらけ	(6.7)		1.7	手捏ね成形
2	かわらけ	8.2	6.2	1.5	轆轤成形
3	かわらけ	(7.9)	(6.0)	1.6	轆轤成形
4	かわらけ	(8.7)	(6.0)	1.8	轆轤成形
5	かわらけ	(8.2)	(6.4)	1.6	轆轤成形
6	かわらけ	7.6	5.0	1.7	轆轤成形
7	かわらけ	(8.4)	(6.4)	1.7	轆轤成形
8	かわらけ	(8.0)	(6.4)	1.7	轆轤成形
9	かわらけ	7.5	5.2	1.9	轆轤成形
10	かわらけ	7.1	4.7	2.3	轆轤成形
11	かわらけ	(7.1)	(5.0)	2.2	轆轤成形
12	かわらけ	12.5	7.7	3.3	轆轤成形
13	かわらけ	13.1	7.6	3.5	轆轤成形
14	かわらけ	13.2	7.8	3.5	轆轤成形
15	かわらけ	12.7	8.4	3.5	轆轤成形
16	常滑片口鉢(I類)		(13.4)		6a型式(13世紀中葉)を下限か 内面に煤付着
17	白磁劃花文皿				
18	漆器 椀				全面黒漆 文様朱漆、手描き
19	木製品	3.5	3.5	0.8	用途不明
20	木製品 草履芯	残長8.3	残幅3.1	0.2	
21	木製品 草履芯	残15.3	5.1	0.2	
22	木製品 草履芯	残17.8	3.7	0.2	
23	木製品 草履芯	13.5	2.7	0.3	
24	木製品	残15.0	残3.7	0.9	円盤 推定直径24.0 穿孔あり
25	木製品 箸	残15.3	0.6	0.5	
26	木製品 箸	14.7	0.7	0.5	
27	木製品 箸	22.0	0.7	0.4	
28	青磁 折腰皿		4.2		龍泉窯

柱穴150

29	銭 開元通宝	径2.5	重3.5g		初鑄年 621(唐)
----	--------	------	-------	--	------------

柱穴152

30	かわらけ	(8.2)	5.6	1.6	轆轤成形
31	かわらけ	(8.2)	(5.8)	1.5	轆轤成形

土壙19

32	木製品	残13.7	残2.7	1.0	2個の部材を釘でとめる 他に穿孔・釘の貫通する箇所
33	木製品	残6.7	2.0	2.3	

土壙17

34	鉄製品 釘	長7.0	幅0.6	厚0.4	
----	-------	------	------	------	--

土壙20

35	漆器 椀	(13.7)	(6.0)		全面黒漆 高台内は漆が薄い
----	------	--------	-------	--	---------------

図44 4面構成土出土遺物1

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(4.8)	(4.0)	0.9	轆轤成形
2	かわらけ	(4.8)	(3.6)	0.8	轆轤成形
3	かわらけ	(4.8)	(4.0)	0.8	轆轤成形
4	かわらけ	7.2	5.4	1.6	轆轤成形
5	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.7	轆轤成形
6	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.6	轆轤成形
7	かわらけ	7.4	5.8	1.5	轆轤成形
8	かわらけ	7.8	6.2	1.5	轆轤成形
9	かわらけ	(7.6)	(5.0)	1.6	轆轤成形
10	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.4	轆轤成形
11	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.7	轆轤成形
12	かわらけ	(7.8)	(6.0)	2.1	轆轤成形
13	かわらけ	7.7	5.3	1.6	轆轤成形
14	かわらけ	(8.0)	(6.2)	1.9	轆轤成形
15	かわらけ	8.0	6.0	1.6	轆轤成形
16	かわらけ	8.2	6.1	1.6	轆轤成形
17	かわらけ	7.8	5.0	2.1	轆轤成形
18	かわらけ	(7.8)	(5.0)	2.0	轆轤成形
19	かわらけ	12.4	7.6	3.2	轆轤成形
20	かわらけ	(12.2)	8.0	3.0	轆轤成形

21	かわらけ	12.2	8.4	3.2	轆轤成形	外面・内底部に煤付着
22	かわらけ	(11.8)	8.8	3.5	轆轤成形	口縁部に煤付着
23	かわらけ	(18.8)	(8.0)	3.5	轆轤成形	
24	かわらけ	12.1	7.1	3.1	轆轤成形	
25	かわらけ	12.2	7.0	3.8	轆轤成形	
26	かわらけ	(12.4)	(9.0)	3.1	轆轤成形	体部・内底に煤付着
27	かわらけ	12.0			轆轤成形	体部に煤付着
28	かわらけ	(12.0)	(8.0)	3.6	轆轤成形	
29	かわらけ	(11.8)	(7.0)	3.2	轆轤成形	
30	かわらけ	(11.8)	(6.0)	3.1	手捏ね成形	体部全体に煤付着
31	かわらけ	(13.1)	(8.9)	2.9	轆轤成形	
32	かわらけ	7.8	5.6	1.3	轆轤成形	中心に穿孔あり
33	青磁碗	(12.7)			龍泉窯	二次焼成を受けたものか
34	青磁折縁皿				内面劃花文	龍泉窯
35	青磁鎚蓮弁文碗	(15.0)			龍泉窯	
36	白磁口元皿	(9.4)	(6.7)	1.3		
37	鉄製品 刃物	残7.3	幅1.1	厚0.3		
38	鉄製品 掛金具	長6.8	幅1.3	厚0.6		
39	鉄製品 釘	残7.6	幅0.5	厚0.4		
40	鉄製品 釘	長6.4	幅0.7	厚0.5		
41	鉄製品 釘	長10.8	幅0.5	厚0.5		
42	鉄製品 釘	長10.5	幅1.3	厚0.7		
43	漆器 椀				全面黒漆	文様朱漆、手描き
44	漆器 椀				全面黒漆	文様朱漆、スタンプ
45	漆器 椀				全面黒漆	文様朱漆、手描き 46・47と同一個体
46	漆器 椀					
47	漆器 椀					

図45 4面構成土出土遺物2

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	常滑片口鉢(I類)				6a型式(13世紀中葉)を下限か
2	常滑片口鉢(I類)	21.6	10.4	8.1	6a型式(13世紀中葉)を下限か 内底摩滅顕著
3	常滑片口鉢(I類)	30.4	14.4	13.5	6a型式(13世紀中葉)を下限か 内底摩滅顕著
4	常滑片口鉢(I類)	(26.0)			6a型式(13世紀中葉)を下限か
5	渥美片口鉢				12世紀末～13世紀初頭

図46 4面構成土出土遺物3

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	常滑 甕				6a型式(13世紀中葉) 2・3と同一個体か
2	常滑 甕				
3	常滑 甕				
4	常滑 甕	(41.6)			最大径(62.8) 5型式(13世紀前葉)
5	碇	残9.2	残6.3	厚1.5	赤間石
6	砥石	残9.0	幅6.5	厚3.5	荒砥 側面2箇所・小口1箇所が残る
7	火鉢				瓦質 口縁部下に貫通しない穿孔あり
8	女瓦				A類 凸面縄目叩き

図47 4面構成土出土遺物4

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		長さ	幅	厚	
1	木製品 曲物	残25.5	残6.4	0.9	底板 側面に穿孔あり
2	木製品	24.8	残3.5	0.4	
3	木製品 草履芯	残20.5	4.6	0.3	
4	木製品 草履芯	残13.7	4.7	0.3	
5	木製品 箸	残20.6	0.6	0.5	
6	木製品 箸	23.6	0.6	0.6	
7	木製品 箸	23.6	0.6	0.6	
8	木製品 箸	24.2	0.6	0.6	
9	木製品 箸	23.4	0.5	0.3	
10	木製品 箸	26.0	0.7	0.6	
11	木製品	31.4	1.1	0.5	串状
12	木製品 箸	18.4	0.5	0.4	
13	木製品 箸	残17.1	0.5	0.5	
14	木製品 箸	残18.9	0.7	0.4	
15	木製品 箸	残18.9	0.7	0.5	
16	木製品 箸	24.8	0.6	0.5	
17	木製品 箸	残22.5	0.6	0.6	
18	木製品 箸	22.5	0.6	0.6	端部焦げ
19	木製品 箸	22.7	0.6	0.4	
20	木製品 箸	23.8	0.6	0.5	
21	木製品 箸	21.1	0.6	0.5	
22	木製品 箸	20.1	0.7	0.5	
23	木製品 箸	残20.1	0.5	0.4	
24	木製品 箸	残18.5	0.6	0.5	
25	木製品 箸	21.7	0.5	0.5	
26	木製品 箸	残19.0	0.5	0.5	
27	木製品 箸	残17.9	0.7	0.3	

28	木製品 箸	残17.8	0.5	0.4	
29	木製品 箸	残17.9	0.5	0.6	
30	木製品 箸	残18.8	0.5	0.5	
31	木製品 箸	残18.5	0.7	0.4	
32	木製品 箸	20.6	0.6	0.5	
33	木製品 箸	残19.5	0.6	0.4	
34	木製品 箸	残20.3	0.7	0.6	
35	木製品 箸か	21.4	1.0	0.3	
36	木製品	22.2	0.5	0.6	棒状 端部焦げ
37	木製品	17.9	0.8	0.4	串状
38	木製品	22.2	0.9	0.9	串状

図49 5面・5面遺構出土遺物

5面

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.7	轆轤成形
2	常滑片口鉢(I類)	(30.0)			同一個体片と覚しき高台部片あり 13世紀か

柱穴46

3	かわらけ	(8.2)	(6.8)	3.3	轆轤成形 口縁部に煤付着
4	かわらけ	(11.8)	8.0	3.3	轆轤成形 体部全体に煤付着
5	青磁鎚蓮弁文碗	(15.8)	5.2	6.0	龍泉窯
6	青磁鎚蓮弁文碗	(15.4)			龍泉窯

柱穴47

7	かわらけ	(8.2)	(6.2)	1.6	轆轤成形
8	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.7	轆轤成形
9	かわらけ	(7.8)	(6.2)	1.6	轆轤成形

柱穴54

10	かわらけ	13.6	7.4	3.7	轆轤成形
----	------	------	-----	-----	------

土壙5

11	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.5	轆轤成形
12	かわらけ	(8.0)	(4.8)	1.8	轆轤成形 口縁部に煤付着
13	かわらけ	(12.8)	(7.6)	3.3	轆轤成形
14	常滑 甕				6a型式(13世紀中葉) 図39-1~3と同一個体か
15	青磁折縁皿		12.1		外面蓮弁文か 龍泉窯
16	木製品	12.0	1.2	1.2	棒状
17	木製品 箸	残16.5	0.6	0.5	
18	木製品 箸	残18.4	0.4	0.3	
19	木製品 箸	20.2	0.7	0.6	
20	木製品	19.5	0.7	0.7	串状
21	木製品	21.2	0.7	0.5	串状
22	木製品 草履芯	23.0	4.5	0.2	
23	木製品 草履芯	23.1	4.7	0.2	

図50 5面構成土・6面出土遺物

5面構成土

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		径	底径	器高	
1	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.4	轆轤成形
2	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.5	轆轤成形
3	かわらけ	(8.0)	(5.8)	1.5	轆轤成形
4	かわらけ	(7.9)	(5.4)	1.7	轆轤成形
5	かわらけ	(8.2)	(6.8)	1.6	轆轤成形
6	かわらけ	(8.0)	(6.4)	1.7	轆轤成形
7	かわらけ	(8.2)	(6.4)	1.8	轆轤成形
8	かわらけ	(8.6)	7.0	1.6	轆轤成形
9	かわらけ	(13.8)	(8.0)	3.0	轆轤成形
10	かわらけ	12.6	8.0	3.2	轆轤成形
11	かわらけ	11.8)	(8.0)	3.3	轆轤成形
12	瓦器質碗	10.8)		(3.1)	捏ね成形 縁黒
13	常滑片口鉢(I類)				
14	須恵器 長頸壺	(9.8)			湖西か
15	青磁鎚蓮弁文碗	(16.3)			龍泉窯
16	木製品	残23.4	2.0	1.2	部材か
17	木製品	残11.5	3.0	2.4	

6面

18	かわらけ	(5.4)	(4.2)	0.9	轆轤成形
19	かわらけ	(12.8)	8.0	3.5	轆轤成形
20	木製品 箸	20.1	0.5	0.4	

図52 6面遺構出土遺物1

柱穴77

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	須恵器 甕				櫛描文

柱穴128

2	かわらけ	(13.0)		(2.8)	手捏ね成形
---	------	--------	--	-------	-------

柱穴187

3	かわらけ	(12.2)		(8.2)	手捏ね成形
---	------	--------	--	-------	-------

土壙6

4	かわらけ	(7.8)	(6.6)	1.2	轆轤成形
5	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.4	轆轤成形
6	かわらけ	(8.2)	(6.0)	1.4	轆轤成形
7	かわらけ	(12.8)	(9.2)	2.6	轆轤成形
8	かわらけ	12.6	7.8	3.4	轆轤成形
9	かわらけ	(12.2)	7.8	3.1	轆轤成形
10	かわらけ	(12.8)	(9.8)	2.8	轆轤成形
11	かわらけ	12.6	9.2	3.0	轆轤成形
12	かわらけ	(12.8)	(8.6)	7.8	轆轤成形
13	かわらけ	13.0	7.9	3.2	轆轤成形
14	かわらけ	(17.2)	(8.0)	3.5	轆轤成形
15	瀬戸瓶子(I類)		(13.0)		灰釉ハケヌリ 古瀬戸前期(13世紀前葉)か
16	女瓦			厚2.9	A類凸面縄目叩き
17	女瓦			厚2.1	C類凸面格子目叩き

図53 6面遺構出土遺物2

土壙24

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	8.2	6.0	1.5	轆轤成形
2	かわらけ	(13.0)	(9.0)	3.0	轆轤成形
3	かわらけ	(13.2)	9.2	2.6	轆轤成形
4	かわらけ	(13.4)	(11.4)	2.8	轆轤成形
5	渥美片口鉢				12世紀末～13世紀初頭 6と同一個体か
6	渥美片口鉢				12世紀末～13世紀初頭 5と同一個体か
7	常滑片口鉢(I類)	(25.6)			5型式(13世紀前葉)か
8	男瓦				凸面に縄目痕あり
9	木製品	径13.5		厚0.1	円盤
10	木製品 荷札	長7.7	幅2.9	厚0.5	
11	木製品 折敷	残17.5	残2.6	厚0.2	
12	木製品 折敷	残27.8	残9.8	厚0.1	

図54 6面構成土出土遺物1

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.9	轆轤成形
2	かわらけ	7.8	6.0	1.5	轆轤成形
3	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.8	轆轤成形
4	かわらけ	8.4	5.7	1.6	轆轤成形 口縁部・体部外面に煤付着
5	かわらけ	(7.6)		(1.6)	手捏ね成形
6	かわらけ	(8.8)		1.4	手捏ね成形
7	かわらけ	(8.4)		1.8	手捏ね成形
8	かわらけ	(8.8)		1.8	手捏ね成形
9	かわらけ	(9.4)		2.0	手捏ね成形
10	かわらけ	(8.6)		1.9	手捏ね成形
11	かわらけ	(8.8)		1.8	手捏ね成形
12	かわらけ	(9.8)		1.8	手捏ね成形
13	かわらけ	(10.0)		1.8	手捏ね成形
14	かわらけ	(10.8)		2.4	手捏ね成形
15	かわらけ	12.6		3.7	手捏ね成形
16	かわらけ	(13.2)		3.0	手捏ね成形
17	かわらけ	(13.6)		3.0	手捏ね成形
18	かわらけ	(13.0)		2.7	手捏ね成形
19	磨りかわらけ	長3.0	幅3.2	厚1.6	かわらけの体部片を研磨したもの
20	磨りかわらけ	長5.4	幅5.1	厚0.7	かわらけの底部片を加工したもの
21	青白磁合子(蓋)	(5.7)		1.7	型作り 景德鎮窯
22	白磁口元皿	(14.1)			
23	灰釉陶器 坏	(12.8)			
24	須恵器 甕				
25	須恵器 甕				
26	須恵器 甕				
27	漆器 蓋	5.0		1.0	全面黒漆
28	木簡	32.5	2.8	0.5	判読不明

図55 6面構成土出土遺物2

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
1	宇瓦				G類 唐草文 内区に連珠文が巡る 図46-2と同文か
2	宇瓦				G類 唐草文 内区に連珠文が巡る
3	女瓦			厚2.4	B類 凸面細かな斜格子目叩き
4	女瓦			厚2.0	C類 凸面斜格子目叩き
5	女瓦			厚2.1	A類 凸面縄目叩き
6	女瓦			厚2.5	A類 凸面縄目叩き
7	女瓦			厚2.2	A類 凸面縄目叩き
8	男瓦			残厚2.1	A類
9	男瓦			厚2.2	A類
10	男瓦			厚2.4	A類 凸面縄目叩き

図57 7面出土遺物

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	8.1	6.0	1.6	轆轤成形
2	かわらけ	(8.8)	(7.2)	1.8	轆轤成形 口縁部に煤付着
3	かわらけ	12.8	8.8	3.0	轆轤成形
4	かわらけ	(10.0)		1.9	手捏ね成形
5	かわらけ	(12.8)		3.0	手捏ね成形
6	須恵器 甕				
7	常滑 甕	(44.8)	18.6	56.2	5型式(13世紀前葉)
8	木製品 杓文字	残20.5	幅3.9	0.5	
9	木製品	残14.0	幅3.2	0.2	
10	木製品 櫛		3.9	0.9	
11	女瓦				A類 縄目叩き
12	女瓦			厚2.2	A類 縄目叩き

図58 7面遺構出土遺物
溝13

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(8.2)		1.5	手捏ね成形
2	かわらけ	(12.2)		2.8	手捏ね成形
3	かわらけ	8.9		1.7	手捏ね成形
4	かわらけ	(8.8)		1.7	手捏ね成形
5	かわらけ	(8.4)		1.4	手捏ね成形
6	かわらけ	13.8		3.5	手捏ね成形
7	鉄製品 釘	残6.2	幅0.7	厚0.5	

図59 7面構成土出土遺物1

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(8.4)		1.7	手捏ね成形
2	かわらけ	(8.8)		1.8	手捏ね成形
3	かわらけ	9.0		1.9	手捏ね成形 全体に煤付着
4	かわらけ	9.2		2.3	手捏ね成形 口縁部・体部に煤付着
5	かわらけ	(9.8)		1.7	手捏ね成形
6	かわらけ	(9.6)		1.9	手捏ね成形
7	かわらけ	(10.0)		1.9	手捏ね成形
8	かわらけ	(12.0)		3.3	手捏ね成形
9	かわらけ	(13.8)		3.0	手捏ね成形
10	かわらけ	(12.8)		3.3	手捏ね成形
11	かわらけ	(9.0)	(7.0)	1.9	轆轤成形
12	かわらけ	(8.6)	(7.6)	1.8	轆轤成形 二次焼成を受ける
13	かわらけ	(9.4)	(7.0)	1.8	轆轤成形
14	かわらけ	(11.6)	(8.2)	3.0	轆轤成形
15	白磁四耳壺				最大径(21.4)
16	青磁劃花文碗				龍泉窯
17	宇瓦				G類 唐草文か 内区に連珠文が巡る
18	宇瓦				G類 唐草文 内区に連珠文が巡る
19	鎧瓦				A類 瓦当剥離
20	鎧瓦				D類 巴文
21	鎧瓦				A類 瓦当剥離

図60 7面構成土出土遺物2

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	男瓦	厚2.0			A類 凸面縄目叩き
2	男瓦	厚2.3			A類 凸面縄目叩き
3	女瓦	厚2.3			A類 凸面縄目叩き
4	女瓦	厚2.4			A類 凸面縄目叩き
5	女瓦	厚2.2			A類 凸面縄目叩き
6	女瓦	厚2.2			A類 凸面縄目叩き
7	女瓦	厚1.6			A類 凸面縄目叩き
8	女瓦	厚2.3			A類 凸面縄目叩き

図62 8面・8面遺構出土遺物
8面 溝14

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(8.6)		1.8	手捏ね成形
2	かわらけ	9.2		1.8	手捏ね成形
3	かわらけ	(9.0)		1.8	手捏ね成形
4	かわらけ	(8.9)		1.8	手捏ね成形
5	かわらけ	9.1		1.7	手捏ね成形
6	かわらけ	13.8		3.0	手捏ね成形
7	かわらけ	(14.4)		3.5	手捏ね成形
8	かわらけ				手捏ね成形 とりべ状
9	かわらけ				手捏ね成形 とりべ状
10	宇瓦				G類 唐草文 図46-2と同範
11	鎧瓦				G類 巴文
12	鎧瓦				A類 瓦当剥離 凸面縄目叩き

13	女瓦			厚2.3	A類 凸面縄目叩き
14	女瓦			厚2.5	A類 凸面縄目叩き
15	鉄製品 釘	長8.0	幅0.3	厚0.3	
16	木製品	長6.0	幅2.5	厚0.2	円盤
17	漆器 櫛		幅2.2	厚0.6	
18	かわらけ	(9.0)		1.4	手捏ね成形
19	かわらけ	(9.8)		1.5	手捏ね成形
20	かわらけ	(9.4)	(8.0)	2.0	轆轤成形
21	須恵器 坏	(7.6)	(4.0)	2.0	

図63 8面構成土・9面出土遺物
8面構成土 9面

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(9.0)		1.5	手捏ね成形
2	かわらけ	(9.4)		1.7	手捏ね成形
3	かわらけ	(9.8)		1.8	手捏ね成形 口縁部に煤付着
4	かわらけ	(12.8)		2.8	手捏ね成形
5	かわらけ	(13.8)		3.0	手捏ね成形
6	かわらけ	7.2	5.4	1.4	轆轤成形
7	かわらけ	(12.8)	(8.0)	3.4	轆轤成形 外体部に煤付着
8	常滑片口鉢(I類)				5型式(13世紀前葉)か
9	緑釉盤				
10	漆器 椀	(7.4)			全面黒漆
11	鎔瓦				G類 瓦当剥離 12と同一個体か
12	鎔瓦				G類 巴文
13	男瓦				A類 凸面縄目叩き
14	女瓦				A類 凸面縄目叩き
15	鉄製品 釘	長9.9	幅0.9	厚0.5	
16	かわらけ	(12.0)			手捏ね成形
17	土師器 甕	(12.0)			
18	灰釉陶器 壺				櫛搔文

図66 9面構成土・10面・地山面出土遺物
9面構成土 10面・地山面

図番号	遺物名	法量(cm)			備考
		口径	底径	器高	
1	かわらけ	(8.2)		1.9	手捏ね成形
2	かわらけ	(8.8)		1.6	手捏ね成形
3	かわらけ	(8.8)		1.9	手捏ね成形
4	かわらけ	8.8	6.8	1.9	轆轤成形
5	かわらけ	9.4	6.6	1.9	轆轤成形
6	女瓦		2.2		A類 凸面縄目叩き
7	灰釉陶器 段皿				
8	須恵器 鉢				
9	須恵器 蓋				
10	土師器 甕	(21.8)			
11	土師器 甕	(23.4)			
12	土師器 長甕				
13	土師器 長甕				
14	土師器 長甕				
15	土師器 甕か		(6.4)		

1. はじめに

大倉幕府跡(鎌倉市雪ノ下三丁目704番3外)において行われた発掘調査で、掘立柱建物跡やかかわらけ、漆器の椀や皿、中国の青磁等が出土している。この発掘調査において、当時の植生を検討する目的で調査区壁面より土壌試料が採取された。以下に、採取された土壌試料について行った花粉分析の結果を示し、大倉幕府周辺の古植生について検討した。

2. 試料と分析方法

試料は調査区壁面より採取された7点である。以下に各試料について簡単に記す。

試料1(4層・2面)は灰褐色粘土で、最上部には材片が散在しており、中・下部では炭片が多く認められる。その上位は土丹層で、最下部に灰色砂がレンズ状に認められる。また下位も土丹層である。試料2(4層・2面)は灰褐色砂質粘土で、土丹片や貝片が点在しており、材片も認められる。試料2の下位は土丹層(3面)で、基質は黒灰色粘土(試料3)である。試料4は黒灰色の砂質粘土で、土丹層がレンズ状に認められる。試料5(9層・4面)は暗褐色の砂質土で、貝小片が散在している。土丹層を挟んで下位の試料6(10層上半部)は黒褐色の砂質粘土である。最下部は基質が黒灰色の砂質粘土～粘土質砂(試料7)の土丹層(11層・5面)である。これら7試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料(湿重約5～7g)を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフランにて染色を施した。

3. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉40、草本花粉30、形態分類を含むシダ植物胞子3の総計73である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表1に、その分布を図1に示した。なお、分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示しており、クワ科、バラ科、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検鏡の結果、樹木花粉の占める割合に層位的変化が認められたことから、下位より花粉化石群集帯I、IIを設定し、その特徴について示す。

花粉帯I(試料6,7)は樹木花粉の占める割合が比較的高いことで特徴づけられる。その樹木花粉ではマツ属複雑管束亜属(アカマツ, クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類)が最も多く、マツ属(不明)を加えると60～80%を占めている。次いで多く得られているのはスギであるが、出現率は10%前後である。その他、モミ属、ツガ属、コナラ属アカガシ亜属が5%弱得られている。草本類ではイネ科が最も多く、出現率は27%前後を示している。その他ではアカザ科-ヒユ科が10%前後を示しており、ヨモギ属も試料7では10%を越えている。

花粉帯II(試料1～5)は、草本花粉の占める割合が80%前後と高くなることで特徴づけられ、樹木花粉は10%強に減少している。その樹木花粉ではやはりニヨウマツ類が最も多く、出現率は20～40%を示している。スギは花粉帯Iと同様に10%前後の出現率を示している。コナラ属コナラ亜属とアカガシ亜属も10%

前後を示しており、花粉帯Ⅰに比べ増加している。同様の傾向がツガ属、ハンノキ属、シイノキ属—マテバシイ属にも認められる。草本類ではイネ科が最も多く、出現率は60%前後に達している。次いで全試料10%強を示しているヨモギ属が多く、アカザ科—ヒユ科やアブラナ科も低率ながら全試料1%以上を示している。その他では試料2よりソバ属が1個体得られており、同試料から水生植物のオモダカ属(抽水植物)が、また試料1からサジオオダカ属(抽水植物)がそれぞれ1個体観察されている。なお、試料5については得られた樹木花粉数が少なかったことから分布図として示すことができなかつたが、その中でも草本花粉の占める割合が高かつたことから花粉帯Ⅱに含めた。

4. 遺跡周辺の古植生

時期については出土遺物等から、試料1, 2が13世紀末～14世紀初頭から14世紀後半、試料3が13世紀末～14世紀初頭、試料4～6が13世紀後半代、試料7が13世紀中葉～後半頃と考えられている。以下に、設定された花粉帯を基に大倉幕府跡周辺の古植生について検討した。

花粉帯Ⅰ期(試料6, 7)：時期は13世紀の中葉～後半と推測される。ニヨウマツ類が多く検出されており、これにマツ属不明(保存状態が悪く、ニヨウマツ類かゴヨウマツ類かの区別がつかないもの)を加えると、マツ属の出現率は70%前後に達することになる。こうしたことから、この時期の大倉幕府跡周辺丘陵部では大半がニヨウマツ類と推測されるマツ属の二次林が広く形成されていたとみられる。これについて、鎌倉市内で行われた花粉分析結果から、13世紀中頃を境にスギ林や照葉樹林からニヨウマツ類の二次林への交代が認められてきており(鈴木, 1999)、ここ大倉幕府跡周辺においても同様の植生変化が示されているものと思われる。丘陵部ではその他、スギ林やアカガシ亜属を中心とした照葉樹林も一部に成立していたと推測され、また、針葉樹のモミ属やツガ属、落葉広葉樹のコナラ亜属、クマシデ属—アサダ属、ニレ属—ケヤキ属なども生育していたとみられる。一方低地部ではイネ科、アカザ科—ヒユ科、ヨモギ属などの雑草類が多く生育していたと推測される。

花粉帯Ⅱ期(試料1～5)：時期は13世紀後半～14世紀後半と推測される。この時期も大倉幕府跡周辺丘陵部ではコナラ亜属を含めたニヨウマツ類の二次林が成立しており、その他、スギ林や照葉樹林、落葉広葉樹林なども一部に形成されていたとみられる。しかしながらこれら樹木花粉の占める割合が花粉帯Ⅰと比べると低くなっていることから、疎林状態になった可能性が推察される。

草本類についてみるとイネ科の多産が特徴的であり、現在の鎌倉周辺丘陵部に広く認められるアズマネザサをはじめとして、その他イネ科植物の雑草類が多く生育していたと推測される。また、水田雑草を含む分類群であるオモダカ属が試料2より検出されていることから、遺跡周辺の水田域よりイネの花粉も供給されていることも考えられよう。また、同試料よりソバ属も検出されており、遺跡周辺においてソバも栽培されていた可能性も推察される。

ヨモギ属がやや多く検出され、その他、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科、オオバコ属、タンポポ科などが多くの試料で観察されており、これら雑草群落が遺跡周辺に形成されていたとみられる。

引用文献

鈴木 茂(1999)神奈川県鎌倉市における鎌倉時代の森林破壊. 国立歴史民俗博物館研究報告 81, 131-139.

表2 産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7
樹木								
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	1	1	-	-	-
モミ属	<i>Abies</i>	-	3	3	2	1	3	3
ツガ属	<i>Tsuga</i>	1	5	7	3	-	2	3
トウヒ属	<i>Picea</i>	-	2	2	2	-	1	-
マツ属単維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylo</i>	-	-	-	1	-	-	-
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylo</i>	29	46	38	34	8	26	39
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	4	9	18	22	6	62	25
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	-	-	1	1	-	-	-
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	8	18	9	23	3	9	21
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	1	2	2	2	-	-	3
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	-	-	1	1	-	-	-
クルミ属	<i>Juglans</i>	1	1	-	1	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	3	1	1	2	1	2	1
カバノキ属	<i>Betula</i>	4	-	3	2	-	-	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	4	3	2	11	-	-	2
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	1	-	2	2	-	-	-
イヌブナ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	1	-	-	1	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	15	7	1	15	2	1	1
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	13	7	4	14	-	4	4
クリ属	<i>Castanea</i>	-	-	-	2	-	-	-
シノノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis - Pasania</i>	2	6	1	3	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	6	-	2	1	1	2	2
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	3	-	3	1	-	-	-
トサミズキ属近似種	cf. <i>Corylopsis</i>	-	-	2	-	-	-	-
フウ属	<i>Liquidamber</i>	1	-	-	1	1	1	-
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	-	-	-	-	-	-	1
シラキ属	<i>Sapium</i>	1	1	1	-	-	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	-	-	-	-	1	-	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	-	1	-	-	-	-
ニシキギ科	Celastraceae	-	-	-	1	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	1	1	-	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	-	-	-	1	-	-	-
ブドウ属	<i>Vitis</i>	1	-	-	3	-	-	1
サカキ属-ヒサカキ属近似種	cf. <i>Cleyera-Eurya</i>	1	-	-	-	-	-	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	-	-	-	1	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	1	-	1	-	-	-
ミズキ属	<i>Cornus</i>	-	1	-	-	-	-	-
ガマズミ属	<i>Viburnum</i>	1	1	-	-	-	-	-
スイカズラ属	<i>Lonicera</i>	-	-	-	1	-	-	-
草本								
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	1	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	-	1	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	586	573	379	629	32	54	76
カヤツリグサ科	Cyperaceae	9	37	15	2	4	-	5
ツユクサ属	<i>Commelina</i>	-	-	-	-	-	1	-
ユリ科	Liliaceae	3	-	1	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	7	3	3	4	3	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	1	4	2	-	-	1
イタドリ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	1	-	-	-	1	-
他のタデ属	other <i>Polygonum</i>	2	2	-	-	-	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	-	1	-	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	28	62	42	37	59	27	19
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	2	5	-	-	4	2
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	-	5	1	-	-	1
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	5	2	-	1	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	17	33	11	29	2	2	12
ワレモコウ属	<i>Sanguisorba</i>	1	1	-	1	-	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	2	1	-	1	-	-	-
ノアズキ属	<i>Dunbaria</i>	-	-	-	1	-	-	-
他のマメ科	other Leguminosae	2	3	1	2	-	-	4
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	-	1	-	-	-	-
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	-	-	-	-	-	-	1
セリ科	Umbelliferae	1	-	1	2	-	-	-
シソ科	Labiatae	-	-	-	1	-	-	-
オオバコ属	<i>Plantago</i>	1	-	1	1	-	-	-
ヘクソカズラ属	<i>Paederia</i>	-	-	-	1	-	-	-
オミナエシ属	<i>Patrinia</i>	1	-	-	4	-	1	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	84	99	76	160	3	6	45
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2	9	5	7	1	-	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	2	8	9	8	4	1	2
シダ植物								
ゼンマイ科	Osmundaceae	1	1	2	2	-	-	-
単条型孢子	Monolete spore	8	23	19	27	7	4	8
三条型孢子	Trilete spore	5	8	5	5	9	-	9
樹木花粉								
樹木花粉	Arboreal pollen	101	114	105	157	25	113	107
草本花粉	Nonarboreal pollen	754	639	559	894	108	97	169
シダ植物孢子	Spores	14	32	26	34	16	4	17
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	869	985	690	1085	149	214	293
不明花粉								
不明花粉	Unknown pollen	15	14	5	15	2	25	16

T.-C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す



1. I区1面全景 (東から)



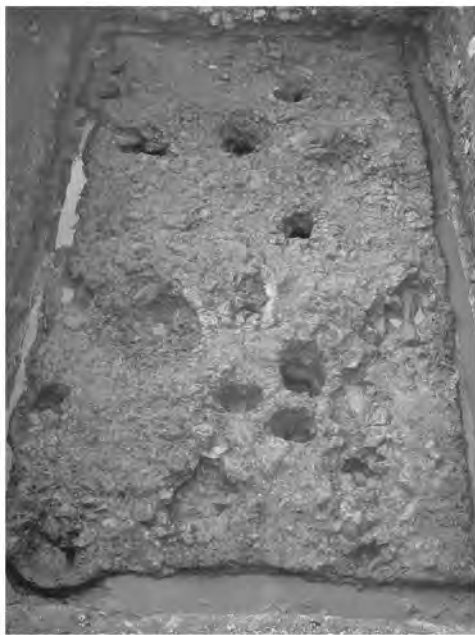
3. II区1面 (東から)



2. I区1面溝1 (東から)



4. II区2面かわらけ出土状況



5. I区2面全景 (東から)



6. II区2面全景 (東から)

1面・2面の遺構



1. I区3面全景（東から）



2. II区3面全景（東から）



3. I区3面溝状遺構1（東から）



5. I区3面漆器出土状況



6. I区3面漆器出土状況



4. I区3面全景（北から）



7. II区3面柱穴 13E

3面の遺構



1. I区4面全景（東から）



2. II区4面全景（東から）



3. II区4面板壁建物内出土埋鉢



4. II区4面板壁建物（南から）



5. II区4面土壇 20 出土漆器



6. II区4面板壁建物（東から）

4面の遺構



1. I区5面全景(東から)



2. II区5面全景(東から)



3. I区5面溝状2(東から)



5. II区5面溝10(東から)



6. I区5面柱穴 59・60・61



4. I区5面網代(溝状2内)



7. I区5面網代(正面)

5面の遺構



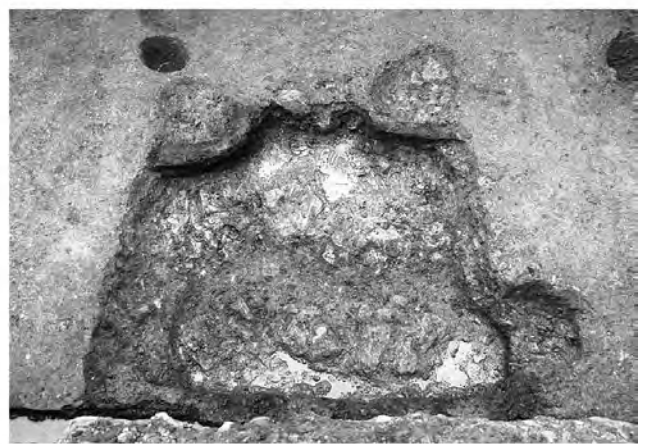
1. I区6面全景(東から)



2. II区6面全景(東から)



3. I区7・8面(東から)



4. II区6面土境 24(南から)



5. II区7面溝 13(東から)



6. II区7面全景(東から)

6面・7面の遺構



1. II区8面溝14(南から)



2. II区8面全景(東から)



4. II区9面(東から)



3. II区8面礎石

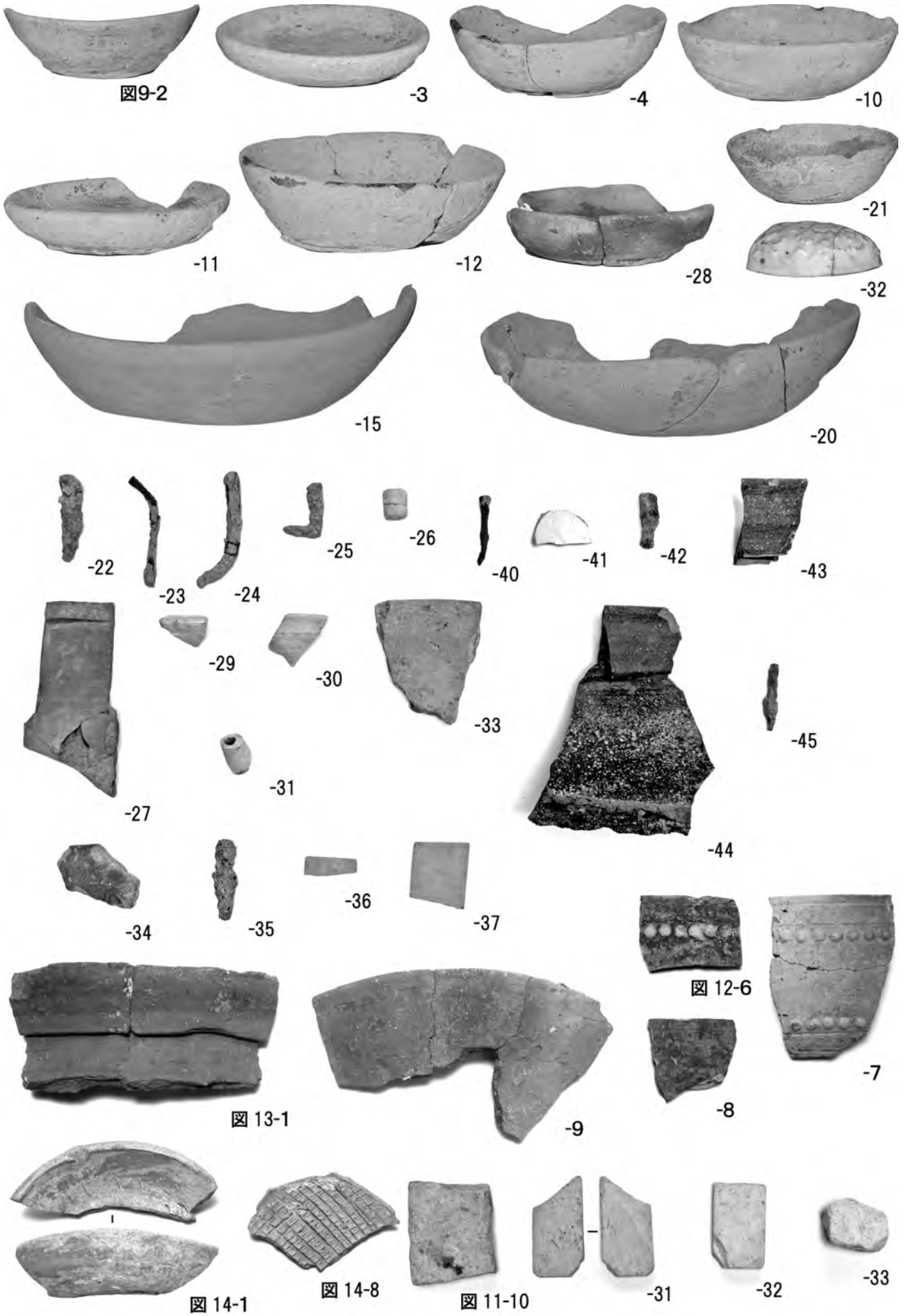


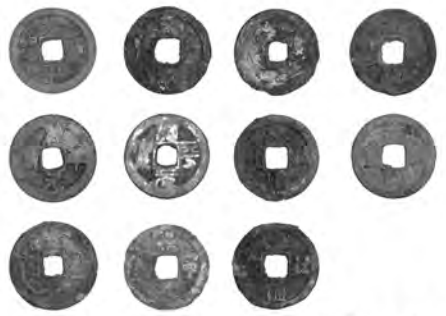
5. I区最終面(南から)

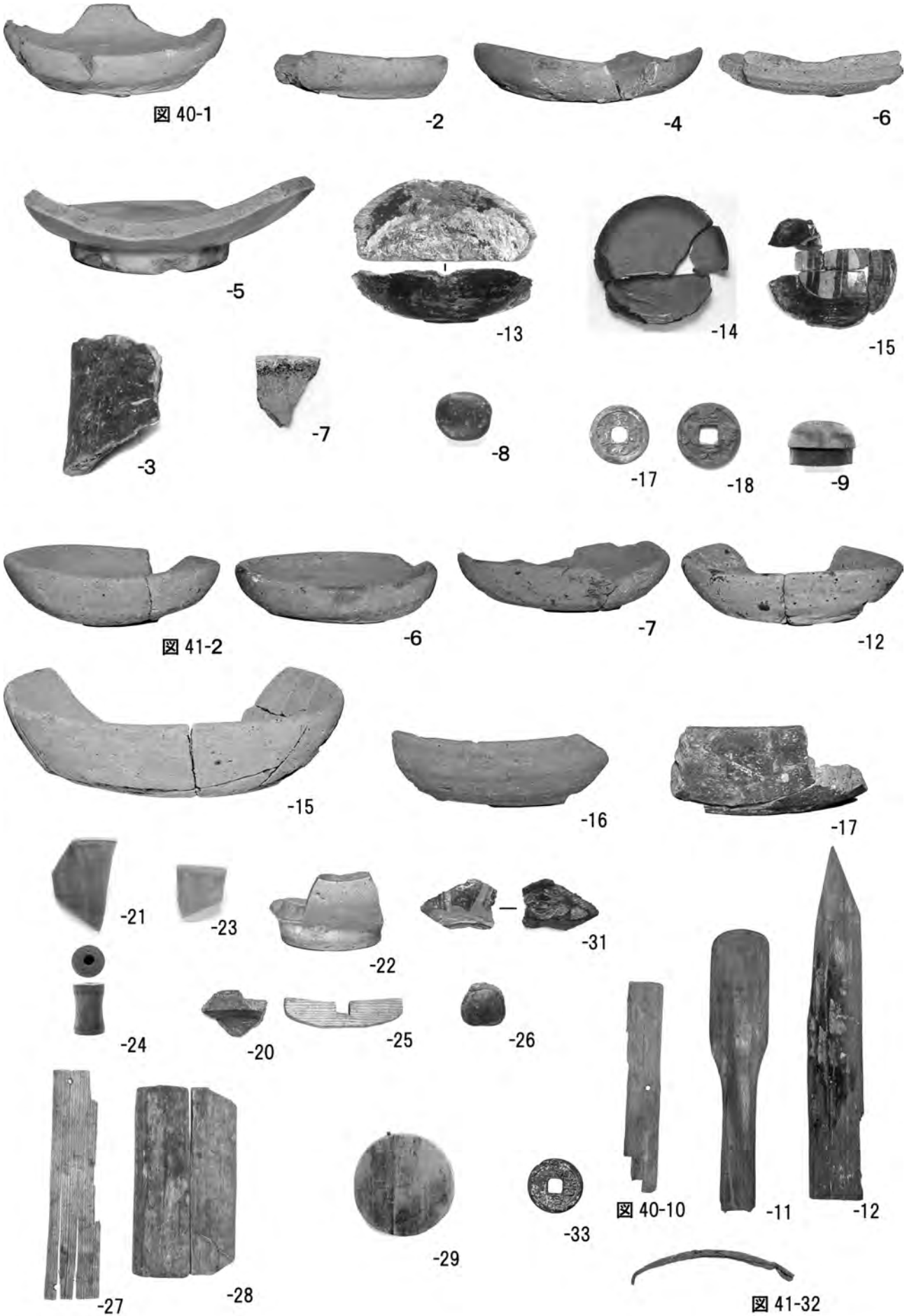


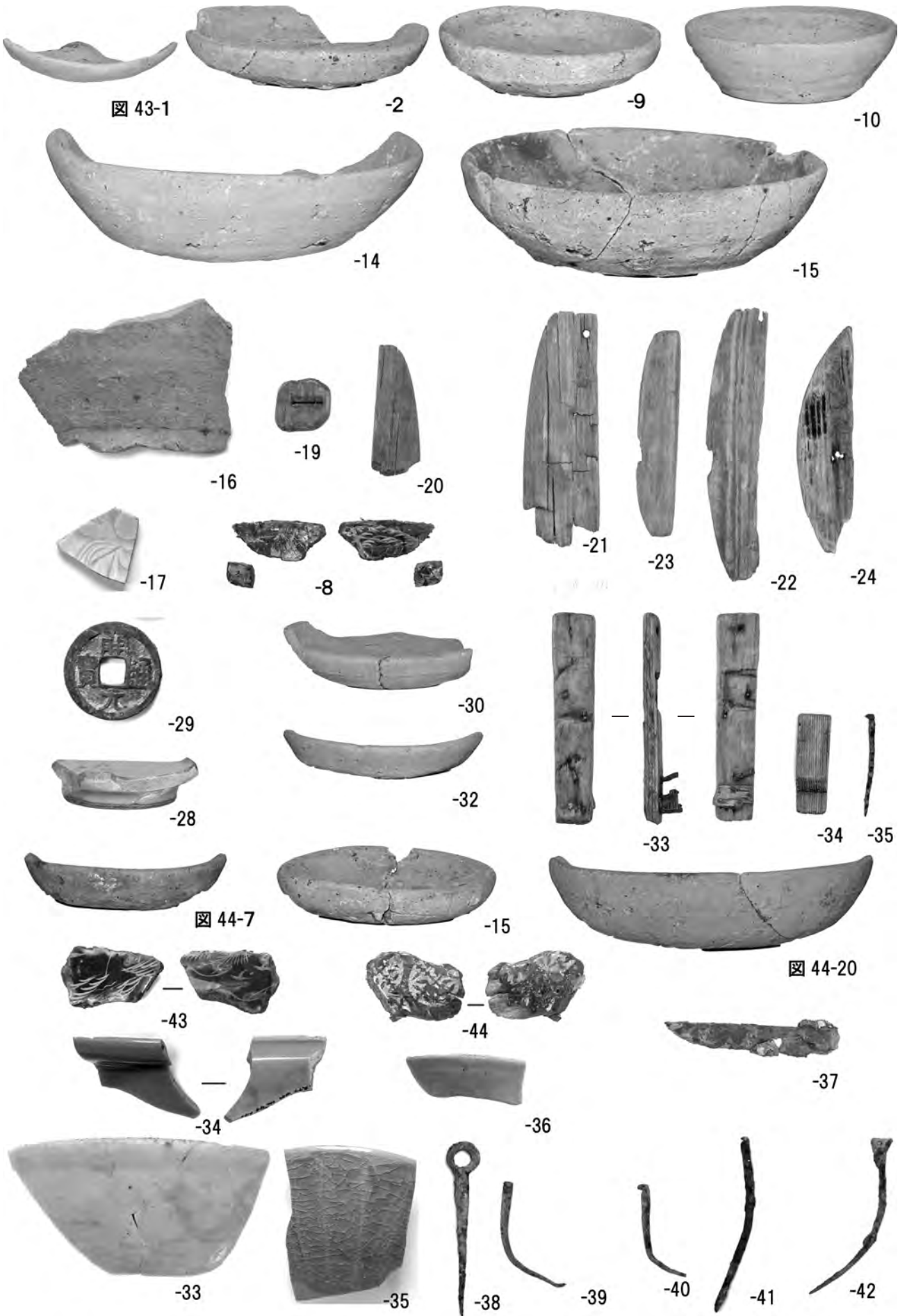
6. I区最終面(東から)

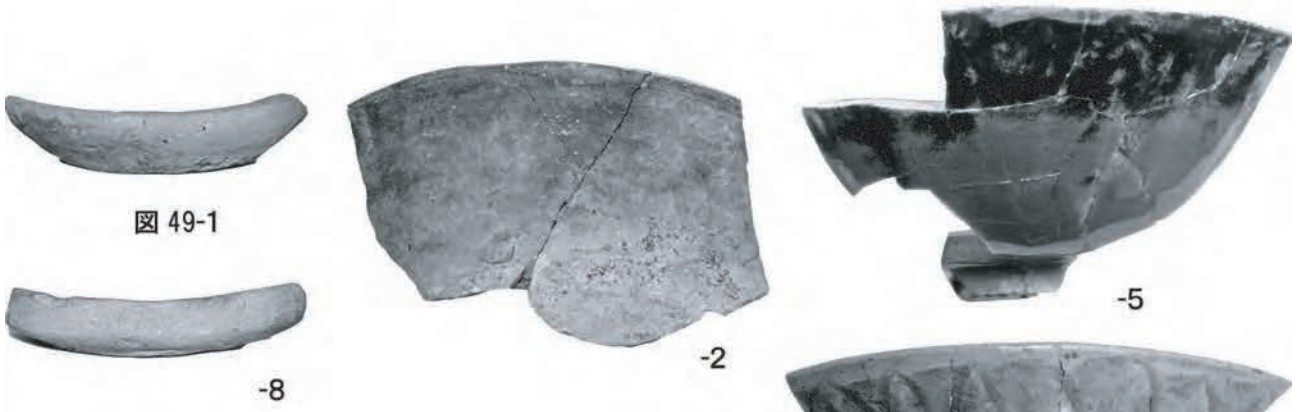
8面・9面・最終面の遺構











柱穴 47

柱穴 46



图 50-2

土坑 5



5面構成土

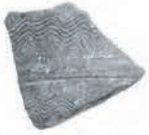


图 52-1



-8



-11



-15



-13



-14



-16



-17

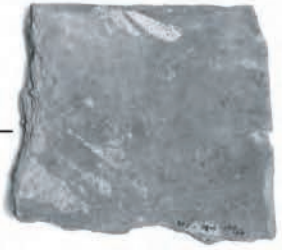


图 53-1



-3



-4



-5



-6



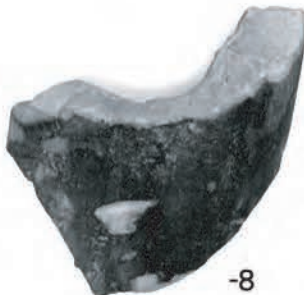
-9



-12



-7



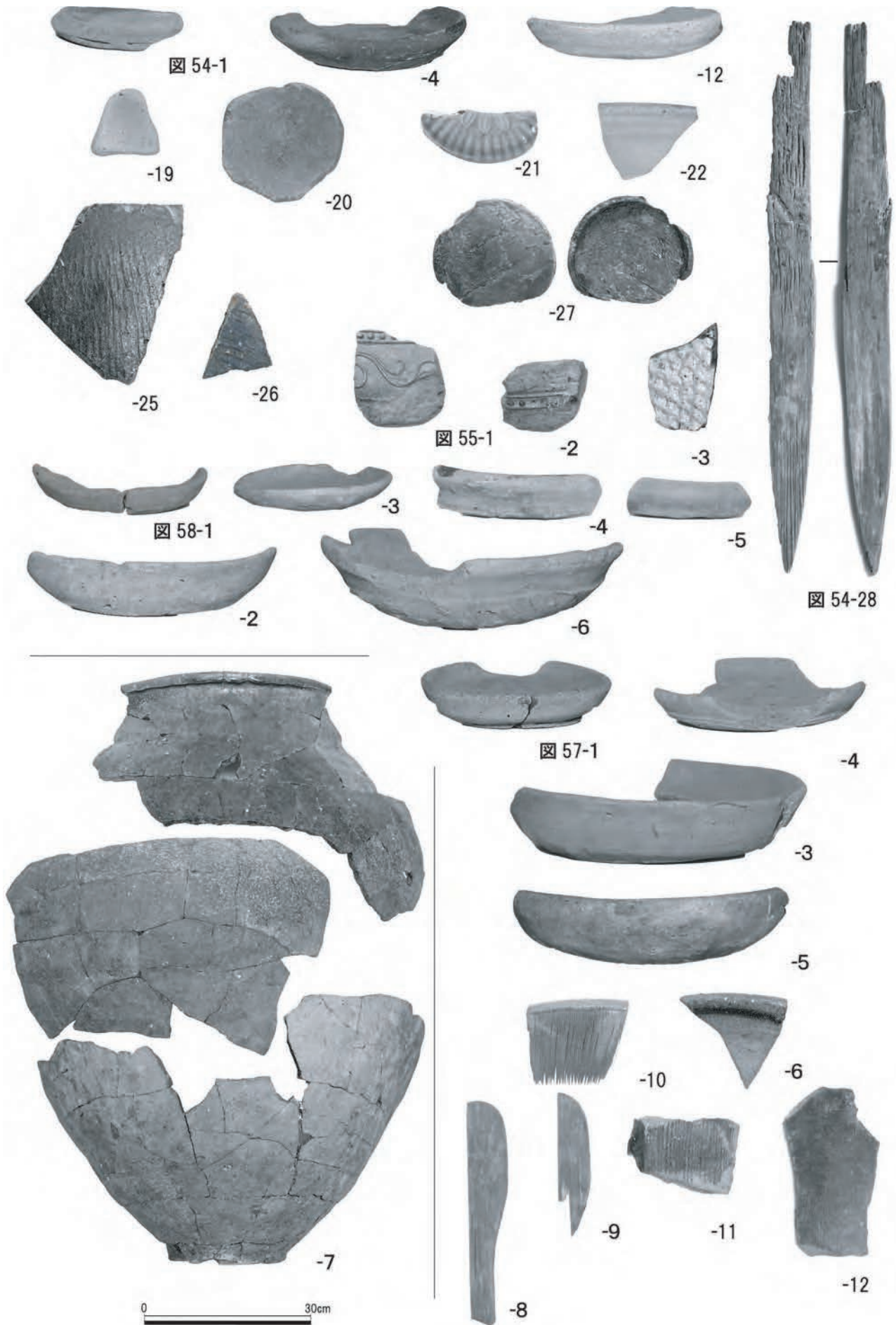
-8

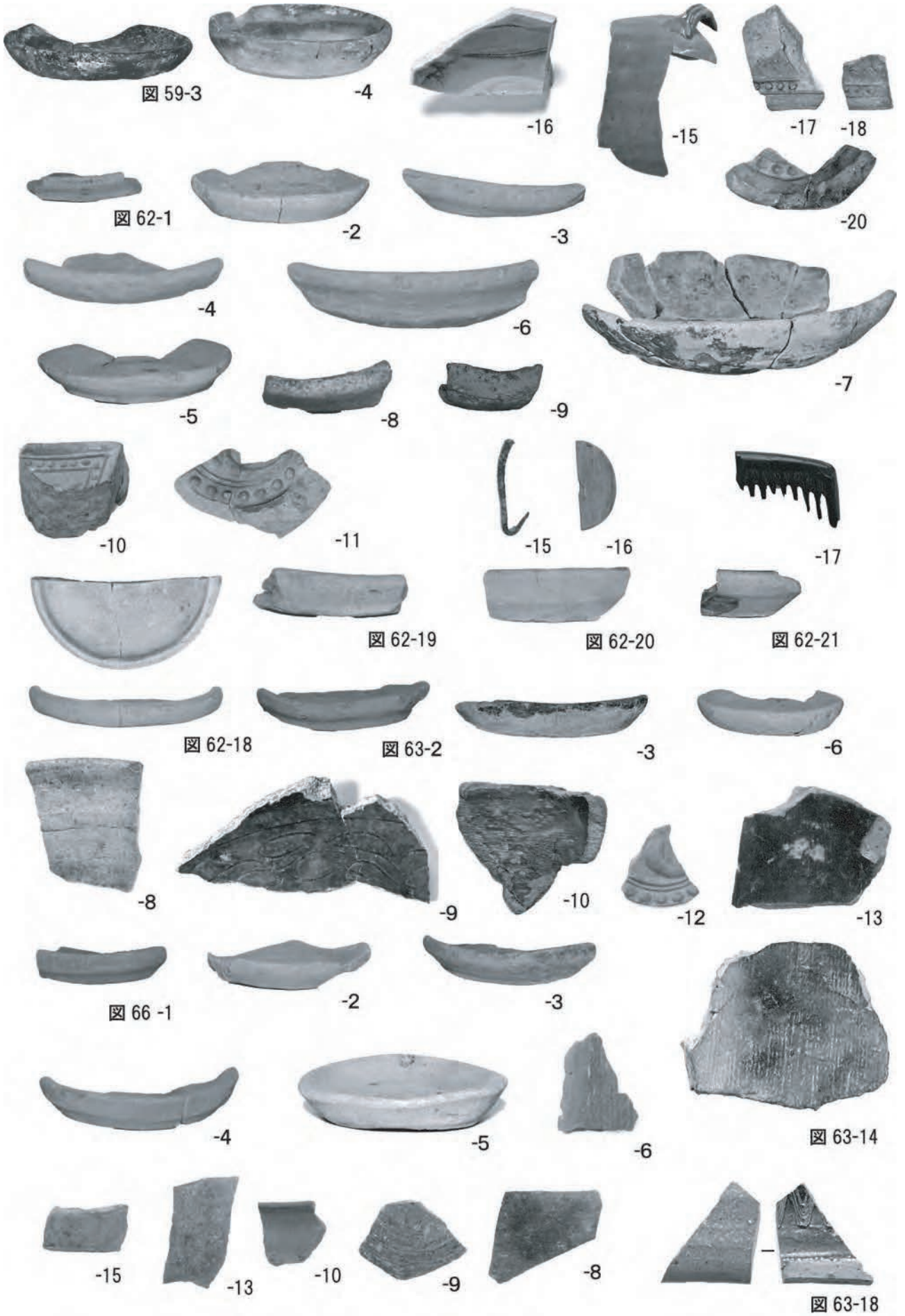


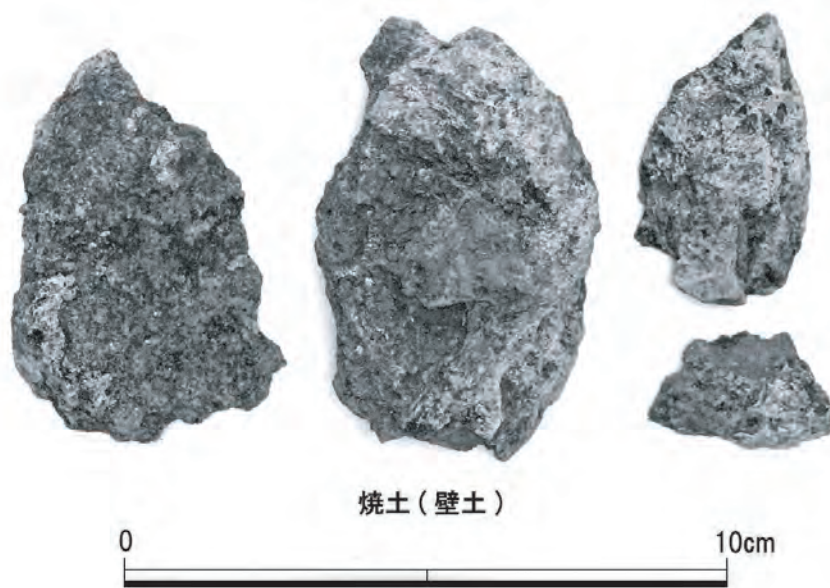
-10

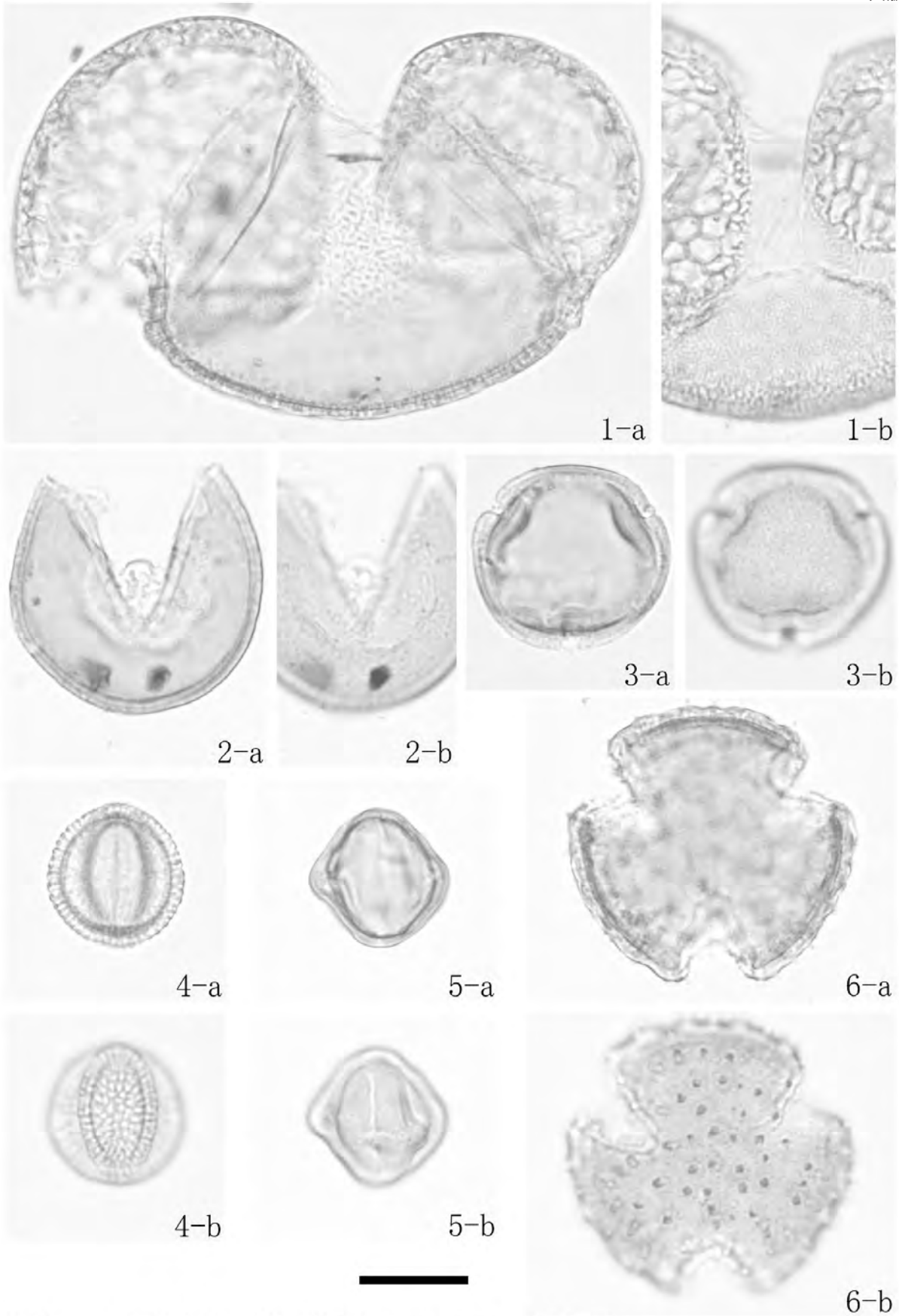


-11









図版 大倉幕府跡の花粉化石 (scale bar : 0.02mm)

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------|
| 1 : マツ属複維管束亜属 PLC.SS 4582 No.4 | 4 : アブラナ科 PLC.SS 4580 No.4 |
| 2 : スギ PLC.SS 4584 No.4 | 5 : ワレモコウ属 PLC.SS 4581 No.4 |
| 3 : アカメガシワ属 PLC.SS 4587 No.4 | 6 : オミナエシ属 PLC.SS 4583 No.4 |

北条時房・顕時邸跡

雪ノ下一丁目 269 番 1 地点

例 言

1. 本報は北条時房・顕時邸跡（鎌倉市No.278）の内、雪ノ下◎地点における埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査期間は以下の通りである。
平成 18 年 4 月 4 日～平成 18 年 6 月 13 日
3. 調査体制は次の通りである。
担 当 者 齋木秀雄
調 査 員 鯉淵義紀、三ツ橋正夫
調査補助員 村松彩美
調査参加者 （鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本報告に関する資料整理は以下の体制で行った。
担 当 者 降矢順子
調 査 員 加藤千尋、伊藤博邦、岡田慶子、三浦恵
5. 本報告の執筆は、降矢順子と齋木秀雄が分担した。
6. 本書に使用した遺構、遺物図版の縮尺は以下の通りである。
遺構全体図 1/300
個別遺構 1/60、1/30
遺構図の水糸高は、海拔を示す。
遺物実測は 1/3
7. 出土品、図面などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目 次

本文目次

第1章 調査概観	125
第1節 調査地点の位置と歴史環境	125
第2節 周辺の調査	125
第3節 調査の経過と堆積土層	127
第4節 調査軸の設定	128
第2章 検出された遺構と出土遺物	129
第1節 1面の遺構と遺物	129
第2節 2面の遺構と遺物	131
第3節 3面の遺構と遺物	137
第4節 4面の遺構と遺物	148
第5節 5面の遺構と遺物	155
第6節 下層の調査	160
第3章 まとめ	165

挿図目次

図1 調査地点と周辺の遺跡	126
図2 調査軸設定図	127
図3 堆積土層（模式図）	128
図4 1面・2面全体図	130
図5 1面検出遺構	131
図6 1面遺構・面出土遺物	131
図7 2面検出遺構	132
図8 2面遺構出土遺物（1）	133
図9 2面遺構出土遺物（2）	134
図10 2面遺構出土遺物（3）	135
図11 2面出土遺物	136
図12 3面・4面全体図	138
図13 3面検出遺構（1）	139
図14 3面検出遺構（2）	140
図15 3面遺構出土遺物（1）	141
図16 3面遺構出土遺物（2）	142
図17 3面遺構出土遺物（3）	143
図18 3面遺構出土遺物（4）	144
図19 3面遺構出土遺物（5）	145
図20 3面遺構出土遺物（6）	146
図21 3面遺構出土遺物（7）	147

図 22	3 面出土遺物	-----	148
図 23	4 面検出遺構 (1)	-----	149
図 24	4 面検出遺構 (2)	-----	150
図 25	4 面遺構出土遺物 (1)	-----	151
図 26	4 面遺構出土遺物 (2)	-----	152
図 27	4 面遺構出土遺物 (3)	-----	153
図 28	4 面遺構出土遺物 (4)	-----	154
図 29	4 面出土遺物	-----	155
図 30	5 面・6 面全体図	-----	156
図 31	5 面検出遺構 (1)	-----	157
図 32	5 面検出遺構 (2)	-----	158
図 33	5 面検出遺構 (3)	-----	159
図 34	5 面検出遺構 (4)	-----	160
図 35	5 面遺構出土遺物	-----	161
図 36	5 面出土遺物 (1)	-----	162
図 37	5 面出土遺物 (2)	-----	163

写真図版目次

図版 1	1. I 区 1 面全景 (西から) 2. II 区 1 面全景 (西から) 3. II 区 1 面遺構 47・溝 (北から) 4. II 区 1 面全景 (東から) 5. II 区 2 面全景 (西から)	-----	185
図版 2	1. I 区 2 面遺構 1 (かわらけ溜り) 2. 同 3. 同 4. I 区 2 面遺物出土状況 (北から) 5. I 区 5 面遺構 18 (北から) 6. 同堆積土層	-----	186
図版 3	1. I 区 2 面全景 (西から) 2. II 区 2 面全景 (西から) 3. I 区 2 面土丹検出状況 (西から) 4. I 区 4 面全景 (西から)	-----	187
図版 4	1. II 区 4 面遺構 65、66、69 (西から) 2. II 区 4 面遺構 67、68 (東から) 3. II 区 4 面遺構 67、 68 (南から) 4. II 区 4 面遺構 67、68 (東から)	-----	188
図版 5	1. I 区 5 面全景 (東から) 2. I 区 5 面柱穴検出状況 (南から) 3. I 区 5 面西側部分 (東から) 4. I 区 5 面板材・杭検出状況 (東から)	-----	189
図版 6	1. II 区 4 面遺構 2. 木組み溝部分 3. 遺構 69 西壁板検出状況 (北～) 4. 木組み溝部分 5. 遺構 65、66、69 (東から) 6. 堆積土層 (西から)	-----	190
図版 7	1. I 区 5 面全景 (東から) 2. II 区 5 面全景 (東から) 3. I 区 5 面 (西から) 4. II 区中世基 盤層上面 (東から)	-----	191
図版 8	1. 2 面銅製品出土状況 (東から) 2. 3 面かわらけ出土状況 (南から) 3. 5 面木製品出土状況 (南から) 4. 5 面白磁皿出土状況 (北から) 5. 遺構 6 礎板出土状況 (東から) 6. 木組み溝 検出の地覆材	-----	192
図版 9	出土遺物 (1)	-----	193
図版 10	出土遺物 (2)	-----	194

第1章 調査概観

第1節 調査地点の位置と歴史的環境

調査地点は鎌倉市雪ノ下一丁目 269 番地 1 地点にあり、鎌倉市の定めた「北条時房・顕時邸跡 (No. 278)」範囲内に含まれる。本遺跡は北が鶴岡八幡宮南の道路、西が小町通り、東が若宮大路、南が若宮大路から聖ミカエル教会に向かう道路までの範囲を含んでいる。

現況に沿って説明をくわえると、若宮大路に沿った本遺跡内中ほどに、三河屋酒店がある。調査地点は三河屋酒店の敷地内北側に位置し、調査対象地の東側は若宮大路西側の歩道に面している。現況で、地表面海拔は 8.82m～8.90m である。

調査地の名称にある北条時房 (1175-1240) は、北条時政の子で佐介氏を称し、大仏殿と号した人物である。奥州合戦 (1189)、畠山重忠との合戦 (1205)、和田氏との合戦 (1213) などに参加し、承久の変 (1221) の後には初代の六波羅南探題になっている。連署・相模守は元仁元年 (1224) から死没するまで勤めている。また、北条顕時 (1248-1301) は北条実時の子で引付衆、評定衆などの要職を歴任した人物である。しかし、弘安八年 (1285) に妻の父・安達泰盛が起こした霜月騒動のため下総に配流されている。父・実時の開いた称名寺を整備し、下総に配流される前に多くの領地を称名寺に寄進している。

源頼朝は鎌倉に入った直後に由比郷から小林郷北山に、由比若宮を遷している。これが鶴岡八幡宮である。由比の若宮は、源頼義が康平六年 (1063) に京都の岩清水八幡宮を勧請した社である。若宮大路は、鶴岡八幡宮の参道として治承四年 (1180) に造営した、鎌倉の中心的街路である。寿永元年 (1182) には、妻の北条政子の安産を祈願して段葛を造営している。

第2節 周辺の調査

本遺跡範囲内では幾つかの地点で発掘調査が実施されている。紙数の都合もあって、個々の調査結果について詳細に触れる事はできない。しかし、概要を述べると若宮大路に沿った地点では現在の若宮大路西側歩道に沿って木組み溝が確認されている。この木組み溝については若宮大路の東側でも確認されていることなどから、若宮大路の側溝とする説が有力である。しかし、東西で確認されている溝の数が異なっている事や東側で検出された木組みの一部が、御成町 763 番 5 大路の地点で検出された溝状の掘り込み内に土台角材を据えた塀に類似するなどやや疑問点も残る。若宮調査がなされていないため確証は得られないが、この木組み溝は若宮大路の東西にある屋敷や幕府を取り囲む区画溝であり、若宮大路の側溝は別に設けられたか、この区画溝が大路の排水も担っていた可能性が高いと考えている。

調査結果を概観すると、若宮大路に沿った地点 2 から地点 5 では木組み溝が検出され、少なくともこの範囲はある時期に同じ屋敷であったことが確認されている。屋敷内の様子は、各地点で掘立柱建物と多くの礎石を失った礎石建物が確認され、建物規模はわからないものの、頻繁に建物が造られていた痕跡が確認されている。注目すべき遺構としては、地点 4 で 13 世紀後半頃に作られた池状の落ち込みが、地点 5 で木組み溝の西側で囲炉裏を持つ板壁建物が確認されている。また、出土遺物は 12 世紀末あるいは 13 世紀初頭の京都系手づくねかわらけ皿が多く出土しており、この頃には開発が行われていたことを証明している。地点 5 で見つかった長屋状の板壁建物は、間接的に、若宮大路側に屋敷の門がなく、雑舎が建てられた空間であったという説を補強している。

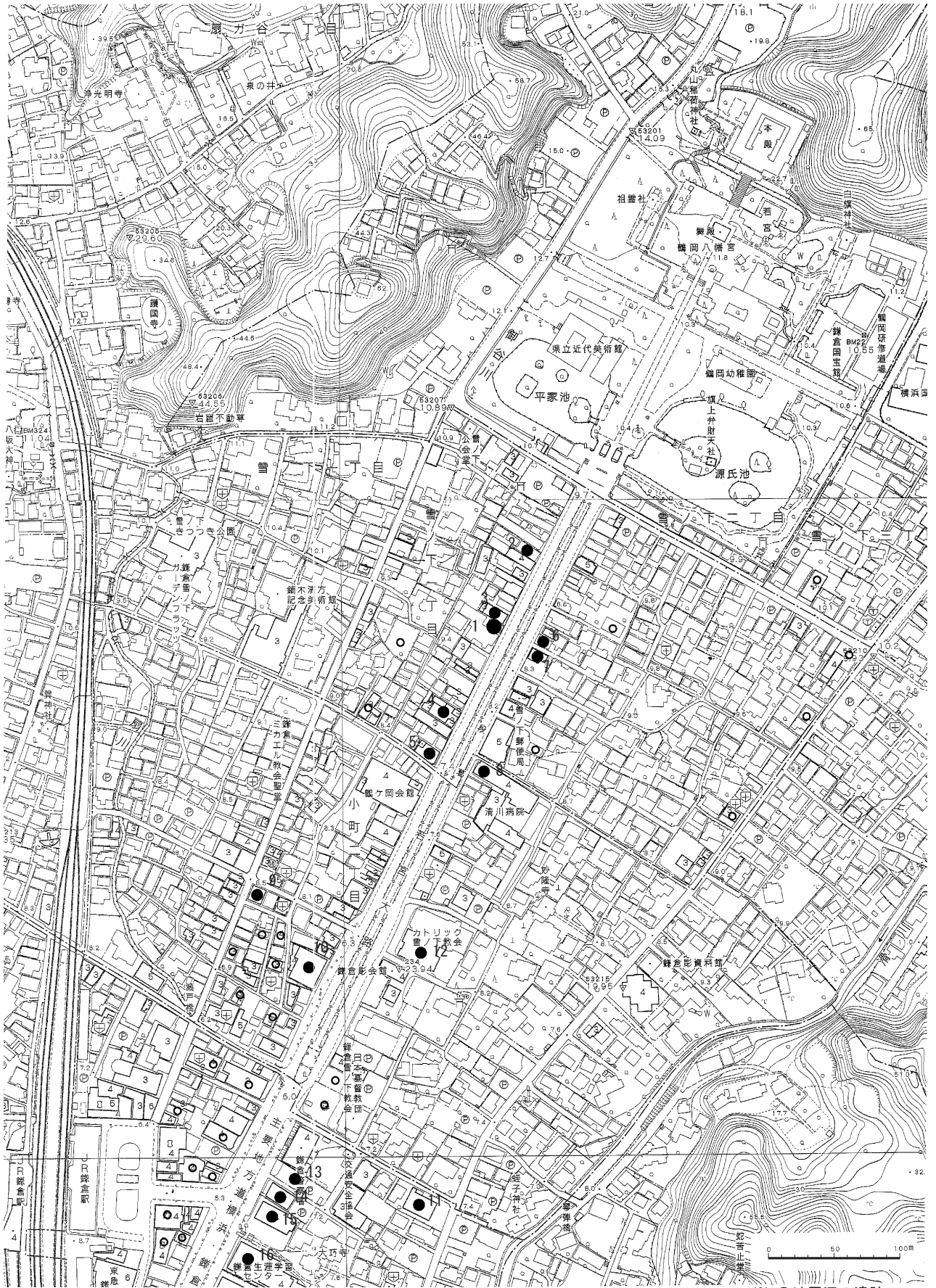


図1 調査地点と周辺の遺跡

※ ●は周辺の遺跡

- | | | |
|-------------------------|----------------------------|----------------------------|
| 1. 本調査地点 | 2. 北条時房・顕時邸跡 (雪ノ下 1-265-3) | 10. 若宮大路周辺遺跡群 (豊島屋店舗用地) |
| 3. " (雪ノ下 1-271-1) | 4. " (雪ノ下 1-273-口) | 11. " (小町 1-352-イ 外) |
| 5. " (雪ノ下 1-2274-2) | 6. 北条泰時・時頼邸跡 (雪ノ下 1-371-1) | 12. 小町 2-345-2地点 (雪ノ下教会) |
| 7. " (雪ノ下 1-372-7) | 8. 宇津宮辻子幕府跡 (小町 2-366-1) | 13. 伝 藤内定員邸跡 (スイミングスクール用地) |
| 9. 若宮大道周辺遺跡群 (小町 2-5-8) | | 14. " (島森書店用地) |
| | | 15. " (鎌倉中央郵便局用地) |
| | | 16. " (新中央公民館用地) |

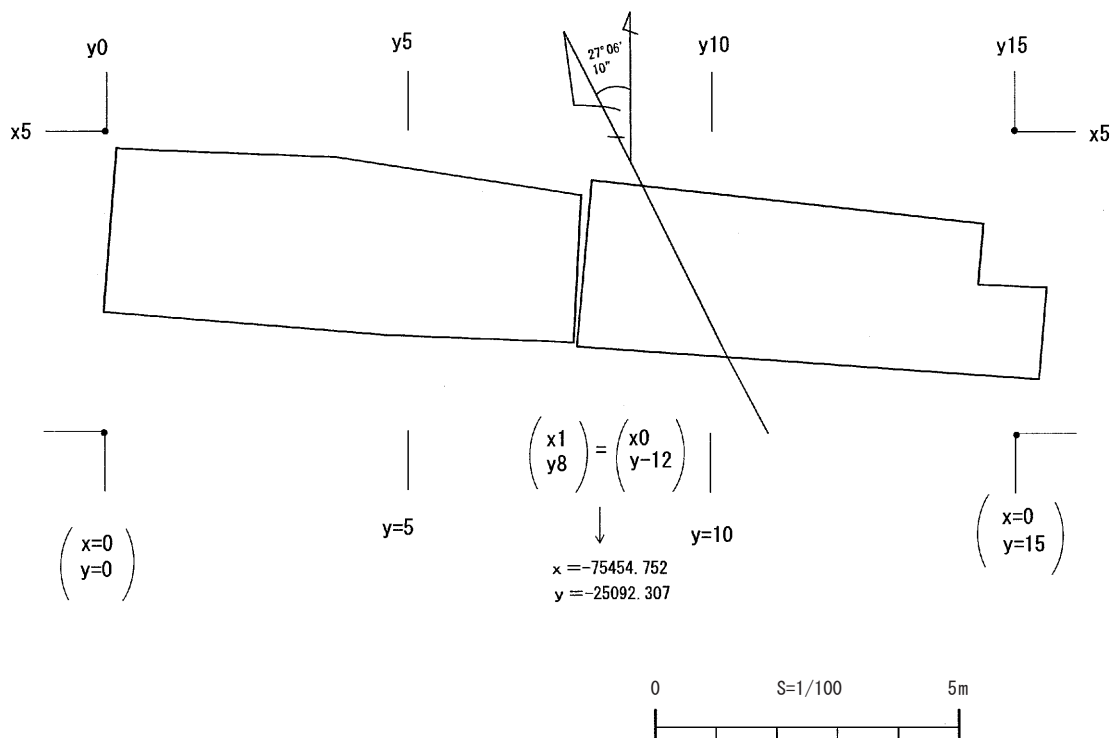


図2 調査軸設定図

時房・顕時邸の内部については、調査件数が少なくかつ地点が離れているため、屋敷の規模、建物の配置、門の位置など、全体の様相はつかめていない。また、若宮大路に沿った木組み溝が検出されていない内部の調査では、検出された複数の生活面のどれが時房・顕時邸あるいは木組み溝と同じ年代の構築物であるのか明確にすることが困難な状況である。

第3節 調査の経過と堆積土層

調査は個人住宅の建設に伴う事前調査として、調査を行った。調査では現地表から50cm前後を重機によって掘削し、以下を人力で掘り下げて遺構確認を行っていった。

調査にあたっては、表土・調査発生土を敷地内で処理したため、対象面積を1回で掘削する事が困難であった。そのため、対象面積を2分割して調査を行なった。便宜的に、最初に調査した部分をⅠ区、次いで調査した部分をⅡ区としている。また、Ⅰ区を埋めた発生土が崩落する危険性も考えられたので2分割した調査区間にはベルト状の未調査区を残した。

本地点で確認した土層は、中世の遺構面や包含層を一括して1層にまとめると、およそ6層の堆積土に区分できる。第1層は表土・現代造成土で地表レベルは8.90mほどである。第2層は茶褐色砂質土で近世耕作土と呼んでいる。この土層はⅠ区ではほとんど確認できなかった。Ⅱ区では、若宮大路の西側歩道の際から580cmほどで色調や土質が変化している。ここより西側では所謂近世耕作土に類似する土質であるが、東では色調は類似しているが粘土層で砂分はなく異なった土層に見える。この変化は水に浸かっていたか否かに因ると考えているが確かではない。

通常、中世の遺構や包含層は第2層の近世耕作土に覆われていることが多い。第2層が堆積する以前に中世の堆積土が一定の高さで削平されたと考えている。これは、畑あるいは水田を開墾する際の削平と考えている。

第3層は中世の生活面群である。破碎泥岩（土丹）や砂を使用した整地・版築が繰り返されている。

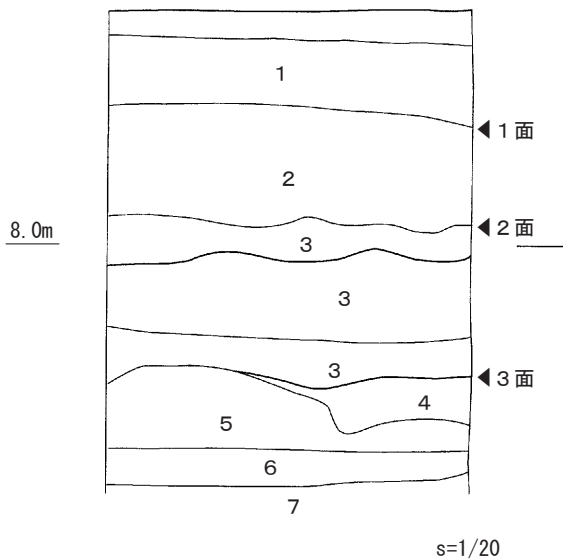


図3 堆積土層（模式図）

- 第1層 表土・造成土あるいは火災層。
- 第2層 キメの細かい茶褐色砂質土あるいは粘質土。近世耕作土。
- 第3層 遺構覆土・生活面群
- 第4層 暗褐色粘質土（中世基盤層）
- 第5層 青灰褐色砂質粘土（中世以前の遺構覆土）
- 第6層 黄褐色（砂質）粘土。
- 第7層 黒褐色粘土。

第4節 調査軸の設定。

調査測量に当たっては、調査区の形状に合わせた任意の座標軸を設け、主に光波測距儀を用いて平面図の作成を行った。図2には、この任意座標軸と国土座標軸との関係を示した。本報告では、前者の座標値を用いて記載を進める。図中には示していないが、国土座標値は鎌倉市4級基準点「S111」と「S112」2点間の関係から、開放トラバース測量によって算出した。国土座標値は旧測地系に準じ、図中では任意の2点について世界測地系の値を提示した。座標値の算出には、国土地理院が公開する座標変換ソフト「Web版TKY2JGD」を使用した。

第4層が鎌倉市街地の中世基盤層である。周辺の調査では、この土層の分析で多量のプラントオペールが抽出されている。確認レベルは7.72m前後。

第6層は黄褐色（砂質）粘土層で、色調が同じでも粘性の強い地点もある。第6層に落ち込んだ遺構は人工的か否かの判断が出来なかった。周辺では人工的な溝等も確認されているが、出土遺物が少なく年代は明らかでは無い。本地点で検出した落ち込み覆土の清灰褐色砂質粘土は調査区西半分で、西に向かって大きく落ち込んでいる。第6層の下は黒褐色の締った粘土層で、大倉地域では第6層と第7層に類似する土層が交互に数層堆積することが確認されている。

第2章 検出された遺構と遺物

本章では、調査したⅠ区、Ⅱ区で検出した遺構を合成して提示し、それに沿って説明を加える。なお、土坑などの説明にあたっては遺物が出土している遺構を優先したが、各面で図示できる遺物の出土している遺構が少ない場合は、形状のわかる遺構については幾つか説明を加えた。

第1節 第1面の遺構と遺物

1面は表土下約30cm、標高8.60m前後で検出された。明確な生活面ではなく、第2層に削平されて、結果として残った面であるが、遺物取り上げ等の都合もあり1面とした。1面で検出した遺構は覆土が焼土や土丹を含むもの（覆土A）、近世耕作土を埋土とするもの（覆土B）、暗褐色粘質土で小さな土丹を含むもの（覆土C）に分かれる。このうち、確実に中世に属するのは覆土Cで、覆土Aは近世耕作土より新しい。おそらく、関東大震災頃の遺構と考えられる。

Ⅰ区で図示した遺構はすべて覆土Aあるいは覆土Bで、近世以降の構築と考えられる。Ⅱ区の遺構は土坑1基、溝2条が本期に含まれ、覆土はBである。やはり、これらの遺構も近世以降の構築と考えられる。

遺構47 Ⅱ区溝（道路に沿った落ち込み）

調査区東端で検出した、若宮大路に並行する落ち込みである。Ⅱ区の南壁でみると、第2層中あるいは上部から掘り込まれている。確認規模は東西3.50m、深さ50cm弱、断面形は箱型で、調査区の東側と南北に延びる。覆土は灰褐色粘土層でわずかに炭化物を含むが柔らかく締りのない土層である。近世耕作土とされるキメの細かい茶褐色砂質土より灰色を帯びて粘性に富んでいる。第2層は、Ⅱ区では1面を覆っているが、Ⅰ区では現代の攪乱で確認できない。本遺構は、第2層の堆積中に構築された落ち込みと判断した。ほとんど遺物を含まないが、底面で中世遺物の包含層を壊して、遺物が混じっている。下端による計測では、軸方向はほぼ真北である。

遺物は少なく、5点が図示できた。図6-1~5は糸切りかわらけ皿。2、3は小皿で、3は器高が高く器壁は丸みを持つ、4は薄手タイプの中皿、5は薄手タイプの大皿。

遺構49 Ⅱ区溝 47の西側

遺構47の底面で確認した、若宮大路に並行する溝である。確認規模は幅23cm~34cm、深さ3cm~9cmで覆土は灰褐色粘土層に暗褐色粘質土が混じった土層。本来2面に帰属する遺構が遺構47に上部を壊されたのか、遺構47に伴う溝か判断に苦しむが、遺構47に上部を壊された溝と判断した。溝の軸はN-10°-Eで遺構47とは異なる。

図示できる出土遺物はない。

遺構50

Ⅱ区の西端で確認した土坑である。覆土はB。平面形は楕円形で、確認規模は長径87cm、短径75cm、深さ29cm、底面レベル8.23mを測る。

図示できる出土遺物はない。

1面出土遺物

1面の遺構を調査中に出土した遺物をここに含めた。3点が図示できた。図6-6は糸切りかわらけ皿の薄手タイプ、7は銅銭で寛永通寶である。8は石製品の砥石で鳴滝産、石材は細粒泥岩である。

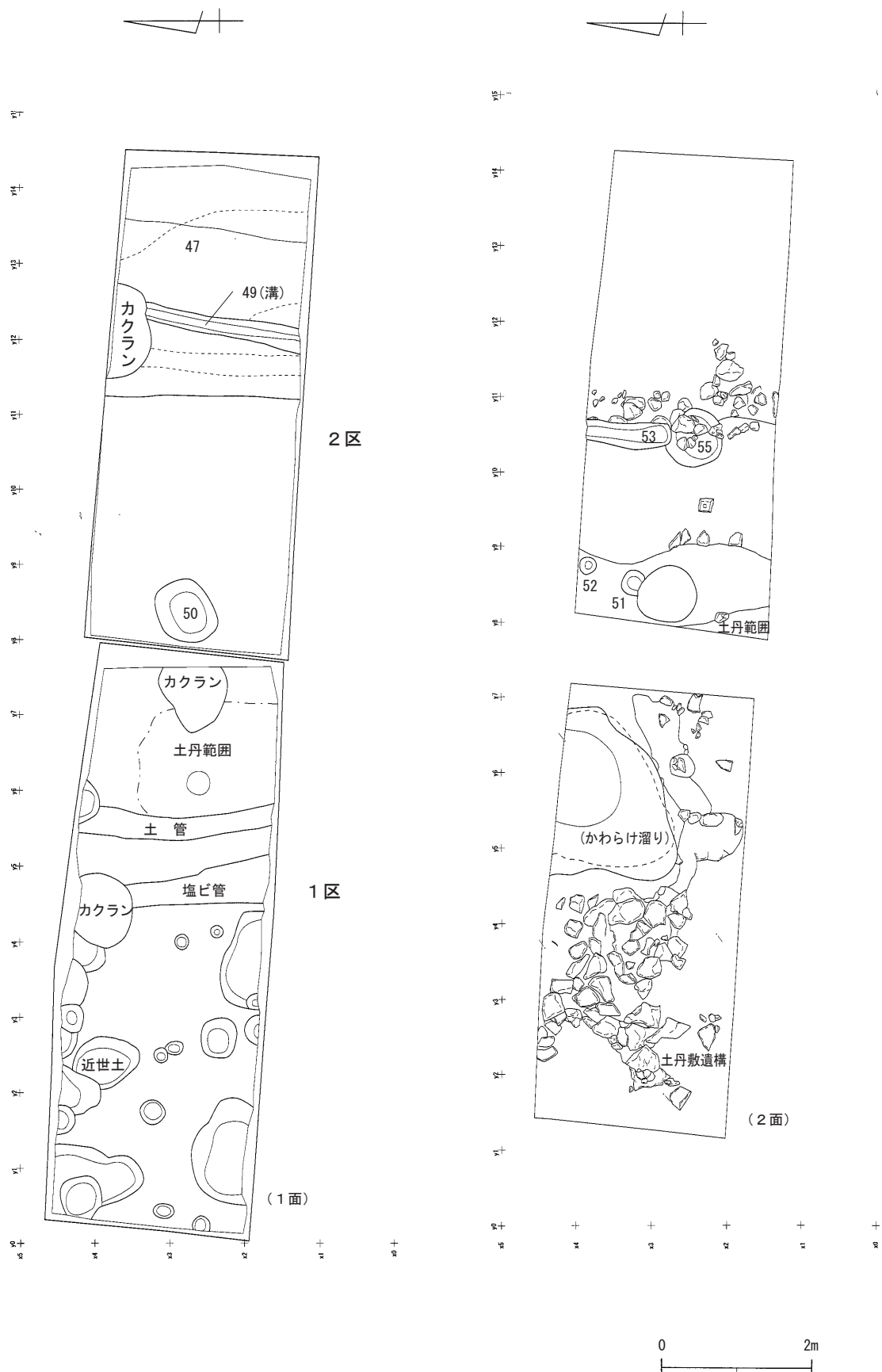
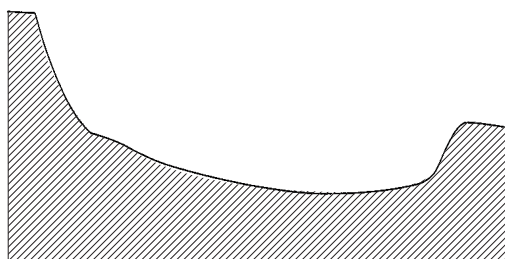
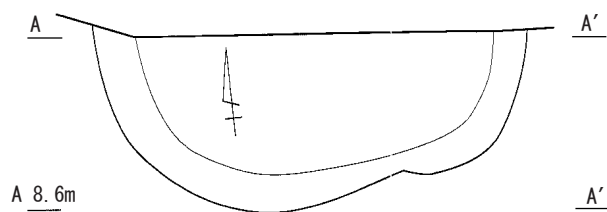
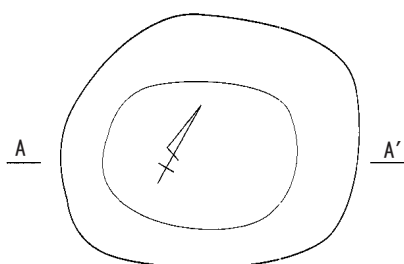


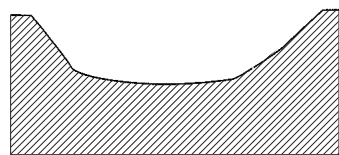
図4 1・2面 遺構全体図



遺構48

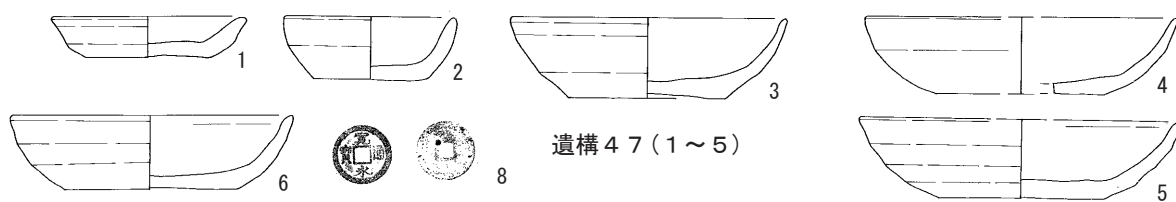


A 8.7m



0 遺構50 1m

図5 1面検出遺構



遺構47(1~5)

0 10cm

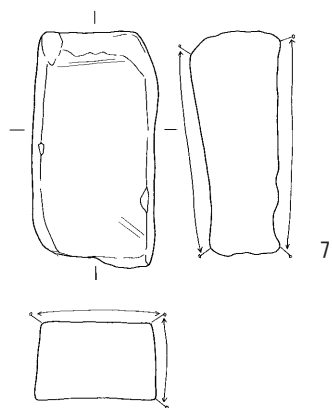


図6 1面遺構・1面出土遺物

第2節 2面の遺構と遺物

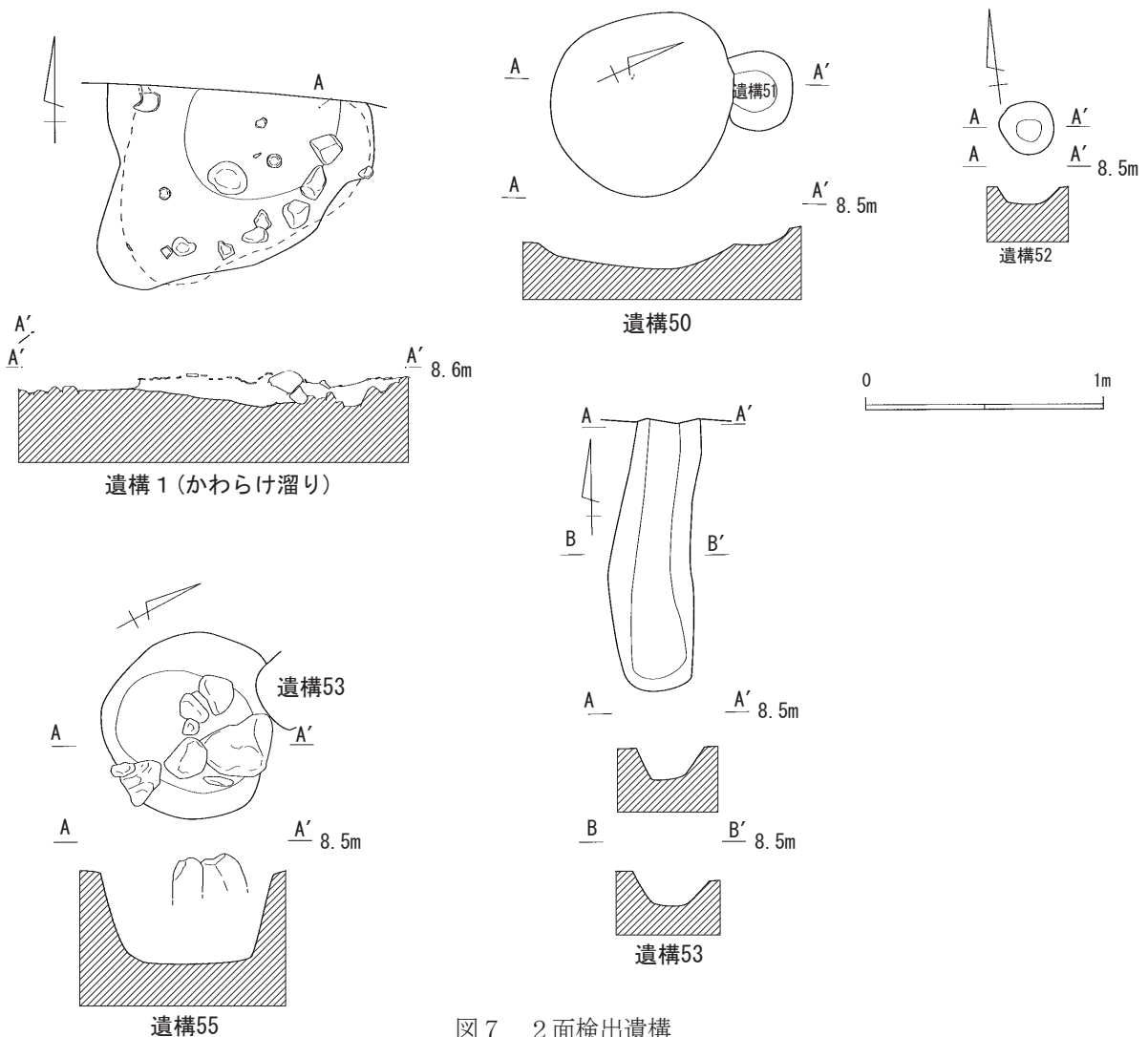


図7 2面検出遺構

2面は、1面の下約20cm、海拔8.45m前後で確認された。上面からの攪乱でかなり破壊を受けているものの、比較的大きな土丹を使用した良好な版築面で、I区は特に良好である。建物内部で検出される版築とは異なるため、建物外の版築面であろう。この面で検出された遺構はかわらけが多量に廃棄された土坑（遺構1）のほか土坑1基、柱穴7口である。II区の若宮大路側溝と位置づけられている溝は、本期には木組み溝は埋没して溝状の落ち込みが残っている。

この落ち込みは遺構として区分していないので、簡単に触れる。覆土は茶褐色砂質土で小土丹、かわらけ片、炭化物を多量に含んでいる。小土丹とかわらけ片は丸く摩滅したものが多い。流れのある水路として使用されていた痕跡と考えられる。確認規模は東西（幅）415cm、深さ80cm、底面レベル7.62m前後を測る。

遺構1（かわらけ土坑）

I区の北東部で検出した皿上に落ち込む土坑で、覆土内に多量のかわらけ皿他が廃棄してある。調査区外の北に延びるため全体規模は不明。確認規模は東西215cm、南北180cmの不整形ないし楕円形で深さ55cmを測る。底面レベル6.44m。覆土は小さな土丹を含んだ暗褐色土で、かわらけ片に混じって手焙り片や雲母が出土している。また、火を受けて剥離した安山岩礎石の破片も比較的多く出土している。火災処理の一括廃棄土坑と考えられる。

1～160が本遺構の出土遺物である。図8-1は瀬戸窯褐釉天目碗の口縁部～底部で一部体部を欠損、

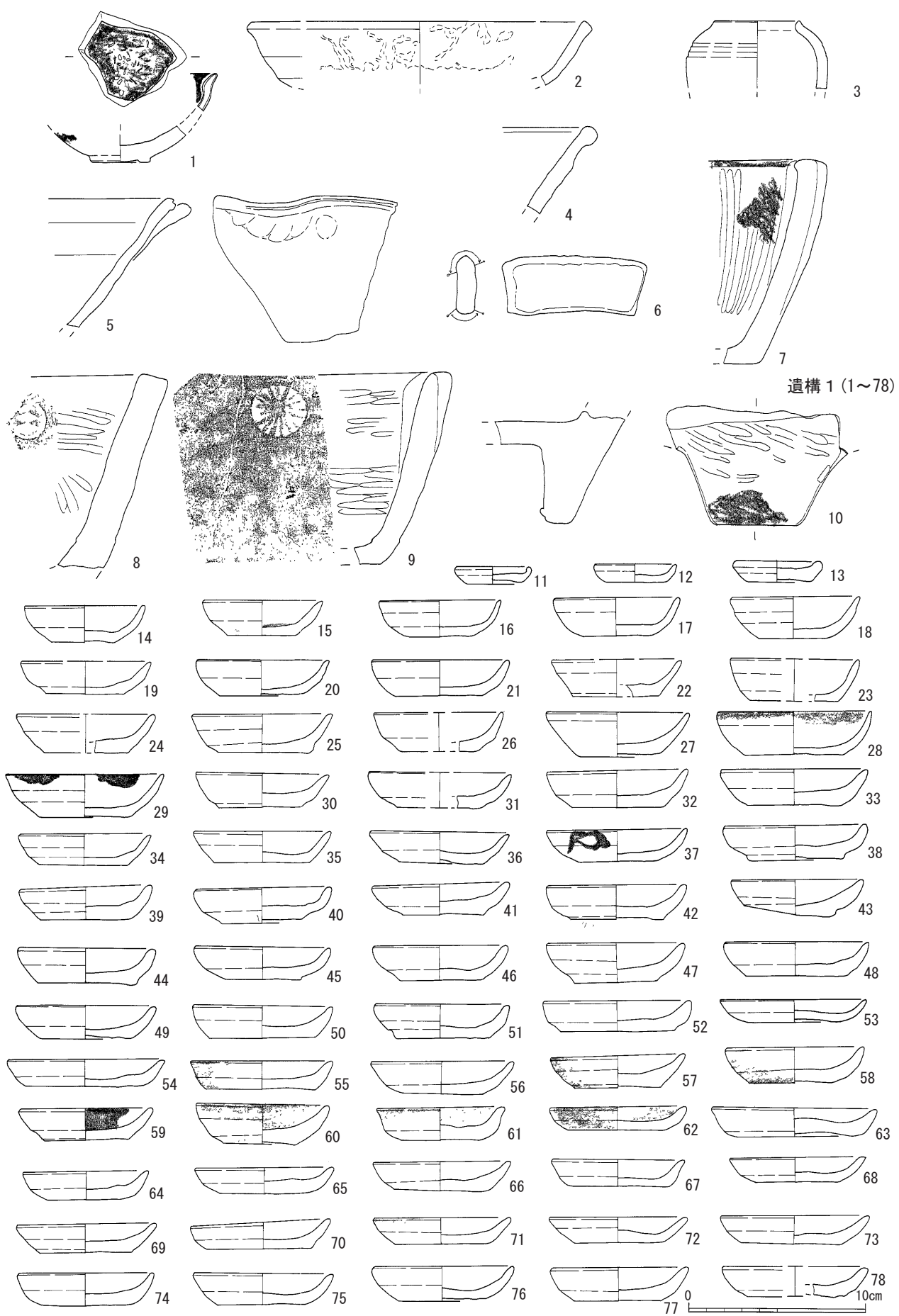


图8 2面遺構出土遺物(1)

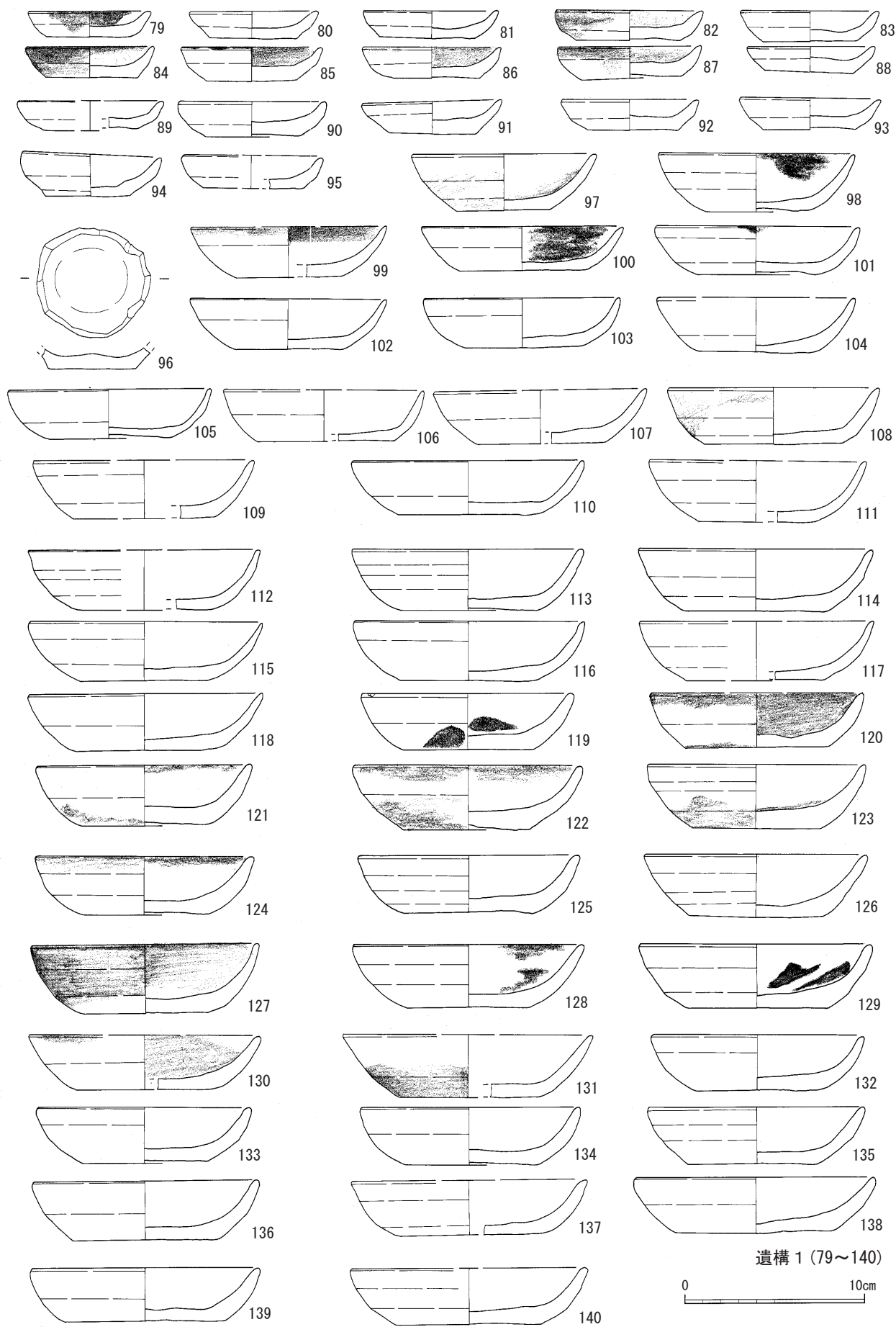
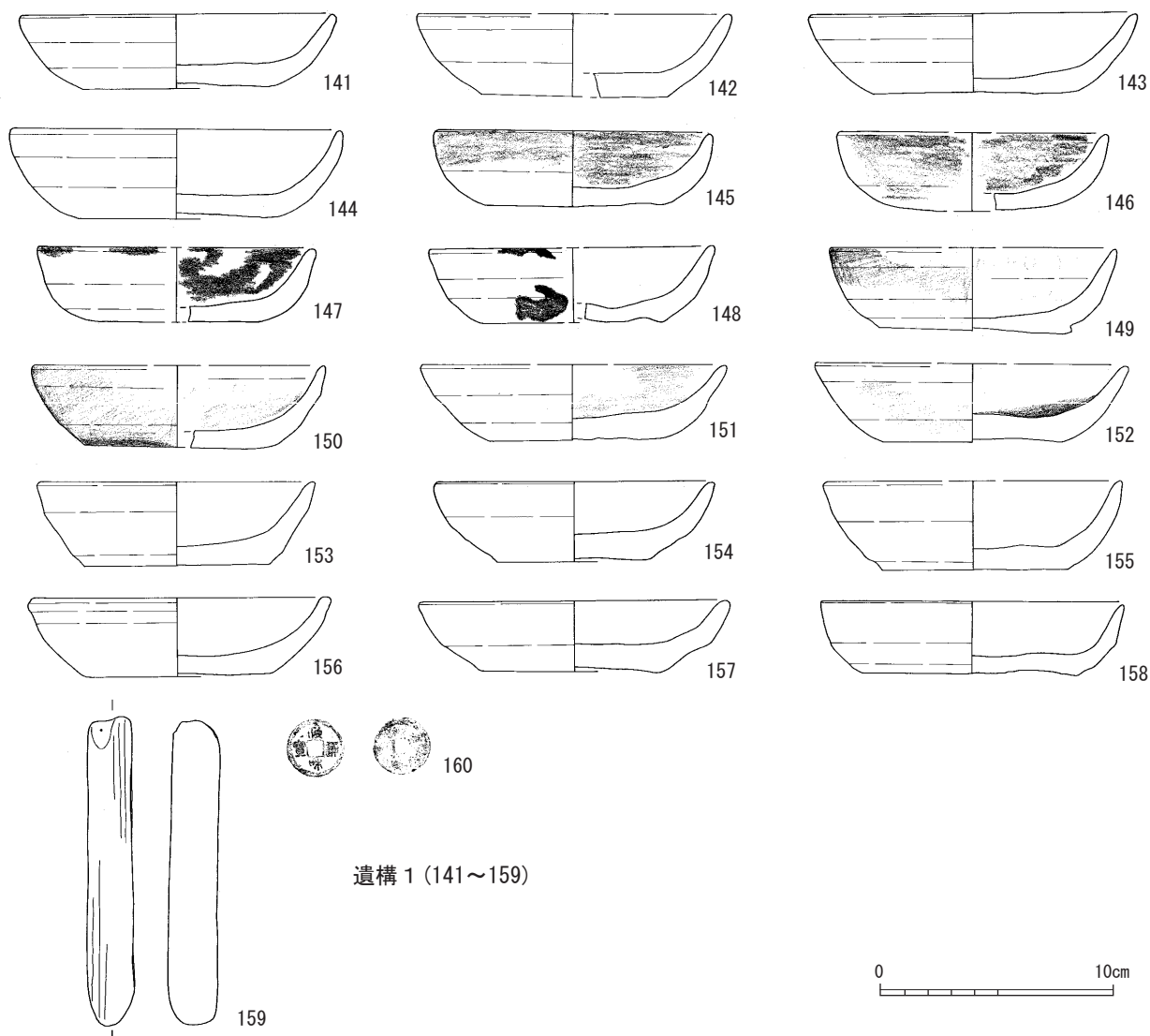


图9 2面遺構出土遺物(2) (遺構1)



遺構 1 (141~159)

図10 2面遺構出土遺物(3)

火熱を受けて光沢を失い、内面見込み部に火熱を受けた時に付着したと思われる油煙が付く。2は瀬戸窯灰釉卸皿の口縁～体部で瀬戸窯の編年では中期のIに相当、3は瀬戸窯灰釉小壺の口縁～胴部で内側に朱が付着、4、5は常滑窯捏ね鉢の口縁部で、4、5共にI類、6は常滑窯捏ね鉢で陶片に転用し2面に磨り痕あり。7～10は土器質手焙りで、7～9は口縁部～胴部で、8は口縁部付近に三鱗文が、9は菊文のスタンプが押印してある。10は脚である。11～158は糸切りかわらけ皿で、11～13はコースター皿。14～95は小皿で、15、28、29、37、55、57～59、61、62、79、82、84～87は内面、外面あるいは内外面に火熱を受けて変色している。60、71は口縁部の内外にススが付着している。96は打ち欠き、97は薄手タイプの中皿。98～158は大皿で、97、99、100、108、119～123、127～131、145～151は内外面に火熱を受けて黒いススが付着している。98、101、124、152は口縁部の内外にススが付着し、灯明皿として使用していた痕跡がある。159は木製品でへら状工具、160は銅銭で政和通寶(北宋・1111年)。

遺構51

1面の遺構50に南側を壊されて検出した柱穴である。平面形は円形で、確認規模は東西34cm、南北(25)cm、深さ6cm、底面レベル8.36mを測る。

図示できる出土遺物はない。

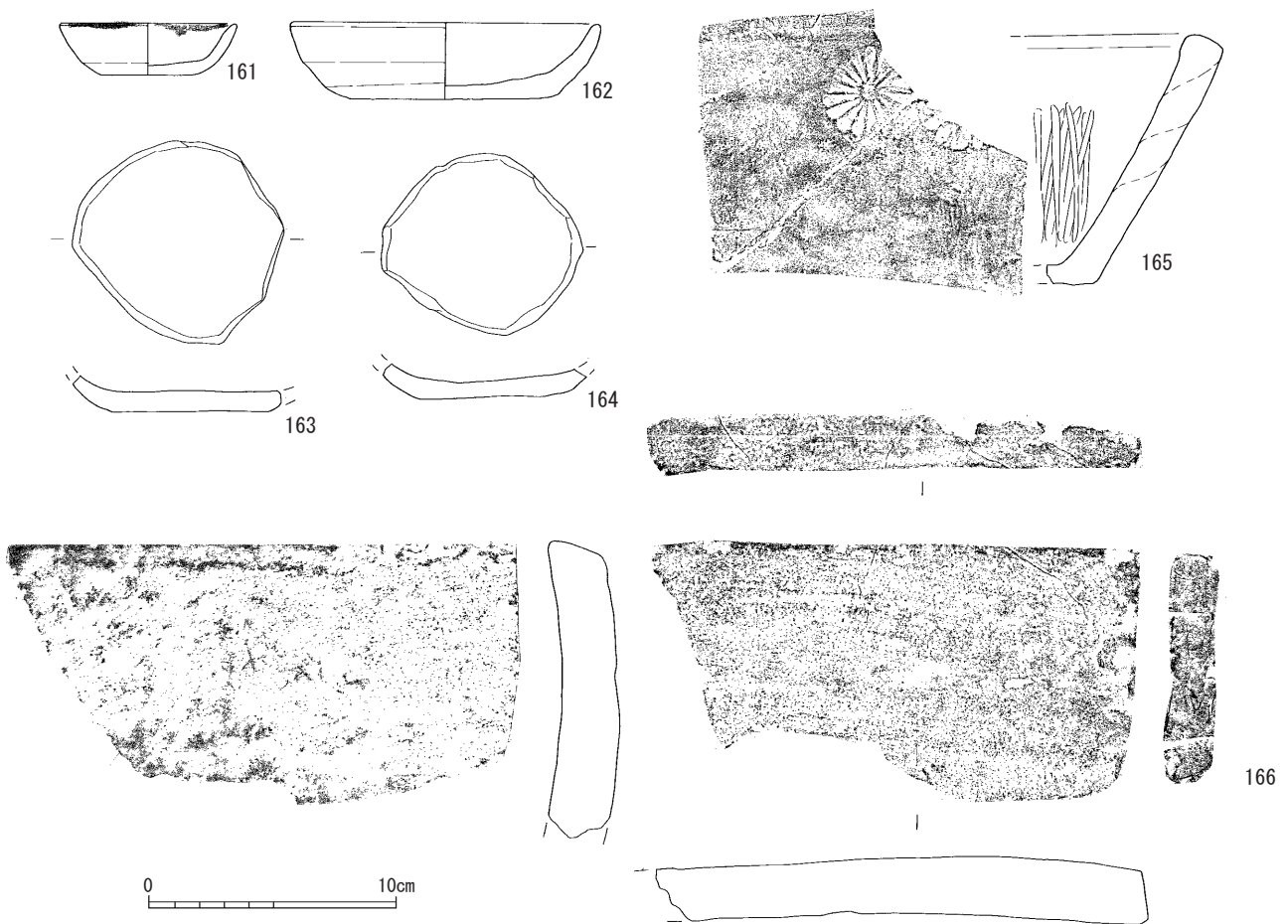


図 1 1 2 面出土遺物

遺構52

遺構51の北東で検出した柱穴である。平面形は円形で、確認規模は東西23cm、南北22cm、深さ7cm、底面レベル8.36mを測る。

図示できる出土遺物はない。

遺構53

1面の遺構47の西側で検出した溝状の落ち込みで、遺構55の北から始まり、調査区外の北に延びている。3面の遺構61（溝）の上端ラインと重なる部分があり、遺構61の一部を調査して番号を付けた可能性がある。

確認規模は、上幅35cm～40cm、深さ9cm～10cmで、検出長110cmを測る。底面のレベルは北端・南端ともに8.29mで、検出部分では傾斜が無い。

図示できる出土遺物はない。

遺構55

遺構53の南で検出した小型の土坑である。平面形は円形で、東西78cm、南北82cm、深さ40cm、底面レベル8.0mを測る。上面は、1面の土丹版築面に覆われている。

図示できる出土遺物はない。

2 面出土遺物

2 面の遺構を調査中に出土した遺物をここに含めた。6 点が図示できた。図 11-161 は糸切りかわらけ小皿で、口縁部の内外面にススが付着し、灯明皿として使用痕跡がある。162 は糸切りかわらけ大皿、163、164 は打ち欠き、165 は土器質手焙りの口縁～胴部で、口縁付近に菊花文スタンプが押印されている。166 は平瓦である。

第 3 節 3 面の遺構と遺物

2 面構成土の下 10cm、海拔 8.0m 前後で確認した厚さ 10cm ほどの版築面上面を 3 面とした。I 区、II 区ともに版築面が広がっている。本面では I 区で土坑、柱穴が、II 南北方向の細い溝と、そこから西に延びる細い溝が確認され、その周辺から小型土坑や柱穴が検出されている。また、若宮大路に沿って構築された木組み溝が本期に出現する。言い換えると、構築された木組み溝は本面までは存在し、やがて埋没する。そして、上面の 2 期では木組みのない浅い溝になっている。

検出された遺構のうち、柱穴の遺構 58～遺構 60 については個々に説明を加えないが、径 25cm ほどの円形で深さは 20cm 前後である。検出された柱穴のうち、遺構 56、遺構 59、遺構 58 は南北に並んでおり、遺構 61 と対の施設と考えることも可能である。

遺構 2

I 区西壁際で検出した柱穴状の遺構である。西側の排水溝に一部を壊されている。確認規模は東西 30cm、南北 32cm、深さ 12cm、底面レベル 8.0m を測る。

図示できる出土遺物はない。

遺構 3

遺構 1 の南西で検出した小型の土坑である。平面形は東西に長軸を持つ小判型で、確認規模は東西 102cm、南北 72cm、深さ 10cm、底面レベル 8.01m を測る。

遺物は 4 点が図示できた。図 15-1～4 は糸切りかわらけ皿。1、2 は小皿、3 は薄手タイプ中皿、4 は大皿である。

遺構 56

II 区の北西部で検出した柱穴であるが、西側を別遺構に壊されて、北側調査区外に延びているため部分的な確認にとどまった。確認規模は東西(35cm)、南北(32cm)、深さ 20cm、底面レベル 8.25m を測る。平面形は円形と思われる。

遺物は 1 点が図示できた。図 15-5 は糸切りかわらけ大皿である。

遺構 57

遺構 62 の東で検出した土坑である。平面形は不整形で、確認規模は東西 48cm、南北 42cm、深さ 20cm、底面レベル 8.09m を測る。

遺物は 1 点が図示できた。図 15-6 は糸切りかわらけ小皿である。

遺構 61

若宮大路に並行方向の溝である。木組み溝の西側羽目板から 140cm ほど西に、本溝の東側掘り込み肩がある。確認規模は幅 35cm～40cm、深さ 4cm～15cm を測り、確認長さ 240cm で南北の調査区外にのびている。底面レベルは北端で 8.14m、南端で 8.0m を測り、確認部分では南に向かって流れる傾斜を持っている。南北方向は中心軸で、北から東に 2° 傾いている。

図示できる出土遺物はない。

遺構 62

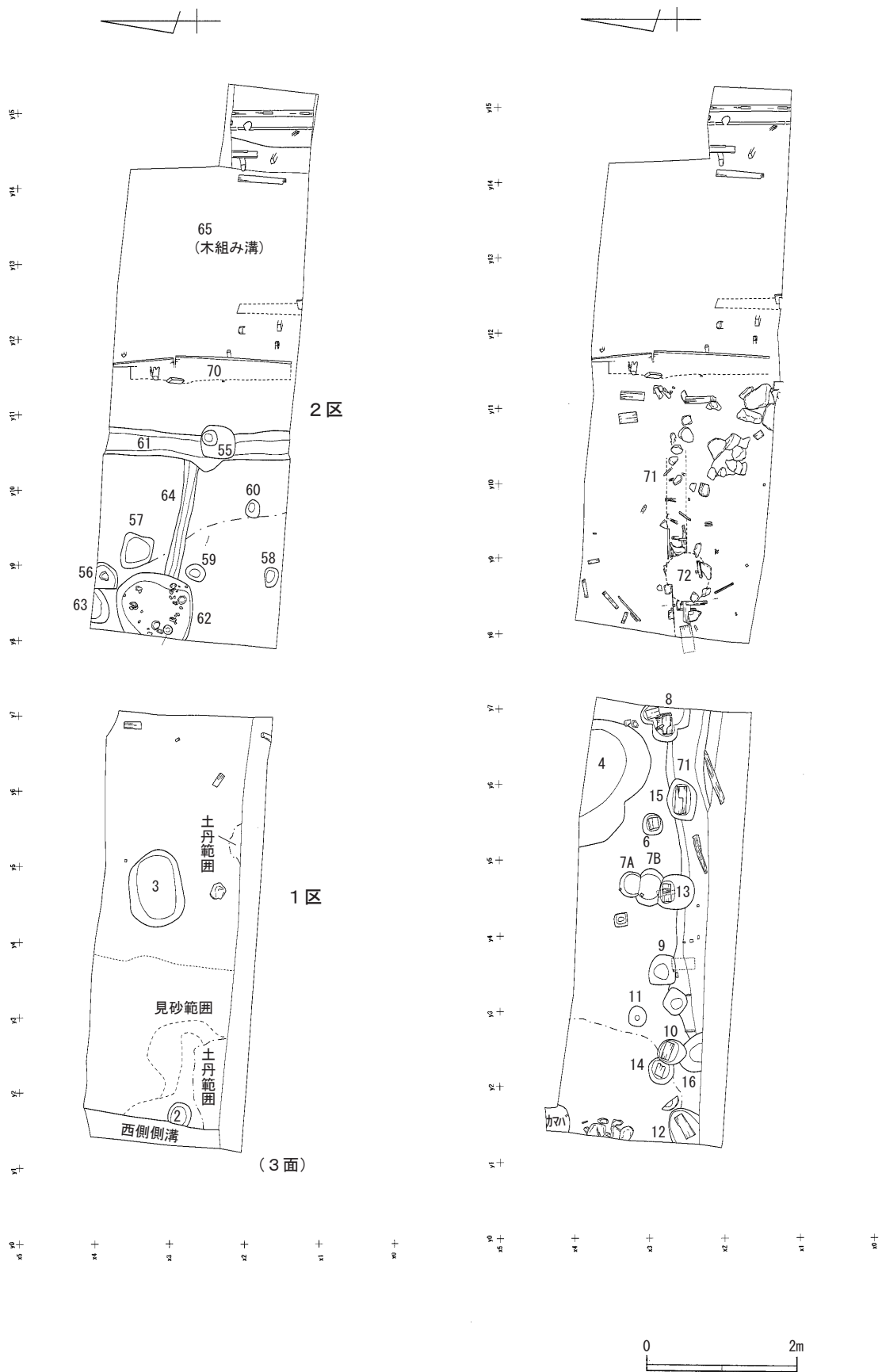


図12 3・4面遺構全体図

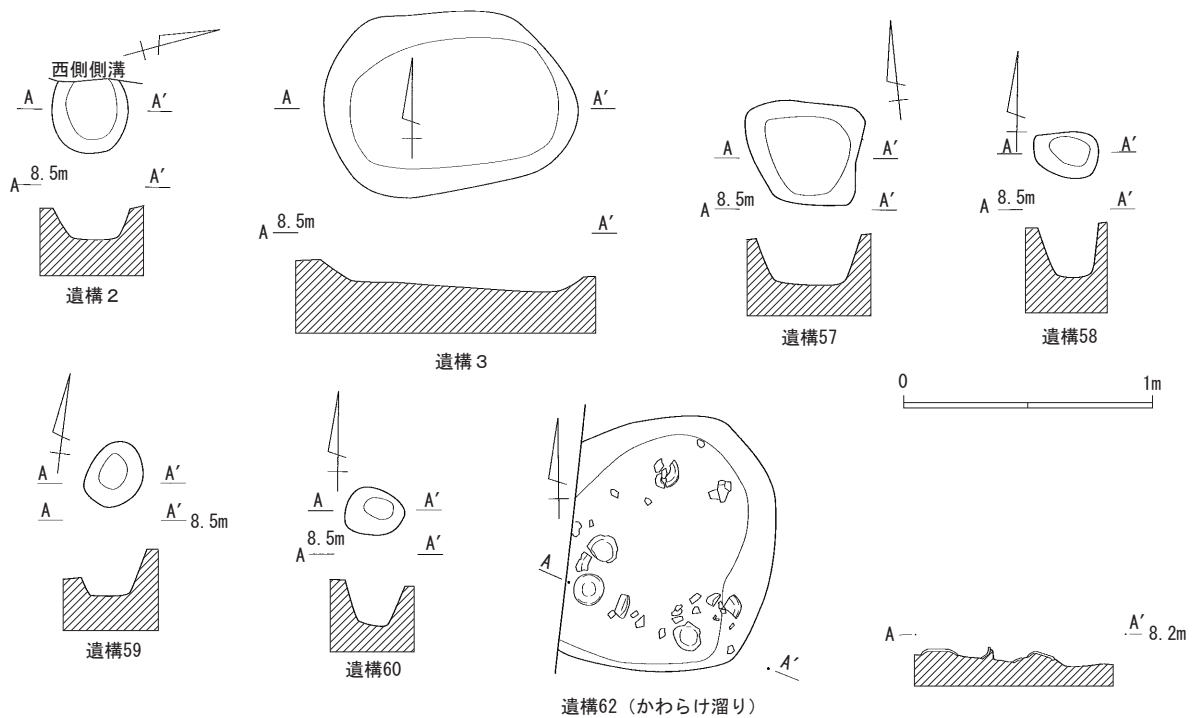


図13 3面検出遺構(1)

II区の西壁際で検出した土坑である。覆土内からは比較的多くのかわらけ皿が出土している。調査時点では「かわらけ溜り」としたが、出土量はさほど多くない。平面形は円形で確認規模は東西(83cm)、南北103cm、深さ20cm、底面レベル8.06mを測る。

遺物は4点が図示できた。図15-7~10は糸切りかわらけ大皿で、9、10は薄手タイプである。

遺構63

II区の北西隅近くで検出した小型土坑であるが、大部分が調査区外にあるために平面形や深さは正確に確認できなかった。確認部分では、東西48cm、南北(22cm)、深さ21cmを測る。平面形は楕円形と推測できる。

図示できる出土遺物はない。

遺構64

遺構61に合流する東西方向の溝である。I区に向かって底面が高くなり、II区の西壁際で遺構62に壊され、I区では消滅して確認できなかった。確認規模は幅17cm、深さ5cmで、底面レベルは東端で8.19m、西端で8.21mを測る。確認部分では西から東に向かって下る傾斜である。

図示できる出土遺物はない。

遺構65 (遺構66、遺構69も同じ)

II区東側で、若宮大路に並行方向で確認された溝である。確認した東西の地山に掘り込まれた最大幅は380cmで、遺存する横板、杭、角材、底面に残る段差で、少なくとも4回の作り変えあるいは改修が考えられる。以下、説明を加えるが、あくまでも区分は使用中の溝内に不要な杭や板材は無いという前提で行なっている。本来であれば、4回の作り変え・改修が本期から5期にかけて帰属すると思われる、各期において説明を加えるべきであろうが、煩雑になるためここでまとめて説明を加える。本期には3回目あるいは4回目の溝と考えている。

最も初期の溝は調査区東端から180cm(若宮大路西側歩道の西際から3.71m)離れて東壁の痕跡が底面に残る。この落ち込みは8cmほど残り、幅158cmを測る。柱穴などの痕跡は確認できなかった。底面レベル6.89mを測る。

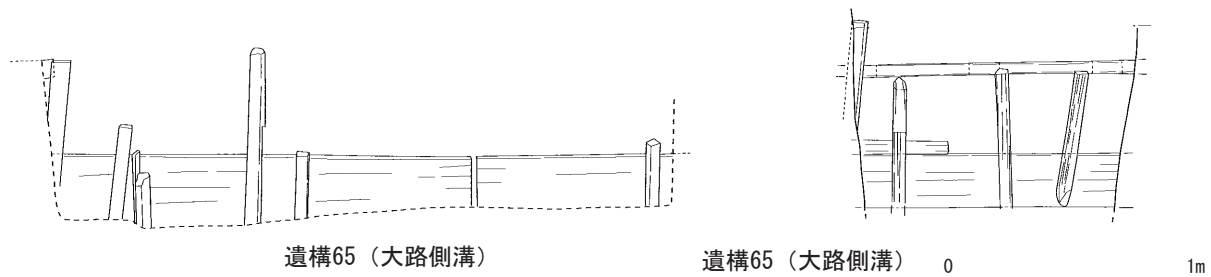


図14 3面検出遺構(2)

2回目の溝は、調査区東端から25cm(同、218cm)離れて東壁の木組みが検出された。木組みは、上段の角材(ホゾ穴有り)と羽目板の一部である。羽目板は掘り込み壁から20cmほど西にあり、上段の角材の直下ではないが、これは角材あるいは羽目板が土圧などの影響で動いたと考えている。羽目板の西(内)側には角杭が4本打ち込まれ、補強の痕跡も伺える。これに対応する西壁は検出できなかった。改修の際に失われた可能性もある。角材は上下8cm、幅12cmで上面レベル7.56m。上面は、底面から58cm上に位置する。幅3cm、長さ12cmのホゾ穴が37cm間隔で木材を貫いている。羽目板は上下20cm、厚さ3cmで上面レベル7.19m。角杭は最も高い杭で7.75mを測る。東側の地山に残る掘り込みと角材の関係から、最大幅380cmの溝掘り方は2回目の溝に対して掘られたと考えられる。また、この掘り込みに並行して、溝の西側に深さ60cm、幅70cmの落ち込みが作られている。調査区南壁では、この落ち込み底面から20cm上に東西方向の角材痕跡が確認できた。これが羽目板の引き材痕跡と考えられる。痕跡の上面レベルは7.59mで底面より62cm高い。

3回目の溝は、調査区東端から370cm(同、562cm)離れて西壁の木組みが検出された。木組みは羽目板と角杭である。羽目板は2枚が検出された。南側の板は上下28cm、厚さ1.5cmで長さ168cmが検出され、調査区外南に延びている。北側の板は南側の板と2cm離れて、上下24cm、厚さ1.5cmで長さ78cmが検出され、調査区外北に延びている。角杭は南側の板内側に2本、北側の板内側に1本が打ち込まれている。板の上面レベルは7.01m~7.05m、杭の上端レベルは最も高い杭で7.04mを測る。

4回目の溝は、調査区東端から80cm(同、273cm)離れて東壁の木組みが検出され、そこから234cm離れて検出した角杭を西壁と判断した。東側の木組みは底面から21cm高い位置で検出された上下5cm、厚さ8cmの角材とその内側に打ち込まれた角杭2本である。角材の南端は中世段階で切断されたと思われるが確かではない。ホゾ穴は確認できなかった。上面レベル7.27m。角杭は幅5cm、厚さ6cmで最も高いレベルは底面から57cm、7.55mを測る。2本の杭は、底面近くで40cm離れている。西側の杭は幅5cm、厚さ8cmで、東側の杭と対称関係にないが、底面では40cm離れて打ち込まれている。最も高い杭のレベルは底面から70cm、海拔7.47mを測る。

以上をまとめると、まず幅158cmの南北方向の溝があり、次いで、2回目の掘り方幅370cmの木組み溝(規模不明)が造られる。この溝はホゾ穴を持つ土台角材が使用され、西側に羽目板の引き材が設置された良好な溝である。その後、3回目の土台角材を伴わない羽目板と角杭の溝になり、この姿で中世は使用されている。

遺物は多量に出土している。溝の区分で出土遺物を分けると、図15-11~35は1回目の溝(遺構65)、図15-36~71は2回目の溝(遺構66)の出土である。

図15-11は瀬戸窯灰釉折縁鉢の口縁~胴部、12は魚住窯捏ね鉢の口縁~胴部、13~20は糸切りかわらけ小皿で、17、18は内外面に火熱を受け変色し、18、20、21は口縁部の内外面にススが付着し、灯明皿として使用されている。21は薄手タイプ中皿、22~29は糸切り大皿、30は穿孔かわらけで、底部中央付近に1穴あけられている。31~35は瓦で、31は軒丸瓦、32・33は軒平瓦、34は平瓦、35は平瓦で火熱を受けている。

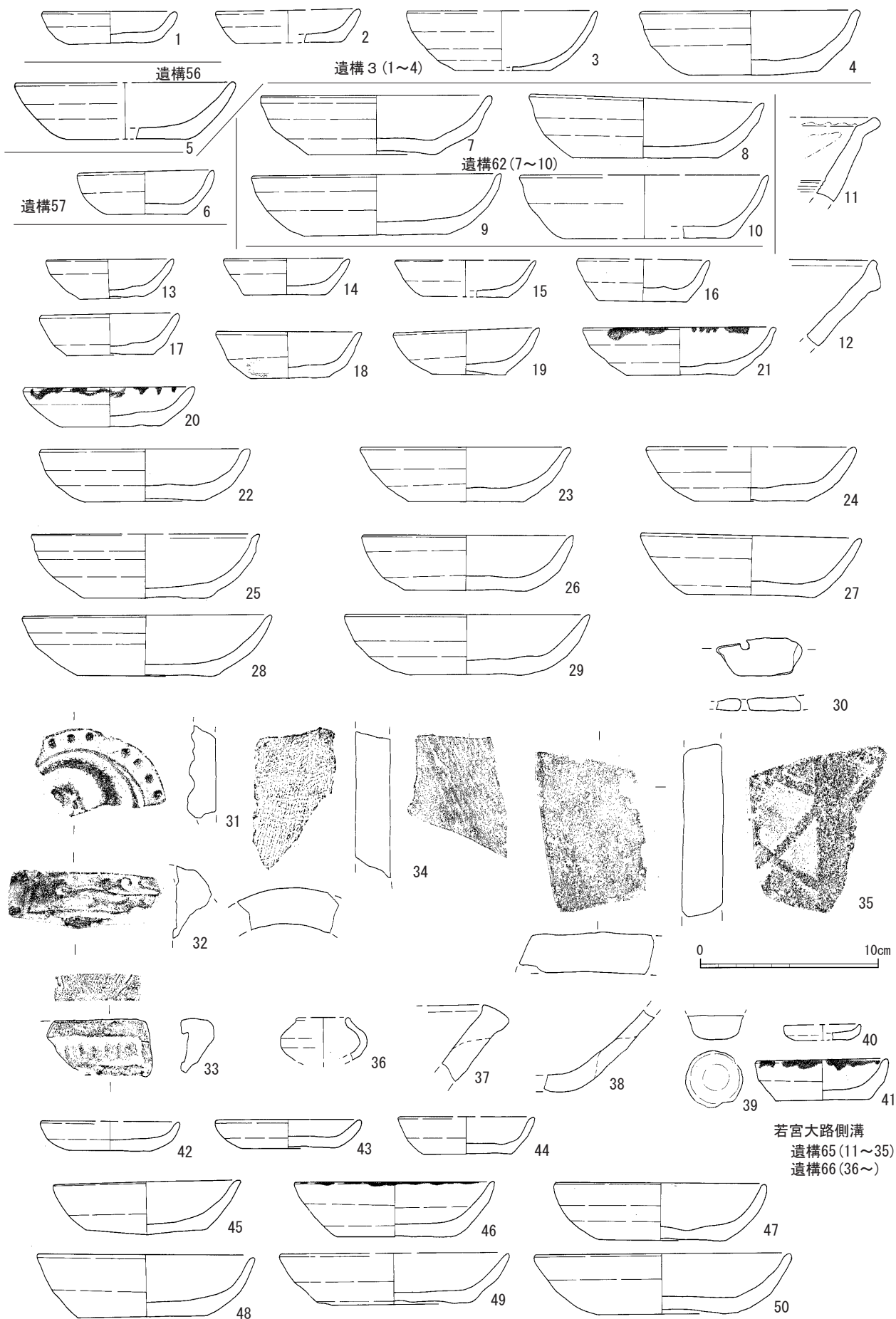


图15 3面遺構出土遺物 (1)

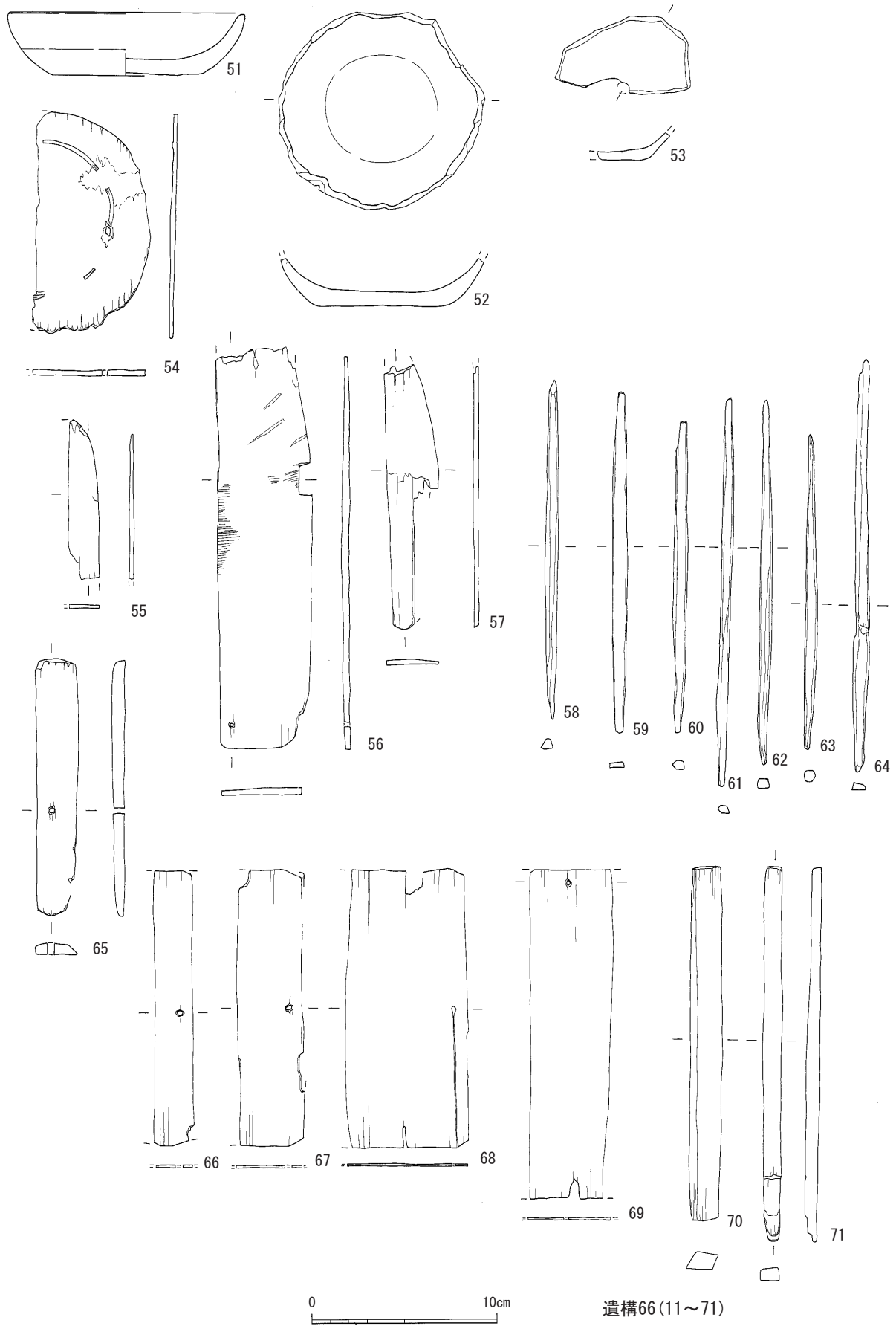


图 16 3面遺構出土遺物 (2)

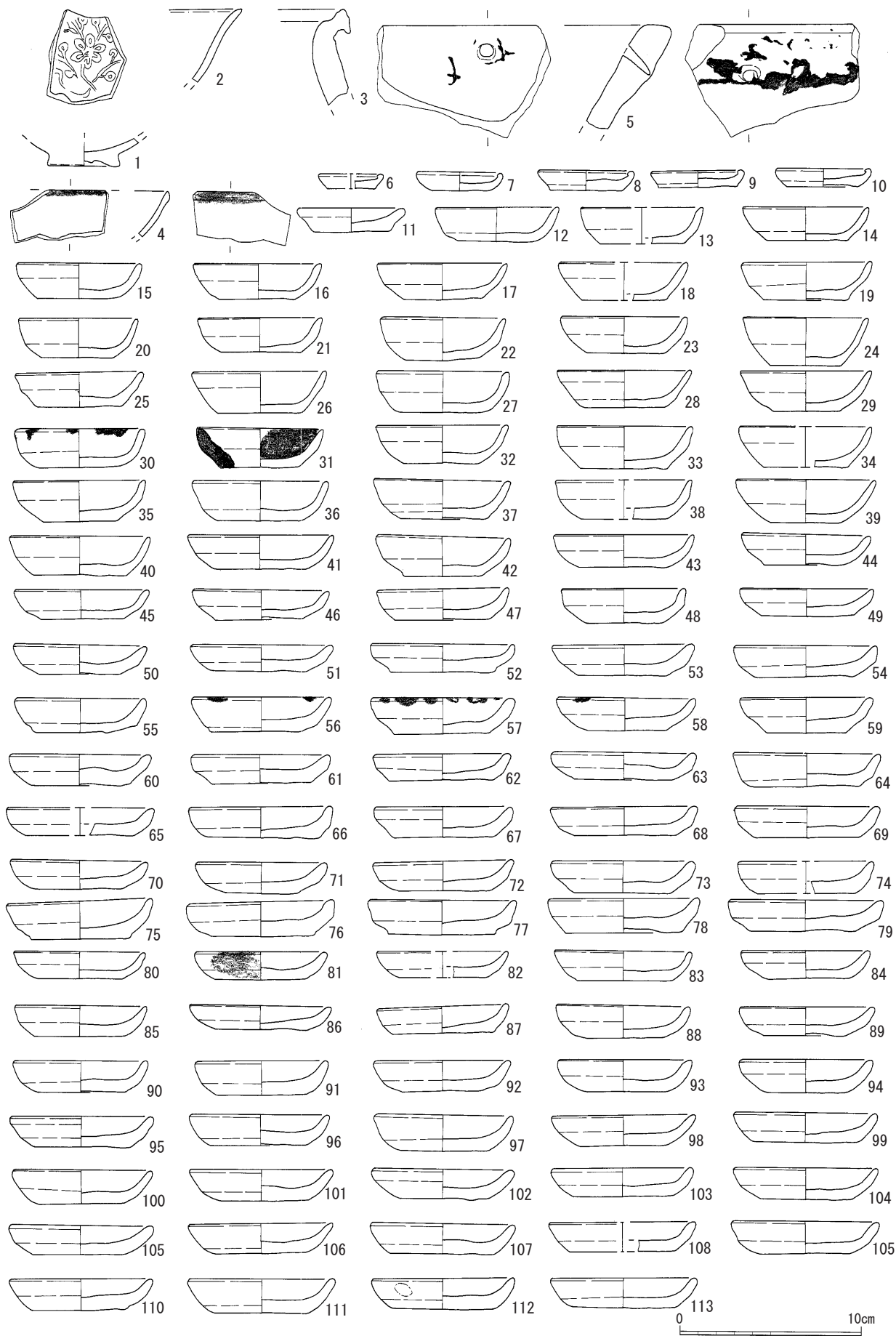


图 1 7 3 面遺構出土遺物 (3)

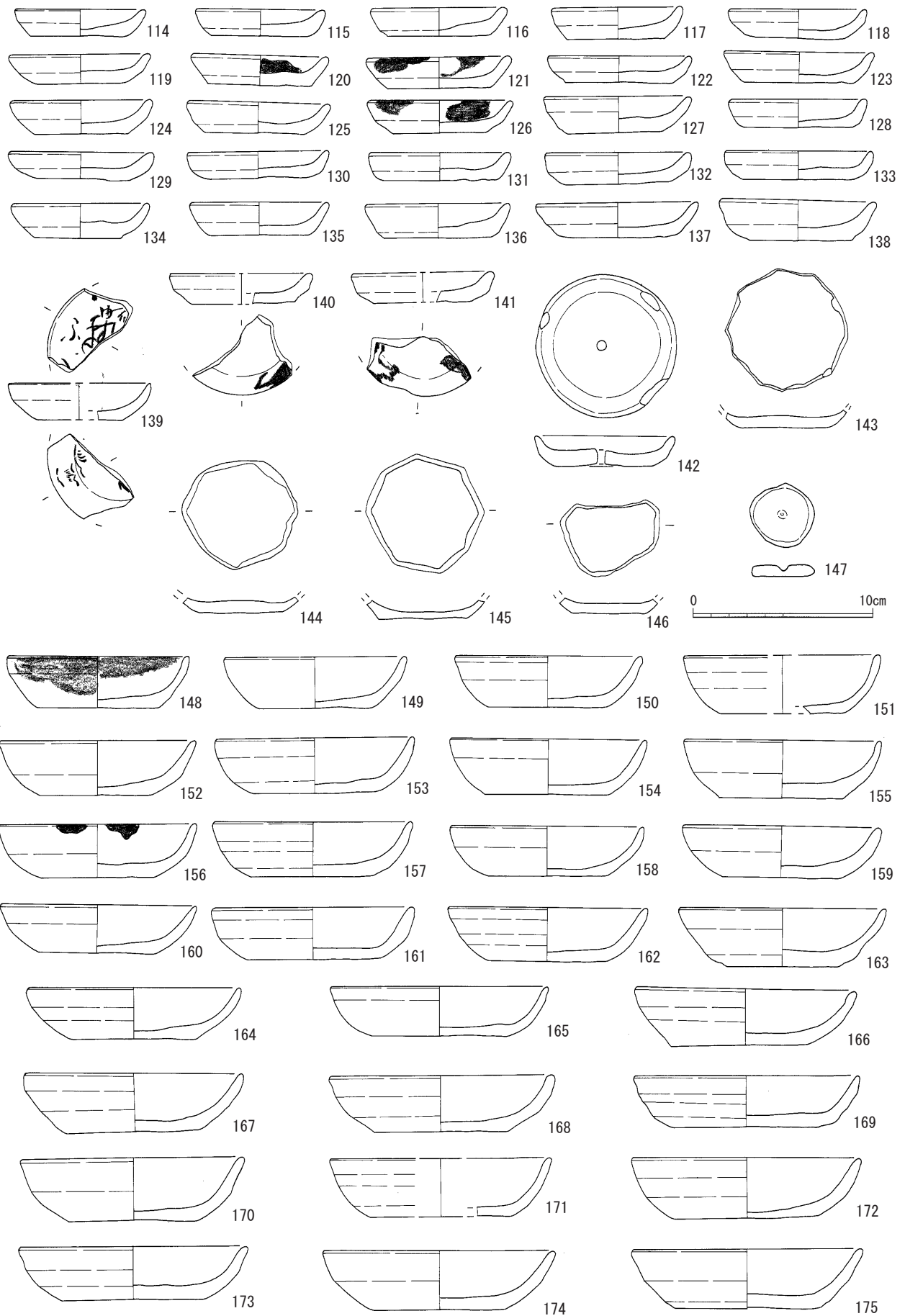


图 18 3面遺構出土遺物 (4)

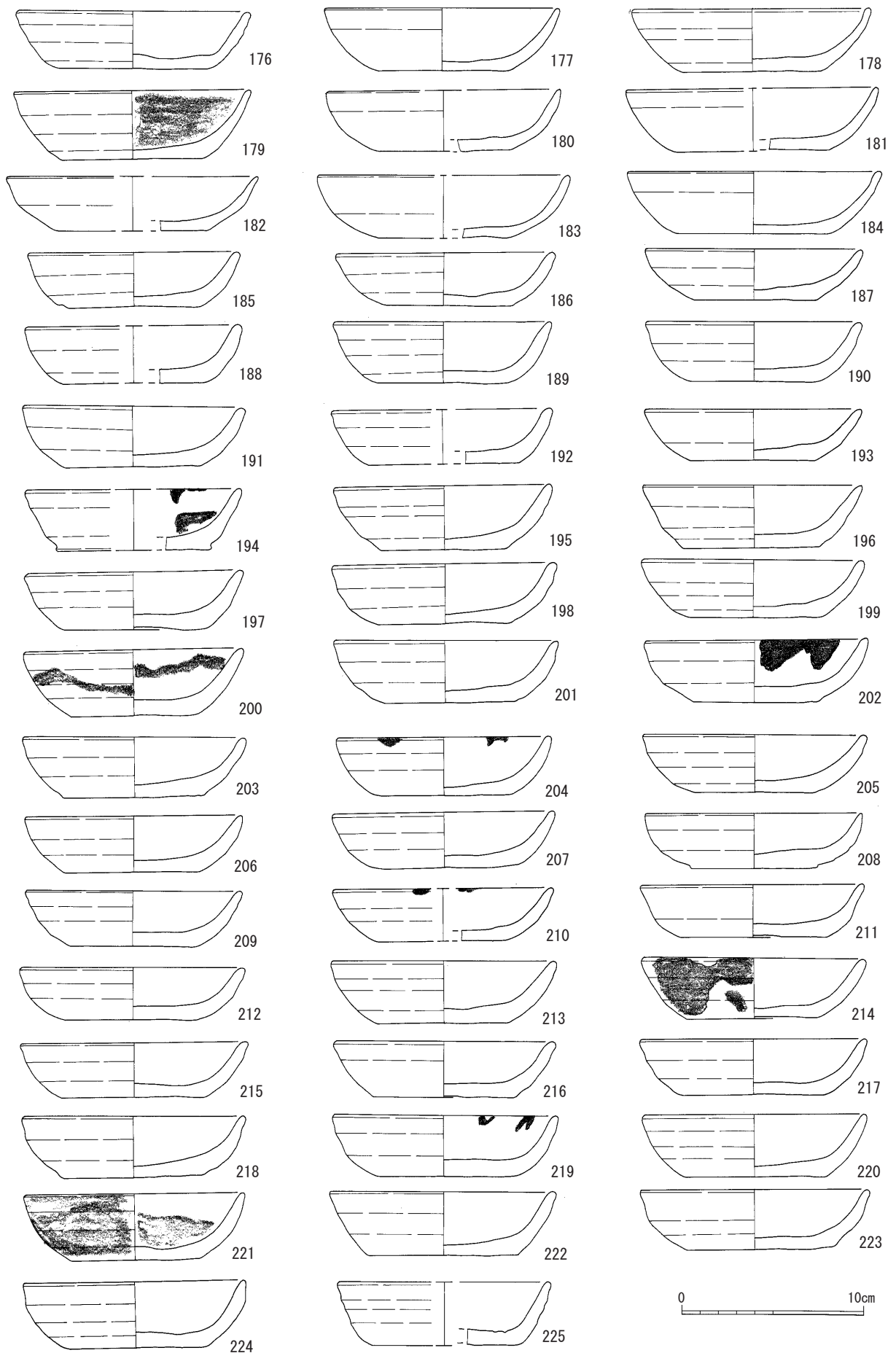


图 19 3面遺構出土遺物 (5)

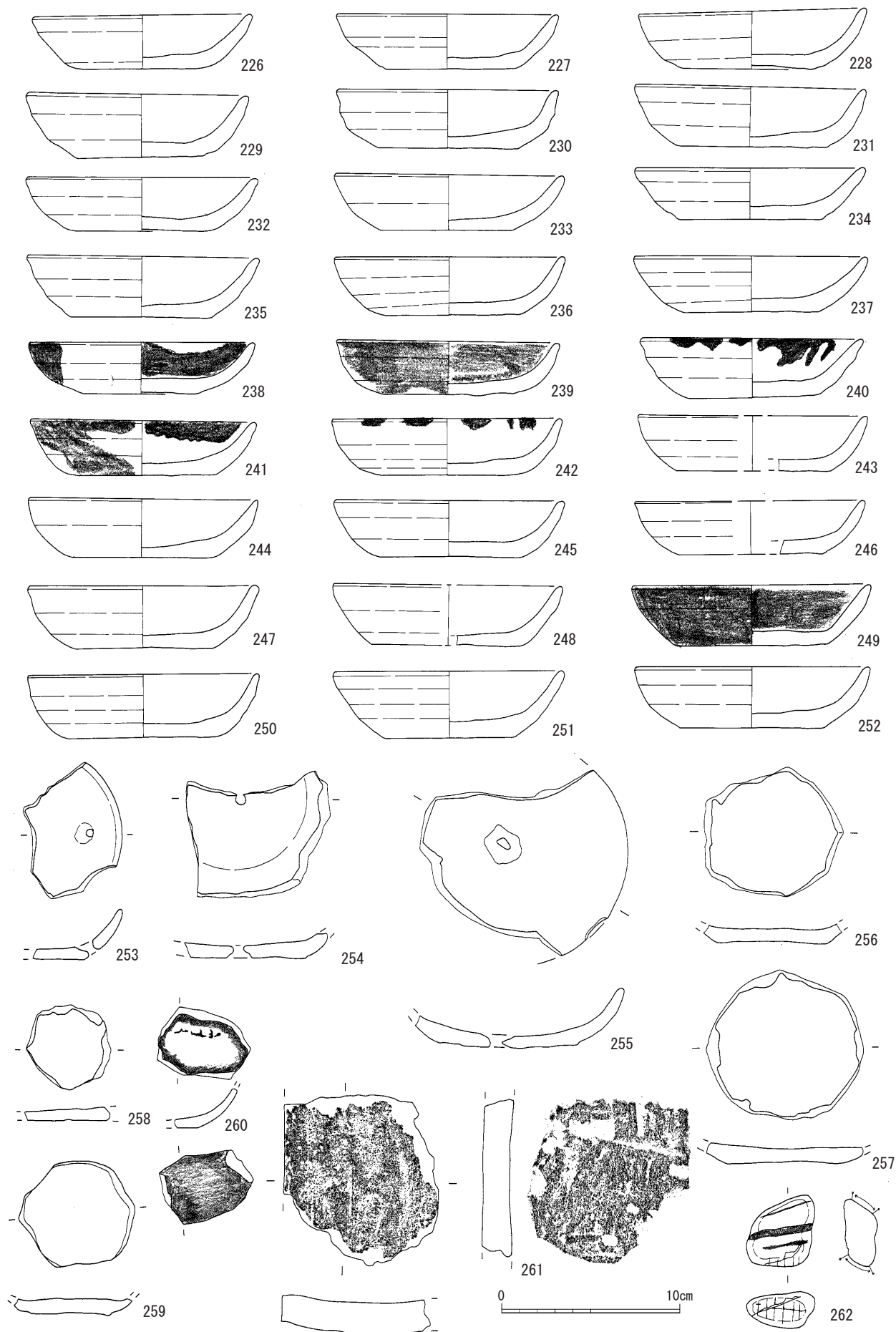


图 20 3面遺構出土遺物 (6)

図15 - 36は瀬戸窯灰釉小壺、37は常滑窯捏ね鉢の口縁部Ⅱ類、38は山茶碗窯捏ね鉢の胴部、39は瓦質火鉢の脚、40はコースター。41～44は糸切りかわらけ小皿で、41は内外面にススが付着し、灯明皿として使用の痕跡あり、44は薄手タイプ、45は糸切り薄手タイプ中皿、46は口縁部内外面にススが付着し、灯明皿として使用の痕跡あり。47～53は大皿で、49は薄手タイプ、52は打ち欠き、53は穿孔かわらけで底部中央に1穴穿孔がけられる、。54～71は木製品である。54は曲げ物、55～57は草履芯で56の一部には藁の痕跡が残る。58～64は木製品の箸、65～69は箱物の部材で、66・67は中央付近に丸釘を打ち込んだ穴が残る。69は上部に釘穴が1穴残る。70、71は建具部材。図17 - 1は舶載品青白磁碗の底部で、内面見込み部に梅らしき文様が型押しされている。2は同じく舶載品の白磁口元皿の口縁～体部、3は常滑窯甕の口縁部で年代は13世紀中頃、4は黒縁瓦器碗の口縁部、5は瓦質手焙りの口縁部、6～11はコースター皿。12～138は糸切りかわらけ小皿で、31、81、121、126は火熱を受け、30、56～58、120は口縁の内外にススが付着し、灯明皿としての使用痕跡が残る。139は内外面に墨書が残るが判読不明。140～142、147は穿孔かわらけで、いずれも底部中央に1穴がけられているが、147は貫通していない。

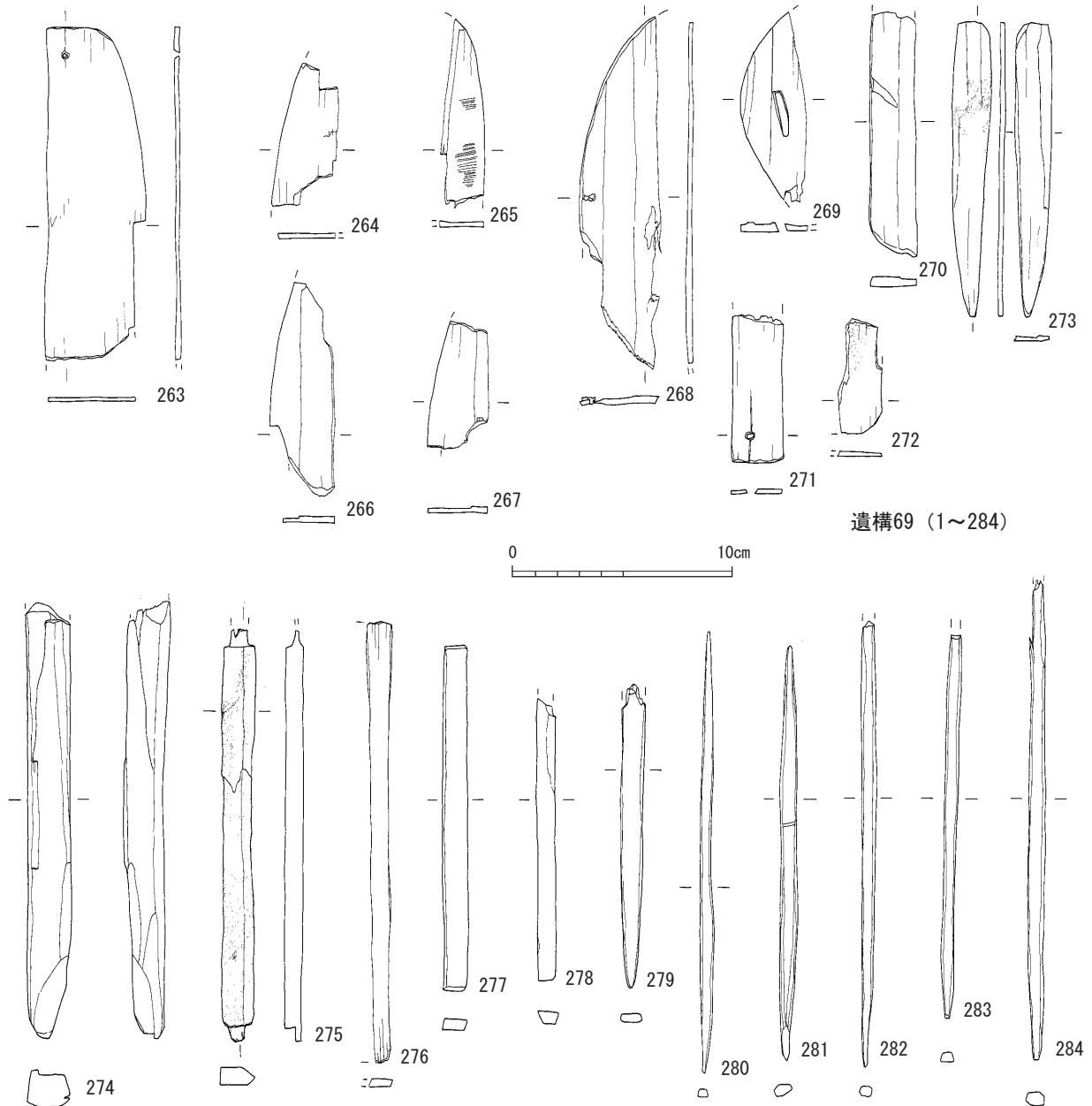


図2 1 3面遺構出土遺物 (7)

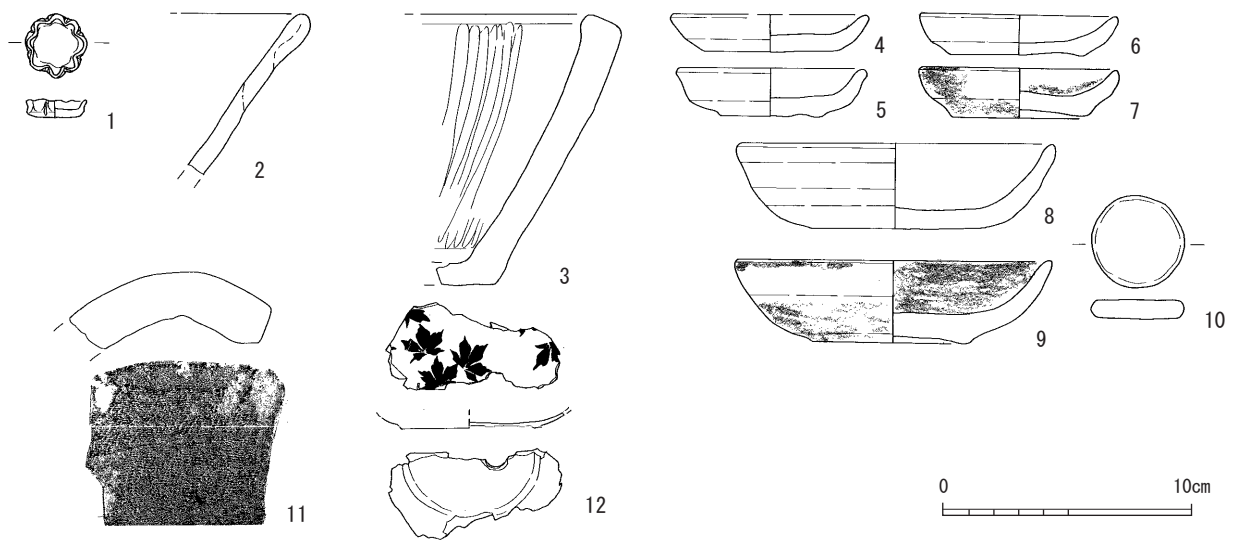


図22 3面出土遺物

144～146は打ち欠き、148、149は薄手タイプ中皿で、148は内外面が火熱を受けている。150～252は大皿で、156、204、210、240～242は口縁の内外にススが付着し、灯明皿としての使用痕跡があり、178、194、200、202、214、219、221、238、239、249は器面の内外面に火熱を受けている。252～255は穿孔かわらけ、256～259は打ち欠き、260は薄手かわらけ大皿で内面に黒色系漆が付着、261は平瓦、262は川原石で、摩滅し紐のようなもので結んだ痕跡あり。263～284は木製品である。263～267は草履芯の一部、268は曲げ物等の底板、269は飲食器の一部、270は用途不明品、271は箱物の部材の一部で下部に木釘の穿孔あり、272は用途不明、273はへら状製品、274は杭、275は建具の部材、276～278は用途不明、279は串状製品、280～284は箸である。

3面出土遺物

3面の遺構を調査中に出土した遺物をここに含めた。12点が図示できた。図22-1は瀬戸窯灰釉輪花型入子、2は山茶碗窯捏ね鉢の口縁部～胴部、3は土器質火鉢の口縁～底部にかけての一部。4～9は糸切りかわらけ皿で、4～7は小皿。7は内外面に火熱を受けている。8、9は大皿で、9は小皿と同様に内外面に火熱を受けている。10は円盤状土製品、11は丸瓦、12は漆器皿で、内外面に黒色系漆が塗られ、内面には赤色系漆で楓文が描かれている。

第4節 4面の遺構と遺物

4面は、I区・II区ともに土丹を私用した版築面は検出されなかったが、キメ細かい砂層あるいは貝片を多く含んだ褐色砂層を面と考えた。海拔はI区が8.02m、II区が7.92m前後である。本期には若宮大路に並行する木組み溝の2回目が伴うと考えている。

遺構は、若宮大路に沿って木組み溝があり、それに合流する細い木組み溝が東西に走って、何らかの区画を造っている。東西溝の北側には礎板を持つ柱穴列があり、ここに塀が作られていたと考えられる。

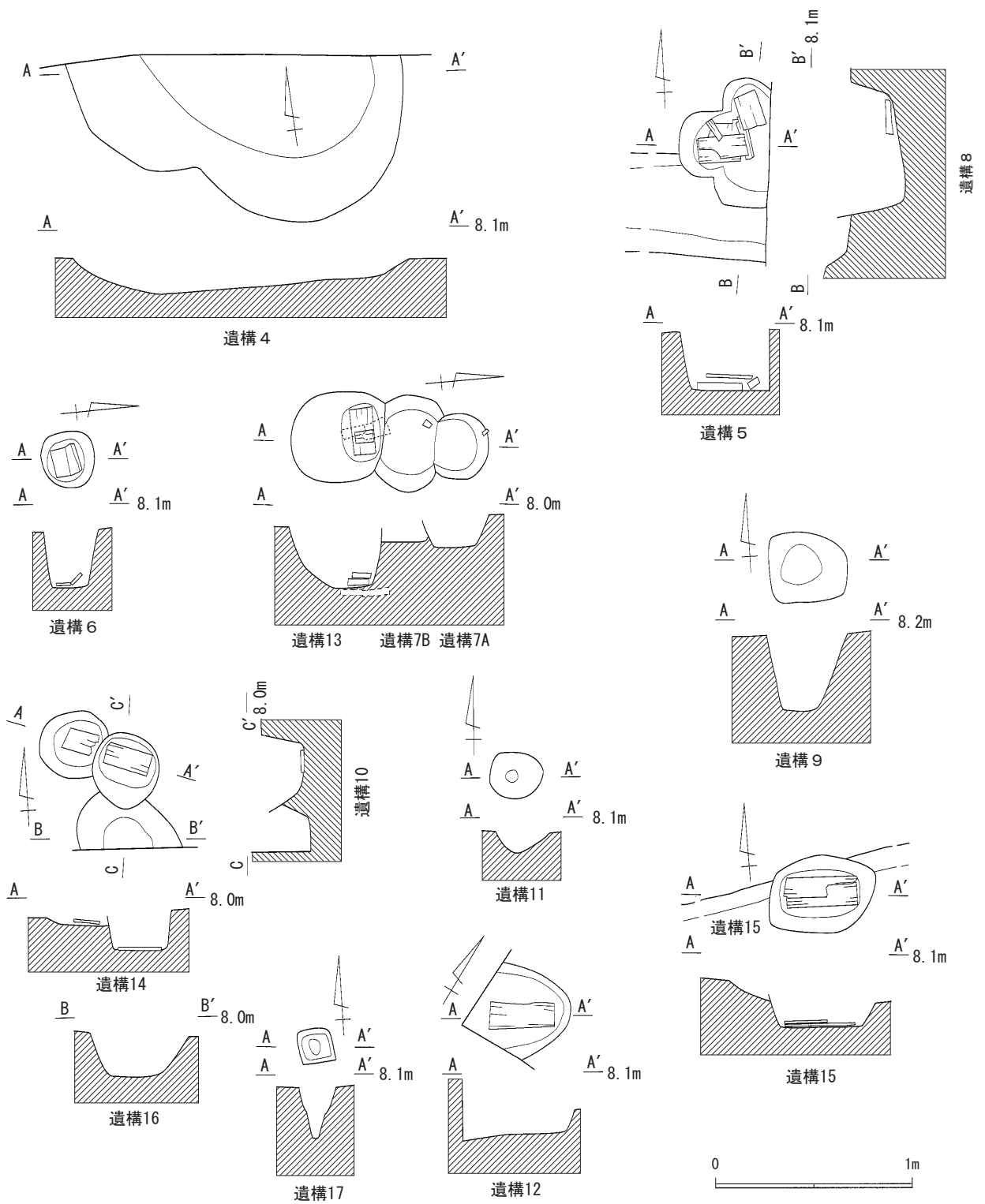


图 2 3 4 面檢出遺構 (1)

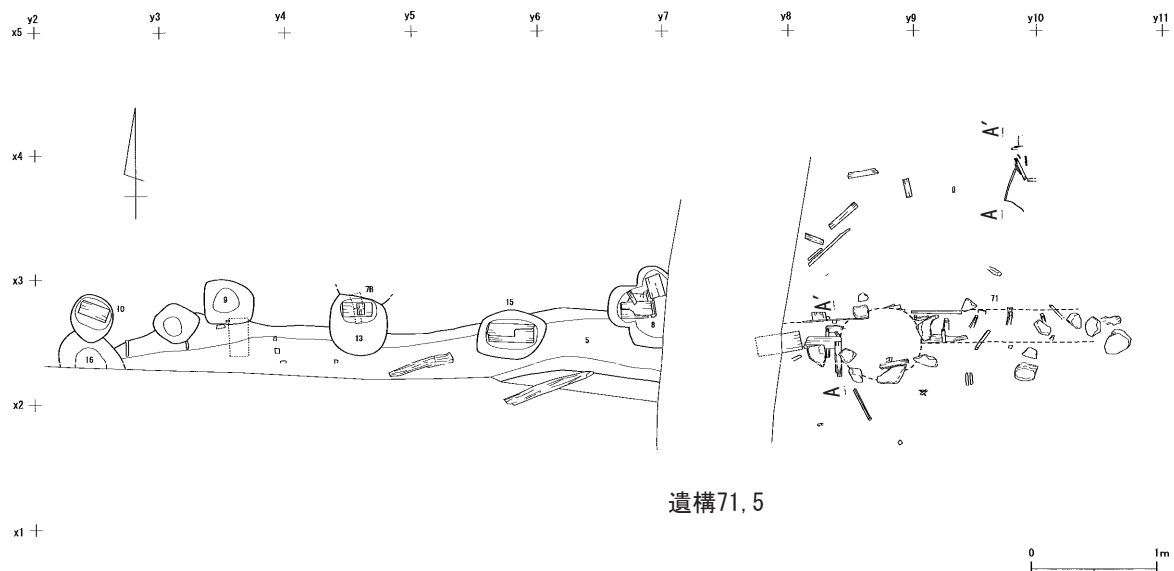


図 2 4 4 面検出遺構 (2)

遺構 4

I 区北東際で検出した土坑である。調査区外北に延びている。平面形は不整形円で、確認規模は東西170cm、南北(85cm)、深さ14cm、底面レベル7.81mを測る。

遺物は多く、20点が図示できた。図25-1～20は木製品である。1, 2は円盤状木製品、3は栓、4は毬杖の球、5～7は部材で6は中央より上部に木釘1本、7は鉄釘が2本残っている。8～10は串状木製品で、9は先端部にこげ痕あり、11は用途不明品、12～15は箸、16、17は板草履芯、18～20は下駄である。18～20は全て一木造りである。20は歯の部分が高より、高い造りのものであり、こげ痕が残る。

遺構71 (遺構72はこれに重なる灰茶褐色貝砂の部分、I 区では遺構5)

I 区からII 区にかけて東西方向に確認された、横板を杭で留めた構造の溝である。遺存状態は極めた悪い。同一の遺構と考えたが、II 区では東側の木材の残りが悪く、I 区(遺構5)ではほとんど木材が確認できなかった。

I 区で見ると、掘り方は上幅50cm前後で、断面形はやや崩れた箱型を呈し、深さ9cmを測る。底面レベルはI 区の東端で7.88m、西端で7.85m。確認部分では西が僅かに低い。

II 区で検出した木組みは、横板の全面に幅3.5cm、厚さ2.5cmほどの角材を打ち込んで固定する方法で造られている。杭は23本が検出され、内22本は上端が焼け焦げている。横板は2枚と、痕跡1箇所が確認されているが、痕跡を除いて元位置を失っている。横板に明瞭な焼け焦げは確認できなかった。杭の位置から溝幅を復元すると、溝幅は35cm～40cmとなる。深さは、杭の残存部が溝の深さと仮定すると、東で7cm、西で6cmを測り、I 区で確認した深さと大きな差はない。木組みに対する掘り方は確認できなかったが、これは基盤層の貝片を含む褐色砂層が溝内に崩れこんで壁を確認できなかったためと考えている。溝の流れる方向は、確かでは無いが、東から西に向かっていた可能性が高い。東西方向は、I 区の掘り方の屈曲を置いて、II 区の杭列他で計測すると、北から西に91度傾いている。

遺物は27点が図示できた。図27-21は瀬戸窯灰釉洗の口縁～胴部で、瀬戸窯編年の前期Iに相当、22は糸切りかわらけ小皿、23は糸切りかわらけ大皿。24～38は木製品である。24は用途不明品で八角形を呈し、中央部分に穿孔あり。25は毬杖の球である。26、27は草履芯、28は折敷。29、30は用途不明品で下部が火熱を受けている。31、34は板状製品、32は角柱状のもの、33は杭、35～38は箸、39～43は糸切りかわらけ小皿、45～47は大皿である。

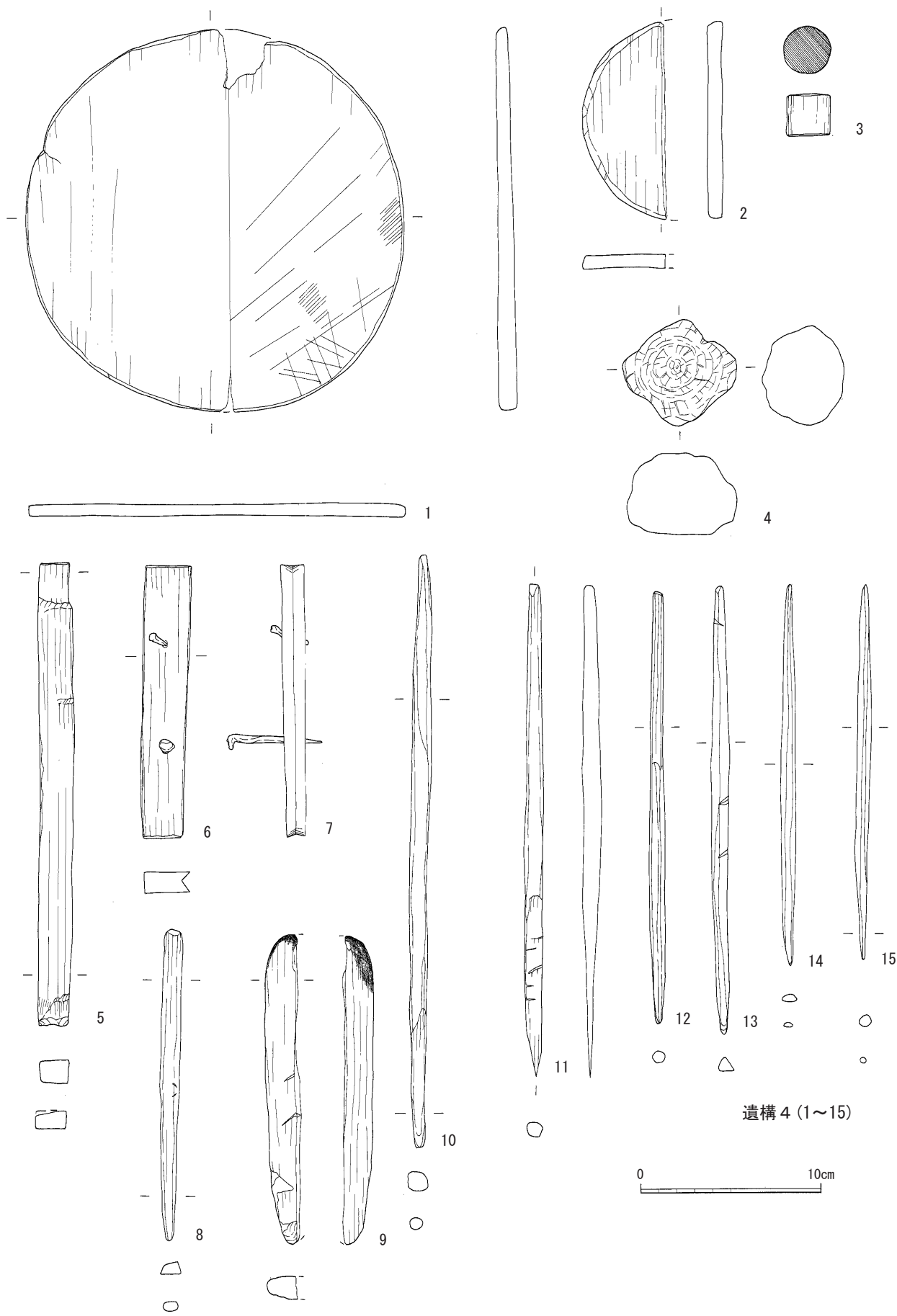
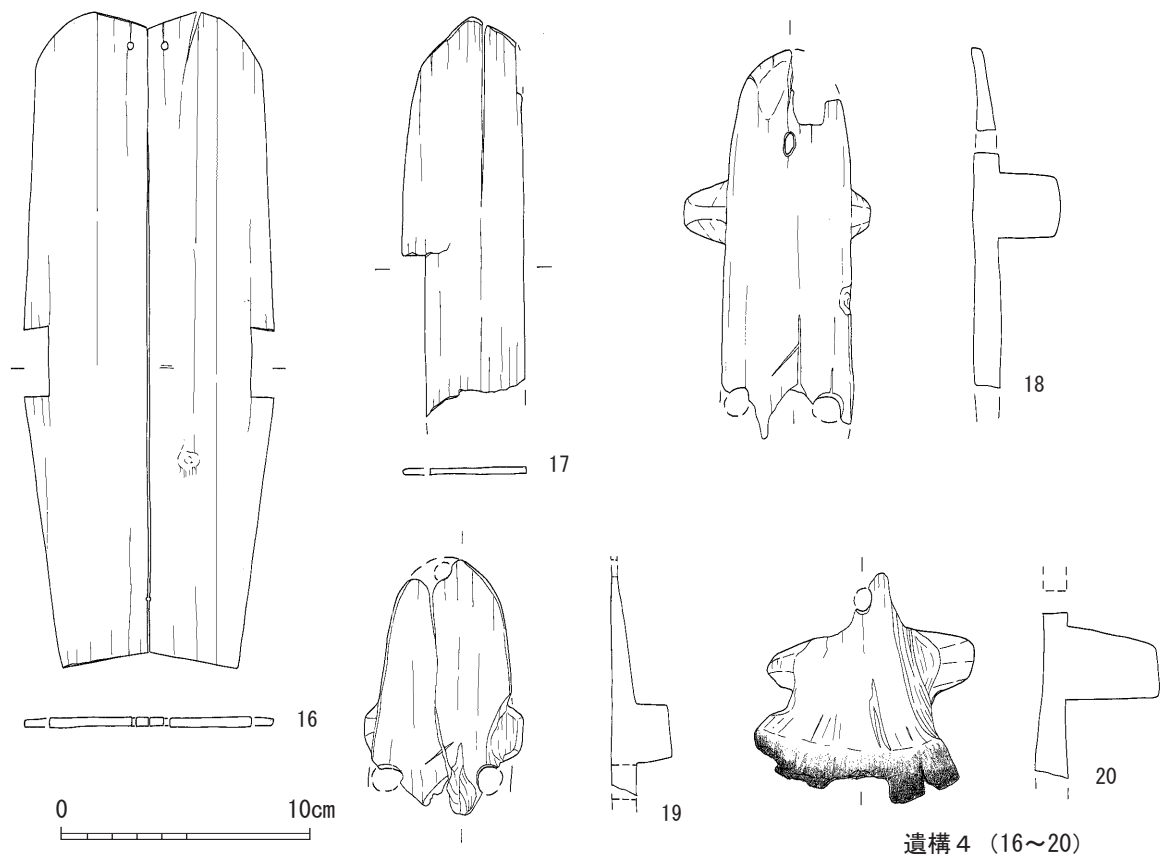


图 25 4面遺構出土遺物 (1)



遺構4 (16~20)

図26 4面遺構出土遺物(2)

遺構72

遺構71と切り合って、Ⅱ区の西側で検出された。東西128cm、南北114cmの範囲で植物の腐食した茶褐色の粘土層が確認できたため遺構番号を附したが、平面形・深さなどが不明瞭である。粘土層はなだらかに最大15cmの厚さで堆積していた。遺構71の一部の可能性もあるが、別に示した。

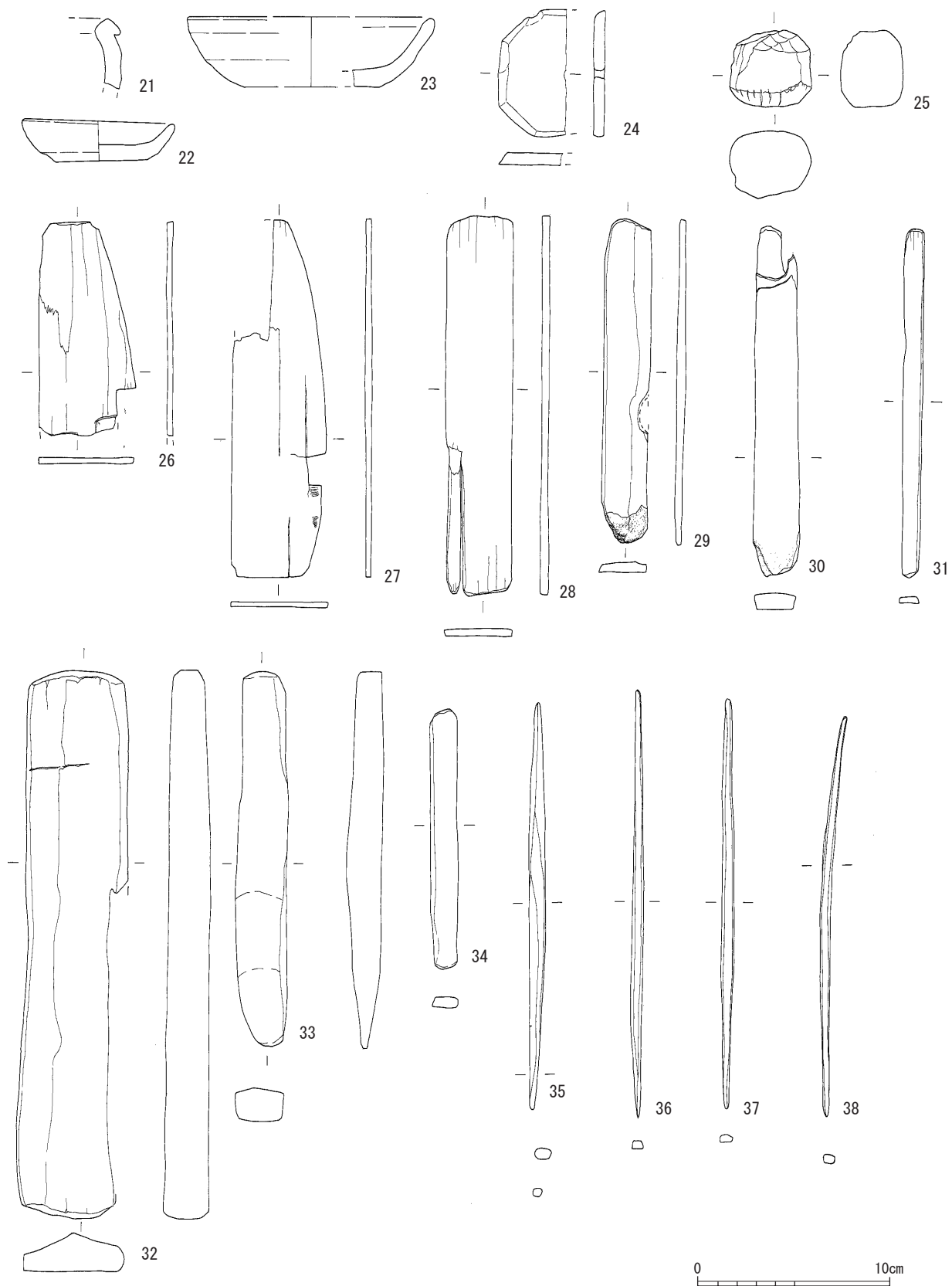
遺物は比較的多く出土している。図28-48~53は糸切りかわらけ皿で、48~50は小皿で48は器高の深い、49,50は器高の浅い薄手タイプ、51~53は薄手タイプ中皿、54は木製品板草履芯の一部、55はへら状工具、56は箱物部材の一部で、中央付近に木釘痕と思われる穿孔あり、57~74は箸である。

礎板列

遺構71の北側で、ほぼ同方向に確認された礎板を持つ4穴の礎板・柱穴である。遺構71の内部に入り込む礎板から西に、遺構8、遺構13、遺構10が、北から西に88度傾いた方向で並んでいる。間隔は、礎板から210cm、215cm、210cmを測る。柱穴は径45cm前後の円形で、底面に複数枚の礎板を直交方向に重ねている。礎板上面レベルは、東から7.78m、8.03m、7.66m、7.73m。東端の礎板から若宮大路に沿った木組み溝までは250cmの距離があるため、さらに礎板が1箇所あった可能性が高い。

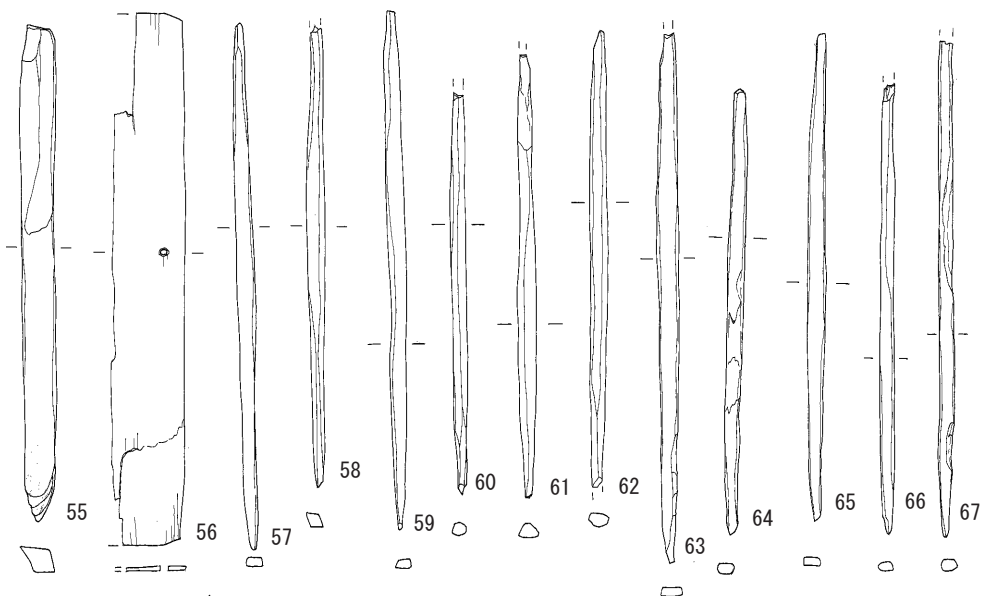
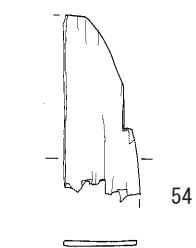
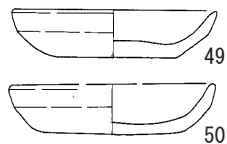
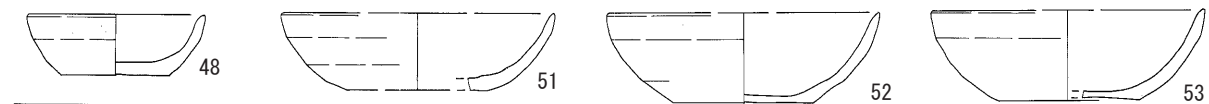
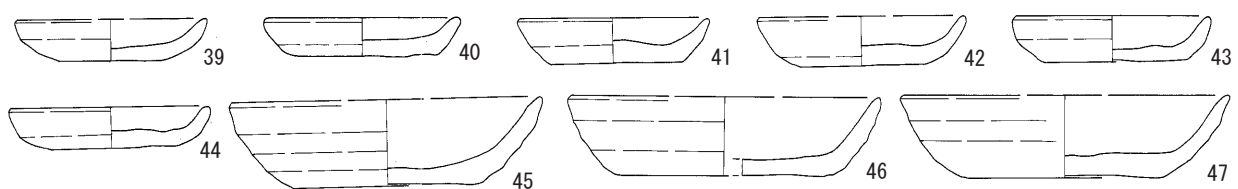
遺構71より新しい時期の構築である。溝の後に柱穴列(塀)が構築されていることから、この辺りが屋敷内の何らかの区画ラインであったと考えられる。これ以外にも、柱穴の並びを復元することも可能であるが、不明瞭な点があるため可能性を指摘するにとどめる。

図示できる出土遺物はない。



遺構(5+15)

图 2 7 4面遺構出土遺物(3)



遺構70・72

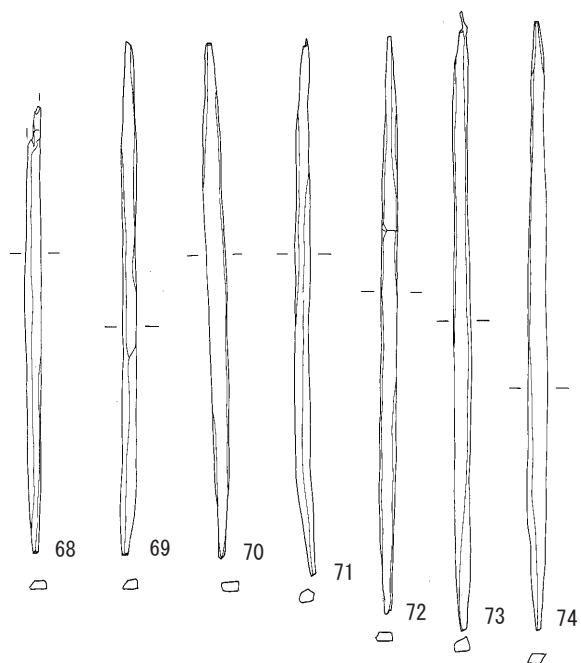


图28 4面遺構出土遺物(4)

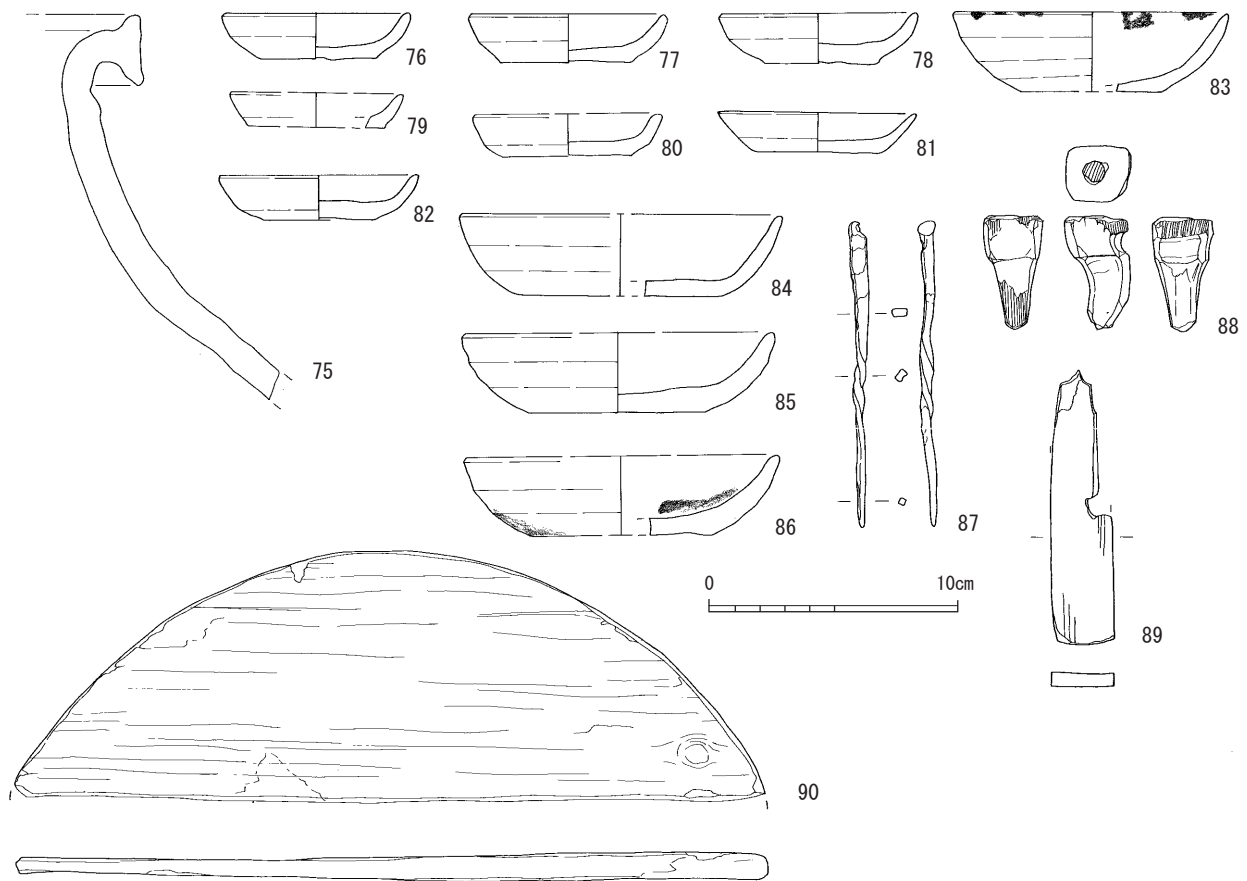


図29 4面出土遺物

4面出土遺物

4面の遺構を調査中に出土した遺物をここに含めた。図29-75は常滑窯甕の口縁～肩部で、年代は13世紀後半代、76～86は糸切りかわらけ皿で、76～82は小皿、83は薄手タイプ中皿、口縁部分にススが付着し灯明皿としての使用痕あり、84～86は大皿。87は鉄製品の火箸、88は木製品で調度品の脚、89は用途不明木製品、90は容器の底板である。

第5節 5面の遺構と遺物（鎌倉初期）

5面には中世基盤層である暗褐色粘質土上で検出した遺構を含めた。検出レベルはI区、II区共に7.72m前後である。検出した遺構は、II区では柱穴がほとんどであるが、I区では土坑と方形堅穴建物らしき遺構が確認されている。並びの確認できない柱穴は一覧表に示した。本期の初めには若宮大路に沿った溝の1回目があり、本期の末期あるいは4期初めに2回目の溝が造られたと考えている。

遺構18

I区北東部分で検出した北西から南東にかけて長い楕円形の土坑である。約半分が調査区外北に延びている。確認規模は長軸(120cm)、短軸105cm、深さ42cm、底面レベル7.37mを測る。

1は白かわらけ皿小片。図35-1～4は木製品である。1は建具の部材、2は用途不明製品、3は串状製品、4は呪符である。

遺構25

I区北西隅で検出した土坑であるが、大半が調査区外にあるため形状や規模は確認できなかった。検出した掘り込みラインから円形あるいは胴の張った方形で、大型の遺構と思われる。深さ11cm、底面レベル7.61mを測る。

遺物は1点が図示できた。図35-5は手づくねかわらけ大皿。

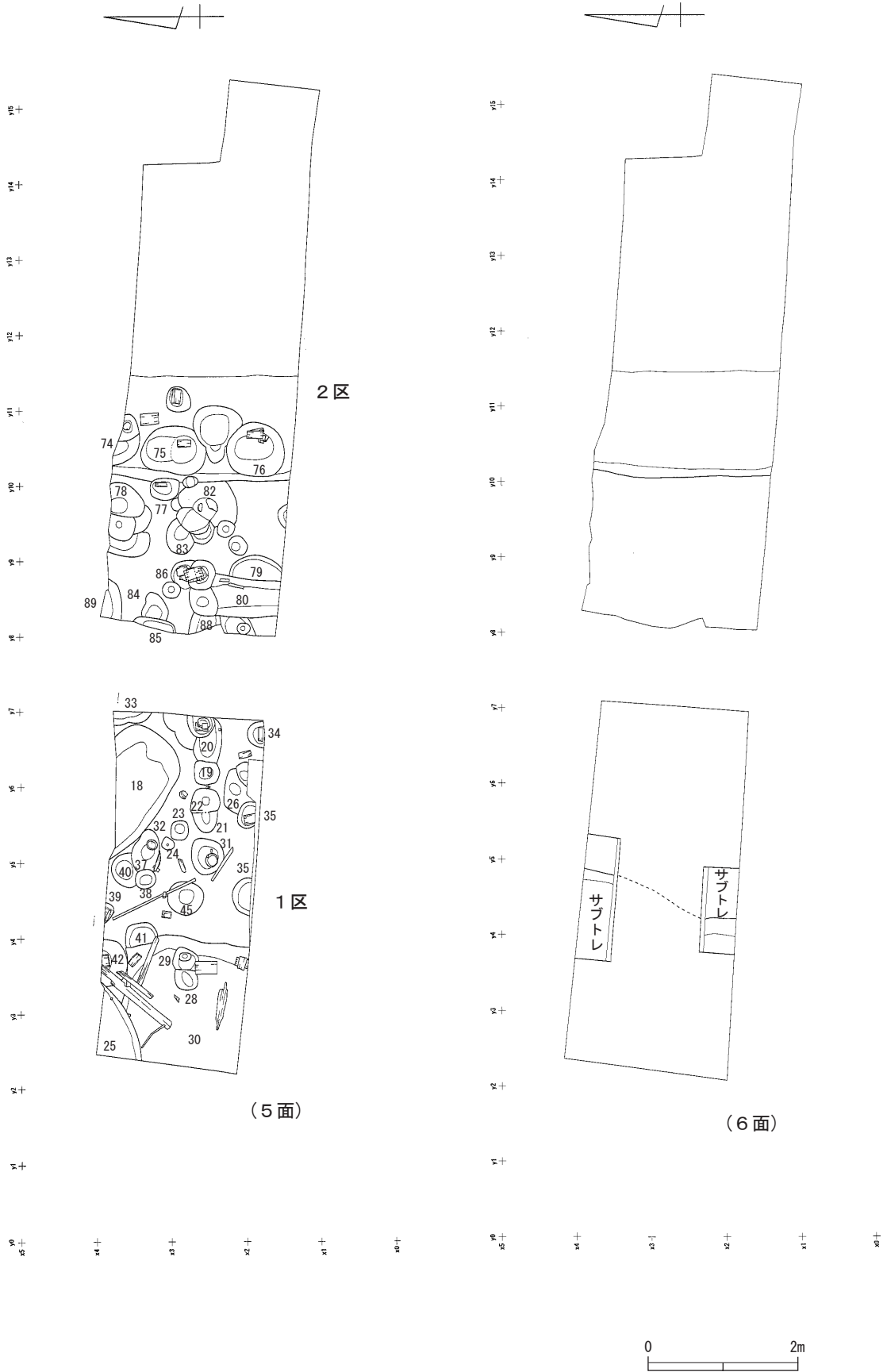


図30 5・6面遺構全体図

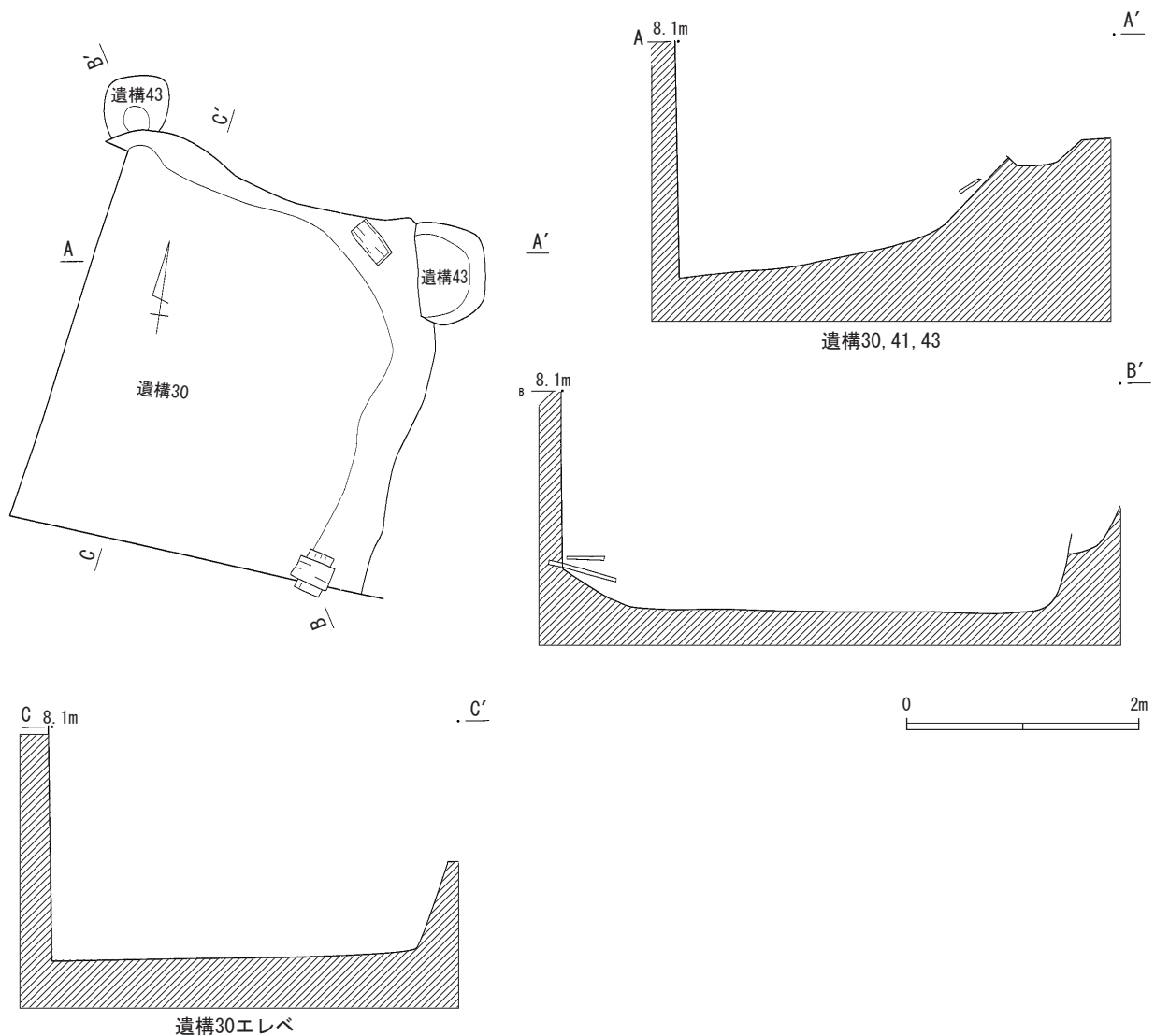


図31 5面検出遺構(1)

遺構30

I区南西隅で検出した方形の落ち込みである。方形土坑の可能性もあるが、掘り込み壁がほぼ垂直であることなどから、方形堅穴建物と考えた。多くは調査区外に在るが、北東の角が確認されている。確認規模は東西(153cm)、南北(172cm)、深さ53cm、底面レベル7.13mで、底面は平坦である。検出部分では、底面に柱穴、杭、木材痕跡は確認できなかった。

遺物は少なく、4点が図示できた。図35-6は舶載品で、龍泉窯青磁劃花文碗の高台、7、8は手づくねかわらけ小皿、9は糸切りかわらけ大皿である。

遺構32

I区の遺構18の南西で検出した2つの柱穴である。平面形では1つの柱穴であったが掘った結果2つになったため、遺物は混じってしまった。最大規模は南北38cm、東西(53cm)、深さ9cmを測る。

遺物は3点が図示できた。図35-10は糸切りかわらけ小皿、11は糸切りかわらけ薄手タイプ中皿、12は薄手タイプ大皿である。

柱穴列

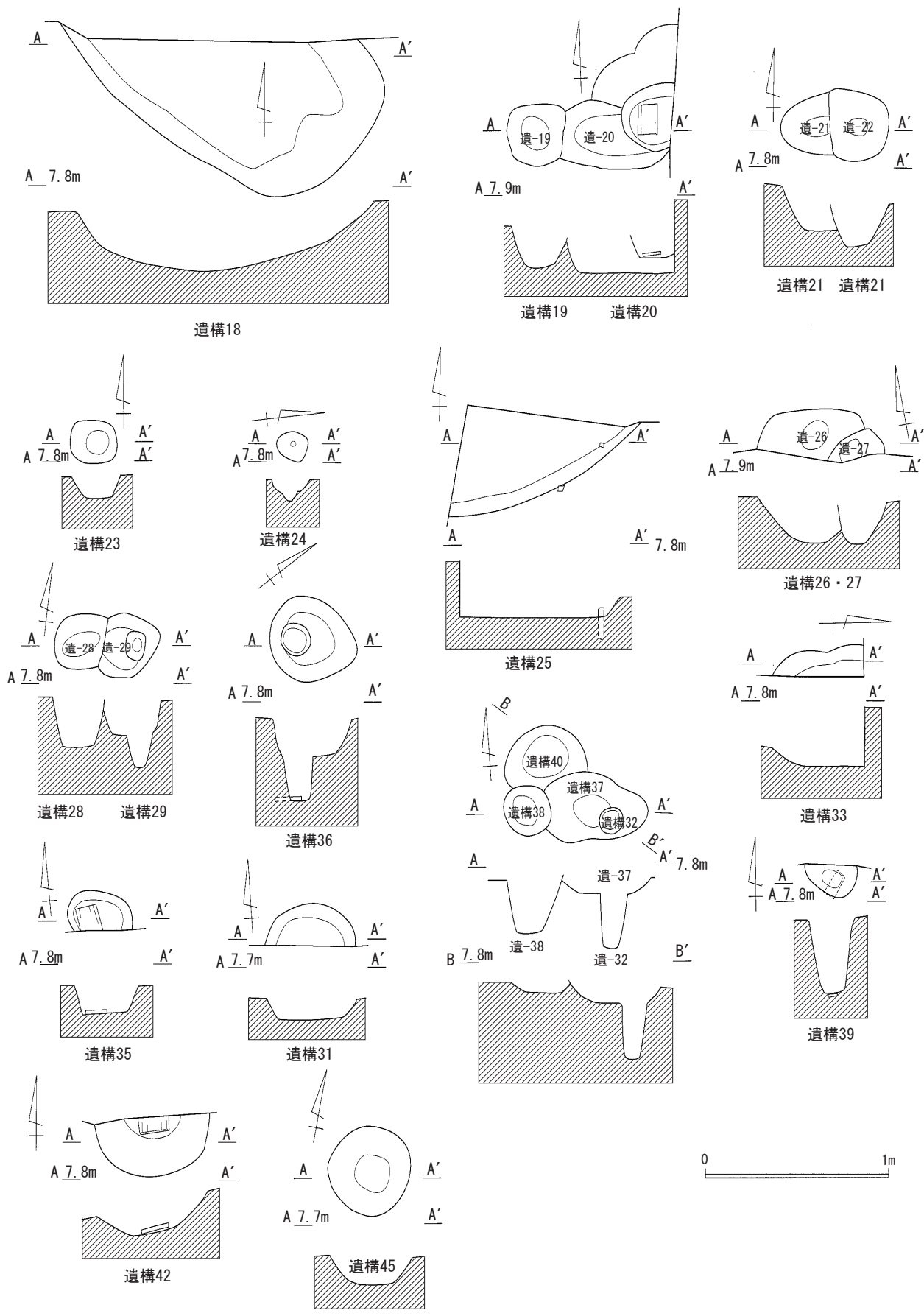


图 3 2 5 面検出遺構 (2)

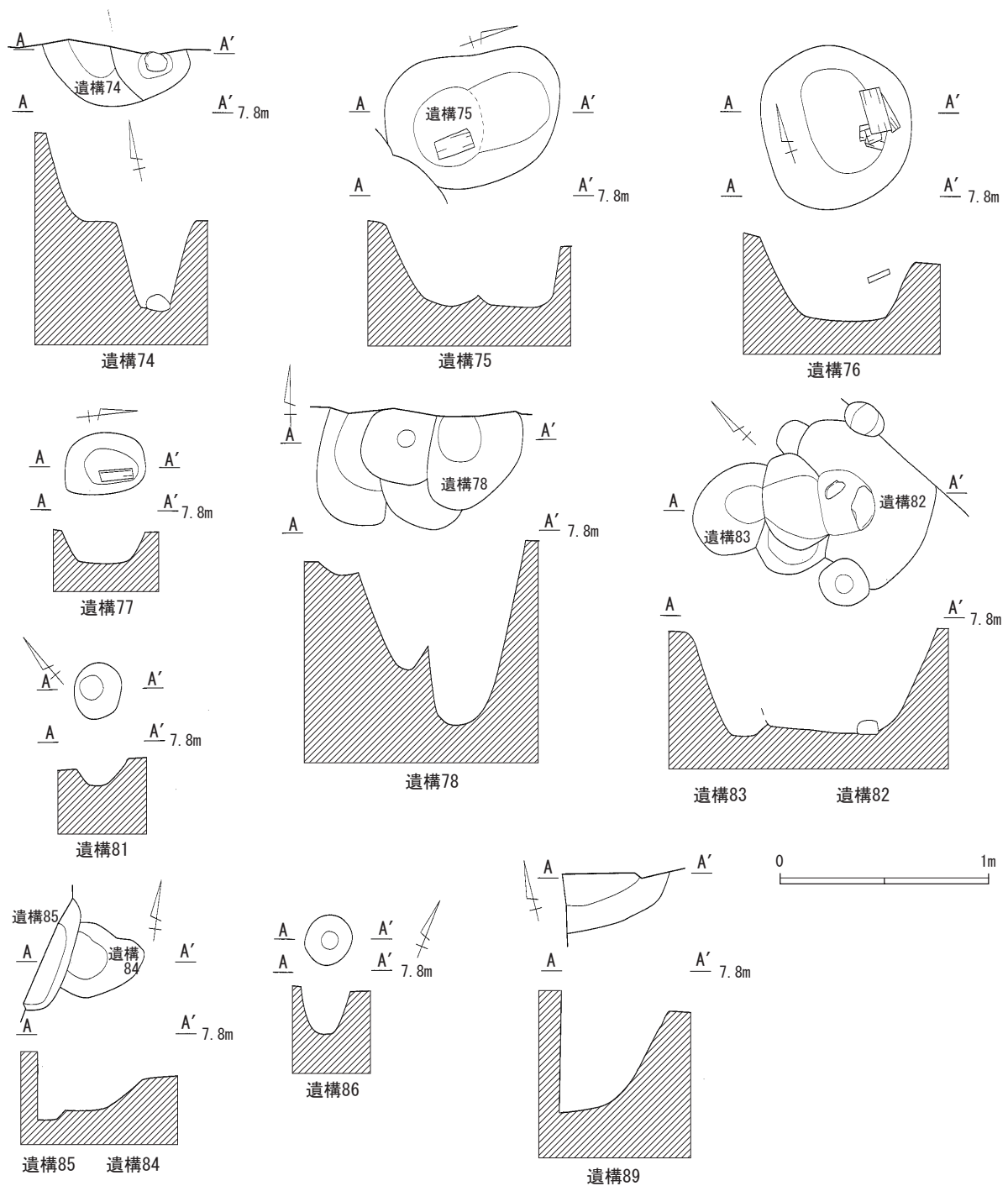


図33 5面検出遺構(3)

II区の若宮大路に沿った木組み溝の西側で検出した遺構75～遺構76を木組み溝に伴う塀などの柱と考えた。3穴の柱穴は、木組み溝の引き材を設置した落ち込み内にある。遺構74は調査区外北にほとんどがあるため形状や深さは不明。遺構75は南北に2穴の柱穴が掘られたような繭形を呈し、南側に礎板がある。確認規模は南北85cm、東西65cm、深さ24cm、底面レベル7.07m、礎板レベル7.09m。遺構76は平面円形で、確認規模は南北77cm、東西72cm、深さ25cm、底面レベル7.07m、礎板上面レベル7.30m。2箇所礎板は中心で約90cm離れている。

遺物は4点が図示できた。図35-13～15は木製品で、13は用途不明品、14は箸、15は用途不明品である。

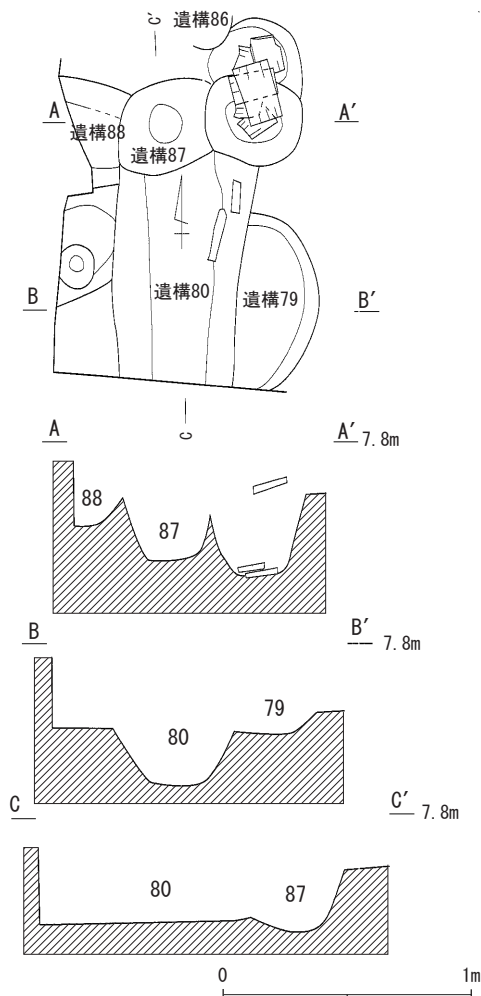


図3 4 5面検出遺構

5面の遺構を調査中に出土した遺物をここに含めた。図36-22は舶載品で同案窯青磁皿。23~26は糸切りかわらけ小皿で、23は内面に火熱を受けている。27、28は白かわらけ皿。29はかわらけ皿の打ち欠き、30は石製品の砥石で産地は鳴滝、石材は細粒泥岩。31、32は漆器皿で、内外面に黒色系漆を塗り、31は亀甲文が、32は萩文が赤色系漆で描かれている。33は鉄製品の釘。34は銅銭で、銭名は皇宗通寶（北宋・1038）。35~51は木製品で、35~41は草履芯、42は用途不明の板状製品、43は形代とも思えるが判然としない、44は容器の未成品と思われる、45~47は用途不明品、48・49は円盤状に加工された薄い板で用途は不明。51は建具の部材、52は形代か、53、54は棒状製品、55、56は用途不明品、57~64は箸、65~67は杭、68は高下駄の歯の部分である。

第6節 下層の調査

I区の5面の調査終了後に、4面遺構71（I区では遺構5）の底面で確認された黄褐色砂質粘土（以下、第6層という。）が西に向かって落ち込んでいる変化を確認するために、I区南側に沿ってサブトレンチを設定して掘り下げた。

その結果、中世基盤層の下に堆積する第6層が西に向かって落ち込み、そこに青灰褐色砂質粘土層（以下、第5層という。）が堆積している状況が確認できた。この結果を受けて、I区北壁に沿ったサブトレンチも設定した。このトレンチでも第6層が西に向かって落ち込み、そこに第5層が堆積する状況が確認できた。両トレンチで確認した落ち込みを結ぶと直線ではなく、曲線が推定で

遺構78

柱穴列の西、北壁際で検出した。柱穴と思われるが調査区外に延びている。確認規模は南北(45cm)、東西43cm、深さ80cm、底面レベル7.0mを測る。

遺物は木製品3点が図示できた。16~18は木製品である。図35-16、17は棒状製品、18は用途不明品である。

遺構79

II区の南西部で、遺構80に西半分を壊されて検出した円形の浅い土坑である。確認規模は南北(70cm)、東西(34cm)、深さ8cm、底面レベル7.66mを測る。

遺物は少なく1点が図示できた。図35-19は糸切りかわらけ大皿である。

遺構85

II区の西壁際で検出した柱穴状の落ち込みである。ほとんどが調査区外にあるため平面形などの形状・規模は不明。覆土は20cmまで掘り下げた。以下は不明。

調査部分が少ないため遺物は少なかったが、2点が図示できた。図35-20は糸切りかわらけ大皿、21はへら状木製品である。

5面出土遺物

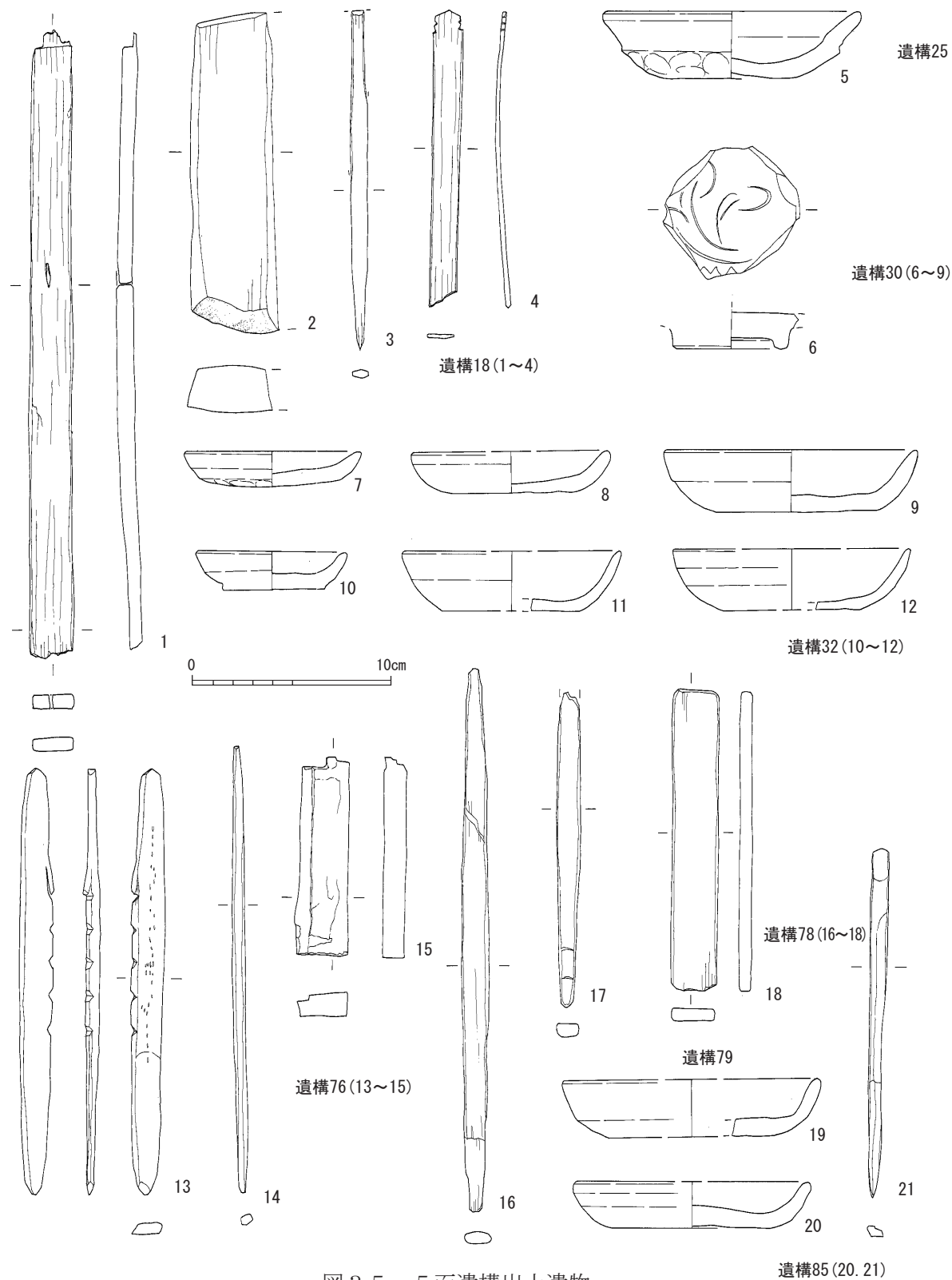


図35 5面遺構出土遺物

きる。調査区内では南北180cmが確認され、さらに南北の調査区外に延びている。西側は北壁で調査区西壁まで250cm、南壁で調査区西壁まで210cmを測るが、その間で対岸と思われる立ち上がりは確認できなかった。ちなみに若宮大路西側歩道の西際からの距離は、北で12.40m、南で13mで、若宮大路とは平行しない。

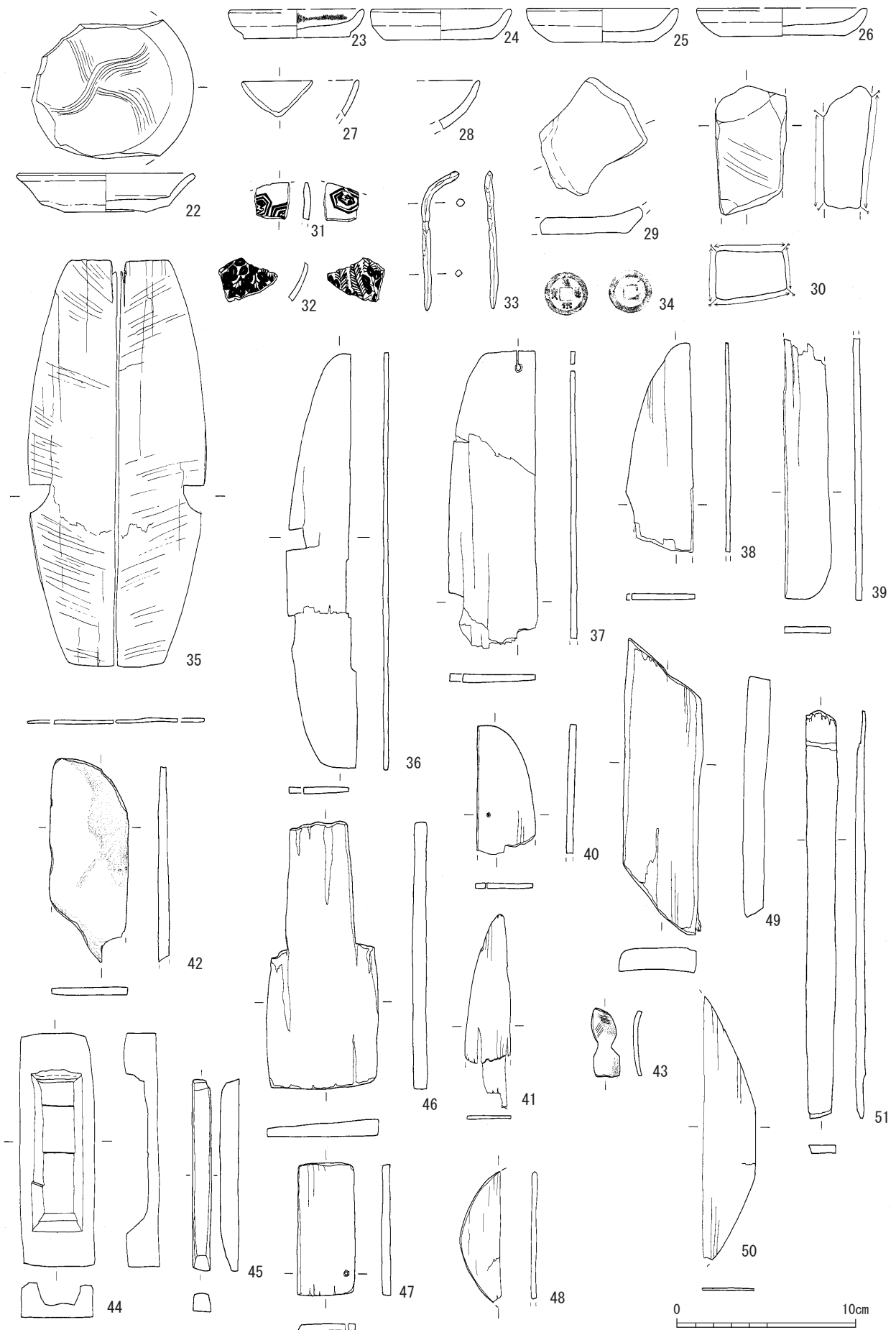


图 3 6 5 面出土遺物 (1)

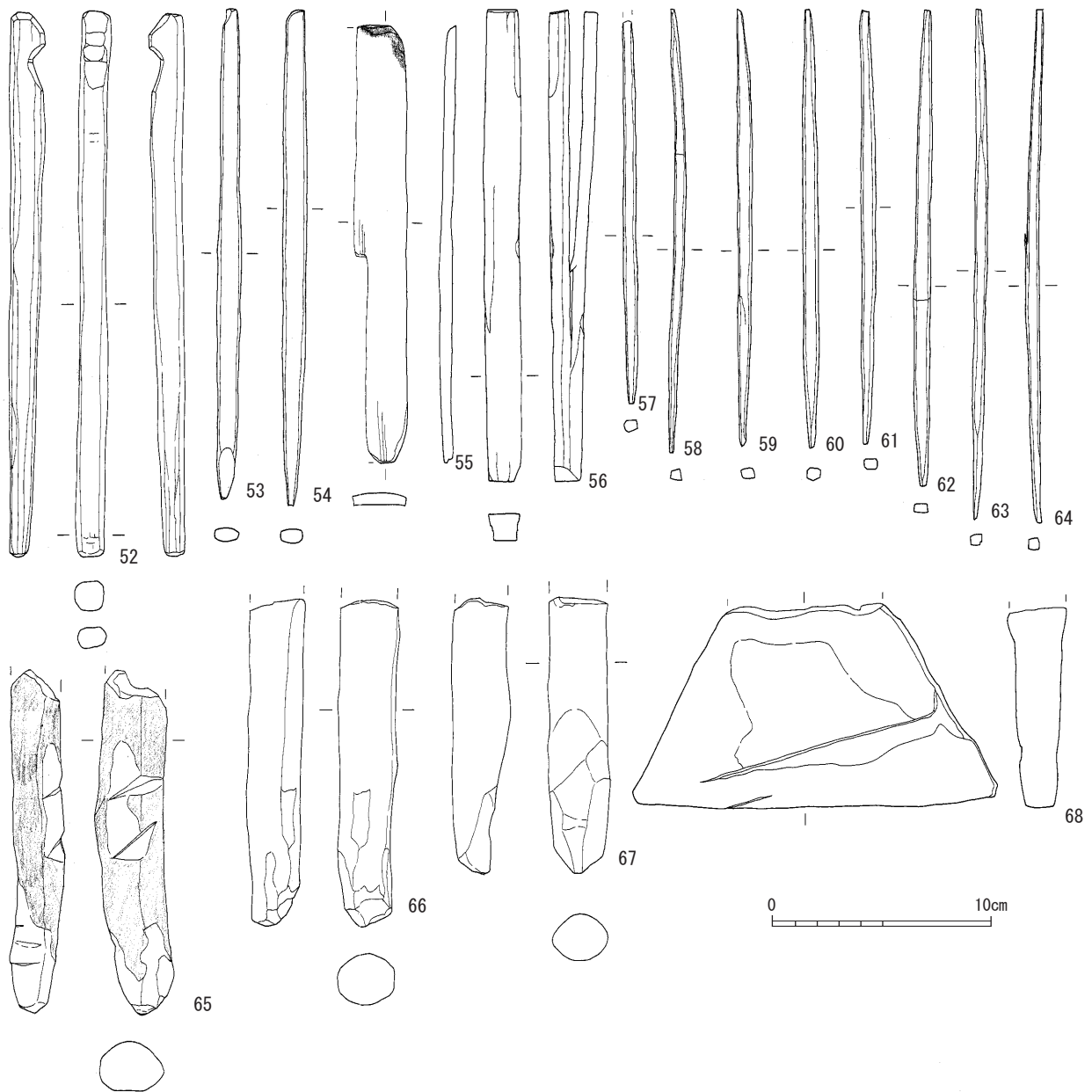


図37 5面出土遺物(2)

落ち込みは約25度の角度で落ち込んでおり、人工的な掘り込みでは無く自然傾斜の可能性を考えた。しかし、湧水が多く調査期間の問題もあり、確認面から50cm、地表から最大200cmで掘り下げを断念した。落ち込みの覆土は第5層に第6層のブロックが混じる粘土層で、遺物は全く出土していないが、僅かに植物繊維が混じっている。

出土遺物が無く年代は明らかにできないが、中世基盤層の4層に覆われているため、中世以前と考えられる。周辺の調査では、5層上面で確認された遺構覆土から、中世以前の土器片が出土している。掘り込み壁の角度や平面的な曲線あるいは凹凸などから、竪穴住居址は考え難いので、河川を考えたいところである。

本稿を執筆後、平成22年9月から11月にかけて大倉幕府跡で発掘調査を実施する機会があった(註1)。その調査では、中世基盤層の下に第5層に極めて似ている土層の堆積が確認されている。土層中からは7世紀後半頃の土器が出土している。第6層はこの調査地点の南100mほどの地点(註

2) で確認されている。この地点の第 6 層に極似する土層が落ち込みの覆土である事実は確認できなかったが、仮に本地点と同じ土層であるとすれば、中世基盤層の堆積以前の落ち込みで、大倉地域から若宮大路西側まで続く落ち込みである可能性も、僅かながらある。

この落ち込みを、旧市街東の山裾に沿って流れる滑川の旧河道と考えたいところである。とすれば、滑川は 7 世紀後半以降に鎌倉旧市内の大半に水田を造成したときに、人為的に東側の山裾に移動させられたと考えている自説を裏付けることができる。しかし、これを実証するにはさらに多くの時間と調査成果が必要である。今後の、中世基盤層以下の調査の進展に期待したい。

註 1 大倉幕府跡（雪ノ下三丁目 648 番 8）の調査。有限会社鎌倉遺跡調査会が実施。未報告。
堆積土層は調査中に実見。

註 2 『大倉幕府周辺遺跡発掘調査報告書-雪ノ下四丁目 581 番 5 地点-』2007 年 3 月 有限会社
鎌倉遺跡調査会

第3章 まとめ

第1節 検出遺構の年代

近代の遺構をのぞき、最も新しい遺構は1面の若宮大路に沿った溝状の落ち込みである。この覆土は木組み溝を覆っている。出土遺物は少ないが、底部近くから15世紀後半から16世紀にかけての年代が考えられるかわらけ小皿がほぼ完形で1点出土している。この遺物を根拠にすると、1面は16世紀の年代となる。従って、若宮大路に並行する木組み溝は16世紀始め頃までには埋没していたことになる。その後、灰褐色粘土層が堆積する状況になり、これが近代まで続いた。耕作土直下の包含層からは、比較的薄手作りのかわらけ皿が出土している。

最下層の5面（中世基盤層上）では、多くの遺構から京都系手づくねかわらけが出土している。鎌倉の土器編年に即せば、5面の年代は12世紀末から13世紀初頭である。6面で確認した5層下の落ち込みは、明らかに中世基盤層以前の遺構であるが、年代は明らかにできない。おそらく、鶴岡八幡宮周辺で遺構・遺物が確認されている弥生時代から平安時代の間には帰属するのだろう。

2面から4面は、細かな生活面を多く含んでおり、夫々を明確には出来ない。大まかには4面が13世紀中頃前後、3面が13世紀後半頃、2面が14世紀代を考えたい。

第2節 木組み溝の性格

本地点周辺で確認されている若宮大路に沿った木組み溝は、若宮大路の東側でも同様な構造の木組み溝が在ること等から、中世段階の「若宮大路の側溝」として認識されている。しかし、個人的には、いくつかの疑問があって、これを解決しないと若宮大路の側溝として認識できないと考えている。

採るに足らない疑問かもしれないが、1点目は若宮大路が中世前半と変わらずに存在するのに、側溝のみが遅くとも16世紀始め頃までに埋まってしまう点。2点目は、東西の木組み溝の内側（壇葛側）に、現在も暗渠になっている若宮大路の側溝がある点。この暗渠溝は、現在の東西歩道の下にあって、鶴岡八幡宮の外周に在る溝の流れを受けている。3点目は、本遺跡範囲（北条時房・顕時邸跡）の南で、木組み溝の延長部分が不鮮明になることである。

これらの点を、自分なりに考察した結果、若宮大路に平行する大路東西の木組み溝はそこにある屋敷の外周を囲む溝であり、若宮大路の側溝とは異なる可能性が高いとの結論に至っている。若宮大路の側溝は別に構築されたか、屋敷のある部分については大路の排水も屋敷外周の溝に流したのであろう。検証の過程をここで詳細に示すことは、紙数の都合もあり不可能である。これについては別に発表を考えている。

本地点で見つかった木組み溝が若宮大路の側溝で無いとすれば、15世紀のある時期に完全に埋まってしまうことに不自然な感じはない。

第3章 まとめ

第1節 検出遺構の年代

近代の遺構をのぞき、最も新しい遺構は1面の若宮大路に沿った溝状の落ち込みである。この覆土は木組み溝を覆っている。出土遺物は少ないが、底部近くから15世紀後半から16世紀にかけての年代が考えられるかわらけ小皿がほぼ完形で1点出土している。この遺物を根拠にすると、1面は16世紀の年代となる。従って、若宮大路に並行する木組み溝は16世紀始め頃までには埋没していたことになる。その後、灰褐色粘土層が堆積する状況になり、これが近代まで続いた。耕作土直下の包含層からは、比較的薄手作りのかわらけ皿が出土している。

最下層の5面（中世基盤層上）では、多くの遺構から京都系手づくねかわらけが出土している。鎌倉の土器編年に即せば、5面の年代は12世紀末から13世紀初頭である。6面で確認した5層下の落ち込みは、明らかに中世基盤層以前の遺構であるが、年代は明らかにできない。おそらく、鶴岡八幡宮周辺で遺構・遺物が確認されている弥生時代から平安時代の間には帰属するのだろう。

2面から4面は、細かな生活面を多く含んでおり、夫々を明確には出来ない。大まかには4面が13世紀中頃前後、3面が13世紀後半頃、2面が14世紀代を考えたい。

第2節 木組み溝の性格

本地点周辺で確認されている若宮大路に沿った木組み溝は、若宮大路の東側でも同様な構造の木組み溝が在ること等から、中世段階の「若宮大路の側溝」として認識されている。しかし、個人的には、いくつかの疑問があって、これを解決しないと若宮大路の側溝として認識できないと考えている。

採るに足らない疑問かもしれないが、1点目は若宮大路が中世前半と変わらずに存在するのに、側溝のみが遅くとも16世紀始め頃までに埋まってしまう点。2点目は、東西の木組み溝の内側（壇葛側）に、現在も暗渠になっている若宮大路の側溝がある点。この暗渠溝は、現在の東西歩道の下にあって、鶴岡八幡宮の外周に在る溝の流れを受けている。3点目は、本遺跡範囲（北条時房・顕時邸跡）の南で、木組み溝の延長部分が不鮮明になることである。

これらの点を、自分なりに考察した結果、若宮大路に平行する大路東西の木組み溝はそこにある屋敷の外周を囲む溝であり、若宮大路の側溝とは異なる可能性が高いとの結論に至っている。若宮大路の側溝は別に構築されたか、屋敷のある部分については大路の排水も屋敷外周の溝に流したのであろう。検証の過程をここで詳細に示すことは、紙数の都合もあり不可能である。これについては別に発表を考えている。

本地点で見つかった木組み溝が若宮大路の側溝で無いとすれば、15世紀のある時期に完全に埋まってしまうことに不自然な感じはない。

第3章 まとめ

第1節 検出遺構の年代

近代の遺構をのぞき、最も新しい遺構は1面の若宮大路に沿った溝状の落ち込みである。この覆土は木組み溝を覆っている。出土遺物は少ないが、底部近くから15世紀後半から16世紀にかけての年代が考えられるかわらけ小皿がほぼ完形で1点出土している。この遺物を根拠にすると、1面は16世紀の年代となる。従って、若宮大路に並行する木組み溝は16世紀始め頃までには埋没していたことになる。その後、灰褐色粘土層が堆積する状況になり、これが近代まで続いた。耕作土直下の包含層からは、比較的薄手作りのかわらけ皿が出土している。

最下層の5面（中世基盤層上）では、多くの遺構から京都系手づくねかわらけが出土している。鎌倉の土器編年に即せば、5面の年代は12世紀末から13世紀初頭である。6面で確認した5層下の落ち込みは、明らかに中世基盤層以前の遺構であるが、年代は明らかにできない。おそらく、鶴岡八幡宮周辺で遺構・遺物が確認されている弥生時代から平安時代の間には帰属するのだろう。

2面から4面は、細かな生活面を多く含んでおり、夫々を明確には出来ない。大まかには4面が13世紀中頃前後、3面が13世紀後半頃、2面が14世紀代を考えたい。

第2節 木組み溝の性格

本地点周辺で確認されている若宮大路に沿った木組み溝は、若宮大路の東側でも同様な構造の木組み溝が在ること等から、中世段階の「若宮大路の側溝」として認識されている。しかし、個人的には、いくつかの疑問があって、これを解決しないと若宮大路の側溝として認識できないと考えている。

採るに足らない疑問かもしれないが、1点目は若宮大路が中世前半と変わらずに存在するのに、側溝のみが遅くとも16世紀始め頃までに埋まってしまう点。2点目は、東西の木組み溝の内側（壇葛側）に、現在も暗渠になっている若宮大路の側溝がある点。この暗渠溝は、現在の東西歩道の下にあって、鶴岡八幡宮の外周に在る溝の流れを受けている。3点目は、本遺跡範囲（北条時房・顕時邸跡）の南で、木組み溝の延長部分が不鮮明になることである。

これらの点を、自分なりに考察した結果、若宮大路に平行する大路東西の木組み溝はそこにある屋敷の外周を囲む溝であり、若宮大路の側溝とは異なる可能性が高いとの結論に至っている。若宮大路の側溝は別に構築されたか、屋敷のある部分については大路の排水も屋敷外周の溝に流したのであろう。検証の過程をここで詳細に示すことは、紙数の都合もあり不可能である。これについては別に発表を考えている。

本地点で見つかった木組み溝が若宮大路の側溝で無いとすれば、15世紀のある時期に完全に埋まってしまうことに不自然な感じはない。

第3章 まとめ

第1節 検出遺構の年代

近代の遺構をのぞき、最も新しい遺構は1面の若宮大路に沿った溝状の落ち込みである。この覆土は木組み溝を覆っている。出土遺物は少ないが、底部近くから15世紀後半から16世紀にかけての年代が考えられるかわらけ小皿がほぼ完形で1点出土している。この遺物を根拠にすると、1面は16世紀の年代となる。従って、若宮大路に並行する木組み溝は16世紀始め頃までには埋没していたことになる。その後、灰褐色粘土層が堆積する状況になり、これが近代まで続いた。耕作土直下の包含層からは、比較的薄手作りのかわらけ皿が出土している。

最下層の5面（中世基盤層上）では、多くの遺構から京都系手づくねかわらけが出土している。鎌倉の土器編年に即せば、5面の年代は12世紀末から13世紀初頭である。6面で確認した5層下の落ち込みは、明らかに中世基盤層以前の遺構であるが、年代は明らかにできない。おそらく、鶴岡八幡宮周辺で遺構・遺物が確認されている弥生時代から平安時代の間には帰属するのだろう。

2面から4面は、細かな生活面を多く含んでおり、夫々を明確には出来ない。大まかには4面が13世紀中頃前後、3面が13世紀後半頃、2面が14世紀代を考えたい。

第2節 木組み溝の性格

本地点周辺で確認されている若宮大路に沿った木組み溝は、若宮大路の東側でも同様な構造の木組み溝が在ること等から、中世段階の「若宮大路の側溝」として認識されている。しかし、個人的には、いくつかの疑問があって、これを解決しないと若宮大路の側溝として認識できないと考えている。

採るに足らない疑問かもしれないが、1点目は若宮大路が中世前半と変わらずに存在するのに、側溝のみが遅くとも16世紀始め頃までに埋まってしまう点。2点目は、東西の木組み溝の内側（壇葛側）に、現在も暗渠になっている若宮大路の側溝がある点。この暗渠溝は、現在の東西歩道の下にあって、鶴岡八幡宮の外周に在る溝の流れを受けている。3点目は、本遺跡範囲（北条時房・顕時邸跡）の南で、木組み溝の延長部分が不鮮明になることである。

これらの点を、自分なりに考察した結果、若宮大路に平行する大路東西の木組み溝はそこにある屋敷の外周を囲む溝であり、若宮大路の側溝とは異なる可能性が高いとの結論に至っている。若宮大路の側溝は別に構築されたか、屋敷のある部分については大路の排水も屋敷外周の溝に流したのであろう。検証の過程をここで詳細に示すことは、紙数の都合もあり不可能である。これについては別に発表を考えている。

本地点で見つかった木組み溝が若宮大路の側溝で無いとすれば、15世紀のある時期に完全に埋まってしまうことに不自然な感じはない。

第3章 まとめ

第1節 検出遺構の年代

近代の遺構をのぞき、最も新しい遺構は1面の若宮大路に沿った溝状の落ち込みである。この覆土は木組み溝を覆っている。出土遺物は少ないが、底部近くから15世紀後半から16世紀にかけての年代が考えられるかわらけ小皿がほぼ完形で1点出土している。この遺物を根拠にすると、1面は16世紀の年代となる。従って、若宮大路に並行する木組み溝は16世紀始め頃までには埋没していたことになる。その後、灰褐色粘土層が堆積する状況になり、これが近代まで続いた。耕作土直下の包含層からは、比較的薄手作りのかわらけ皿が出土している。

最下層の5面（中世基盤層上）では、多くの遺構から京都系手づくねかわらけが出土している。鎌倉の土器編年に即せば、5面の年代は12世紀末から13世紀初頭である。6面で確認した5層下の落ち込みは、明らかに中世基盤層以前の遺構であるが、年代は明らかにできない。おそらく、鶴岡八幡宮周辺で遺構・遺物が確認されている弥生時代から平安時代の間には帰属するのだろう。

2面から4面は、細かな生活面を多く含んでおり、夫々を明確には出来ない。大まかには4面が13世紀中頃前後、3面が13世紀後半頃、2面が14世紀代を考えたい。

第2節 木組み溝の性格

本地点周辺で確認されている若宮大路に沿った木組み溝は、若宮大路の東側でも同様な構造の木組み溝が在ること等から、中世段階の「若宮大路の側溝」として認識されている。しかし、個人的には、いくつかの疑問があって、これを解決しないと若宮大路の側溝として認識できないと考えている。

採るに足らない疑問かもしれないが、1点目は若宮大路が中世前半と変わらずに存在するのに、側溝のみが遅くとも16世紀始め頃までに埋まってしまう点。2点目は、東西の木組み溝の内側（壇葛側）に、現在も暗渠になっている若宮大路の側溝がある点。この暗渠溝は、現在の東西歩道の下にあって、鶴岡八幡宮の外周に在る溝の流れを受けている。3点目は、本遺跡範囲（北条時房・顕時邸跡）の南で、木組み溝の延長部分が不鮮明になることである。

これらの点を、自分なりに考察した結果、若宮大路に平行する大路東西の木組み溝はそこにある屋敷の外周を囲む溝であり、若宮大路の側溝とは異なる可能性が高いとの結論に至っている。若宮大路の側溝は別に構築されたか、屋敷のある部分については大路の排水も屋敷外周の溝に流したのであろう。検証の過程をここで詳細に示すことは、紙数の都合もあり不可能である。これについては別に発表を考えている。

本地点で見つかった木組み溝が若宮大路の側溝で無いとすれば、15世紀のある時期に完全に埋まってしまうことに不自然な感じはない。

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

No	遺構		種別	計測値 単位:cm			備考	
				口径・長	底径・幅	器高・厚		
図6 1面遺構・1面出土遺物								
1	1面	遺構47	土器	かわらけ皿	7.9	5.0	1.6	
2	1面	遺構47	土器	かわらけ皿	(6.4)	4.6	2.6	
3	1面	遺構47	土器	かわらけ皿	11.2	6.4	3.2	
4	1面	遺構47	土器	かわらけ皿	(12.2)	(6.8)	3.1	
5	1面	遺構47	土器	かわらけ皿	(12.4)	6.6	3.1	
6	1面	-	土器	かわらけ皿	10.8	7.0	3.0	
7	1面	-	石製品	砥石	6.5	5.0	3.5	中砥 鳴滝産 砂粒泥岩
8	1面	-	銭	寛永通寶	-	-	-	
図8 2面遺構出土遺物(1)								
1	2面	遺構1	瀬戸窯	褐釉天目碗	-	3.5	[3.6]	火熱を受ける 釉光沢なし
2	2面	遺構1	瀬戸窯	灰釉卸皿	(19.0)	-	[3.6]	中期1
3	2面	遺構1	瀬戸窯	灰釉小壺	4.4	-	[3.9]	内側に朱付着
4	2面	遺構1	常滑窯	捏ね鉢	-	-	[4.9]	I類
5	2面	遺構1	常滑窯	捏ね鉢	-	-	[7.2]	I類
6	2面	遺構1	常滑窯	捏ね鉢	8.3	3.3	1.1	陶片に転用
7	2面	遺構1	土器質	火鉢	-	-	11.5	
8	2面	遺構1	土器質	火鉢	-	-	[10.5]	三鱗のスタンプ文
9	2面	遺構1	土器質	火鉢	-	-	[10.7]	菊のスタンプ文
10	2面	遺構1	土器質	火鉢脚	-	-	[6.3]	被熱
11	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(4.1)	(3.2)	1.0	コースター
12	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	4.6	3.2	1.0	コースター
13	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	4.4	3.6	1.2	コースター
14	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.0	3.6	2.0	
15	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(6.8)	3.9	1.9	内面口縁部被熱
16	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	6.8	4.0	2.1	
17	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(7.0)	4.0	2.1	
18	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.2	3.9	2.8	
19	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(7.4)	(4.5)	1.9	
20	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.4	5.0	2.0	
21	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.7	5.0	2.0	
22	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(7.3)	4.9	2.1	
23	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.2	3.9	2.8	
24	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(7.4)	(4.8)	2.2	
25	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.7	5.1	2.3	
26	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(7.0)	(4.2)	2.2	
27	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(8.1)	(4.6)	2.5	
28	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(8.8)	(5.6)	2.4	内面口縁部被熱
29	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(8.6)	5.0	3.0	内面口縁部被熱

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

No	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
30	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.5	4.8	1.9	
31	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(8.0)	(4.9)	2.0	
32	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	8.0	5.2	2.1	
33	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(8.2)	(5.3)	2.0	
34	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.6	5.0	1.8	
35	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(7.8)	(5.4)	1.7	
36	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.8	4.8	1.9	
37	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(7.6)	(4.4)	1.3	外面被熱
38	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(8.0)	(5.3)	2.0	
39	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.6	5.0	1.9	
40	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.7	4.6	2.0	
41	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.8	4.6	1.9	
42	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.8	5.2	1.9	
43	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.5	5.0	2.1	
44	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	8.6	5.5	2.0	
45	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.3	4.2	1.9	
46	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.6	4.8	2.0	
47	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.8	4.9	2.3	
48	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	8.1	5.5	2.0	
49	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(7.8)	(5.2)	1.9	
50	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(8.0)	(6.0)	1.9	
51	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.6	5.4	2.0	
52	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(8.4)	(6.4)	1.8	
53	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(8.0)	5.0	1.3	
54	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(8.7)	(6.8)	1.5	
55	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	8.2	6.1	1.6	外面被熱
56	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	8.0	4.5	1.8	
57	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.8	4.9	1.8	外面被熱
58	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.8	4.6	2.0	外面被熱
59	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.6	4.8	1.8	内面被熱
60	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.7	4.0	2.4	内外面スス付着
61	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(7.2)	(4.3)	1.8	内外面被熱
62	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(7.7)	5.4	1.4	内外面被熱
63	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	9.4	7.4	1.7	
64	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(7.2)	5.1	1.5	
65	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.9	5.4	1.4	
66	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.8	5.4	1.7	
67	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(7.6)	(5.3)	1.5	
68	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.7	4.8	1.4	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

No	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
69	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.9	5.4	1.8	
70	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	8.0	6.0	1.8	
71	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.8	5.1	1.5	外面口縁部スス付着
72	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.9	5.1	1.4	
73	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	8.5	5.8	1.6	
74	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.7	5.2	1.9	
75	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	8.0	4.9	1.8	
76	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	8.0	5.0	2.0	
77	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.7	5.0	1.8	
78	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(8.0)	4.9	[1.3]	
図9 2面遺構出土遺物(2)								
79	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(6.9)	(4.8)	1.4	内外面口縁部スス付着
80	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.2	4.9	1.5	
81	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.6	5.4	1.7	
82	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	8.2	5.5	1.7	内外面口縁部スス付着
83	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(7.8)	5.1	1.8	
84	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.2	5.1	1.7	内外面口縁部スス付着
85	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(8.0)	5.0	1.9	内外面口縁部スス付着
86	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.7	4.9	1.7	内外面口縁部スス付着
87	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	8.0	5.6	1.8	内外面口縁部スス付着
88	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.1	4.9	1.5	
89	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(8.0)	(5.2)	1.6	
90	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(8.0)	(5.4)	2.0	
91	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.7	4.9	1.9	
92	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.6	5.0	1.6	
93	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(8.0)	5.3	1.8	
94	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	7.7	4.8	2.6	
95	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(7.7)	(5.6)	1.9	
96	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	[6.3]	4.9	[1.3]	
97	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(10.3)	5.3	3.1	内外面口縁部スス付着
98	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(10.9)	(5.7)	3.2	内外面口縁部スス付着
99	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.0)	(5.9)	2.8	内外面口縁部被熱
100	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.2)	(7.0)	2.5	内面被熱
101	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.4)	(6.2)	2.7	内外面口縁部スス付着
102	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(10.9)	(6.0)	2.8	
103	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(10.9)	(6.4)	2.8	
104	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.0)	6.5	3.0	
105	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.2)	(6.8)	2.7	
106	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.2)	(7.6)	2.8	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

№	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
107	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.9)	(7.2)	3.0	
108	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.6)	(7.6)	3.1	外面口縁部スス付着
109	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.2)	(7.9)	3.2	
110	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.8)	(7.8)	3.0	
111	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.0)	(6.3)	3.4	
112	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.6)	(7.4)	3.4	
113	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.4)	(7.4)	3.4	
114	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.6)	(7.6)	3.5	
115	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.8)	(7.9)	3.3	
116	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.8)	(7.8)	3.3	
117	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.8)	(7.8)	3.3	
118	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(13.0)	(7.8)	3.2	
119	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.2)	(7.2)	3.2	内外面口縁部スス付着
120	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.9)	(8.0)	3.0	内外面口縁部スス付着
121	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.0)	(7.3)	3.3	内外面口縁部スス付着
122	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.8)	(7.2)	3.6	内外面口縁部スス付着
123	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.0)	7.0	3.6	内外面口縁部スス付着
124	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.6)	(7.0)	3.3	内外面口縁部スス付着
125	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	12.3	7.5	3.2	
126	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	12.3	7.5	3.5	
127	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.7)	6.9	3.8	内外面口縁部スス付着
128	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.8)	(7.0)	3.5	内面口縁部スス付着
129	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.2)	(8.0)	3.6	内面口縁部スス付着
130	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.9)	(7.5)	3.0	内外面口縁部スス付着
131	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(13.9)	(7.5)	3.5	外面口縁部スス付着
132	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.8)	(6.8)	3.1	
133	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.8)	(7.0)	3.1	
134	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	12.2	7.5	3.2	
135	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.9)	(7.3)	3.1	
136	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.0)	(8.5)	3.3	
137	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(13.2)	7.5	3.0	
138	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(13.2)	(8.8)	3.1	
139	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.6)	(8.9)	3.0	
140	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(13.3)	8.0	3.1	
図10 2面遺構出土遺物(3)								
141	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(13.4)	(8.2)	3.2	
142	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(13.5)	(9.9)	3.5	
143	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(13.8)	(8.8)	3.4	
144	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(14.0)	(8.4)	3.9	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

No	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
145	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.8)	(7.6)	3.3	内外面口縁部スス付着
146	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.5)	(7.0)	3.3	内外面口縁部スス付着
147	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.6)	(7.2)	3.2	内外面口縁部スス付着
148	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.6)	(7.8)	3.2	外面被熱
149	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.2)	(8.2)	3.5	外面被熱
150	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.4)	(7.8)	3.5	内外面被熱
151	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(13.0)	(7.3)	3.2	内面被熱
152	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(13.2)	7.4	3.3	内外面スス付着
153	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.8)	8.0	3.6	
154	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(11.8)	(6.7)	3.5	
155	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	12.6	8.0	3.8	
156	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	12.4	7.8	3.4	
157	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(13.0)	(7.5)	3.0	
158	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	(12.4)	(9.3)	3.1	
159	2面	遺構1	土器	かわらけ皿	13.3	2.1	2.0	
160	2面	遺構1	銭	政和通寶	2.4	2.3	0.1	北宋(1111年)
図11 2面出土遺物								
161	2面	-	土器	かわらけ皿	6.8	3.8	2.2	内外面口縁部スス付着
162	2面	-	土器	かわらけ皿	11.8	8.0	3.2	
163	2面	-	土器	打ち欠き	-	6.3	1.4	
164	2面	-	土器	打ち欠き	-	5.1	1.5	
165	2面	-	土器質	手焙り	-	-	10.2	菊のスタンプ文
166	2面	-	瓦	平瓦	18.0	10.4	2.1	
図15 3面遺構出土遺物(1)								
1	3面	遺構3	土器	かわらけ皿	7.2	4.8	1.9	
2	3面	遺構3	土器	かわらけ皿	(7.8)	(6.0)	1.9	
3	3面	遺構3	土器	かわらけ皿	(10.2)	(5.3)	3.3	
4	3面	遺構3	土器	かわらけ皿	11.8	7.3	3.6	
5	3面	遺構56	土器	かわらけ皿	(12.0)	(6.8)	3.2	
6	3面	遺構56	土器	かわらけ皿	7.3	4.5	2.5	
7	3面	遺構62	土器	かわらけ皿	13.0	7.2	3.1	
8	3面	遺構62	土器	かわらけ皿	12.5	8.2	3.6	
9	3面	遺構62	土器	かわらけ皿	(13.6)	8.0	3.4	
10	3面	遺構62	土器	かわらけ皿	(13.6)	(8.8)	3.6	
11	3面	遺構65	瀬戸窯	灰釉折縁鉢	-	-	[4.8]	
12	3面	遺構65	魚住窯	捏ね鉢	-	-	[4.8]	
13	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	7.0	3.8	2.3	
14	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	(6.8)	(4.6)	2.2	
15	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	(7.6)	(4.8)	2.1	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

№	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
16	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	(7.2)	(4.0)	2.4	
17	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	(7.4)	5.0	2.3	
18	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	8.1	4.4	2.6	外面被熱
19	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	(7.9)	4.0	3.2	
20	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	(10.6)	6.0	2.7	内外面口縁部スス付着
21	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	(9.2)	5.4	2.2	内外面口縁部スス付着
22	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	(11.4)	7.9	3.0	
23	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	11.2	6.6	3.1	
24	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	(11.4)	(6.2)	3.0	
25	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	(12.6)	(7.0)	3.5	
26	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	11.6	7.2	3.2	
27	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	(12.0)	7.0	3.4	
28	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	13.6	7.6	3.6	
29	3面	遺構65	土器	かわらけ皿	(13.6)	6.6	3.5	
30	3面	遺構65	土器	穿孔かわらけ皿	-	-	-	
31	3面	遺構65	瓦	軒丸瓦	[5.2]	-	1.6	火熱を受けている
32	3面	遺構65	瓦	軒丸瓦	[4.1]	-	1.9	
33	3面	遺構65	瓦	軒丸瓦	[6.0]	3.2	1.8	
34	3面	遺構65	瓦	丸瓦	[9.0]	[5.8]	2.1	
35	3面	遺構65	瓦	平瓦	[9.5]	[7.4]	2.2	火熱を受けている 埼玉美里
36	3面	遺構66	瀬戸窯	灰釉小壺	(2.2)	-	[2.4]	
37	3面	遺構66	常滑窯	捏ね鉢	-	-	[4.2]	Ⅱ類
38	3面	遺構66	山茶碗窯	捏ね鉢	-	-	[4.6]	
39	3面	遺構66	瓦質	火鉢脚	3.1	3.1	1.4	
40	3面	遺構66	土器	コースター	(4.0)	(2.8)	1.9	
41	3面	遺構66	土器	かわらけ皿	(7.0)	5.2	2.3	内外面口縁部スス付着
42	3面	遺構66	土器	かわらけ皿	(7.6)	(4.6)	1.7	
43	3面	遺構66	土器	かわらけ皿	(8.0)	(5.6)	1.6	
44	3面	遺構66	土器	かわらけ皿	(7.4)	4.8	2.1	
45	3面	遺構66	土器	かわらけ皿	10.4	6.9	2.9	
46	3面	遺構66	土器	かわらけ皿	(11.3)	6.5	3.1	内外面口縁部スス付着
47	3面	遺構66	土器	かわらけ皿	(11.6)	(7.2)	3.2	
48	3面	遺構66	土器	かわらけ皿	12.3	7.4	3.7	
49	3面	遺構66	土器	かわらけ皿	(12.8)	7.0	3.0	
50	3面	遺構66	土器	かわらけ皿	14.3	7.9	3.4	
図16 3面遺構出土遺物(2)								
51	3面	遺構66	土器	かわらけ皿	(12.6)	(8.2)	3.4	
52	3面	遺構66	土器	打ち欠き	-	7.0	[2.6]	
53	3面	遺構66	土器	穿孔かわらけ皿	-	-	[1.5]	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

No	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
54	3面	遺構66	木製品	曲物	[11.7]	-	0.25	
55	3面	遺構66	木製品	草履芯	[8.6]	1.6	0.25	
56	3面	遺構66	木製品	草履芯	[21.6]	6.0	0.4	
57	3面	遺構66	木製品	草履芯	[14.2]	0.8	0.25	
58	3面	遺構66	木製品	箸	18.4	0.7	0.5	
59	3面	遺構66	木製品	箸	18.5	0.8	0.3	
60	3面	遺構66	木製品	箸	16.8	0.7	0.4	
61	3面	遺構66	木製品	箸	20.9	0.6	0.4	
62	3面	遺構66	木製品	箸	19.7	0.6	0.5	
63	3面	遺構66	木製品	箸	17.0	0.6	0.5	
64	3面	遺構66	木製品	箸	22.2	0.8	0.4	
65	3面	遺構66	木製品	箱物部材	14.0	2.2	0.6	穿孔1穴あり
66	3面	遺構66	木製品	箱物部材	14.9	[2.0]	0.1	穿孔1穴あり
67	3面	遺構66	木製品	箱物部材	14.9	[3.5]	0.1	穿孔1穴あり
68	3面	遺構66	木製品	箱物部材	15.0	[6.6]	0.1	
69	3面	遺構66	木製品	箱物部材	17.8	[4.5]	0.1	穿孔1穴あり
70	3面	遺構66	木製品	建具部材	29.2	1.7	0.9	
71	3面	遺構66	木製品	建具部材	20.3	1.0	0.7	
図17 3面遺構出土遺物(3)								
1	3面	遺構69	磁器	碗	-	3.9	[1.6]	中国青白磁 型押
2	3面	遺構69	磁器	口元皿	-	-	[4.1]	中国白磁
3	3面	遺構69	常滑窯	甕	-	-	[5.3]	13世紀中
4	3面	遺構69	土器	黒縁瓦器碗	-	-	[2.6]	
5	3面	遺構69	瓦質	手焙り	-	-	[5.6]	
6	3面	遺構69	土器	コースター	(2.8)	(2.6)	0.8	
7	3面	遺構69	土器	コースター	(4.2)	(3.1)	1.1	
8	3面	遺構69	土器	コースター	4.5	4.0	1.2	
9	3面	遺構69	土器	コースター	(4.4)	4.4	0.9	
10	3面	遺構69	土器	コースター	4.8	4.0	1.0	
11	3面	遺構69	土器	コースター	(5.4)	(4.0)	1.3	
12	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	6.5	4.4	2.0	
13	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(6.6)	(4.6)	2.1	
14	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(6.6)	(4.4)	1.9	
15	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	6.6	4.7	2.6	
16	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	6.8	4.3	2.0	
17	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.0)	4.6	2.1	
18	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.0	4.7	2.2	
19	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	6.9	4.6	3.2	
20	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(6.2)	4.0	2.2	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

No	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
21	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(6.6)	4.4	1.9	
22	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	6.5	4.1	2.4	
23	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	6.6	4.2	2.1	
24	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(6.6)	4.0	2.7	
25	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(6.6)	4.5	1.7	
26	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(6.8)	4.6	2.3	
27	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.0)	(4.8)	2.3	
28	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.0	4.4	2.1	
29	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.1	3.7	2.2	
30	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	6.8	5.0	2.2	内外面口縁部スス付着
31	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	6.9	4.4	2.2	内外面被熱
32	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(6.8)	4.3	2.1	
33	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.2)	(4.6)	2.3	
34	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.0)	(4.6)	2.3	
35	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.0)	4.2	2.3	
36	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.0)	4.6	2.2	
37	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.1	5.0	2.2	
38	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.2)	(4.8)	2.2	
39	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.4)	(3.5)	2.4	
40	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.4)	5.1	2.2	
41	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.6)	5.0	1.9	
42	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.0	4.4	2.4	
43	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.4)	6.0	1.8	
44	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	6.9	4.4	1.8	
45	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.0	4.5	1.7	
46	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.3	4.8	1.8	
47	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.0	5.2	1.8	
48	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(6.4)	(4.0)	1.9	
49	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.0)	5.0	1.6	
50	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.0	4.5	1.7	
51	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.3	5.0	1.5	
52	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.4)	(5.8)	1.6	
53	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.4	4.9	1.8	
54	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.7	5.5	1.8	
55	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	6.8	5.5	2.0	
56	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.3	5.5	1.0	内外面口縁部スス付着
57	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.5	5.3	2.0	内外面口縁部スス付着
58	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.1	4.3	1.9	外面口縁部スス付着
59	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(6.8)	(4.4)	2.0	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
60	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.4	5.3	1.8	
61	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.0	5.0	1.7	
62	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.0	5.8	1.5	
63	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.4	5.4	1.5	
64	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.6	6.1	1.9	
65	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.6)	(6.0)	1.6	
66	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.3	6.1	1.8	
67	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.1	5.6	1.7	
68	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.6)	(5.6)	1.6	
69	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.4	5.7	1.8	
70	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.2	5.0	1.7	
71	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(6.8)	4.0	1.7	
72	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.3	5.2	1.8	
73	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.6)	(5.2)	1.8	
74	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.0)	(5.4)	1.8	
75	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.6	5.6	2.2	
76	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.7	5.7	2.0	
77	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(8.0)	6.0	1.9	
78	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(8.0)	6.4	1.9	
79	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	8.1	5.7	1.8	
80	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(6.8)	4.6	1.6	
81	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(6.8)	5.0	1.6	外面被熱
82	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.0)	(5.0)	1.5	
83	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.2	5.2	1.7	
84	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	6.9	4.5	1.7	
85	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.1	5.2	2.0	
86	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.6)	(5.0)	1.4	
87	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	6.8	5.6	1.7	
88	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.0	4.5	1.9	
89	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.0	4.5	1.7	
90	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.0	4.9	1.8	
91	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.0)	(5.0)	1.9	
92	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.0)	4.1	1.7	
93	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.0	4.4	1.9	
94	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.0)	(4.2)	1.8	
95	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.4)	5.2	1.7	
96	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.3	5.4	1.8	
97	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.3	5.0	2.0	
98	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.4)	4.6	1.7	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

№	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
99	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.4)	(6.0)	1.7	
100	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.2	4.8	2.0	
101	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.4)	4.8	1.8	
102	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.4)	4.8	1.7	
103	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.4	5.5	1.6	
104	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.5	5.0	1.8	
105	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.4	5.2	1.7	
106	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.4)	(4.8)	1.7	
107	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.4)	5.6	1.7	
108	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.6)	5.8	1.7	
109	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.6	4.8	1.9	
110	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.6	5.3	1.8	
111	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.6)	5.2	1.9	
112	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.5	5.0	1.8	
113	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.7	6.0	1.8	
図18 3面遺構出土遺物(4)								
114	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	6.8	5.4	2.6	
115	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(6.8)	5.4	1.6	
116	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(6.8)	5.7	1.7	
117	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	6.8	5.4	1.9	
118	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.1	5.3	2.3	
119	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.2)	5.0	1.7	
120	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.0)	(5.8)	1.7	内面スス付着
121	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.6	5.7	1.8	内外面被熱
122	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.6	6.0	1.8	
123	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.6)	6.0	1.8	
124	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.2)	(5.2)	1.9	
125	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.4	5.5	1.8	
126	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.7	5.1	1.9	内外面被熱
127	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.7	5.3	2.1	
128	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.0)	(6.0)	1.6	
129	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.8	5.4	1.7	
130	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.4)	5.2	1.5	
131	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.2)	(6.2)	1.6	
132	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.4	5.9	1.9	
133	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.8)	6.2	1.6	
134	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.2	4.8	2.0	
135	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(7.4)	(5.4)	1.9	
136	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	7.7	6.1	2.0	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

No	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
137	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(8.6)	(5.2)	2.0	
138	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	8.0	5.8	2.4	
139	3面	遺構69	土器	墨書かわらけ皿	(7.8)	(4.4)	2.1	
140	3面	遺構69	土器	穿孔かわらけ皿	(7.4)	(5.8)	1.8	
141	3面	遺構69	土器	穿孔かわらけ皿	(7.4)	(5.6)	1.7	
142	3面	遺構69	土器	穿孔かわらけ皿	7.4	5.3	[1.0]	
143	3面	遺構69	土器	打ち欠き	[6.8]	6.8	[0.9]	
144	3面	遺構69	土器	打ち欠き	[6.3]	6.0	[1.1]	
145	3面	遺構69	土器	打ち欠き	[6.7]	6.6	[0.8]	
146	3面	遺構69	土器	打ち欠き	[5.5]	3.9	0.7	
147	3面	遺構69	土器	穿孔かわらけ皿	3.6	3.5	2.9	
148	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(9.8)	6.8	2.9	内外面被熱
149	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(9.8)	(6.4)	2.9	
150	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(10.2)	6.4	2.9	
151	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(10.4)	(6.8)	3.3	
152	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	10.4	6.0	3.1	
153	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	10.6	6.8	3.2	
154	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(10.6)	(6.8)	3.1	
155	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(10.6)	(7.0)	3.3	
156	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(10.6)	(6.2)	3.0	内外面口縁部スス付着
157	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(10.6)	6.8	3.1	
158	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	10.6	6.6	2.9	
159	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(10.6)	(6.2)	2.9	
160	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(10.8)	(6.4)	2.7	
161	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(10.8)	7.4	2.9	
162	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(10.8)	(6.4)	3.0	
163	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.0)	6.2	3.3	
164	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.6)	6.6	2.9	
165	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.6)	(7.6)	2.8	
166	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.6	8.0	3.4	
167	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.8	7.4	3.4	
168	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.7	7.4	3.2	
169	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.0	8.0	2.9	
170	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.0	7.0	3.6	
171	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.0)	(7.6)	3.2	
172	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.2	8.0	3.5	
173	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.4)	8.0	3.0	
174	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.4	7.4	3.5	
175	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.6)	(8.0)	3.3	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

№	遺構	種別	計測値 単位:cm			備考		
			口径・長	底径・幅	器高・厚			
図19 3面遺構出土遺物(5)								
176	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.4)	(8.0)	3.2	
177	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.6)	(7.2)	3.5	
178	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.6)	8.0	3.5	
179	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.8)	7.8	3.8	内面被熱
180	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.8)	(7.4)	3.3	
181	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(13.4)	(8.4)	3.5	
182	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(13.4)	(8.0)	3.0	
183	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(13.4)	(7.0)	3.5	
184	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(13.6)	8.4	3.5	
185	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.0	7.6	3.1	
186	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.2	7.0	3.1	
187	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.4)	6.5	2.9	
188	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.2)	(7.8)	3.2	
189	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.3	7.2	3.4	
190	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.4)	(6.8)	3.3	
191	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.4	7.6	3.5	
192	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.4)	(8.2)	3.0	
193	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.4)	7.0	2.9	
194	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.4)	(8.4)	3.4	内面被熱
195	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.4)	(7.0)	3.5	
196	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.9	7.5	3.4	
197	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.4)	7.7	3.3	
198	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.5	7.4	3.4	
199	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.6)	7.4	3.2	
200	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.6)	7.4	3.6	内外面被熱
201	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.6)	7.6	3.5	
202	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.6	7.0	3.6	内面被熱
203	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.6	7.7	3.5	
204	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.6)	7.0	3.2	内外面口縁部スス付着
205	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.6)	(6.6)	3.2	
206	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.6)	7.5	3.2	
207	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.7	8.0	3.2	
208	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.6)	(7.0)	3.1	
209	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.6)	7.2	3.1	
210	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.8)	(7.0)	2.9	内外面口縁部スス付着
211	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.8)	(8.0)	2.1	
212	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.8	7.3	2.9	
213	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.8)	(7.4)	3.4	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

No	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
214	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.8	7.4	3.5	外面被熱
215	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.0)	(8.0)	3.1	
216	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.8)	7.8	3.1	
217	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.0)	7.8	3.1	
218	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.5	8.0	3.5	
219	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.8	7.5	3.5	内面口縁部被熱
220	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.8)	7.8	3.5	
221	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	11.8	6.8	3.7	内外面被熱
222	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.8)	8.2	3.5	
223	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.0	8.2	3.3	
224	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.8)	(7.4)	3.1	
225	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(11.2)	(8.0)	3.5	
図20 3面遺構出土遺物(6)								
226	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.0	7.0	3.0	
227	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.0	7.6	3.2	
228	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.1	7.0	3.5	
229	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.0	7.4	3.7	
230	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.0)	7.6	3.3	
231	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.1	8.3	3.4	
232	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.4)	7.5	3.0	
233	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.2	7.4	3.2	
234	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.2)	(8.0)	2.9	
235	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.3	7.7	3.4	
236	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.2	8.0	3.3	
237	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.2	7.6	3.2	
238	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.2)	(6.4)	2.9	内外面被熱
239	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.0)	7.4	3.0	内外面被熱
240	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.0	7.5	3.4	内外面口縁部スス付着
241	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.0	8.0	3.2	内外面被熱
242	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.6)	7.6	3.2	内外面口縁部スス付着
243	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.5)	(8.6)	3.1	
244	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	12.4	7.8	3.4	
245	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.4)	7.8	3.2	
246	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.6)	(8.0)	3.0	
247	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.4)	7.6	3.6	
248	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.4)	(8.4)	3.4	
249	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(13.0)	(8.4)	3.4	内外面被熱
250	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.6)	8.2	3.6	
251	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.4)	7.5	3.8	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

№	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
252	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	(12.8)	(8.0)	3.4	
253	3面	遺構69	土器	穿孔かわらけ皿	-	(2.9)	[2.8]	
254	3面	遺構69	土器	穿孔かわらけ皿	-	[6.5]	[1.4]	
255	3面	遺構69	土器	穿孔かわらけ皿	-	8.2	3.5	
256	3面	遺構69	土器	打ち欠き	-	7.3	[1.2]	
257	3面	遺構69	土器	打ち欠き	-	8.5	[1.2]	
258	3面	遺構69	土器	打ち欠き	-	[4.8]	-	
259	3面	遺構69	土器	打ち欠き	-	[4.5]	[1.0]	
260	3面	遺構69	土器	かわらけ皿	-	-	[2.1]	内面黒漆付着
261	3面	遺構69	瓦	平瓦	9.5	8.7	1.7	
262	3面	遺構69	石製品	河原石	4.0	3.6	1.9	磨滅、結った紐痕あり
図21 3面遺構出土遺物(7)								
263	3面	遺構69	木製品	草履芯	[15.1]	4.5	0.2	
264	3面	遺構69	木製品	草履芯	[6.5]	[2.6]	0.2	
265	3面	遺構69	木製品	草履芯	[8.4]	[2.0]	0.3	
266	3面	遺構69	木製品	草履芯	[9.8]	[3.0]	0.3	
267	3面	遺構69	木製品	草履芯	[5.8]	[2.7]	0.3	
268	3面	遺構69	木製品	容器底	[11.9]	[3.6]	0.3	
269	3面	遺構69	木製品	飲食器	[8.6]	13.0	0.4	
270	3面	遺構69	木製品	箱物部材	[11.0]	2.0	0.4	
271	3面	遺構69	木製品	箱物部材	[6.7]	2.3	0.2	穿孔あり
272	3面	遺構69	木製品	用途不明	[5.2]	2.0	0.2	焦げ痕
273	3面	遺構69	木製品	籠状製品	13.4	1.6	0.3	焦げ痕
274	3面	遺構69	木製品	杭	19.9	2.0	1.7	
275	3面	遺構69	木製品	建具部材	[18.7]	1.5	0.9	焦げ痕
276	3面	遺構69	木製品	用途不明	20.0	[1.1]	0.4	
277	3面	遺構69	木製品	用途不明	15.7	1.1	0.5	
278	3面	遺構69	木製品	用途不明	[12.8]	0.9	0.6	
279	3面	遺構69	木製品	串状製品	[13.8]	1.0	0.4	
280	3面	遺構69	木製品	箸	20.0	0.5	0.4	
281	3面	遺構69	木製品	箸	18.9	0.8	0.5	
282	3面	遺構69	木製品	箸	[20.2]	0.6	0.5	
283	3面	遺構69	木製品	箸	17.4	0.6	0.5	
284	3面	遺構69	木製品	箸	[21.8]	0.8	0.6	
図22 3面出土遺物								
1	3面	-	瀬戸窯	輪花灰釉入子	2.9	1.7	1.2	8弁文
2	3面	-	瀬戸窯	片口鉢	-	-	(6.9)	
3	3面	-	土器質	火鉢	-	-	10.8	
4	3面	-	土器	かわらけ皿	(7.4)	(5.2)	1.5	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

No	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
5	3面	-	土器	かわらけ皿	7.8	5.8	2.1	
6	3面	-	土器	かわらけ皿	(7.2)	(5.2)	1.5	
7	3面	-	土器	かわらけ皿	(7.8)	(5.4)	2.0	内外面口縁部スス付着
8	3面	-	土器	かわらけ皿	12.2	7.0	3.4	
9	3面	-	土器	かわらけ皿	(12.6)	(6.3)	3.3	内外面口縁部スス付着
10	3面	-	土製品	円盤状土製品	3.7	3.7		
11	3面	-	瓦	丸瓦	6.1	7.2	1.5	
12	3面	-	木製品	漆器皿	-	5.4	(0.4)	楓文
図25 4面遺構出土遺物(1)								
1	4面	遺構4	木製品	底板	21.4	21.0	0.6	刃物傷あり
2	4面	遺構4	木製品	底板	11.0	(4.5)	0.7	
3	4面	遺構4	木製品	木栓	2.4	2.4	-	
4	4面	遺構4	木製品	杖毬球	5.8	6.2	-	
5	4面	遺構4	木製品	部材	25.7	2.9	1.0	
6	4面	遺構4	木製品	部材	15.2	2.5	0.6	釘1本残る
7	4面	遺構4	木製品	部材	15.0	0.7	0.5	釘2本残る
8	4面	遺構4	木製品	串状製品	17.4	1.1	0.5	
9	4面	遺構4	木製品	串状製品	17.3	1.8	1.2	焦げ痕
10	4面	遺構4	木製品	串状製品	33.2	1.0	1.0	
11	4面	遺構4	木製品	用途不明	27.5	1.0	0.8	
12	4面	遺構4	木製品	箸	24.2	0.8	0.6	
13	4面	遺構4	木製品	箸	25.2	1.0	0.7	
14	4面	遺構4	木製品	箸	21.2	0.9	0.4	
15	4面	遺構4	木製品	箸	21.9	0.8	0.6	
図26 4面遺構出土遺物(2)								
16	4面	遺構4	木製品	板草履芯	26.3	8.0	0.4	
17	4面	遺構4	木製品	板草履芯	15.2	4.8	0.3	
18	4面	遺構4	木製品	下駄	15.5	5.0	-	一本造り
19	4面	遺構4	木製品	下駄	10.3	5.2	-	一本造り
20	4面	遺構4	木製品	下駄	9.2	7.2	-	焦げ痕 一本造り
図27 4面遺構出土遺物(3)								
21	4面	遺構15	瀬戸窯	灰釉洗	-	-	[3.6]	前期 I - Ia 13世紀前
22	4面	遺構15	土器	かわらけ皿	7.6	4.9	2.3	
23	4面	遺構15	土器	かわらけ皿	(12.0)	7.0	3.2	
24	4面	遺構15	木製品	用途不明	6.7	[3.5]	0.6	
25	4面	遺構15	木製品	杖毬球	4.0	4.1	3.4	
26	4面	遺構15	木製品	板草履芯	[11.1]	5.0	0.3	
27	4面	遺構15	木製品	板草履芯	18.5	5.0	0.3	
28	4面	遺構15	木製品	折敷	19.7	3.5	0.4	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

№	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
29	4面	遺構15	木製品	杭	7.0	2.4	0.5	焦げ痕
30	4面	遺構15	木製品	杭	18.2	2.1	0.8	焦げ痕
31	4面	遺構15	木製品	板状製品	18.2	1.0	0.3	
32	4面	遺構15	木製品	角杭	28.4	5.4	2.1	
33	4面	遺構15	木製品	杭	19.5	2.7	1.8	
34	4面	遺構15	木製品	板状製品	13.6	1.2	0.5	
35	4面	遺構15	木製品	箸	21.3	0.8	0.4	
36	4面	遺構15	木製品	箸	22.3	0.6	0.4	
37	4面	遺構15	木製品	箸	21.5	0.6	0.4	
38	4面	遺構15	木製品	箸	21.5	0.6	0.4	
図28 4面遺構出土遺物(4)								
39	4面	遺構70	土器	白かわらけ皿	(7.4)	4.2	1.7	
40	4面	遺構70	土器	かわらけ皿	7.5	5.5	1.6	
41	4面	遺構70	土器	かわらけ皿	7.3	5.3	1.9	
42	4面	遺構70	土器	かわらけ皿	(8.0)	(5.0)	2.0	
43	4面	遺構70	土器	かわらけ皿	7.6	5.6	1.9	
44	4面	遺構70	土器	かわらけ皿	7.7	5.2	1.7	
45	4面	遺構70	土器	かわらけ皿	(12.0)	7.6	3.5	
46	4面	遺構70	土器	かわらけ皿	(12.2)	(8.0)	3.2	
47	4面	遺構70	土器	かわらけ皿	(13.0)	7.8	3.3	
48	4面	遺構72	土器	かわらけ皿	(7.0)	4.5	2.4	
49	4面	遺構72	土器	かわらけ皿	7.8	5.0	1.9	
50	4面	遺構72	土器	かわらけ皿	8.6	5.6	2.0	
51	4面	遺構72	土器	かわらけ皿	(10.6)	(5.6)	3.1	
52	4面	遺構72	土器	かわらけ皿	(10.6)	(5.6)	3.6	
53	4面	遺構72	土器	かわらけ皿	(10.6)	(5.6)	3.6	
54	4面	遺構72	木製品	草履芯	[7.2]	[3.0]	0.2	
55	4面	遺構72	木製品	籠状製品	20.0	1.2	1.0	
56	4面	遺構72	木製品	箱物部材	21.4	[3.0]	0.2	
57	4面	遺構72	木製品	箸	21.2	0.7	0.4	
58	4面	遺構72	木製品	箸	[18.4]	0.5	0.5	
59	4面	遺構72	木製品	箸	20.8	0.6	0.4	
60	4面	遺構72	木製品	箸	[16.0]	0.6	0.5	
61	4面	遺構72	木製品	箸	[17.7]	0.8	0.5	
62	4面	遺構72	木製品	箸	[18.3]	0.8	0.5	
63	4面	遺構72	木製品	箸	21.2	0.9	0.3	
64	4面	遺構72	木製品	箸	17.9	0.7	0.4	
65	4面	遺構72	木製品	箸	19.5	0.7	0.4	
66	4面	遺構72	木製品	箸	[18.0]	0.6	0.4	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

№	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
67	4面	遺構72	木製品	箸	[19.8]	0.6	0.5	
68	4面	遺構72	木製品	箸	[18.0]	0.6	0.4	
69	4面	遺構72	木製品	箸	20.6	0.6	0.4	
70	4面	遺構72	木製品	箸	20.6	0.7	0.4	
71	4面	遺構72	木製品	箸	21.6	0.5	0.5	
72	4面	遺構72	木製品	箸	23.1	0.6	0.3	
73	4面	遺構72	木製品	箸	24.8	0.6	0.5	
74	4面	遺構72	木製品	箸	24.5	0.6	0.4	
図29 4面出土遺物								
75	4面	-	常滑窯	甕	-	-	[15.3]	6a(1275)年
76	4面	-	土器	かわらけ皿	7.0	4.9	1.9	
77	4面	-	土器	かわらけ皿	7.6	5.2	2.0	
78	4面	-	土器	かわらけ皿	7.9	4.5	2.0	
79	4面	遺構67	土器	かわらけ皿	(6.6)	(5.4)	1.4	
80	4面	遺構67	土器	かわらけ皿	(7.0)	(5.2)	1.7	
81	4面	遺構68	土器	かわらけ皿	(7.6)	5.0	1.7	
82	4面	遺構68	土器	かわらけ皿	(7.4)	4.4	1.8	
83	4面	遺構68	土器	かわらけ皿	(12.6)	(7.8)	3.3	
84	4面	遺構68	土器	かわらけ皿	-	[4.0]	[0.9]	
85	4面	-	土器	かわらけ皿	(12.0)	(7.0)	3.2	
86	4面	-	土器	かわらけ皿	(12.2)	(7.2)	3.2	内外面被熱
87	4面	-	鉄製品	火箸	12.2	0.7	0.7	
88	4面	-	木製品	調度具脚	4.6	2.5	4.6	
89	4面	-	木製品	用途不明	[10.8]	2.5	0.6	
90	4面	-	木製品	容器底	33.0	[10.0]	1.1	
図35 5面遺構出土遺物(1)								
1	5面	遺構18	木製品	建具部材	31.6	2.2	0.9	
2	5面	遺構18	木製品	用途不明	16.2	4.2	2.4	焦げ痕
3	5面	遺構18	木製品	串状製品	17.2	0.8	0.4	
4	5面	遺構18	木製品	呪符	14.7	1.5	0.3	
5	5面	遺構25	土器	かわらけ皿	12.2	-	3.4	手づくね
6	5面	遺構30	磁器	碗	-	5.5	[1.9]	龍泉窯青磁 劃花文
7	5面	遺構30	土器	かわらけ皿	8.2	-	1.8	手づくね
8	5面	遺構30	土器	かわらけ皿	(9.4)	(6.0)	2.1	手づくね
9	5面	遺構30	土器	かわらけ皿	12.0	8.4	3.2	
10	5面	遺構32	土器	かわらけ皿	7.0	5.0	2.0	
11	5面	遺構32	土器	かわらけ皿	(10.6)	(7.0)	3.0	
12	5面	遺構32	土器	かわらけ皿	(11.6)	(7.0)	3.1	
13	5面	遺構76	木製品	用途不明	21.4	1.6	0.6	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

№	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
14	5面	遺構76	木製品	箸	22.4	0.6	0.5	
15	5面	遺構76	木製品	用途不明	10.1	2.6	1.2	
16	5面	遺構78	木製品	棒状製品	27.4	1.4	0.6	
17	5面	遺構78	木製品	棒状製品	(15.8)	1.2	0.7	
18	5面	遺構78	木製品	用途不明	15.2	2.2	0.6	
19	5面	遺構79	土器	かわらけ皿	(12.6)	(8.6)	2.9	
20	5面	遺構85	土器	かわらけ皿	(11.2)	8.0	2.5	
21	5面	遺構85	木製品	籠状製品	17.5	0.7	0.5	
図36 5面出土遺物(1)								
22	5面	-	磁器	皿	9.6	4.6	2.2	同安窯青磁
23	5面	-	土器	かわらけ皿	(7.2)	(5.8)	1.6	内面被熱
24	5面	-	土器	かわらけ皿	7.6	5.9	1.7	
25	5面	-	土器	かわらけ皿	8.0	5.5	1.9	
26	5面	-	土器	かわらけ皿	(9.0)	7.0	1.6	
27	5面	-	土器	白かわらけ皿	-	-	[2.0]	
28	5面	-	土器	白かわらけ皿	-	-	[2.2]	
29	5面	-	土器	打ち欠き	-	[4.8]	[1.5]	
30	5面	-	石製品	砥石	7.2	4.0	2.7	中砥 鳴滝産 砂粒泥岩
31	5面	-	木製品	漆器皿	[2.1]	[1.8]	0.4	スタンプ文 亀甲
32	5面	-	木製品	漆器皿	[2.4]	[3.3]	0.3	手描き文 萩
33	5面	-	鉄製品	釘	8.3	0.4	0.3	
34	5面	-	銭	皇宋通寶	-	-	-	北宋(1038年)
35	5面	-	木製品	草履芯	22.6	10.0	0.2	
36	5面	-	木製品	草履芯	23.2	3.4	0.3	
37	5面	-	木製品	草履芯	[16.5]	4.3	0.5	
38	5面	-	木製品	草履芯	[11.5]	3.8	0.3	
39	5面	-	木製品	草履芯	[14.4]	2.5	0.4	
40	5面	-	木製品	草履芯	[7.2]	3.3	0.25	
41	5面	-	木製品	草履芯	[10.8]	4.4	0.2	
42	5面	-	木製品	形代	3.8	1.4	1.5	焦げ痕
43	5面	-	木製品	草履芯	12.9	3.7	1.7	焦げ痕
44	5面	-	木製品	容器	[10.9]	4.3	0.5	
45	5面	-	木製品	用途不明	10.7	1.0	1.0	
46	5面	-	木製品	用途不明	14.8	6.2	0.5	
47	5面	-	木製品	用途不明	7.4	3.2	0.5	穿孔
48	5面	-	木製品	底板	7.0	2.2	0.3	
49	5面	-	木製品	用途不明	13.4	4.2	1.3	
50	5面	-	木製品	用途不明	-	[14.6]	0.1	
51	5面	-	木製品	箱物部材	22.8	1.7	0.5	

北条時房・顕時邸跡 遺物法量表

№	遺構		種別		計測値 単位:cm			備考
					口径・長	底径・幅	器高・厚	
図37 5面出土遺物(2)								
52	5面	-	木製品	形代?	24.8	1.4	1.8	
53	5面	-	木製品	籠状製品	22.4	1.1	0.7	
54	5面	-	木製品	籠状製品	22.5	1.0	0.7	
55	5面	-	木製品	用途不明	20.0	[2.4]	0.5	焦げ痕
56	5面	-	木製品	用途不明	21.5	1.6	1.2	
57	5面	-	木製品	箸	[17.5]	0.6	0.5	
58	5面	-	木製品	箸	20.3	0.5	0.5	
59	5面	-	木製品	箸	20.0	0.6	0.4	
60	5面	-	木製品	箸	20.1	0.6	0.6	
61	5面	-	木製品	箸	19.9	0.6	0.5	
62	5面	-	木製品	箸	21.8	1.1	0.4	
63	5面	-	木製品	箸	23.4	0.5	0.5	
64	5面	-	木製品	箸	23.5	0.5	0.5	
65	5面	-	木製品	丸木杭	[15.6]	2.9	2.2	焦げ痕
66	5面	-	木製品	丸木杭	[14.9]	2.6	2.5	
67	5面	-	木製品	丸木杭	[12.5]	2.5	2.5	
68	5面	-	木製品	高下駄の歯	[9.3]	16.6	2.7	



1. I区1面全景
(西から)



2. II区1面全景
(西から)



3. II区1面遺構47溝
(北から)

4. II区1面全景 (東から)



5. II区2面全景 (西から)





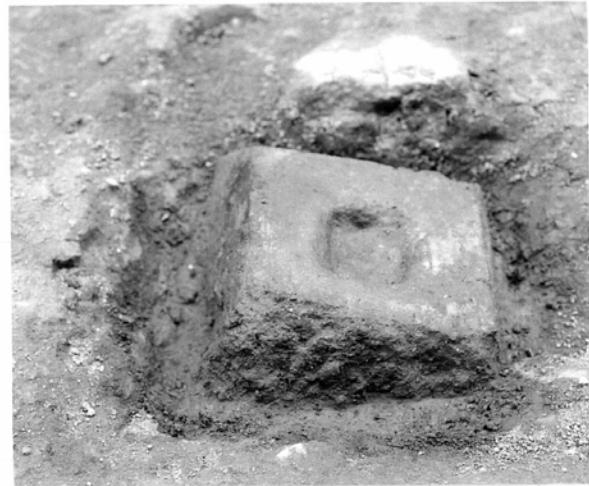
1. I区2面遺構1 (かわらけ溜り)



2. I区2面同



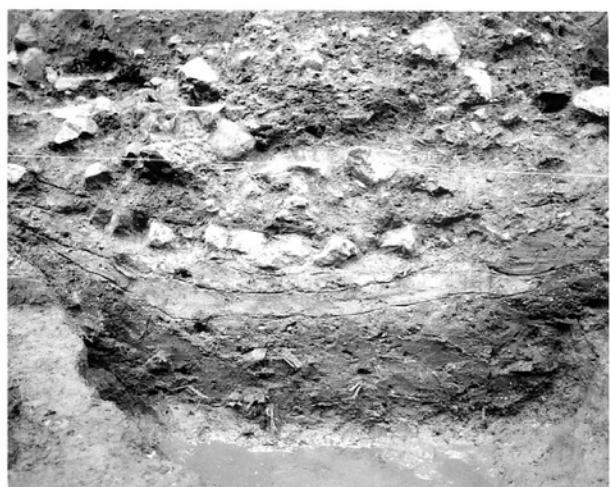
3. I区2面同



4. I区2面遺物出土状況 (北から)



5. I区5面遺構18 (北から)



6. 同堆積土層 (南から)



1. I区2面全景（西から）



2. II区2面全景（西から）



3. I区2面土丹検出状況（西から）



4. I区4面全景（西から）



1. II区4面遺構65・66・69（西から）



2. II区4面遺構67・68（東から）



3. II区4面遺構67・68（南から）



4. II区4面遺構67・68（東から）



1. I区5面全景 (東から)



2. I区5面柱穴検出状況 (南から)

3. II区5面
西側部分 (東から)



4. I区5面
板材・杭検出状況
(東から)





1. II区4面遺構65・66・69 大路側溝



2. 大路側溝部分



3. ▲遺構69西壁板検出状況（北から）

5. ▼遺構65・66・69（東から）



4. ▲大路側溝部分

5. ▼堆積土層（西から）





1. I区5面全景（東から）



2. II区5面全景（東から）



3. I区5面（西から）



3. II区地山面（東から）



1. 2面銅製品出土状況（東から）



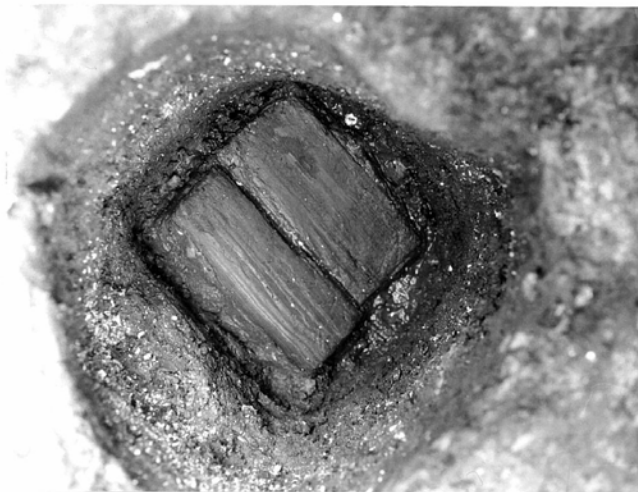
2. 3面かわらけ出土状況（南から）



3. 5面木製品出土状況（南から）



4. 5面白磁口元皿出土状況（北から）



5. 遺構6礎盤出土状況（東から）



6. 側溝出土の地覆材

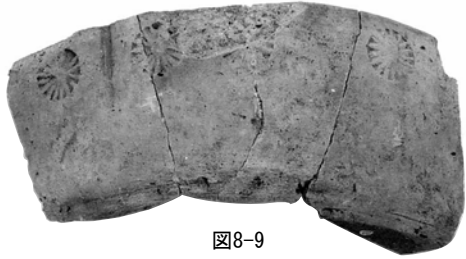


图8-9



图8-7



图8-8



图18-142



图20-254



图20-253

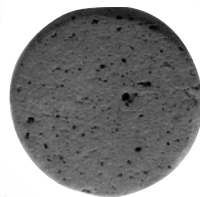


图22-10

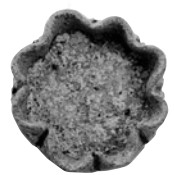


图22-1



遺構69



图15-36



图8-3



遺構66

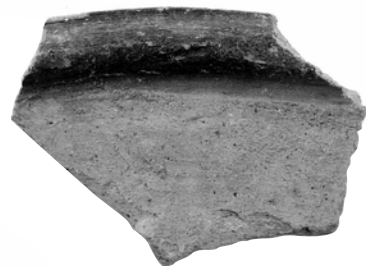


图29-75

出土遺物 (1)



图8-6



图8-4



图8-5



图8-1



图36-43



图37-52



图36-35



图16-56



图27-24

图35-13



图28-68



图28-71



图28-72



图28-74



图25-2



图29-90



图21-268



图29-88



图27-25

出土遺物 (2)

1. はじめに

北条時房・顕時邸跡において行われた発掘調査で、出土遺物等から 13 世紀中葉～14 世紀と考えられている溝状の遺構が検出された。以下に、この溝状遺構より採取された土壌試料について花粉分析を行い、当時の遺跡周辺の古植生について検討した。

2. 試料と分析方法

試料は、調査Ⅱ区南壁に認められた溝状の遺構の西壁（試料 No. 1, 2）および東壁（試料 No. 3～6）より採取された 6 試料である。各試料について、試料 No. 1 は黒褐色の泥炭質粘土で、暗褐色粘土の小塊が多く混入している。試料 No. 2 はかたくしまったオリーブ緑色の粘土で、粘性が高く、小空隙が散在している。試料 No. 3 は黒灰色の粘土混じり砂で、微小貝片が散在している。試料 No. 4 は暗褐色粘土で、下位層の塊が散在しており、一部は火炎状に認められる。試料 No. 5 は粘性の高い黒～黒褐色の砂質粘土である。試料 No. 6 は粘性の高いオリーブ緑色の粘土である。時期については出土遺物から、13 世紀中葉～14 世紀と考えられている。花粉分析はこれら 6 試料について以下のような手順にしたがって行った。

試料（湿重約 5g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え 20 分間湯煎する。水洗後、0.5mm 目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に 46%のフッ化水素酸溶液を加え 20 分間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸 9 : 1 濃硫酸の割合の混酸を加え 3 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行い、その際サフランインにて染色を施した。

3. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 25、草本花粉 22、形態分類を含むシダ植物胞子 3 の総計 50 である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表 1 に、それらの分布を図 1 に示したが、試料 No. 2, 4, 5 については得られた樹木花粉総数が非常に少なく分布図として示すことができなかった。なお分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子・藻類は全花粉胞子総数を基数として百分率で示してある。また、表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検鏡の結果、試料 No. 1 ではスギが最も多く、出現率は 40%に達している。次いでコナラ属アカガシ亜属が 21%を示して多く検出されている。その他では、マツ属複維管束亜属（アカマツ、クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）やコナラ属コナラ亜属が 5%前後得られている。また、草本類ではイネ科が最も多く、出現率は 50%近くを示している。その他、カヤツリグサ科、アカザ科ーヒユ科、ヨモギ属が 5%前後観察されている。

試料 No. 2 において、少ない樹木花粉ではニヨウマツ類が最も多く、草本花粉ではイネ科が最も多く検出されている。

試料 No. 3 ではニヨウマツ類とコナラ亜属が多く検出されており、出現率は 25%前後を示している。次いで約 14%のスギが多く観察されており、その他ではアカガシ亜属やエノキ属ームクノキ属が 5%前後を示し

ている。草本類ではイネ科が圧倒的に多く、出現率は 60%を超えている。その他ではアカザ科ーヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属が出現率はそれほど高くはないが個数的にはやや多く観察されている。

試料 No. 4 からは花粉やシダ植物胞子はまったく観察されなかった。

試料 No. 5 においても花粉や胞子の検出数は少なく、その中ではイネ科と単条型胞子がやや目立って得られている。

試料 No. 6 においても検出できた花粉化石数は少なく、分布図については参考程度にみて頂きたい。樹木花粉で最も多く観察されたのはアカガシ亜属で、コナラ亜属、シイノキ属ーマテバシイ属、スギ、クマシデ属ーアサダ属が続いている。また、草本類ではイネ科が最も多く検出されており、その他では単条型のシダ植物胞子が多産している。

4. 遺跡周辺の古植生

先にも記したが、分析試料の堆積時期は 13 世紀中葉～14 世紀で、試料 No. 6～試料 No. 1 の順に新しいと考えられており、これを基に北条時房・顕時邸跡周辺の古植生について検討した。

13 世紀中葉頃（試料 No. 6）の北条時房・顕時邸跡周辺の植生はアカガシ亜属やシイノキ属ーマテバシイ属を中心とした照葉樹林が成立していたと推測される。また、一部にはスギ林やコナラ亜属などの落葉広葉樹林も分布していたとみられる。

その後の 13 世紀中葉～14 世紀（試料 No. 3）の北条時房・顕時邸跡周辺の植生はニヨウマツ類やコナラ亜属の二次林が分布を広げ、スギ林も依然として一部に成立していたと推測される。一方、照葉樹林は大きく縮小したとみられる。この時期の草本類はイネ科が多産しており、このイネ科を中心にアカザ科ーヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属などの雑草類が広く生育していたと推測される。

14 世紀（試料 No. 1）の北条時房・顕時邸跡周辺はスギ林が分布を広げ、照葉樹林も再び林分を拡大したとみられる。また、依然としてイネ科、アカザ科ーヒユ科、ヨモギ属、タンポポ科などの雑草類が多くみられたことが推測される。

鎌倉市内においてこれまで多くの遺跡で花粉分析が行われてきた。その結果、鎌倉の森林植生は 13 世紀前半から後半にかけて大きく変わった、すなわちスギ、アカガシ亜属、シイノキ属ーマテバシイ属からマツ属複維管束亜属へと植生の交代があったことが明らかになってきた（鈴木, 1999）。上記した北条時房・顕時邸跡の 13 世紀中頃（試料 No. 6）では照葉樹林が優勢であり、13 世紀中葉～14 世紀（試料 No. 3）になってニヨウマツ類やコナラ亜属の二次林が拡大したと推測され、これはこれまでの結果を支持していると考えられる。一方、14 世紀頃と考えられる試料 No. 1 においてはスギ林が優勢であり、照葉樹林も再び分布を広げたと花粉分析結果から推測されており、ニヨウマツ類の二次林が広がった様相は示されていない。試料 No. 1 の土相は黒褐色の泥炭質粘土であるが、暗褐色粘土の小塊が多く混入していることから、古い時期の堆積物が混入している可能性も推察される。すなわち、試料 No. 1 にスギや商用樹が多いと推測されている 13 世紀前半以前の土壌が混入していたことも考えられ、試料 No. 1 から推測される植生については時期を含めさらに検討が必要と思われる。

引用文献

鈴木 茂(1999)神奈川県鎌倉市における鎌倉時代の森林破壊. 国立歴史民俗博物館研究報告, 81, 131-139.

表1 産出花粉化石一覽表

和名	学名	1	2	3	4	5	6
樹木							
マキ属	<i>Podocarpus</i>	3	-	-	-	-	-
モミ属	<i>Abies</i>	1	1	4	-	-	3
ツガ属	<i>Tsuga</i>	5	-	2	-	-	-
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	6	-	54	-	-	2
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	1	1	23	-	-	1
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	3	-	1	-	-	-
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	42	11	30	-	1	8
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T.-C.	3	-	1	-	-	-
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	1	-	1	-	-	-
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	-	2	-	-	-
クマシテ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	2	2	6	-	-	7
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	-	-	-	-	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	-	2	-	-	-
イヌブナ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	-	-	1	-	-	1
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	9	-	52	-	3	11
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	21	3	11	-	1	15
クリ属	<i>Castanea</i>	-	-	2	-	-	2
シイノキ属-マテバシイ属	<i>Castanopsis - Pasania</i>	3	2	-	-	2	9
ニレ属-ケヤキ属	<i>Ulmus - Zelkova</i>	1	-	2	-	-	3
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis-Aphananthe</i>	-	-	9	-	-	1
フウ属	<i>Liquidamber</i>	-	-	2	-	-	-
ウルシ属	<i>Rhus</i>	1	-	1	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	-	-	1
ウコギ科	Araliaceae	2	-	2	-	-	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	-	1	-	-	-

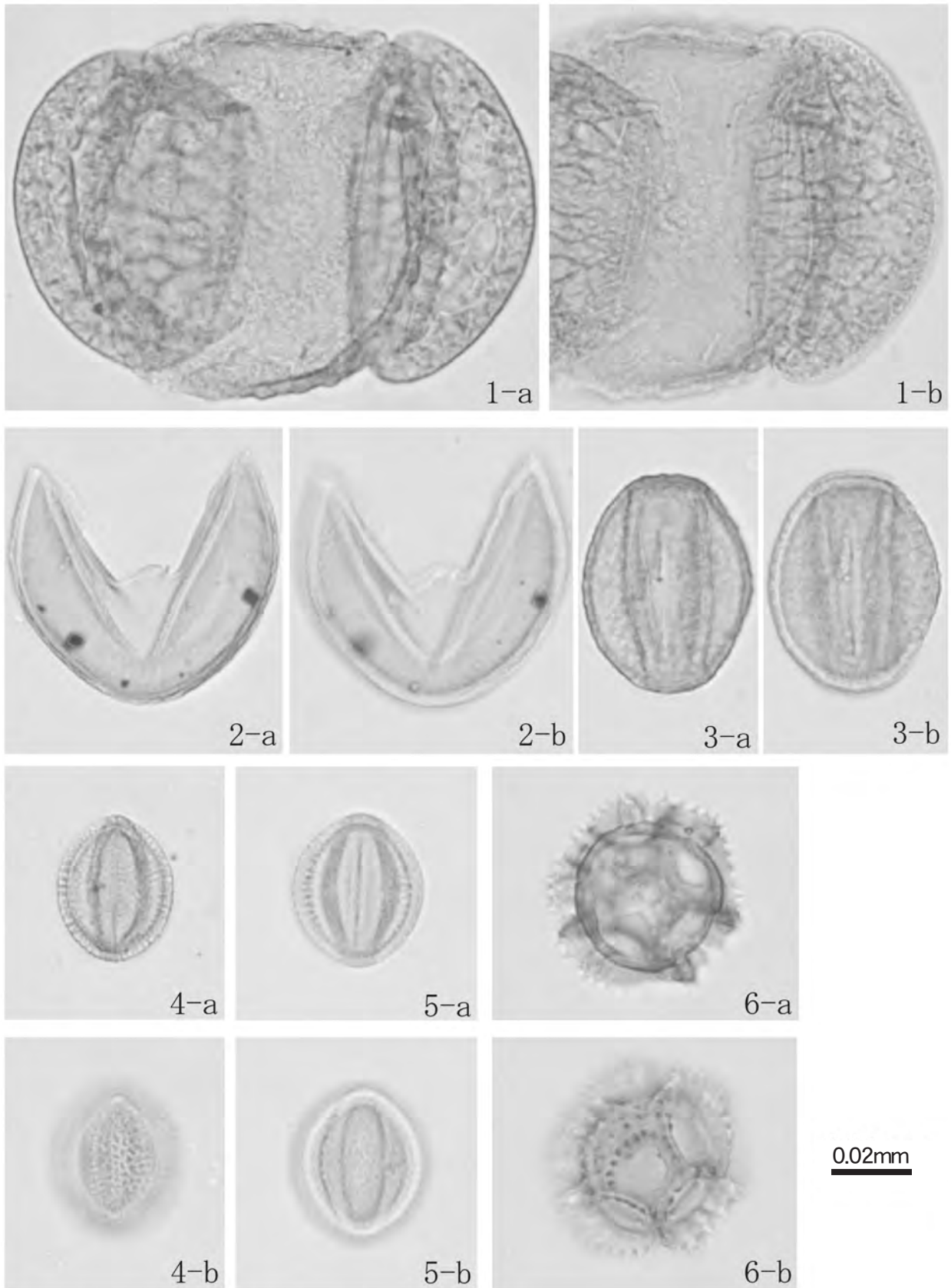
草本							
イネ科	Gramineae	232	45	854	-	12	34
カヤツリグサ科	Cyperaceae	32	5	14	-	3	8
ユリ科	Liliaceae	1	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	-	1	-	-	-
ギンギン属	<i>Rumex</i>	-	-	1	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	2	-	-	-	-	-
イタドリ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	-	-	2	-	-	-
他のタデ属	other <i>Polygonum</i>	2	-	-	-	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	-	-	1	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	18	4	93	-	2	5
ナデシコ科	Caryophyllaceae	5	1	1	-	-	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	-	4	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	5	-	32	-	-	3
ワレモコウ属	<i>Sanguisorba</i>	-	-	2	-	-	-
マメ科	Leguminosae	1	-	2	-	-	-
トウダイグサ科	Euphorbiaceae	2	1	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	4	-	-	-
アカネ属-ヤエムグラ属	<i>Rubia - Galium</i>	1	-	-	-	-	-
ベニバナ属	<i>Carthamus</i>	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	23	4	82	-	1	2
他のキク亜科	other Tubuliflorae	3	-	8	-	-	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	17	2	5	-	-	-

シダ植物							
ゼンマイ科	Osmundaceae	1	-	3	-	-	1
単条型孢子	Monolete spore	21	11	16	-	13	105
三条型孢子	Trilete spore	9	1	5	-	-	12

樹木花粉	Arboreal pollen	105	20	209	0	7	64
草本花粉	Nonarboreal pollen	344	62	1107	0	18	52
シダ植物孢子	Spores	31	12	24	0	13	118
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	480	94	1340	0	38	234

不明花粉	Unknown pollen	48	6	8	0	2	24

T.-C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す



図版1 北条時房・顕時邸跡の花粉化石

1 : マツ属複維管束亜属 PLC. SS 5151 試料3
 2 : スギ PLC. SS 5152 試料3
 3 : コナラ属コナラ亜属 PLC. SS 5148 試料3

4 : アブラナ科 PLC. SS 5150 試料3
 5 : ヨモギ属 PLC. SS 5149 試料3
 6 : タンポポ科 PLC. SS 5153 試料3

1. はじめに

北条時房・顕時邸跡において行われた発掘調査で、出土遺物等から 13 世紀中葉～14 世紀と考えられている溝状の遺構が検出された。その覆土層について水田層が存在するか否かを検討する目的でプラント・オパール分析を行った。以下にその結果・考察を示す。

2. 試料と分析方法

試料は、調査Ⅱ区南壁に認められた溝状の遺構の西壁（試料 No. 2）および東壁（試料 No. 5）より採取された 2 試料である。試料の土相について、試料 No. 2 はかたくしまったオリブ緑色の粘土、試料 No. 5 は粘性の高い黒～黒褐色の砂質粘土である。プラント・オパール分析はこの 2 試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約 1g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30%の過酸化水素水を約 20～30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが 300 個に達するまで行った。

3. 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求め（表 1）、それらの分布を図 1 に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料 1g 当りの検出個数である。

検鏡の結果、両試料ともイネのプラント・オパールは観察されなかった。最も多く得られたのはネザサ節型で、試料 No. 2 では 100,000 個を超えている。次いでウシクサ族が多く、検出個数は 40,000 個前後である。その他ではヨシ属とキビ族が試料 No. 5 において 10,000 個を超えており、クマザサ属型は 8,000 個前後を示している。また、シバ属が若干観察されている。

4. 北条時房・顕時邸跡周辺のイネ科植物

上記したようにイネのプラント・オパールは検出されず、試料 No. 2 や試料 No. 5 層準における稲作について、その可能性は低いと判断される。

遺跡周辺のイネ科植生について、ネザサ節型が多く検出されていることから、北条時房・顕時邸跡周辺の空き地や花粉分析において成立が推測されているニヨウマツ類の二次林や照葉樹林といった森林の林縁部など

表 1 試料 1g 当たりのプラント・オパール個数

試料 番号	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
2	108,100	8,100	5,800	6,900	1,200	4,600	39,100	32,200
5	6,800	7,900	2,600	10,600	1,300	11,900	46,300	30,400

にアズマネザサとみられるネザサ節型のササ類が多く生育していたと推察される。また、ウシクサ族（ススキ、チガヤなど）も同じような所での生育が推測され、ススキーアズマネザサ群集といった草本植生が成立していたとみられる。また、キビ族も同様のところに分布していたと推察される。一方、ヨシ属は溝内に生育していたと推測される。

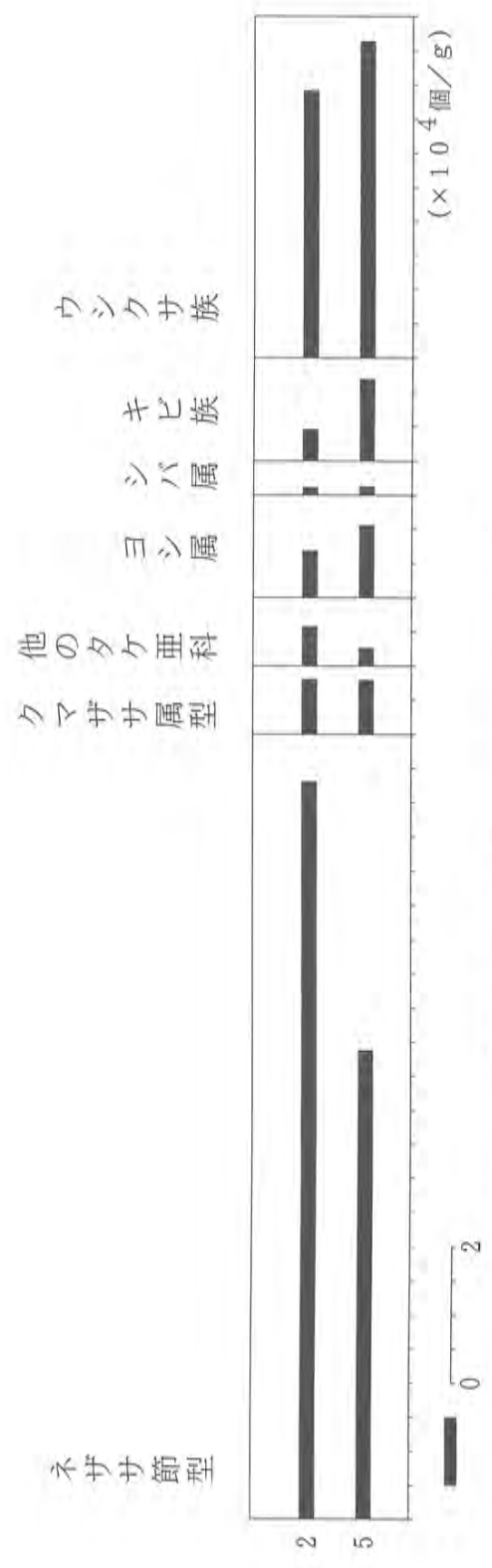
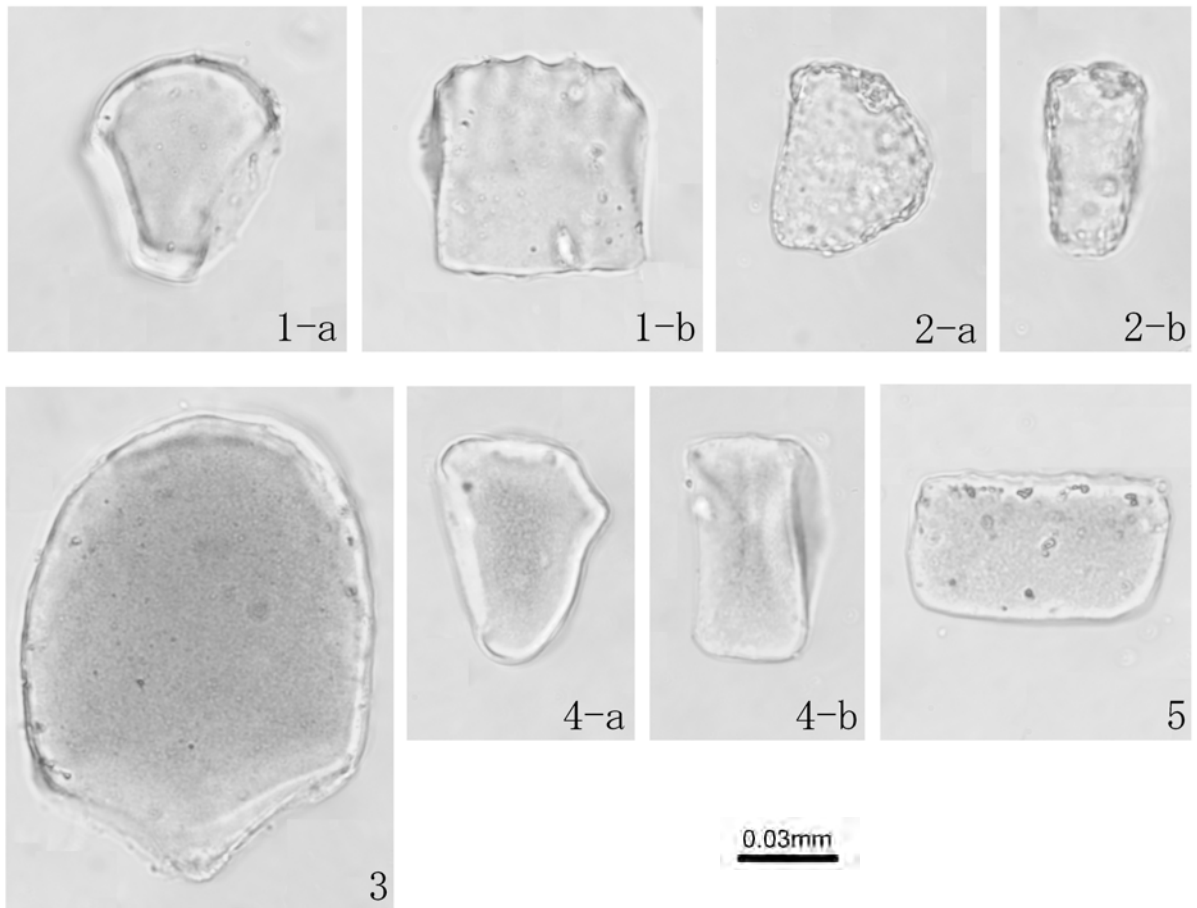


図1 北条時房・顕時邸跡のプラント・オパール分布図



図版 北条時房・顕時邸跡のプラント・オパール

- 1 : ネザサ節型 (a : 断面、 b : 側面) 試料 No. 5
- 2 : クマザサ属型 (a : 断面、 b : 側面) 試料 No. 5
- 3 : ヨシ属 (断面) 試料 No. 5
- 4 : ウシクサ族 (a : 断面、 b : 側面) 試料 No. 5
- 5 : キビ族 (側面) 試料 No. 5

大倉幕府跡 (No.253)

—雪ノ下三丁目 637 番 4 地点—

例言

1. 本報は、大倉幕府跡（No.253）内の鎌倉市雪ノ下三丁目 637 番 4 における個人専用住宅の新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。調査面積は 68.00 m²。
2. 発掘調査は、平成 18 年 11 月 21 日から平成 19 年 1 月 19 日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査体制は次の通りである。
調査担当者 熊谷満
調査員 伊藤博邦
作業員 奥山利平、渡辺輝彦、中須洋二、片山直文、堀住稔、鈴木啓之
4. 現地調査での写真撮影は熊谷が行った。
4. 本報作成にあたっての資料整理参加者、および分担は次の通りである。
整理参加者 熊谷満、降矢順子、押木弘己、伊藤博邦、岡田慶子、加藤千尋、三浦恵
遺物分類：降矢順子 遺物実測・トレース：伊藤博邦、岡田慶子、三浦恵
遺物写真撮影：押木弘己 遺構図面トレース、図版作成、原稿執筆：熊谷、編集：熊谷、降矢
5. 本報の凡例は次の通りである。
 - ・図版縮尺 遺構図：1/60、遺物図：1/3（古銭 1/2）
 - ・遺構図版 水糸高は海拔標高値を示す。
 - ・遺物図版 ー・ーおよび は釉薬の範囲、←・→は使用痕の範囲を示す。
 - ・遺物法量表 () は復元数値、[] は残存数値を示す。
6. 本報記載の「土丹」はシルト質凝灰岩、「鎌倉石」は粗粒凝灰岩を示す。
7. 現地調査から本報作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関に御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）
齋木秀雄（有限会社鎌倉遺跡調査会）、松尾宣方、社団法人鎌倉市シルバー人材センター
8. 本調査に関わる出土遺物、図面、写真などの資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目次
本文目次

第1章 遺跡の立地と環境	209
第2章 調査の概要	211
第3章 検出された遺構と遺物	214
第4章 まとめ	243

挿図目次

図1 調査地点周辺	209	図15 第3面遺構 58、67、71、77、51、90、 78、55、65、84 出土遺物	226
図2 調査区配置図	211	図16 第3面遺構外出土遺物(1)	227
図3 堆積土層	212	図17 第3面遺構外出土遺物(2)	228
図4 第1面全体図	215	図18 第4A面全体図	229
図5 第1面出土遺物	216	図19 第4A面遺構91 出土遺物(1)	230
図6 第2面全体図	217	図20 第4A面遺構91 出土遺物(2)	231
図7 第2面遺構微細図	218	図21 第4A面遺構91 出土遺物(3)	232
図8 第2面遺構1-b、2 出土遺物	219	図22 第4A面遺構91 出土遺物(4)	233
図9 第2面遺構6、7、3 出土遺物	220	図23 第4A面遺構96 出土遺物(1)	234
図10 第2面遺構5 出土遺物	221	図24 第4A面遺構96 出土遺物(2)	235
図11 第2面遺構外出土遺物	222	図25 第4A面遺構96(3)、第4B面遺構 106、128 出土遺物	236
図12 第3面全体図	223	図26 第4B面全体図	237
図13 第3面遺構微細図	224	図27 第4B面遺構断面図	238
図14 第3面遺構7-b、92、26、56・66、 57 出土遺物	225		

表目次

表1 遺物法量表(1)	239	表4 遺物法量表(4)	242
表2 遺物法量表(2)	240	表5 遺物構成表(5)	245
表3 遺物構成表(3)	241		

写真図版目次

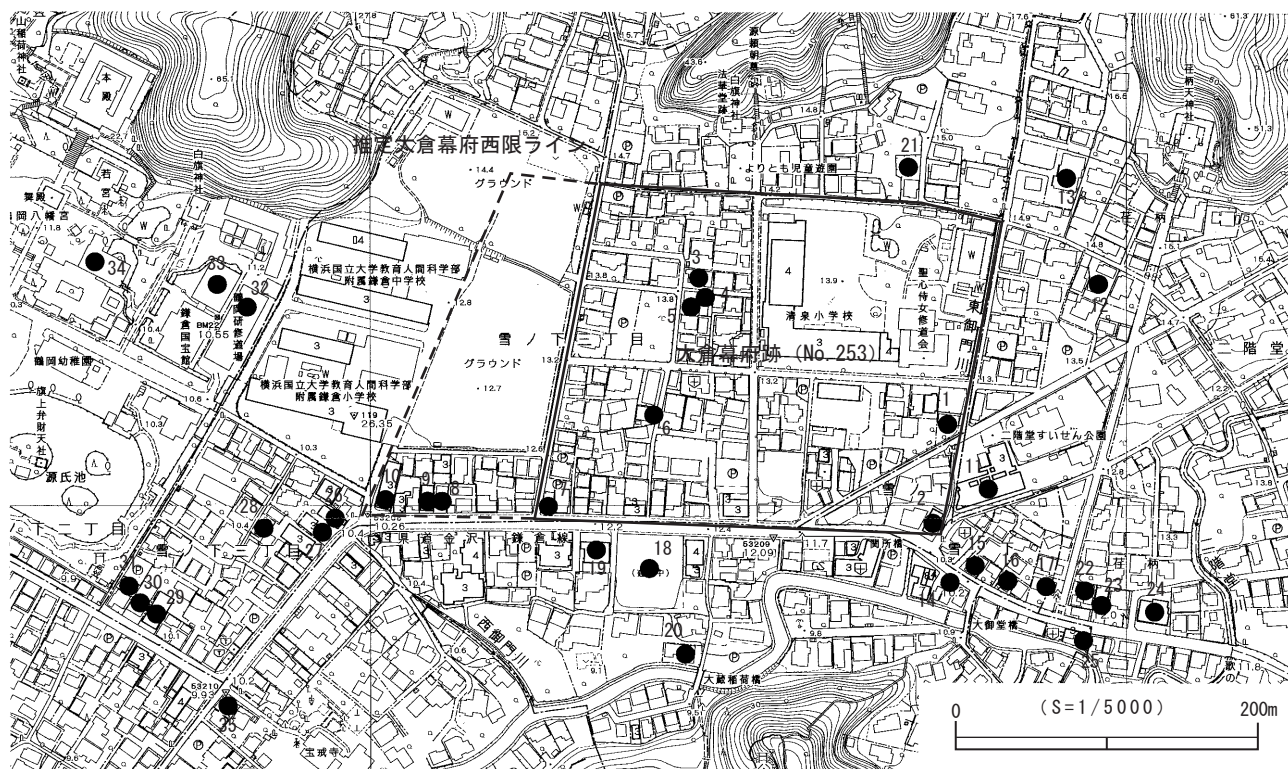
図版1 1. I区第1面全景(南から)	246	図版2 1. I区第2面遺構3	247
2. I区第2面全景(東から)		2. I区第2面遺構5上層(西から)	
3. I区第2面遺構2・3・5(西から)		3. I区第2面遺構5かわらけ 重なり状況(東から)	
4. I区第2面遺構2上層(西から)		4. I区第2面遺構5中層(西から)	
5. I区第2面遺構2下層(西から)		5. I区第2面遺構5下層(西から)	
6. I区2面遺構2かわらけ 重なり状況(北東から)		6. I区第2面遺構5下層かわらけ 重なり状況(東から)	
7. I区第2面遺構5・6(西から)		7. I区第2面遺構5掘り方(西から)	
8. I区第2面遺構7(西から)		8. I区第3面全景(南から)	

図版 3	1. I区第3面礎石列（北から）-----	248	図版 4	1. I区調査区北壁堆積土層 -----	249
	2. I区第3面遺構7-b（西から）			2. I区第4A面遺構91 弓形出土状況（南西から）	
	3. I区第3面遺構7-b かわらけ出土状況（北から）			3. II区第4A面全景（南から）	
	4. I区第3面遺構92（西から）			4. II区第4A面遺構96 かわらけ出土状況（北から）	
	5. I区第3面遺構56（西から）			5. II区調査区北壁堆積土層	
	6. I区第3面遺構84（北から）			6. I区第4B面全景（北から）	
	7. I区第3面調査風景（南東から）			7. II区第4B面全景（南から）	
	8. I区第4A面全景（南から）			8. II区第4B面遺構138（南西から）	
図版 5	出土遺物 -----	250			
図版 6	出土遺物 -----	251			
図版 7	出土遺物 -----	252			
図版 8	出土遺物 -----	253			

第1章 遺跡の立地と環境

本調査地点は鎌倉市雪ノ下三丁目637番4に所在する、大倉幕府跡（No.253）の一地点である。大倉一帯は東西約800m、南北約500mの谷底平野もしくは山麓平野であり、近世以降は大倉耕地とも呼ばれる耕作地となっていた。鎌倉における低地の中でも比較的早い段階から乾陸化していたことが推測されており、周辺の遺跡からは弥生時代中期後半以降の集落跡が多数検出されている。

『吾妻鏡』によると、治承四年（1180）10月6日に鎌倉に入った源頼朝は、父義朝の旧邸跡（現在の寿福寺の所）に自らの新邸を造営しようとしたものの土地が狭く、すでに岡崎義実によって義朝の菩提を弔う堂が建てられていたこともあって大倉郷のこの地に新邸を造営することになったとする。およそ二ヶ月後の12月12日には新邸が完成し「移徙之儀」が行われたが、当初の建物は山ノ内荘の知家事兼道邸宅を移築したものであったといい、養和元年（1181）6月に新御所が完成している記事が見られることから、頼朝の居住後も整備は順次進められていたものであろう。以来頼家、実朝に続く源氏三代の政務がここで執り行われた。御所は実朝死後、承久元年（1219）12月24日の火災で全焼しているが、『海道記』には貞応二年（1223）に鎌倉を訪れた筆者が御所について書き記しているので、御



大倉幕府跡 (No. 253)

1. 本調査地点
2. 雪ノ下大倉耕地569番1『大倉幕府周辺遺跡群雪ノ下大倉耕地569番1地点発掘調査報告書』1990
3. 雪ノ下三丁目701番3『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21(第1分冊)』2005
4. 雪ノ下三丁目701番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21(第1分冊)』2005
5. 雪ノ下三丁目701番14『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21(第1分冊)』2005
6. 雪ノ下三丁目651番8外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15(第2分冊)』1999
7. 雪ノ下三丁目618番4『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18(第1分冊)』2002
- 大倉幕府周辺遺跡群 (No. 49)
8. 雪ノ下三丁目607番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20(第2分冊)』2004
9. 雪ノ下三丁目607番ほか『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10(第1分冊)』1994
10. 雪ノ下三丁目606番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9(第3分冊)』1993
11. 二階堂字在柄38番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9(第2分冊)』1993
12. 二階堂字在柄27番3の一部『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22(第1分冊)』2006
13. 二階堂字在柄58番4外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18(第1分冊)』2002
14. 雪ノ下四丁目567番7『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20(第2分冊)』2004
15. 雪ノ下大倉耕地562番16『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17(第2分冊)』2001
16. 雪ノ下天神前562番29『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12(第1分冊)』1996
17. 雪ノ下大倉耕地565番4『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』1991
18. 雪ノ下四丁目581番5『大倉幕府周辺遺跡発掘調査報告書』2007
19. 雪ノ下四丁目620番5『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14(第2分冊)』1998/『大倉幕府周辺遺跡群—雪ノ下四丁目620番5地点—』1999
20. 雪ノ下四丁目580番10ほか『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17(第2分冊)』2001

大倉幕府北遺跡 (No. 193)

21. 西御門二丁目756番6・10『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21(第1分冊)』2009
- 横小路周辺遺跡 (No. 259)
22. 二階堂字在柄10番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』2003
23. 二階堂字在柄10番6ほか『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16(第2分冊)』2000
24. 二階堂字在柄9番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』1990
25. 雪ノ下五丁目557番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14(第2分冊)』1998
- 政所跡 (No. 247)
26. 雪ノ下三丁目965番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8』1992
27. 雪ノ下三丁目966番1『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8』1992
28. 雪ノ下三丁目970番2外『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15(第2分冊)』1999
29. 雪ノ下三丁目987番1・2『政所跡』1991
30. 雪ノ下三丁目988番『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9(第3分冊)』1993
31. 雪ノ下三丁目989番4『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17(第1分冊)』2001
- 鶴岡八幡宮旧境内 (No. 56)
32. 研修道場用地『研修道場用地発掘調査報告書』1983
33. 国宝館収蔵庫用地『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』1985
34. 直会殿用地『直会殿用地発掘調査報告書』1983
- 北条高時邸跡 (No. 281)
35. 小町三丁目426番3『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12(第1分冊)』1996

図1 調査地点周辺

所は再建されていたらしい。その後、御所は嘉禄元年（1225）北条泰時によって宇津宮辻子辺へと移転が行われ、嘉禎二年（1236）には若宮大路東頼へとさらに移転されている。

「大倉」の名は、『吾妻鏡』治承四年（1180）12月12日条に見えるのが史料上の初見であり、大倉郷は律令制下の郷名ではなく幕府公領としての郷と推測されている。『攬勝考』では、大倉郷の群域を鶴岡八幡宮から東は朝夷奈切通まで、南は滑川、北は大蔵山の麓瑞泉寺までを境とする広域を指すとす。嘉禎元年（1235）および宝治元年（1247）には法華堂前で火事があり、いずれも人家数十軒が焼失している記事が見られる。また、建長三年（1251）12月3日条に、商売を営んでよい所として、大町・小町・米町・亀谷辻・和賀江・気和飛坂山上とともに「大倉辻」の名も見え、幕府移転後は民衆も多く居住する商業地域として栄えたようである。その後この地は、南北朝期には円覚寺へ、戦国期には建長寺へ寄進され、16世紀末徳川領になってからは雪ノ下村の小名として「大倉」の名を残している。近代には広く耕作地となっていたようであるが、金沢鎌倉街道沿いには建物が建ち並び、商売を生業とする住民が多く住んでいたという。

本調査地点周辺ではこれまで多くの発掘調査が行われており、その主な地点を図1に示した。ただし、大倉幕府域と推定される範囲に限れば、調査例はそれほど多くない。最も近い地点2では、7世紀頃に埋没した流路のほか、中世後期から近世にかけての礎石建物や南北溝などを検出しており、礎石建物は関取場に関連するものである可能性が示唆されている。地点3,4,5では、13世紀初頭から15世紀前半に至るまで11面にも及ぶ遺構面に、掘立柱建物跡をはじめとする多種多様な遺構群を検出している。地点6は掘削深度規定により基盤層まで調査が及ばなかったものの、14世紀代の遺物を伴う良好な土丹地業面を検出しており、道路あるいは通路遺構とも推測されている。地点7では、14世紀後半以降の六浦路と推定される道路および側溝のほか、それを遡る年代となる断面V字形の東西溝も検出されている。出土遺物が弥生土器片2点のみであるため詳細な年代は不明であるが、覆土の特徴は地点19検出の溝9に近似するもので、溝9は平安時代後～末期に属する可能性が指摘されている。地点8,9,10では13世紀初頭～15世紀代にかけての遺構群が検出されており、地点8～10まで繋がる中世前期の東西溝のほか、地点10では塀あるいは柵と思われる南北柱穴列も検出されており、それぞれ幕府域の南限・西限を示すものとして期待される。また、幕府推定域外ではあるが、本調査地点に最も近い11地点では、鎌倉時代初期から江戸時代以降に至るまで濃密な遺構群が展開しており、二階堂大路の側溝と思われる溝やそれに沿う柱穴列、東御門川旧流路やそれに沿う道路状遺構のほか、それらに囲まれた平坦部分からは掘立柱建物跡12棟・井戸14基などが検出されている。

<引用・参考文献>

白井永二編『鎌倉事典』1992年 東京堂出版

三浦勝男編『鎌倉の地名由来辞典』2005年 東京堂出版

鎌倉市教育委員会編『鎌倉市文化財資料第7集 としよりのはなし』第五刷1990年（初版1971年）

鎌倉市教育委員会

第2章 調査の概要

1. 調査の経過と方法

本調査は雪ノ下三丁目637番4地点における、個人専用住宅の建築に伴う埋蔵文化財発掘調査である。現地調査期間は平成18年11月21日から平成19年1月19日までのおよそ2ヶ月で、調査面積は約68.00 m²。現地表の標高は約12.5 mを測る。掘削に伴う残土を場内処理する都合から調査区を東西に区分し、便宜上西側をⅠ区、東側をⅡ区と呼称した。調査はⅠ区から実施することとし、まず重機により表土を除去することから始められ、その後はすべて人力による作業となった。調査の結果4枚の遺構面が検出され、各面において遺構を掘削後、測量・写真撮影などの記録保存を行った。Ⅰ区調査終了後に重機による埋め戻しを行い、その後同様の手順でⅡ区の調査を行った。

測量に際しては、鎌倉市四級基準点E151 (X=-75326.503,Y=-24339.083) E152 (X=-75336.977,Y=-24367.106) を基に、日本測地系(座標系AREA 9)の国土座標軸に準じたグリッドを設定した。このため本報で用いている方位標の北は真北を示す。世界測地系第IX系の国土座標値については、日本測地系 X=-75310,Y=-24310 が X=-74953.3762,Y=-24603.4226 へ、日本測地系 X=-75310,Y=-24330 が X=-74953.3752,Y=-24623.4222 へ算出された数値を図2に示した。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No.53209 (標高12.109 m) を基に移設した。

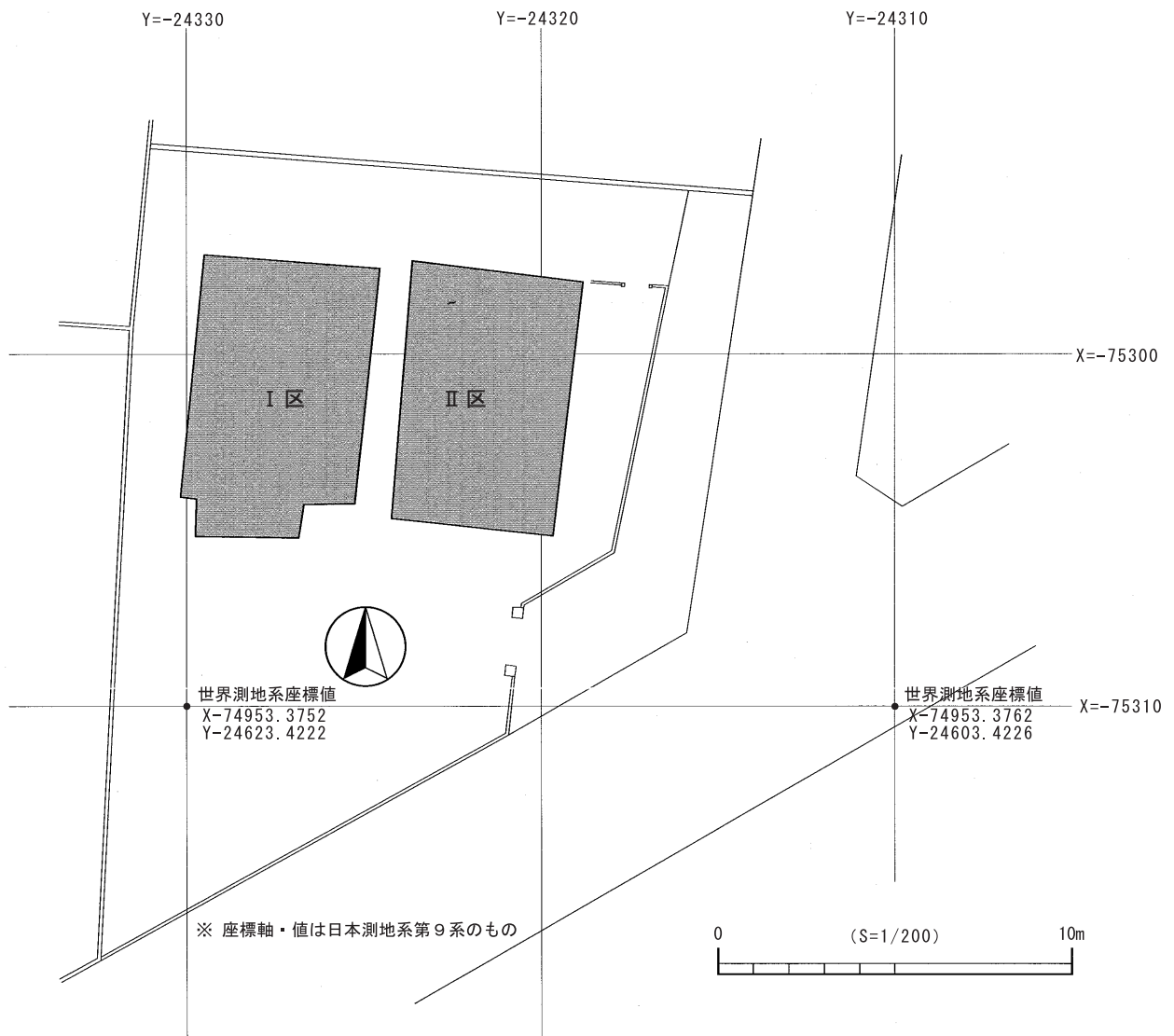
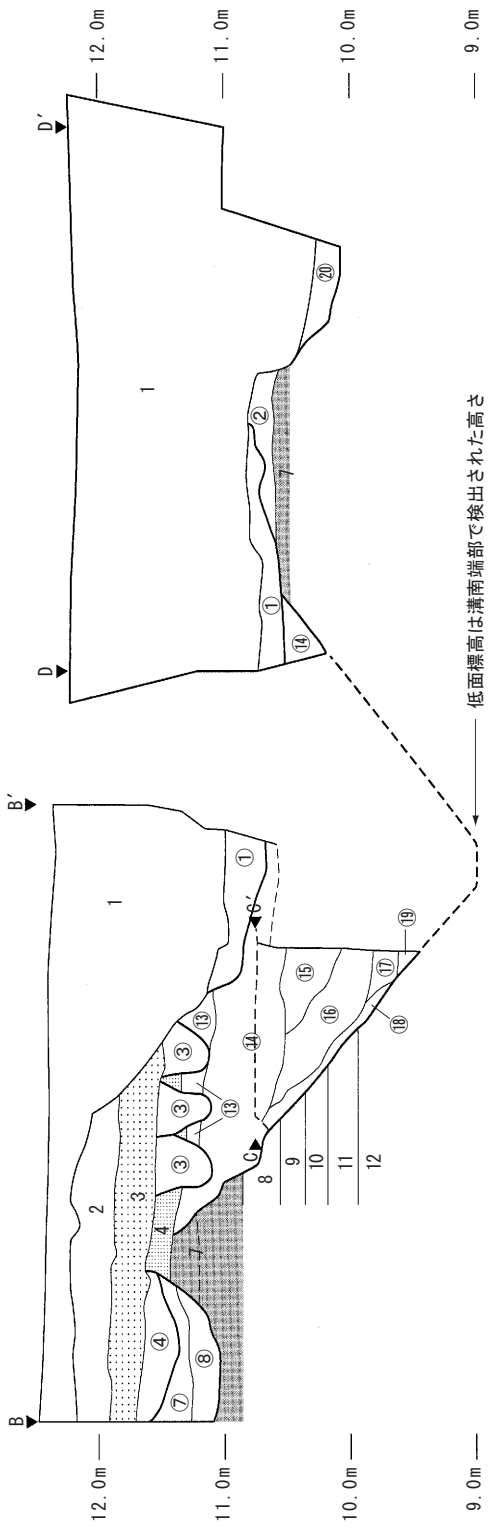
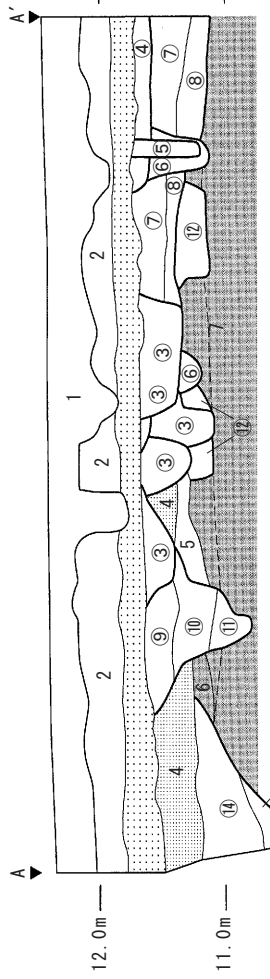


図2 調査区配置図

1. 暗褐色土 表土。現代擾乱。
2. 暗褐色土 砂性帯びる。近世～近代耕作土。
3. 暗褐色土 土丹粒・小ブロックを多く含む。かわらけ細片をやや多く含む。中世遺物含む。第1面
4. 暗褐色土 土丹粒・小ブロックをやや多く含む。若干砂性を帯びる。縮まりあり。第2面
5. 暗褐色粘質土 4層と7層の混交土。縮まりあり。
6. 黄白色粘質土 黒褐色粘質土混入。縮まり強い。中世基盤層か？
7. 黒褐色粘質土 黄白色シルト粒を少量含む。縮まり強い。中世基盤層。第4面
8. 明褐色粘質土 黒褐色粘質土少量混入。縮まりあり。
9. 黄白色粘質土 青灰色粘質土少量混入。縮まり縮まる。
10. 青灰色粘質土 黒褐色粘質土少量混入。強固に縮まる。
11. 青灰色粘質土 黒褐色粘質土少量混入。縮まり縮まる。
12. 青灰色粘質土 黒褐色粘質土少量混入。強固に縮まる。



- ①暗灰褐色粘質土 土丹粒を微量含む。下に暗茶褐色粘質土混入。縮まりやや弱い
- ②暗褐色土 4層に近似。
- ③暗褐色土 土丹小ブロックを多く含む。
- ④暗褐色土 炭化物を多く含む。かわらけ片を多く含む。土丹粒を少量含む。
- ⑤暗褐色土 ④層に近似。
- ⑥暗褐色土 ③層に近似。
- ⑦暗褐色土 土丹粒をやや多く含む。褐鉄混入し、粘性帯びる。
- ⑧黒褐色粘質土 7層に近似。褐鉄混入し縮まりやや弱い。
- ⑨暗褐色土 ③層に近似。
- ⑩暗褐色土 ③層に近似。

- ⑪黒褐色土 7層に近似。褐鉄多く含む。
- ⑫黒褐色粘質土 7層に近似。黄白色粘質土ブロック・黄白色シルト粒混入。縮まりあり。
- ⑬暗褐色土 土丹小ブロックを少量含む。粘性帯び、縮まりあり。
- ⑭暗褐色粘質土 土丹粒・小ブロックを少量含む。炭化物微量含む。縮まりあり。
- ⑮暗茶褐色粘質土 腐植土質。土丹粒を微量含む。
- ⑯黒褐色土 土丹粒・小ブロックをやや多く含む。縮まりあり。
- ⑰暗茶褐色粘質土 腐植土質。縮まり弱い。
- ⑱青灰色粘質土 10層に近似。黒褐色粘質土混入。粘性強い。
- ⑲黒褐色粘質土 土丹粒を少量含む。
- ⑳黒褐色粘質土 7層に近似。土丹粒・小ブロック少量含む。

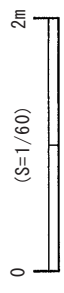


図3 堆積土層

2. 堆積土層 (図3)

厚さ約30 cmの表土層(1層)を除去すると、標高約12.1 mで近世以降の耕作土層(2層)上面が現れる。明治前期の迅速測図では当地域には畑との表記が見られ、この頃には耕作地として利用されていたようである。

厚さ約30 cmを測る耕作土の下層は、土丹粒・小ブロックを多く含む暗褐色土により構成される中世遺物包含層(3層)が堆積する。近世以降の耕作により削平を受けているものと思われ、上面は生活面と認められるものではなかったが、これを第1面とした。面標高約11.8 mを測る。

第1面より約20 cm掘り下げると、土丹粒・小ブロックをやや多く含む砂性を帯びた暗褐色土(4層)となり、この上面を第2面とした。面標高約11.6 mを測る。

第2面より約20 cm掘り下げると、北半部では中世基盤層が露出し、南半部にはローム土を主体とし土丹粒を含む橙色土が基盤層上に地業されており、これを第3面とした。面標高は約11.4 mを測る。

第3面の地業層ははごく薄いものであり、最大でも約10 cmの厚さであった。この地業層を除去すると、全面的に黒褐色粘質土(7層)が現れる。これが中世基盤層となる自然堆積層であり、第4面とした。面標高約11.3 mを測る。第4面では中世遺構のほかにこれを遡る時代の遺構も確認され、検出面としては同一面となるものの、中世遺構を4 A面、それ以前の遺構を4 B面に区分した。

第4面以下の堆積層については、遺構の壁面を利用して堆積層の確認を行った。計6層の自然堆積層を確認することができ、10層以下の粘質土層はグライ化し青味がかかった様子が認められる。

第3章 検出された遺構と遺物

ここでは各面で検出された主な遺構・遺物についての説明を加えていくこととする。I区東半以東は現代攪乱により標高約10.7 m以上が削り取られており、II区で平面的に検出できたのは第4面のみである。

第1面

近世耕作土を除去した中世遺物包含層の上面である。面標高は約11.8 mを測る。検出された遺構はすべて現代遺物を含む。既存建物の基礎痕跡と思われるピットのほか、I区東半以東は標高約10.7 mまで大きく削り取られ、窪地状を呈していた。この現代攪乱は、南を主軸とした場合の方位がN-169°-Eを指し、N-170°-Wを指す現在の東御門川流下方位に近い。東御門川の暗渠化工事に伴うものだろうか。

[出土遺物]

表土掘削から第1面までの掘り下げ時に出土した遺物のうち、中世に比定されるものを選別して図4-1～23に示した。1～14はかわらけ。5～10・13,14は手づくね成形で、10はコースターと呼称する極小型のもの。13,14は油煙が付着し、灯明皿に転用されている。15,16は常滑甕。17は山茶碗窯捏ね鉢。18は青磁蓮弁文碗。19は瓦器碗。20は管状土錘。21は砥石。仕上砥。22,23は銭。22は□□通寶。皇宋通寶のように思われるが、錆が多く判然としない。23は紹聖通寶。

第2面

土丹粒・小ブロックをやや多く含む暗褐色土で構成される。明瞭な地業面ではなかったが、やや砂質の生活面と認識している。本面からは溝1条、溝状遺構2条、かわらけ溜まりのほか、柱穴・土坑類をいくつか検出している。柱穴には底面に礎板を伴うものも検出されているが、配列は判らなかつた。

[遺構1-b]溝

I区東端部で検出され、調査区を南北に貫く。現代攪乱と重複しており平面的には第3面で検出されたものであるが、出土遺物の型式から本面へ帰属するものであることが判った。覆土は上位が第2面構成土に似た暗褐色土、下位が腐食土質の茶褐色土を含む暗灰褐色粘質土で構成される。東半部は現代攪乱により削平を受けておりII区では平面的に検出することができなかつたが、調査区北壁で確認できた規模は幅約5.4 m、深さ約90 cmを測る。底面標高は北端で約10.7 m、南端で約10.6 mを測り、流下方位は南と考えられる。流下方位はN-174°-Wを指す。I区南端付近において、溝底面に打ち込まれた直径3 cm・5 cmの丸杭各1本と幅約9 cmの板杭、約4 cm角の角杭の計4本が検出されているが、護岸とするには整然とした配置になく強度にも乏しい印象であり、用途は不明である。

出土遺物は図8-1～20に示した。1～13はかわらけ。4～13は手づくね成形のもの。14は須恵器坏。混入した古代遺物であろう。15は土丹加工品、用途は不明。中央に直径1.5 cmの穿孔が貫通し、下部はアーチ形に削り取られている。表面・裏面は比較的平滑である。16～20は木製品。16,17は曲物の底板。17には漆状の黒色付着物が認められる。18は板草履。19,20は用途不明。19は下部に木釘が打ち込まれ、漆状の付着物が認められる。

[遺構2]かわらけ溜まり

I区北西角で検出された。検出標高約11.6 m。東西約50 cm×南北約80 cmの範囲で検出され、調査区外北・西まで広がるのが推測される。約10 cmの厚さに層を成しており、最下層のかわらけを取り上げた底面の標高は約11.5 mを測る。平面的に土坑などの掘り込みを検出することはできなかつたが、

Y=-24330

Y=-24325

Y=-24320

X=-75300

X=-75305

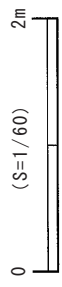
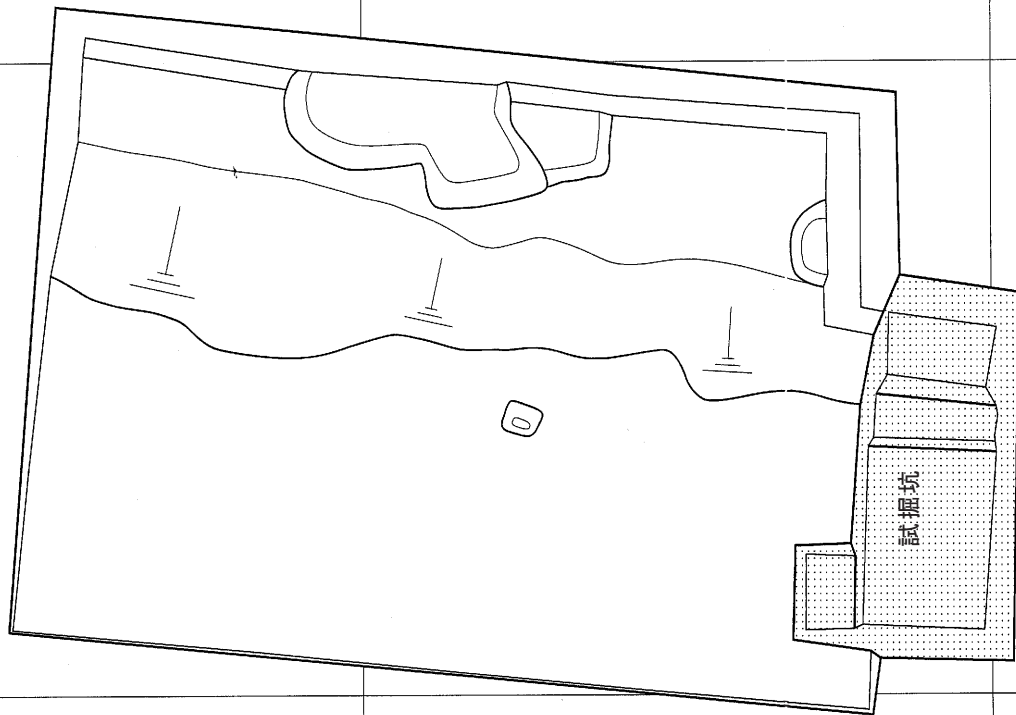


图4 第1面全体图

調査区断面を観察したところ浅い窪み状の落ち込みとなっており、これを利用して廃棄したものと思われる。また遺構3と同様に、覆土には炭化物が多く含まれていた。

出土遺物は図8-21～38に示した。21～38まですべてかわらけ。25～32、34～38は手づくね成形のもの。

[遺構6]溝状遺構

I区北部を東西方向に延びる。西は調査区外に延び、東は現代攪乱により失われている。覆土は土丹小ブロックを多く含む暗褐色土で構成される。規模は幅約130cm、深さ約10cmを測る浅いもので、底面標高は西端で約11.5m、東端で約11.4mを測り、溝であれば流下方位は東と考えられる。流下方位はN-74°-Eを指す。

出土遺物は図9-1～12に示した。1～12まですべてかわらけ。9～12は手づくね成形のもの。

[遺構7]溝状遺構

I区南部を東西方向に延びる。西は調査区外に延び、東は現代攪乱により失われている。覆土は土丹小ブロックを多く含む暗褐色土で構成される。規模は幅約160cm、深さ約20cmを測る。底面標高は西端で約11.4m、東端で約11.3mを測り、溝であれば流下方位は東と考えられる。流下方位はN-94°-Eを指す。

出土遺物は図9-13～23に示した。13～17はかわらけ。13は油煙付着し灯明皿に転用されている。15～17は手づくね成形のもの。18は常滑壺。鳶口壺の底部片と思われる。19は山茶碗窯捏ね鉢。20は瀬戸瓶子。21は青磁蓮弁文碗。22は青白磁合子蓋。23は銭。元祐通寶。

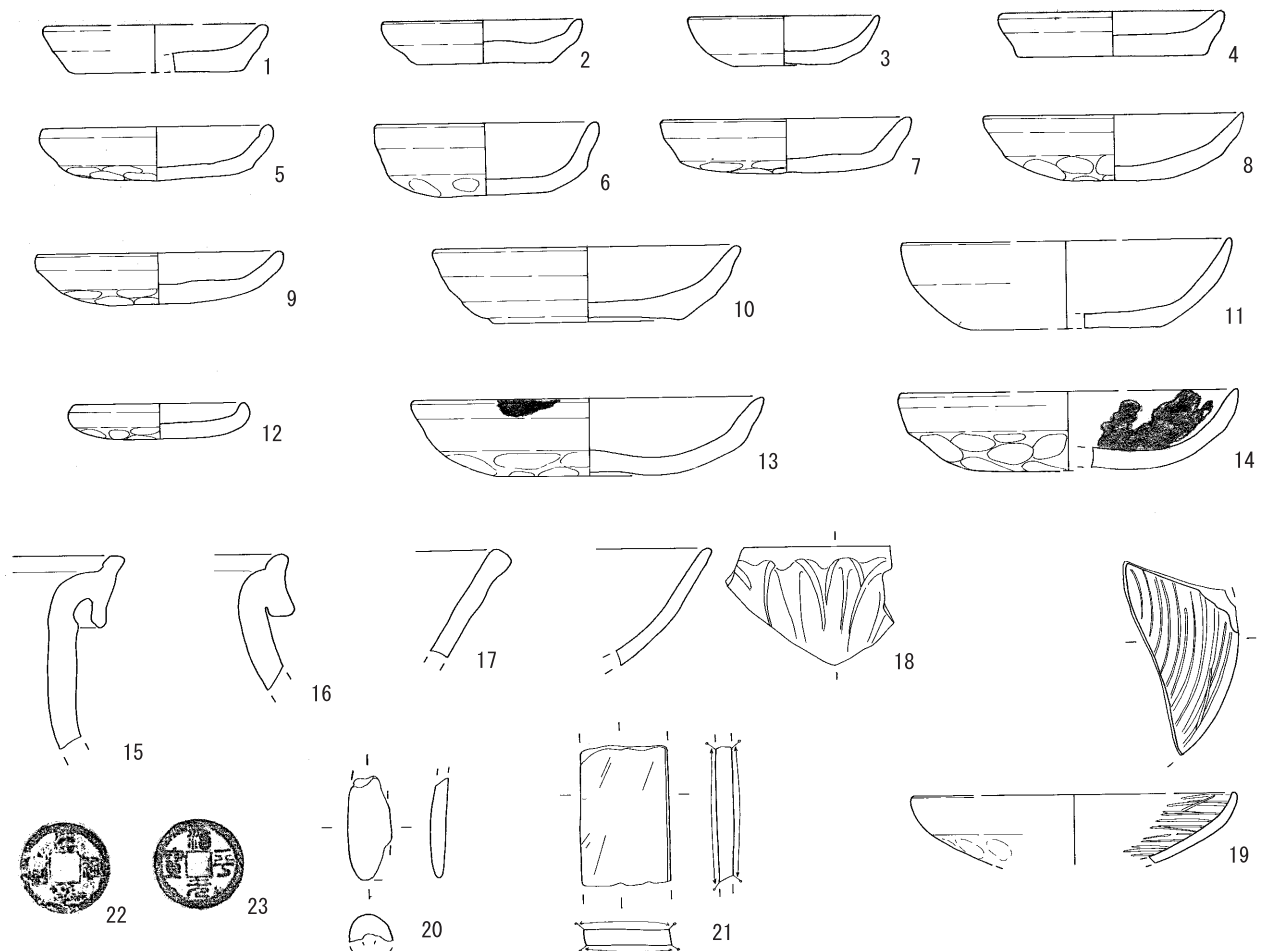


図5 第1面出土遺物

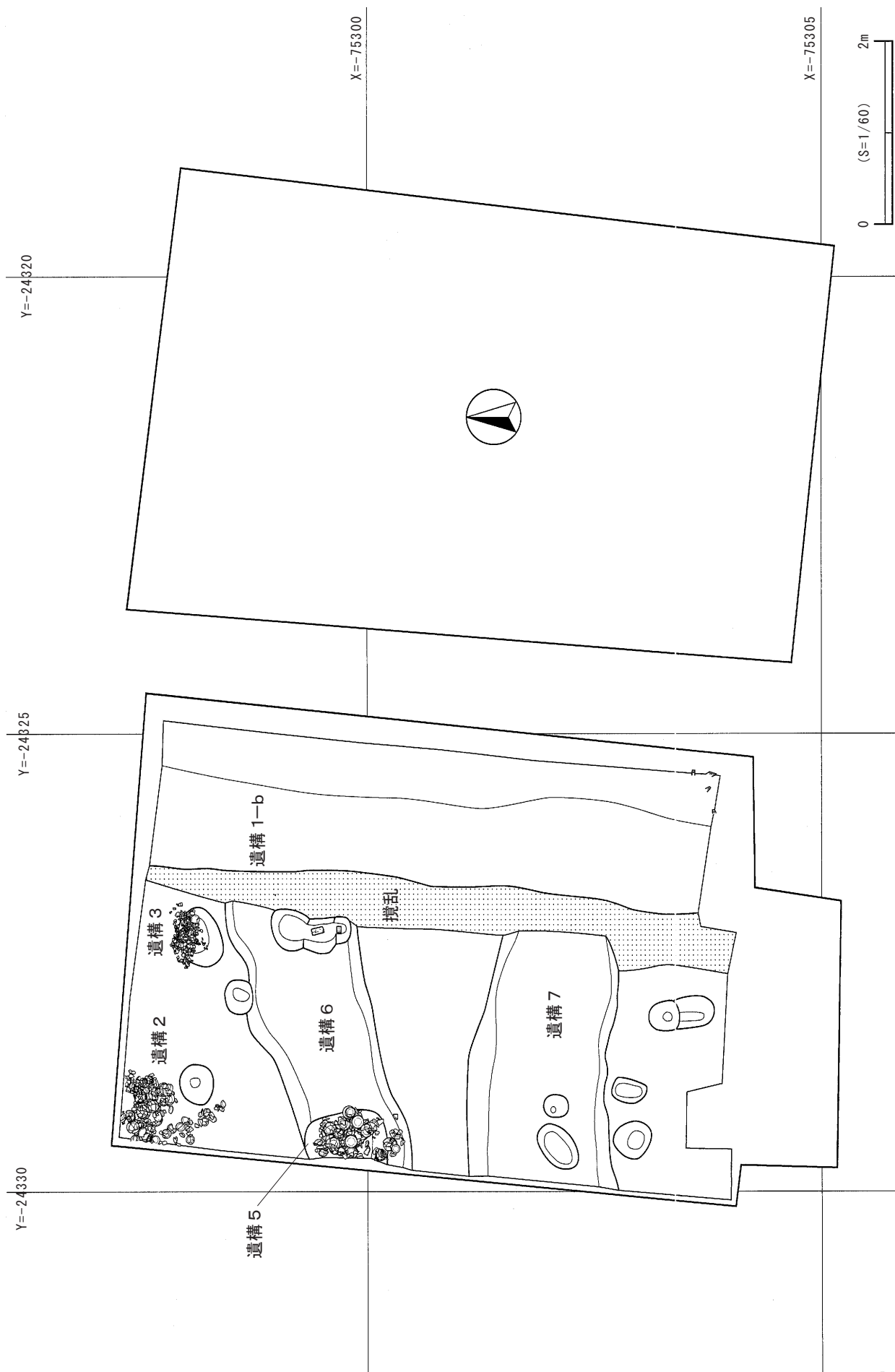


図 6 第 2 面全体図

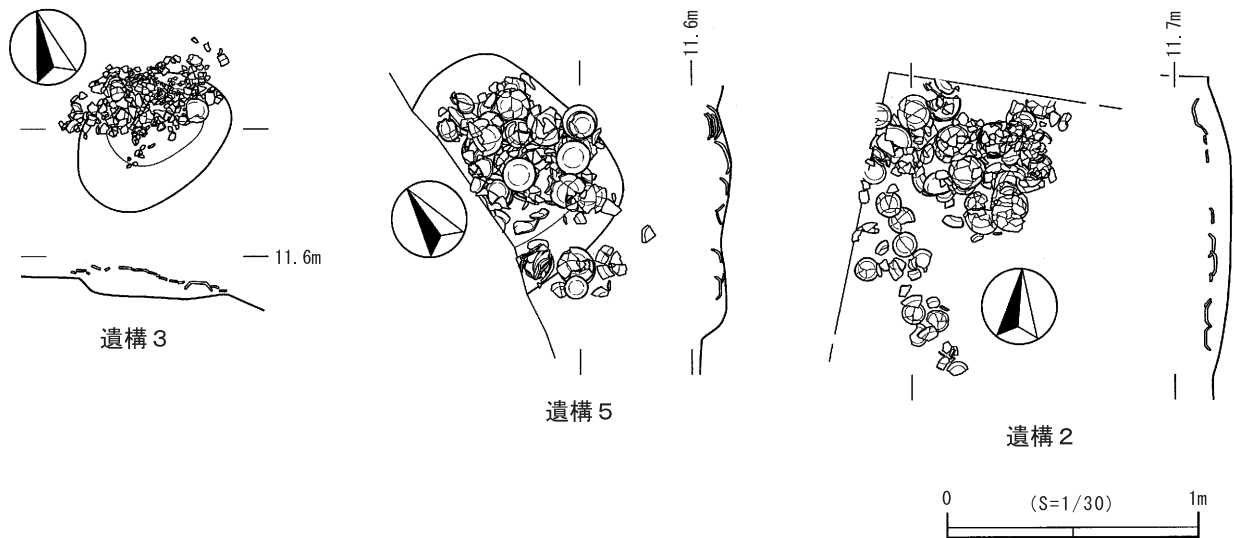


図7 第2面遺構微細図

[遺構3]土坑

I区中央北部で検出された。覆土は炭化物を多く含む暗褐色土で、土坑北半部にはかわらけ細片が密に充填される。かわらけ細片は平面的にひとまとまりとなっている状態で検出されており、何かに包まれて廃棄された可能性も考えられ、覆土の炭化物はその残滓であるかもしれない。平面形は不整楕円形を呈し、土坑の規模は長軸約70cm×短軸50cm、深さ約10cm、底面標高約11.45mを測る。主軸方位はN-73°-Eを指す。

出土遺物は細片がほとんどで、図示できたものは図9-24のみである。24はかわらけ。手づくね成形のもの。

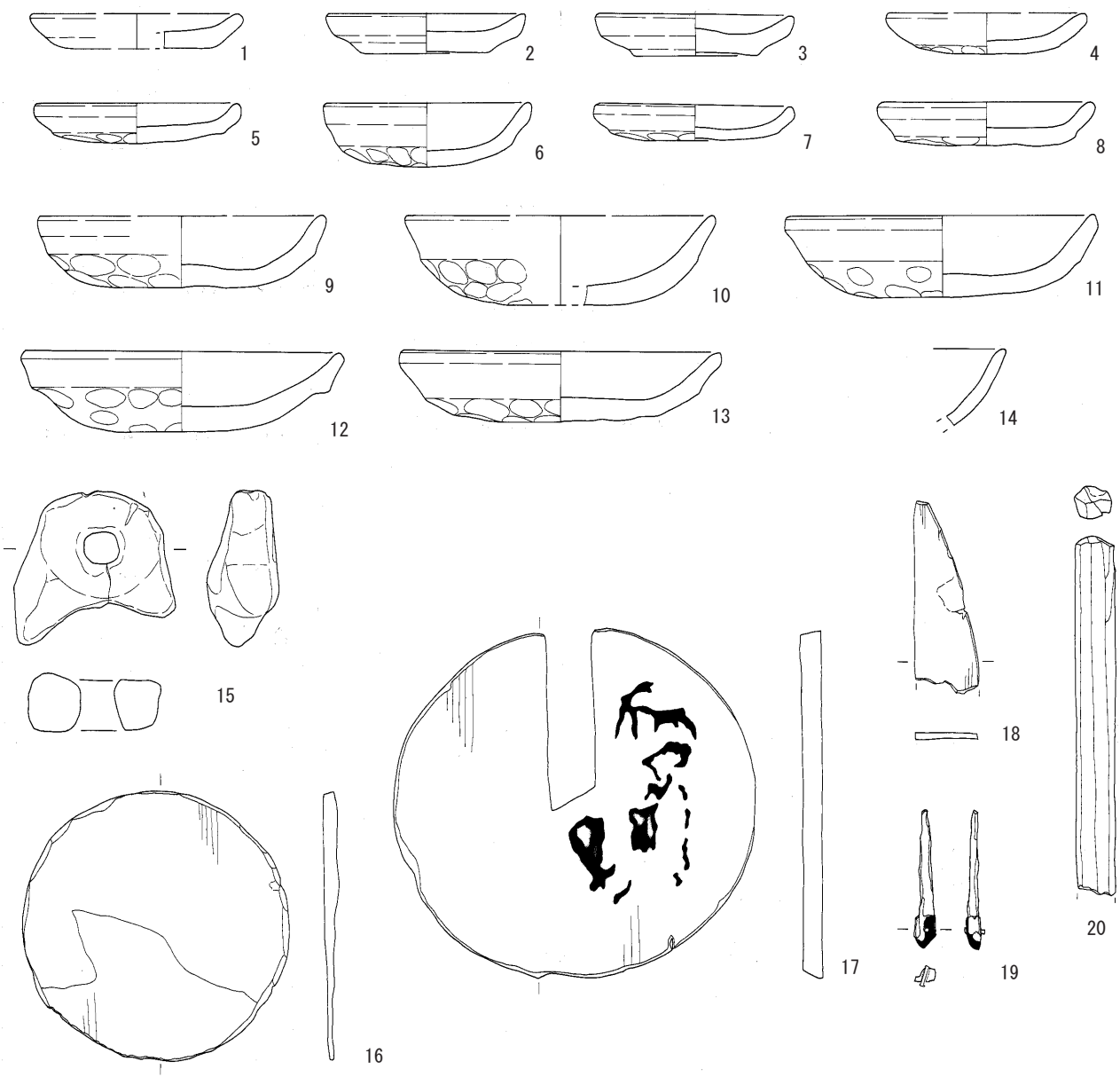
[遺構5]土坑

I区西端で調査区壁にかかる状態で検出された。覆土は土丹小ブロックを多く含む暗褐色土で構成され、覆土上位から中位にかけてかわらけが集中的に出土した。このかわらけ溜まりでは、細片で原形を留めないものも多いが、ほぼ完形となるものも少なからず出土している。正位に重ねられた状態のものもいくつか認められ、多いものでは大皿1枚と小皿3枚の計4枚重ねられた状態であった。このことから、単に廃棄したというより埋納したものと捉えるべきであるかもしれない。本址は遺構6と重複しており、かわらけの出土状況から本址が新しい時期のものとなることが考えられる。平面形は方形に近い形を呈するものと思われ、規模は南北約90cm×東西50cm以上、深さは検出面より約45cm、底面標高約11.15mを測る。北を主軸とした場合の方位はN-8°-Wを指す。

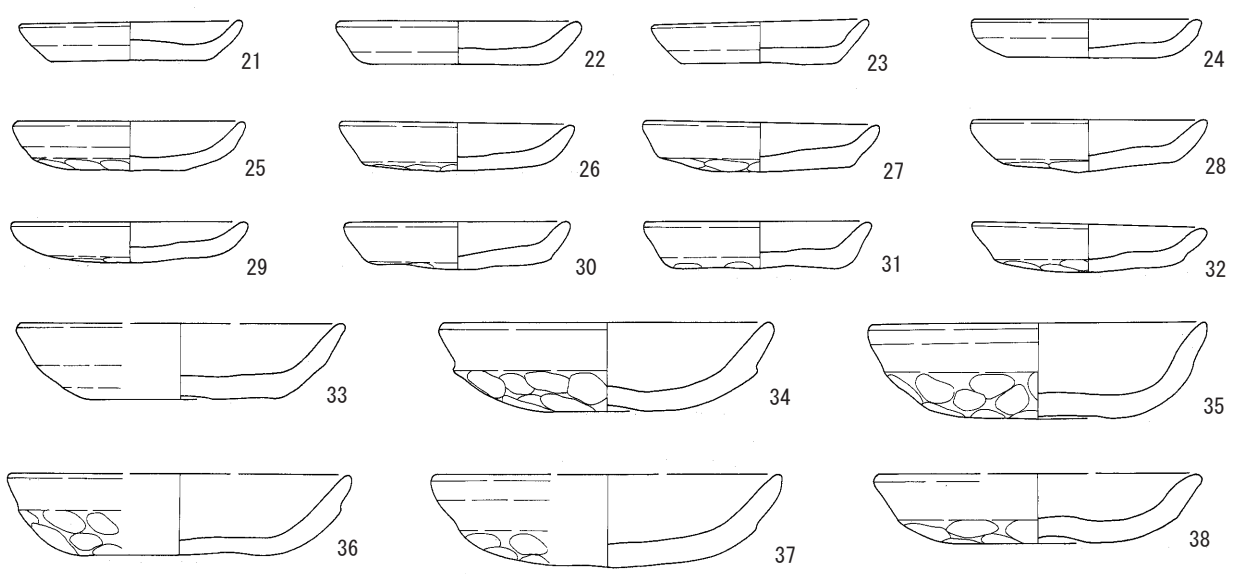
出土遺物は図10-1～54に示した。1～53はかわらけ。20は油煙付着し灯明皿に転用されている。21～32、36～53は手づくね成形のもの。54は青白磁合子蓋。

[遺構外出土遺物]

第1面から第2面までの掘り下げ時に出土した遺物を図11-1～31に示した。1～18はかわらけ。11～13、17、18は手づくね成形のもの。19～21は山茶碗窯捏ね鉢。22は常滑窯捏ね鉢。23は青磁蓮弁文碗。24は青白磁合子。25は底面中央に穿孔の認められるかわらけ片。26は瓦質手焙り。27は丸瓦。28は滑石製の石鍋。29は黒色基石。30は砥石。仕上砥。31は銭。□□通寶。大觀通寶とも思われるが判然としない。



遺構 1 - b



遺構 2

図8 第2面遺構 1 - b、2 出土遺物

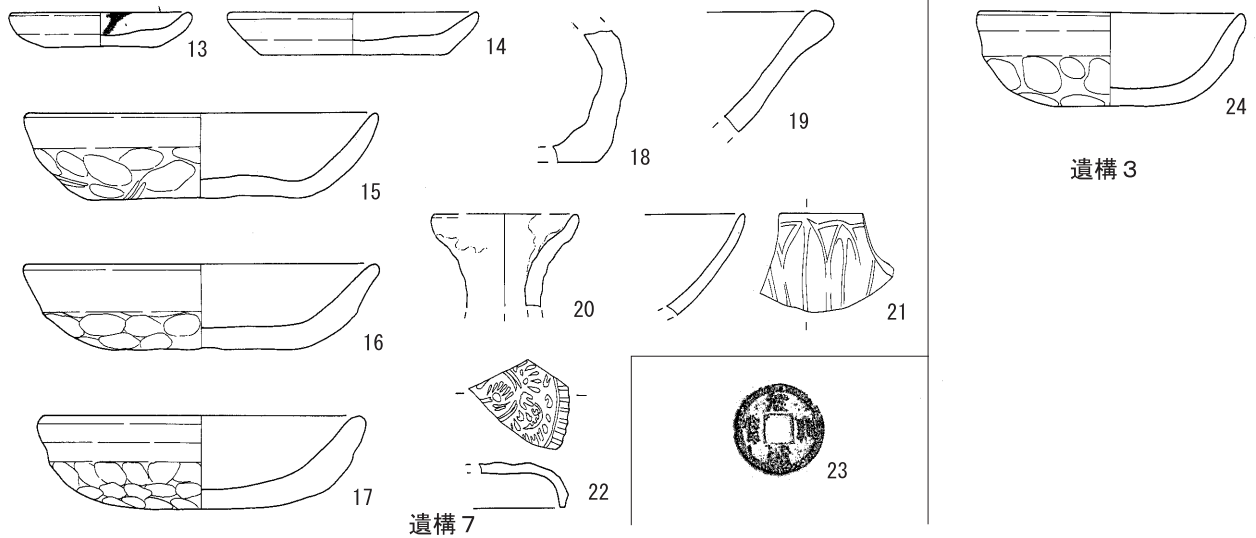
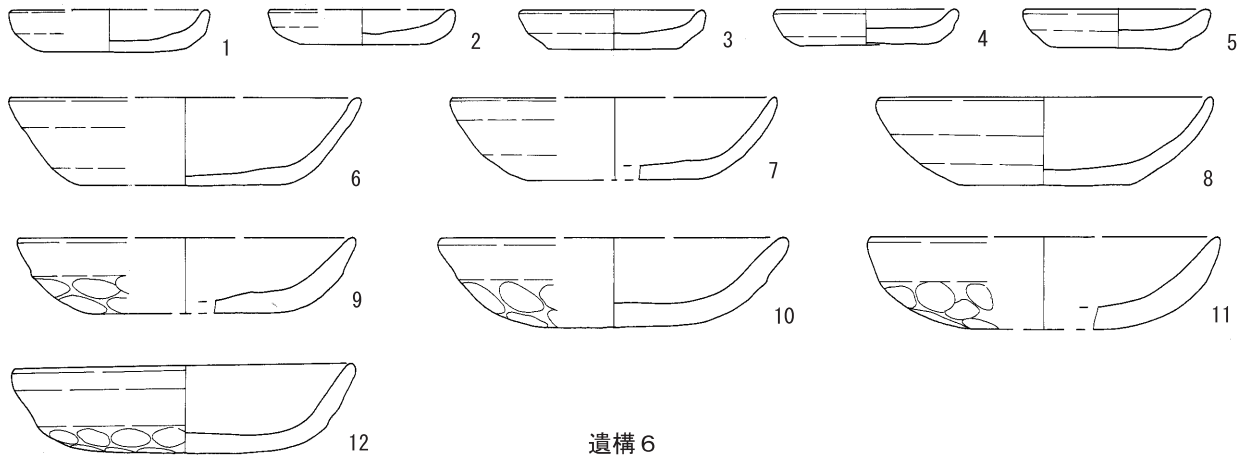


図9 第2面遺構6、7、3出土遺物

第3面

北半部では中世基盤層上面、南半部では基盤層上に薄く貼られた地業層上面が本面となる。地業層は関東ロームを主体とし土丹粒を含む橙色土で構成される。礎石列1列、溝状遺構1条のほか、多数の柱穴・土坑類を検出している。柱穴には底面に礎板を伴うもの、また柱の下端部が遺存するものもあったが、配列を見つけることはできなかった。

[礎石列]

I区南半部の中央付近で検出された。主軸方位はN-9°-Wを指す。礎石の間隔は芯々で北から約150cm・約210cmを測り均一でない。また、上面標高も北から約11.25m・約11.15m・約11.0mと一定せず、遺構7-bなどと軸方位を全く異にしていることもあり、一連の配石と捉えられるものか判然としない。

[遺構7-b] 溝状遺構

I区南部を東西方向に延びる。西は調査区外に延び、東は遺構1-bにより失われている。覆土は基盤層に近似する黒褐色粘質土で、褐鉄を多く含む。幅約80cm、深さ約10cmを測り、底面標高は西端・東端ともに約11.1mでほぼ平坦である。第2面遺構7とほぼ同じ位置にあるが、東を主軸とした場合の方位はN-100°-Eを指しやや南に振れる。中央付近の底面上に比較的まとまってかわらけが廃棄されている状況を検出している。

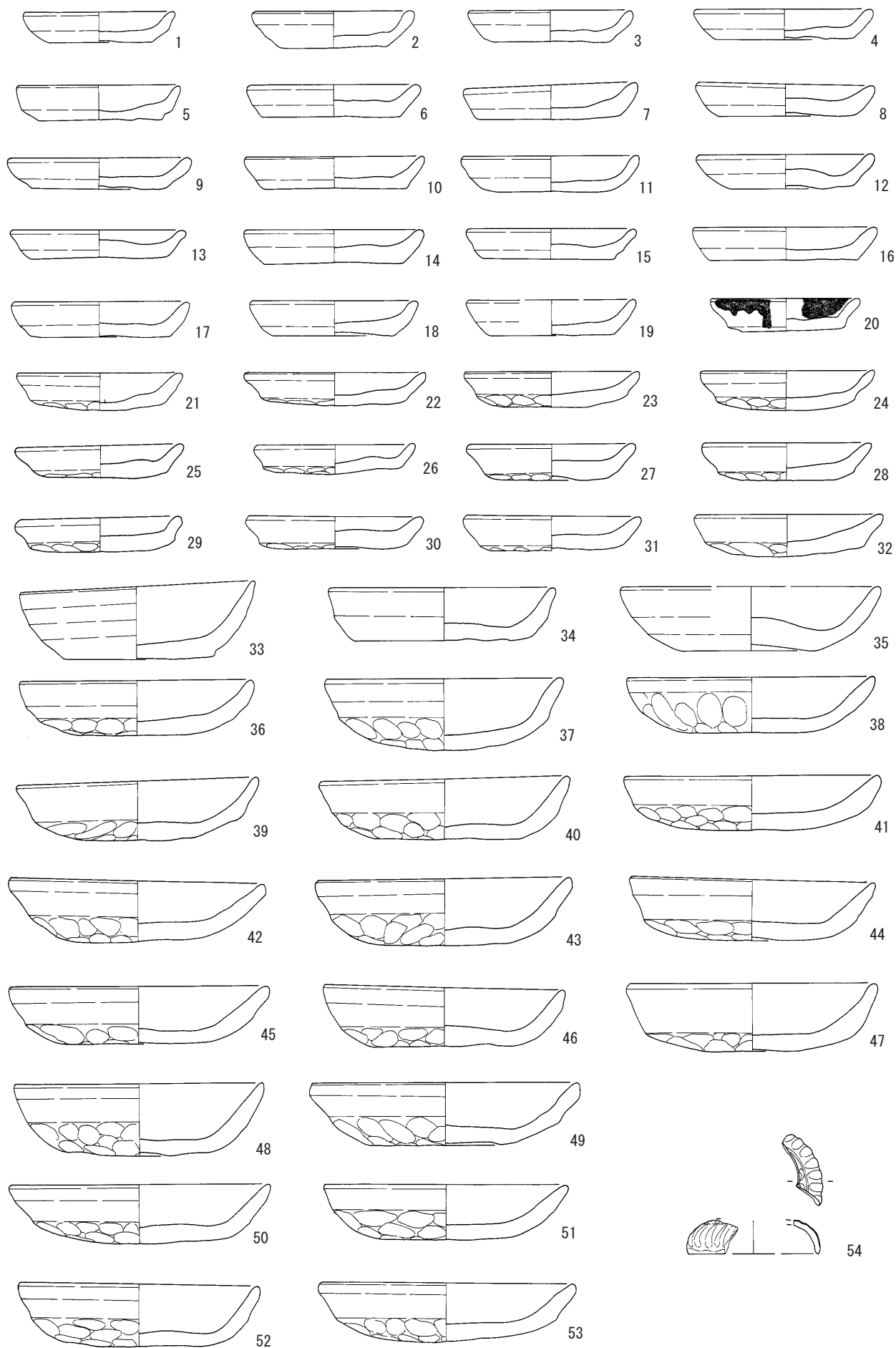


图 10 第 2 面遺構 5 出土遺物

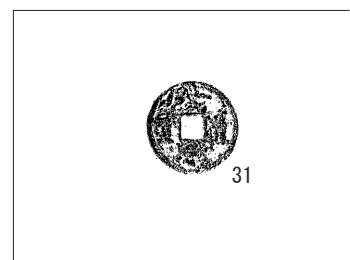
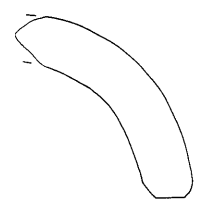
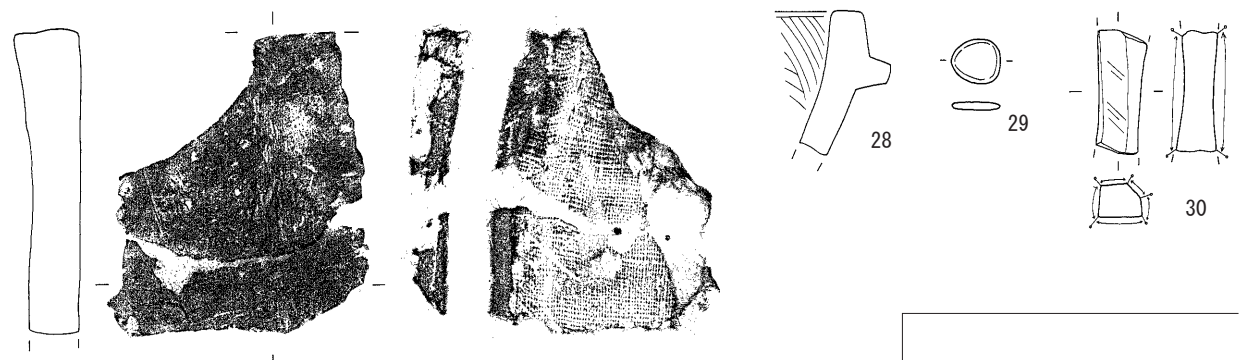
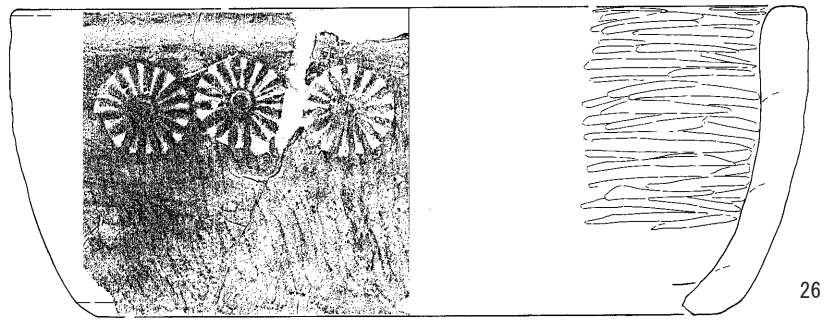
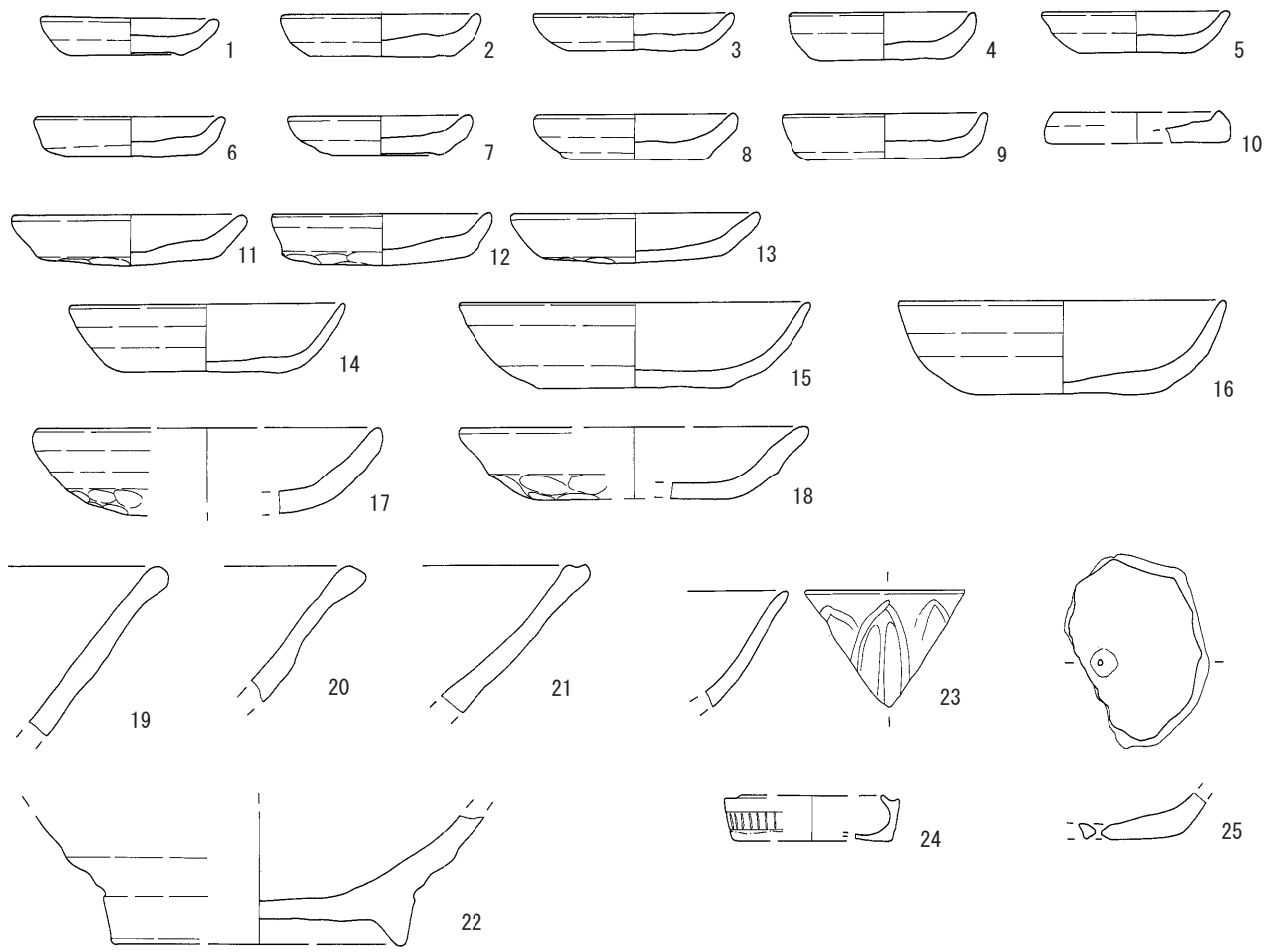


图 1 1 第 2 面遺構外出土遺物

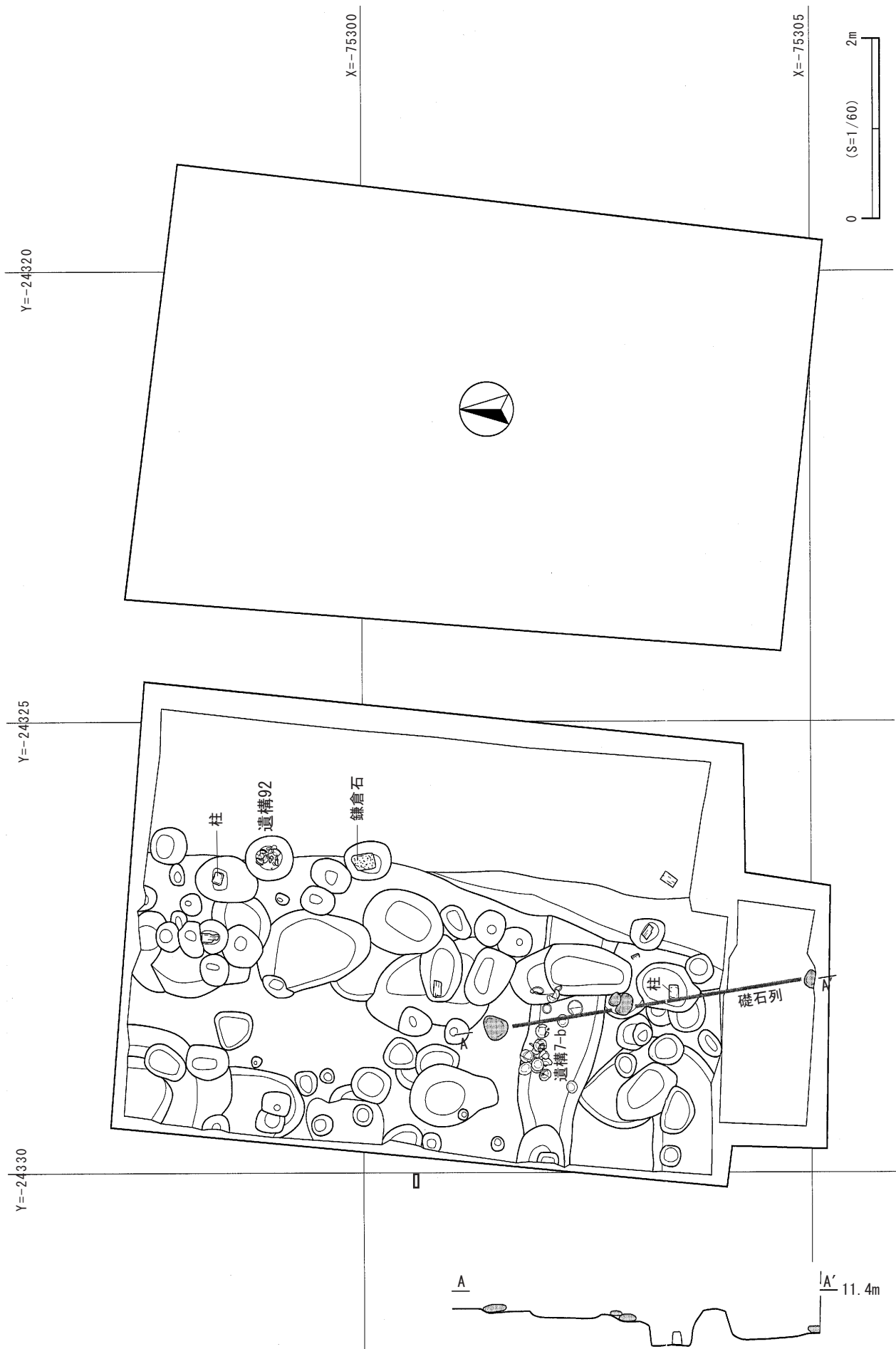


图 1 2 第 3 面全体图

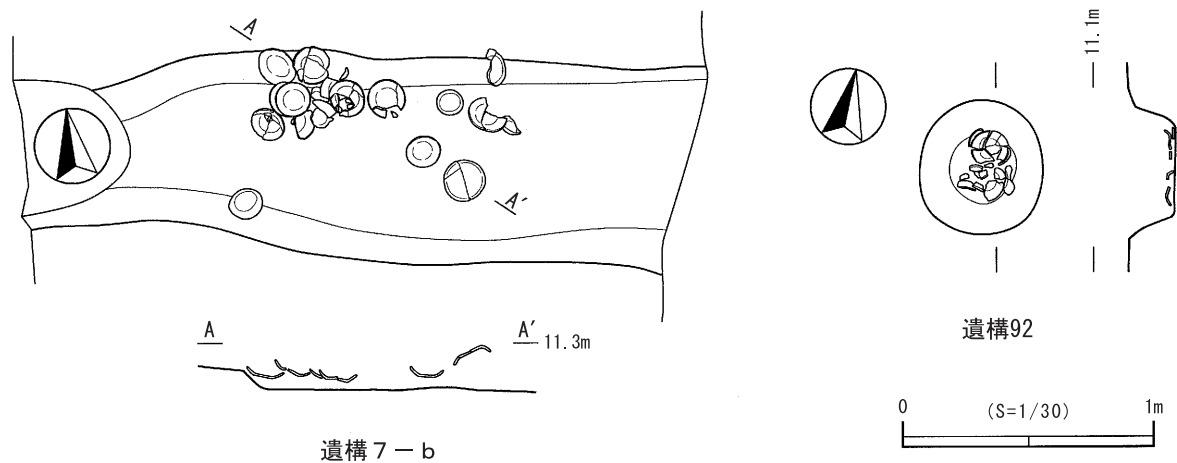


図 1 3 第 3 面遺構微細図

出土遺物は図 14-1 ~ 19 に示した。1 ~ 19 まですべてかわらけ。7 ~ 19 は手づくね成形のもの。6,7 は油煙付着し灯明皿に転用されている。

[遺構 92]ピット

I 区北東付近で検出された。第 3 面から第 4 面への掘り下げ途中で検出されたものであるが、覆土の特徴から本面に帰属するものと判断された。覆土は土丹小ブロックを少量含む暗褐色土で、粘性を帯びる。底面に最低 3 個体分のかわらけが検出されたが完形とならない破片もあり、埋納遺構ではなく単に廃棄したものと捉えた。平面形は略円形を呈し、規模は直径約 50 cm × 第 3 面からの深さ約 50 cm、底面標高約 10.7 m を測る。

出土遺物は図 14-20 ~ 25 に示した。20 ~ 25 まですべてかわらけ。23 ~ 25 は手づくね成形のもの。

[土坑・ピット出土遺物]

遺構 26

出土遺物は図 14-26 ~ 28 に示した。26,27 はかわらけ。27 は手づくね成形のもの。28 は白かわらけ。口縁部片であるが器形は皿形を呈するものと思われ、口唇部を内側へ折り込んでいる。

遺構 56・66

出土遺物は図 14-29,30 に示した。29 はかわらけ。手づくね成形のもの。30 は常滑甕。

遺構 57

出土遺物は図 14-31 ~ 33 に示した。31,32 は青磁割花文小皿。33 は平瓦。

遺構 58

出土遺物は図 15-1 ~ 4 に示した。1 ~ 3 はかわらけ。3 は手づくね成形のもの。4 は瀬戸四耳壺の肩部片。耳は大部分が欠失している。

遺構 67

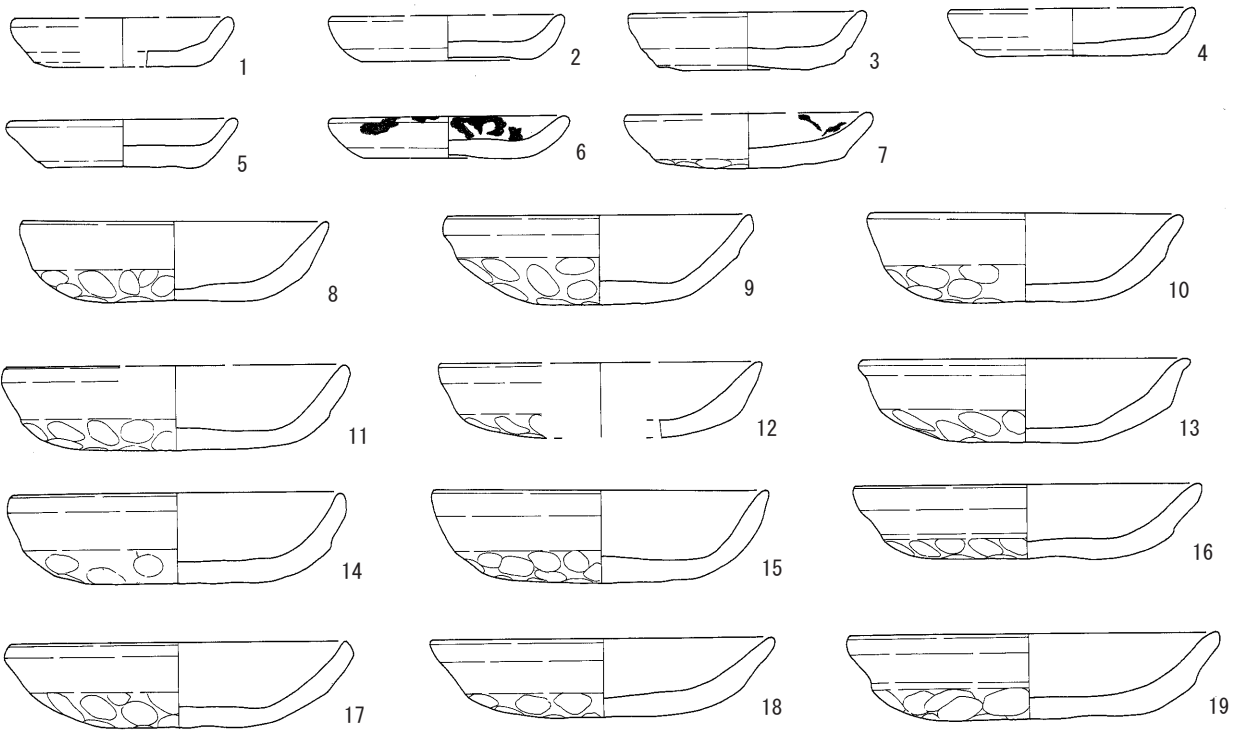
出土遺物は図 15-5 ~ 7 に示した。5 ~ 7 まですべてかわらけ。7 は手づくね成形のもの。

遺構 71

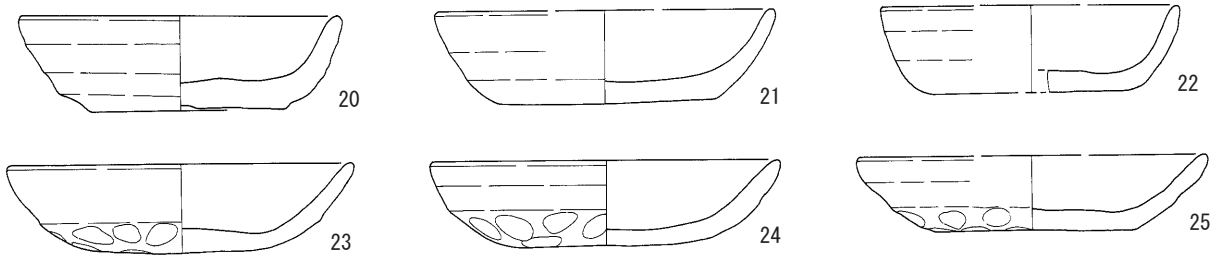
出土遺物は図 15-8 ~ 11 に示した。8 ~ 11 まですべてかわらけ。9 ~ 11 は手づくね成形のもの。

遺構 77

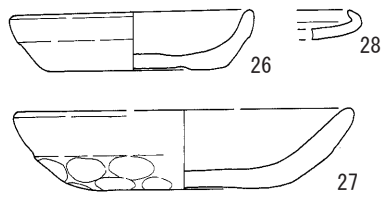
出土遺物は図 15-12 ~ 17 に示した。12 ~ 17 まですべてかわらけ。13 ~ 17 は手づくね成形のもの。16 は油煙付着し灯明皿に転用されている。



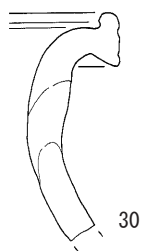
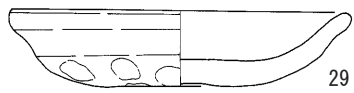
遺構 7-b



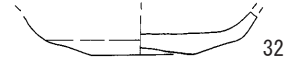
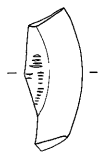
遺構 9 2



遺構 2 6



遺構 5 6 · 6 6



33

遺構 5 7

图 1 4 第 3 面遺構 7-b、9 2、2 6、5 6 · 6 6、5 7 出土遺物

遺構 51

出土遺物は図 15-18,19 に示した。18 はかわらけ。19 は砥石。中砥。

遺構 90

出土遺物は図 15-20 ~ 29 に示した。20 ~ 28 はかわらけ。26 ~ 28 は手づくね成形のもの。29 は山茶碗窯捏ね鉢。

遺構 78

出土遺物は図 15-30 に示した。30 は銭。紹聖通寶。

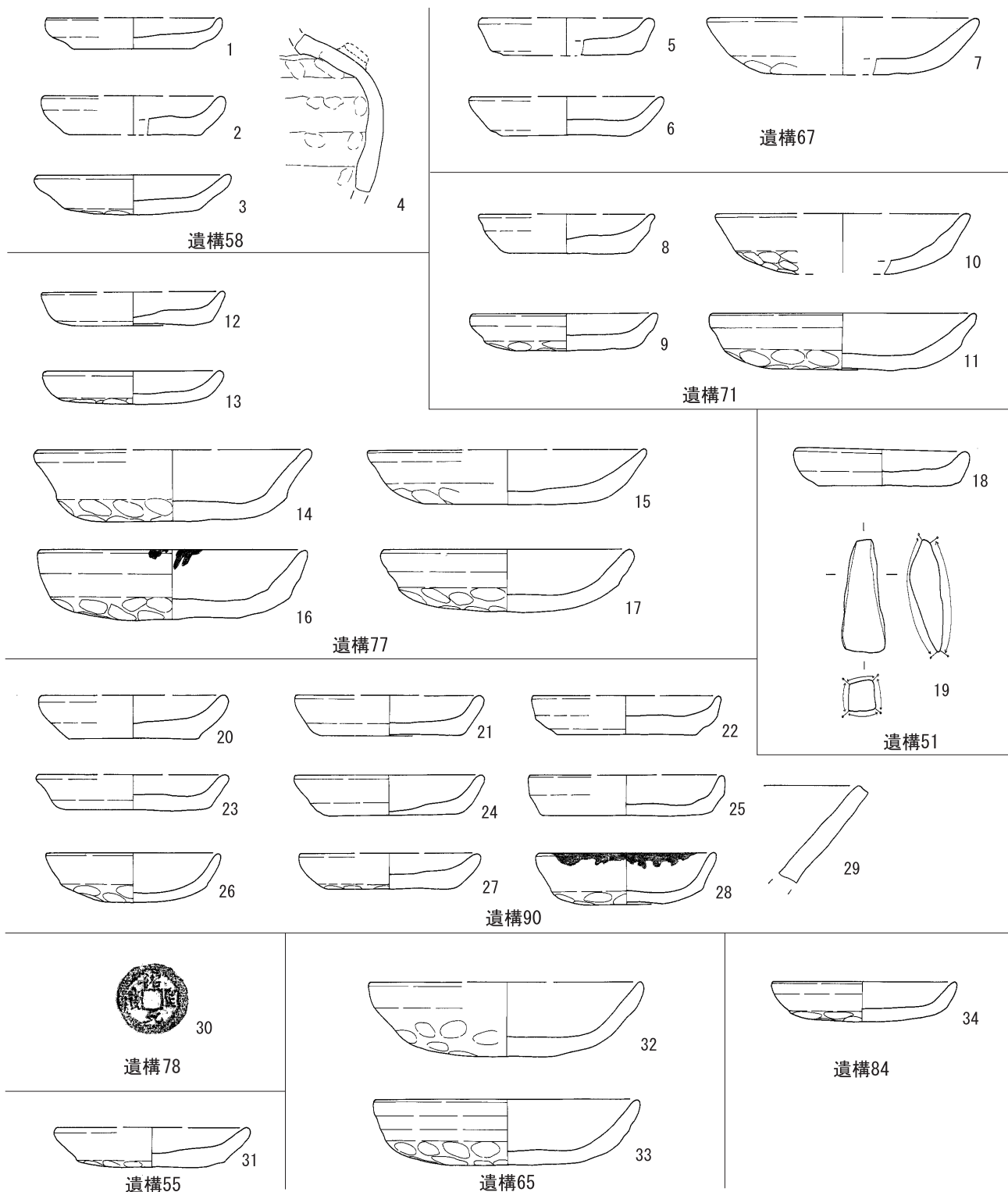


図 15 第3面遺構 58、67、71、77、51、90、78、55、65、84 出土遺物

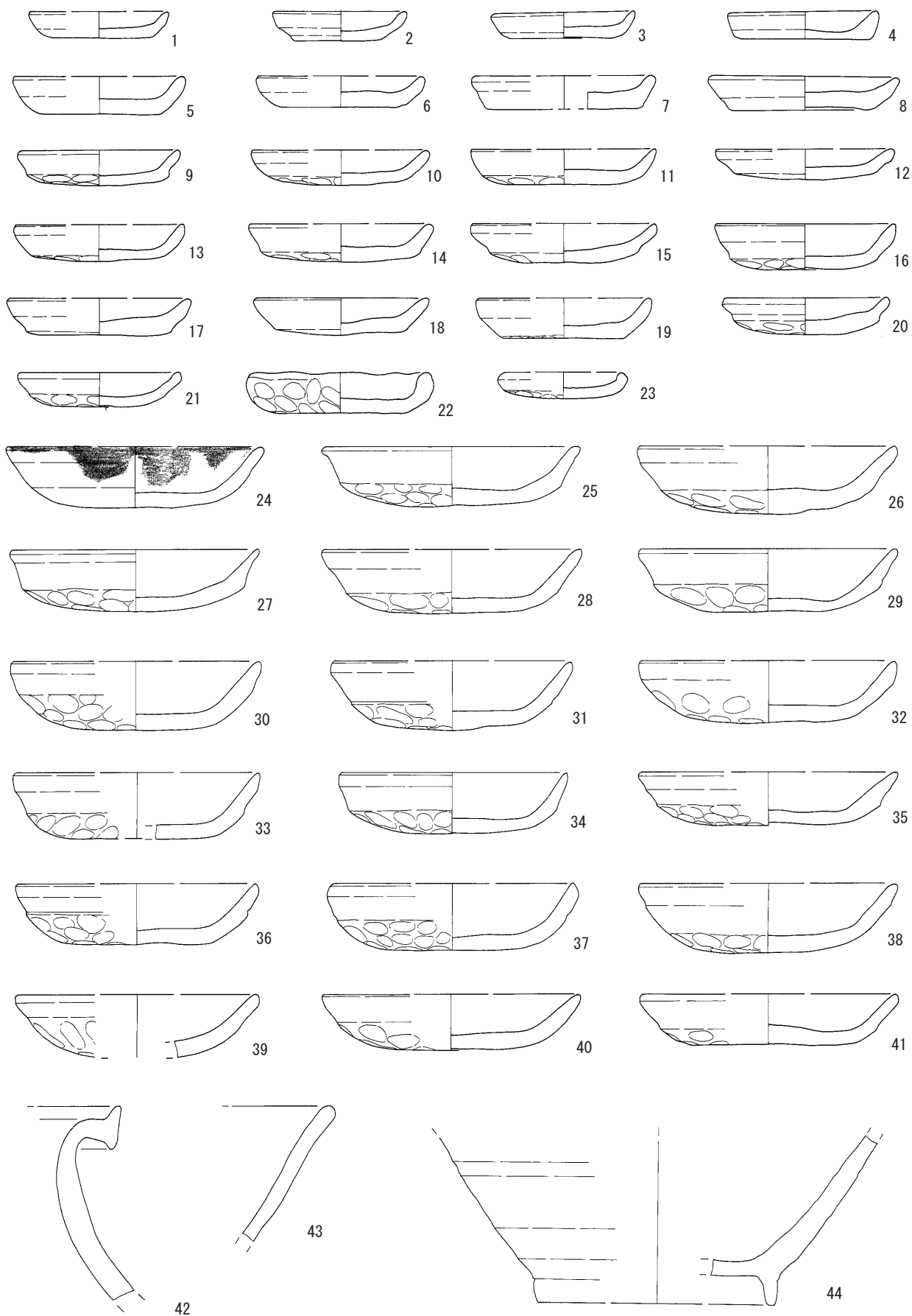


图 1 6 第 3 面遺構外出土遺物 (1)

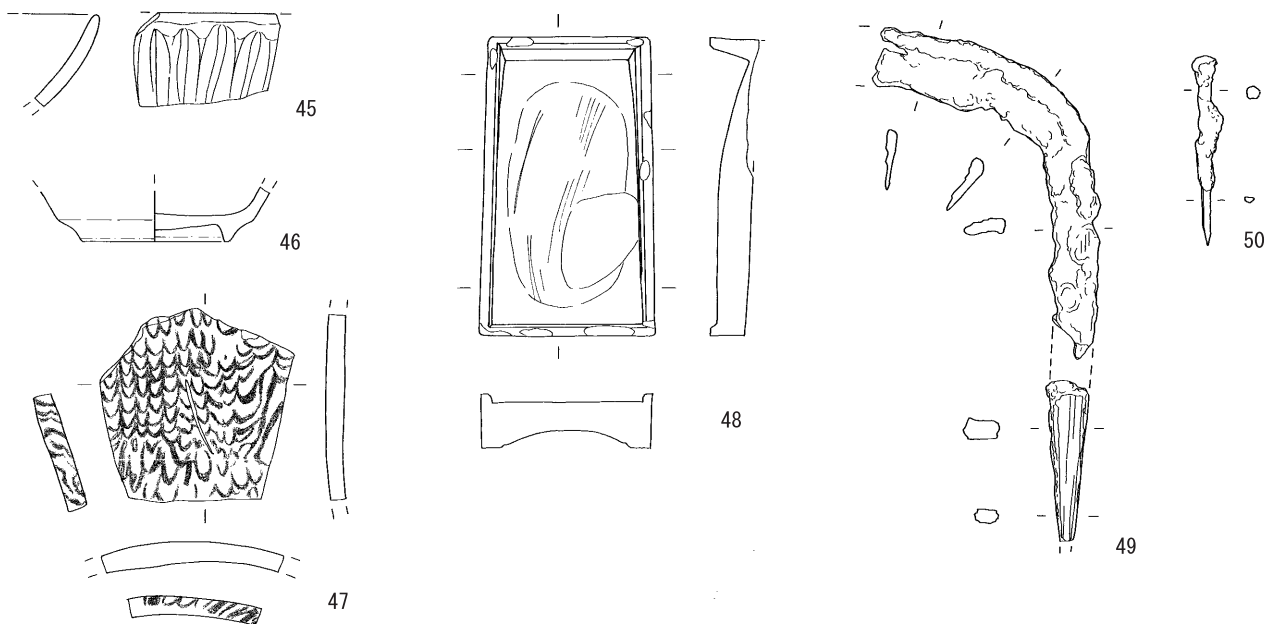


図17 第3面遺構外出土遺物(2)

遺構 55

出土遺物は図15-31に示した。31はかわらけ。手づくね成形のもの。

遺構 65

出土遺物は図15-32,33に示した。32,33ともにかわらけ。手づくね成形のもの。

遺構 84

出土遺物は図15-34に示した。34はかわらけ。手づくね成形のもの。

[遺構外出土遺物]

第2面から第3面までの掘り下げ時に出土した遺物を図16・17-1～50に示した。1～41はかわらけ。9～41は手づくね成形のもの。23はコースターと呼称する極小かわらけ。24は油煙付着し灯明皿に転用されている。42は常滑甕。43,44は山茶碗窯捏ね鉢。45は青磁蓮弁文碗。46は青磁腰折鉢。47は黄釉絞胎片。体部片ではあるが壺と思われる。48は石製硯。49は鎌状の鉄製品。中子の部分には木質が付着している。50は鉄釘。

第4A面

自然堆積層と思われる黒褐色粘質土で構成され、中世基盤層と捉えられる。南北溝2条のほか、Ⅱ区ではこれらに挟まれる空間に多数の小穴を検出している。これらの小穴群は締まりのない暗灰色粘質土を覆土にもち現代攪乱である可能性も考えられるが、遺物が出土しておらず判然としないことから、本面で扱うこととした。

[遺構91]溝

I区東端からⅡ区西端に跨る位置で、調査区を南北に貫く。覆土は上層が土丹小ブロックを少量含む暗褐色粘質土、中層が腐植質の暗茶褐色粘質土、下層が土丹小ブロックをやや多く含む黒褐色土、最下層に再び腐植質の暗茶褐色粘質土が堆積する。Ⅱ区ではごく狭小な範囲を検出したのみであるが、推定幅は約5.1m、深さは約2.6mを測る。I区・Ⅱ区の調査区北壁を合成したところ、底面を境に左右対称なV字の薬研堀となることが推測され、その場合底面幅は30～40cm程度であろうと考えられる。

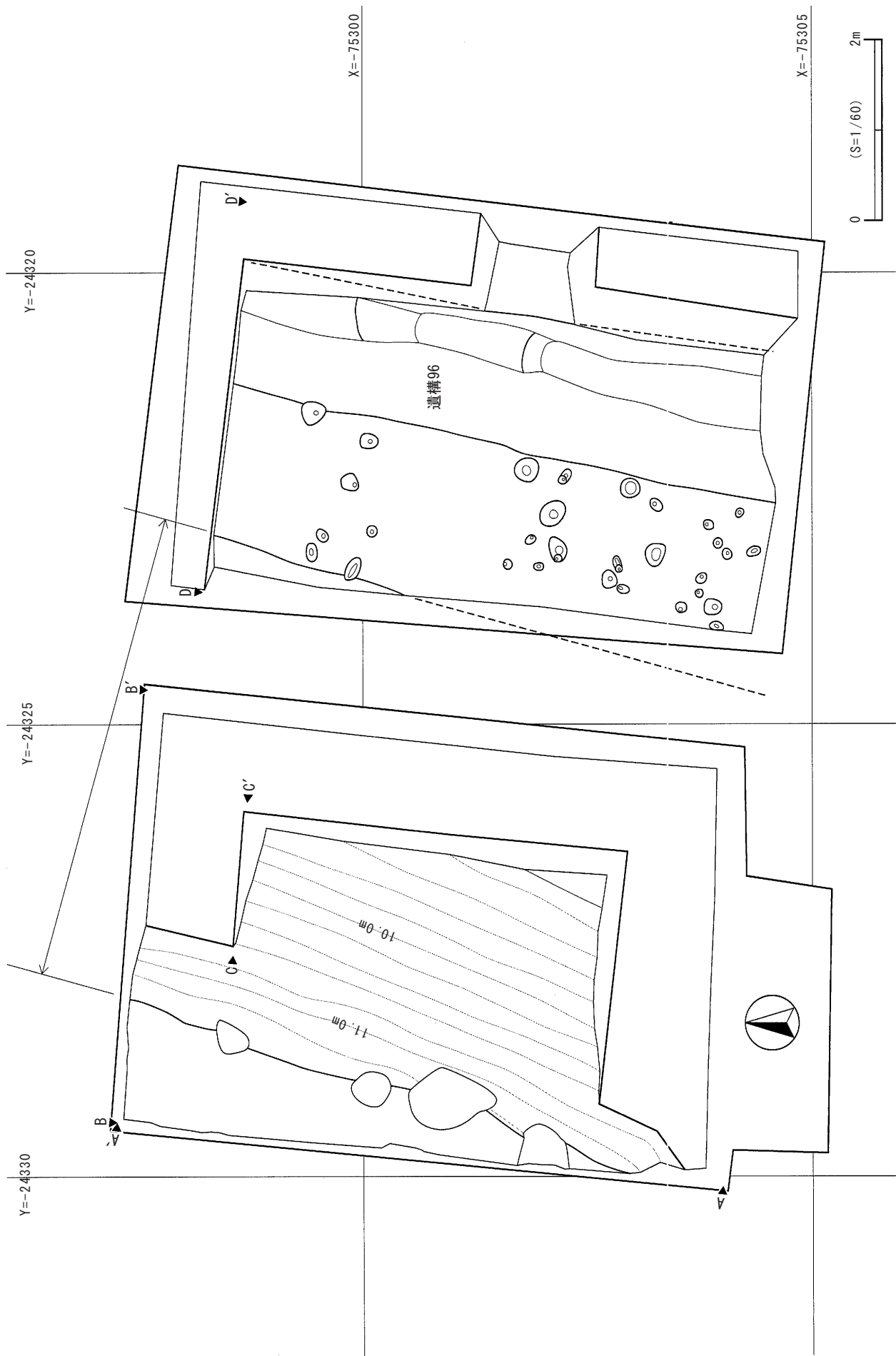


图18 第4A面全体图

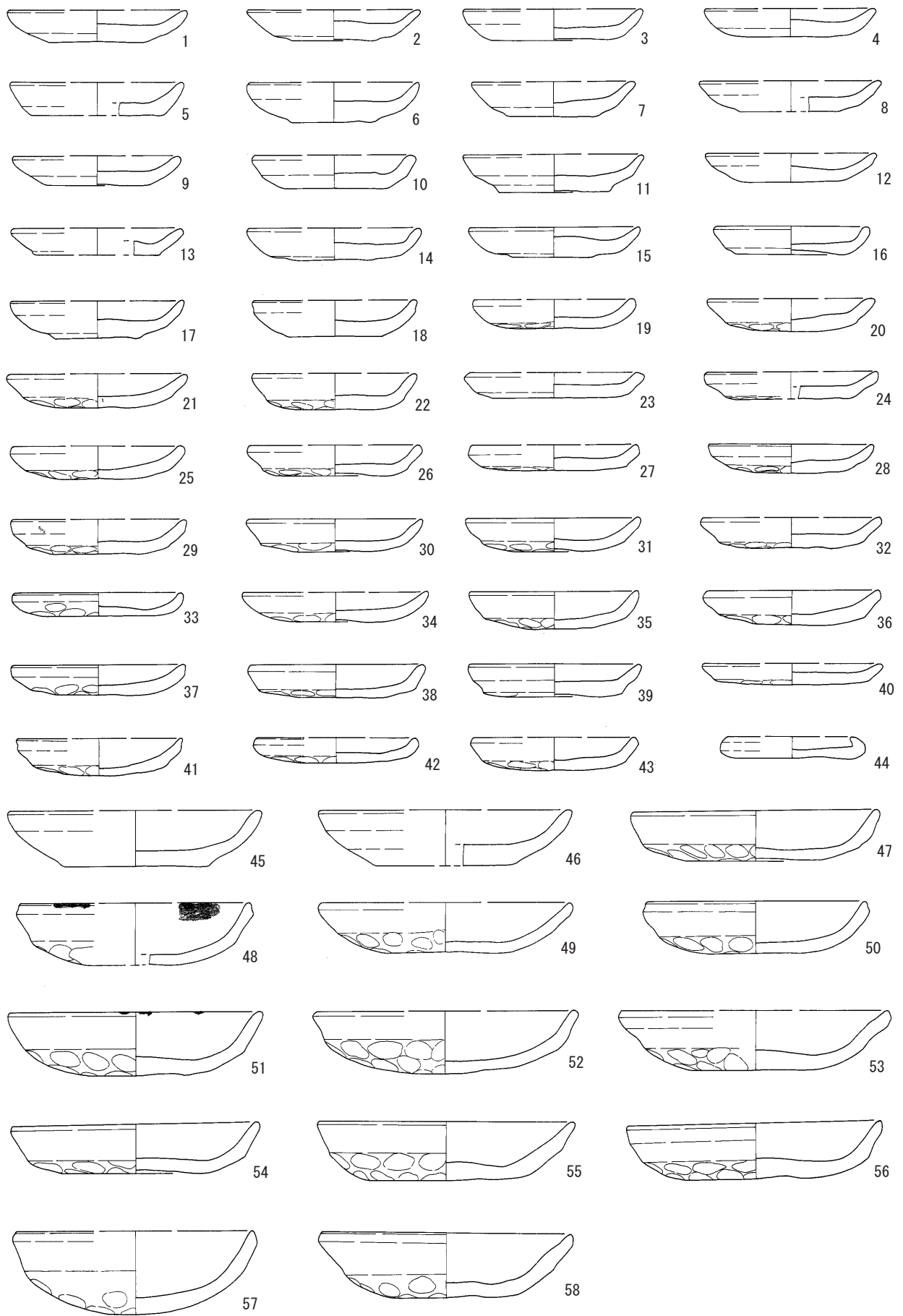


图19 第4A面遺構91出土遺物(1)

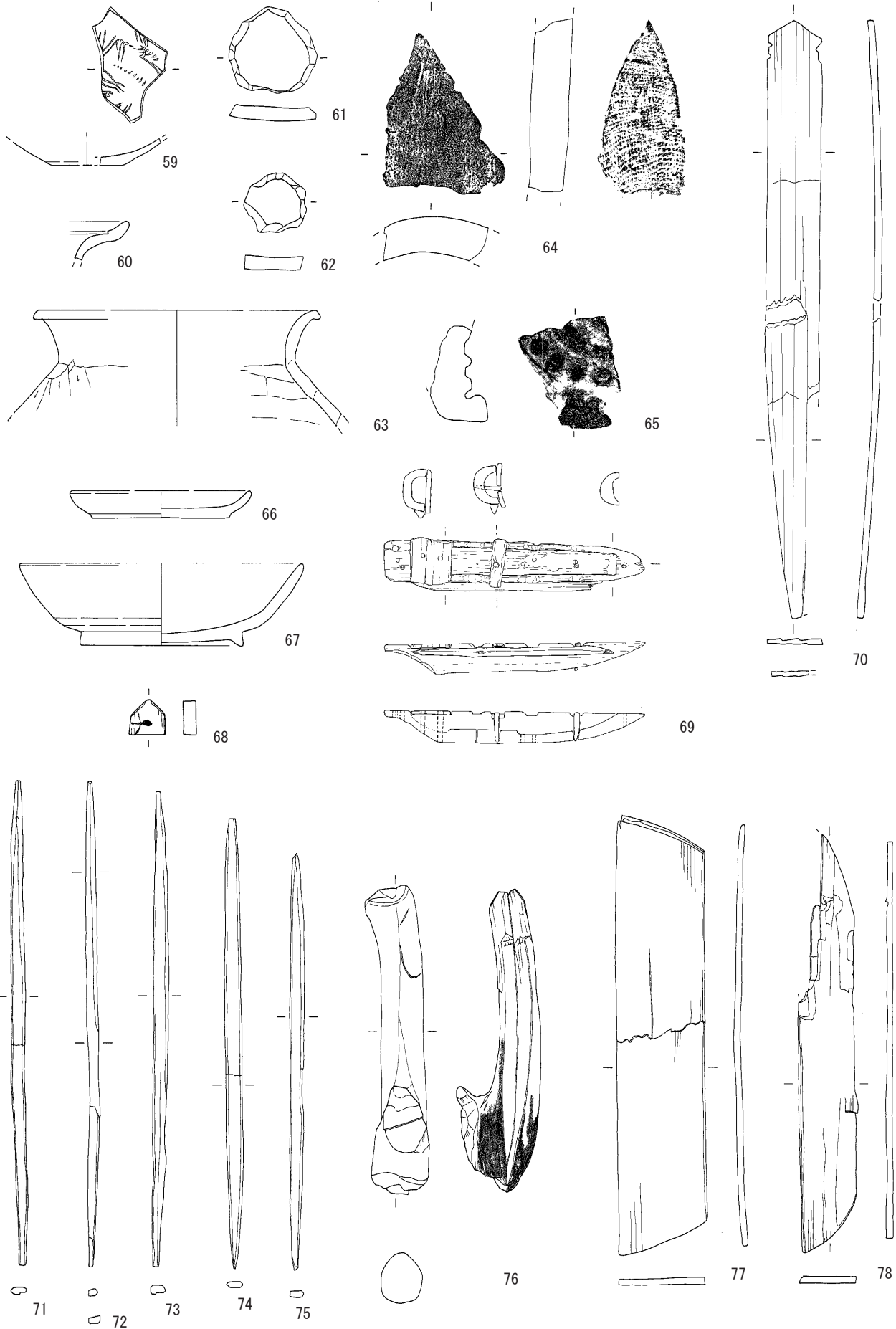


图20 第4A面遺構91出土遺物(2)

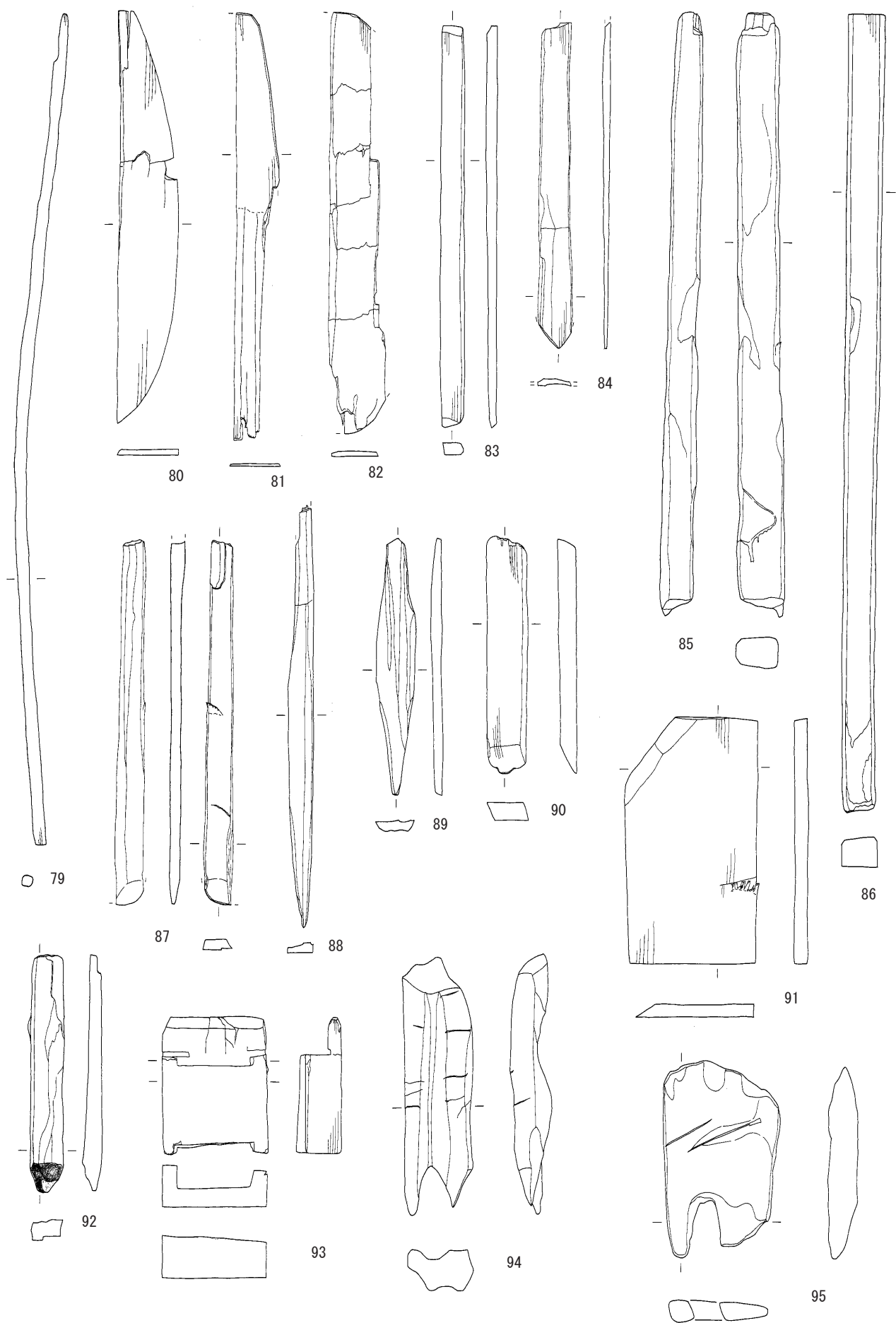


图 2 1 第 4 A 面遺構 9 1 出土遺物 (3)

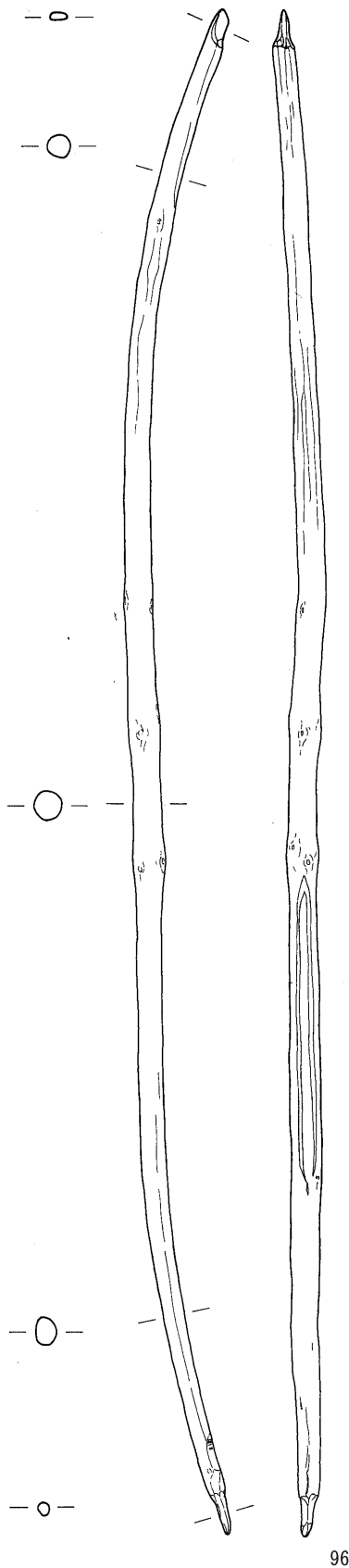


図22 第4A面遺構91
出土遺物(4)

底面はI区南端部でわずかに検出できたのみで、底面南北での比高差は不明。南を主軸とした場合の方位はN-160°-Wを指す。

出土遺物は図19~22-1~96に示した。1~58はかわらけ。19~58は手づくね成形のもの。44はコースターと呼称する極小型かわらけ。48,51は油煙付着し灯明皿に転用されている。59は白磁割花文小皿。60は伊勢産の土鍋。61,62はかわらけ底部を円盤状に打ち欠いたもので、用途不明。63は土師器甕。混入遺物であろう。64は平瓦。65は軒丸瓦。66は漆器皿。無文。67は漆器椀。内面には漆が塗布されておらず、未製品であるかもしれない。68~96は木製品。68は不明。将棋の駒だろうか。69は舟形。刳り舟に舟梁・舷を木串で繋いでおり、舳先に1つ、艫にも3つの木串を挿し込む穿孔が認められる。70は卒塔婆と思われる。墨書は認められない。71~75は箸。76は鉤状を呈しているが、加工痕が明瞭でなく判然としない。77,78は曲物底板。79は衣紋掛けと思われるもの。80~82は板草履。83~95は用途不明。96は弓形。側面形は全体に緩く湾曲している。湾曲した内面側の、雅緩鞆殉から片方の弭にかけて、縦に長い亀甲状の形を呈する深さ1~2mm、長さ約17.5cmの樋が刻み込まれている。中央付近は約5cm幅を断面円形に成形し、その両側を山状に削り残した突起としていることから、この部分が騏になるものと考えられる。

[遺構96]溝

II区東端部で検出され、調査区を南北に貫く。覆土は基盤層に近似する黒褐色粘質土である。全体的に近代以降の削平を受けており特に東肩部は大きく失われ、現状では幅約150cmを測るが、底面を境に左右対称の立ち上がりをもつものであったならば、220cm前後の幅を有していたことが想定される。底面幅は40~60cmを測り、遺構91に比較すると断面形は逆台形に近い。底面には10cm程度の段差が2ヶ所認められ、いずれも段差の南側が低くなる。検出面からの深さは50~80cmを測り、底面標高は北端で約10.2m、南端で約9.9mで南に向かう流下方位を示す。流下方位はN-167°-Wを指す。

出土遺物は図23~25-1~52に示した。1~35はかわらけ。5~19、22~35は手づくね成形のもの。4,19はコースターと呼称する極小型かわらけ。35は底面中央に穿孔が認められる。36は青磁割花文碗。37は褐釉水注。舶載品と思われる。38~53は木製品。38は6網の柄と思われるもの。先が二股に分かれた樹枝を利用したもので、杵の片側は欠失している。杵には穿孔などの加工痕は認められなかった。また、柄の表面には樹皮が残っている部分も見られた。39は曲物の底板。40~44は板草履。45は鋤先とも思われるが遺存状況悪く明らかでない。46は箸。47,48は用途不明。49,50は折敷。51~53は竹製品。51は用途不明。52,53は矢柄とも思われる管状

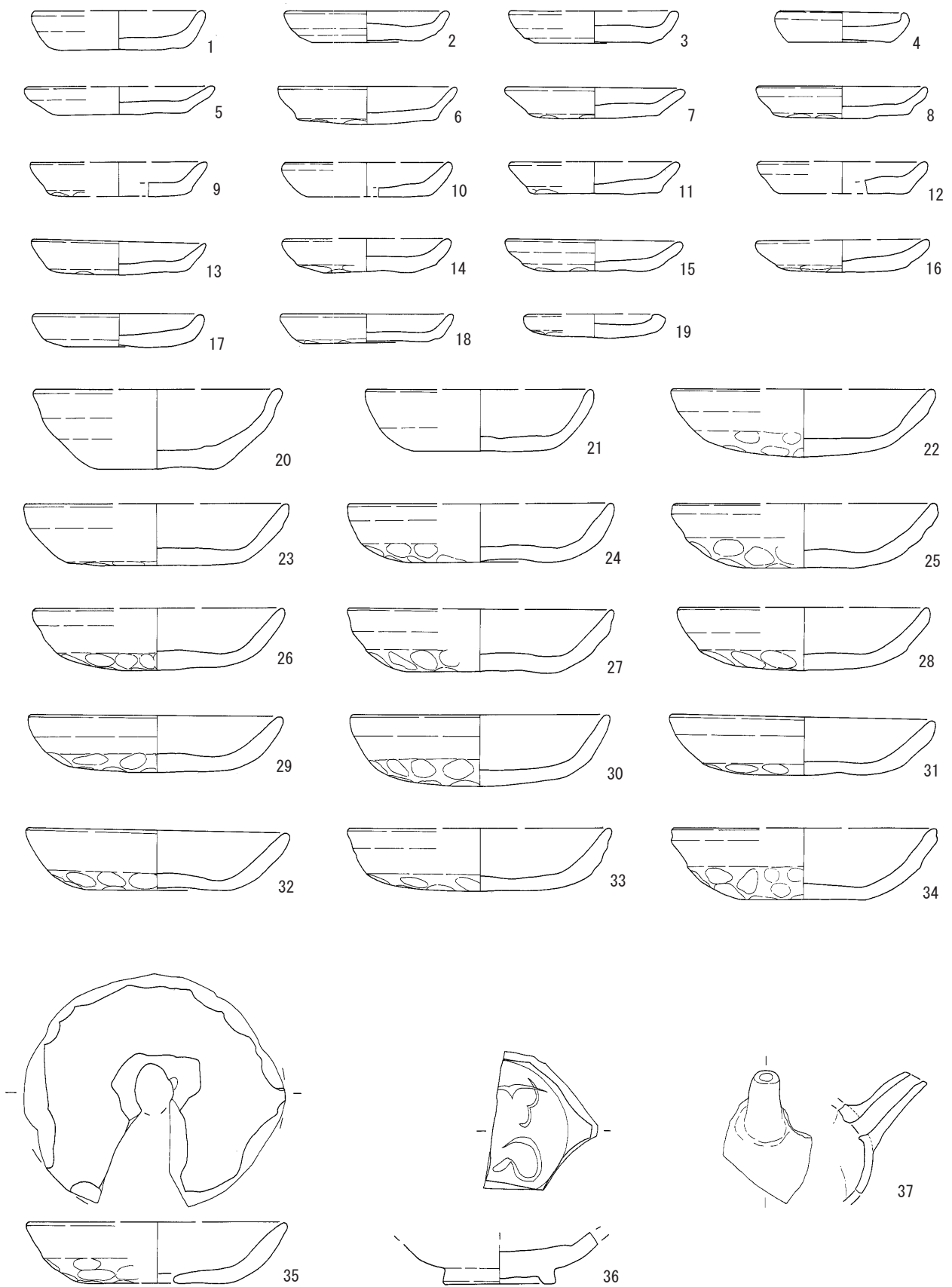


图 2 3 第 4 A 面遺構 9 6 出土遺物 (1)

のもの。

第4B面

第4A面と同一面で中世を遡る時代の遺構群が検出され、これらを第4B面とした。上面で遺構プランを確定することが難しい遺構もあり、第4A面から10cmほど掘り下げてすべての遺構を確認した。柱穴・土坑類のほか、II区東端部で部分的にトレンチを設定して掘削したところ、溝状の落ち込みを検出することができた。

[遺構138]溝状落ち込み

II区東端部にトレンチを設定して検出したものである。覆土は基盤層に近似する黒褐色粘質土であった。上部を削平により失い、肩部を遺構96に壊されているものの、幅80cm以上×検出面からの深さ約90cm、底面標高約9.9mを測る。検出された底面はごくわずかな範囲であり、さらに東へ落ち込むことも考えられる。溝あるいは古東御門川の西肩部となる可能性も考えなければならないだろう。

[遺構105-a、129、135]柱穴列1

II区中央付近で3基の柱穴が直線的に並ぶ状況が検出された。各柱間はいずれも約160cmを測り、主軸方位はN-1°-Wを指す。覆土はいずれの柱穴も基盤層に近似する黒褐色粘質土で、黄白色シルト粒や赤色スコリアに類似する微粒子を少量含む。各柱穴の規模は北から、直径約30cm×深さ約40cm、直径約30cm×深さ約40cm、直径約25cm×深さ約40cmを測り、底面標高は北から約10.3m、約10.35m、約10.2mで比較的均一に揃っている。

[遺構105-b、128]柱穴列2

II区中央付近で2基の柱穴が並ぶ状況が検出された。覆土はいずれも基盤層に近似する黒褐色粘質土で、黄白色シルト粒や赤色スコリアに類似する微粒子を少量含む。2基のみであるので建物の配列を為すものか判然としないものの、覆土や規模の類似から一連の遺構として捉えたものである。柱間は約170cmを測り、主軸方位はN-15°-Eを指す。各柱穴の規模は北から、長径約45cm×短径約35cm×深さ約40cm、長径約50cm×短径約40cm×深さ約30cmで、底面標高は北から約10.4m、約10.5mを測る。

出土遺物は図25-56に示した。56は土師器甕。

[遺構106]土坑

II区中央付近で検出された。覆土は基盤層に近似する黒褐色

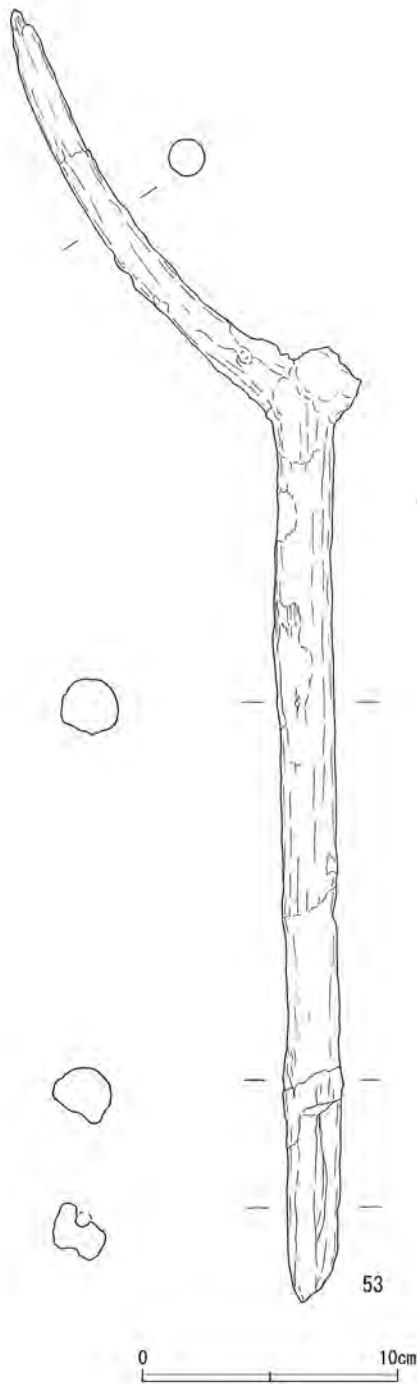


図24 第4面遺構96
出土遺物(2)

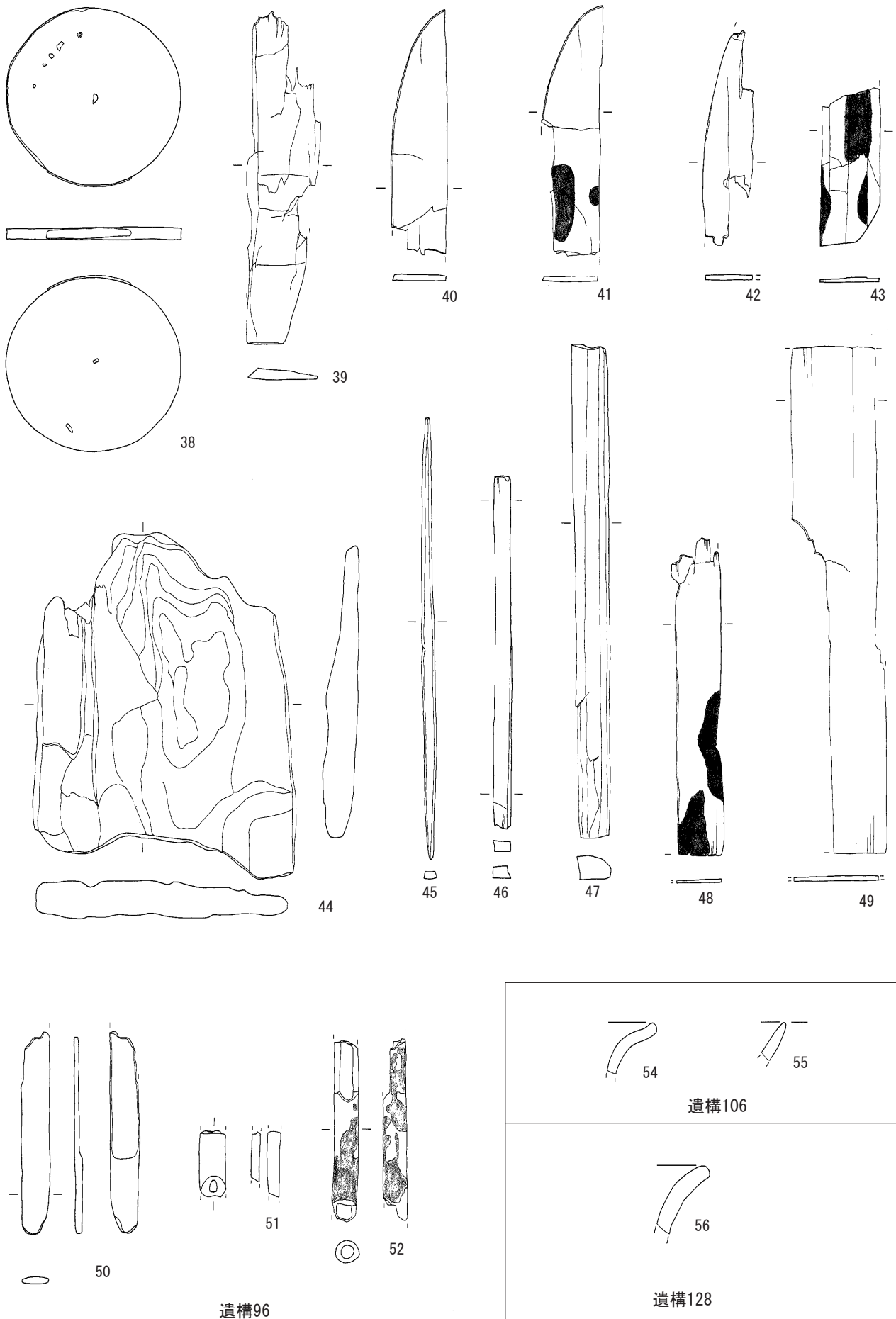


图25 第4A面遺構96(3)、第4B面遺構106、128出土遺物

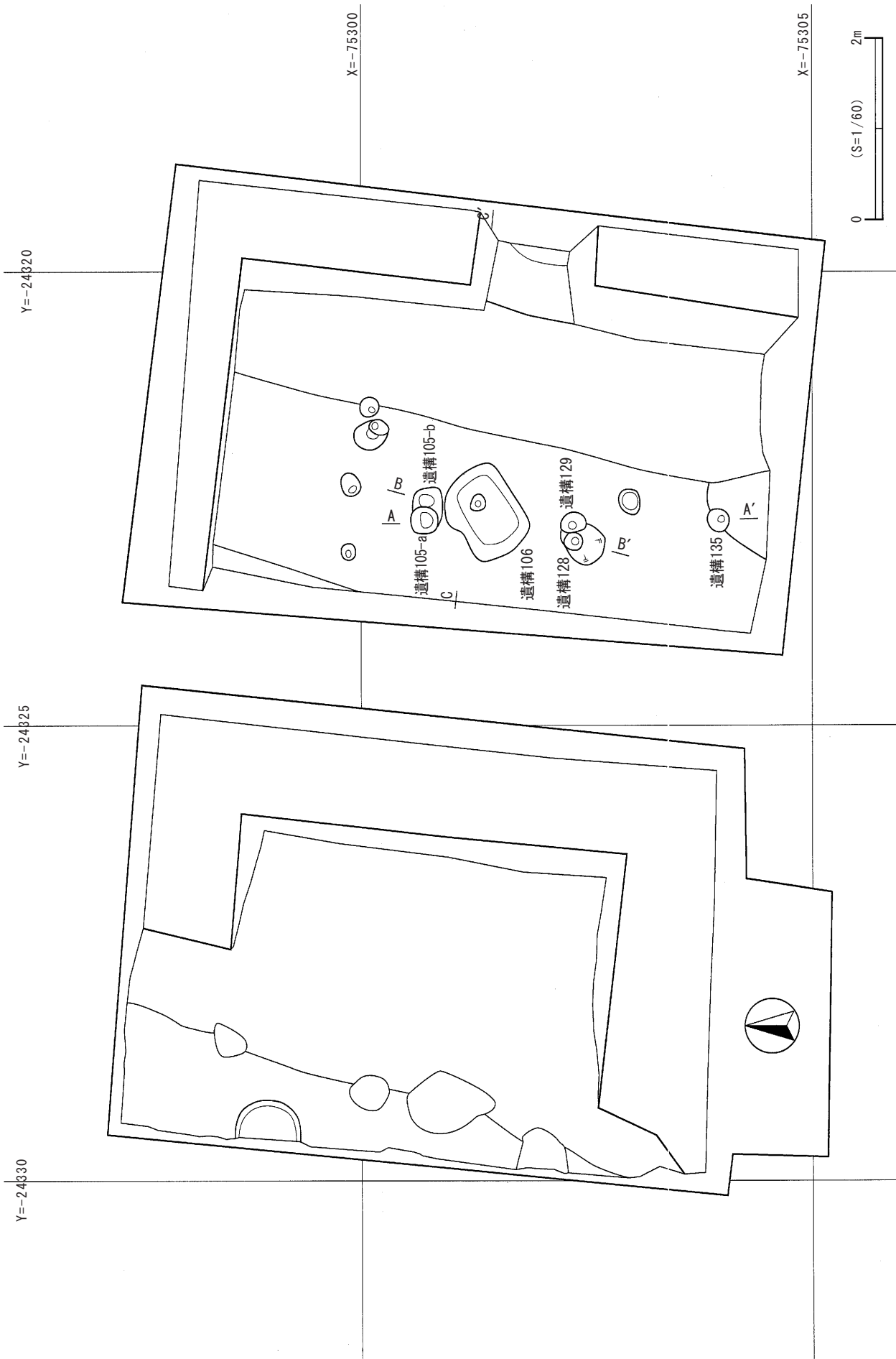


図 2 6 第 4 B 面全体図

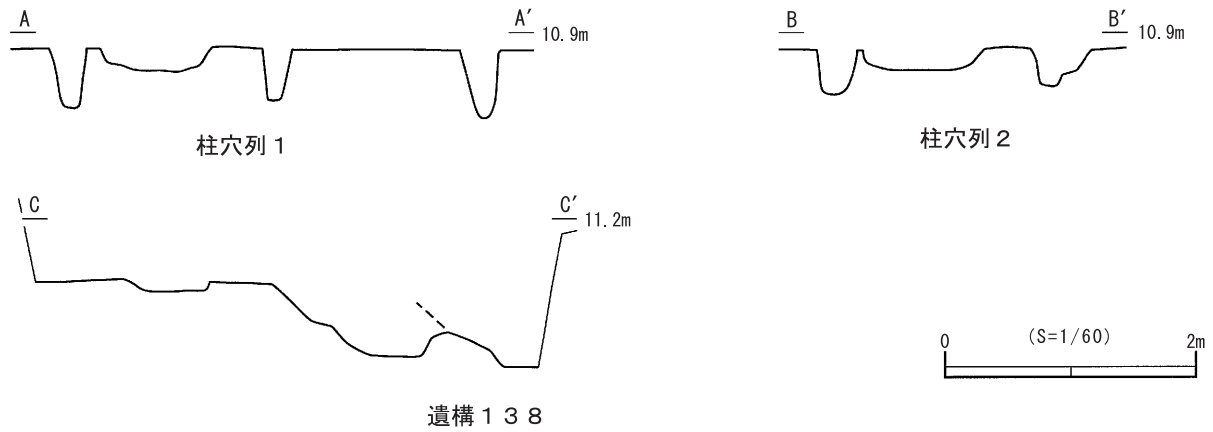


図 2 7 第 4 B 面遺構断面図

粘質土で、黄白色シルト粒や赤色スコリアに類似する微粒子を少量含む。平面形は不整隅丸方形を呈し、規模は長軸約 100 cm×短軸約 80 cm、深さ約 20 cm、底面標高約 10.6 m を測る。主軸方位は N-57°-E を指す。

出土遺物は図 25-54, 55 に示した。54 は土師器甕。55 は土師器坏。外面には赤彩が施される。

図 No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第1面					
図4	1 土器 かわらけ	(8.4)	(6.8)	1.9	
図4	2 土器 かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.8	
図4	3 土器 かわらけ	(7.4)	4.2	2.0	
図4	4 土器 かわらけ	(8.4)	(7.4)	1.8	
図4	5 土器 かわらけ	8.7	—	2.2	手づくね
図4	6 土器 かわらけ	8.6	—	3.0	手づくね
図4	7 土器 かわらけ	(9.4)	—	2.2	手づくね
図4	8 土器 かわらけ	(10.2)	—	2.6	手づくね
図4	9 土器 かわらけ	9.5	—	2.1	手づくね
図4	10 土器 かわらけ	6.6	—	1.5	手づくね、コースター
図4	11 土器 かわらけ	11.8	7.4	3.0	
図4	12 土器 かわらけ	(12.8)	(7.4)	3.5	
図4	13 土器 かわらけ	13.6	—	3.1	手づくね、灯明皿
図4	14 土器 かわらけ	13.2	—	3.2	手づくね、灯明皿
図4	15 常滑 甕	—	—	[7.8]	
図4	16 常滑 甕	—	—	[5.4]	
図4	17 山茶碗窯 捏ね鉢	—	—	[4.3]	
図4	18 青磁 蓮弁文碗	—	—	[4.7]	
図4	19 土製品 瓦器碗	(12.8)	—	[2.8]	
図4	20 土製品 管状土鍾	長さ[4.1]	幅1.7	厚さ[1.1]	
図4	21 石製品 砥石	長さ[5.6]	幅3.5	厚さ0.7	仕上砥
図4	22 銅製品 銭	直径2.4	—	—	口通寶
図4	23 銅製品 銭	直径2.4	—	—	紹聖元寶
第2面 遺構1-b					
図8	1 土器 かわらけ	(9.0)	(6.0)	1.6	
図8	2 土器 かわらけ	8.6	5.6	1.8	
図8	3 土器 かわらけ	8.6	5.6	1.9	
図8	4 土器 かわらけ	(8.6)	—	1.9	手づくね
図8	5 土器 かわらけ	9.0	—	1.8	手づくね
図8	6 土器 かわらけ	9.0	—	2.9	手づくね
図8	7 土器 かわらけ	8.5	—	1.7	手づくね
図8	8 土器 かわらけ	9.2	—	2.0	手づくね
図8	9 土器 かわらけ	(12.4)	—	3.2	手づくね
図8	10 土器 かわらけ	(13.4)	—	4.0	手づくね
図8	11 土器 かわらけ	13.6	—	3.7	手づくね
図8	12 土器 かわらけ	14.0	—	3.7	手づくね
図8	13 土器 かわらけ	14.1	—	3.2	手づくね
図8	14 土器 須恵器坏	—	—	[3.5]	
図8	15 土丹加工品	長辺7.2	短辺6.9	厚さ3.2	直径1.5cmの穿孔有り
図8	16 木製品 曲物底板	直径12.0	—	厚さ0.7	
図8	17 木製品 曲物底板	直径15.5	—	厚さ0.9	漆?付着
図8	18 木製品 板草履	長さ[8.4]	幅[2.8]	厚さ0.3	
図8	19 木製品 不明	長さ6.2	幅0.9	厚さ0.6	漆?付着、木釘有り
図8	20 木製品 不明	長さ[16.0]	幅1.7	厚さ1.4	
第2面 遺構2					
図8	21 土器 かわらけ	8.6	6.4	1.6	
図8	22 土器 かわらけ	9.4	7.0	1.8	
図8	23 土器 かわらけ	8.4	6.0	1.8	
図8	24 土器 かわらけ	8.8	6.4	1.5	
図8	25 土器 かわらけ	9.0	—	2.0	手づくね
図8	26 土器 かわらけ	9.1	—	1.9	手づくね
図8	27 土器 かわらけ	9.1	—	2.0	手づくね
図8	28 土器 かわらけ	9.1	—	2.1	手づくね
図8	29 土器 かわらけ	9.1	—	1.6	手づくね
図8	30 土器 かわらけ	8.6	—	1.9	手づくね
図8	31 土器 かわらけ	8.8	—	1.4	手づくね
図8	32 土器 かわらけ	9.0	—	2.0	手づくね
図8	33 土器 かわらけ	(12.6)	(7.6)	3.1	
図8	34 土器 かわらけ	13.0	—	3.6	手づくね
図8	35 土器 かわらけ	(12.4)	—	2.8	手づくね
図 No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考

図 No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第2面 遺構2					
図8	36 土器 かわらけ	(13.2)	—	3.3	手づくね
図8	37 土器 かわらけ	(13.4)	—	3.7	手づくね
図8	38 土器 かわらけ	13.1	—	3.9	手づくね
第2面 遺構6					
図9	1 土器 かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.7	
図9	2 土器 かわらけ	(7.0)	(5.0)	1.4	
図9	3 土器 かわらけ	7.2	5.1	1.6	
図9	4 土器 かわらけ	7.2	5.5	1.5	
図9	5 土器 かわらけ	7.2	5.0	1.7	
図9	6 土器 かわらけ	(13.6)	(8.0)	3.5	
図9	7 土器 かわらけ	(12.6)	(7.0)	3.3	
図9	8 土器 かわらけ	13.2	6.6	3.6	
図9	9 土器 かわらけ	(13.0)	—	3.0	手づくね
図9	10 土器 かわらけ	(13.4)	—	3.6	手づくね
図9	11 土器 かわらけ	(13.6)	—	3.7	手づくね
図9	12 土器 かわらけ	13.2	—	3.7	手づくね
第2面 遺構7					
図9	13 土器 かわらけ	6.9	4.6	1.4	灯明皿
図9	14 土器 かわらけ	(9.8)	(7.4)	1.7	
図9	15 土器 かわらけ	(13.8)	—	3.4	手づくね
図9	16 土器 かわらけ	(13.8)	—	3.4	手づくね
図9	17 土器 かわらけ	(12.2)	—	3.8	手づくね
図9	18 常滑 壺	—	—	[5.2]	
図9	19 山茶碗窯 捏ね鉢	—	—	[4.7]	
図9	20 瀬戸 瓶子	(5.4)	—	[3.7]	
図9	21 青磁 蓮弁文碗	—	—	[4.0]	
図9	22 青白磁 合子蓋	—	—	[1.8]	
図9	23 銅製品 銭	直径2.4	—	—	元祐通寶
第2面 遺構3					
図9	24 土器 かわらけ	10.4	—	3.8	手づくね
第2面 遺構5					
図10	1 土器 かわらけ	8.1	6.0	1.8	
図10	2 土器 かわらけ	(8.0)	6.0	2.1	
図10	3 土器 かわらけ	8.6	6.6	1.8	
図10	4 土器 かわらけ	(9.2)	7.6	1.7	
図10	5 土器 かわらけ	8.6	6.8	2.0	
図10	6 土器 かわらけ	9.0	7.6	1.9	
図10	7 土器 かわらけ	9.1	7.7	2.1	
図10	8 土器 かわらけ	9.4	7.5	2.0	
図10	9 土器 かわらけ	9.7	7.4	1.8	
図10	10 土器 かわらけ	9.5	7.8	1.8	
図10	11 土器 かわらけ	(9.5)	7.0	2.0	
図10	12 土器 かわらけ	9.7	7.0	1.9	
図10	13 土器 かわらけ	9.3	7.3	1.7	
図10	14 土器 かわらけ	(9.6)	(7.7)	1.9	
図10	15 土器 かわらけ	9.1	7.3	1.8	
図10	16 土器 かわらけ	9.6	8.0	1.9	
図10	17 土器 かわらけ	9.4	7.5	2.0	
図10	18 土器 かわらけ	9.0	6.9	2.0	
図10	19 土器 かわらけ	(9.0)	(6.8)	2.0	
図10	20 土器 かわらけ	8.0	6.5	1.9	灯明皿
図10	21 土器 かわらけ	8.6	—	2.1	手づくね
図10	22 土器 かわらけ	9.6	—	1.9	手づくね
図10	23 土器 かわらけ	9.3	—	2.0	手づくね
図10	24 土器 かわらけ	9.5	—	2.3	手づくね
図10	25 土器 かわらけ	9.0	—	1.9	手づくね
図10	26 土器 かわらけ	8.5	—	1.7	手づくね
図10	27 土器 かわらけ	8.9	—	2.1	手づくね
図10	28 土器 かわらけ	9.0	—	2.1	手づくね
図10	29 土器 かわらけ	8.8	—	2.0	手づくね
図 No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考

表1 遺物法量表

第2面 遺構5							
図10	30	土器	かわらけ	9.6	—	1.8	手づくね
図10	31	土器	かわらけ	9.5	—	2.0	手づくね
図10	32	土器	かわらけ	10.1	—	2.4	手づくね
図10	33	土器	かわらけ	12.6	8.1	4.3	
図10	34	土器	かわらけ	12.2	9.6	3.0	
図10	35	土器	かわらけ	(13.8)	7.6	3.6	
図10	36	土器	かわらけ	(12.6)	—	3.1	手づくね
図10	37	土器	かわらけ	12.9	—	4.0	手づくね
図10	38	土器	かわらけ	13.1	—	3.1	手づくね
図10	39	土器	かわらけ	12.8	—	3.6	手づくね
図10	40	土器	かわらけ	13.3	—	3.6	手づくね
図10	41	土器	かわらけ	13.5	—	3.2	手づくね
図10	42	土器	かわらけ	13.8	—	3.7	手づくね
図10	43	土器	かわらけ	13.6	—	3.8	手づくね
図10	44	土器	かわらけ	13.3	—	3.6	手づくね
図10	45	土器	かわらけ	14.1	—	3.3	手づくね
図10	46	土器	かわらけ	13.1	—	3.5	手づくね
図10	47	土器	かわらけ	(13.5)	—	3.8	手づくね
図10	48	土器	かわらけ	(13.7)	—	4.0	手づくね
図10	49	土器	かわらけ	14.8	—	3.5	手づくね
図10	50	土器	かわらけ	14.2	—	3.4	手づくね
図10	51	土器	かわらけ	13.3	—	3.1	手づくね
図10	52	土器	かわらけ	13.1	—	3.6	手づくね
図10	53	土器	かわらけ	14.4	—	3.4	手づくね
図10	54	青白磁	合子蓋	(7.4)	—	[1.9]	
第2面 遺構外							
図11	1	土器	かわらけ	6.6	4.6	1.6	
図11	2	土器	かわらけ	(7.4)	5.6	1.7	
図11	3	土器	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.5	
図11	4	土器	かわらけ	7.0	5.0	1.9	
図11	5	土器	かわらけ	(7.0)	4.6	1.7	
図11	6	土器	かわらけ	7.3	5.5	1.7	
図11	7	土器	かわらけ	6.9	4.8	1.7	
図11	8	土器	かわらけ	7.8	5.6	1.9	
図11	9	土器	かわらけ	7.8	6.0	1.9	
図11	10	土器	かわらけ	(6.2)	7.0	1.8	
図11	11	土器	かわらけ	8.6	—	2.0	手づくね
図11	12	土器	かわらけ	8.6	—	2.1	手づくね
図11	13	土器	かわらけ	9.5	—	2.0	手づくね
図11	14	土器	かわらけ	(10.8)	(6.6)	2.8	
図11	15	土器	かわらけ	(13.6)	(7.6)	3.5	
図11	16	土器	かわらけ	(12.6)	(7.2)	3.8	
図11	17	土器	かわらけ	(13.4)	—	[3.5]	手づくね
図11	18	土器	かわらけ	(13.6)	—	3.0	手づくね
図11	19	山茶碗窯	捏ね鉢	—	—	[6.7]	
図11	20	山茶碗窯	捏ね鉢	—	—	[5.4]	
図11	21	山茶碗窯	捏ね鉢	—	—	[5.9]	
図11	22	常滑	捏ね鉢	—	11.6	[5.1]	
図11	23	青磁	蓮弁文碗	—	—	[4.1]	
図11	24	青白磁	合子	(5.4)	(6.2)	1.8	
図11	25	土器	かわらけ	長辺7.7	短辺[5.2]	高さ[1.8]	底面穿孔
図11	26	土製品	瓦質手焙	(31.6)	(24.9)	12.3	
図11	27	瓦	丸瓦	長さ[12.3]	幅[9.6]	厚さ2.6	
図11	28	石製品	滑石鍋	—	—	[5.8]	
図11	29	石製品	碁石	長辺1.9	短辺1.8	厚さ0.3	
図11	30	石製品	砥石	長さ[5.0]	幅2.0	厚さ1.6	仕土砥
図11	31	銅製品	銭	直径2.4	—	—	□口通貫
第3面 遺構7-b							
図14	1	土器	かわらけ	(8.6)	(5.8)	2.0	
図14	2	土器	かわらけ	(8.8)	(7.0)	1.8	

第3面 遺構7-b							
図14	3	土器	かわらけ	9.2	5.2	2.3	
図14	4	土器	かわらけ	(9.6)	(7.2)	1.9	
図14	5	土器	かわらけ	9.0	6.0	2.0	
図14	6	土器	かわらけ	9.4	6.5	1.7	灯明皿
図14	7	土器	かわらけ	(9.4)	—	2.2	手づくね、灯明皿
図14	8	土器	かわらけ	12.2	—	3.3	手づくね
図14	9	土器	かわらけ	12.0	—	3.6	手づくね
図14	10	土器	かわらけ	12.3	—	3.7	手づくね
図14	11	土器	かわらけ	(13.6)	—	3.4	手づくね
図14	12	土器	かわらけ	(12.6)	—	[3.0]	手づくね
図14	13	土器	かわらけ	12.9	—	3.4	手づくね
図14	14	土器	かわらけ	13.2	—	3.6	手づくね
図14	15	土器	かわらけ	13.2	—	3.8	手づくね
図14	16	土器	かわらけ	13.8	—	3.0	手づくね
図14	17	土器	かわらけ	13.4	—	3.4	手づくね
図14	18	土器	かわらけ	13.6	—	3.2	手づくね
図14	19	土器	かわらけ	14.7	—	3.5	手づくね
第3面 遺構92							
図14	20	土器	かわらけ	12.6	7.9	3.9	
図14	21	土器	かわらけ	(13.4)	8.6	3.8	
図14	22	土器	かわらけ	(11.6)	(8.6)	3.5	
図14	23	土器	かわらけ	13.6	—	3.7	手づくね
図14	24	土器	かわらけ	13.6	—	3.5	手づくね
図14	25	土器	かわらけ	(13.6)	—	3.0	手づくね
第3面 遺構26							
図14	26	土器	かわらけ	9.4	7.1	2.4	
図14	27	土器	かわらけ	(13.2)	—	3.2	手づくね
図14	28	土器	白かわらけ	—	—	[1.2]	内折れ
第3面 遺構56・66							
図14	29	土器	かわらけ	13.2	—	3.2	手づくね
図14	30	常滑	甕	—	—	[9.1]	
第3面 遺構57							
図14	31	青磁	画花文小皿	—	—	[2.2]	
図14	32	青磁	画花文小皿	—	4.0	[1.7]	
図14	33	瓦	平瓦	長さ[14.2]	幅[10.0]	厚さ2.5	
第3面 遺構58							
図15	1	土器	かわらけ	(8.8)	(6.0)	1.6	
図15	2	土器	かわらけ	(8.8)	(6.8)	2.0	
図15	3	土器	かわらけ	9.6	—	2.0	手づくね
図15	4	瀬戸	四耳壺	—	—	[8.0]	
第3面 遺構67							
図15	5	土器	かわらけ	(8.2)	(6.6)	1.9	
図15	6	土器	かわらけ	(9.4)	(6.4)	2.0	
図15	7	土器	かわらけ	(13.6)	—	2.9	手づくね
第3面 遺構71							
図15	8	土器	かわらけ	(8.4)	(6.0)	2.0	
図15	9	土器	かわらけ	9.2	—	1.9	手づくね
図15	10	土器	かわらけ	(12.6)	—	[3.1]	手づくね
図15	11	土器	かわらけ	13.4	—	3.0	手づくね
第3面 遺構77							
図15	12	土器	かわらけ	(9.0)	(6.6)	1.7	
図15	13	土器	かわらけ	8.8	—	1.8	手づくね
図15	14	土器	かわらけ	(13.8)	—	3.6	手づくね
図15	15	土器	かわらけ	(13.8)	—	2.8	手づくね
図15	16	土器	かわらけ	13.4	—	3.6	手づくね、灯明皿
図15	17	土器	かわらけ	12.6	—	3.2	手づくね
第3面 遺構51							
図15	18	土器	かわらけ	8.4	7.0	2.0	
図15	19	石製品	砥石	長さ5.8	幅2.2	厚さ1.7	中砥

表2 遺物法量表

図 No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第3面 遺構90					
図15 20	土器 かわらけ	(9.0)	(6.6)	2.2	
図15 21	土器 かわらけ	(9.0)	(7.2)	2.1	
図15 22	土器 かわらけ	(9.6)	(7.2)	2.0	
図15 23	土器 かわらけ	(9.4)	(7.0)	1.8	
図15 24	土器 かわらけ	9.2	7.0	2.1	
図15 25	土器 かわらけ	(9.8)	(8.6)	2.1	
図15 26	土器 かわらけ	8.6	—	2.5	手づくね
図15 27	土器 かわらけ	(9.0)	—	1.9	手づくね
図15 28	土器 かわらけ	8.8	—	2.7	手づくね
図15 29	山茶碗窯 捏ね鉢	—	—	[5.0]	
第3面 遺構78					
図15 30	銅製品 銭	直径2.4	—	—	紹聖元寶
第3面 遺構55					
図15 31	土器 かわらけ	(9.6)	—	2.1	手づくね
第3面 遺構65					
図15 32	土器 かわらけ	(13.4)	—	3.8	手づくね
図15 33	土器 かわらけ	13.3	—	3.4	手づくね
第3面 遺構84					
図15 34	土器 かわらけ	9.1	—	2.1	手づくね
第3面 遺構外					
図16 1	土器 かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.5	
図16 2	土器 かわらけ	7.0	4.7	1.6	
図16 3	土器 かわらけ	7.5	5.5	1.5	
図16 4	土器 かわらけ	7.8	7.0	1.6	
図16 5	土器 かわらけ	(9.0)	(6.4)	2.1	
図16 6	土器 かわらけ	(8.8)	(6.2)	1.7	
図16 7	土器 かわらけ	(9.4)	(8.2)	1.8	
図16 8	土器 かわらけ	10.1	7.3	1.9	
図16 9	土器 かわらけ	8.5	—	2.0	手づくね
図16 10	土器 かわらけ	(9.2)	—	1.9	手づくね
図16 11	土器 かわらけ	(9.8)	—	1.9	手づくね
図16 12	土器 かわらけ	(9.4)	—	1.6	手づくね
図16 13	土器 かわらけ	(8.8)	—	2.0	手づくね
図16 14	土器 かわらけ	(9.6)	—	2.1	手づくね
図16 15	土器 かわらけ	(9.8)	—	2.1	手づくね
図16 16	土器 かわらけ	9.4	—	2.5	手づくね
図16 17	土器 かわらけ	(9.6)	—	2.0	手づくね
図16 18	土器 かわらけ	9.0	—	2.1	手づくね
図16 19	土器 かわらけ	(9.0)	—	2.2	手づくね
図16 20	土器 かわらけ	8.7	—	2.0	手づくね
図16 21	土器 かわらけ	8.4	—	2.0	手づくね
図16 22	土器 かわらけ	(9.2)	—	2.2	手づくね
図16 23	土器 かわらけ	(6.2)	—	1.4	手づくね、コースター
図16 24	土器 かわらけ	(13.4)	—	3.3	手づくね、灯明皿
図16 25	土器 かわらけ	13.4	—	3.2	手づくね
図16 26	土器 かわらけ	(13.6)	—	3.4	手づくね
図16 27	土器 かわらけ	13.2	—	3.4	手づくね
図16 28	土器 かわらけ	(13.4)	—	3.5	手づくね
図16 29	土器 かわらけ	(13.6)	—	3.4	手づくね
図16 30	土器 かわらけ	(13.2)	—	3.7	手づくね
図16 31	土器 かわらけ	(12.8)	—	3.7	手づくね
図16 32	土器 かわらけ	(13.6)	—	3.4	手づくね
図16 33	土器 かわらけ	(13.2)	—	3.6	手づくね
図16 34	土器 かわらけ	12.1	—	3.3	手づくね
図16 35	土器 かわらけ	(13.6)	—	2.9	手づくね
図16 36	土器 かわらけ	(12.8)	—	3.3	手づくね
図16 37	土器 かわらけ	(12.8)	—	3.7	手づくね
図16 38	土器 かわらけ	(13.6)	—	3.8	手づくね
図16 39	土器 かわらけ	(12.8)	—	[3.4]	手づくね
図16 40	土器 かわらけ	(13.8)	—	3.0	手づくね

図 No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第3面 遺構外					
図16 41	土器 かわらけ	(13.6)	—	2.8	手づくね
図16 42	常滑 甕	—	—	[10.5]	
図16 43	山茶碗窯 捏ね鉢	—	—	[7.3]	
図16 44	山茶碗窯 捏ね鉢	—	(12.6)	[9.3]	
図17 45	青磁 蓮弁文碗	—	—	[3.7]	
図17 46	青磁 折腰鉢	—	5.8	[2.0]	
図17 47	黄釉紋胎 壺	—	—	[7.7]	
図17 48	石製品 硯	長さ11.9	幅7.0	高さ2.2	
図17 49	鉄製品 鎌状製品	長さ[20.5]	幅2.2	厚さ0.9	
図17 50	鉄製品 鉄釘	長さ7.6	幅1.2	厚さ1.1	
第4A面 遺構91					
図19 1	土器 かわらけ	(9.6)	5.4	1.8	
図19 2	土器 かわらけ	(9.2)	4.6	1.7	
図19 3	土器 かわらけ	(9.6)	(6.4)	1.7	
図19 4	土器 かわらけ	(9.0)	(4.6)	1.6	
図19 5	土器 かわらけ	(9.2)	(7.4)	1.8	
図19 6	土器 かわらけ	(9.2)	4.2	2.3	
図19 7	土器 かわらけ	(8.6)	5.0	1.9	
図19 8	土器 かわらけ	(9.6)	(5.6)	1.7	
図19 9	土器 かわらけ	(8.8)	(5.6)	1.6	
図19 10	土器 かわらけ	(8.6)	(5.6)	1.8	
図19 11	土器 かわらけ	(9.6)	6.0	2.1	
図19 12	土器 かわらけ	(9.0)	(5.0)	1.6	
図19 13	土器 かわらけ	(9.0)	(7.0)	2.0	
図19 14	土器 かわらけ	(9.2)	4.0	1.8	
図19 15	土器 かわらけ	9.2	4.4	1.7	
図19 16	土器 かわらけ	8.3	6.0	1.6	
図19 17	土器 かわらけ	(9.2)	4.6	2.1	
図19 18	土器 かわらけ	(8.8)	5.0	2.0	
図19 19	土器 かわらけ	(8.4)	—	1.6	手づくね
図19 20	土器 かわらけ	(8.6)	—	1.8	手づくね
図19 21	土器 かわらけ	(9.6)	—	1.8	手づくね
図19 22	土器 かわらけ	(8.8)	—	2.0	手づくね
図19 23	土器 かわらけ	(9.0)	—	1.4	手づくね
図19 24	土器 かわらけ	(9.0)	—	1.5	手づくね
図19 25	土器 かわらけ	(9.0)	—	1.8	手づくね
図19 26	土器 かわらけ	(9.0)	—	1.7	手づくね
図19 27	土器 かわらけ	(9.0)	—	1.4	手づくね
図19 28	土器 かわらけ	8.8	—	1.7	手づくね
図19 29	土器 かわらけ	(9.4)	—	1.9	手づくね
図19 30	土器 かわらけ	(9.4)	—	1.9	手づくね
図19 31	土器 かわらけ	9.3	—	1.9	手づくね
図19 32	土器 かわらけ	(9.6)	—	1.7	手づくね
図19 33	土器 かわらけ	9.0	—	1.3	手づくね
図19 34	土器 かわらけ	(10.0)	—	1.6	手づくね
図19 35	土器 かわらけ	9.2	—	2.1	手づくね
図19 36	土器 かわらけ	9.4	—	2.0	手づくね
図19 37	土器 かわらけ	9.4	—	1.7	手づくね
図19 38	土器 かわらけ	9.4	—	1.9	手づくね
図19 39	土器 かわらけ	9.2	—	1.8	手づくね
図19 40	土器 かわらけ	(9.6)	—	1.2	手づくね
図19 41	土器 かわらけ	(9.0)	—	2.1	手づくね
図19 42	土器 かわらけ	(8.6)	—	1.4	手づくね
図19 43	土器 かわらけ	(8.6)	—	1.9	手づくね
図19 44	土器 かわらけ	(6.4)	—	1.2	手づくね、コースター
図19 45	土器 かわらけ	(13.6)	(8.0)	3.1	手づくね
図19 46	土器 かわらけ	(13.4)	(7.6)	3.1	手づくね
図19 47	土器 かわらけ	13.4	—	2.9	手づくね
図19 48	土器 かわらけ	12.4	—	3.4	手づくね、灯明皿
図19 49	土器 かわらけ	(13.6)	—	2.8	手づくね

表3 遺物法量表

図	No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第4A面 遺構91						
図19	50	土器 かわらけ	11.8	—	3.0	手づくね
図19	51	土器 かわらけ	13.8	—	3.5	手づくね、灯明皿
図19	52	土器 かわらけ	(14.0)	—	3.5	手づくね
図19	53	土器 かわらけ	(14.4)	—	3.3	手づくね
図19	54	土器 かわらけ	13.4	—	2.8	手づくね
図19	55	土器 かわらけ	13.8	—	3.3	手づくね
図19	56	土器 かわらけ	13.8	—	3.2	手づくね
図19	57	土器 かわらけ	(13.0)	—	4.6	手づくね
図19	58	土器 かわらけ	13.6	—	3.7	手づくね
図20	59	白磁 劃花文小皿	—	(4.0)	[1.5]	
図20	60	土製品 伊勢土鍋	—	—	[2.2]	
図20	61	土製品 円盤	長辺4.9	短辺4.8	厚さ0.8	かわらけ打ち欠き
図20	62	土製品 円盤	長辺3.5	短辺3.3	厚さ0.8	かわらけ打ち欠き
図20	63	土器 土師器甕	(15.5)	—	[6.9]	
図20	64	瓦 平瓦	長さ[10.2]	幅[6.5]	厚さ2.0	
図20	65	瓦 軒丸瓦	長さ[7.1]	幅[5.2]	厚さ3.2	
図20	66	漆器 皿	(9.8)	7.6	1.5	
図20	67	漆器 椀	(15.6)	9.0	4.6	
図20	68	木製品 不明	長さ2.0	幅1.9	厚さ0.7	
図20	69	木製品 舟形				
図20	70	木製品 卒塔婆	長さ33.2	幅3.0	厚さ0.3	
図20	71	木製品 箸	長さ26.9	幅0.8	厚さ0.35	
図20	72	木製品 箸	長さ26.9	幅0.6	厚さ0.4	
図20	73	木製品 箸	長さ26.3	幅0.8	厚さ0.5	
図20	74	木製品 箸	長さ24.9	幅0.9	厚さ0.35	
図20	75	木製品 箸	長さ23.0	幅0.7	厚さ0.4	
図20	76	木製品 鉤?	長さ[17.1]	幅[5.2]	直径0.8	
図20	77	木製品 曲物底板	長さ24.4	幅[4.7]	厚さ0.4	
図20	78	木製品 曲物底板	長さ23.2	幅[3.1]	厚さ0.35	
図21	79	木製品 衣紋掛け	長さ46.8	—	直径0.6	
図21	80	木製品 板草履	長さ23.1	幅[3.4]	厚さ0.3	
図21	81	木製品 板草履	長さ24.0	幅[2.8]	厚さ0.15	
図21	82	木製品 板草履	長さ23.7	幅[3.1]	厚さ0.35	
図21	83	木製品 不明	長さ22.6	幅1.1	厚さ0.6	
図21	84	木製品 不明	長さ[18.1]	幅[1.9]	厚さ0.4	
図21	85	木製品 不明	長さ34.1	幅2.4	厚さ1.7	
図21	86	木製品 不明	長さ44.8	幅2.0	厚さ1.7	
図21	87	木製品 不明	長さ[20.6]	幅[1.6]	厚さ0.75	
図21	88	木製品 不明	長さ[23.8]	幅1.4	厚さ0.6	
図21	89	木製品 不明	長さ14.4	幅2.2	厚さ0.6	
図21	90	木製品 不明	長さ13.4	幅2.0	厚さ1.0	
図21	91	木製品 不明	長さ13.9	幅6.7	厚さ0.7	
図21	92	木製品 不明	長さ13.4	幅1.7	厚さ1.0	先端焦げ痕有り
図21	93	木製品 不明	長さ7.6	幅5.8	厚さ2.5	
図21	94	木製品 不明	長さ10.5	幅3.9	厚さ2.0	
図21	95	木製品 不明	長さ10.6	幅6.6	厚さ1.7	
図22	96	木製品 弓形	長さ87.7	太さ径1.6	—	
第4A面 遺構96						
図23	1	土器 かわらけ	(8.8)	(7.0)	2.1	
図23	2	土器 かわらけ	8.4	6.0	1.7	
図23	3	土器 かわらけ	(8.4)	(6.0)	1.7	
図23	4	土器 かわらけ	6.4	5.4	1.7	コースター
図23	5	土器 かわらけ	(9.8)	—	1.5	手づくね
図23	6	土器 かわらけ	9.2	—	2.0	手づくね
図23	7	土器 かわらけ	9.1	—	1.7	手づくね
図23	8	土器 かわらけ	8.8	—	1.7	手づくね
図23	9	土器 かわらけ	(9.0)	—	1.8	手づくね
図23	10	土器 かわらけ	(8.4)	—	1.8	手づくね
図23	11	土器 かわらけ	(8.6)	—	1.7	手づくね
図23	12	土器 かわらけ	(8.4)	—	1.7	手づくね

図	No.	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
第4A面 遺構96						
図23	13	土器 かわらけ	9.0	—	1.9	手づくね
図23	14	土器 かわらけ	(8.4)	—	1.8	手づくね
図23	15	土器 かわらけ	9.0	—	1.8	手づくね
図23	16	土器 かわらけ	(8.8)	—	1.7	手づくね
図23	17	土器 かわらけ	8.6	—	1.8	手づくね
図23	18	土器 かわらけ	8.8	—	1.6	手づくね
図23	19	土器 かわらけ	(6.0)	—	1.7	手づくね、コースター
図23	20	土器 かわらけ	(12.6)	(6.6)	4.2	
図23	21	土器 かわらけ	(11.6)	(7.0)	3.3	
図23	22	土器 かわらけ	(13.4)	—	3.6	手づくね
図23	23	土器 かわらけ	(13.6)	—	2.3	手づくね
図23	24	土器 かわらけ	(13.6)	—	3.1	手づくね
図23	25	土器 かわらけ	(13.6)	—	3.4	手づくね
図23	26	土器 かわらけ	(13.0)	—	3.3	手づくね
図23	27	土器 かわらけ	(13.6)	—	3.3	手づくね
図23	28	土器 かわらけ	(12.8)	—	3.4	手づくね
図23	29	土器 かわらけ	13.2	—	3.1	手づくね
図23	30	土器 かわらけ	13.4	—	3.8	手づくね
図23	31	土器 かわらけ	13.6	—	3.2	手づくね
図23	32	土器 かわらけ	13.6	—	3.3	手づくね
図23	33	土器 かわらけ	(13.6)	—	3.4	手づくね
図23	34	土器 かわらけ	(13.7)	—	3.9	手づくね
図23	35	土器 かわらけ	(13.2)	—	3.3	手づくね、底面穿孔
図23	36	青磁 劃花文碗	—	5.8	[2.7]	
図23	37	船載 褐釉水注	—	—	[7.0]	
図25	38	木製品 曲物底板	直径9.8	—	厚さ0.7	
図25	39	木製品 板草履	長さ[18.7]	幅[3.9]	厚さ0.6	
図25	40	木製品 板草履	長さ[13.7]	幅[3.0]	厚さ0.35	
図25	41	木製品 板草履	長さ[14.1]	幅[3.1]	厚さ0.3	焦げ痕有り
図25	42	木製品 板草履	長さ[12.1]	幅[2.6]	厚さ0.3	
図25	43	木製品 板草履	長さ[8.9]	幅[3.3]	厚さ0.25	焦げ痕有り
図25	44	木製品 鋤先?	長さ[17.0]	幅14.7	厚さ1.8	
図25	45	木製品 箸	長さ24.7	幅0.7	厚さ0.4	
図25	46	木製品 不明	長さ19.8	幅1.0	厚さ0.7	
図25	47	木製品 不明	長さ27.6	幅1.9	厚さ1.4	
図25	48	木製品 折敷	長さ[17.8]	幅[2.5]	厚さ0.15	焦げ痕有り
図25	49	木製品 折敷	長さ28.4	幅[4.8]	厚さ0.25	
図25	50	木製品 不明	長さ[11.3]	幅1.6	厚さ0.9	
図25	51	木製品 不明	長さ[3.6]	—	直径1.6	矢柄?
図25	52	木製品 不明	長さ[10.1]	—	直径1.3	矢柄?
図24	53	木製品 たも	長さ52.5	2.3	2.2	
第4B面遺構106						
図25	54	土器 土師器甕	—	—	[2.9]	
図25	55	土器 土師器杯	—	—	[2.1]	
第4B面遺構128						
図25	56	土器 土師器甕	—	—	[3.8]	

表4 遺物法量表

第4章 まとめ

本調査では、東半部が近代以降の削平によって大きく失われていたことは非常に残念であったが、それでも得られた成果は大きい。ここでは年代を追って各面ごとに補足を加え、まとめとしたい。なお、文中の地点名表記は図1の地点番号を用いた。

[第4B面]

検出遺構は遺物の出土量が少なく、すべての遺構が同時期のものといえるか判然としない。出土遺物は多くが弥生中期後半～古墳前期に収まる年代のものと思われ、地点18,19などで同時代の集落跡が検出されていることを考えると、本遺跡も同一集落の一部であることが考えられる。調査地点の東を流れる東御門川は、少なくとも弥生時代にはほぼ同じ場所を流れていたことが地点11や地点2で確認されており、古東御門川が本調査地点や地点18,19を含む集落の東限であったことを思わせる。

[第4A面]

検出された薬研堀は幅約5.1m、深さ約2.7mという大規模なもので、出土遺物からは13世紀中頃までに埋没したものと考えられる。覆土はいくつかに分層できるものの各層は厚く、自然に埋没するに任せたものでなく人為的に埋め立てたことが推測される。東御門川からあまり間隔を空けずに開鑿されているが、その方位は河川に沿ったものではなく、対岸に鎮座する荏柄天神社の参道に対して平行に近い方位を示す。荏柄天神社はその社伝によると、長治元年(1104)に里人によって建てられたのが始まりとされ、頼朝が御所をここに構えたときには鬼門の守護神として崇め、改めて社殿を建てたという。社伝をそのまま信用するならば、薬研堀が荏柄天神社参道を意識した方位で設計された可能性も考え得る。この薬研堀を幕府東限の境界施設と考えると、嘉禄元年(1225)の御所移転後にその機能を失い、大倉辻が商業地域として指定される建長三年(1251)頃までには埋め立てられた、として出土遺物に年代的な齟齬はないように思う。薬研堀の東側に近接して断面逆台形の遺構96も検出されているが、こちらは薬研堀とは軸方位が異なり、むしろ東御門川に平行して開鑿されている。出土遺物からは薬研堀との明確な時期差が認められず、同時期に機能していた可能性がある。ただし、遺構96が河川に沿うもので薬研堀とは異なる方位を示すことから考えると、こちらは幕府にのみ適用される施設ではなかったのかもしれない。

薬研堀と遺構96が同時期に存在していたとすれば、それぞれの溝を直線的に延長すると調査区北端より約12m北のところでも溝は交差することになる。また、両溝が時期の異なるものだとしても、薬研堀は調査区北端より25～30mほど北のところでも東御門川と交差することになる。薬研堀の覆土には河川堆積に特徴的な砂礫層や斜交葉理などは確認されず、河川と接続していたとは考えにくいので、薬研堀は河川に接続する手前で止まってしまうか、あるいは方位を変えて延長することが推測される。延長するものであった場合、やや西へ振れて川沿いに北へ延びることも考えられるが、河川に接続するよりやや手前、清泉小学校南辺の道路沿い辺りで西に折れて延びる可能性も考えておきたい。ちなみに、この通称「桜道」と呼ばれる道路下には暗渠となっている流路があり、かつては「堀川」と呼ばれる河川であったらしい。大倉幕府推定域の北限となっている道路下にも「溝川」と呼ばれる流路が存在したらしいが、こちらは明治42～43年(1909～10)頃に開鑿されたもので、「堀川」はそれよりも古くから流れていたという(註1)。これが幕府の北限を示す可能性も視野に入れておきたいが、明治以前から存在していたことは知れるものの、中世に存在していたかどうかは現在のところ判らない。

大倉幕府東西域は県遺跡台帳に登録されている大倉幕府域より西へ延びる可能性が以前より様々な研究者によって指摘されている。師範学校が出来る以前には筋替橋から横浜国大附属小学校校庭入口に向かって北に延びる道があり、その道路が西の境界を示すという。これを裏付けるように、地点7では

幕府西限を示すような遺構は検出されず、地点10で南北柱穴列や東西溝など西限・南限を示すような遺構群が検出されている。ただ、この範囲を含めた幕府推定域は72,450㎡となるが、これは後の「宇津宮辻子幕府」や「若宮大路幕府」に比べて広大に過ぎるのではないかという指摘がある（註2）。「宇津宮辻子幕府」と「若宮大路幕府」に推定される範囲を合わせて、東を小町大路、西を若宮大路、北を横大路、南を雪ノ下カトリック教会の南辺とした場合、その面積はおよそ72,200㎡となり、二つの幕府域を併せてようやく大倉幕府推定域に匹敵する。大倉幕府域東限を本調査地点、西限・南限を地点10とすると、境界が確認されていないのは北限ということになるが、試みに大倉幕府域北限を清泉小学校南辺の道路と仮定して面積を再計算すると、およそ37,000㎡を測る。これは「宇津宮辻子幕府」・「若宮大路幕府」合算面積のほぼ半分に近い数値となり、単純に面積の比較でいうと妥当な数値とも思えるが、大倉幕府域については今後の資料蓄積を待たねば確かなことを言えないのが現状である。

[第3面]

本面での出土遺物は13世紀中頃～後半に比定されるもので、第4A面で検出された薬研堀を覆う範囲まで地業面が広がっており、薬研堀は完全に埋没している。この時期の周辺は商業地域的な性格が色濃くなってくるものの、本調査地点では礎石や、四寸角ほどの柱が遺存する柱穴などが検出され、出土遺物に関しても絞胎陶片など類例の少ないものもあり、町屋的な様相とは思われない。ローム土を用いた地業面もあまり見かけることのないもので、特異な印象を受ける。『吾妻鏡』では宝治元年（1247）正月十三日条に、法華堂前の人家10軒が焼け、金沢実時（「陸奥掃部助」）亭もその中に入っていたとする。一帯が民家と武家屋敷の混在する状況にあったと考えられ、本調査地点では礎石や柱穴の配列は定かでないものの、どちらかといえば武家屋敷的な様相と捉えておきたい。

[第2面]

本面では溝のほか、土坑、窪地から集中的にかわらけが出土しているが、全体的に遺構の密度は薄い。出土遺物に薄手造りのかわらけが含まれ始めてくることから13世紀後半頃と考えられるが、手づくねかわらけも相当量出土しており、第3面から第2面にかけての年代幅はそれほど広くないのかもしれない。検出された南北溝は、その南延長が地点2検出の南北溝に重なる位置となる。ただし、出土遺物の年代観は必ずしも一致せず、地点2では戦国期まで存続するようである。

[第1面]

検出された遺構はすべて近代以降のものである。近世以降の耕作による削平を受けており、このため14世紀代以降の様相については明らかでないものの、14世紀代に比定される遺物も出土しており、第2面以降も濃密な生活空間が展開していたことは想像に難くない。

（註1）鎌倉市教育委員会編『鎌倉市文化財資料第7集 としよりのはなし』第五刷1990年（初版1971年） 鎌倉市教育委員会

（註2）馬淵和雄「大倉幕府跡（No.253）」『鎌倉市緊急調査報告書21 第1分冊』2005年 鎌倉市教育委員会

出土遺物構成(点数)

分類	かわらけ		白かわらけ		青磁		白磁		青白磁		彩釉		常滑		
	コースター	加工品	碗皿類	壺瓶類	不明他	碗皿類	壺瓶類	不明他	碗皿類	壺瓶類	不明他	彩釉	片口鉢	壺瓶類	転用品
出土面															
1面	1	—	17	—	1	4	1	—	—	1	1	—	5	114	—
2面	2	1	34	—	6	13	—	1	—	4	1	2	7	268	—
3面	—	—	14	—	—	4	6	—	—	1	3	4	1	139	—
4A面	4	2	11	—	—	2	1	—	—	2	1	3	2	98	1
4B面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	9	3	76	—	7	23	8	1	7	3	6	8	15	619	1

分類	瀬戸		渥美		魚住・亀山		山茶碗窯		土製火鉢		瓦		金属製品	
	碗皿類	鉢類	壺瓶類	魚住	山茶碗窯	片口鉢	土師質	瓦質	土製品	平瓦	丸瓦	釘	銭	不明他
出土面														
1面	1	—	6	—	1	4	—	2	1	—	—	1	—	—
2面	3	10	1	1	2	19	11	1	—	10	1	12	2	—
3面	—	4	2	1	4	5	2	1	—	4	—	11	3	2
4A面	—	1	2	—	—	5	4	—	3	6	4	1	—	5
4B面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	4	16	18	2	7	30	17	4	5	20	5	25	6	7

分類	石製品		木製品						自然遺物		弥生～古代		合計	
	硯	砥石	不明他	椀皿	装身具	食膳具	容器	調度材	呪術具	不明他	鳥獣魚	貝		種子
出土面														
1面	—	2	—	—	—	—	2	—	—	—	1	2	—	3
2面	1	1	3	—	3	—	—	—	—	—	16	1	—	5
3面	1	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	20
4A面	—	—	3	4	13	2	2	1	1	3	29	9	—	30
4B面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	273
合計	2	3	8	4	16	4	4	1	3	46	17	3	1	1209

出土かわらけ構成(重量) ※単位はg(グラム)

分類	かわらけ		白かわらけ		青磁		白磁		青白磁		彩釉		常滑	
	B大	B中	B小	C大	C中	C小	D大	D小	E大	E小	合計	不明他	不明他	不明他
出土面														
1面	1,630	—	530	270	—	—	3,850	130	50	120	6,580	—	—	—
2面	3,725	—	4,080	940	20	—	60,940	7,890	900	350	78,865	—	—	—
3面	1,780	—	1,720	—	—	—	68,200	6,145	870	610	79,325	—	—	—
4A面	440	—	90	—	—	—	35,350	6,580	2,740	1,910	47,110	—	—	—
合計	7,575	—	6,420	1,210	20	20	168,340	20,745	4,560	2,990	211,880	—	—	—

※かわらけ分類について

先頭のアルファベットは成形・器形を示し、Aを胎土粉質で口縁部外反するロクロ糸切り成形、Cを焼成良好な薄手造りのロクロ糸切り成形、Bをそれ以外のロクロ糸切り成形、Dを手づくね成形、Eを初期かわらけに見られるロクロ低回転糸切り・静止糸切り成形で器表面をナデ調整しないタイプとした。後部の漢字は器種を示し、大皿を大、中皿を中、小皿を小とした。コースターは器壁の極端に低い極小型かわらけを示す。

※Aタイプは出土しておらず、また、コースターは個体数が明確なため項目を除いた。第4B面はかわらけが出土していないため項目を除いた。

表 5 遺物構成表

図版1



1. I区第1面全景(南から)



2. I区第2面全景(東から)



3. I区第2面遺構2・3・5(西から)



4. I区第2面遺構2上層(西から)



5. I区第2面遺構2下層(西から)



6. I区第2面遺構2かわらけ重なり状況(北東から)



7. I区第2面遺構5・6(西から)



8. I区第2面遺構7(西から)



1. I区第2面遺構3 (北から)



2. I区第2面遺構5上層 (西から)



3. I区第2面遺構5上層かわらけ重なり状況 (東から)



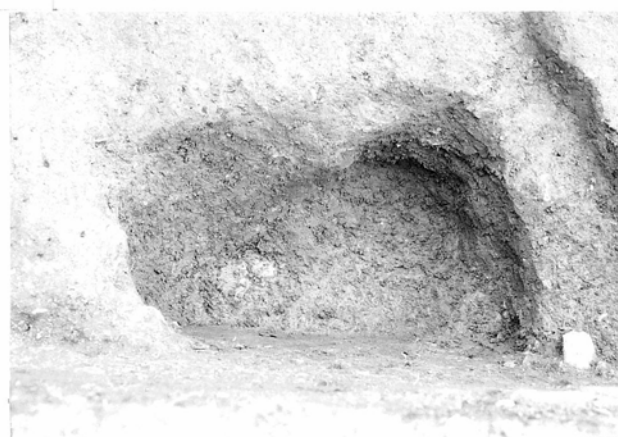
4. I区第2面遺構5中層 (西から)



5. I区第2面遺構5下層 (西から)



6. I区第2面遺構5下層かわらけ重なり状況 (東から)



7. I区第2面遺構5掘り方 (西から)



8. I区第3面全景 (南から)

図版3



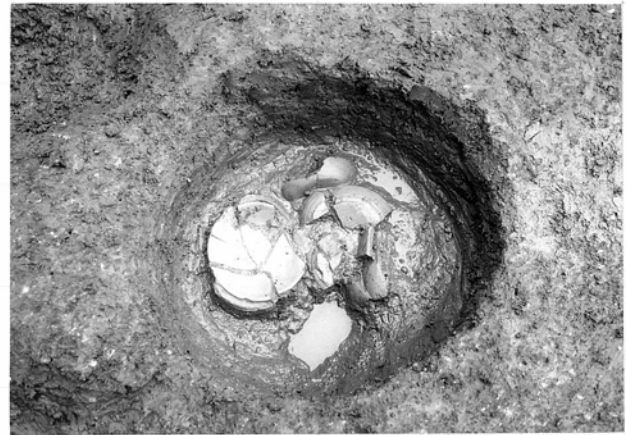
1. I区第3面礎石列（北から）



2. I区第3面遺構7-b（西から）



3. I区第3面遺構7-bかわらけ出土状況（北から）



4. I区第3面遺構92（西から）



5. I区第3面遺構56（西から）



6. I区第3面遺構84（北から）



7. I区第3面調査風景（南東から）



8. I区第4A面全景（南から）



1. I区調査区北壁堆積土層



2. I区第4A面遺構91弓形出土状況(南西から)



3. II区第4A面全景(南から)



4. II区第4A面遺構96かわらけ出土状況(北から)



5. II区調査区北壁堆積土層



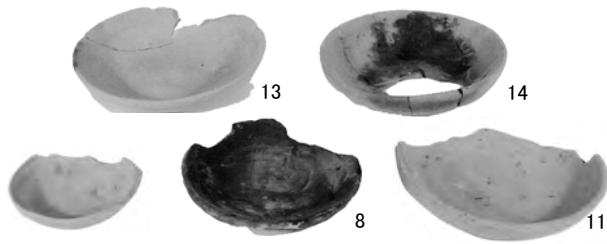
6. I区第4B面全景(北から)



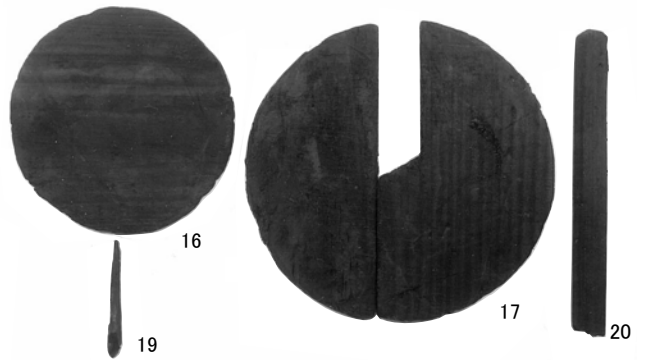
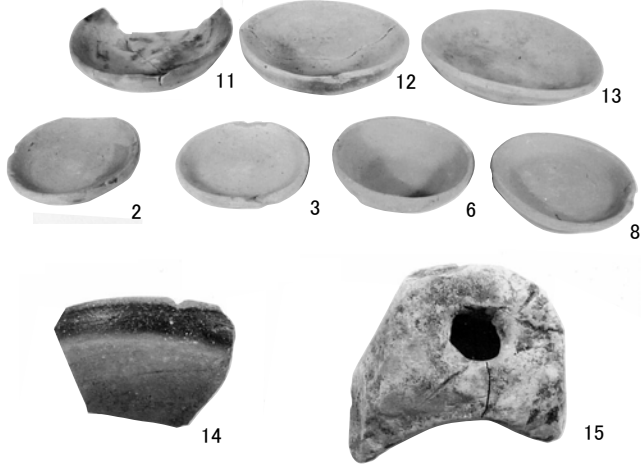
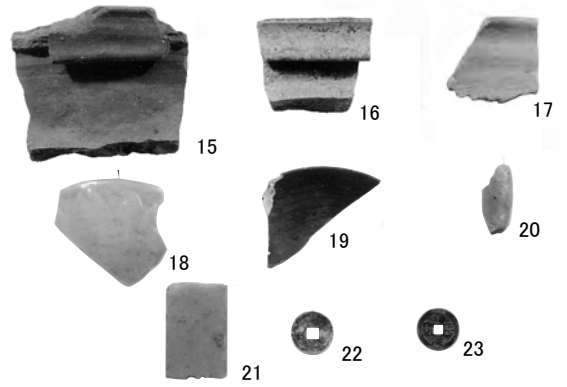
7. II区第4B面全景(南から)



8. II区第4B面遺構138(南西から)



第1面出土遺物

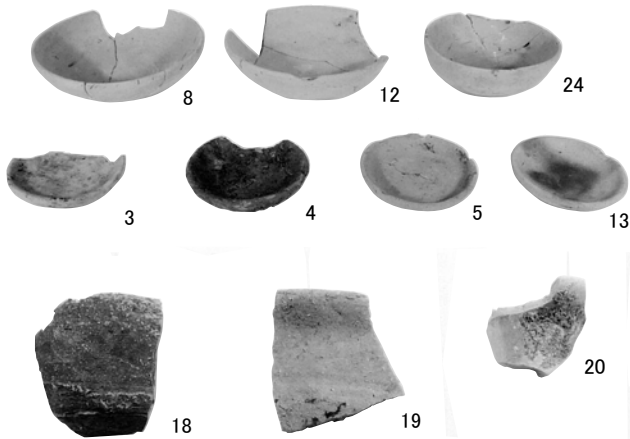


第2面遺構1-b出土遺物

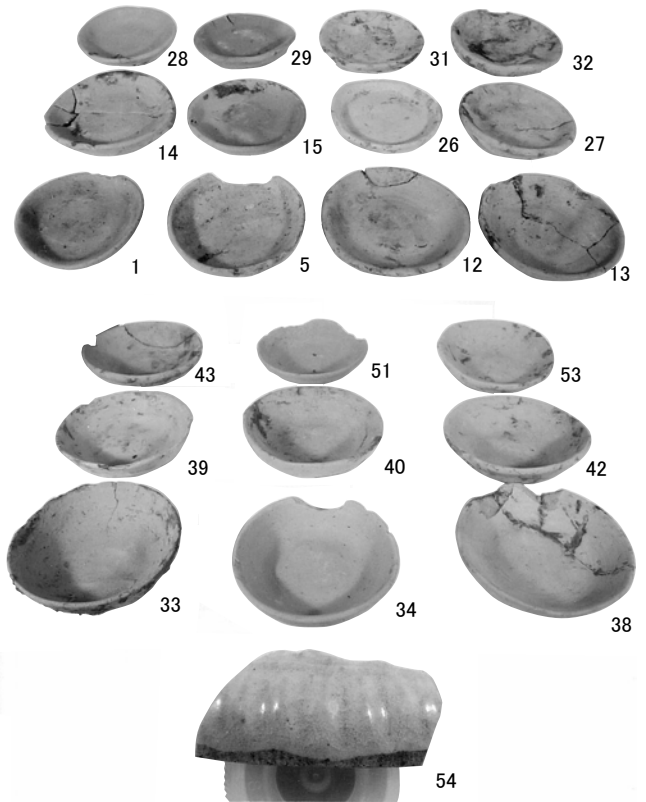


第2面遺構2出土遺物

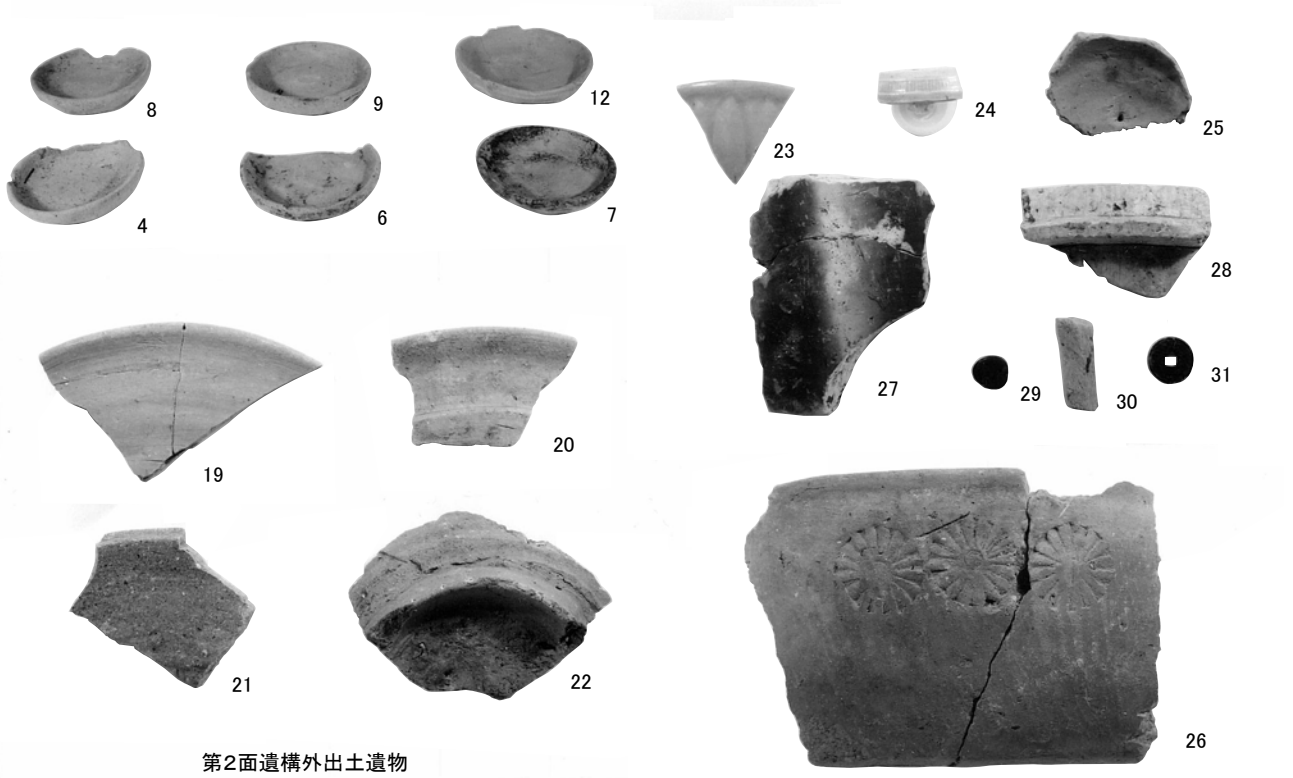
遺構3...24 遺構6...3~5·8·12 遺構7...13·18·23



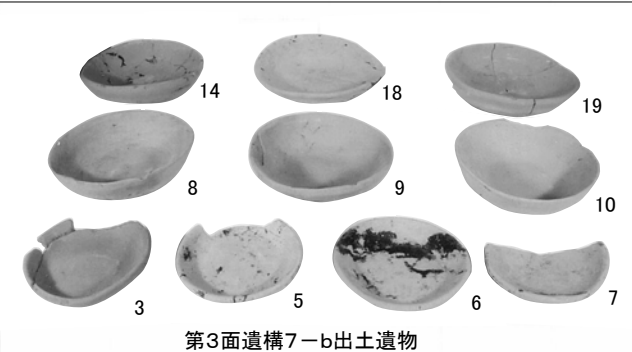
第2面遺構3·6·7出土遺物



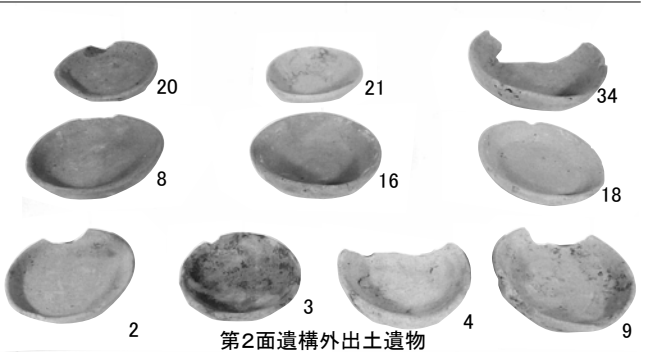
第5面遺構5出土遺物



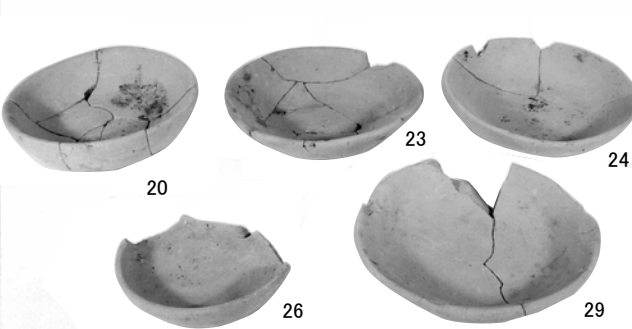
第2面遺構外出土遺物



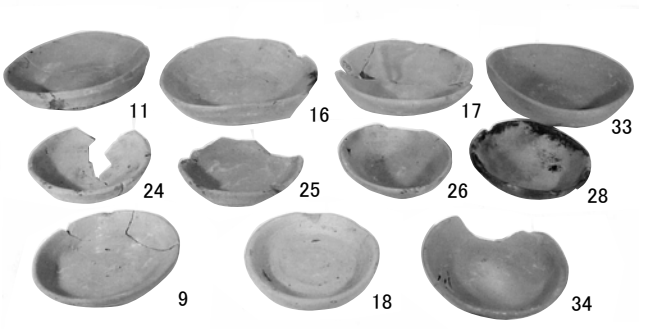
第3面遺構7-b出土遺物



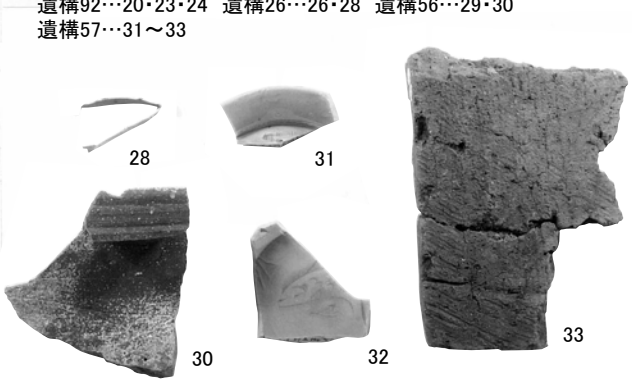
第2面遺構外出土遺物



遺構92...20·23·24 遺構26...26·28 遺構56...29·30 遺構57...31~33



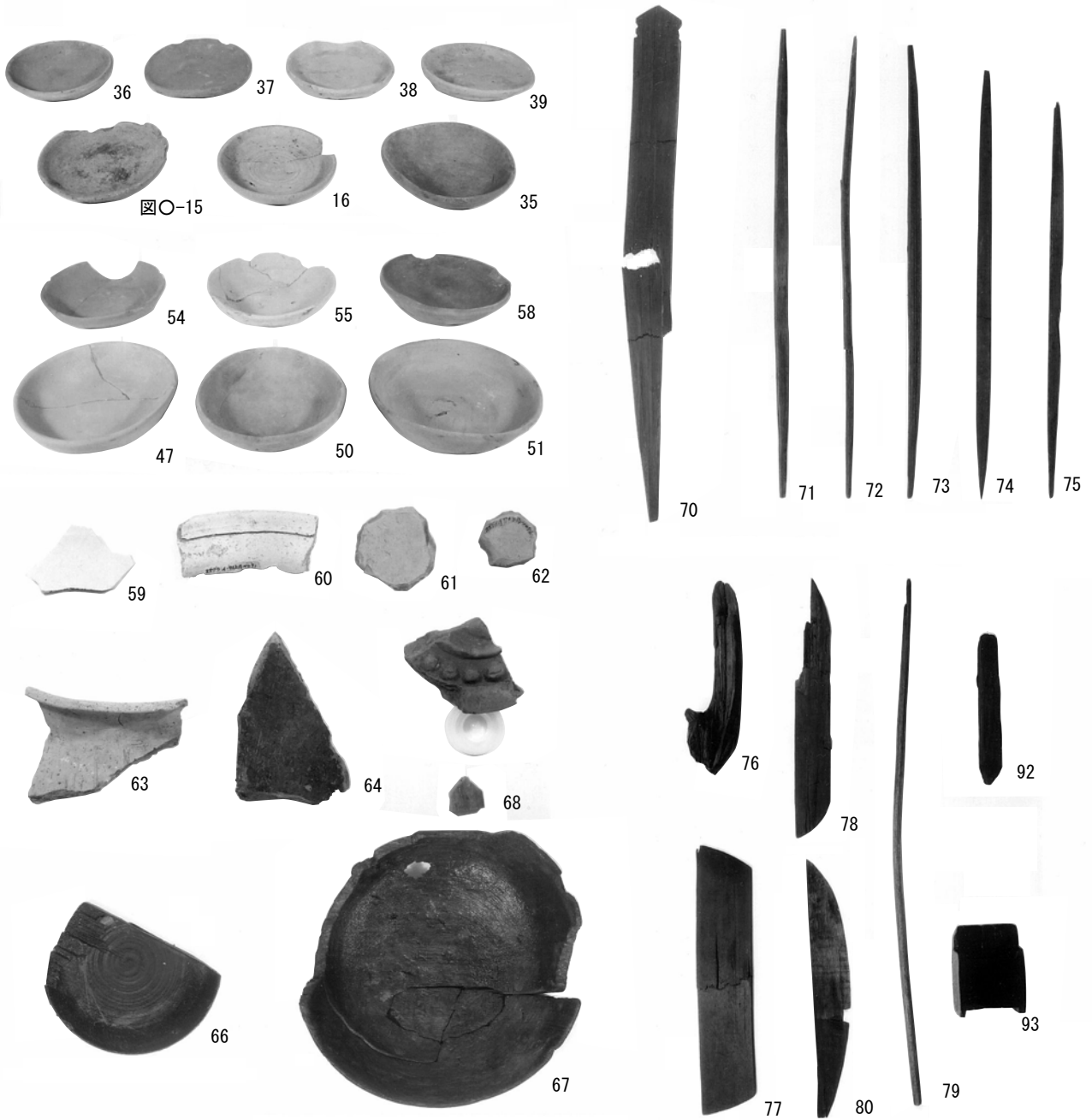
遺構58...4 遺構71...9·11 遺構77...16·17 遺構51...18·19 遺構90...24~26·28~30 遺構65...33 遺構84...34



第3面遺構出土遺物



第3面遺構外出土遺物



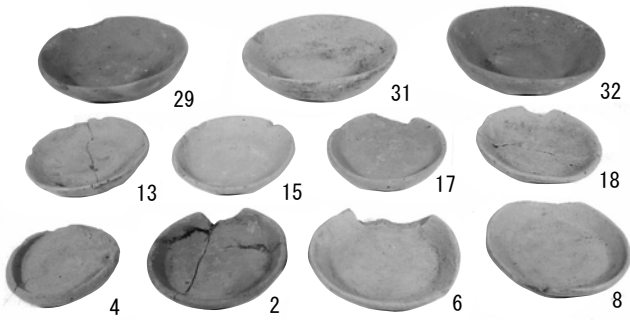
第4A面遺構91出土遺物



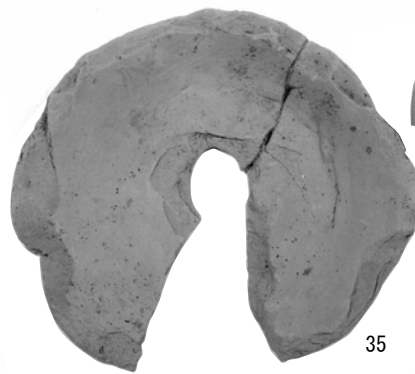
遺構91-96



遺構96-53



遺構96



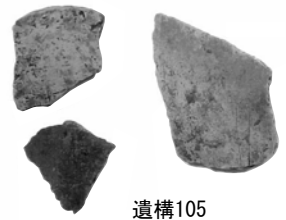
35



36



37



遺構96

遺構105



遺構96-38



遺構96-44



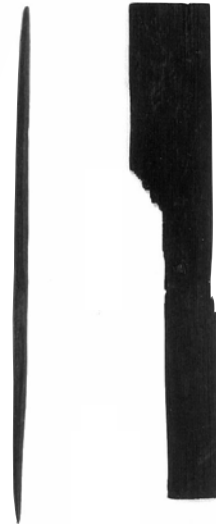
遺構106



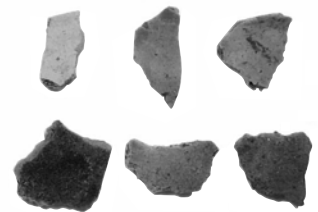
遺構96-41 · 40



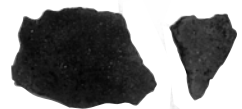
遺構96-50 · 51 · 52



遺構96-45 · 49



遺構128



遺構129

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちようさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成22年度調査報告							
巻次	27 (第2分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	福田 誠/降矢順子・齋木秀雄/熊谷 満							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2011年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
おおくらばくふあと 大倉幕府跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下三丁目 704番3外	14204	253	35° 32' 498"	139° 56' 106"	20051025 ～ 20060127	56.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
ほうじょうときふさ・あきときていあと 北条時房・顕時邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 269番1の一部	14204	278	35° 32' 269"	139° 55' 403"	20060404 ～ 20060613	35.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
おおくらばくふあと 大倉幕府跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下三丁目 637番4	14204	253	35° 32' 417"	139° 56' 258"	20061121 ～ 20090119	68.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
おおくらばくふあと 大倉幕府跡	官衙	中世	掘立柱建物跡、礎石 建物跡、溝跡等	舶載青磁、染付、緑釉陶 器、瀬戸・美濃、常滑、 瓦、ガラス製品、銭、か わらけ等	
ほうじょうときふさ・あきときていあと 北条時房・顕時邸跡	都市	中世	溝、土壇、柱穴	かわらけ、貿易陶磁器、 国産陶器、木製品、石製 品等	
おおくらばくふあと 大倉幕府跡	都市	中世	溝、土壇、柱穴	かわらけ、貿易陶磁器、 国産陶器、木製品、石製 品等	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 27

平成22年度発掘調査報告

(第2分冊)

発行日 平成23年3月31日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 文一堂印刷株式会社